山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第172集

御坂町

縄文時代前期末から中期初頭の集落跡

桂野遺跡（第1～3次）

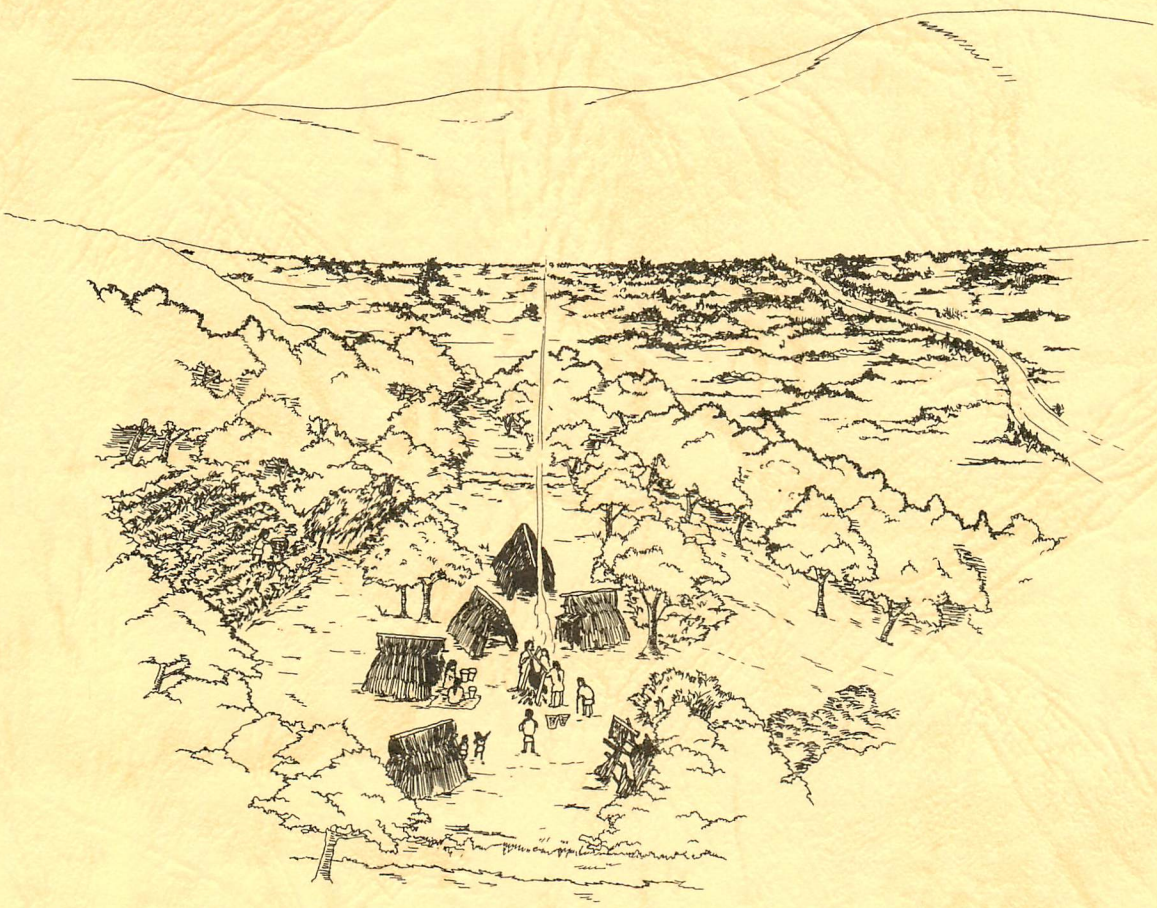
KATURANO SITE

平安時代の祭祀跡

西馬鞭遺跡

NISHIMABUCHI SITE

― 国道137号（上黒駒バイパス）建設に伴う発掘調査報告書 ―



2000. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

御坂町

縄文時代前期末から中期初頭の集落跡

桂野遺跡（第1～3次）

KATURANO SITE

平安時代の祭祀跡

西馬鞭遺跡

NISHIMABUCHI SITE

― 国道137号（上黒駒バイパス）建設に伴う発掘調査報告書 ―

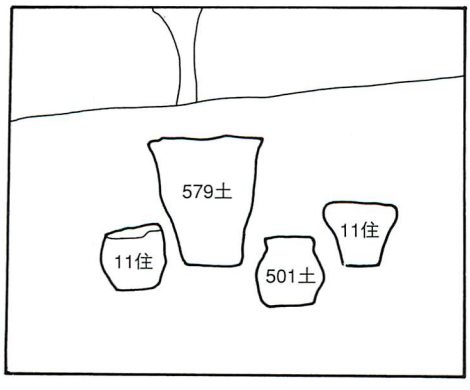
2000. 3

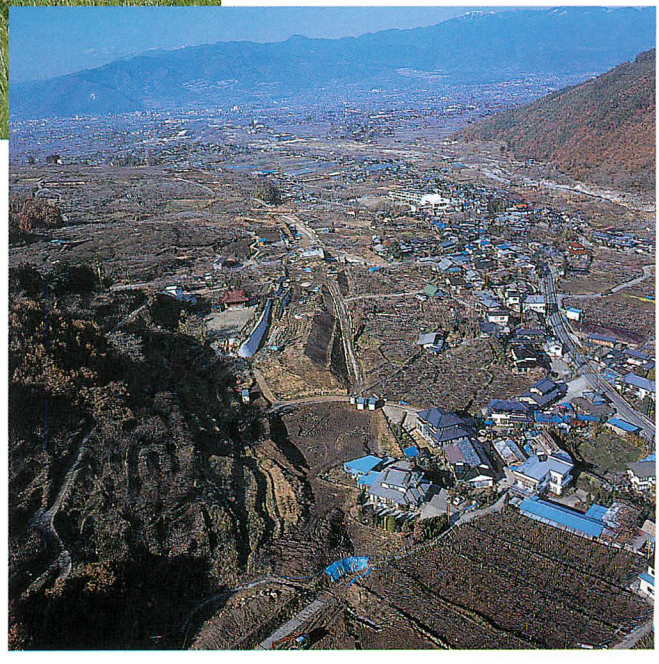
山梨県教育委員会
山梨県土木部

桂野遺跡　第２次調査（北西から）

桂野遺跡　第３次調査（南東から）

桂野遺跡縄文時代前期末葉の土器





西馬鞭遺跡（北から）

挿　図　目　次

第１図　調査区設定図……4
第２図　遺跡分布図……6
第３図　桂野遺跡調査地点……8
第４図　第1・2号住居跡……10
第５図　第1号住居跡出土土器……11
第６図　第3号住居跡……12
第７図　第3号住居跡出土土器……13
第８図　第４・５・６・11号住居跡……15
第９図　第４・５・６号住居跡(1)……16
第10図　第４・５・６号住居跡(2)……17
第11図　第６号住居跡……18
第12図　第４・５号住居跡出土土器……19
第13図　第6号住居跡出土土器(1)……20
第14図　第6号住居跡出土土器(2)……21
第15図　第７・８・９・22号住居跡(1)……23
第16図　第７・８・９・22号住居跡(2)……24
第17図　第7号住居跡　埋甕炉・第8号住居跡　炉・第22号住居跡　埋甕(2)……25
第18図　第７号住居跡出土土器……26
第19図　第８号住居跡出土土器……27
第20図　第９号住居跡出土土器……29
第21図　第10・12号住居跡……30
第22図　第10・12号住居跡　炉……31
第23図　第10号住居跡出土土器……32
第24図　第11号住居跡(1)……34
第25図　第11号住居跡(2)……35
第26図　第11号住居跡出土土器……36
第27図　第12号住居跡出土土器……37
第28図　第13・14・15号住居跡(1)……39
第29図　第13・14・15号住居跡(2)……40
第30図　第14号住居跡　埋甕炉……41
第31図　第13・14号住居跡出土土器……42
第32図　第15号住居跡出土土器……43
第33図　第16号住居跡……44
第34図　第16号住居跡出土土器……45
第35図　第17・18号住居跡……46
第36図　第19号住居跡(1)……48
第37図　第19号住居跡(2)……49
第38図　第20号住居跡……50
第39図　第17・18・19・20号住居跡出土土器……51
第40図　第21・23号住居跡(1)……52
第41図　第21・23号住居跡(2)……53
第42図　第21号住居跡内土坑……54
第43図　第21号住居跡出土土器(1)……56
第44図　第21号住居跡出土土器(2)……57
第45図　第24・25号住居跡……59
第46図　第23・24・25号住居跡出土土器……60
第47図　第26号住居跡……61
第48図　第27号住居跡……62
第49図　第27号住居跡出土土器……63
第50図　竪穴状遺構……65
第51図　土坑(1)……67
第52図　土坑(2)……68
第53図　土坑(3)……69
第54図　土坑(4)……70
第55図　土坑(5)……71
第56図　土坑(6)……72
第57図　土坑(7)……73
第58図　土坑(8)……74
第59図　土坑(9)……75
第60図　土坑(10)……76
第61図　土坑(11)……77
第62図　土坑(12)……78
第63図　土坑(13)……79
第64図　土坑(14)……80
第65図　土坑(15)……81
第66図　土坑(16)……82
第67図　土坑(17)……83
第68図　土坑出土土器(1)……86
第69図　土坑出土土器(2)……87
第70図　土坑出土土器(3)……88
第71図　土坑出土土器(4)……89
第72図　土坑出土土器(5)……90
第73図　土坑出土土器(6)……91
第74図　土坑出土土器(7)……92
第75図　土坑出土土器(8)……93
第76図　土坑出土土器(9)……94
第77図　土坑及び埋甕遺構出土土器……95
第78図　第１～３号埋甕遺構……97
第79図　Ｒ－17・18グリッド遺物集中区及び出土石器(1)……99
第80図　Ｒ－17・18グリッド遺物集中区出土石器(2)……100
第81図　Ｒ－17・18グリッド遺物集中区出土土器(1)……101
第82図　Ｒ－17・18グリッド遺物集中区出土土器(2)……102
第83図　第１号沢……103
第84図　ピット群……104
第85図　第１号沢出土土器(1)……107
第86図　第１号沢出土土器(2)……108
第87図　第１号沢出土土器(3)……109
第88図　第１号沢出土土器(4)……110
第89図　第１号沢出土土器(5)……111
第90図　第１号沢出土土器(6)……112
第91図　第１号沢出土土器(7)……113
第92図　石鏃(1)……115
第93図　石鏃(2)……116
第94図　掻器(1)……118
第95図　掻器(2)……119
第96図　掻器(3)……120
第97図　掻器(4)……121
第98図　石錐・石匙・尖頭器……122
第99図　その他の小形石器……123
第100図　打製石斧(1)……124
第101図　打製石斧(2)・大形削器(1)・大形石匙・楔形石器・礫器(1)……125
第102図　礫器(2)・大形削器(2)・石核……126
第103図　磨製石斧……127
第104図　小形磨製石斧・敲石・石錘……127
第105図　磨石類(1)……129
第106図　磨石類(2)……130
第107図　磨石類(3)……131
第108図　磨石類(4)……132
第109図　磨石類(5)……133
第110図　磨石類(6)……134
第111図　石皿・台石(1)……135
第112図　石皿・台石(2)……136
第113図　土偶(1)……138
第114図　土偶(2)……139
第115図　土偶(3)……140
第116図　土偶(4)……141
第117図　土製円盤……144
第118図　土製品　他……145
第119図　西馬鞭遺跡全体図……146
第120図　西馬鞭遺跡基本土層……146
第121図　第1号土坑……147
第122図　第1号土坑出土遺物……148
第123図　遺物分布状況（縄文）……150
第124図　遺物分布状況（古墳）……150
第125図　遺物分布状況（平安）……150
第126図　包含層出土遺物（縄文）……151
第127図　包含層出土遺物（縄文）……152
第128図　包含層出土遺物（石器）……153
第129図　包含層出土遺物（石器　20～28・須恵器29～37）……154
第130図　包含層出土遺物（古墳・平安）……155
第131図　包含層出土遺物（手捏土器）……156

表　目　次

第１表　桂野遺跡・西馬鞭遺跡周辺遺跡分布図(1)……7
第２表　桂野遺跡・西馬鞭遺跡周辺遺跡分布図(2)……7
第３表　桂野遺跡土製円盤観察表……143
第４表　西馬鞭遺跡石器観察表……157
第５表　桂野遺跡土坑一覧表……159
第６表　桂野遺跡石器一覧表……162
第７表　桂野遺跡土製品・石製品一覧表……166

目　　次

口絵
桂野遺跡・西馬鞭遺跡のあらまし
序
例言
凡例
目次
挿図目次・表目次
写真図版
第Ⅰ章　発掘調査および整理作業経過
　第１節　調査・整理作業日程 …… 1
　第２節　調査・整理作業組織 …… 1
　第３節　調査・整理作業方法 …… 3
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第Ⅲ章　桂野遺跡の調査
　第１節　遺跡の概要 …… 9
　第２節　遺構と遺物 …… 9
　　第１項　住居跡 …… 9
　　第２項　竪穴状遺構 …… 64
　　第３項　土坑 …… 64
　　第４項　単独埋甕遺構 …… 98
　　第５項　遺物集中区 …… 98
　　第６項　沢跡 …… 100
　　第７項　石器 …… 113
　　第８項　土製品・石製品 …… 137
第Ⅳ章　西馬鞭遺跡の調査
　第１節　遺跡の概要 …… 146
　第２節　基本層序 …… 146
　第３節　遺構と遺物
　　第１項　土坑 …… 147
　　第２項　包含層出土遺物 …… 149
第Ⅴ章　まとめ …… 158

附編
　1　桂野遺跡第80号土坑におけるリン酸分析 …… 167
　2　桂野遺跡出土の炭化種実 …… 168
　3　桂野遺跡第19号住居跡出土炭化材の樹種同定 …… 170
　4　桂野遺跡の縄文土器胎土分析 …… 173
附図　桂野遺跡全体図

凡　　例

1．掲載した遺構図面の縮尺は原則として下記の通りである。
竪穴式住居及び竪穴状遺構　…　1/60　　土坑と単独埋甕　…　1/30・1/60
沢跡　…　1/200

2．遺物実測図の縮尺は原則として下記の通りである。
〈土器〉
拓本及び断面　…　1/3　　完形土器　…　1/4
〈石器〉
石鏃・掻器・石錐・石匙・尖頭器　…　等倍　その他の小形石器　…　2/3
石錘等　…　1/2　　打製石斧・大形削器・大形石匙・磨製石斧・磨石類　…1/3
石核・大形削器　…　1/4　　石皿・台石　…　1/6
〈特殊遺物・金属製品〉
土偶等　…　1/2　煙管・火打金　…　1/2

3．遺構平面図のスクリーントーンは次の通りである。
…　炭化物の範囲　　…　焼土の範囲

4．遺物図面のスクリーントーンは次の通りである。
〈縄文土器〉
…　スス　　…　炭化物の範囲　　…　焼土の範囲
〈石器〉
…　赤色付着物
〈灰釉陶器〉
…　灰釉陶器

5．遺構平面図のインレタは次の通りである。
●…　土器　　▲…　石器　　○…　土製品

6．遺構平面図中の表記
住　…　竪穴住居跡　　埋　…　単独埋甕　　土　…　土坑

7．土坑一覧表の時期の表示

十三菩提式　…　十	五領ヶ台式　…　五	狢沢式　…　狢
新道　…　新	藤内　…　藤	井戸尻　…　井
曽利Ⅰ～Ⅴ　…　曽Ⅰ～Ⅴ	弥生　…　弥	

例　　言

1．本報告書は，国道137号（上黒駒バイパス）建設工事に先立って、1996年度から1998年度に発掘調査が実施された桂野遺跡と、1998年度に行われた西馬鞭遺跡の調査報告書である。

2．本報告書は、野代幸和と網倉邦生が編集した。執筆分担は次により、文末に明記したが，分析依頼及び委託した部分については文頭に記した。考察については、調査関係者の協議を経て、執筆されたものである。

野代幸和〈第Ⅲ章　第2節　第1項・第3項・第4項、第Ⅴ章〉　長田雅巳〈第Ⅳ章　第1節〉
野代恵子（旧姓　市川）〈第Ⅲ章　第2節　第8項－土偶－〉　網倉邦生〈桂野遺跡・西馬鞭遺跡のあらまし、第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章　第１節・第２節　第５項～第７項〉（調査研究第一課）　鈴木由香〈第Ⅲ章　第２節　第２項・第８項－土製円盤ほか－、第Ⅳ章　第２節〉（法政大学学生）

3．分析依頼及び委託した部分については、附編１・４を（パリノ・サーヴェイ）、附編２・３を（パレオ・ラボ）に委託し，附編２を植田弥生、附編３を新山雅広が執筆した。

4．炭化物の選別、遺物の拓影・接合・復元・実測、図面調整、トレース、図版作成に至る過程の分担は、下記のとおりである。

炭化物の選別	…	平美与枝・向井袈裟春
遺物の拓影	…	富永小枝・矢崎　緑・山崎靖子・飯田みずほ・笠井真由美・玉越ゆかり・小林よ志子・平美与枝・梶原初美・石井千秋・長田可祝
遺物の接合・復元	…	平　重蔵・平美与枝・向井袈裟春・矢崎　緑・梶原初美・石井千秋・小林裕子・長田可祝・宮坂晴幸・中込幹一
遺物の実測	…	富永小枝・矢崎　緑・飯田みずほ・平美与枝・矢崎　緑・梶原初美・石井千秋・大塚敦子・三好美智・志村君子・渡辺麗子・澤登由美・高野眞寿美
図面調整	…	石原　恵・平嶋純一・平嶋弘子・菅沼芳治・志村君子・大塚敦子
トレース及び図版作成	…	梶原初美・石井千秋・大塚敦子・三好美智・志村君子・渡辺麗子・澤登由美・高野眞寿美
石器の計測及び計測表作成	…	澤登由美・鈴木由香・菅沼芳治・渡辺麗子

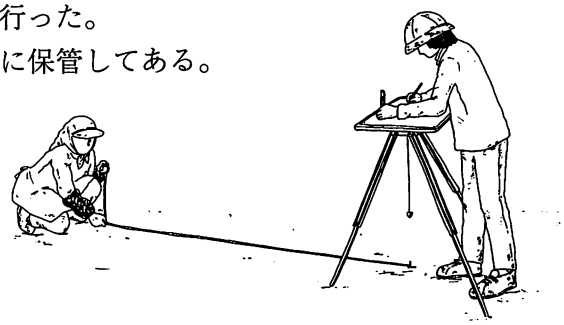
5．桂野遺跡では、航空写真及び航空測量をシン技術コンサルに、西馬鞭遺跡では、航空写真を株式会社フジ・テクノに委託した。

6．遺物の写真は、写真家小川忠博が行った。

7．現場の基準点測量については株式会社カワイに、杭打ちを有限会社東雲測量に委託した。

8．桂野遺跡・西馬鞭遺跡のあらましのイラストを大塚敦子と三好美智、表紙・第Ⅱ章第２項・第Ⅴ章のイラストを大塚敦子、背表紙のイラストを三好美智が行った。

9．調査の図面・写真・遺物は、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。



序

本書は、国道137号（上黒駒バイパス）建設工事に伴い、周知の埋蔵文化財包蔵地であった桂野遺跡と、試掘調査によって、遺跡が確認された西馬鞭遺跡における発掘調査の成果を示す報告書であります。

桂野遺跡は昭和28年（1953）に東八代郡上黒駒字桂野大道地内で、農道工事中に多量の土器や石器が発見されて以降、遺跡の存在が周知されてきました。昭和50年（1975）の甲斐丘陵考古学研究会の調査により、下黒駒字桂野平石において縄文時代中期前葉の住居跡が検出されてから、御坂山系の裾に広がる。地を広大に用いる縄文時代集落跡の存在が推定されてきました。今回の３年間にわたる発掘調査により、縄文時代の住居跡27軒・土坑607基等が認められましたが、これにより縄文時代の居住域が裏付けられただけではなく、縄文時代前期末葉から中期初頭といった過渡期の遺構・遺物が良好な状態で出土したことや、縄文時代の各時期ごとに居住域が変化することや外来系土器群との伴出関係などが判明した事など、縄文時代の人々の暮らしを理解する上で大きな成果を挙げたと言えるでありましょう。

同町上黒駒地内の西馬鞭遺跡は試掘の結果、縄文時代の土器及び石器や平安時代の土師器・灰釉陶器等が出土したことにより、発掘調査が行われることになりました。発掘調査によって、平安時代の土坑１基と縄文時代の遺物と平安時代の遺物を含む包含層の存在が確認されました。この成果は、居住域以外での人々の活動の多様性について考える際の一助に成り得るものであります。

これらの成果は学術的価値が非常に高く、地域史の構築に多大な貢献を成すと思われます。本報告書を学習教材・研究資料として御活用頂き、併せて貴重な埋蔵文化財の保護とその施策に対する御理解を深めて頂ければ、幸甚に存じます。

最後に報告書を刊行するにあたり、発掘調査や整理作業に参加された皆様をはじめ、地元関係者、石和土木事務所、笛吹川水系土地改良区に対し、厚く御礼申し上げます。

2000年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所　長　大　塚　初　重

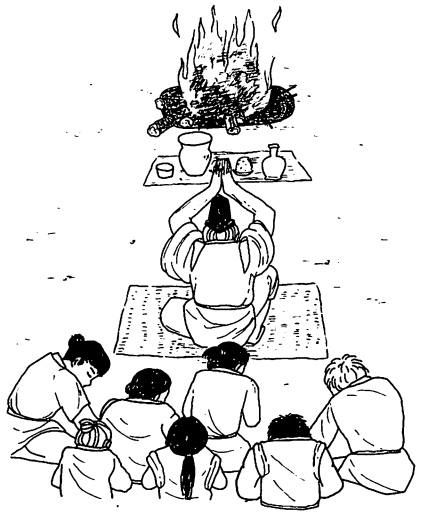
とりまくように家々が建てられる大きなムラがあり、そのムラを中心に小さなムラが点在しますが、桂野遺跡くらいの時期ではこのようにしっかりしたムラのつくりはありません。これは当時の人々が狩猟を中心に暮らし、移動しながら生活していたからだと考えられます。

〈ムラの交流〉 縄文時代は、今とは違って遠くへ移動するのがとても難しい時代であったと思われがちですが、ヒトビトが活発に動き回って情報交換したことが、土器の文様からもわかります。桂野遺跡でも、東海地方や近畿地方、さらには東北地方の影響をもつ文様が描かれていることから、幅広い交流が裏付けられています。山梨県では取れない黒曜石によって石器がつくられたことも、ムラ同士の交流の証拠だと考えることができます。

〈狩りと祈り〉 縄文時代の遺跡を掘ると地面を掘りくぼめた穴が見つかりますが、これを「土坑」と呼びます。「土坑」は狩りの時の落とし穴であったり、お墓であったり、食べ物を埋めておく穴であったりします。桂野遺跡で見つかった「土坑」の多くは、落とし穴かお墓であったと考えられます。落とし穴の底には、獲物を刺す逆茂木（さかもぎ）をすえるための穴が残っていました。お墓には土器をおいたり、石を入れ込んだりする例が認められました。

西馬鞭遺跡

〈遺跡の成り立ち〉 西馬鞭遺跡は平安時代の土坑１基が見つかっただけで、他には何も見つからずにモノだけが出てきました。家や土坑などを伴わずに遺物だけが出てくるような在り方を「遺物包含層」と呼びますが、これはモノを含んだ土が押し流され、１ヶ所にたまったような状態をさします。西馬鞭遺跡はヒトが住んだりした場所ではなく、出てきたモノの中に「手づくね土器」があることから、遺跡内かその周辺でお祭りが行われたということがわかります。



〈平安時代のお祭り〉 平安時代のヒトビトは、現代のヒトと同じく豊作を願ったり、病気が治るようにお祈りをしたようです。ヒトビトはこのような祈りをお祭りという形で、田んぼや川などで行ったようです。西馬鞭遺跡のお祭りもヒトビトの願いが込められたものではなかったでしょうか。

いま行われている発掘調査の原因の多くは、私達の生活を便利にするためのもの（道路など）をつくるのに先立って行われ、調査された遺跡は壊されてしまいます。調査によって分かった大昔の人々の暮らしや、私達がどのようなつながりをもっていまにいたっているのか、ということを分かったときにはじめて、調査した二度と元に戻らない遺跡の価値がわかると思われます。本書の幅広い活用を望んでおります。

桂野遺跡・西馬鞭遺跡のあらまし

〈桂野遺跡・西馬鞭遺跡とは〉 山梨県の南東、甲府盆地の東に位置する御坂山の緩い斜面地は、果樹園として利用されていますが、縄文時代の土器などが見つかることから遺跡がある場所として知られ、土地の名前をとって「桂野遺跡」と呼ばれてきました。今回、上黒駒バイパスをつくる前に調査を行ったところ、およそ5,000年前の縄文時代の家やお墓、狩りをするための落とし穴がでてきました。

また、桂野遺跡の南東側へ200ｍほど向かったところからも、縄文時代や平安時代の土器が出てきたため、同じく土地の呼び名から「西馬鞭遺跡」と名づけ、調査を行いました。この結果、人々が生活する所ではなく、お祭りが行われた場所だということが分かりました。

この本は、調査の結果どのようなものが出てきたのかということをまとめたものですが、遺跡の調査をどのように行うのかということや桂野遺跡・西馬鞭遺跡からどのような珍しい物が出てきて、どのようなことが分かったのかいうことについて、調査の記録に先立ってお話したいと思います。

〈遺跡の調査とは〉 大昔の人達が使ったモノや寝起きした家が見つかるということは、よく考えると不思議な感じがします。しかし、長い年月がたつと地面の上に次第に土がたまっていきます。これはとても緩やかな変化ですが、桂野遺跡や西馬鞭遺跡の調査では縄文時代の人が暮らしていた時期の地面にとどくまでに、20～50㎝くらいかかりました。遺跡の発掘調査はまず昔の人が生活していた地面までの土をどかすことから始まりますが、大切なのはそれからです。当時の人が暮らしていた家やお墓などを探さなくてはなりません。探すためには、地面をよく観察して感じの違う土が広がっている所を見つけなくてはなりません。見つけたら、土の色をたよりに感じの違う土をとりのぞいていきます。次第に掘りすすめていくと…。土とは違った色のものがあちらこちらから出てきます。これが大昔の人が使った道具ー土器や石器です。さらに掘っていくと床の面の一部に赤い土が広がっています。これが台所や暖房の役目をした炉です。家の床をたどっていくと、丸い形をした穴がでてきます。これが家を支える柱穴です。

発掘調査はこのように進みますが、ただ掘るだけではなくて、道具がどの場所から出てきたのかということや家がどんな形をしているのかということを記録しなければなりません。そして、これ以上道具や家やお墓のあとがないということがわかった段階で調査が終了するのです。

桂野遺跡

〈ヒトビトの暮らし〉 縄文時代のヒトビトはどのような暮らしをしていたのでしょうか。残念ながら桂野遺跡では、縄文時代のヒトビトの暮らしを示すようなモノは出てきていません。しかし、全国的な発掘調査により、その暮らしぶりが明らかになりつつあります。では、縄文時代のヒトはどんなモノを食べていたのでしょうか。ケモノの肉や魚だけを食べていたんじゃないか？と思われる方が多いと思いますが、実際には拾ってきた種や木の実、地面から掘り出した根菜類を主食としたようです。これは、縄文時代のヒトの骨を調べてみた結果分かりました。しかし、だからといって植物だけを食べていたわけではなく、山の暮らしではイノシシやシカを狩ったり、海の暮らしでは貝や魚をとったりしたことが分かっており、ハンバーグやクッキーをつくったり、お酒を飲んだり、フグを食べたりしたようです。縄文時代のヒトビトはかなりグルメだったのではないでしょうか。

〈ムラの様子〉 桂野遺跡では、縄文時代の家が27軒、土坑（お墓や落とし穴など）607基、弥生時代の家が1軒見つかりました。この家は長い縄文時代のなかでもっとも文化がさかえる、中期に入ろうとする時のものです。縄文時代の中期では、中央に広場やお墓をもうけ、その周りを

図　　版

▲桂野遺跡第３次調査

◀桂野遺跡第２次調査

第１号沢　完掘状況（谷部分）

第１次調査　調査前風景

ピット群　完掘状況

G－７グリッド　土偶出土状況

G－８グリッド　土器出土状況

図版２　桂野遺跡

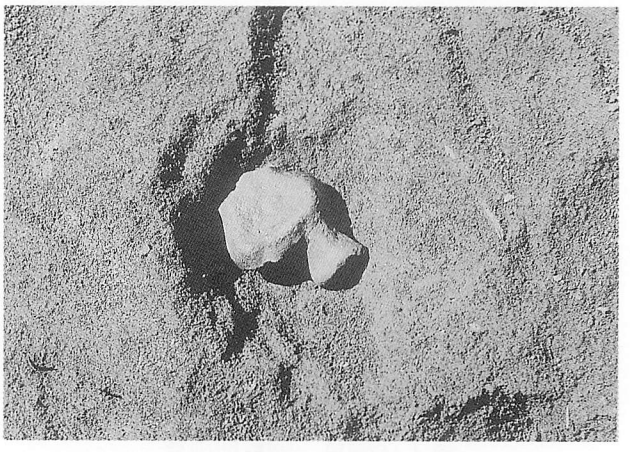
F－８グリッド　土偶装飾付土器出土状況

G－７グリッド　土偶出土状況

G－７グリッド　土偶出土状況

G－７グリッド　玦状耳飾出土状況

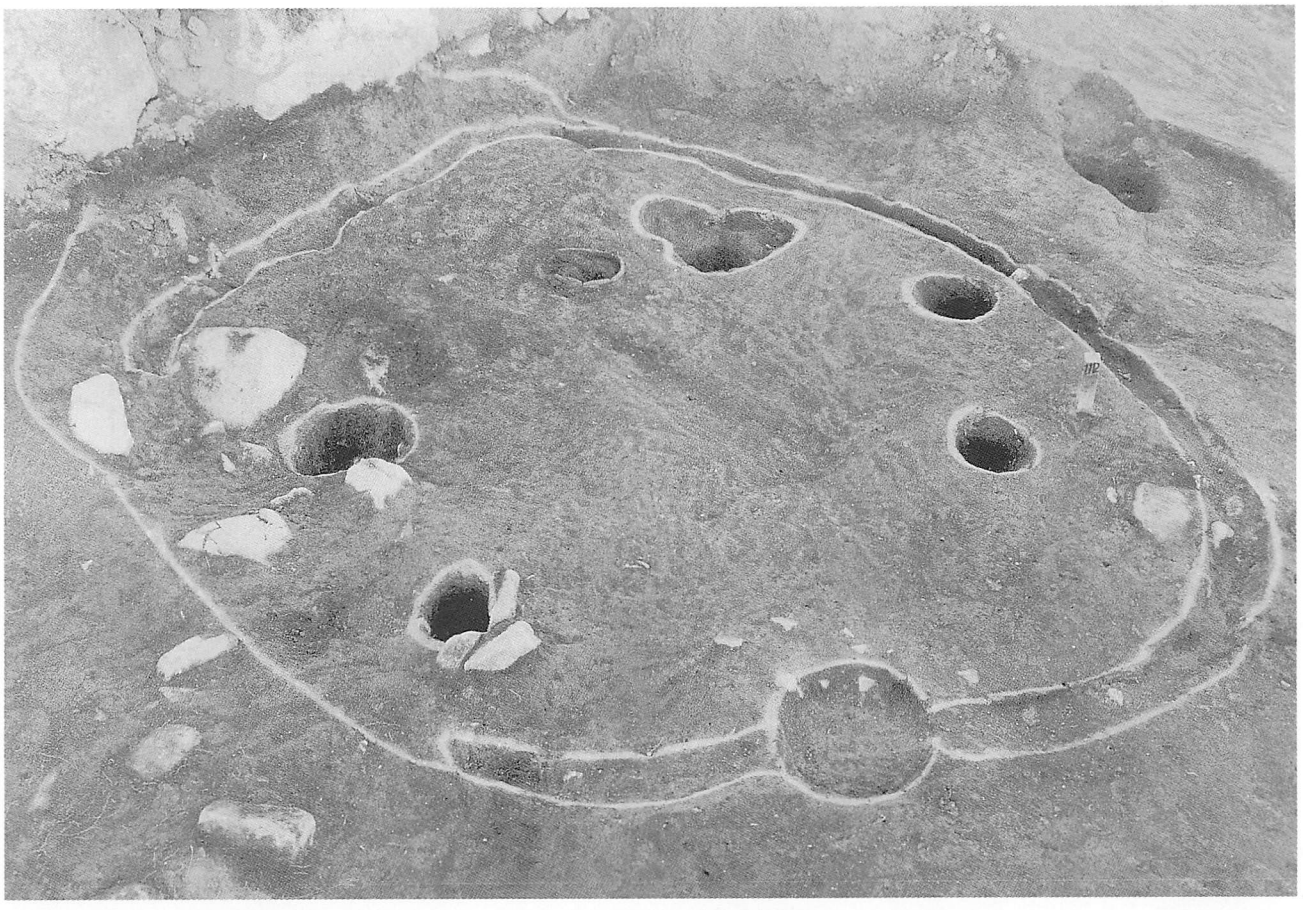
土器出土状況



土偶出土状況

尖頭器出土状況

調　査　風　景



第１号住居跡　完掘状況

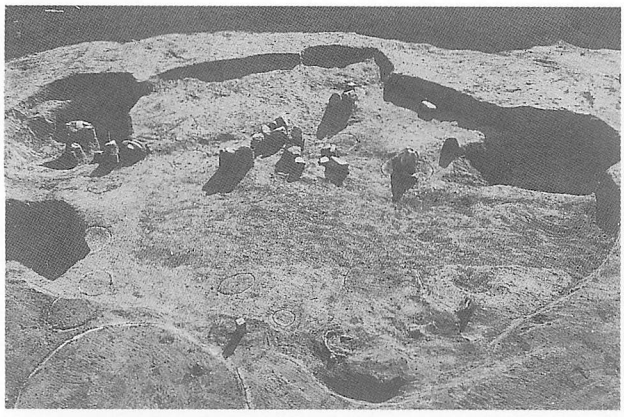
第１号住居跡　炉出土状況

第１号住居跡　埋甕出土状況

第２号住居跡　完掘状況

第２号住居跡　土製垂飾出土状況

図版４　桂野遺跡

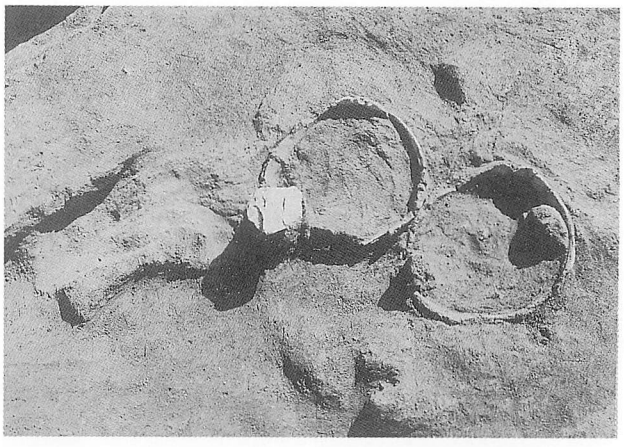


第３号住居跡　遺物出土状況

第３号住居跡　埋甕出土状況

第４・５・６号住居跡　完掘状況

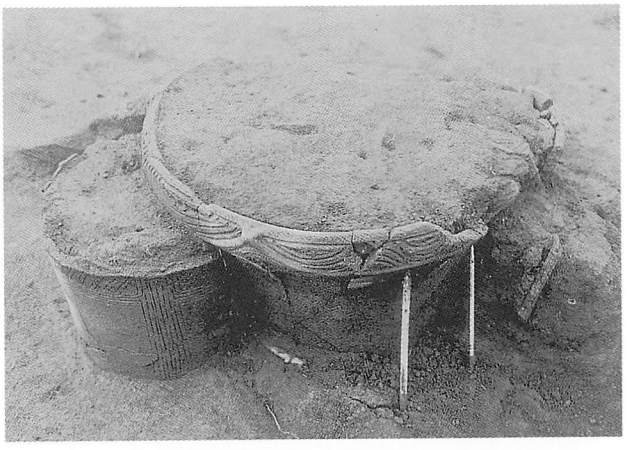
第４・５・６号住居跡　遺物出土状況



第５号住居跡　埋甕出土状況

第４・５・６号住居跡　完掘状況

第６号住居跡　炉体土器出土状況



第６号住居跡　埋甕出土状況

第６号住居跡　埋甕出土状況

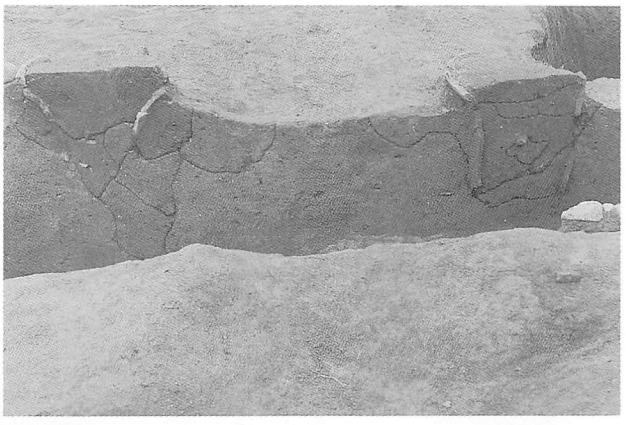
第５号住居跡　玦状耳飾出土状況

図版６　桂野遺跡

第７・８・９・22号住居跡　完掘状況

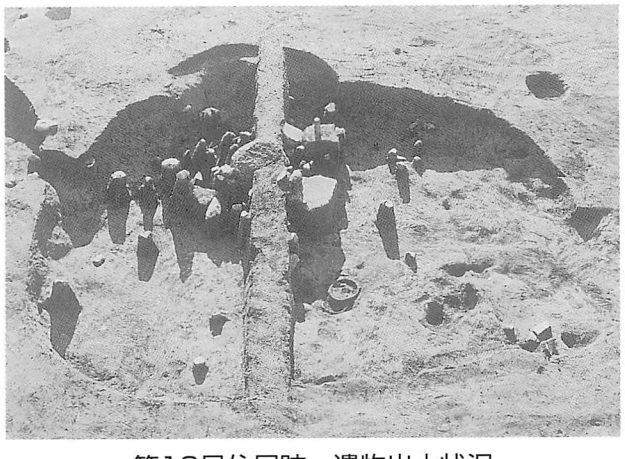
第９号住居跡　完掘状況

第７号住居跡　埋甕炉出土状況



第７号住居跡　埋甕炉・第22号住居跡　埋甕半截状況

第10号住居跡　完掘状況



第10号住居跡　遺物出土状況

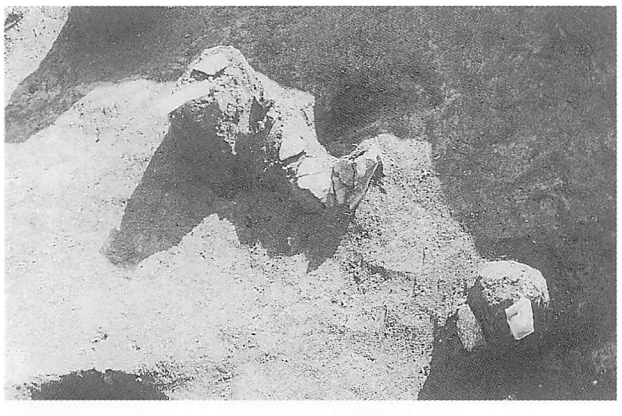
第10号住居跡　遺物出土状況

図版８　桂野遺跡

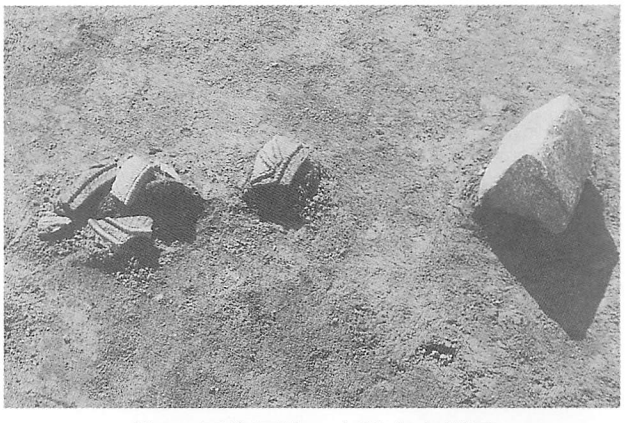
第11号住居跡　完掘状況

第11号住居跡　遺物出土状況

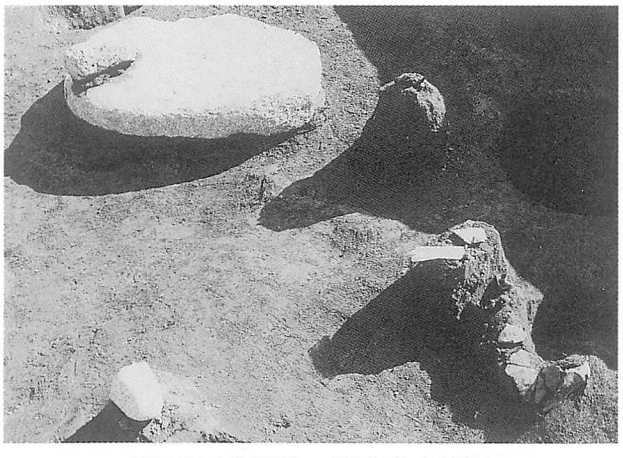
第11号住居跡　炉付近遺物出土状況



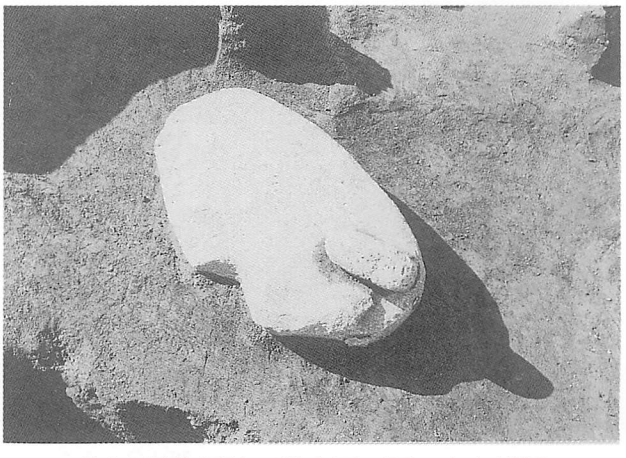
第11号住居跡　土器出土状況



第11号住居跡　土器出土状況



第11号住居跡　遺物出土状況

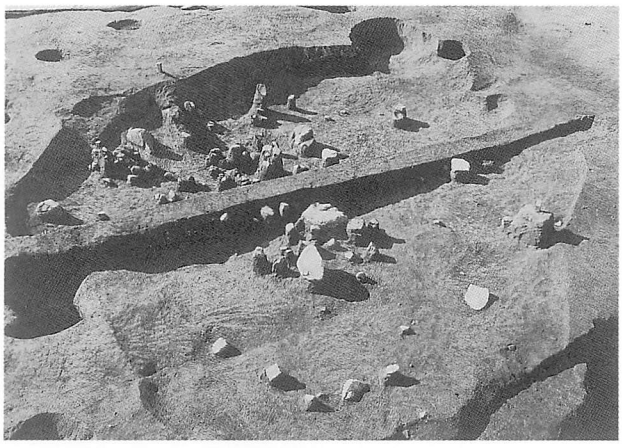


第11号住居跡　稜磨石・石皿出土状況

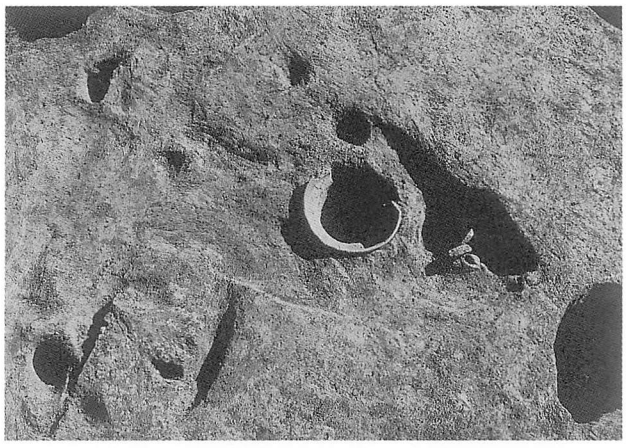
図版10　桂野遺跡

第２次調査　住居・土坑群　完掘状況

第13・14・15号住居跡　完掘状況

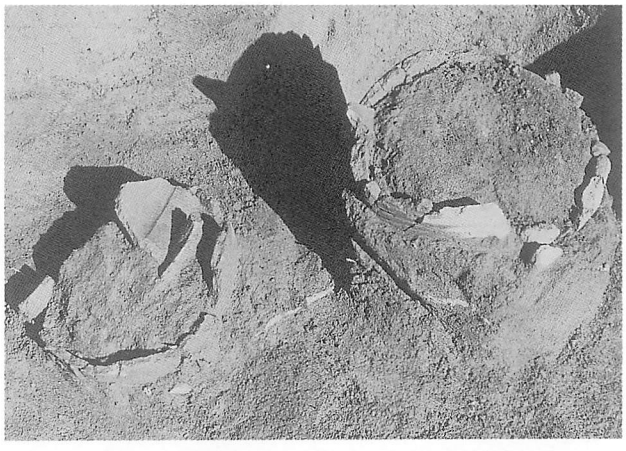


第13号住居跡　遺物出土状況



第13号住居跡　炉体土器出土状況

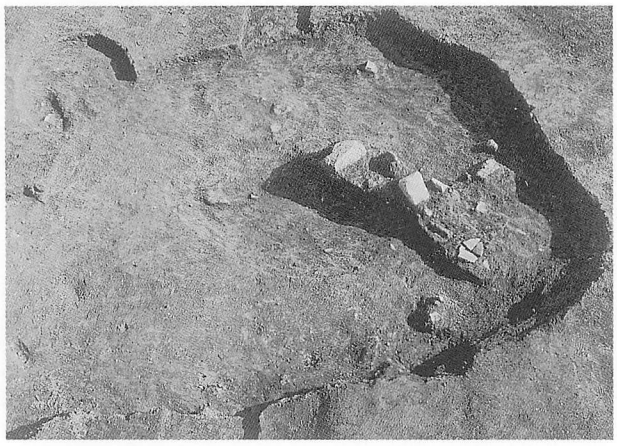
第12号住居跡　完掘状況



第16号住居跡　炉体土器出土状況

第18号住居跡　完掘状況

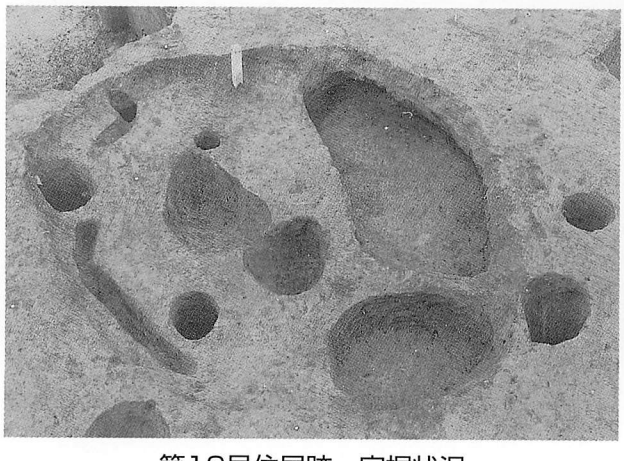
図版12　桂野遺跡



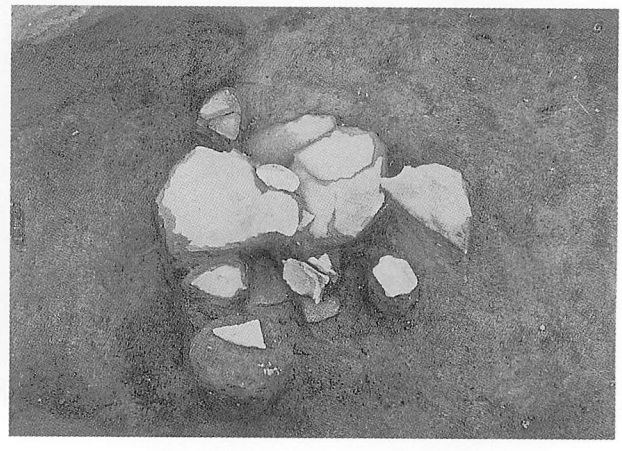
第18号住居跡・第44号土坑　完掘状況

調　査　風　景

第19号住居跡　遺物出土状況



第19号住居跡　完掘状況



第19号住居跡　甕出土状況

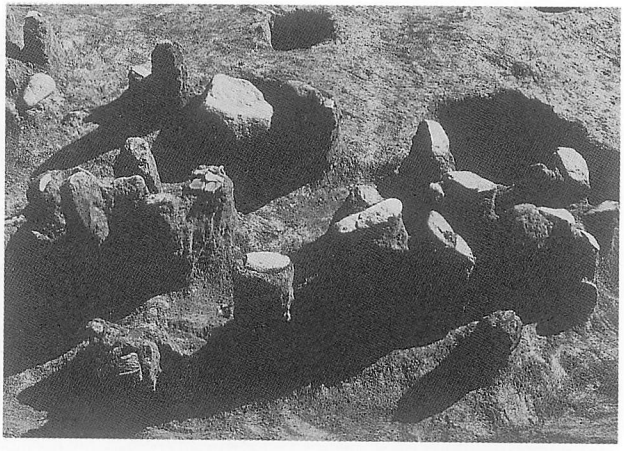
第21・21'・22号住居跡　完掘状況（北西から）

第21・21'・22号住居跡　完掘状況（北西から）

図版14　桂野遺跡

第21号住居跡内第579号土坑　土器出土状況

第21・22・23号住居跡　完掘状況



第21号住居跡　遺物出土状況

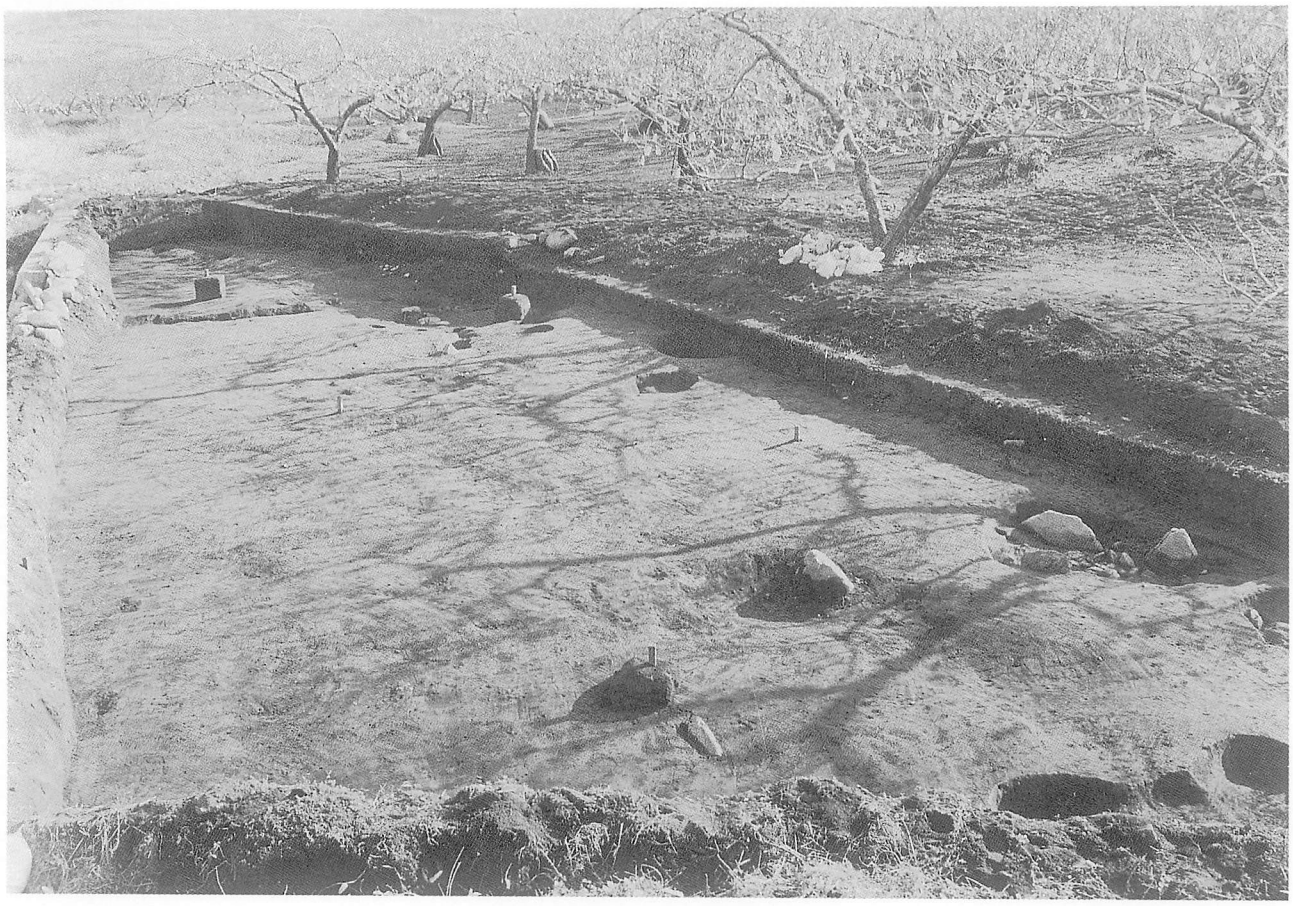
第21号住居跡　遺物出土状況

調　査　風　景

第21・21'・22号住居跡　完掘状況

L－9グリッド周辺土坑群

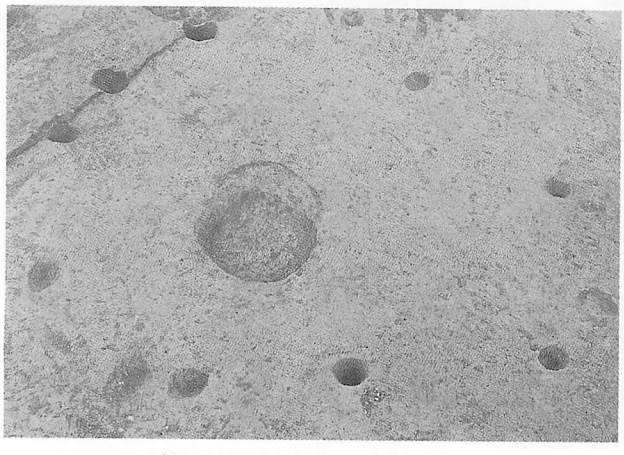
図版16　桂野遺跡



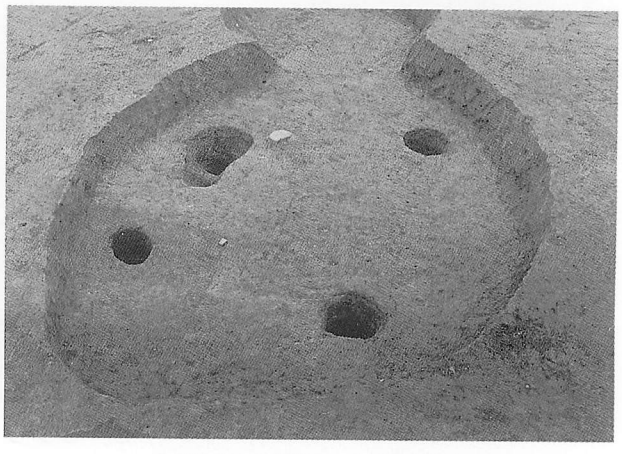
オ－17グリッド　完掘状況

第27号住居跡　完掘状況

第27号住居跡　炉体土器出土状況



第24号住居跡　完掘状況

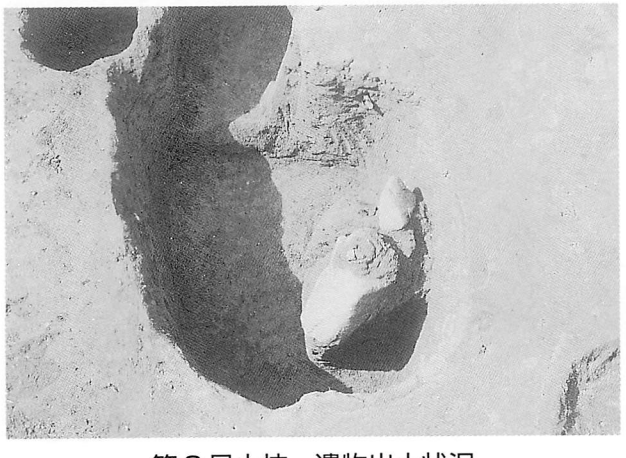


第25号住居跡　完掘状況

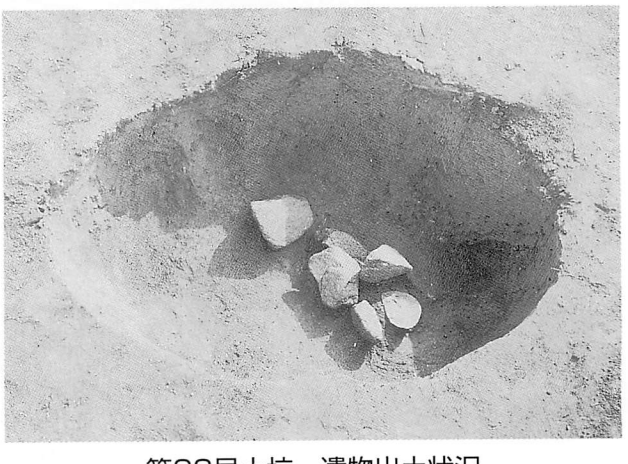
第27号住居跡　完掘状況

第27号住居跡　遺物出土状況

第27号住居跡　炉体土器出土状況



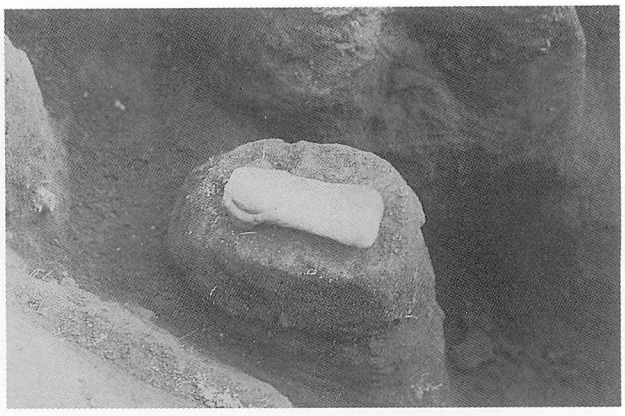
第２号土坑　遺物出土状況



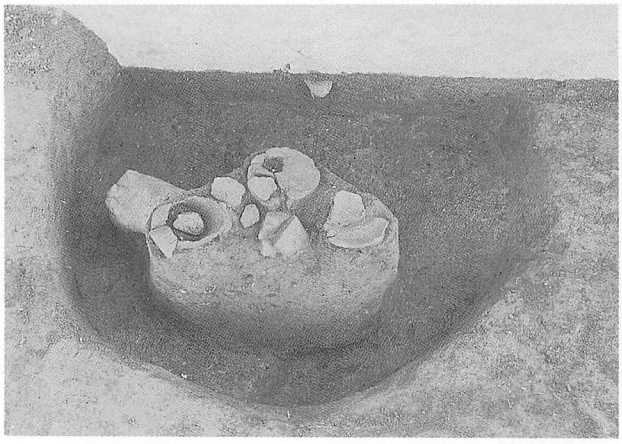
第23号土坑　遺物出土状況

図版18　桂野遺跡

第57号土坑　遺物出土状況



第57号土坑　土偶出土状況

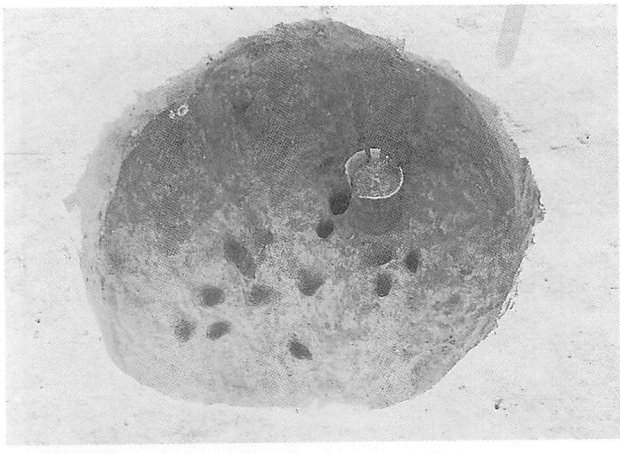


第59号土坑　遺物出土状況

第68号土坑　礫出土状況

第71号土坑　土器出土状況

第80号土坑　遺物出土状況



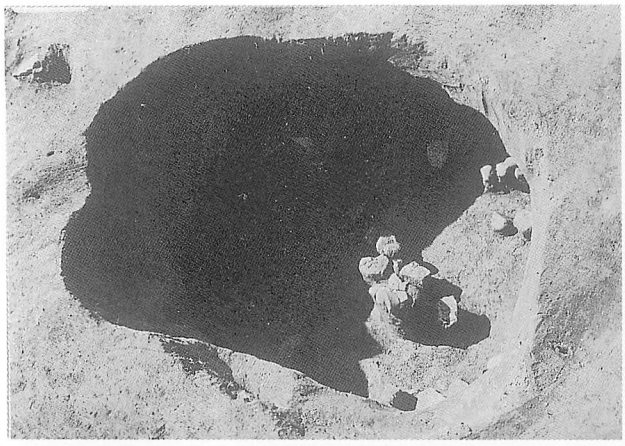
第80号土坑　土器出土状況

第80号土坑　土器出土状況

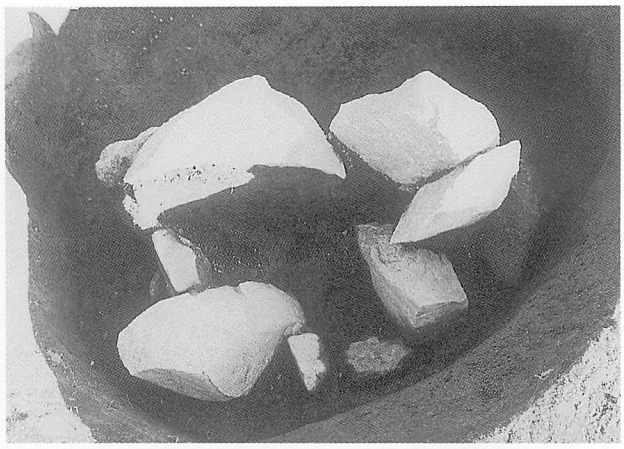
第98号土坑　礫出土状況

第100号土坑　礫出土状況

図版20　桂野遺跡



第105・111号土坑　遺物出土状況

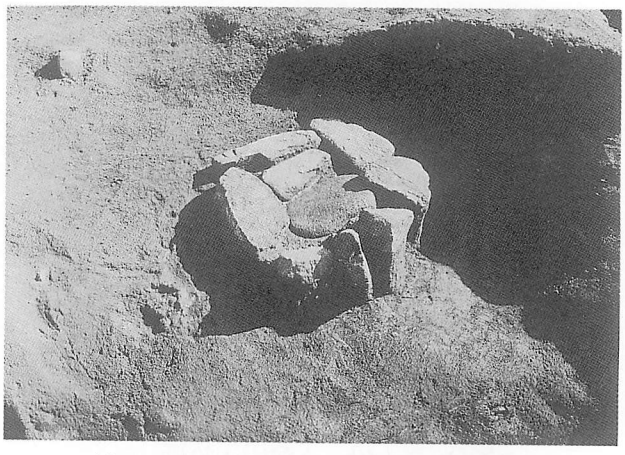


第106号土坑　礫出土状況

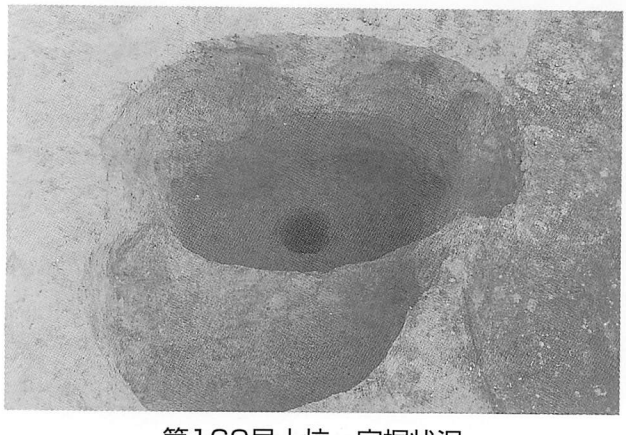
第122・123号土坑　遺物出土状況

第145号土坑　遺物出土状況

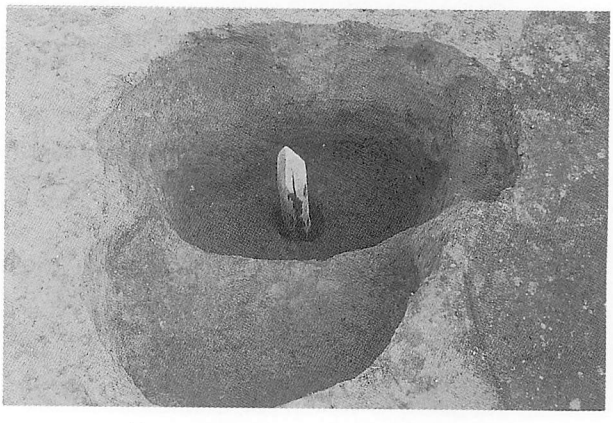
第146号土坑　礫（上層）出土状況



第146号土坑　礫（下層）出土状況

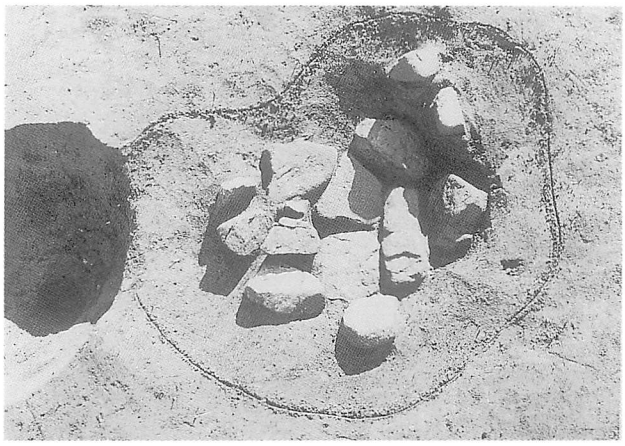


第160号土坑　完掘状況

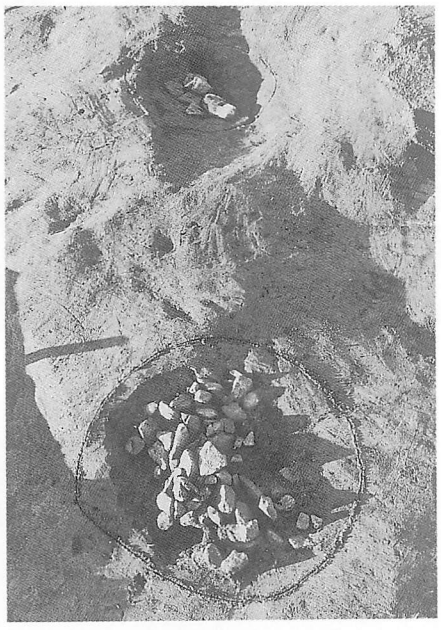


第160号土坑　使用時の復元

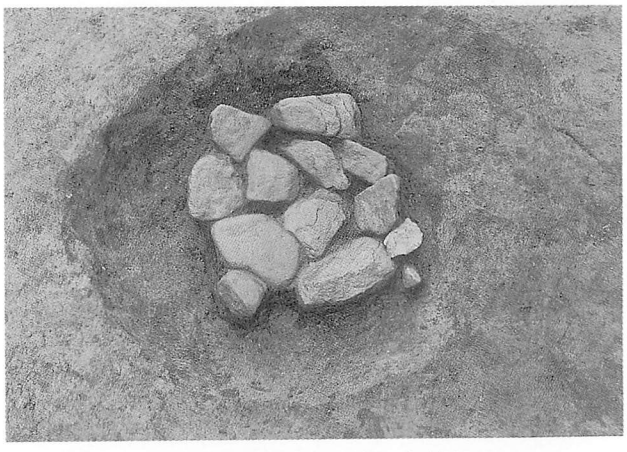
第147号土坑　遺物出土状況



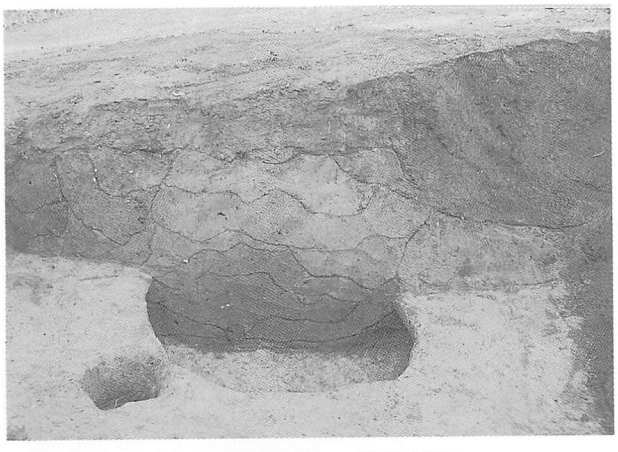
第162号土坑　礫出土状況



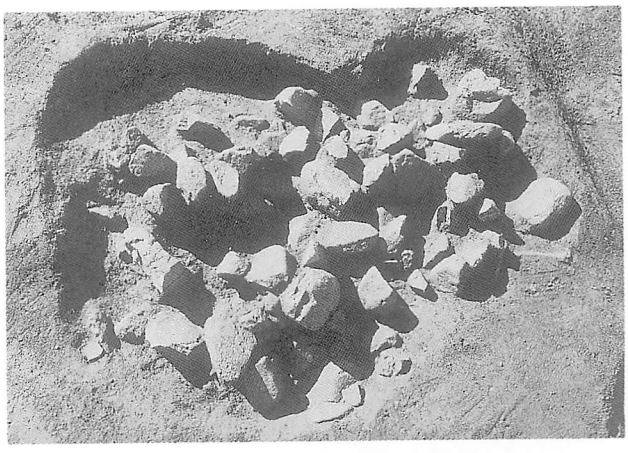
第184・185号土坑　礫出土状況



第184号土坑　礫出土状況

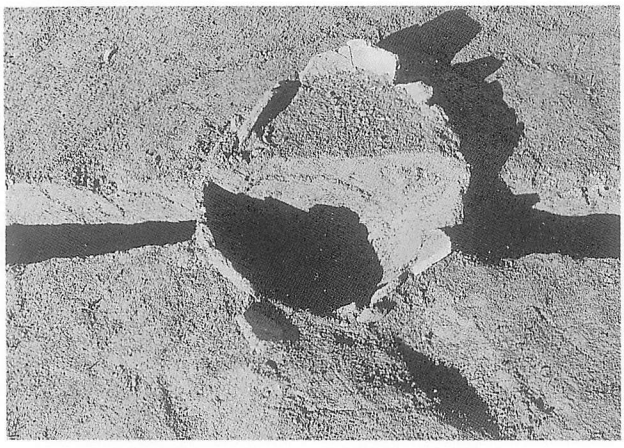


第203号土坑　半截状況

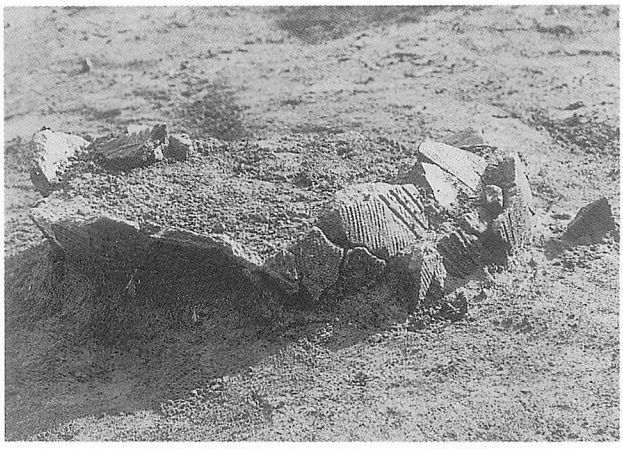


第196号土坑　礫出土状況

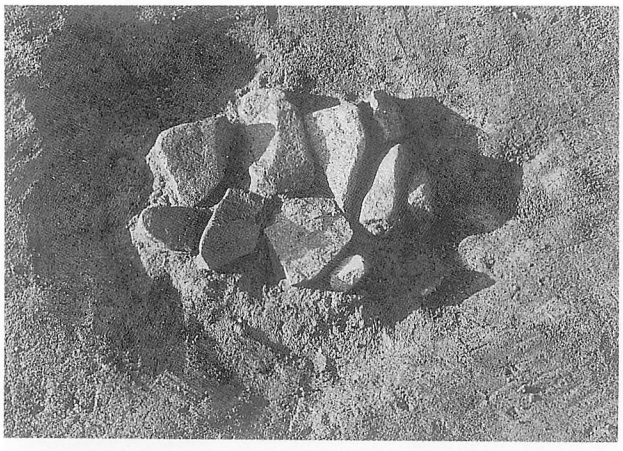
図版22　桂野遺跡



第218号土坑　土器出土状況



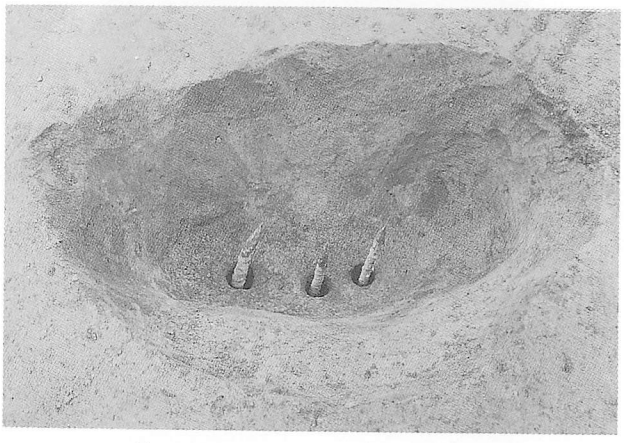
第218号土坑　土器出土状況



第244号土坑　礫出土状況

第244号土坑　土器出土状況

第303号土坑　完掘状況



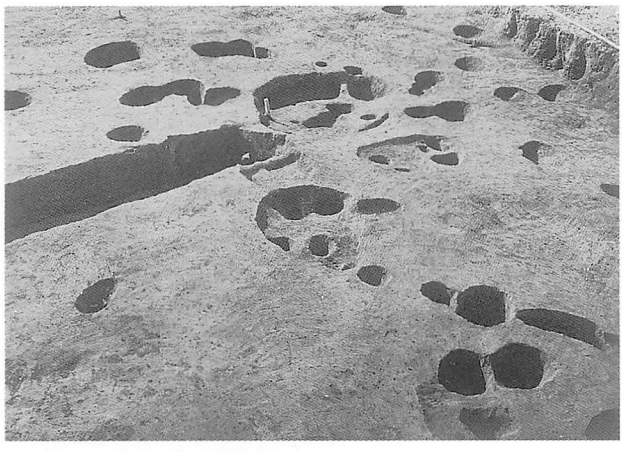
第303号土坑　使用時の復元

第315号土坑　礫出土状況

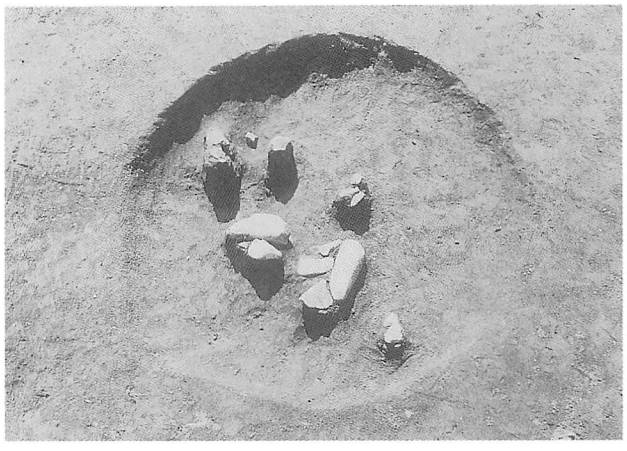
第322・323・324号土坑　完掘状況

第367号土坑　礫（上層）出土状況

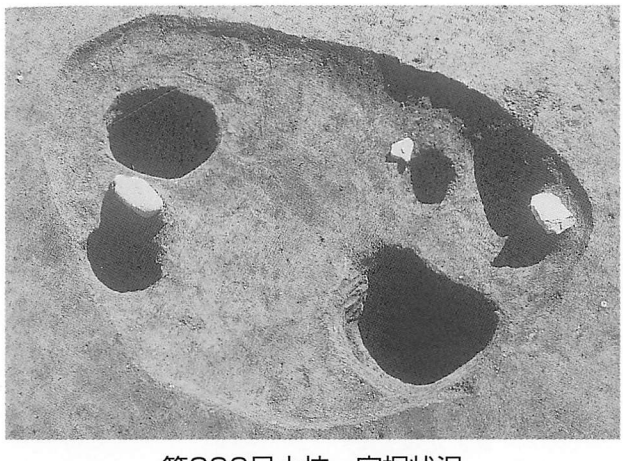
第367号土坑　礫（下層）出土状況



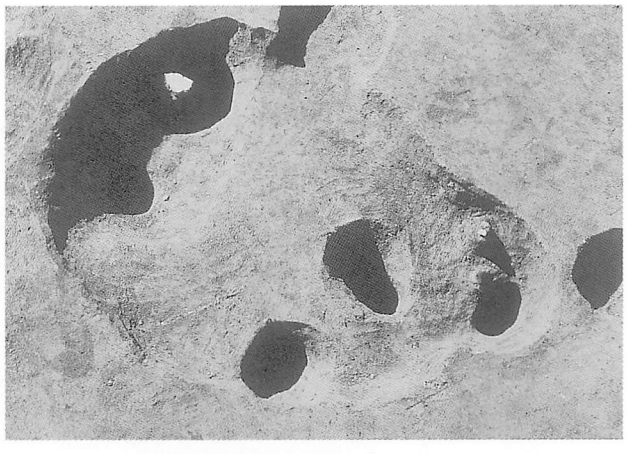
チ－39グリッド周辺　完掘状況



第368号土坑　礫出土状況



第399号土坑　完掘状況



第400号土坑　完掘状況

第429号土坑　礫出土状況

第484号土坑　礫出土状況

図版24　桂野遺跡

第484・490号土坑　礫出土状況

第491号土坑　礫出土状況

第501号土坑　完掘状況

第505号土坑　土器出土状況

第510号土坑　遺物出土状況

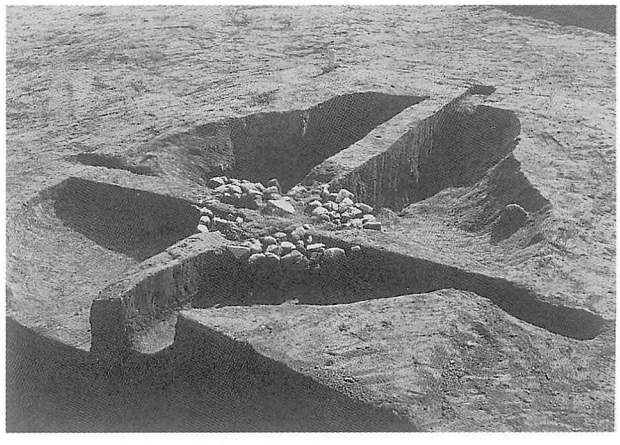
第510号土坑　土器出土状況

第508・509号土坑　礫出土・完掘状況

第511号土坑　完掘状況

第531～533号土坑　礫出土状況

第567・568号土坑　礫出土状況



第567・568号土坑　半截状況

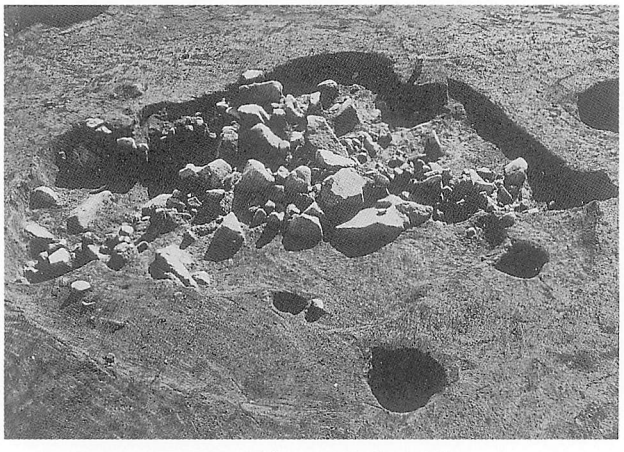
第580号土坑　土器出土状況

オ－17グリッド　石匙出土状況

図版26　桂野遺跡

第１号単独埋甕遺構　遺物出土状況

第３号単独埋甕遺構　出土状況



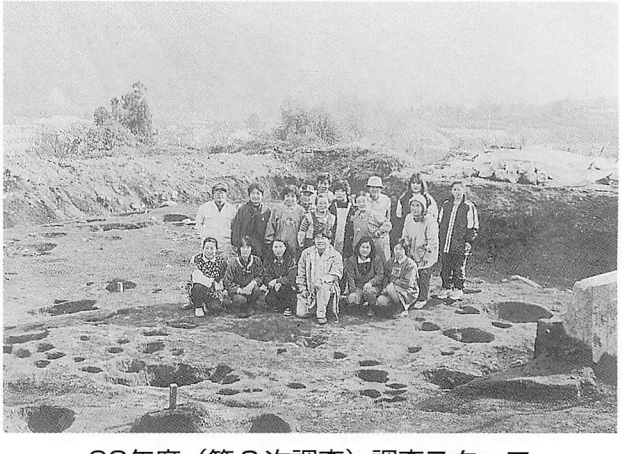
竪穴状遺構　遺物出土状況

第２次調査　調査区全景（北西から）

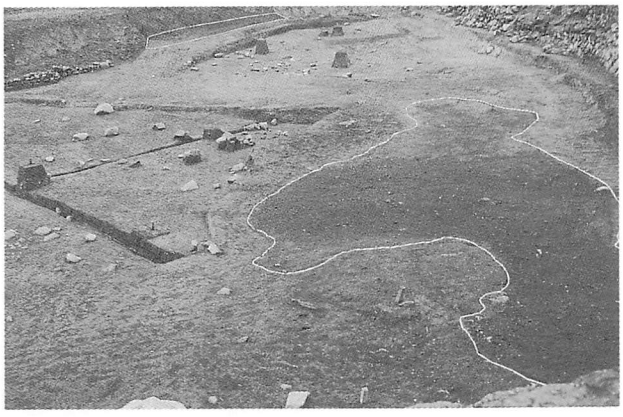
試掘調査　調査風景

試掘調査　調査風景

97年度（第２次調査）調査スタッフ

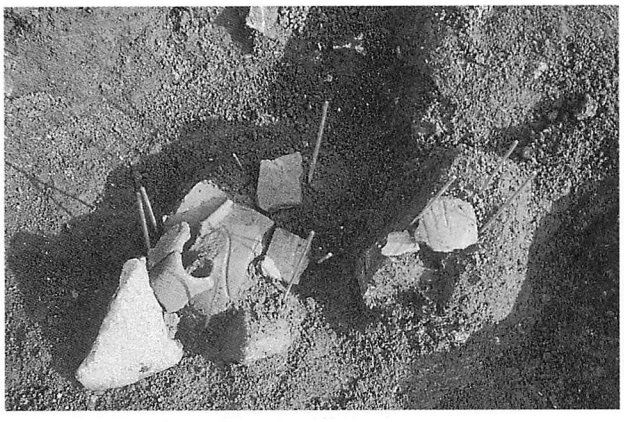


98年度（第３次調査）調査スタッフ



調　査　区　全　景

遺物出土状況



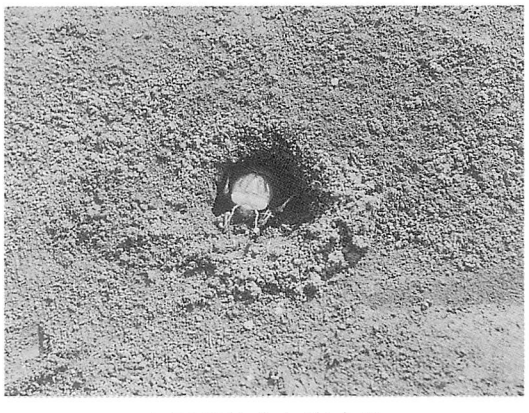
調　査　風　景

調　査　風　景

第１号土坑　遺物出土状況

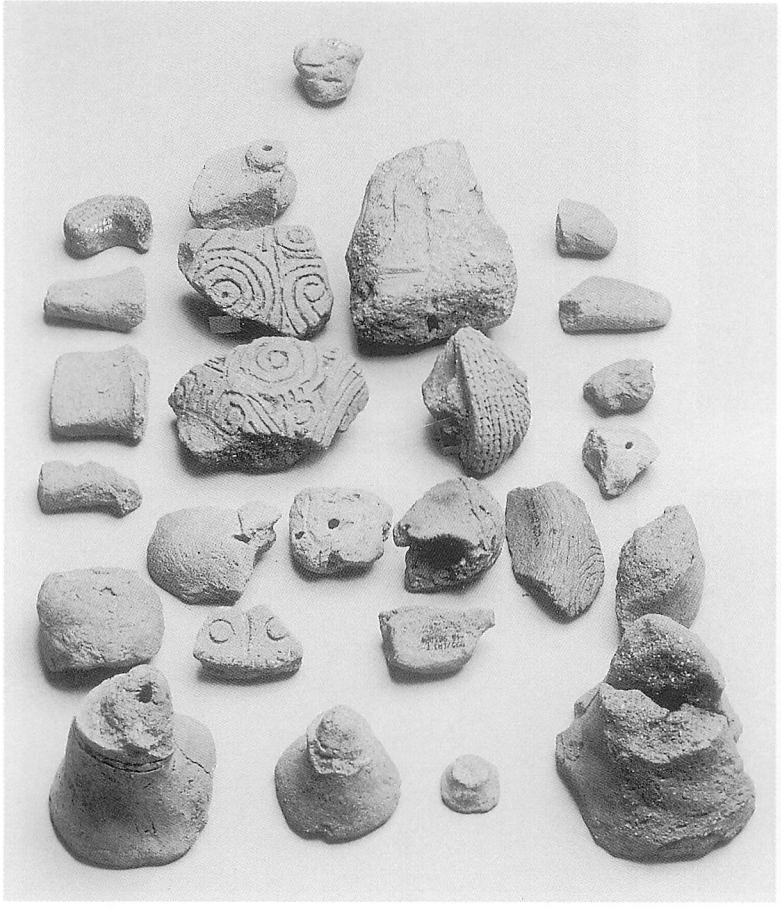
南北ベルト　東面

石鏃出土状況

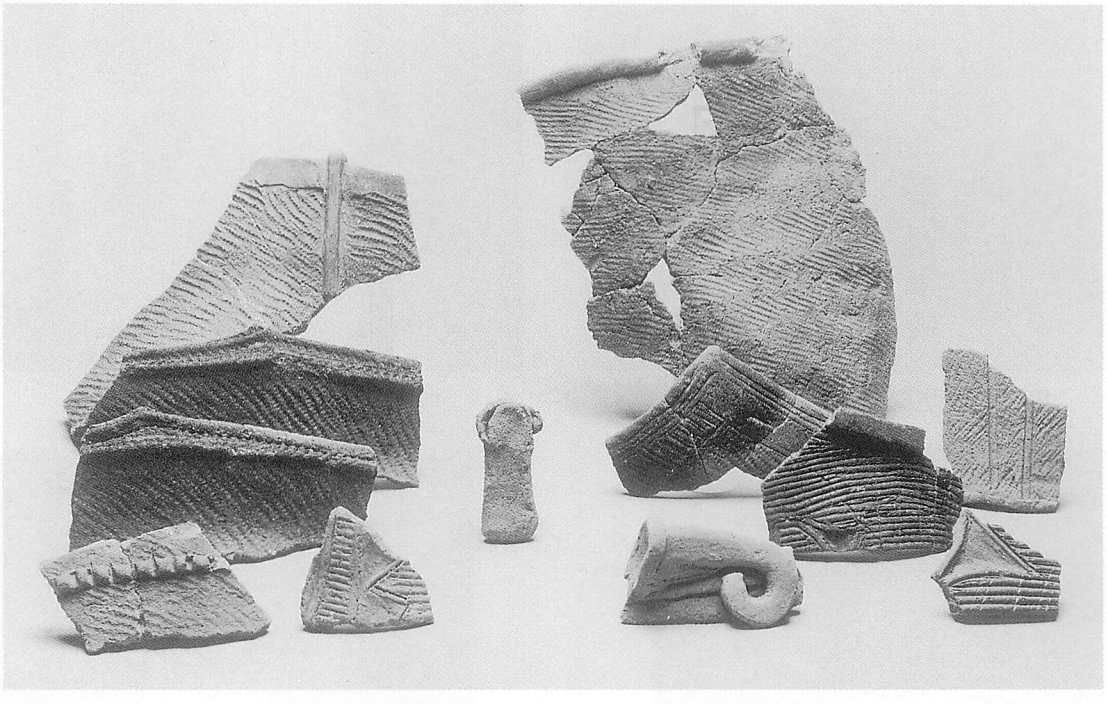


セミの幼虫も出土!?

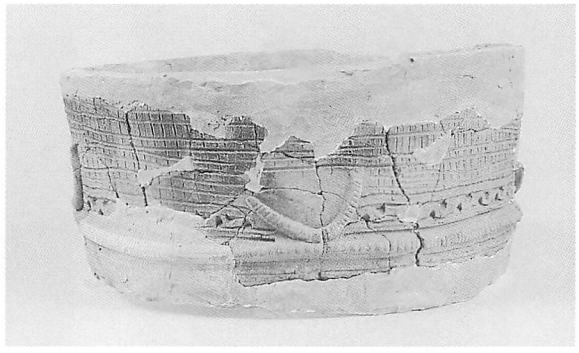
図版28　桂野遺跡



土偶



第57号土坑出土土器類と土偶（中央）



第１号住居跡出土土器
（第５図２）

第１号住居跡出土土器
（第５図１）

第４号住居跡出土土器
（第12図１）

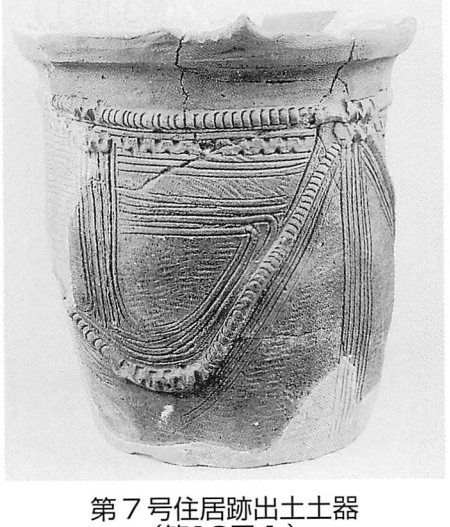
第６号住居跡出土土器
（第13図４）

第６号住居跡出土土器
（第13図１）

第６号住居跡出土土器
（第13図５）

第22号住居跡出土土器
（第19図１）

第６号住居跡出土土器
（第13図３）

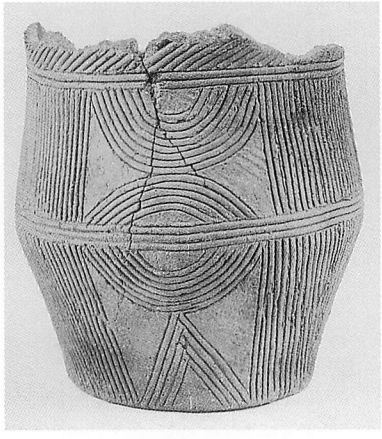


第７号住居跡出土土器
（第18図１）

第10号住居跡出土土器
（第23図１）

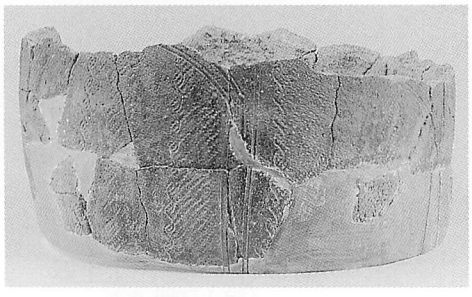
図版30　桂野遺跡

第11号住居跡出土土器
（第26図１）



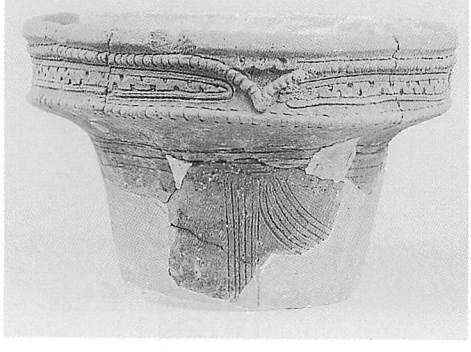
第11号住居跡出土土器
（第26図２）

第12号住居跡出土土器
（第27図１）魚文



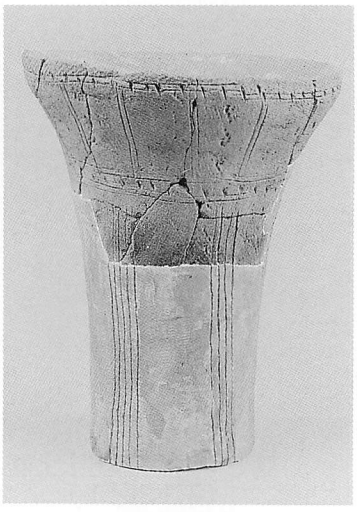
第12号住居跡出土土器
（第27図２）

第10号住居跡出土土器
（第23図２）



第15号住居跡出土土器
（第32図２）

第16号住居跡出土土器
（第34図１）



第27号住居跡出土土器
（第49図１）

第19号住居跡出土土器
（第39図５）

第71号土坑出土土器
（第77図413）

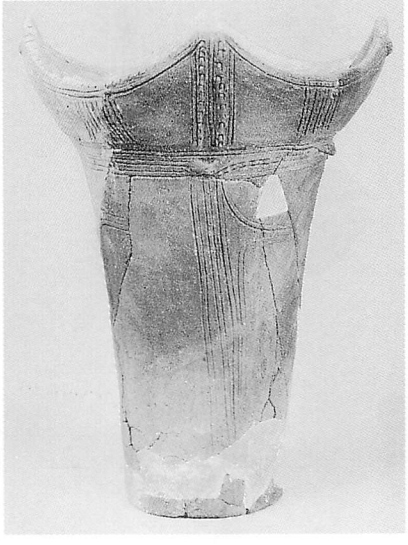
第80号土坑出土土器
（第77図412）

第99号土坑出土土器
（第69図87）

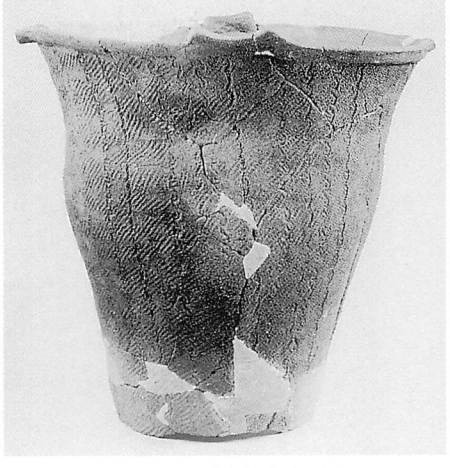
第281号土坑出土土器
（第77図416）

第261号土坑出土土器
（第77図415）

第501号土坑出土土器
（第77図420）



第510号土坑出土土器
（第77図411）



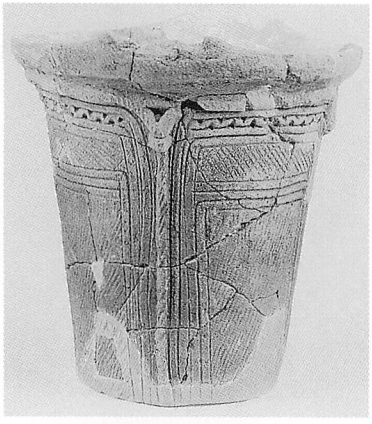
第579号土坑出土土器
（第77図417）

R－17グリッド出土土器
（第90図187）

R－18グリッド出土土器
（第90図190）

V－16グリッド出土土器
（第90図191）

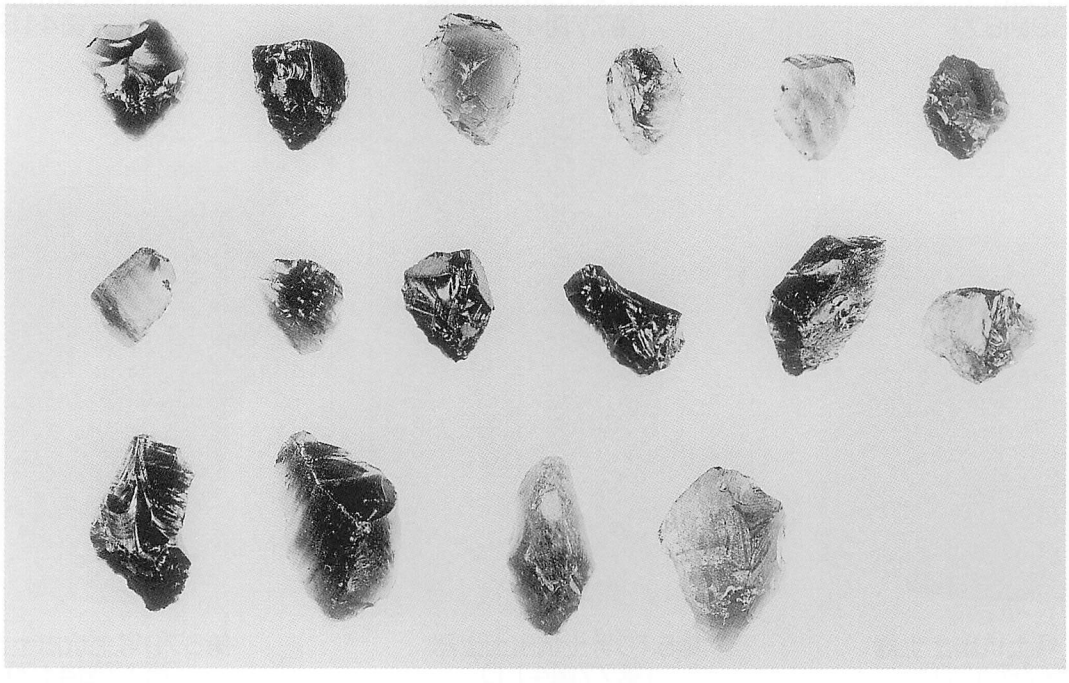
図版32　桂野遺跡



第１号単独埋甕遺構出土土器
（第77図422）

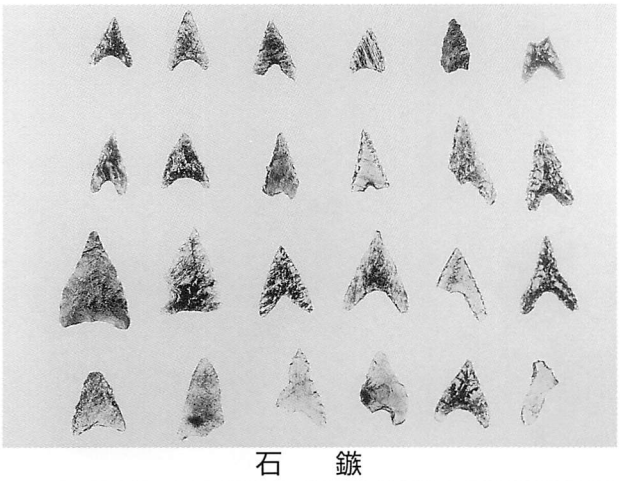
第２号単独埋甕遺構出土土器
（第77図423）

第３号単独埋甕遺構出土土器
（第77図424）

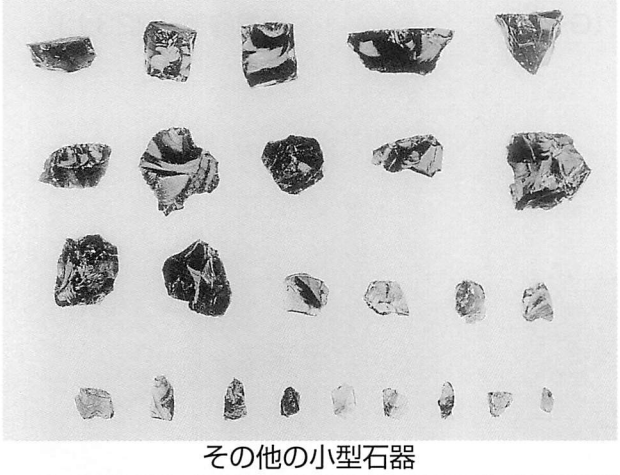


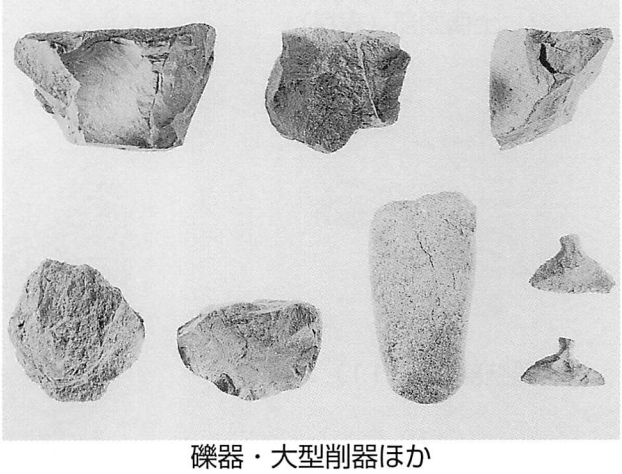
掻　　器

掻　　器


石　　鏃

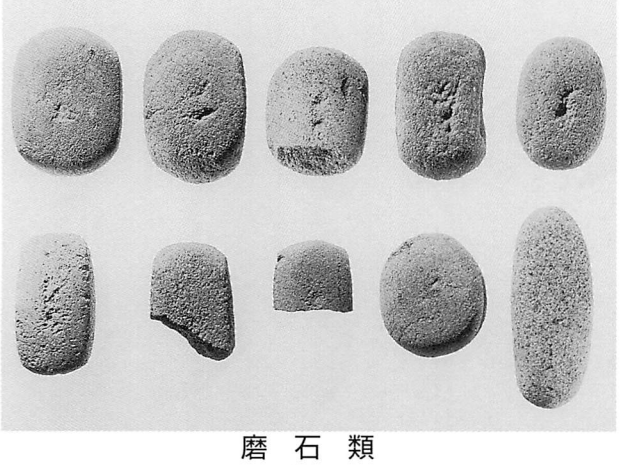
石錐・石匙・尖頭器ほか


その他の小型石器


礫器・大型削器ほか

打製石斧・磨製石斧ほか

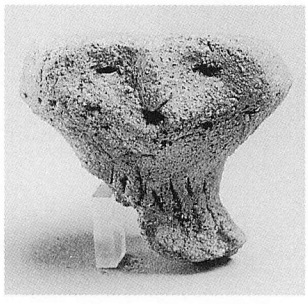
磨　石　類

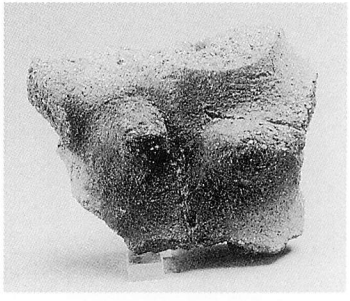

磨　石　類

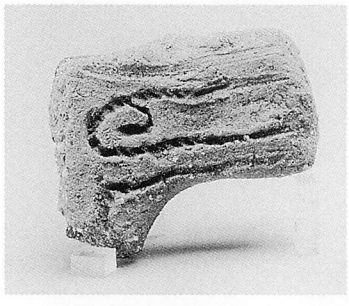
土製垂飾（半製品）

図版34　桂野遺跡

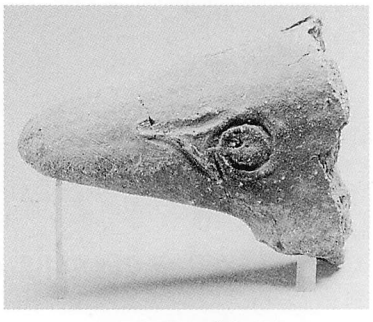
土偶頭部（表採）

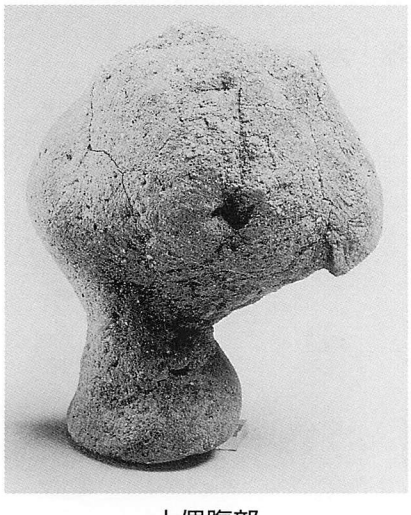

土偶頭部（G－6）

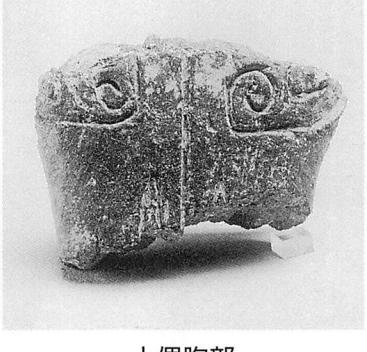

土偶胸部（223土）


土偶腕部（J－11）

土偶腕部（F－6）

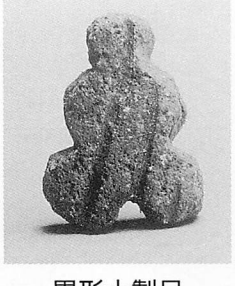

土偶腕部（表採）


土偶腹部

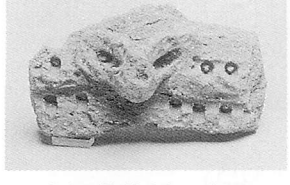

土偶胸部

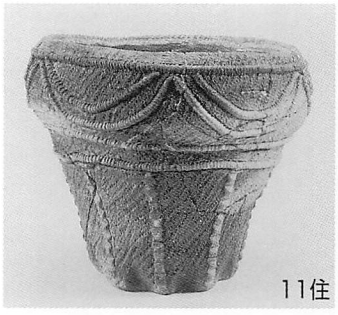
小型土器脚部

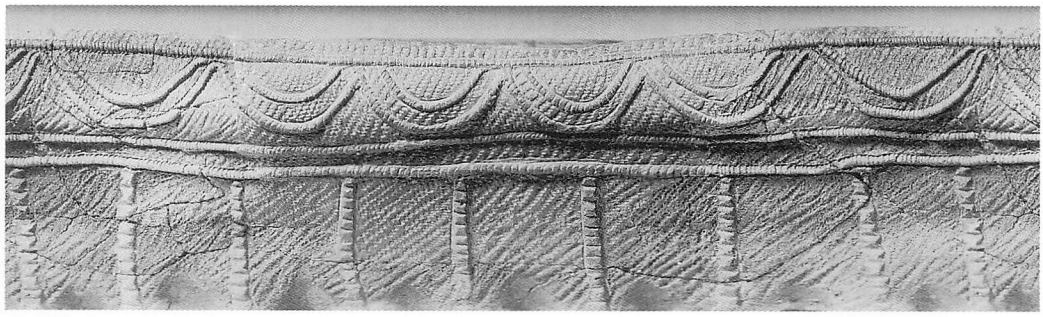
土偶装飾付き土器

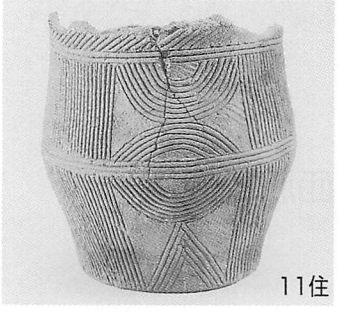

異形土製品

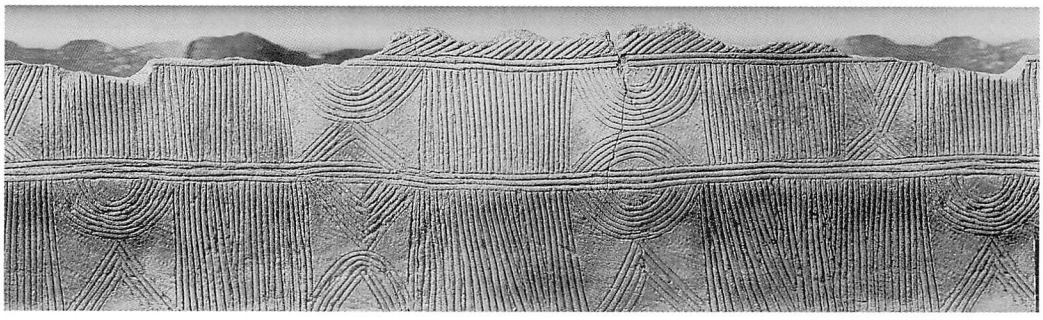
土製玦状耳飾


土偶装飾付き土器

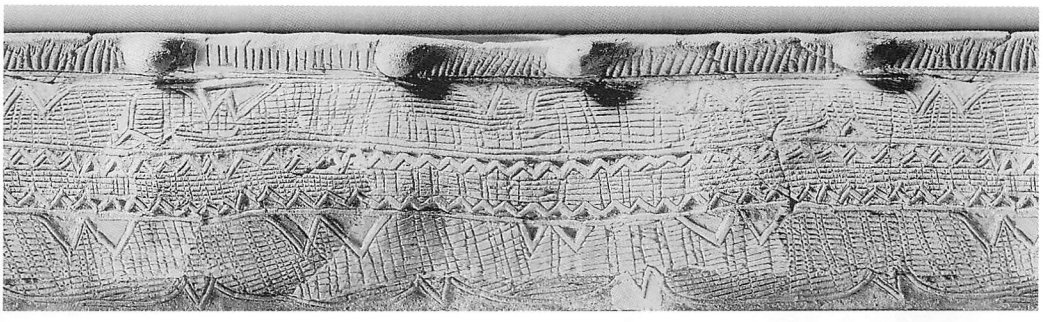

11住



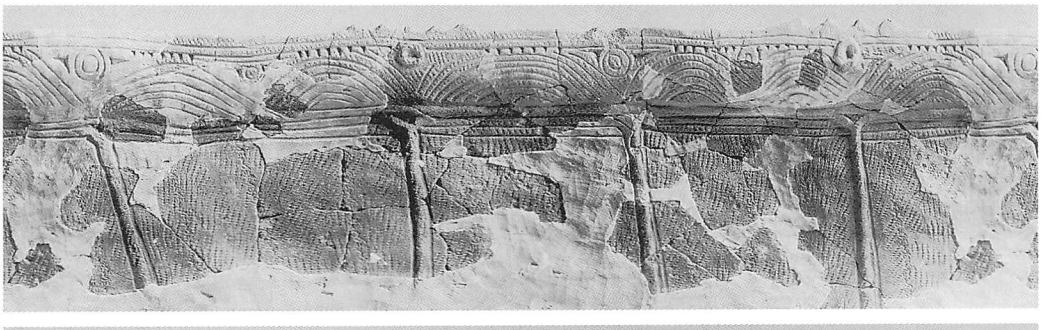

11住



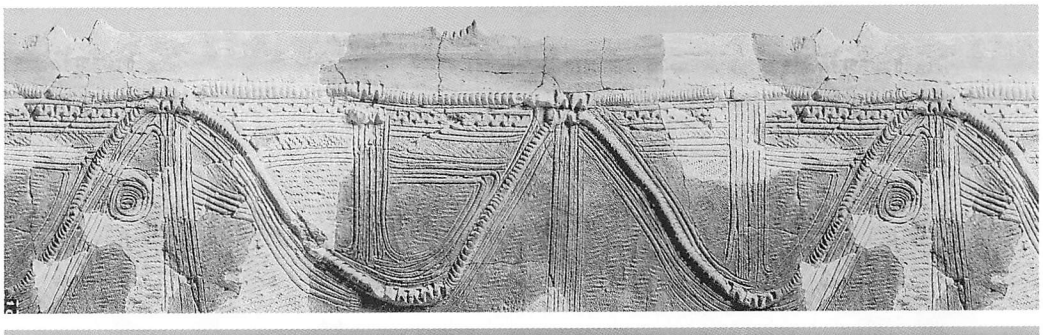
501土



22住



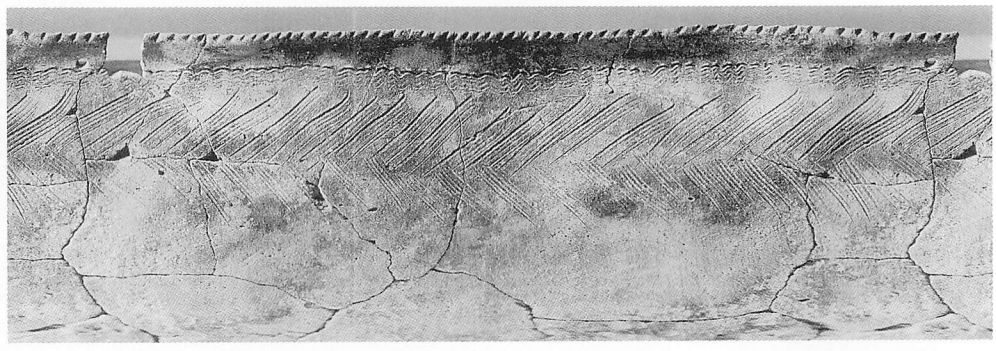
7住



99土

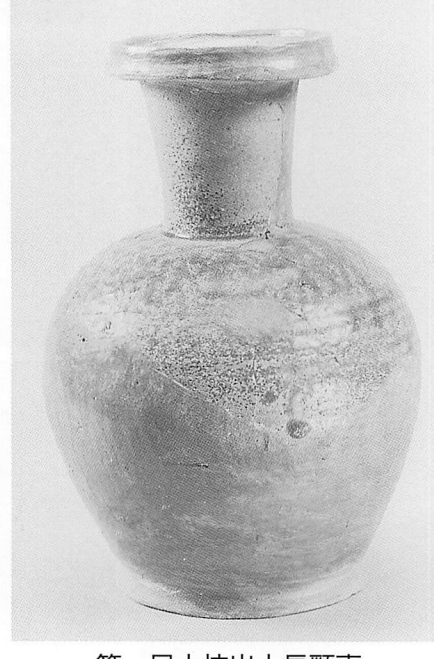
図版36　桂野遺跡・西馬鞭遺跡

19住



石　器　類

西馬鞭遺跡


第一号土坑出土長頸壺

手づくね土器

西馬鞭遺跡調査全景

第Ⅰ章　発掘調査および整理作業経過

第1節　調査・整理作業日程

[桂野遺跡]

国道137号線（上黒駒バイパス）建設工事予定地となっている東八代郡御坂町大字上黒駒字桂野大道上地内における具体的な工事計画が県土木部道路建設課より提出された。一部工事区間が周知の埋蔵文化財包蔵地と重なるため、遺跡の分布範囲の確認という意味も含めた試掘調査を行ったところ、縄文時代中期の遺構・遺物が検出された。このため、開発関係部局である同課と同石和土木事務所及び笛吹川沿岸土地改良区管理課、県教育委員会学術文化財課と同埋蔵文化財センターの５者により協議した結果、計画の変更は不可能であるとの結論に達し、やむを得ず直接工事によって影響を受ける部分の記録保存を目的とした調査を実施することになった。

試掘調査は1996年1月24日から同年2月7日までに、着工予定地に51本のトレンチを設けて掘り下げたところ、縄文時代中期の遺物と共に住居10軒、土坑30基が確認され、遺跡の対象となる場所も広範囲に広がることが認知された。これにより、遺跡の名称を周知の遺跡と同様に桂野遺跡とし、発掘調査の対象地として本調査を行う運びとなった。

調査を実施するのに先立って、学術文化財課及び埋蔵文化財センターと石和土木事務所、笛吹川水系土地改良区４者で協議を行い、調査区の設定・安全管理等の留意点を確認した後に、発掘調査に関わる法的手続きをとった。発掘調査は工事予定地において、買収が完了した用地から行うこととした。その結果、調査は96年度から98年度まで年度を隔てて3回行われ、調査面積は合計17,500㎡が対象となった。

[西馬鞭遺跡]

上黒駒地内に国道137号（上黒駒バイパス）建設事業が計画され、県土木部から県学術文化財課へ埋蔵文化財の有無の確認依頼がなされた。埋蔵文化財センターでは、学術文化財課より早急に試掘調査を行うよう要請を受け、事業に先立って平成10年7月27日から31日までの5日間にわたって試掘調査を実施した。試掘調査の対象面積は約8,000㎡で、道路建設予定図に基づいた路線上に重機による試掘坑を計17本設定し、その後人力によって精査を行い、遺構及び遺物の有無について確認を行った。その結果、数本のトレンチ内から縄文時代草創期の石器、縄文時代中期初頭から後半（五領ヶ台式、曽利Ⅳ・Ⅴ式）の土器及び石器、後期前葉（堀之内式）の土器、古墳から平安時代の土師器や陶器類が認められ、層位的にも黒褐色系の包含層と黒茶褐色系の包含層の存在が確認された。試掘の結果を受け、約1,600㎡が調査対象となり、平成10年10月5日から12月10日にかけて発掘調査を実施した。

桂野遺跡及び西馬鞭遺跡は、共に基礎的整理を各年度終了後に行い、本格的整理作業を1999年６月17日から2000年２月29日において、県庁里吉別館内の埋蔵文化財センター分室において実施した。

第２節　調査・整理組織

調査・整理体制

[桂野遺跡・西馬鞭遺跡]

調査主体　山梨県教育委員会

調査機関　山梨県埋蔵文化財センター

所長	大塚初重	
次長	穂阪　忠	（平成８年度）
	藤田　修	（平成９～11年度）
	田代　孝	（平成11年度）
埋蔵文化財指導幹	森　和敏	（平成８～９年度）
	田代　孝	（平成10年度）
調査研究第一課長	森　和敏	（平成８～９年度）

	末木　健（平成10～11年度）
調査研究第二課長	田代　孝（平成８～９年度）
	坂本美夫（平成10～11年度）

調査担当者
（試掘調査）

平成８年度	熊谷栄二（主任文化財主事）
	宮里　学（文化財主事）

（発掘調査）

平成８年度	小野正文（主査文化財主事）
	熊谷栄二（主任文化財主事）
平成９年度	野代幸和（文化財主事）
	市川恵子（文化財主事）
平成10年度	野代幸和（文化財主事）
	長田雅巳（文化財主事）

（本格整理）

平成11年度	野代幸和（文化財主事）
	網倉邦生（非常勤嘱託）

発掘調査作業員・整理作業員

[桂野遺跡]

（平成８年度）

発掘調査作業員

富永小枝（当センター調査員）藤巻公恵、藤巻ひさ江、堀内一秀、村松まさみ、矢崎　緑、渡辺徳子（御坂町）赤岡　敦、大塚昭六、鈴木初音（石和町）武田きく江（中道町）笠井真由美、中込幹一、中込よしミ（豊富村）越石　力、志茂　博、玉越ゆかり、宮坂晴幸（甲府市）黒瀬信子、戸田ひろ、林　周子、藤原美代子、山下好、飯田みづほ、山崎靖子（春日居町）栗原礼子（勝沼町）小林よ志子（三珠町）田辺秋太郎（富士吉田市）

整理作業員

富永小枝（当センター調査員）矢崎　緑（御坂町）笠井真由美（豊富村）玉越ゆかり（甲府市）飯田みづほ、山崎靖子（春日居町）小林よ志子（三珠町）

（平成９年度）

発掘調査作業員

荒井しげの、岡部喜江子、小沢麗子、笠井幸恵、小嶋廣子、篠本明美、杉原俊男、田中富江、藤巻ひさ江、藤巻公恵、藤巻みち子、堀内一秀、堀内成子、水野英子、村松おとめ、村松須美子、村松不二子、村松まさみ、矢崎　緑、渡辺徳子（御坂町）大塚昭六、下倉茂雄、鈴木初音（石和町）山崎せいか、宮久保朝乃（中道町）石川真子、石川和彦、遠藤正美、久保田明義、菅沼芳治、高野眞寿美、平美与枝、向井袈裟春（甲府市）平山政英（大和村）下倉義次、下倉はる子（甲西町）神沢正孝、羽中田弘（敷島町）田辺秋太郎（富士吉田市）

整理作業員

深沢聡美（八代町）長田奈代子（中道町）高野眞寿美、平美与枝、田中真理、土屋道子、向井袈裟春（甲府市）

（平成10年度）

発掘調査作業員

大沢恵美子、小沢一枝、加藤高尾、笠井幸恵、金子浩江、斎藤茂治、三枝明男、塩沢太郎、志村智恵子、須田幸弘、杉原俊男、天川良子、野本憲雄、古屋弘美、藤巻公恵、藤巻みち子、藤巻ひさ江、堀内初子、堀内一秀、村松おとめ、村松まさみ、矢崎　緑、渡辺徳子（御坂町）赤岡　敦、大塚昭六、下倉茂雄、手塚盛明、手塚房子（石和町）三枝一也、深山直樹（一宮町）石井千秋、長田可祝、梶原初美、志村昌昭、武田きく江、渡辺剛

（中道町）中込幹一（豊富村）河野逸廣、越石　力、菅沼芳治、平美与枝、長坂　清、春成慎介、宮坂晴幸、向井袈裟春、埜　邦弘、山本正彦、山田敦子、柳沢　伸（甲府市）山崎靖子（春日居町）羽中田弘（敷島町）上嶋十郎、田辺秋太郎（富士吉田市）

整理作業員

矢崎　緑（御坂町）長田可祝、石井千秋、梶原初美（中道町）中込幹一（豊富村）山崎靖子（春日居町）澤登由美（山梨市）向井袈裟春、菅沼芳治、平美与枝、宮坂晴幸、小林裕子、石原　恵（甲府市）平嶋純一、平嶋弘子（長坂町）

（平成11年度）

整理作業員

石井千秋，梶原初美、渡辺麗子（中道町）志村君子、鈴木由香（石和町）平美与枝（一宮町）菅沼芳治、向井袈裟春、三好美智、大塚敦子、小林裕子（甲府市）澤登由美（山梨市）

[西馬鞭遺跡]

（平成10年度）

発掘調査作業員

大沢恵美子、小沢一枝、加藤高尾、三枝明男、志村智恵子、天川良子、堀内初子（御坂町）赤岡　敦（石和町）三枝一也（一宮町）長田可祝、志村昌昭（中道町）中込幹一、中込よしミ（豊富村）河野逸廣、越石　力、宮坂晴幸（甲府市）山崎靖子（春日居町）田辺秋太郎（富士吉田市）

（平成11年度）

整理作業員

鈴木由香（石和町）平美与枝、三好美智、大塚敦子（甲府市）沢登由美（山梨市）

協力機関

県土木部道路建設課、同石和土木事務所、御坂町教育委員会、笛吹川水系土地改良区、御坂東小学校、㈱シン技術コンサル、㈱フジテクノ、㈱パリノサーヴェイ、㈱パレオ・ラボ、㈱カワイ、㈲東雲測量、㈲タナカ設備

協力者

御坂町教育委員会　望月和幸・松本京子、笛吹川水系土地改良区　今澤茂則、奈良大学　泉　拓良、敦賀短期大学　網谷克彦、㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　松井忠春・河野一隆、神戸市教育委員会　丸山潔、㈶滋賀県文化財保護協会　中村健二・伊庭　巧・鈴木康二、㈶栗東町文化体育振興財団　近藤　広、岐阜市教育委員会　内堀信雄、㈶岐阜県文化財保護センター　小谷和彦・堀田一浩・近藤大典・増子　誠、小川忠博、小口妙子

第３節　調査及び整理作業方法

[桂野遺跡]

調査区内に公共座標の北にのるように５ｍグリッドを設定して、西から東に向かってＡ・Ｂ・Ｃ…のアルファベットを、南から北へ１・２・３…の算用数字を付したが、調査の進捗に伴い調査区を西側に拡張する必要が生じたため、Ｚより続けて、あ・い・う…のひらがなを西から東へ継続して作業を進めた。国土座標はＶ・Ｗ－16・17グリットの杭で、Ｘ＝－43400、Ｙ＝－18200の値を得ている。調査に先立ち表土から確認面までを重機によって除去した。表土から確認面までは深い所で１ｍ、浅い所で20㎝を数える。緩斜面地のため、遺構の覆土がローム化していることと、黒色帯より掘り込まれていたため、遺構確認作業は困難であった。第３次調査の一部において、基盤整備のために掘削されていたが、その他の場所においては遺構・遺物の依存状態は良好であった。

整理作業については、平成8年度・9年度・10年度の発掘調査が終了した後に、出土遺物の洗浄・注記・拓本・実測作業・図面台帳の作成・写真整理といった基礎的な作業を行った。本格的整理は平成11年度に行い、報告書作成のために実測作業の継続、遺構及び遺物実測図のトレース、図版の作成、原稿執筆などを行った。

また、科学的な分析として、桂野遺跡から出土した種子の分析・縄文時代中期初頭に比定される土器の胎土分析を委託した。

[西馬鞭遺跡]

グリッドは５ｍ×５ｍメッシュで西から東へアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ…）を南から北へ算用数字（１・２・３…）を付した。国土座標はＣ・Ｄ－４・５グリッドの杭で、Ｘ＝－43950、Ｙ＝－18650の値を得ている。重機による表土剥ぎの時点において、調査区の山側及び中央部の広い範囲にわたり建築資材等が廃棄された攪乱や礫層を確認する事ができたため、それ以外の部分を調査の対象とした。遺構確認面上からは人力で精査し、遺構の検出に努めた後、移植・鋤簾を用い人力による掘り下げを進めていった。

出土した遺構及び遺物の記録・取り上げは以下の手順で行った。

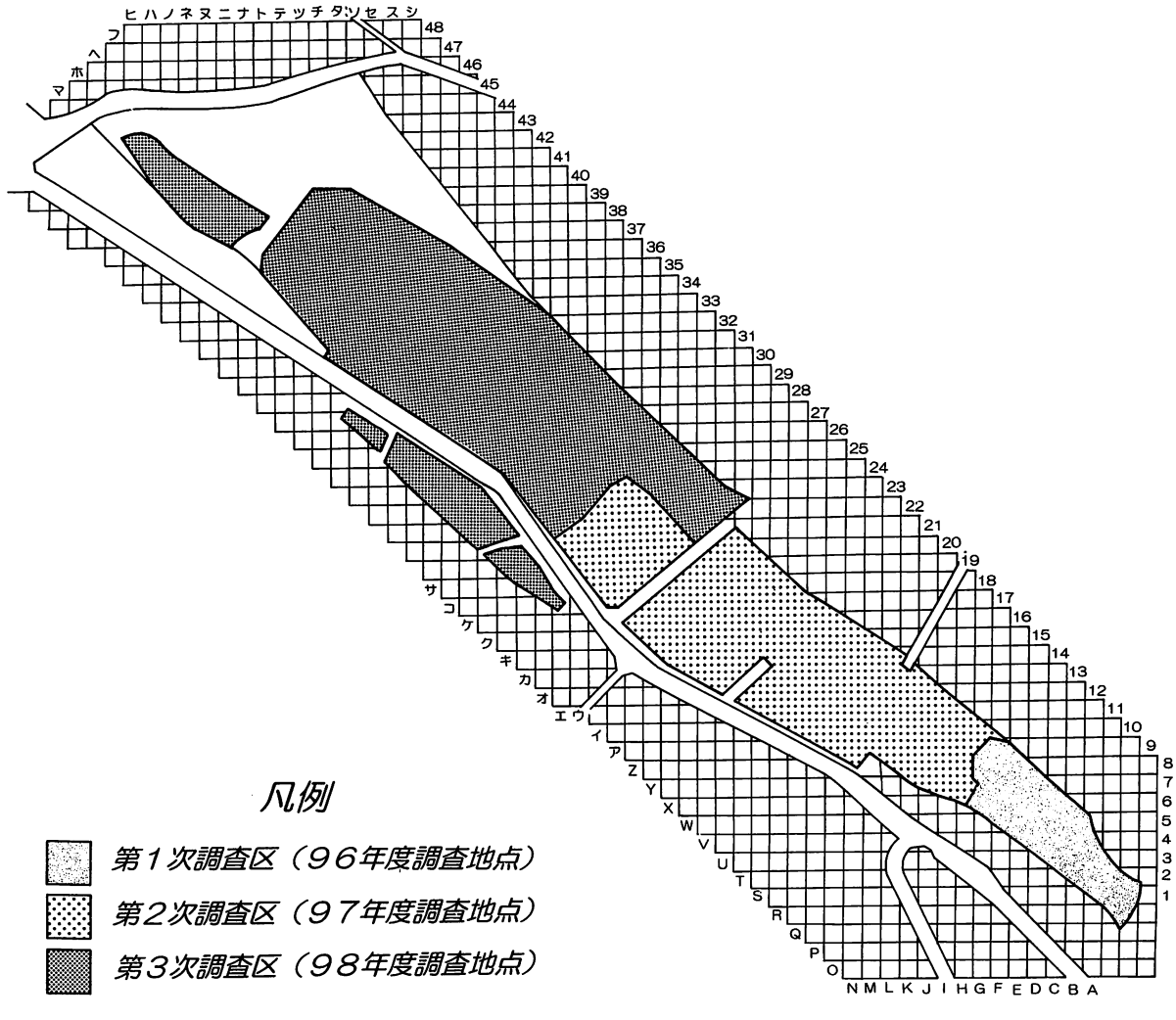
① 遺構確認面に到達するまでに出土した遺物及び約３×３㎝以下の遺物は、グリッドごとに一括した。

② 遺構確認面より下の出土遺物は原則としてレベリング及び平面図に記録した後、回収する

③ 遺構内についてはセクションベルトを設定し、それ以外の場所は坑底まで遺物を残しながら掘り下げる。

④ 遺物の出土位置及びセクションベルトの土層を記録後にベルトも同様に掘り下げ、遺物の確認を行う。

整理作業については、発掘調査終了後に出土遺物の洗浄・注記・拓本・実測作業・写真整理といった基礎的な作業を行った。本格的整理は平成11年度に行い、報告書作成のために遺構及び遺物実測図のトレース、図版の作成、原稿執筆などを行った。



第１図　調査区設定図

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

御坂町はその町域の67％が山地であり、残る部分が金川扇状地と天川扇状地からなる平地である。御坂山脈の八町峠付近より源を発する金川は、多くの支流を集め12㎞ほど流れ下った若宮地内において山地から扇状地に入り、さらに７㎞ほど流れて笛吹川に合流する河川である。金川は山地で深い谷を刻んでいて、右岸は断層崖で急斜面となり、左岸は山麓斜面が多く河岸段丘が発達している。金川の谷が広がり、山地から平地になる若宮付近の左岸一帯には桂野台地と呼ばれる台地がある。この台地の南側には大栃山（1,414ｍ）と大堀山（767ｍ）が存在し、北東側に向かってなだらかに傾斜している。その地形は砂礫台地に分類される。台地の末端部付近は金川によって開析された段丘が発達し、国道137号線がそれに沿って走り、金川が並行して流れている。

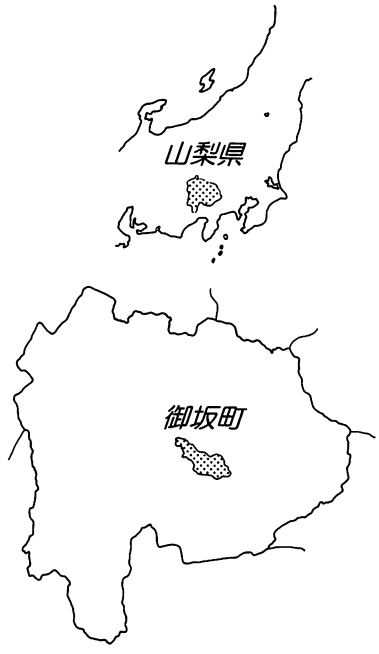
桂野遺跡は山梨県東八代郡御坂町大字上黒駒字桂野大道1901番地に所在し、桂野台地一帯に広がる集落遺跡であると周知されてきた。標高は520～590ｍである。桂野遺跡は、時期毎に居住区として用いられる台地の地点が異なっており、住居跡は緩斜面地に存在し、陥し穴・墓坑と認定可能な土坑は比較的急斜面な場所に位置するという傾向がある。台地の頂部から端部に向かって自然流路である沢が形成されており、沢の間の緩斜面地に集落が形成されている。遺跡内には土石流に起因する巨礫が存在している。

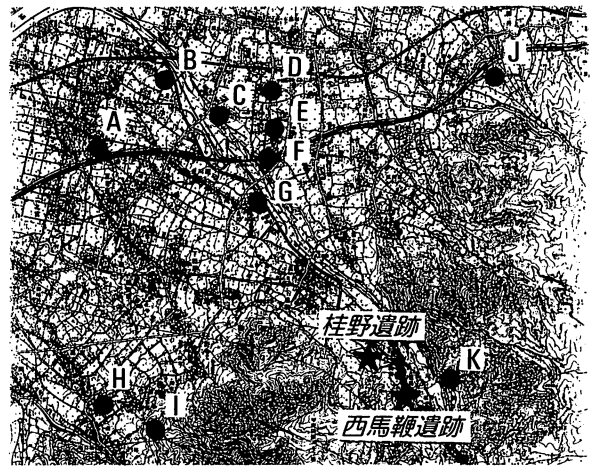
西馬鞭遺跡は山梨県東八代郡御坂町上黒駒2903番地に所在し、駒留中丸遺跡の南東側における山麓斜面に位置している。標高は約550ｍである。遺跡の周囲は大小の沢が入り組んでおり水平、西馬鞭遺跡の位置する地点も沢部にあたる。

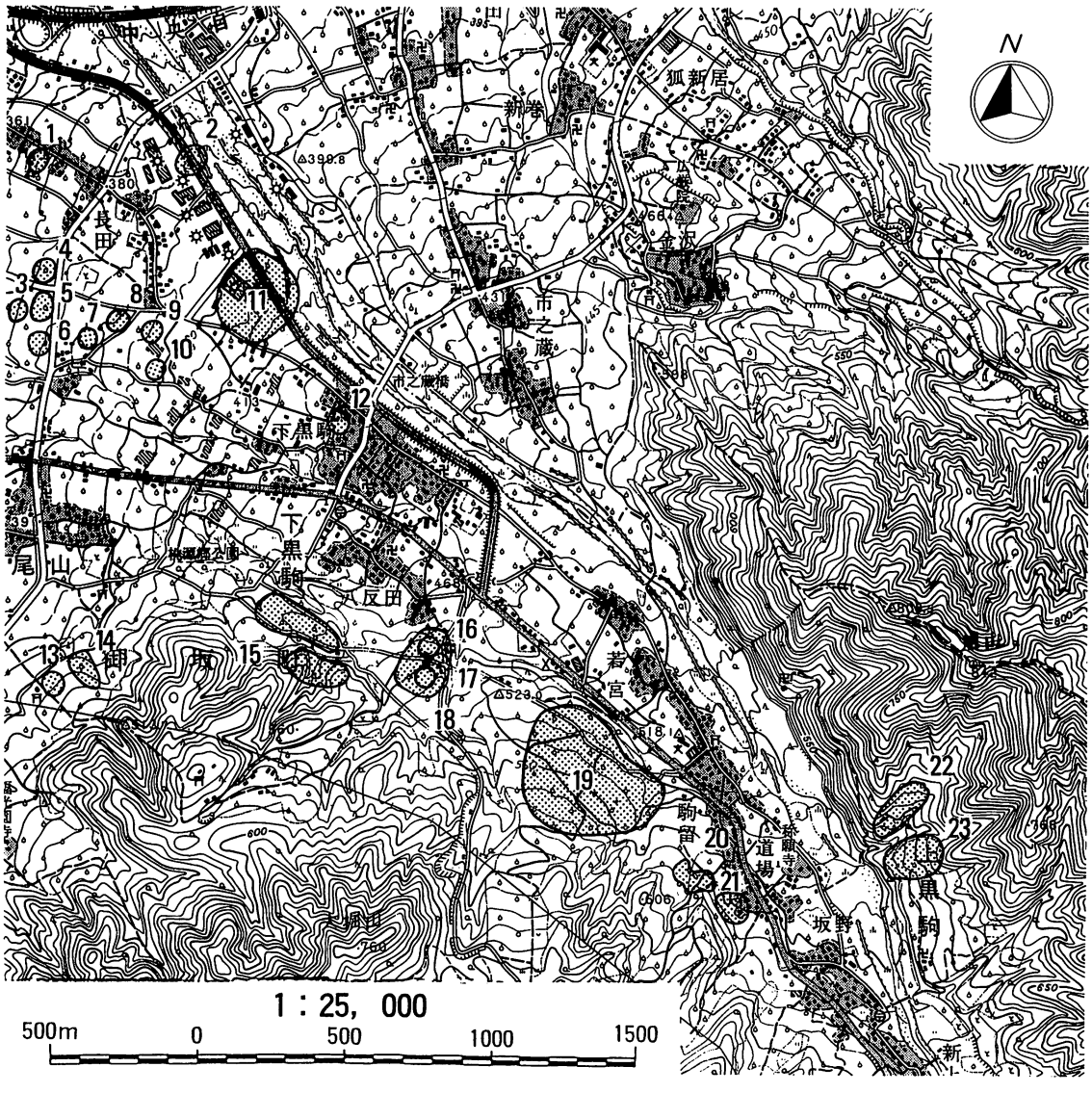
第２節　歴史的環境

桂野遺跡・西馬鞭遺跡の周辺の遺跡としては、金川の段丘や御坂山麓に位置する縄文時代中期を主体とした遺跡が多く、きわめて特徴的な顔で知られる黒駒土偶の出土した中丸遺跡などがこれにあたる。縄文時代前期後半の遺跡としては、御坂町と八代町の境界線上に立地する花鳥山遺跡が古くから知られている。この遺跡は、縄文時代前期後半に栄えた諸磯式と呼ばれている段階で出土する花鳥山式土器の標式遺跡である。浅川扇状地の扇頂部近くに位置する三光遺跡は、配石遺構が検出されており、後・晩期の遺物が充実している。弥生時代の遺跡は湧泉列に沿って分布し、中期及び後期に比定される遺跡が多い。古墳時代の遺跡は金川扇状地や天川扇状地の扇央部に多く位置しており、錦生古墳群と総称されている。錦生古墳群は後期古墳を中心としており、姥塚古墳や亀甲塚古墳、蝙蝠塚古墳、長田古墳群などが認められ、分布が密である。また、この他の遺跡として、古墳時代から平安時代の大規模な集落遺跡として知られる二之宮遺跡・姥塚遺跡などがある。その他、著名な遺跡としては縄文時代の大規模な集落跡や多数の土偶が出土した釈迦堂遺跡群や古墳時代終末期の八角形墳が検出された経塚古墳、大官大寺式の伽藍配置が確認された甲斐国分寺跡などが一宮町内に存在している。

西馬鞭遺跡は今回の国道137号改築工事に伴う試掘調査により確認されたが、桂野遺跡は早くから周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されてきた。桂野遺跡が遺跡として認定された契機は、昭和28（1953）年に上黒駒字桂野大道地内で、農道工事中に多量の土器が発見されたためであり、この際に縄文時代中期中葉から後葉のものが主体として出土した。この段階では遺物が確認されたものの、遺構は検出され得なかった。昭和28（1953）年から昭和31（1956）年まで桂野台地一帯で遺物が多く出土したが、桂野遺跡の性格などは明らかではなかった。初めて遺跡の学術的調査が行われ、その遺跡の概要について報告されたのは、昭和50（1975）年の甲斐丘陵考古学研究会による発掘調査である。この調査の結果、桂野遺跡が縄文時代の集落跡であることが明らかになり、遺物の分布が桂野台地一帯に認められることから、大規模な集落を想定可能となった。平成９（1997）年から10（1998）年にかけて、桂野遺跡内にふるさと農道整備事業が実施されることにより、事業主体である山梨県峡東土地改良事業所の依頼を受けた御坂町教育委員会が発掘調査を行った。この結果、縄文時代中期中


山梨県
御坂町


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
桂野遺跡
西馬鞭遺跡


N
狐新居
新巻
長田
市之蔵
下黒駒
反田
若宮
駒留
道場
坂野
黒駒
1：25，000
500m
0
500
1000
1500

第２図　遺跡分布図

葉から中期終末にかけての住居跡が16軒と縄文時代中期後半の土坑が20基検出された。この調査は平成11(1999)年においても継続して行われ、縄文時代中期前葉から後葉にかけての住居跡が検出され、河童形土偶などの優品が出土している。そして、平成8～12(1996～2000)年にかけて山梨県埋蔵文化センターによって行われた発掘調査・整理作業の結果、その全容が不明確であるゆえに注目されている、縄文時代前期末から中期初頭にかけての集落跡を認めることができ、桂野遺跡の位置付けがより明確になった。

これらの調査により、桂野遺跡は①縄文時代の集落跡として継続して利用されており、②時期によって集落の立地する場所が異なる遺跡であることが確認された。すなわち、大地の末端部には縄文時代前期末～中期初頭の集落が分布し、中央部には縄文時代中期中葉から後半の集落が立地している。このような、広範な占地パターンを示した背景には文化的・生態的な選択の他に、大規模な集落の展開を可能とさせる地形や第3図桂野遺跡調査地点に示されるように台地上に湧水地が存在することなどの豊かな自然環境が指摘できる。

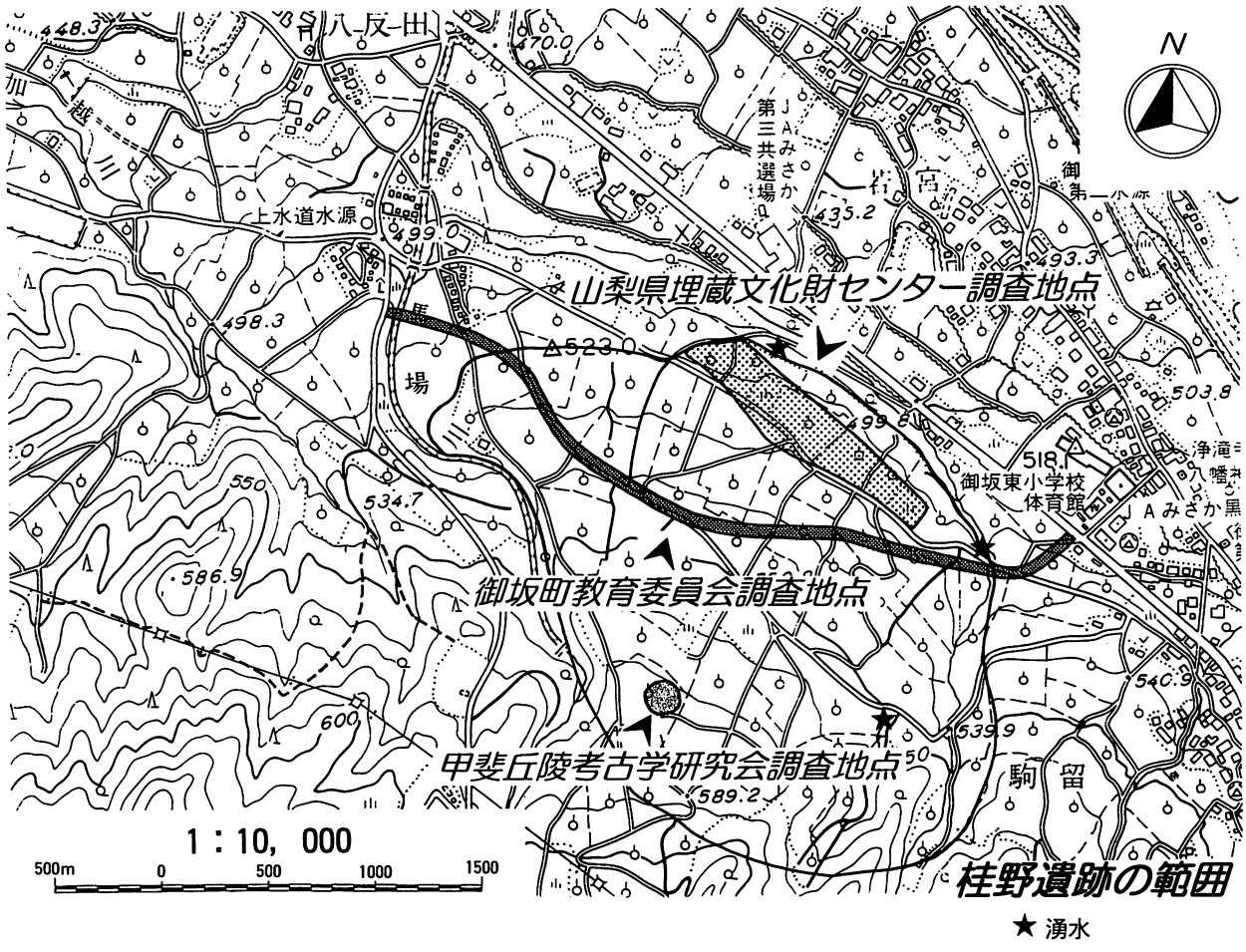
また。西馬鞭遺跡の調査により、甲斐型土器や長頸壷などと共に焼土を伴った平安時代の土坑が1基検出され、縄文・古墳・平安時代の遺物が散在することが確認された。調査によって、①平安時代における祭祀行為の実像を考える端緒が与えられたこと、②遺構に伴わないものの、有舌尖頭器や手捏土器が出土したことから、遺跡内ないしその周辺において該期における狩猟活動・祭祀行為が裏付けられたことなどが収穫として挙げられる。

第1表　桂野遺跡・西馬鞭遺跡周辺遺跡分布図(1)

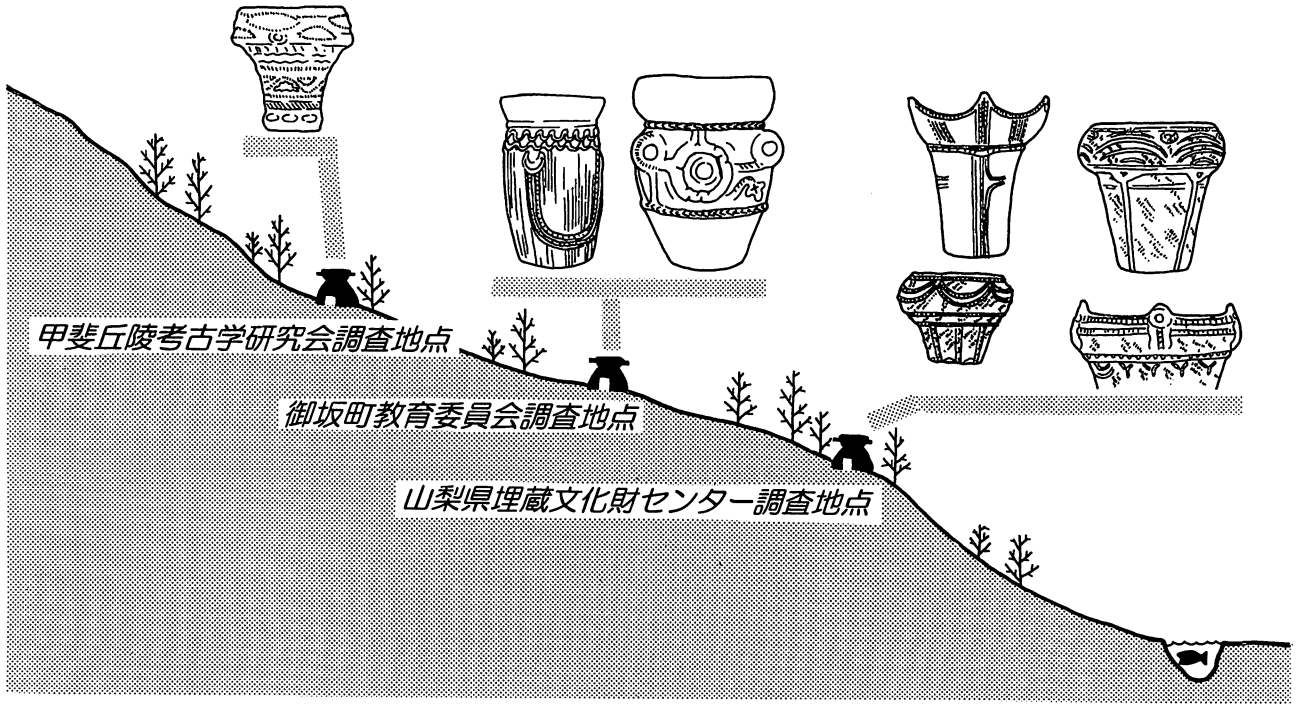
	遺　跡　名	時　　代	所在地
A	姥塚古墳	古墳	御坂町
B	狐原遺跡	奈良・平安	一宮町
C	経塚古墳	古墳	一宮町
D	甲斐国分寺跡	奈良・平安	一宮町
E	甲斐国分尼寺跡	奈良・平安	一宮町
F	豆塚遺跡	縄文	一宮町
G	長田古墳群	古墳	御坂町
H	三光遺跡	縄文	御坂町
I	花鳥山遺跡	縄文	御坂町
J	釈迦堂遺跡群	縄文	一宮町
K	中丸遺跡	縄文	御坂町

第2表　桂野遺跡・西馬鞭遺跡周辺遺跡分布図(2)

	遺跡名	時代		遺跡名	時代
1	藤塚(浅間塚)	古墳	13	藤塚	古墳
2	長田古墳群	古墳	14	向原遺跡	縄文・平安
3	狐塚	古墳	15	八反田遺跡	縄文
4	蝙蝠塚	古墳	16	文珠稲荷塚	古墳
5	無名墳	古墳	17	荒神塚	古墳
6	うとうぎ塚	古墳	18	屋戸林遺跡	縄文・平安
7	無名墳	古墳	19	桂野遺跡	縄文
8	無名墳	古墳	20	駒留小丸遺跡	縄文
9	無名墳	古墳	21	西馬鞭遺跡	縄文～平安
10	無名墳	古墳	22	上の山遺跡	縄文
11	帰久保遺跡	縄文	23	中丸遺跡	縄文
12	無名墳	古墳			



第３図　桂野遺跡調査地点



第Ⅲ章　桂野遺跡の調査

第１節　調査の概要

桂野遺跡の発掘調査は第Ⅰ章で述べたように年度を隔てて３回に分けて行われた。その結果、縄文時代前期から中期初頭の住居跡26軒、弥生時代中期後葉の住居跡１軒、土坑607基、竪穴状遺構１基、単独埋甕遺構３基、沢跡４条が検出された。各年度別の遺構・遺物は以下の通りである。

第1次発掘調査は1996年10月7日から同年12月21日にかけて行われ、調査面積は1,500㎡を対象とした。調査区の北側において沢跡が存在しており、遺物の大多数はここから出土した。堆積状況が安定的でないこともあり、遺構としては沢跡と性格不明のピット群しか検出し得なかったが、その立地から沢跡を中心とした遺跡全体が廃棄の場的な機能を有していたと考えられる。土器は、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器を中心に、前期末葉から後期前葉までの土器が出土しており、石器としては石鏃の他に1点ではあるが、尖頭器が認められている。特殊な遺物としては、土製玦状耳飾が5点、土偶が23点、土偶装飾付土器が２点、土製円盤が３点など出土している。

第2次発掘調査は1997年９月１日から同年12月25日にかけて行われ、調査面積は4,000㎡を対象とした。谷に挟まれた緩い斜面地に、縄文時代前期末葉が１軒、中期初頭が18軒、合計19軒の住居跡が集中していることが認められた。この他の遺構としては、土坑306基、竪穴状遺構１基、単独埋甕遺構３基、沢跡１条が検出されており、いずれも緩やかな斜面に散在している。住居跡は、前期末葉から中期初頭の住居跡としては例外的に住居施設が明確であり、土坑も機能が推定可能なものが認められる。土器は、五領ヶ台式土器を中心に、前期後半の諸磯ｂ式から後期前半の堀之内１式までが出土しており、石器は楕円形の磨石で稜部を主な磨り面とする稜磨石の他、特殊な形態（尖刃形）を有す掻器が本遺跡の石器群における特徴である。特殊な遺物としては土製玦状耳飾５点、土偶28点、土製円盤18点、土製装飾品３点、ミニチュア土器１点などが出土している。

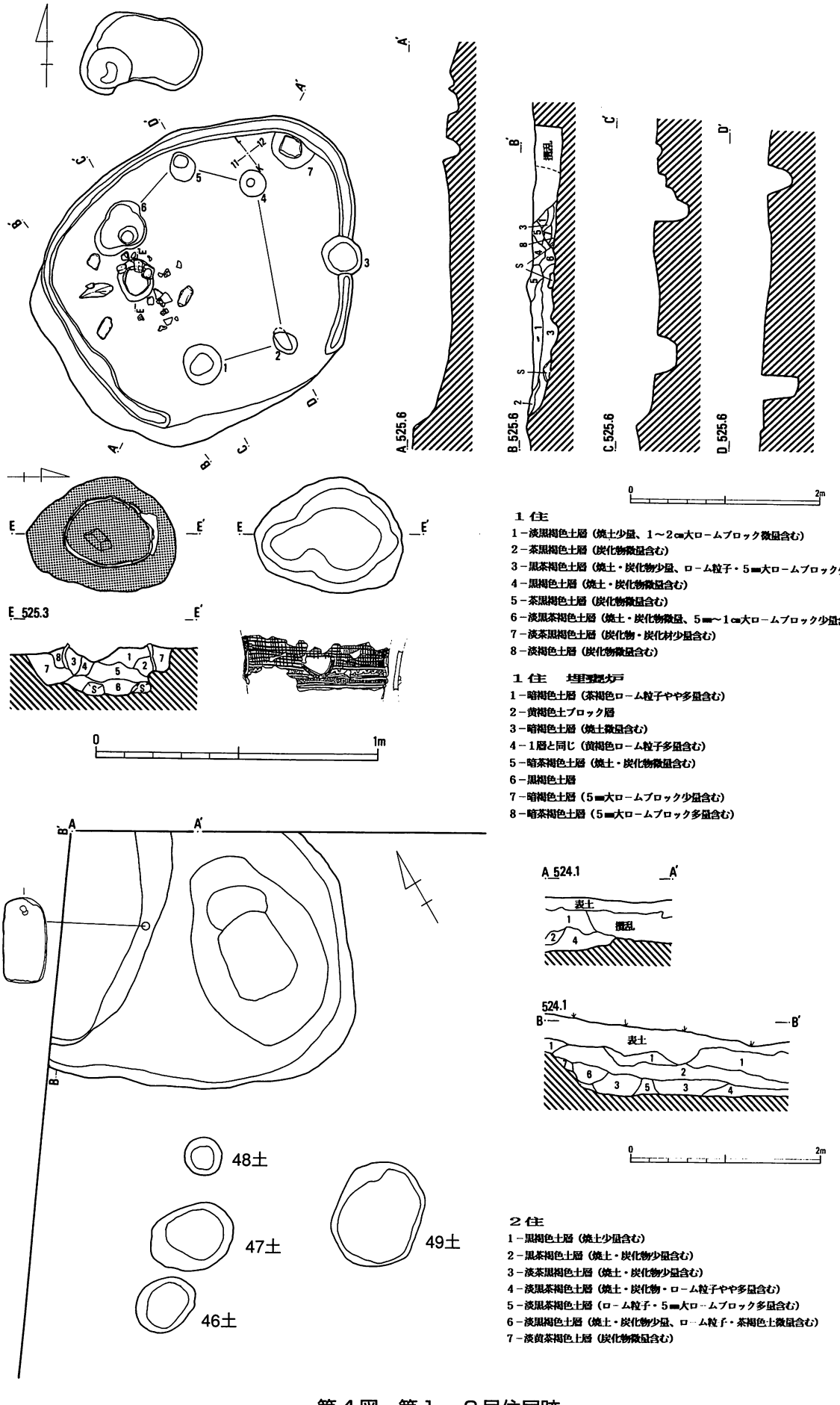
第３次発掘調査は1998年８月６日から同年12月11日にかけて行われ、調査面積は12,000㎡を対象とした。第２次調査における調査区の北西部に隣接した約11,500㎡と南東部の500㎡が調査の対象であるが、北西部で基盤整備によって破壊されている約2,200㎡については試掘調査で対応した。第2次調査と同じく緩やかな斜面地に住居跡が存在しており、その周囲に土坑が散在している。住居跡は縄文時代前期末葉が２軒、中期初頭が４軒、中期中葉が1軒、弥生時代中期後葉が1軒の合計８軒が確認され、他にも土坑301基、沢２条が認められた。土器は五領ヶ台式土器を中心に前期末葉の十三菩提式から後期初頭の称名寺式期までが出土しており、弥生時代では中期後半の土器が出土している。石器は、第２次調査と同じく稜磨石・掻器が特徴的に現れる。特殊な遺物としては土製玦状耳飾４点、土偶７点、土製円盤10点、ミニチュア土器１点が認められている。

年度毎に上記のような成果が上げられたが、同時に周知の埋蔵文化財包蔵地として認識されている位置よりも北東側に広がることが分かり、桂野遺跡が扇状地を広範に利用した遺跡であることが再確認された。

第２節　遺構と遺物

第１項　住居跡

居住域は、沢と沢の間に存在する緩傾斜した平坦面に占地しており、合計27軒の住居跡が発見された。時代的には縄文時代と弥生時代に大別でき、全体図に見られるような居住域の分布があり、縄文時代では調査区の南東部を中心に前期末葉から中期初頭段階を中心としたグループが谷を挟んで、Ｊ～Ｒ－８～17グリッド（Ａグループ）、オ・カ－17・18グリッド（Ｃグループ）、Ｘ・Ｙ－20～22グリッド（Ｂグループ）の三地点分布し（住居軒数25軒）とその主流を占めている。調査区中央付近ア・イ－27・28グリッド（Ｄグループ）の傾斜地に中期後葉段階が一地点（住居軒数1軒）、弥生時代では調査区北部の沢の端部、チ・ツ－38・39グリッド周辺（Ｅグループ）で中期後葉段階が一地点認められる。調査区の南東部に位置する居住域Ａ地点では、前期末葉から中期初頭段階の遺構が密集しており、狭く限られた地形を有効に活用するかの如く、ここでは重複、拡張と



1住

1－淡黒褐色土層（焼土少量、1～2㎝大ローム ブロック微量含む）
2－茶黒褐色土層（炭化物微量含む）
3－黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量、ローム粒子・5㎜大ローム ブロック少量含む）
4－黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
5－茶黒褐色土層（炭化物微量含む）
6－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物微量、5㎜～1㎝大ローム ブロック少量含む）
7－淡茶黒褐色土層（炭化物・炭化材少量含む）
8－淡褐色土層（炭化物微量含む）

1住　埋甕炉

1－暗褐色土層（茶褐色ローム粒子やや多量含む）
2－黄褐色土ブロック層
3－暗褐色土層（焼土微量含む）
4－1層と同じ（黄褐色ローム粒子多量含む）
5－暗茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
6－黒褐色土層
7－暗褐色土層（5㎜大ローム ブロック少量含む）
8－暗茶褐色土層（5㎜大ローム ブロック多量含む）

2住

1－黒褐色土層（焼土少量含む）
2－黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
3－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
4－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子やや多量含む）
5－淡黒茶褐色土層（ローム粒子・5㎜大ローム ブロック多量含む）
6－淡黒褐色土層（焼土・炭化物少量、ローム粒子・茶褐色土微量含む）
7－淡黄茶褐色土層（炭化物微量含む）

第４図　第１・２号住居跡

いった状況が多く窺え、ある種拠点的な様相もある。その他の地点では、少数の遺構を伴った小規模の生活空間が認められ、一般的な在り方に共通するものがあるが，出土遺物はとても少なく、短期定住を目的としたものと考えられる。

第１号住居跡（第４・５図）

（位置）調査区の東端、Ｋ・Ｌ－10・11グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属している。

（重複・改築）なし。

（形態・規模）形態は楕円形を呈しており，長径は3.70ｍ、短径は2.98ｍを測る。斜面部に位置しているため，掘り込みに差異が見られるが，最深部で約25㎝である。入口部は柱穴の配列から東側と推定することができる。

（壁・周溝）住居跡は東向き斜面に位置していることから，壁は西側で24㎝を測るが、その他の部分では存在しない。南西部は畑灌漑用パイプ埋設の際に攪乱を受けている。周溝は南東部を除いた部分に巡っており，幅10～20㎝、深さ２～７㎝を測る。

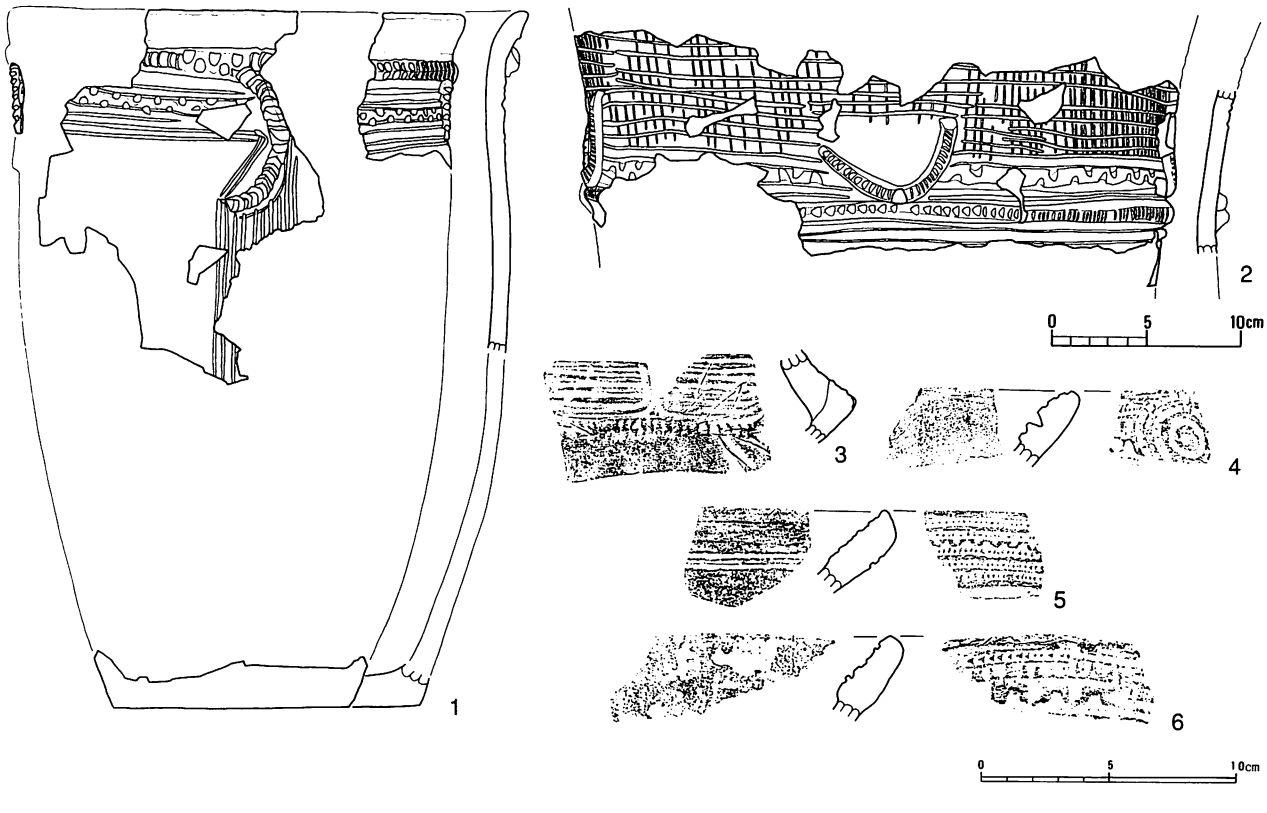
（柱穴）柱穴と考えられるものは全部で５本認められ、各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１は径42×39、深さ24㎝、ピット2は径27×20、深さ36㎝、ピット４は径28×27、深さ18㎝、ピット５は径32×27、深さ16㎝、ピット６は径62×46、深さ36㎝を測る。

（炉）住居跡の西壁寄りに存在し、これは深鉢形土器の胴部（第５図２）を利用した埋甕炉で、掘り方は楕円形を呈しており、径53×40、深さ18㎝を測る。また、この炉の上部からは深鉢形土器（第５図１）の破片が横位の状態で見受けられたが、これは炉の廃絶に関したなんらかの行為の可能性が考えられる。

（その他の施設）周溝内にピット３とピット７が存在する。ピット３は東側の入口部に存在し、径45×40、深さ７㎝を測る。ピット７は北東部に位置し、径46×32、深さ９㎝を測り、坑底部に20㎝大の板状の礫が置かれていたが、土器などの遺物は無く用途は不明である。

（時期）縄文時代中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）第５図１～３は深鉢形土器である。１は口辺部が簡略化された円筒形のもので、口縁部下に部分的

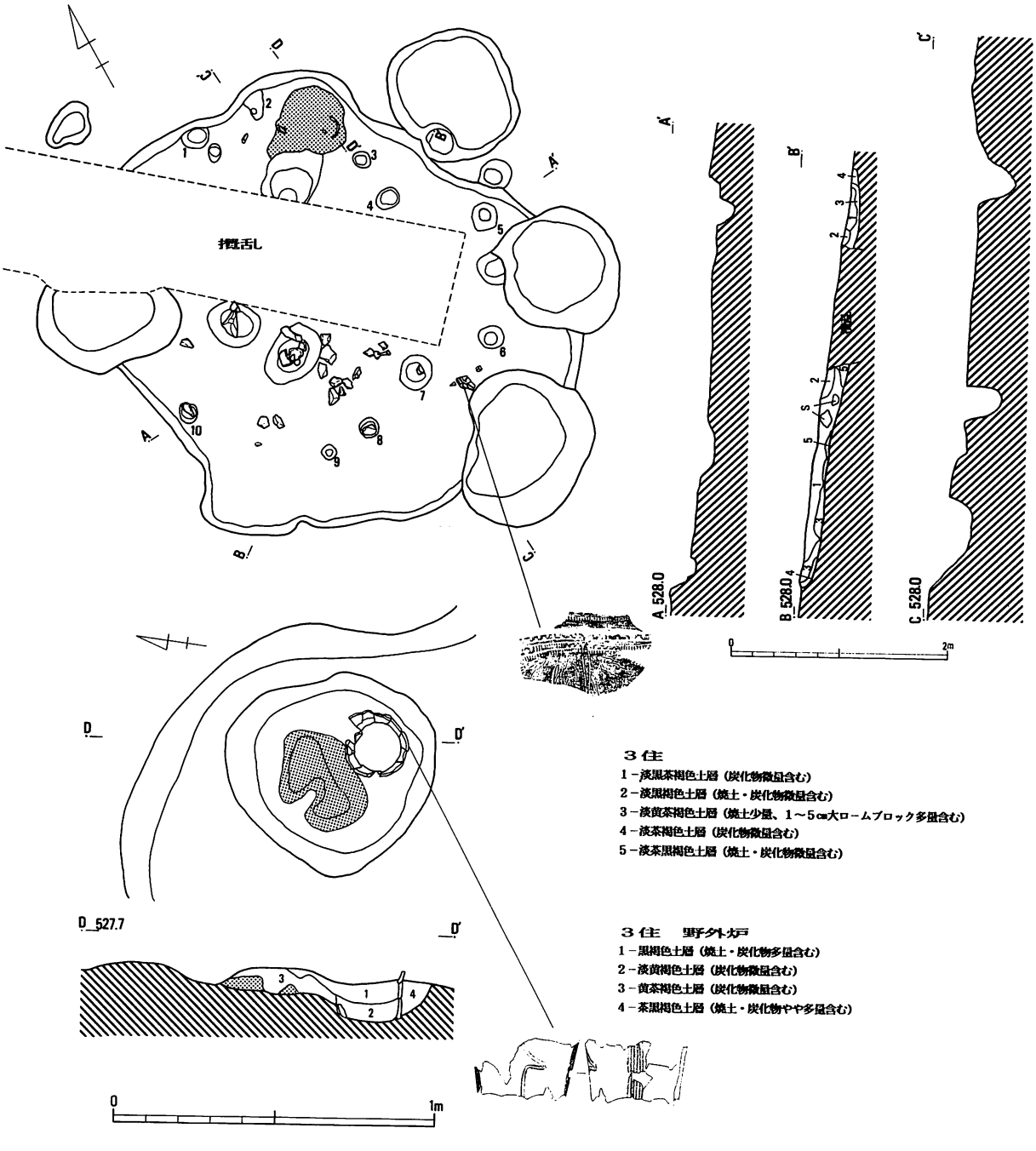


第５図　第１号住居跡出土土器

な擬隆帯が描かれ、連続爪形文や交互刺突文が見られる。胴部には集合沈線で縦に区画するように施されている。推定径24.0cm、推定器高36.5cm、底径12.4cmを測る。2は胴部であり、集合沈線によって格子目状の文様帯と交互刺突文、隆帯上に刻み目を付けたものが施されている。4～6は浅鉢形土器で、全て口縁部破片である。交互刺突文と押引き文がされている。石器では、第100図1に示した打製石斧が1点出土している。
(特殊遺物) 第115図32に示した土偶の左腰部分が出土している。詳細な点については、特殊遺物の土偶の項で扱うものとする。

第2号住居跡 (第4図)

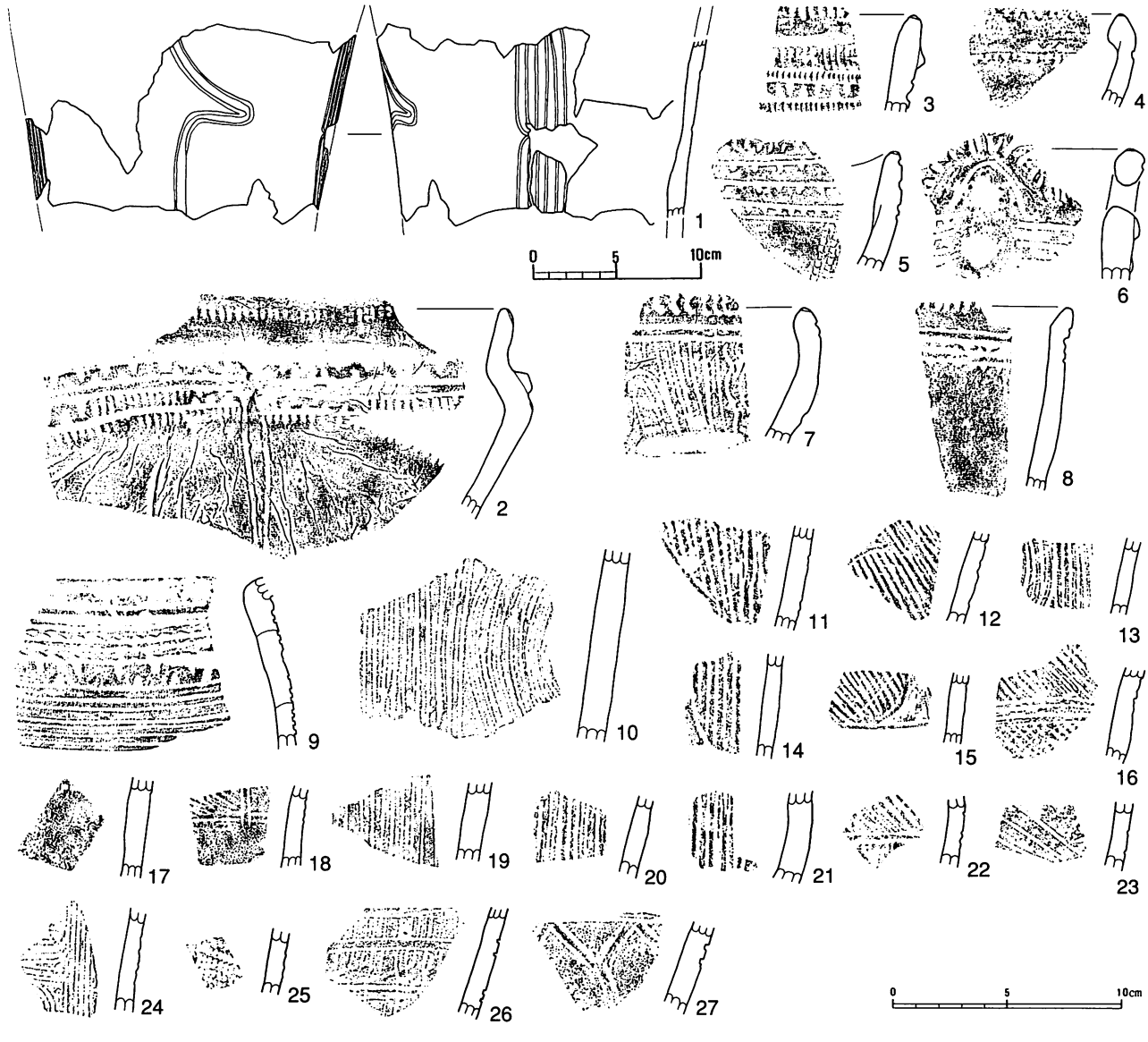
(位置) 調査区の東端、K－13・14グリッドに位置している。本住居跡の南東部は、竪穴状の遺構と共に第48号土坑と切り合う。居住域Aグループに所属している。
(重複・改築) 南東部分が竪穴状遺構と重複している。



第6図　第3号住居跡

（形態・規模）全体の１/４以上が調査区外に位置しており，形態は不明である。規模は現存値で、長径は2.22m、短径は1.07ｍを測る。
（壁・周溝）壁は、最大で約30㎝を測る。周溝は、現状では認めることができなかった。
（柱穴）認められなかった。
（炉）認められなかった。
（時期）縄文時代中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式期。
（出土遺物）土器類が少量認められたが、図化できるようなものは存在しなかった。石器では、打製石斧（第100図２）が１点出土している。
（特殊遺物）覆土中より、土器片を加工して長楕円形のペンダント形にした未製品（第118図15）が１点出土している。これは錐状の工具で両サイドから穿孔しかけた跡が残っており、装身具として加工されたものと考えられる。

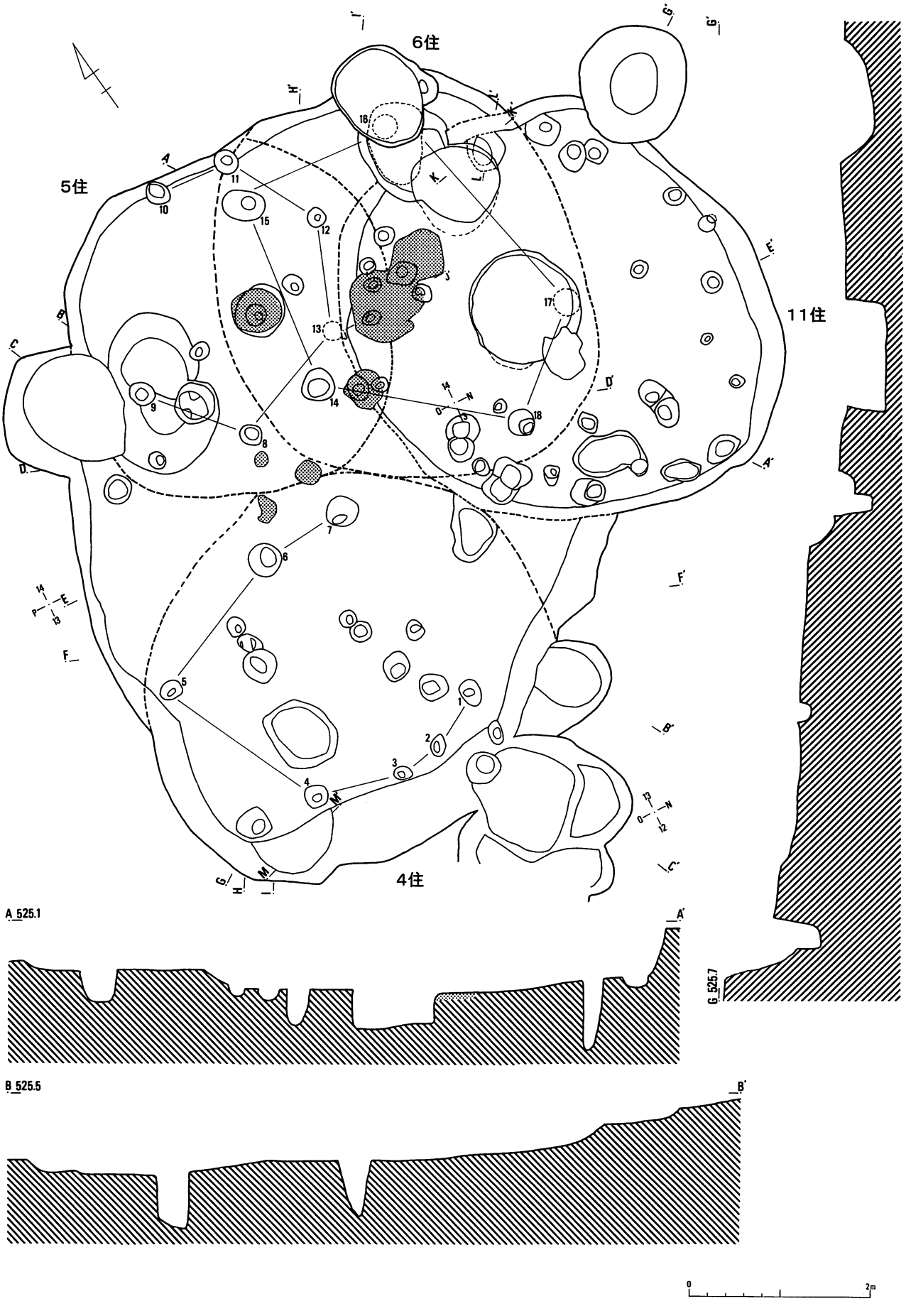
第３号住居跡（第６・７図）
（位置）調査区南端のＰ・Ｑ－11・12グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属している。
（重複・改築）なし。



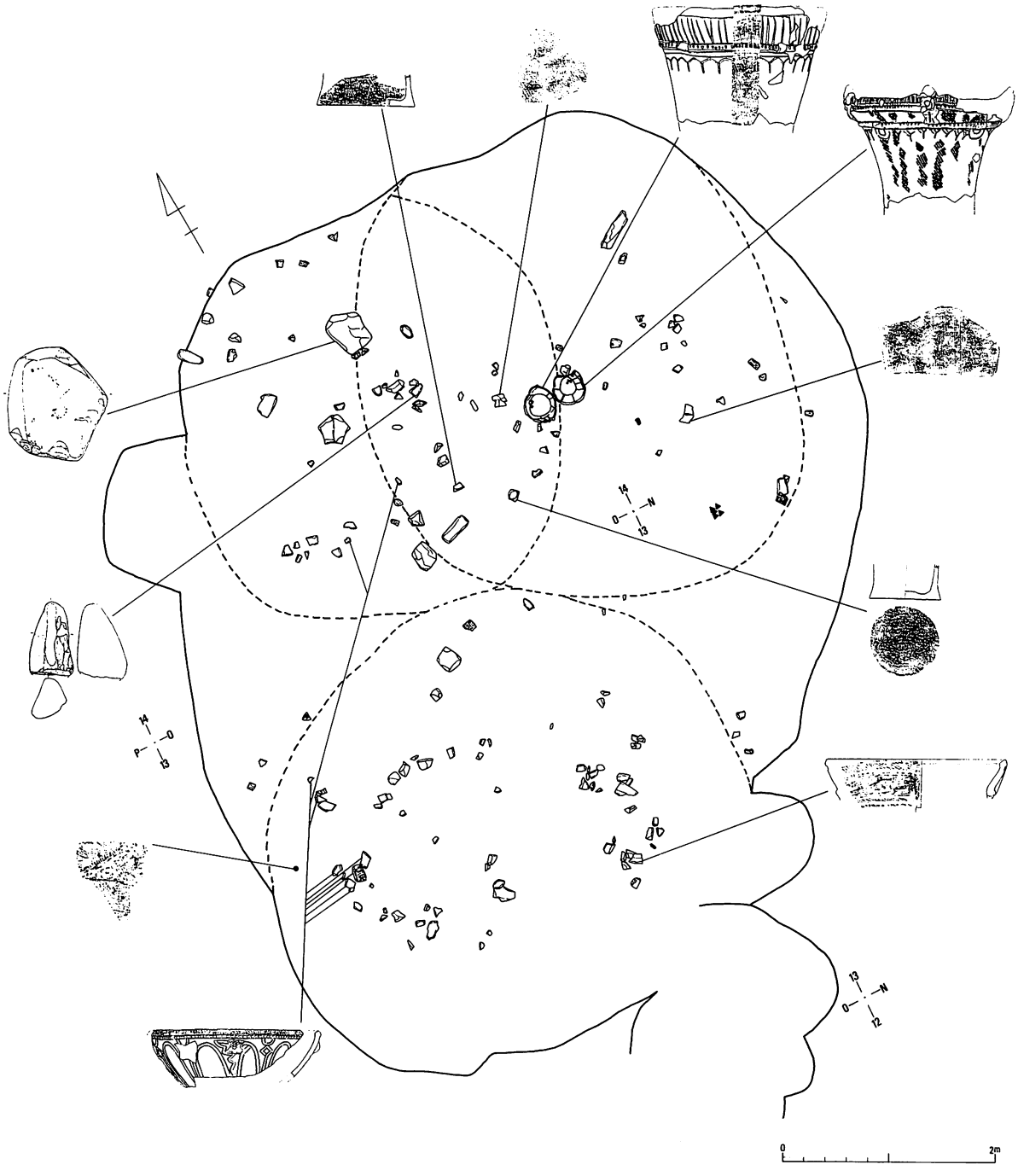
第７図　第３号住居跡出土土器

（形態・規模）形態は不整円形を呈している。規模は長径4.75m、短形3.95mを測る。中央付近で試掘調査時のトレンチ設定に伴った攪乱が東西方向に見られる。
（壁・周溝）壁の立ち上がりは緩やかで、全体的にあまり良く残っていないが、最深部で11cmを測ることができる。周溝は認められなかった。
（柱穴）柱穴は北側では壁に沿って存在し、主柱穴および補助柱穴を含めた総数は11本である。各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1は径25×20、深さ9cm、ピット2は径28×15、深さ14cm、ピット3は径19×15、深さ14cm、ピット4は径23×18、深さ14cm、ピット5は径27×24、深さ16cm、ピット6は径23×23、深さ20cm、ピット7は径32×30、深さ35cm、ピット8は20×18、深さ12cm、ピット9は径15×13、深さ13cm、ピット10は径20×17、深さ8cm、ピット11は径15×12、深さ7cmを測る。
（炉）北壁に沿った部分のピット2とピット3の間に、深鉢形土器を伴った埋甕炉（第7図1）が認められる。形態は不整がかった円形を呈しており、炉の掘り方は径64×62cmで、深さは11cmを測る。焼土の広がりは、33×22cmの範囲で濃密に認められる。
（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。
（出土遺物）第7図1～27に示したものは、全て深鉢形土器である。時期的には前期末段階に含まれる11～15があり、雲形に区画した中を集合沈線で充填し、空白部を抉るものがある。前述以外のものは中期初頭段階であり、1は炉体土器として利用されていたもので、胴部に集合沈線による区画状の文様と懸垂文がクランク状に近いものが施されている。この他、交互刺突文が施された2・3・8・9などがある。石器では、掻器3点（第94図1ほか）と、石鏃が2点（第92図1ほか）出土している。

第4号住居跡（第8～12図）
（位置）調査区南端のO－13グリッドに位置している。居住域Aグループに所属する。
（重複・改築）南側が第17号住居跡と切り合い、第5号住居跡に切られ、第6号住居跡を切る。
（形態・規模）形態は、第5号住居跡や第6号住居跡の切り合いの関係から明確にはできないが、柱穴の分布状況などから円形を呈しているものと考えられる。規模は推定で長径4.20m、短径4.00mを測る。本住居跡は東向きの斜面部に位置しているため、西側での掘り込みが深くなっている。入口は柱穴の配列から東側と推定できる。
（壁・周溝）壁の立ち上がりは急で、また他の遺構の切り合い等から全体的にあまり良く残っていないが、最深部で43cmを測ることができる。周溝は認められなかった。
（柱穴）柱穴は北側では壁に沿って存在し、主柱穴および補助柱穴を含めた総数は7本である。各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1は径30×20、深さ32cm、ピット2は径25×18、深さ46cm、ピット3は径20×16、深さ47cm、ピット4は径28×27、深さ49cm、ピット5は径25×18、深さ29cm、ピット6は径37×36、深さ36cm、ピット7は径38×33、深さ66cmを測る。
（炉）プランの中央付近で、焼土の散った部分を認めることができたが、明確に炉として捉えられるものは発見できなかった。
（その他の施設）プラン南側で、土坑状の張り出しが認められ、第12図1・28に示したような遺物が出土した。
（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。
（出土遺物）第12図1は浅鉢形土器で、推定径32.7cmを測る。口唇部外面に縄文、押し引きによる連続爪形文、胴部にはY字や逆U字文が描出され、口縁部には退化した橋状把手がある。2～7は口唇部に、15～17、19、20は胴部に、28は底部に縄文が施された一群で、9～14、24～27は集合沈線文が施された一群である。18、22、24は細線文と三角印刻文が施されたもので、五領ヶ台Ⅰ式と考えられる。21はくの字に内湾する口縁部で、縄文地上に無節の沈線文が施された前期末葉十三菩提式である。石器では、確実に共伴するものとして確認できたのは、第105図1の磨石1点である。本住居跡は切り合いが激しく伴出関係が捉えにくいが、確実に伴うものとしては、第111図1に示した石皿がある。



第８図　第４・５・６・11号住居跡



第９図　第４・５・６号住居跡（1）

第５号住居跡（第８～12図）

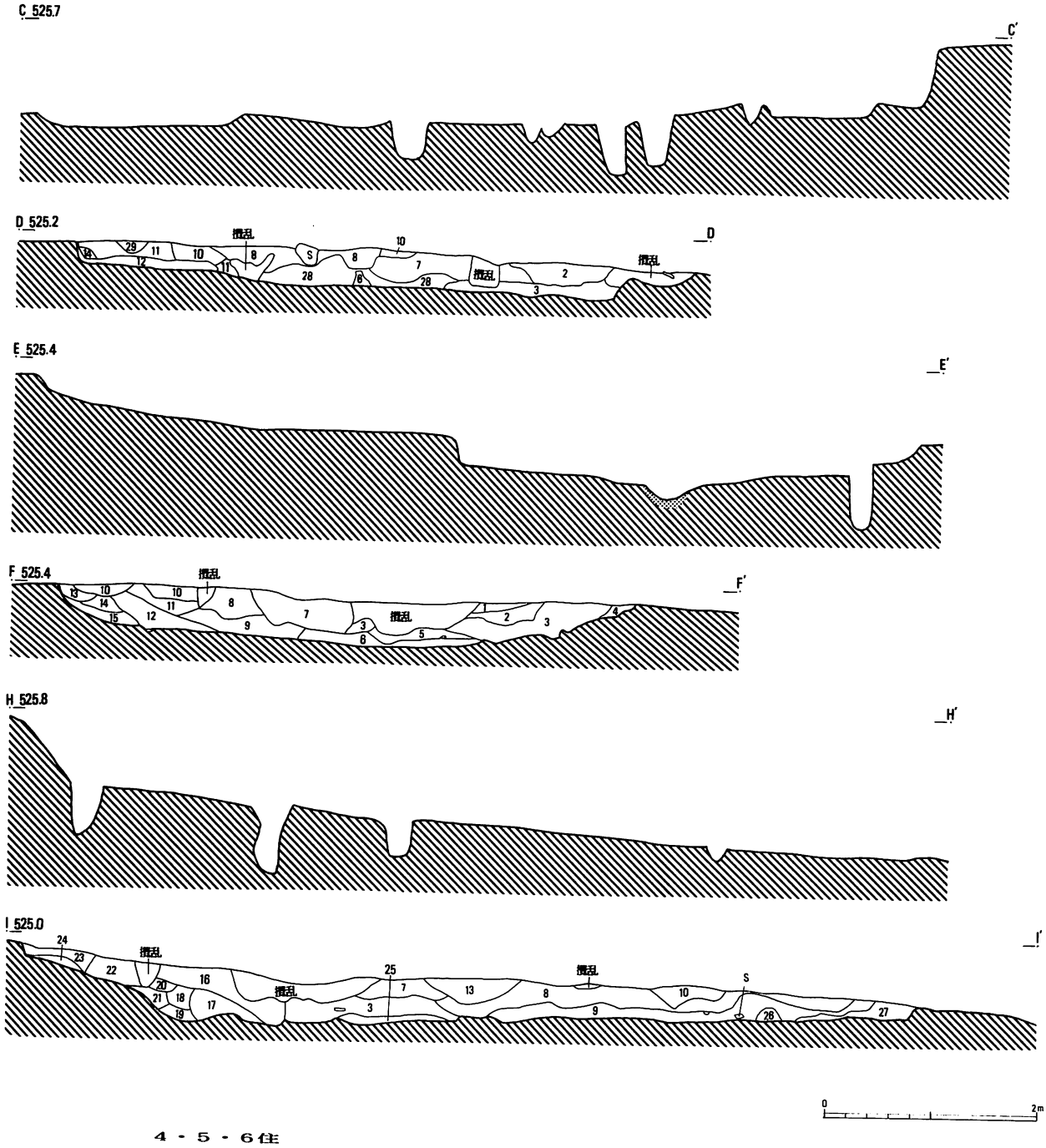
（位置）調査区南端のＯ－13・14グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。

（重複・改築）第４・６号住居跡を切る。

（形態・規模）形態は、第４号住居跡や第６号住居跡の切り合いの関係から明確にはできないが、柱穴の分布状況などからほぼ円形を呈しているものと考えられる。規模は、推定で長径4.30ｍ、短径3.80ｍを測る。入口は柱穴の配列状況と炉の位置から、北側と考えられる。

（壁・周溝）壁の立ち上がりは緩やかである。他の遺構の切り合い等で、壁は南側と北東側の一部が残るのみである。西壁で10㎝、北壁で１～３㎝を測る。周溝は認められなかった。

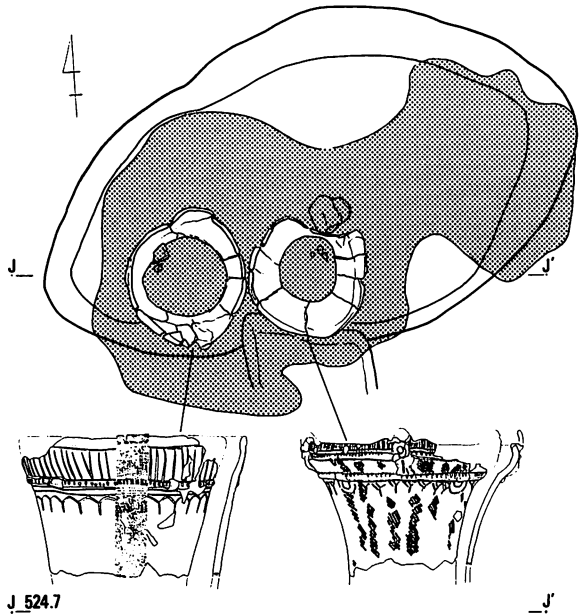
（柱穴）主柱穴および補助柱穴を含めた総数は６本で、各ピットの規模は以下のとおりである。ピット８は径24×22、深さ34㎝、ピット９は径27×22、深さ16㎝、ピット10は径28×23、深さ39㎝、ピット11は径21×21、深さ22㎝、ピット12は径27×25、深さ17㎝、ピット13は第６号住居跡との切り合い関係で規模は不明である。

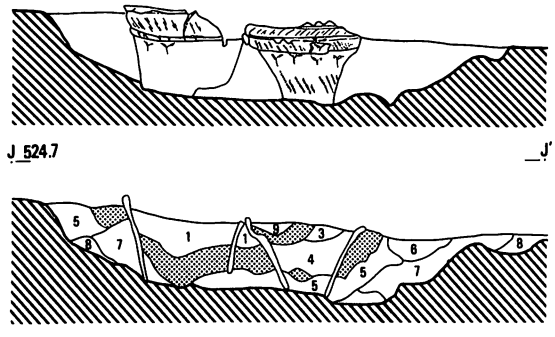


4・5・6住

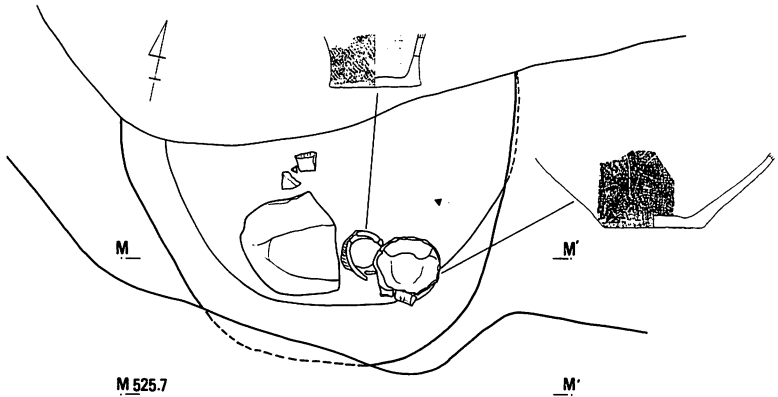
1－黒褐色土層
2－淡黒茶褐色土層（焼土微量含む）
3－淡黒茶褐色土層（炭化物微量含む）
4－淡茶褐色土層（ローム粒子多量含む）
5－茶褐色土層
6－砂質淡暗黄褐色土層（焼土微量含む）
7－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
8－黒茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
9－砂質淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
10－黒茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
11－黒茶褐色土層
12 淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
13－暗茶黒褐色土層（ローム粒子多量含む）
14 明茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
15－明茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
16－暗褐色土層（焼土微量含む）
17－暗褐色土層（焼土・5㎜大ローム ブロック少量含む）
18－暗褐色土層
19－黒褐色土層（10㎝大ローム ブロック少量含む）
20－暗黄褐色土層
21－暗黄褐色土層（5㎜大ローム ブロック微量含む）
22－砂質黒褐色土層
23－砂質黄褐色土層
24－黄褐色土層（黒褐色土少量含む）
25－黄褐色土層
26－暗黄褐色土層（焼土微量含む）
27－黄褐色土層（焼土微量含む）
28－黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
29 砂質黒褐色土層

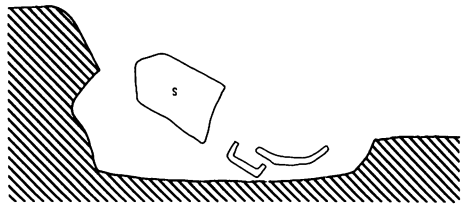
第10図　第４・５・６号住居跡（2）

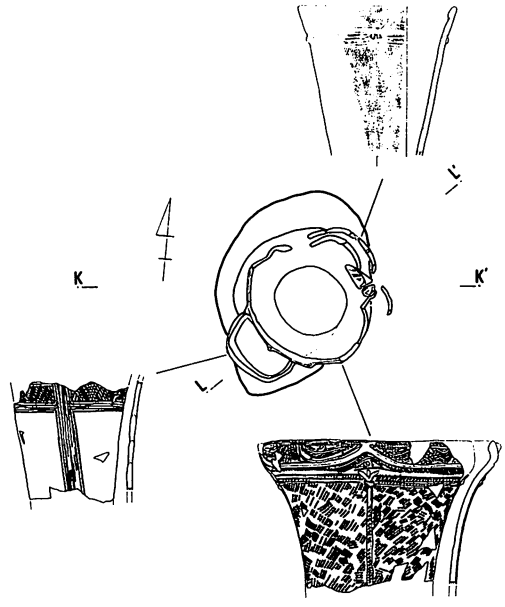


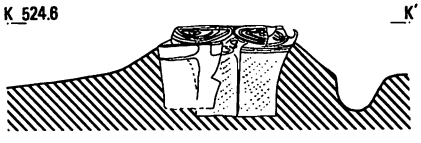


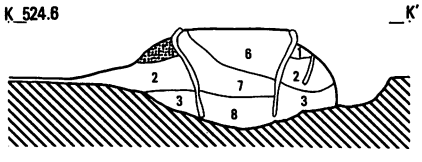
6住　埋甕炉
1－黒褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
2－淡黄褐色土層（焼土少量含む）
3－淡黒褐色土層（焼土・炭化物少量、ローム粒子多量含む）
4－淡黄茶褐色土層（炭化物微量含む）
5－淡茶黒褐色土層（炭化物少量、ローム粒子多量含む）
6－淡黒茶褐色土層（ローム粒子多量含む）
7－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物やや多量、ローム粒子多量含む）
8－淡黒褐色土層（焼土・炭化物やや多、ローム粒子多量含む）
9－黒茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）

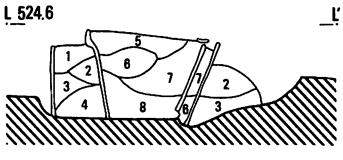




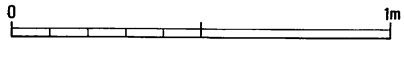




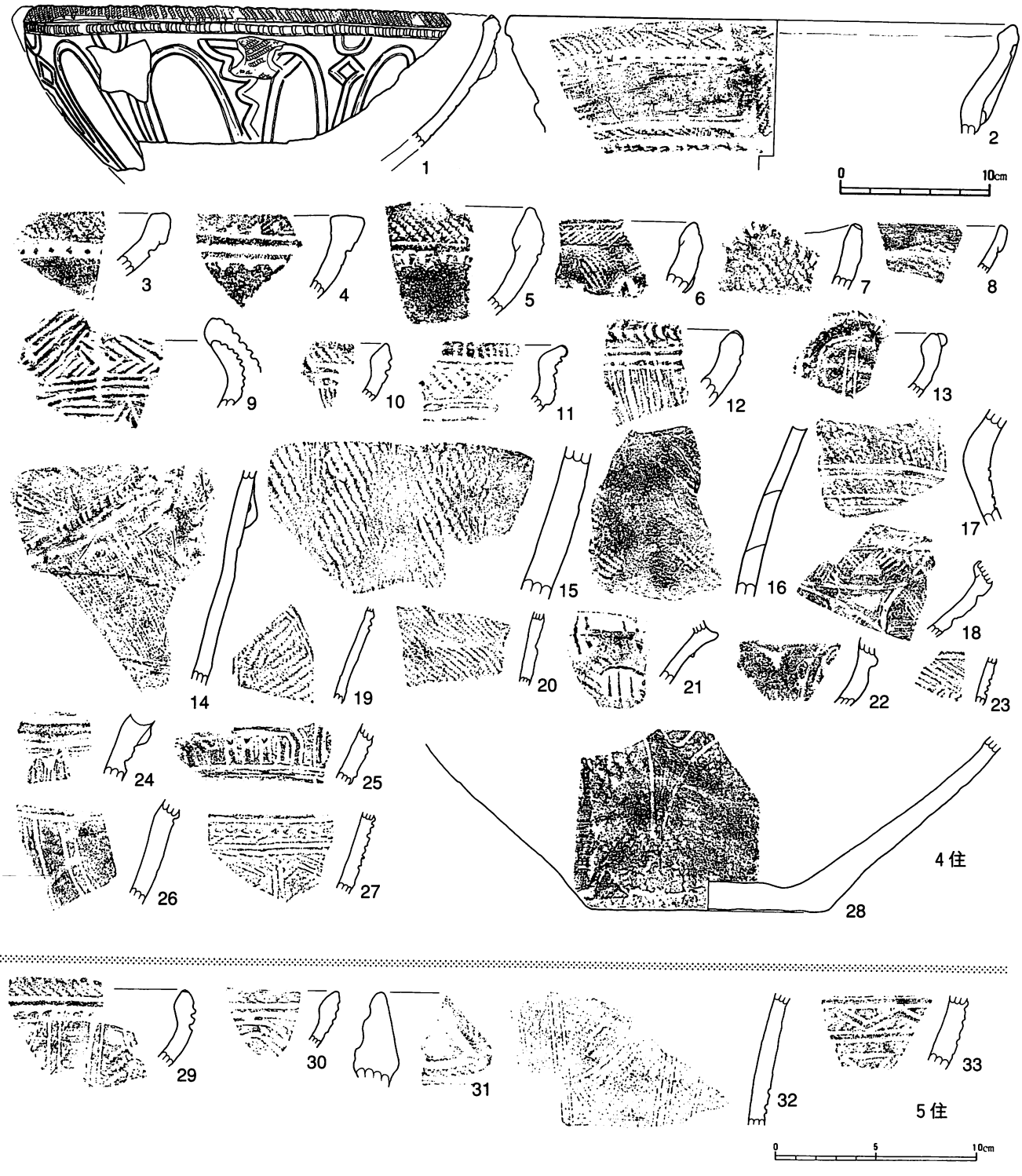




6住　埋甕
1－黒褐色土層（2㎜大ロームブロック・灰白色粘土多量含む）
2－淡黒茶褐色土層（ローム粒子・5㎜大ロームブロック多量含む）
3－淡茶褐色土層（2㎝大ロームブロックやや多量含む）
5－黒褐色土層（炭化物少量含む）
6－淡黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
7－淡茶黒褐色土層（炭化物微量、ローム粒子多量含む）
8－淡黄褐色土層　（焼土多量含む）



第11図　第６号住居跡

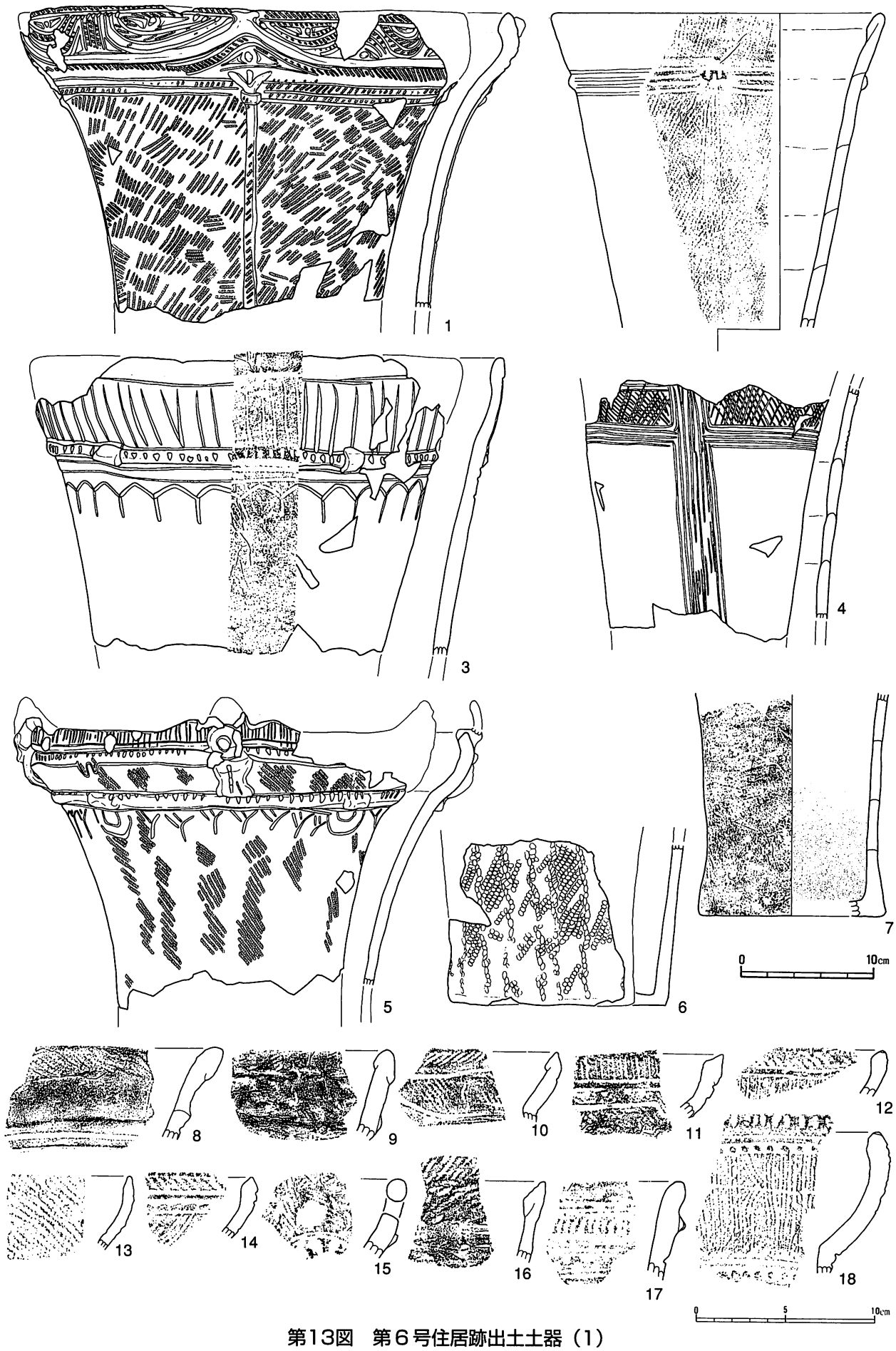


第12図　第４・５号住居跡出土土器

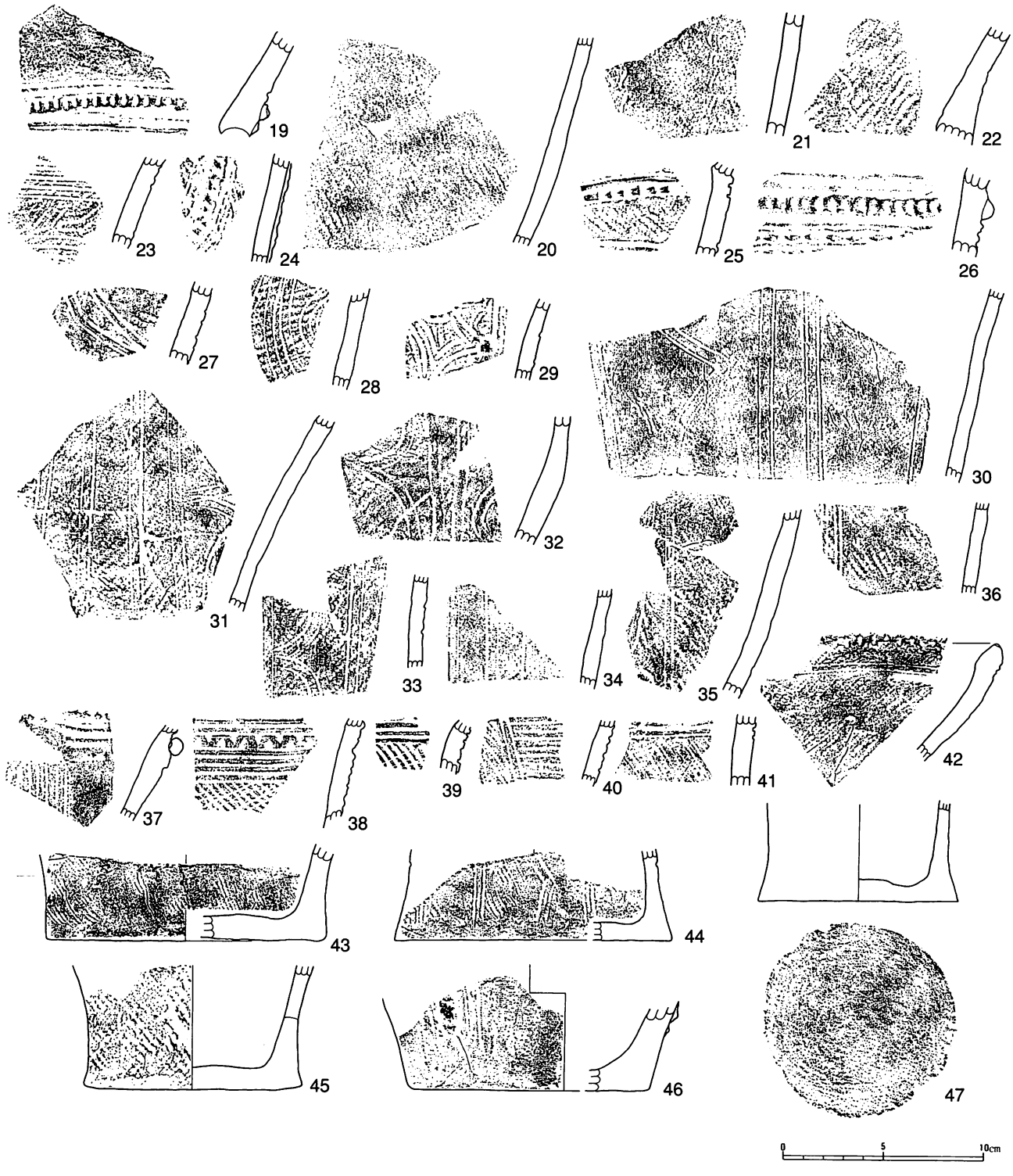
（炉）プランの中央東寄り付近で、柱穴状の円形プランに焼土が集中した地床炉を認めることができた。規模は径60×50、深さは130cmを測る。

（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）伴出関係が窺えるものはとても少なく、図示できたものには第12図29～33がある。縄文が施された29～32、横位の並行沈線と鋸歯状の沈線が施された33がある。第４号住居跡同様切り合いが激しく伴出関係を捉えにくく、確実なものとしては、図示されてはいないが磨石２点がある。



第13図　第６号住居跡出土土器（1）



第14図　第６号住居跡出土土器（2）

第６号住居跡（第８～11、13・14図）

（位置）調査区南端のＮ・Ｏ－13・14グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。

（重複・改築）第４・５号住居跡に切られ、第11号住居跡を切る。炉の状況から改築が一回行われたものと考えられる。

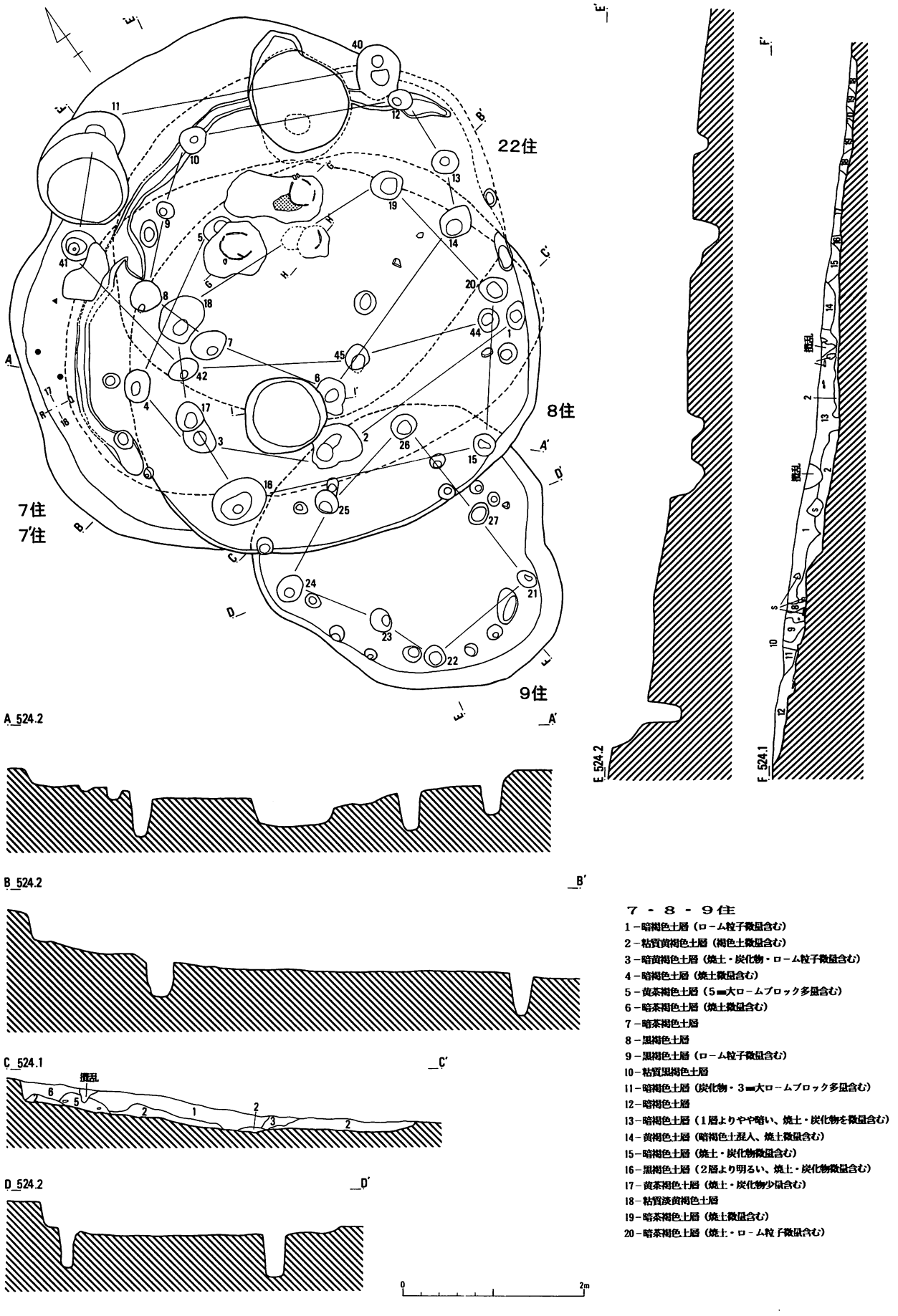
（形態・規模）形態は、遺構の切り合いの関係から明確にはできないが、柱穴の分布状況などからほぼ円形を呈しているものと考えられ、規模は推定径4.60ｍを測る。入口は、柱穴の配列状況と埋甕の位置的関係から東側と考えられる。

（壁・周溝）壁の立ち上がりは緩やかで、他の遺構の切り合い等からほとんど残っていない南壁で25㎝、北壁か

ら東壁にかけては１～13cmを測ることができる。周溝は認められなかった。
（柱穴）柱穴は第７号住居跡と重複する部分については、遺構面上に本住居跡が構築されたため、確認作業が困難を極めた。主柱穴は５本であり、各ピットの規模は以下のとおりである。ピット14は径40×37、深さ47cm、ピット15は径47×33、深さ36cm、ピット16は径91×60、深さ76cm、ピット17は土坑と切り合うため不明、ピット18は径32×22、深さ87cmを測る。
（炉）プランの中央付近で埋甕炉が２箇所確認できたが、切り合い関係から西側に位置しているものが東側に位置しているものより古い段階に構築されている。焼土の広がりは全体では、137×55cmの範囲で分布している。６住（古段階）に伴うものは、径80×70、深さ28cmの掘り方に深鉢形土器の胴上部（第13図３）が埋設されている。６住（古段階）に伴うものは、径60×50、深さ20cmの掘り方に同じく、深鉢形土器の胴上部（第13図５）が埋設されている。
（その他の施設）東側入口部に埋甕が認められた。埋甕は径65×40cm、貼り床からの深さは23cmを測る掘り方を持ち、合計３個体分の深鉢形土器が発見された。南側（第13図４）と北側（第13図２）から正位で出土した胴部破片で、中央部分に正位で埋設された胴上部の個体資料（第13図１）は前述のものを破壊して造られている。よって、三回程度の造り直しが確認できるが、土器の時期が五領ヶ台Ⅱ式であることから、本住居跡には伴わない可能性があり、単独遺構の可能性が示唆される。
（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅰ式期。
（出土遺物）切り合い関係が激しい本住居跡周辺の中では、最も遺物の出土量が多い住居跡である。第13図１は平縁の深鉢形土器で、径が33.5cmを測る。口縁部文様帯は、弧状の隆帯によって四単位に区画され、この区画文内は沈線でさらに区画されて玉抱き三叉文が施されている。弧状に区画された隆帯の接点の下にも玉抱き三叉文があり、その下部にはＹ字状に垂下する隆帯がある。２は口縁部が省略されてラッパ状に開く円筒形のもので、推定径25cmを測る。口唇部が内側へ折り返されており、若干肥厚している。縄文地で、口縁部下には横位の並行沈線が、また四分割する部分には豚鼻状の貼付文、その下部には三条の沈線が垂下し、内部には輪積み痕が残る。３は径が32.5cmを測る深鉢形土器で、口縁部文様帯が縦位の沈線だけの退化して簡略化されたもので、胴上部に『Ｙ』字文が連続している。全体的に細かい縄文が充填され、口辺部下には四単位の橋状把手状の貼り付けがある。４は横位の並行沈線文に区画された中に格子文が、また縦位の集合沈線によって四単位に区画されている。５は口径31.5cmを測る深鉢形土器で、波状口縁を持ち、その波頂部下には円形貼付文と橋状把手がある。口唇部に縦位に細線が施され、口辺部下には『Ｙ』字状文が横位に連続し、波状部間には半円の文様が沈線で施されている。６は無文の底部で、底径14cmを測り、内面には炭化物が付着している。他のものは、11の浅鉢形土器を除く、他のものすべては深鉢形土器である。石器では、前述と同様の遺構切り合い関係であるため、確実なものとして第92図４・６・８の石鏃３点、第105図２・３・５の磨石が３点、第100図３の打製石斧が１点認められるに過ぎない。
（特殊遺物）土偶の腹部が覆土上層から１点（第115図31）と、このほか不明粘土塊が１点存在するが器種が明確にできないため、ここでは図示しなかった。

第７号住居跡（第15・18図）

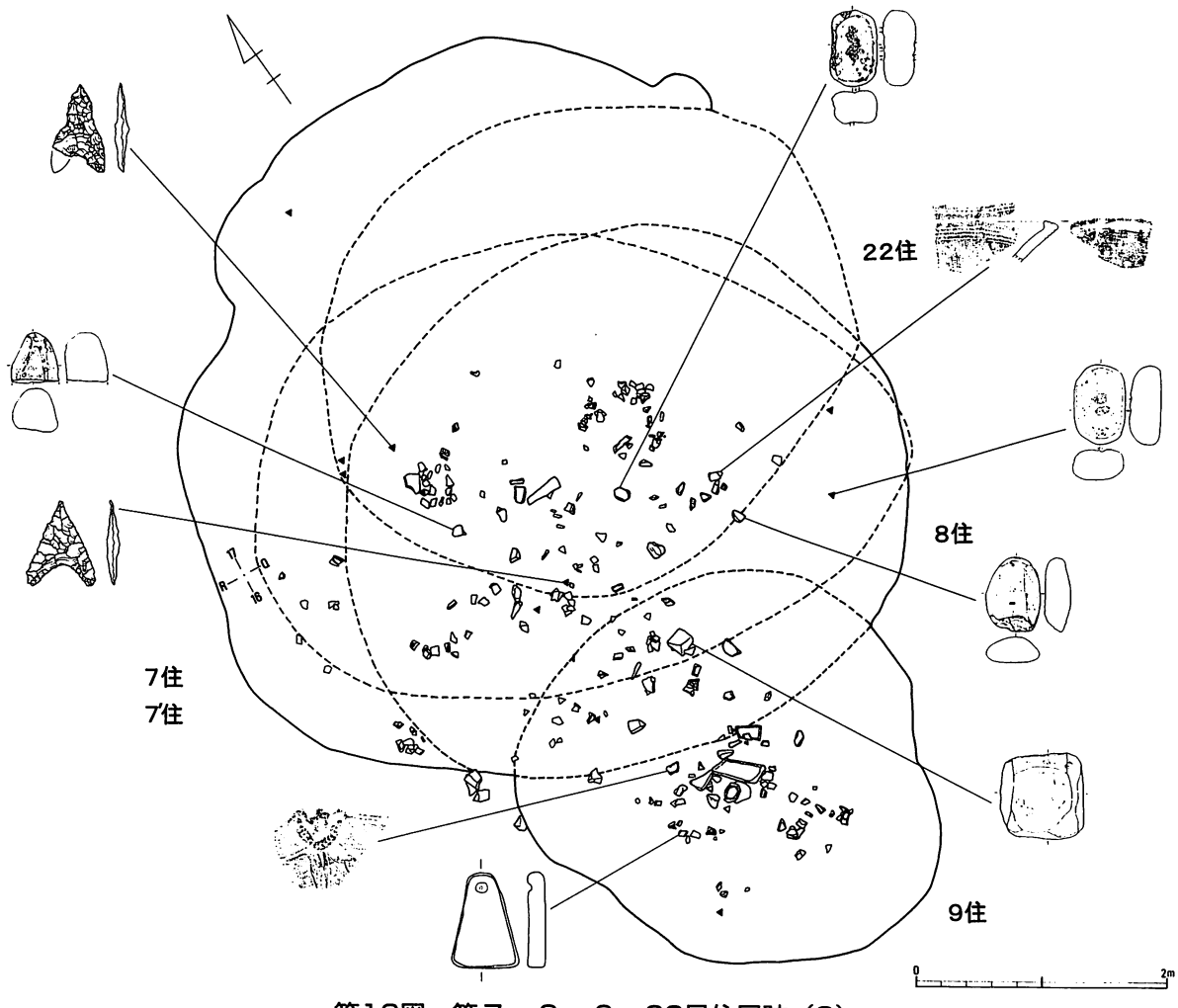
（位置）調査区南東端のＰ・Ｑ－16・17グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。
（重複・改築）第９号住居跡を切り、第８号住居跡に切られる。第28号住居跡と切り合うが新旧関係は不明である。改築は一回である。
（形態・規模）形態は、第８号住居跡や第28号住居跡の切り合いの関係から明確にはできないが、柱穴の分布状況などから東西方向に長い楕円形を呈しているものと考えられる。規模は、改築前では推定で長径4.50m、短径3.70mを、改築後では長径5.50m、短径5.00mを測る。入口は柱穴の配列から東側と推定できる。
（壁・周溝）壁は北東向きの斜面に位置していることと、遺構の切り合いが多かったため、南東側のみ認められ、立ち上がりはやや急である。周溝は改築前のプラン北側部分のみ認めることができ、幅10～18、深さ１～５cm



7・8・9住

1－暗褐色土層（ローム粒子微量含む）
2－粘質黄褐色土層（褐色土微量含む）
3－暗黄褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子微量含む）
4－暗褐色土層（焼土微量含む）
5－黄茶褐色土層（5㎜大ロームブロック多量含む）
6－暗茶褐色土層（焼土微量含む）
7－暗茶褐色土層
8－黒褐色土層
9－黒褐色土層（ローム粒子微量含む）
10－粘質黒褐色土層
11－暗褐色土層（炭化物・3㎜大ロームブロック多量含む）
12－暗褐色土層
13－暗褐色土層（1層よりやや暗い、焼土・炭化物を微量含む）
14－黄褐色土層（暗褐色土混入、焼土微量含む）
15－暗褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
16－黒褐色土層（2層より明るい、焼土・炭化物微量含む）
17－黄茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
18－粘質淡黄褐色土層
19－暗茶褐色土層（焼土微量含む）
20－暗茶褐色土層（焼土・ローム粒子微量含む）

第15図　第7・8・9・22号住居跡（1）



第16図　第７・８・９・22号住居跡（2）

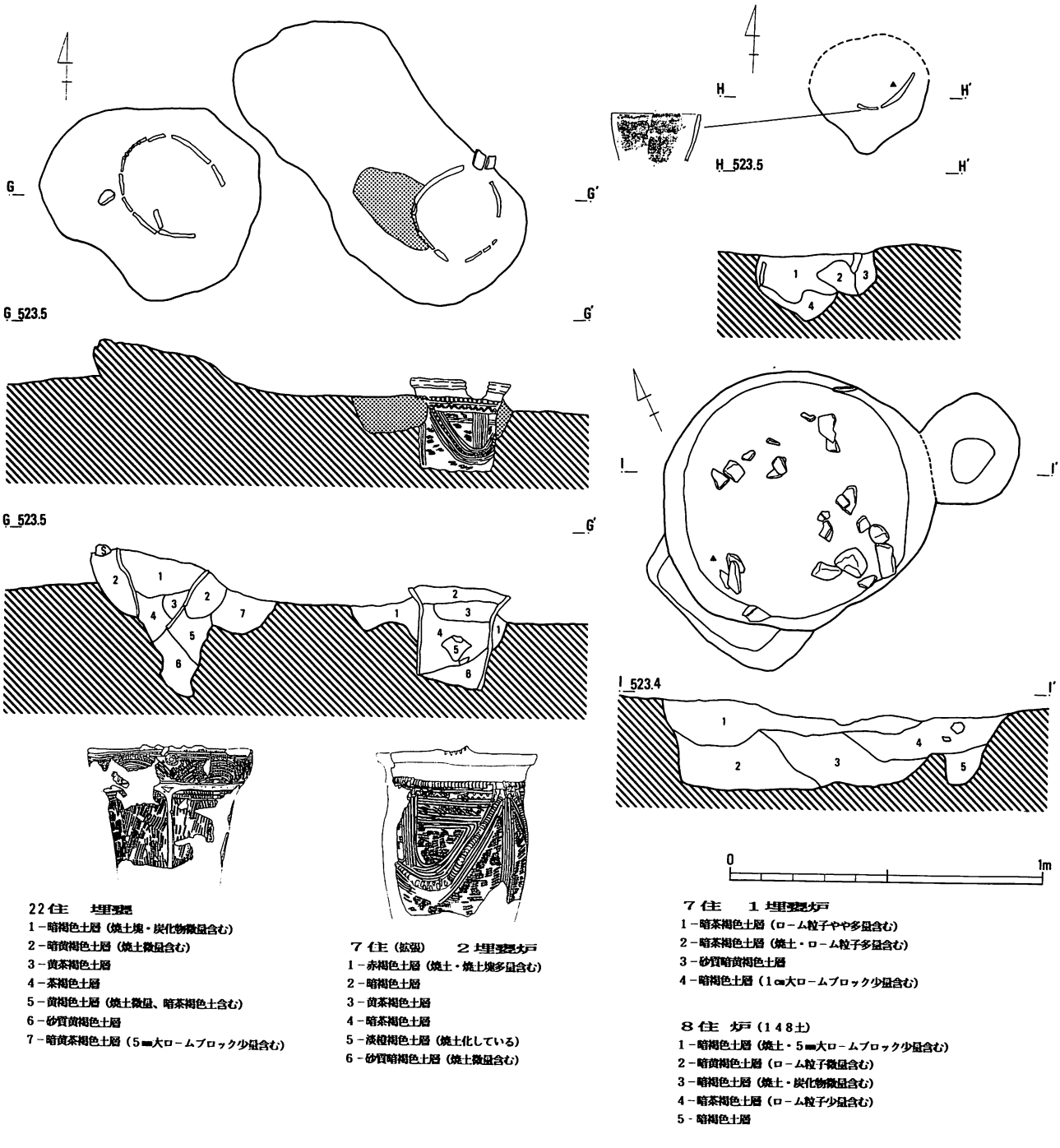
を測ることができる。

（柱穴）柱穴は改築前、改築後を合わせた主柱穴および補助柱穴の総数は15本である。各ピットの規模は以下のとおりである。改築前のものでは、ピット７が径40×28、深さ47cm、ピット８は径33×32、深さ47cm、ピット９は径19×17、深さ19cm、ピット10は径30×25、深さ16cm、ピット12は径30×25、深さ46cm、ピット13は径40×30、深さ43cm、ピット14は径53×40、深さ42cm、ピット45は径32×25、深さ30cmを測る。改築後ではピット11は径70×55、深さ48cm、ピット40は径60×48、深さ38cm、ピット41は径40×33、深さ44cm、ピット42は径35×22、深さ50cm、ピット43は径43×32、深さ32cm、ピット44は径28×23、深さ10cmを測る。

（炉）プランの中央東寄り付近で、２基の埋甕炉が認められ、やや南側に位置している第１号埋甕炉が改築前に伴うもので、第２号埋甕炉が改築後に伴うものである。規模は第１号埋甕炉では径40×30、深さ40cmの掘り方の中に、深鉢形土器の口縁部（第17図２）が埋設されている。第２号埋甕炉では焼土が105×50cmで広がり、掘り方が径60×60、深さ27cmを測り、深鉢形土器の胴上半部（第17図１）が埋設されていたが、土器周辺部分は焼土がブロック化していた。

（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）第18図１は胴部が膨らむタイプのもので、その胴部分には縦位に集合沈線によって二単位に分活され、区画部分内は隆帯上に爪形文が配された波状文が施され、口径は31cmを測る。２は口縁部が広がり、口唇部がコの字状に整形された無文のもので、口径は推定で約14cmを測る。第18図に示したものは、すべて深鉢形土器で、縄文系と沈線文系土器群の混在が指摘でき、大方のものはⅡ式に位置付けられるが、同一時期のものではなく、時間差が感じられるものが含まれていることから切り合い関係の中で混入していったものと考えられる。石器では、掻器２点（第94図11・12）と、石鏃と磨石（第105図６）が各１点出土している。



第17図　第７号住居跡　埋甕炉・第８号住居跡　炉・第22号住居跡　埋甕（2）

第８号住居跡（第15～17・19図）

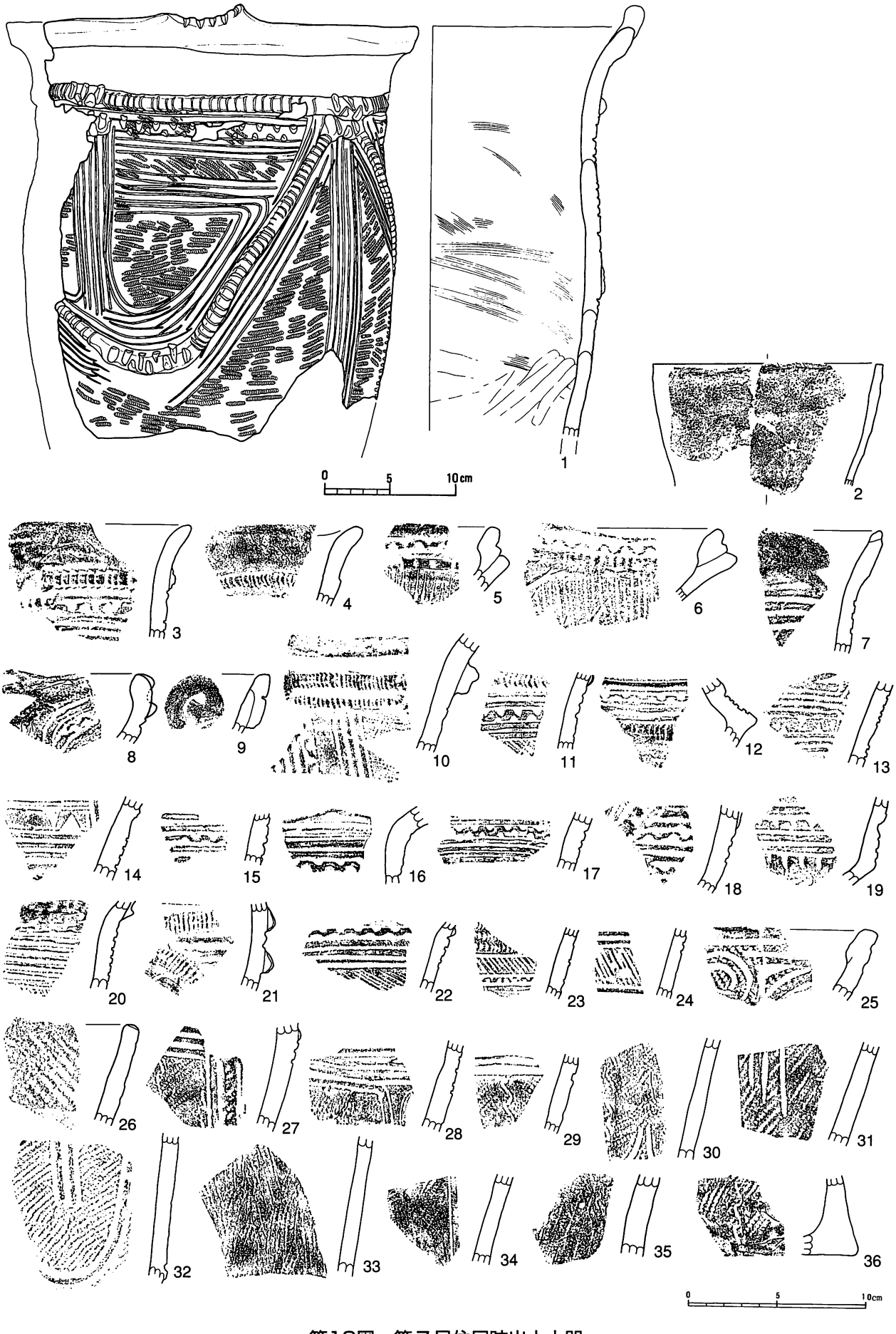
（位置）調査区南東端のＰ・Ｑ－16・17グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。

（重複・改築）第７・９号住居跡を切っている。第28号住居跡と切り合うが新旧関係は不明である。

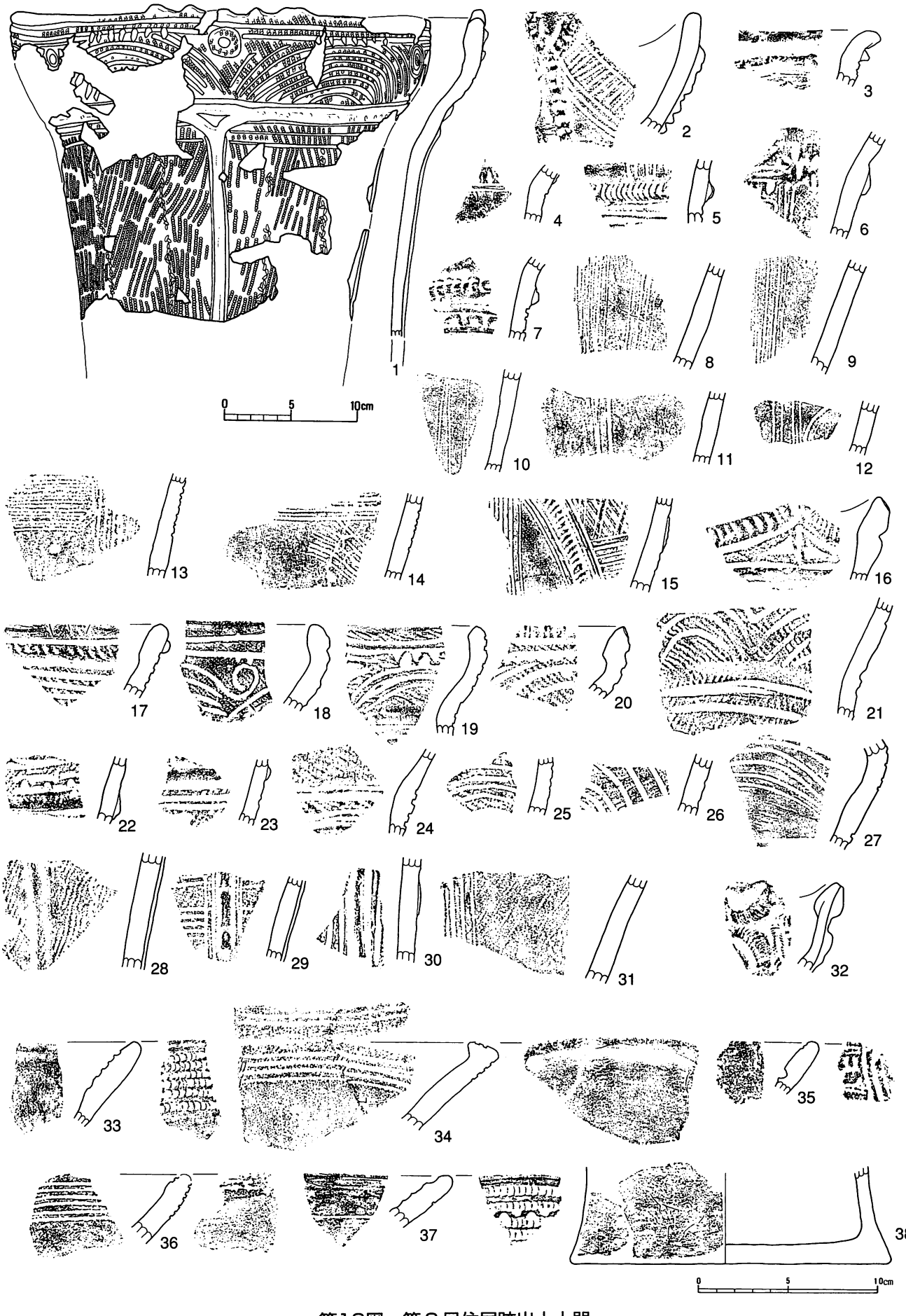
（形態・規模）形態は、第７・９号住居跡や第28号住居跡の切り合いの関係から明確にはできないが、柱穴の分布状況などから東西方向に長い楕円形を呈しているものと考えられる。規模は推定で長径4.65ｍ、短径4.00ｍを測る。入口は炉の位置と柱穴の配列から東側と推定できる。

（壁・周溝）壁は北東向きの斜面に位置していることから、南側のみ認められ、立ち上がりはやや急である。周溝は改築前のプラン北側部分のみ認めることができ、幅10～18、深さ１～５㎝を測ることができる。

（柱穴）主柱穴および補助柱穴の総数は６本である。各ピットの規模は以下のとおりである。ピット15が径24×23、深さ35㎝、ピット16は径60×47、深さ45㎝、ピット17は径33×32、深さ39㎝、ピット18は径53×40、深さ



第18図　第７号住居跡出土土器

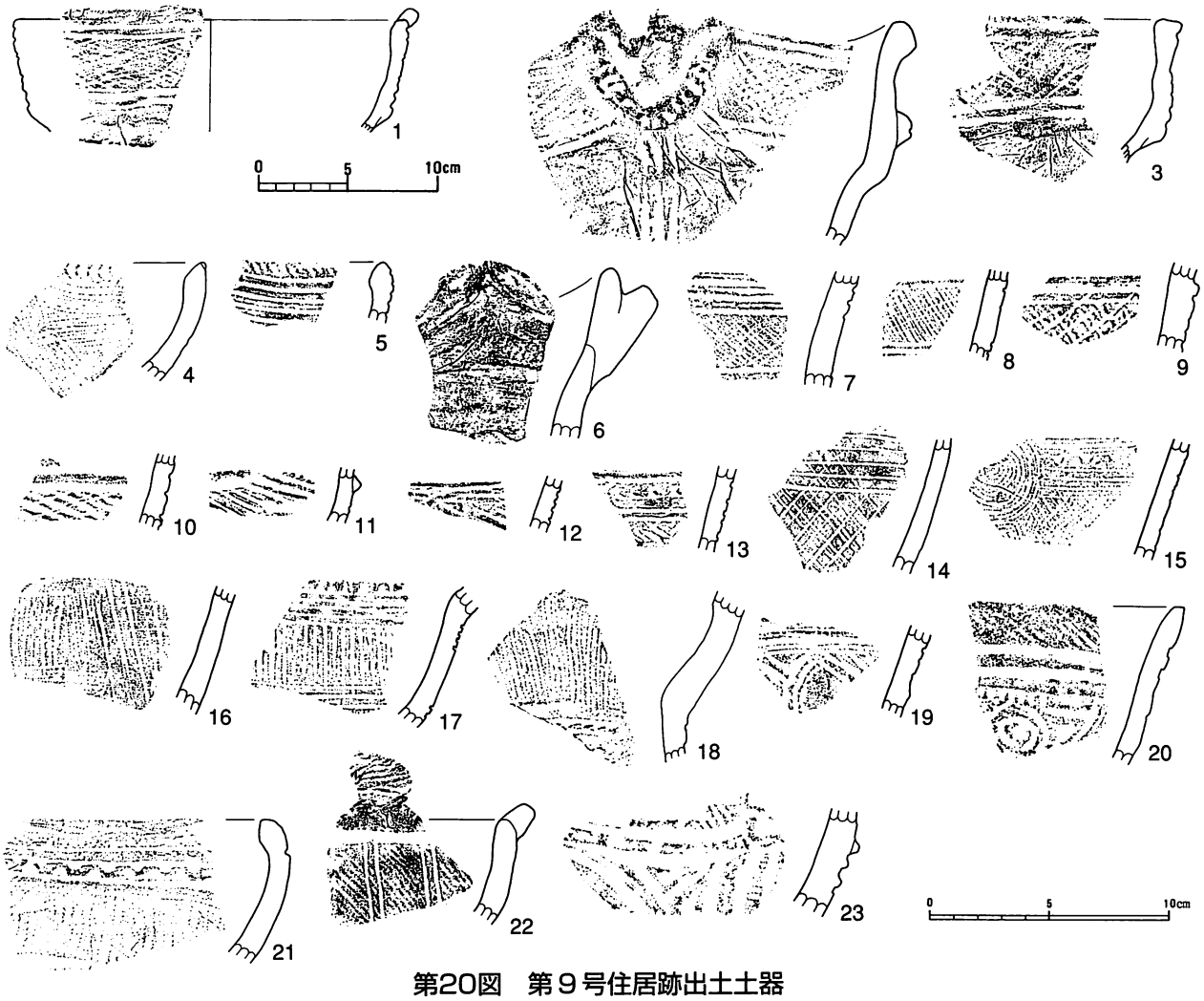


第19図　第８号住居跡出土土器

42㎝、ピット19は径38×32、深さ42㎝、ピット20は径32×27、深さ42㎝を測る。
(炉) プランの西寄り付近で、土坑状（148土）のプランを持った地床炉が認められた。掘り方の規模は径90×85、深さ66㎝を測る。坑内には、土器片及び土器小破片が混入していた。
(時期) 縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。
(出土遺物) 第19図２～15は沈線文系で、２～７は爪形文が隆帯上に施された一群で、８～15は縦位や横位の集合沈線が施されている。16～31は縄文系で、交互刺突文、渦巻き状、三角印刻文、横位や弧状の沈線が施されている。32は色調が灰白色を呈しており、器厚が薄手の東海系土器群である北裏ＣⅠ式で、爪形文を施した隆線が巡っている。33～37は浅鉢形土器で、34と36以外は、内面に押し引きによる連続爪形文が施されるが、34は口唇部外面並びに上部に沈線文が施されている。本住居跡からは、多数の石器が出土している。その内訳は、石鏃14点（第92図9～14・15～18・19など)、掻器８点（第94図９・10・13～15、第95図16～18)、打製石斧７点（第100図４～６・８・10など)、磨石（第105図7～12など）10点、石皿・台石（第111図２）１点である。

第９号住居跡（第14・16・20図）
(位置) 調査区南東端のＱ－16グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。
(重複・改築) 第７・８・28号住居跡を切っている。
(形態・規模) 形態は、第７・８・28号住居跡との切り合いの関係から明確にはできないが、柱穴の分布状況などから南北方向に長い不整楕円形を呈している。規模は推定で長径3.50ｍ、短径3.10ｍを測る。入口は柱穴の配列から北側と推定できる。覆土はローム化が著しく、プラン確認が難航した。
(壁・周溝) 壁は北東向きの斜面に位置していることから南側のみに認められ、立ち上がりは緩やかで、最深部で約８㎝を測る。周溝は認められない。
(柱穴) 主柱穴と考えられるものが７本、壁沿いに巡る補助柱穴と考えられるものは12本である。各ピットの規模は以下のとおりである。主柱穴では、ピット21が径23×15、深さ７㎝、ピット22は径24×23、深さ67㎝、ピット23は径27×23、深さ51㎝、ピット24は径30×26、深さ42㎝、ピット25は径27×23、深さ51㎝、ピット26は径28×24、深さ44㎝、ピット27は径24×20、深さ42㎝を測る。補助柱については、径は15～20㎝、深さは15～30㎝程度の規模を持つものが多い。
(炉) プランのほぼ中央付近のすり鉢状に窪んだ地点で径15～35㎝大の礫が集中し、この部分で焼土や炭化物が若干認められることから、地床炉と考えられる。掘り方は認められなかったが、炉の規模は径65×60を測る。また覆土の上層から約50㎝大の礫が認められ、本住居跡の廃絶後に何らかの行為のために設置されたものか、もしくは土層の断面からは確認できなかったが、土坑などの遺構が廃絶後に造られた可能性がある
(時期) 縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅰ式期。
(出土遺物) 遺物は北側の斜面下に隣接する遺構との切り合い関係から、遺構外へ流出しているようで少なかった。本住居跡の時期については、床面直上に近い部分から出土した第20図１～３といったものを標識とした。１～３はほぼ直に立ち上がる口縁部で、口唇部が外反するのが特徴で、この下部には並行沈線によって区画される文様帯があり、格子目文が施される。２は波頂部に爪形文を施した隆線がＵ字状に描出され、その下部に縦位の沈線が垂下する。10～12は格子目文が施された胴部、19は横位の並行沈線下にＹ字状文が施される。前述以外のものは隣接遺構に関連するものと考えられ、該期以降のものである。石器では、打製石斧（第100図７・９ほか）３点、磨石（第105図13・第110図60ほか）５点が認められる。
(特殊遺物) 第118図14に示した二等辺三角形の土製垂飾と考えられる未製品が１点出土している。これは土器片を利用したもので、錐状の工具で一方側から穿孔しかけた跡が残っており、装身具として加工されたものと考えられる。

第10号住居跡（第21～23図）
(位置) 調査区南東端のＯ・Ｐ－14・15グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。



第20図　第９号住居跡出土土器

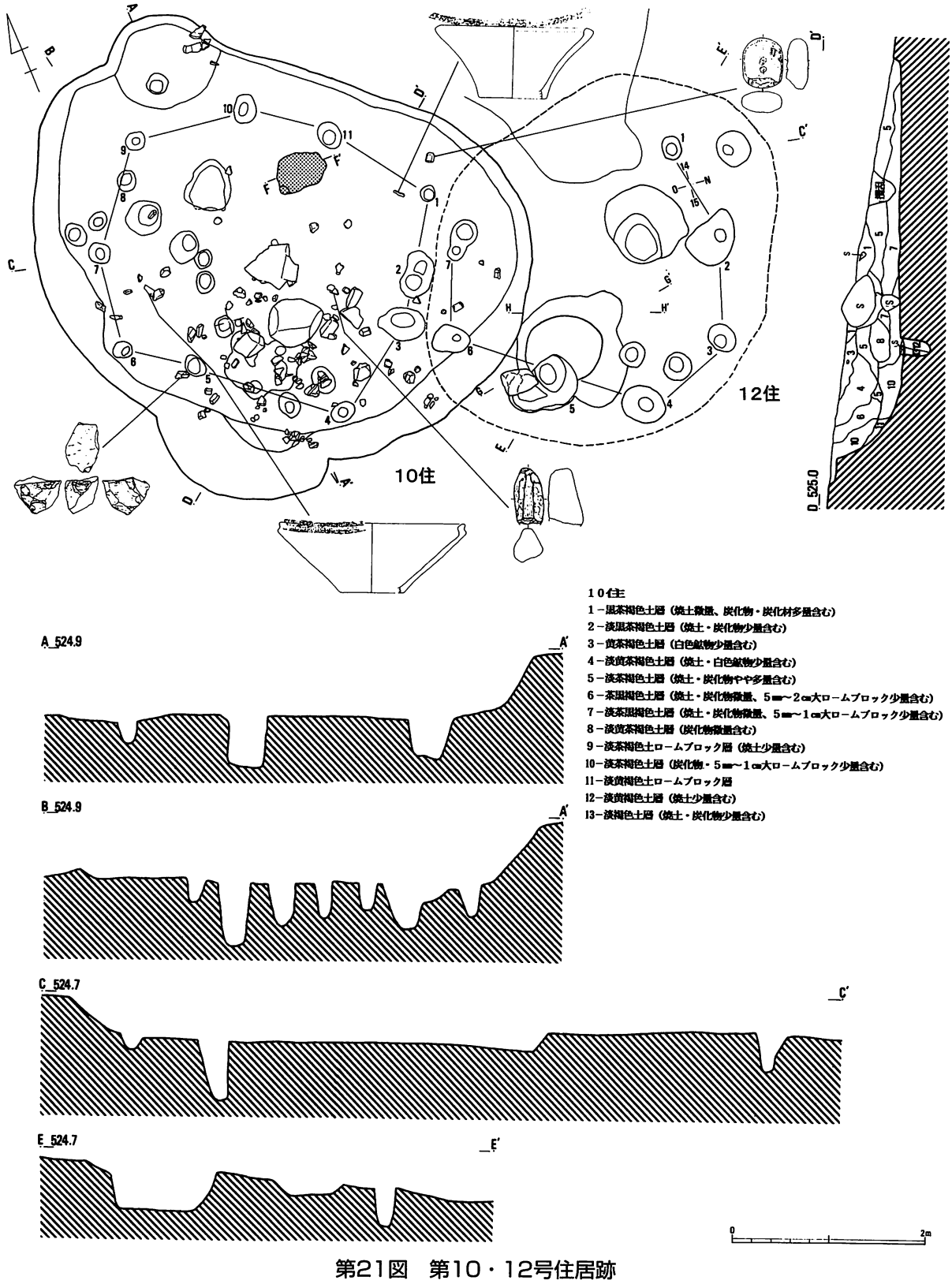
(重複・改築) 時期的な差異は不明であるが、第12号住居跡と重複している。炉の状況から、改築を一回行っているようである。

(形態・規模) 形態は、南東から北西方面に長い楕円形を呈している。規模は長径5.20m、短径3.86mを測る。入口は柱穴の配列から南東側と推定できる。

(壁・周溝) 壁は、北東向きの斜面に位置していることから南側が良く残っている。立ち上がりは緩やかで、最深部で約60cmを測る。周溝は認められない。

(柱穴) 柱穴と考えられるものが26本であるが、改築前・改築後にそれぞれどの柱穴が付随するのかは識別不明である。改築後と考えられる壁沿いに巡る各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１が径17×16、深さ19cm、ピット２は径47×28、深さ58cm、ピット３は径50×34、深さ39cm、深さ43cm、ピット５は径26×18、ピット４は径26×18、深さ37cm、ピット６は径20×18、深さ21cm、ピット７は径23×23、深さ16cm、ピット８は径22×19、深さ22cm、ピット９は径22×20、深さ16cm、ピット10は径30×22、深さ15cm、ピット11は径30×22、深さ17cmを測る。これら壁沿いに巡る柱の内側には深さが60cm以上のものが、４本認められることからこれらは主柱穴の可能性がある。

(炉) プランの北東寄りに埋甕炉が認められる。焼土の広がりは不整形に55×40cmの広がりで、掘り方は不整楕円形を呈し、規模は径64×45、深さ34cmを測り、内部に深鉢形土器が二個体存在し、東側に存在した埋甕（第23図１）を西側の埋甕（第23図２）が切っている。土器を見ると若干の時期差が窺われることから、改築の事実はこの炉からも想定される。第６号住居跡付近で発見された埋甕（第11図）からも本炉と同様な切り合い関係が認められるが、新旧のものが重なることは要因から理解できても、その段階でなぜ古い段階のものを排除せずに重複させるのか興味深い事例である。

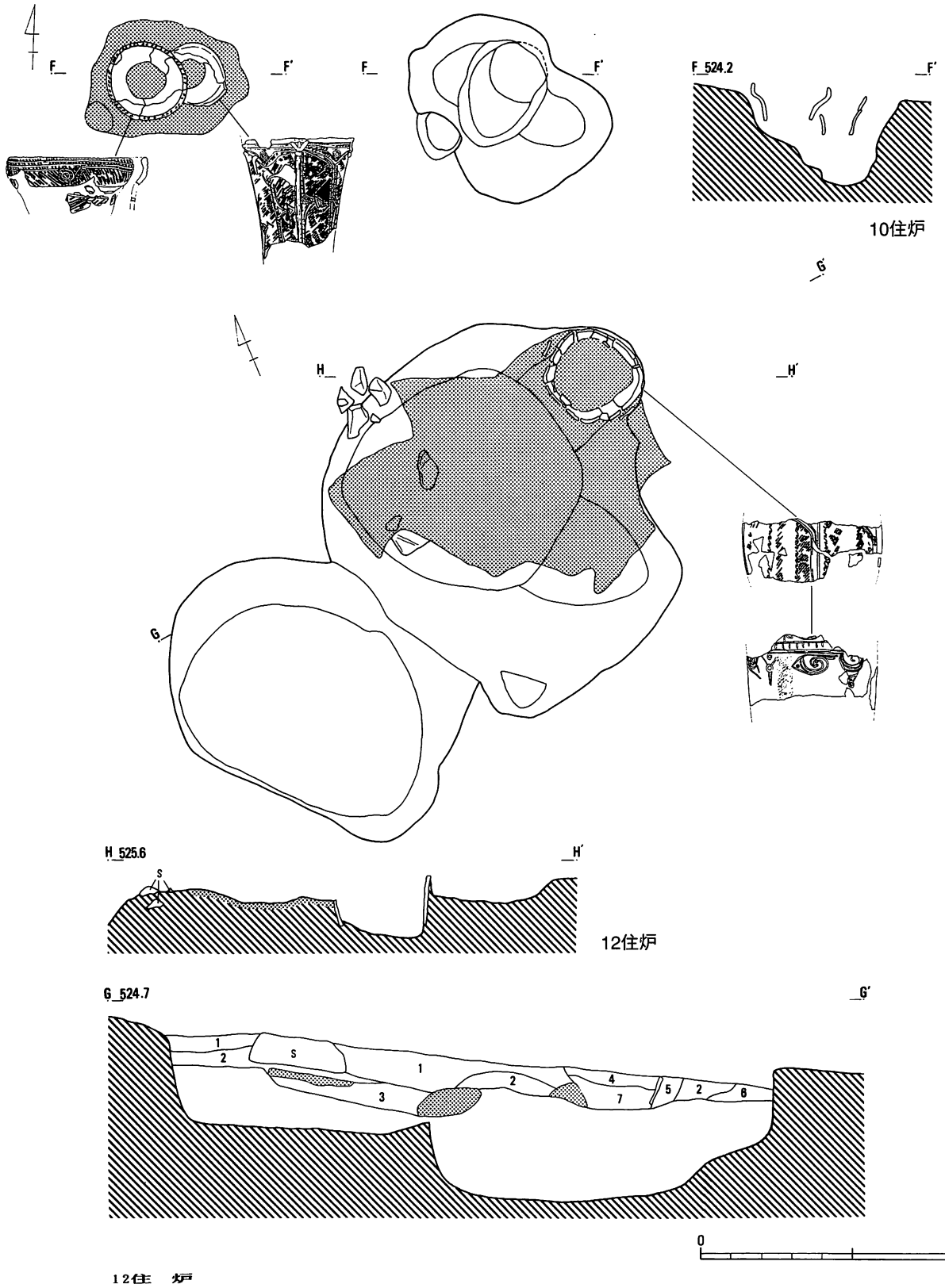


第21図　第10・12号住居跡

（その他の施設）炉の西側には貯蔵穴状の土坑が存在し、坑底部では南西方向にオーバーハングしている。規模は口径が40×20、深さは50㎝、底径では30×45㎝を測る。

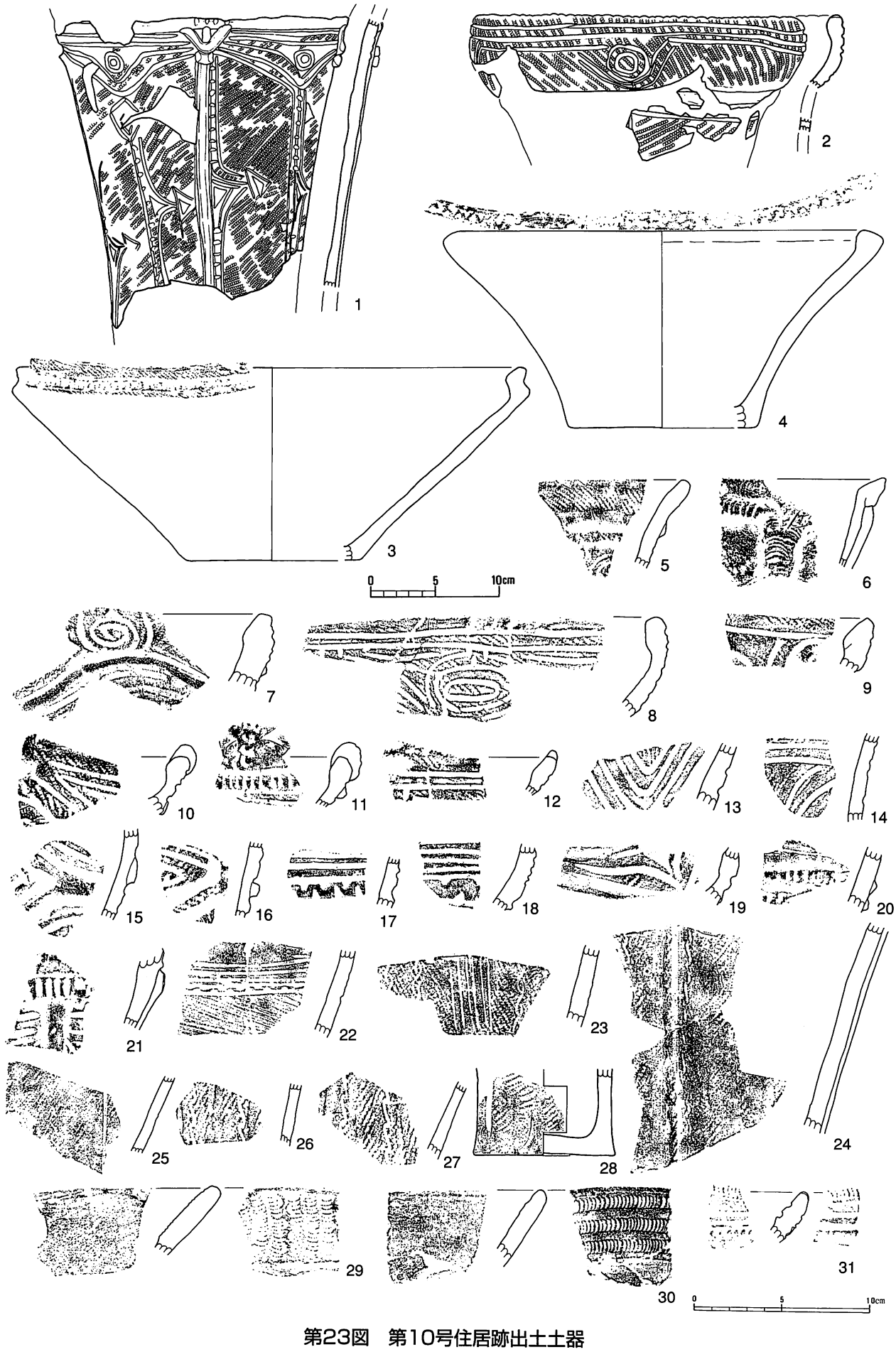
（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）遺物はプランの南側に集中するが、これは占地関係とこれに伴った覆土の残存状況に影響されるものと考えられる。第23図１は深鉢形土器で、『Ｙ』字状に垂下する隆帯によって四単位に区画され、胴上部には並行沈線と弧状線の区画文内に円文が描出され、玉抱き三叉文状の文様となっている。胴下部には沈線による



12住　炉
1－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量、ローム粒子多量含む）
2－黒茶褐色土層（焼土多量、炭化物微量含む）
3－淡黄茶褐色土層（焼土多量、2～3cm大ロームブロック少量含む）
4－黒茶褐色土層（白色鉱物、5cm大ロームブロック少量含む）
5－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
6－淡黄褐色土層（焼土微量含む）
7－黒茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）

第22図　第10・12号住居跡　炉



第23図　第10号住居跡出土土器

三角の区画文内に三角印刻文がある。2は深鉢形土器で口径27.5cmを測り、口唇部の上部に連続して刻まれている。口縁部には横位の並行沈線と、同じく沈線で弧状文に区画された中に円文が施されている。3は浅鉢形土器で、推定径38cm、器高14.7cm、推定底径13.5cmを測り、口縁部には擬隆帯が巡り、この擬隆帯間には押し引きによる結節沈線が施されている。4も浅鉢形土器で、推定口径33.5cm、器高14.8cm、推定底径14.5cmを測り、口唇部の上部に交互刺突文が施されている。5、7～16、19、23～28は縄文系土器群で、17、18、20、21といった沈線文系土器群に比べて圧倒的に多い。6は色調が灰白色を呈する東海系の北裏ＣⅠ式で、口唇部が折り返されて肥厚する。この口唇部並びにこの下部に配されたＶ字状の隆線上に連続爪形文が配されている。29～31は浅鉢形土器で、29・30は口唇部の内面には押し引きによる連続爪形文が充填され、31は口唇部端部に刻みを持ち、内外面に並行沈線が施されている。石器では、掻器（第95図19～21）3点、大型削器（第101図22・23ほか）4点、打製石斧（第100図11ほか）2点、磨石（第106図14～16ほか）4点、石核（第102図36）1点である。

第11号住居跡（第24～26図）

（位置）調査区南東端のＮ・Ｏ－13・14グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。

（重複・改築）第5・6号住居跡に切られているが、本住居跡の方が、掘り方が深かったため、プランは良好な残存状況である。改築は柱穴の配列状況から一回行っているようである。

（形態・規模）形態は、南東から北西方面に長い楕円形を呈している。改築後の規模は長径5.20m、短径4.36mを測る。入口は柱穴の配列と炉の位置的関係から北側と考えられる。覆土はローム化が著しく、プラン確認が難航した。

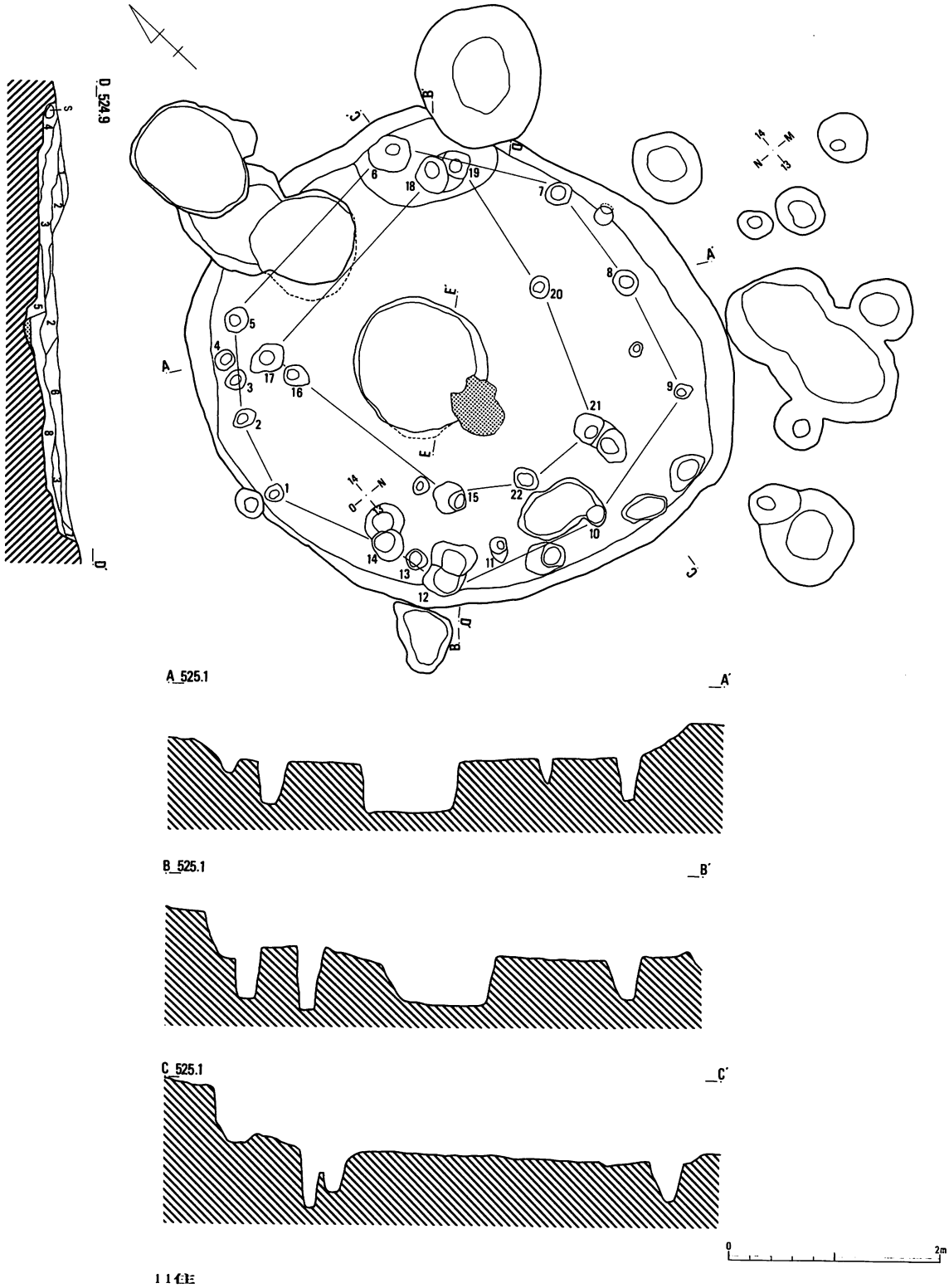
（壁・周溝）壁は全体的に良く残っているが、北東向きの斜面に位置していることから南側が良く残っている。立ち上がりはやや急で、最深部で約50cm、最浅部で約10cmを測る。周溝は認められない。

（柱穴）改築前の主柱穴と考えられるものが8本、改築後の主柱穴と考えられるものは10本である。改築前と考えられる各ピットの規模は以下のとおりである。ピット15が径32×30、深さ116cm、ピット16は径26×20、深さ40cm、ピット17は径37×25、深さ38cm、ピット18は径34×30、深さは47cm、ピット19は径28×25、深さ39cm、ピット20は径20×18、深さ35cm、ピット21は径30×30、深さ49cm、ピット22は径25×20、深さ13cmを測る。改築後の壁沿いに巡る各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1は径17×15、深さ15cm、ピット2は径24×16、深さは27cm、ピット5が径25×21、深さ14cm、ピット6は径38×35、深さ47cm、ピット7は径26×21、深さ42cm、ピット8は径25×21、深さは50cm、ピット9は径18×14、深さ34cm、ピット10は径22×19、深さ28cm、ピット12は径42×26、深さ55cm、ピット14は径29×27、深さ43cmを測る。またこれら主柱穴と考えられるもの他に、補助柱穴と考えられるものがあるが、これらは径が15～30cmで、深さが10～20cm程度である。

（炉）プランの中央南寄りに地床炉が認められる。焼土の広がりは不整形で56×44cmの広がりを持つ。

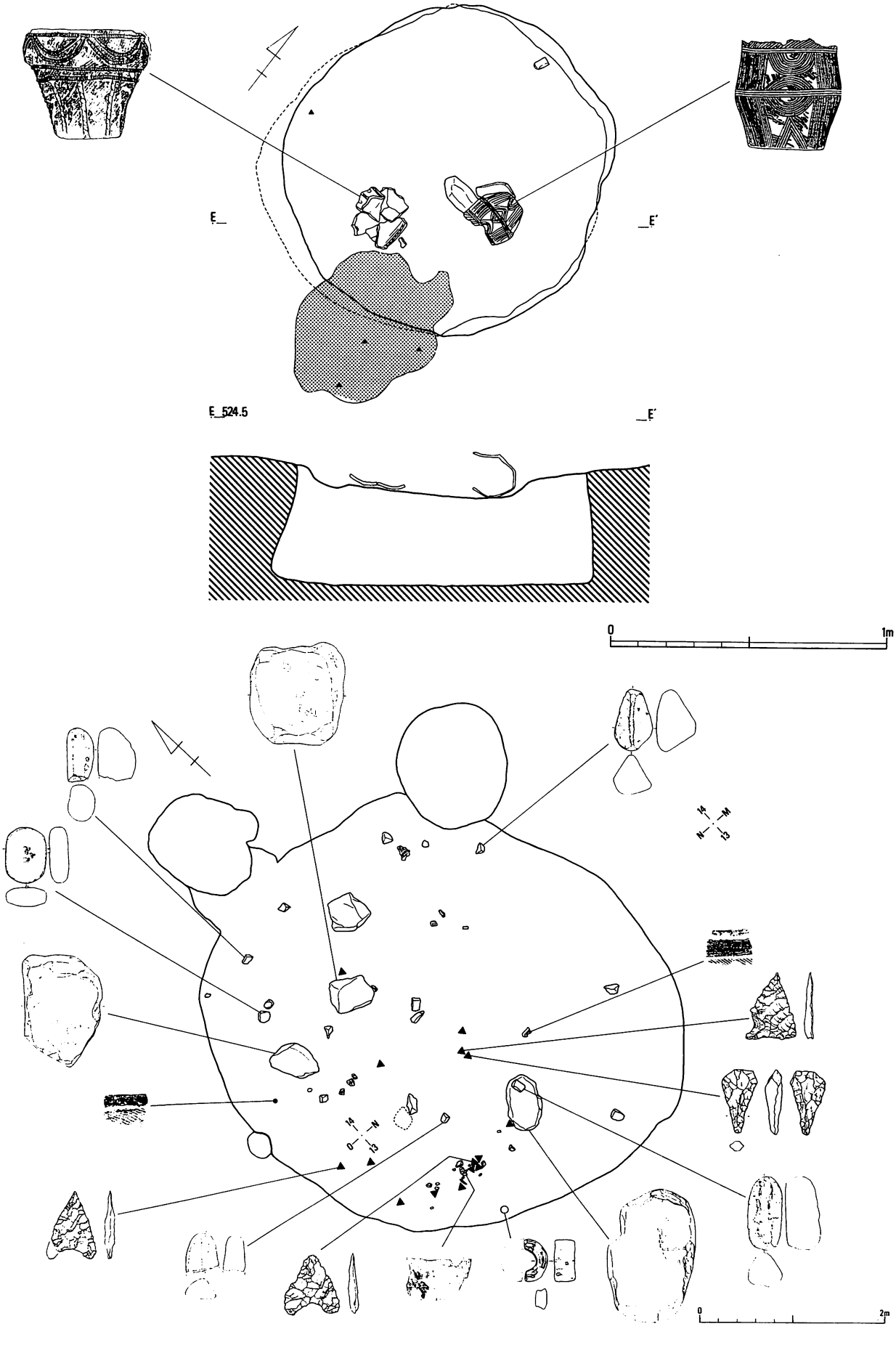
（時期）縄文時代前期末葉十三菩提式期（大歳山式期）。

（出土遺物）遺物のほとんどが床面直上で確認され、台石の上に磨石が置かれたままの状態で出土（第106図19、第111図4）するなど、生活の痕跡が良く残されており、覆土からは多量の黒曜石の破片が認められ、他の五領ヶ台式期の住居跡とはまた一味違った様子が窺えた。土器は炉の直上でまとまって出土しているが、前述のように顔つきの異なる2種類のもの（第26図1・2）が並んで出土したことは、互いの共伴関係を知る上でも貴重な資料となった。土器は地床炉付近の床面直上で、外来系（所謂関西系）土器群と在地系の土器が共伴関係（第25図）をもって出土している。このほか、南側壁付近からも、外来系の土器群を模したものと考えられる深鉢形土器の底部も出土している。第26図1は関西系の大歳山式に比定されるやや小形の鉢で、全体の約3分の二程度が残っており、口径は16.2cm、底径9cm、器高15.7cmを測るもので、口唇部に半裁竹管による連続した爪形文を内面部に二段にわたって巡らすことにより、Σ状工具による連続刺突の特殊凸帯文を模し、縄文地に口縁・胴部にかけて半裁竹管による結節浮線門が施された北白川下層Ⅲ式の施文方法をとるもので、胴部には縦位の浮線文上にへら状工具によって刻みを付けた結節浮線文が施される。底部には抉りが入り、底面形は歯車

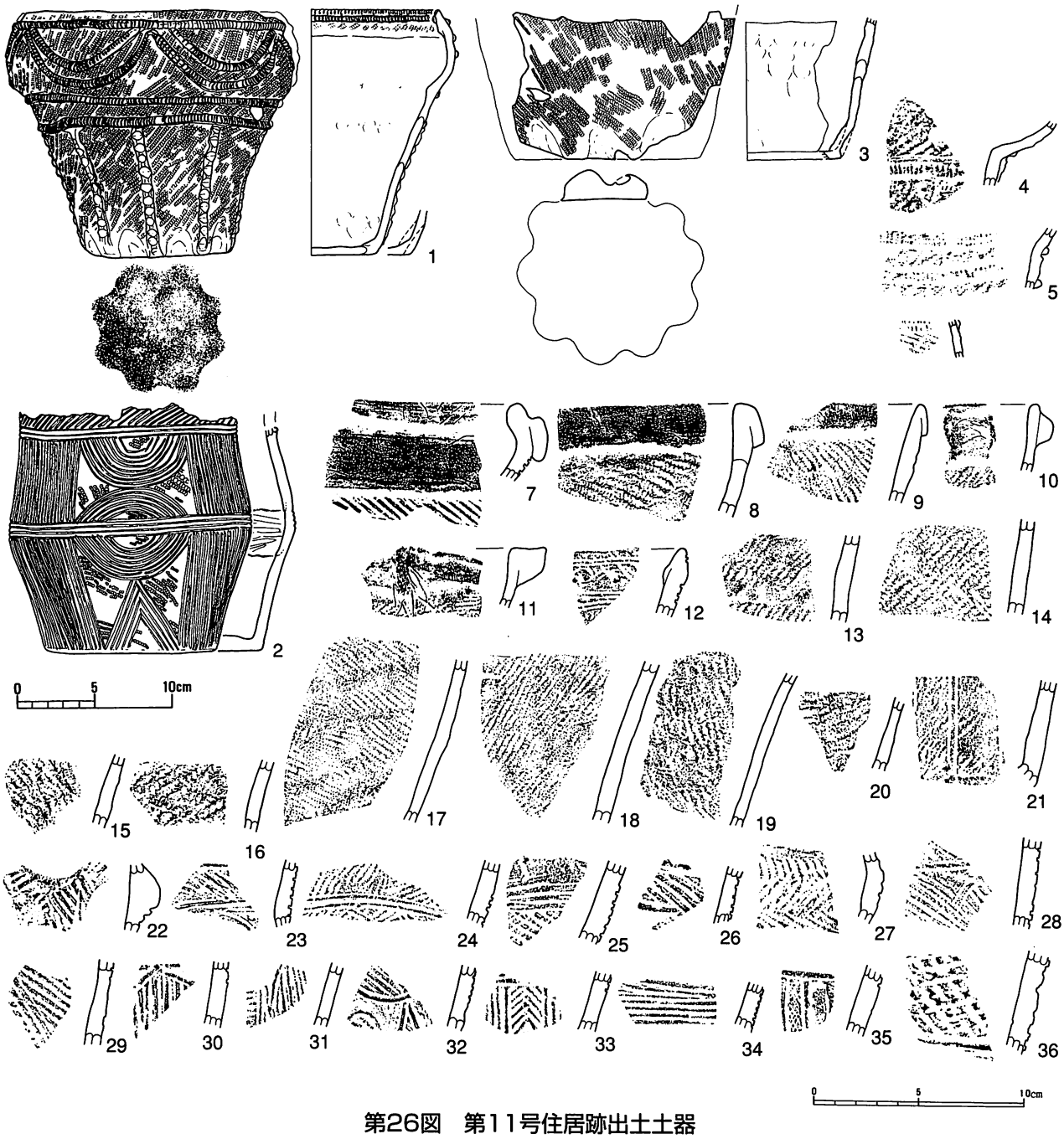


11住居
1－淡黒茶褐色土層（5㎜大ローム ブロック少量含む）
2－淡褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
3－淡黄褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子・2～5㎝大ローム ブロック少量含む）
4－淡黄褐色土層（焼土・焼土塊・5㎝大ローム ブロック少量含む）
5－淡黄褐色土ローム ブロック層（炭化物微量含む。貼床）
6－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子多量、5㎜～2㎝大ローム ブロック少量含む）
7－淡黄褐色土層
8－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物少量、1㎝大ローム ブロックやや多量含む）

第24図　第11号住居跡（1）



第25図　第11号住居跡（2）



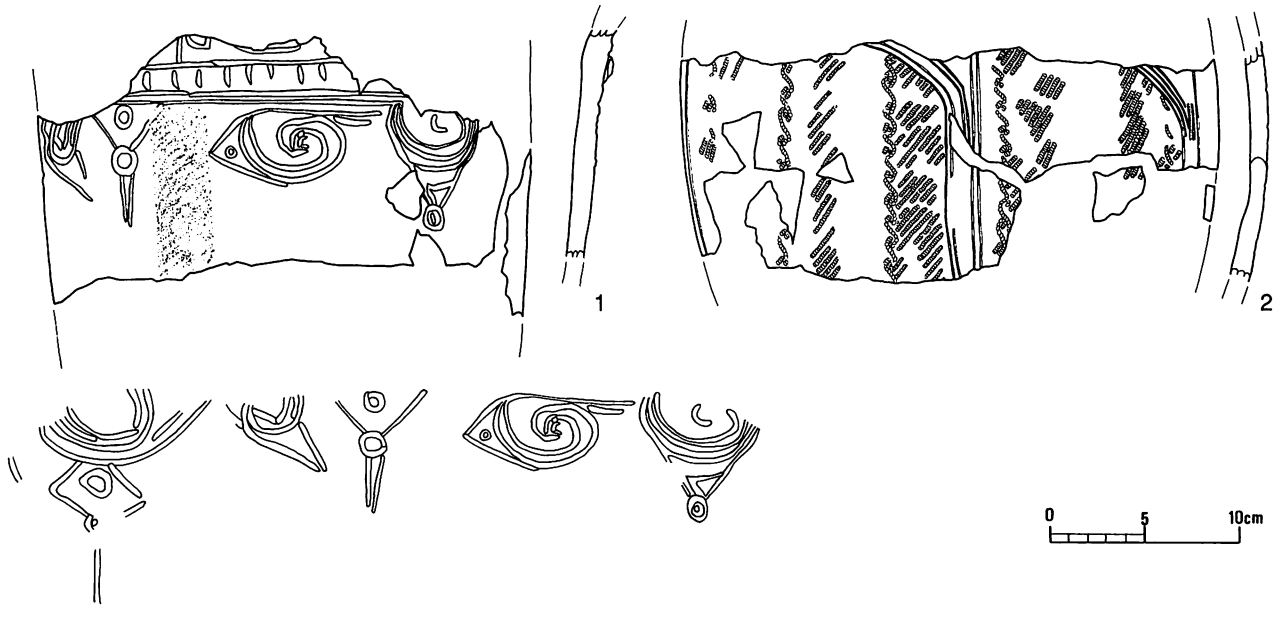
第26図　第11号住居跡出土土器

状を呈しており、内面の下部には指頭痕が、口辺部にはへら状工具による磨きがある。色調は全体的にやや黒味がかった灰色を呈しており、在地系の橙色を基調とするグループとは全く異なったものである。2は1と並んで出土した在地系の深鉢形土器の胴下半部で、文様が横位の並行沈線により区画され、斜位の条線、縦位条線、U字文、V字文などが組み合わされている。色調は淡橙色を呈しており、外来系のものとは全く異なっている。3は外来系の土器を模したものと考えられる深鉢形土器の底部で、地文に縄文が施されている。底面形は抉りが入って、歯車状の形態になるものと考えられ、色調は灰褐色を呈しているが、胎土が粗く造りが悪く、丁寧に造られた1とは全く異なっている。推定底径は12cmを測る。4～6は関西系土器群で、縄文地に結節浮線文が施されたもので、黒色がかった灰色を呈している。7～21は縄文を施した一群であり、7～11の口縁部の口唇部分は折り返して肥厚している。12、22～36は文様が横位の並行沈線により区画され、斜位の条線、縦位条線、矢羽状文、格子目文などが施されるが、26、32のように並行沈線で区画した空白部を削り込んだものもある。出土した石器は多く、その内訳は石鏃（第92図22～30ほか）11点、石錐1点、掻器2点、磨石（第106図18～22ほか）8点、台石（第111図2～4）3点、このほか覆土から多量の黒曜石の破片が出土している。特筆

すべき点としては、台石の上に磨石が載ったままのセット関係で出土したものがあり、当時の生活の匂いが感じられるものである。
(特殊遺物) 土製玦状耳飾が2点出土している。1点はピット1の覆土内から、もう1点は覆土からの出土である。

第12号住居跡（第21・27図）

(位置) 調査区南東端のN・O－14・15グリッドに位置している。居住域Aグループに所属する。
(重複・改築) 第5・10号住居跡、土坑などと切り合うが、本住居跡の掘り方が浅いためプランは柱穴の配列からしか窺えない。
(形態・規模) 形態は、東西方向に長い楕円形を呈している。規模は推定で長径4.20m、短径3.40mを測る。入口は斜面の下側で、南壁に寄って造られた炉の対面に位置する北側部分と考えられるが、一部攪乱も存在するので明確なものではない。
(壁・周溝) 壁は全く残っておらず、周溝も認められない。
(柱穴) 主柱穴と考えられるものが7本、補助柱穴と考えられるものが3本である。主柱穴の関する各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1が径24×20、深さ41cm、ピット2は径60×40、深さ41cm、ピット3は径30×25、深さ51cm、ピット4は径45×35、深さは37cm、ピット5は径45×35、深さ45cm、ピット6は径42×28、深さ19cm、ピット7は径32×26、深さ11cmを測る。補助柱穴と考えられるものは、径が約30cm、深さは20cm程度である。
(炉) プランの南西壁寄りに地床炉が認められる。炉からは2個体分の深鉢形土器の胴部（第27図1・2）が重なるように出土したことから所謂埋甕炉と考えられ、焼土の広がりは不整形で110×80cmの広がりを持つ。掘り方は不整形プランで、径122cm×120cmを測る。
(時期) 縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。
(出土遺物) 遺物は覆土がほとんど残っていなかったため、前述の炉に伴ったものしか確認することができなかった。土器では、第27図1と2は2点とも深鉢形土器の胴部である。1は刻み目のある隆帯下に、沈線による人体文や『魚』と考えられる抽象文が縄文地上に描かれている。2は胴部分が膨らむタイプのもので、縦位に沈線文によって四単位に分割され、この間には縦位に結節縄文が施されている。石器では、石鏃2点（第92図31ほか)、磨石が1点出土したのみである



第27図　第12号住居跡出土土器

第13号住居跡（第28・29・31図）

（位置）調査区南東端のＯ・Ｐ－11・12グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。

（重複・改築）本住居跡は調査中の土層の切り合い関係から、第14・15号住居跡に切られているようになっていた。

（形態・規模）形態は、南北に長い楕円形を呈している。規模は長径4.65ｍ、短径4.00ｍを測る。入口は柱穴の配列関係から北東側と考えられる。

（壁・周溝）壁は北東向きの斜面に位置していることから、南側から西側にかけて良く残っている。立ち上がりはやや急で、最深部で50～60㎝を測る。周溝は断続的に認められ、南西部から北西部にかけて存在し、幅20～30㎝、深さは１～10㎝を測る。

（柱穴）主柱穴と考えられるものは５本認められる。各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１が径50×23、深さ22㎝、ピット２は径77×60、深さ70㎝、ピット４は径42×36、深さ57㎝、ピット５は径65×45、深さは70㎝、ピット８は径40×40、深さ28㎝を測る。プランの中央付近及び主柱穴の間には補助柱穴と考えられるものがあるが、これらは径が20㎝、深さが10～20㎝程度である。

（炉）認められなかった。

（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）第31図１～19が本住居跡に伴って出土したものである。１は簡略化された沈線文系土器で、口唇上部に連続爪形文が、肩部には横位に走る交互刺突文が、その下部には連続爪形文が施されている。本資料は、第15号住居跡に伴うもの可能性がある。推定径は26㎝を測る。２・３は口縁部文様帯が狭く、ラッパ状に外反するものである。10は格子目文が、11はＶ字状文、12・13は円文、15は縦位に並行沈線と交互刺突文が施された胴部である。17～19は浅鉢形土器の口縁部で、口唇部が肥厚し、内面には17では沈線が、18・19には押し引き文による結節沈線が施されている。

第14号住居跡（第28～31図）

（位置）調査区南東端のＯ・Ｐ－11・12グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。

（重複・改築）第13号住居跡を切り、15号住居跡に切られる。新旧関係は不明だが、第17号住居跡とも切り合う。改築は一回行っている。

（形態・規模）形態は、切り合いなどではっきりしないが、柱穴の配列状況からほぼ円形を呈しているようである。改築前の規模は径が3.00ｍを測り、改築後の規模は径が4.50ｍを測る。入口は、柱穴の配列状況から北側と考えられる。

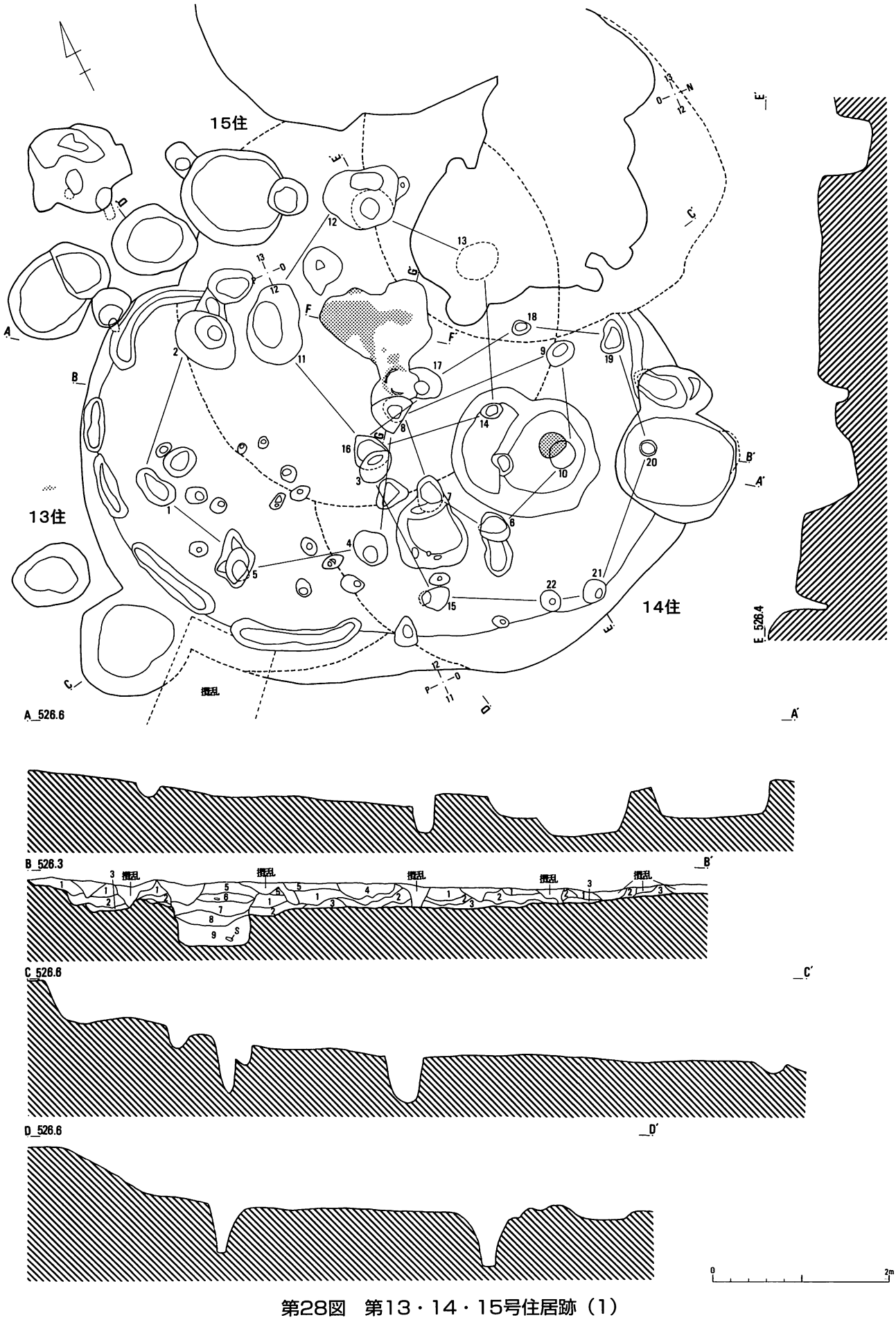
（壁・周溝）壁は北東向きの斜面に位置していることと、他の遺構との切り合い関係から、南西側から東側にかけて残っている。立ち上がりはやや急で、最深部で約50㎝を測る。周溝は認めらなかった。

（柱穴）主柱穴と考えられるものは改築前で５本、改築後では８本認められる。各ピットの規模は以下のとおりである。改築前では、ピット６が径37×28、深さ42㎝、ピット７は径40×32、深さ41㎝、ピット８は径40×40、深さ28㎝、ピット９は径33×26、深さは16㎝、ピット10は径35×30、深さ39㎝を、改築後ではピット15が径31×25、深さ40㎝、ピット16は径45×30、深さ52㎝、ピット17は径50×35、深さ43㎝、ピット18は径20×17、深さは12㎝、ピット20は径20×19、深さ20㎝、ピット21が径26×25、深さ35㎝、ピット22は径25×22、深さ39㎝を測る。

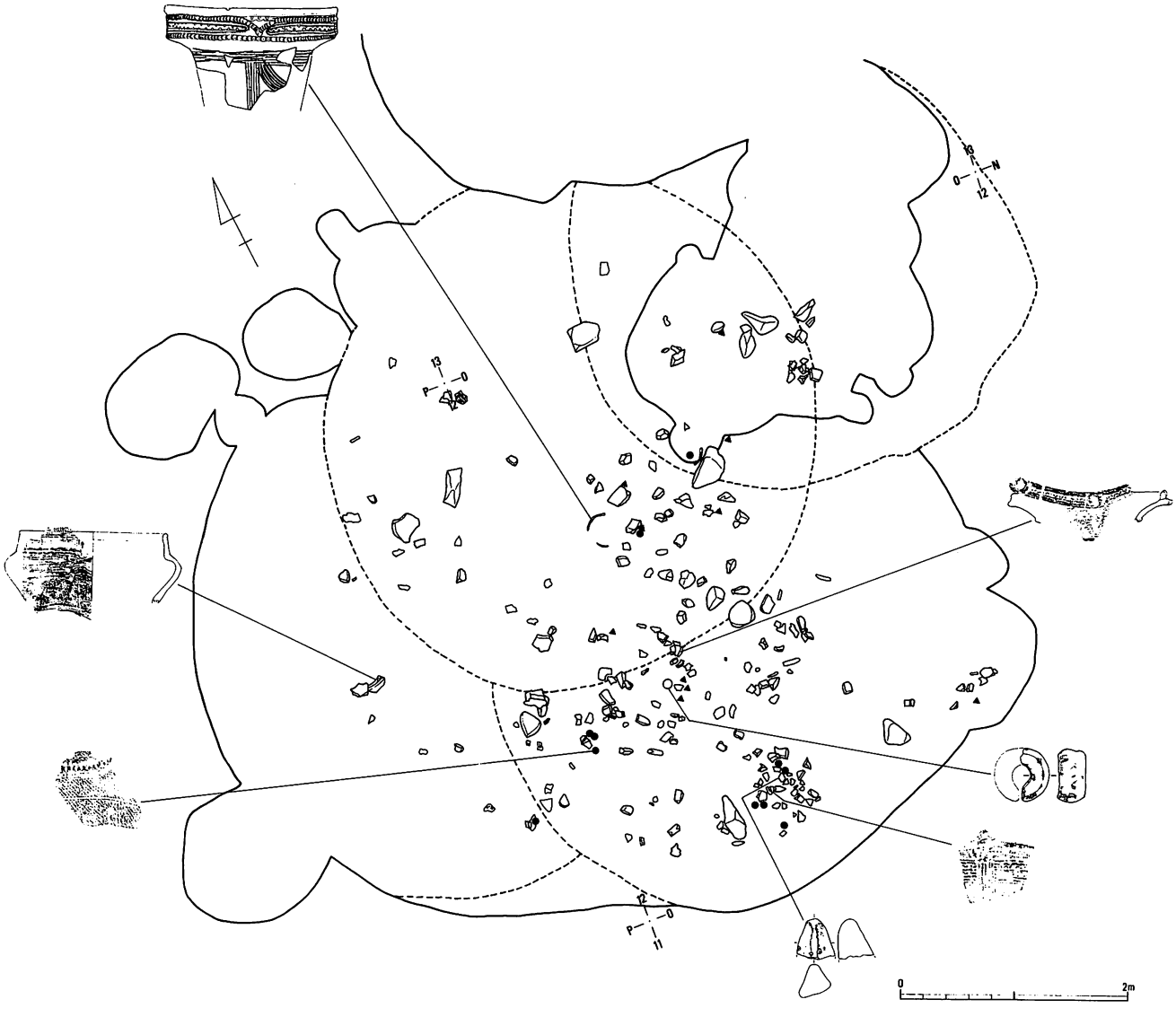
（炉）プランのほぼ中央付近からほぼ円形の地床炉が確認することができ、焼土が径45㎝の範囲で分布していた。

（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）第31図20～42に示したものが、本住居跡から出土した土器である。20・42は浅鉢形土器で、その他のものは深鉢形土器である。20は推定径40.3㎝を測り、外面には横位の並行沈線と刺突文が、内面には横位の並



第28図　第13・14・15号住居跡（1）



第29図　第13・14・15号住居跡（2）

行沈線と交互刺突文、その下部には押し引きの結節沈線が施され、胴部には補修のためと考えられる孔が認められる。21～26は口縁部文様帯が簡略化されたもので、ラッパ状に開く器形である。27はキャリパー状を呈するもので、並行沈線と格子目文が施される。28は胴部で、細かな集合沈線を地文とし、交互刺突文と連続爪形文が、また弧状に垂下する隆帯上にも爪形文が施されている。36～39、41には垂下する沈線文が施され、36には沈線間に交互刺突文が施されている。石器では、石鏃５点（第92図32～36）、掻器２点（第95図22・23）、磨石１点（第106図23）がある。

（特殊遺物）土製玦状耳飾が２点（第118図３・４）で、これらは破片ではあるが良好な状態で、表面に赤彩塗布されていることがわかっている。このほか土偶の左腰部（第115図36）と腹部（第115図29）の２点、また土製円盤（第117図29）も１点ある。

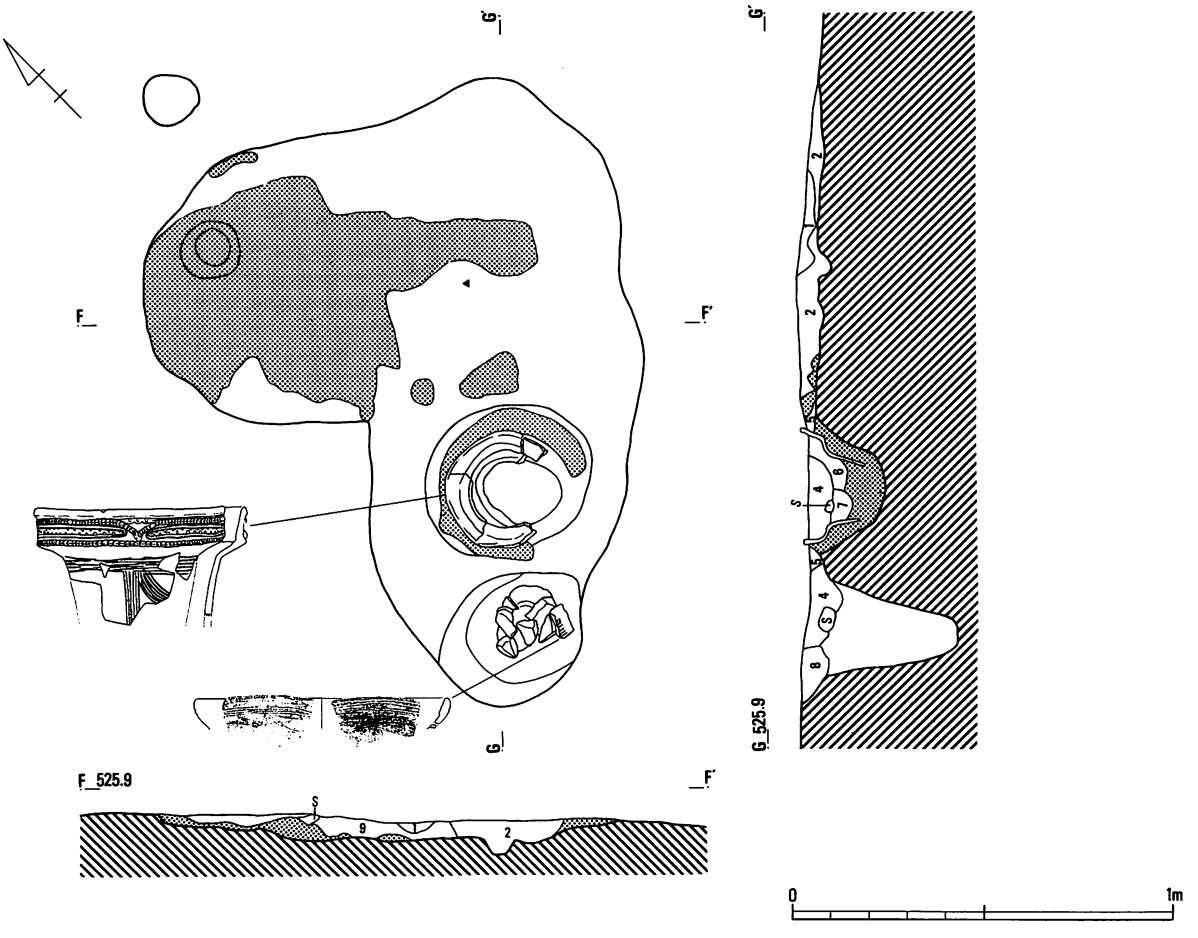
第15号住居跡（第28・29・32図）

（位置）調査区南東端のＯ・Ｐ－11・12グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。

（重複・改築）第13・14号住居跡を切っている。新旧関係は不明だが、第11号住居跡とも切り合う。

（形態・規模）形態は切り合いなどではっきりしないが、柱穴の配列状況からほぼ円形を呈しているようである。改築前の規模は径が4.20ｍを測る。入口は、柱穴の配列状況から北側と考えられる。

（壁・周溝）壁は他の遺構との切り合い関係から、全く残っておらず、周溝も認められなかった。



13・14・15住
1－淡黒茶褐色土層（炭化物微量含む）
2－淡黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
3－淡黄茶褐色土層（焼土少量、1～5cm大ローム ブロック多量含む）
4－淡茶褐色土層（炭化物微量含む）
5－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
6－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
7－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物やや多量、ローム粒子多量含む）
8－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子少量含む）
9－淡褐色土層（焼土微量、炭化物・炭化材やや多量、ローム粒子少量含む）

15住　埋甕炉ほか
1－淡茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
2－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
3－黄茶褐色土層（炭化物微量含む）
4－茶黒褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
5－茶褐色土層
6－砂質淡暗黄褐色土層（焼土微量含む）
7－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
8－黒茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）

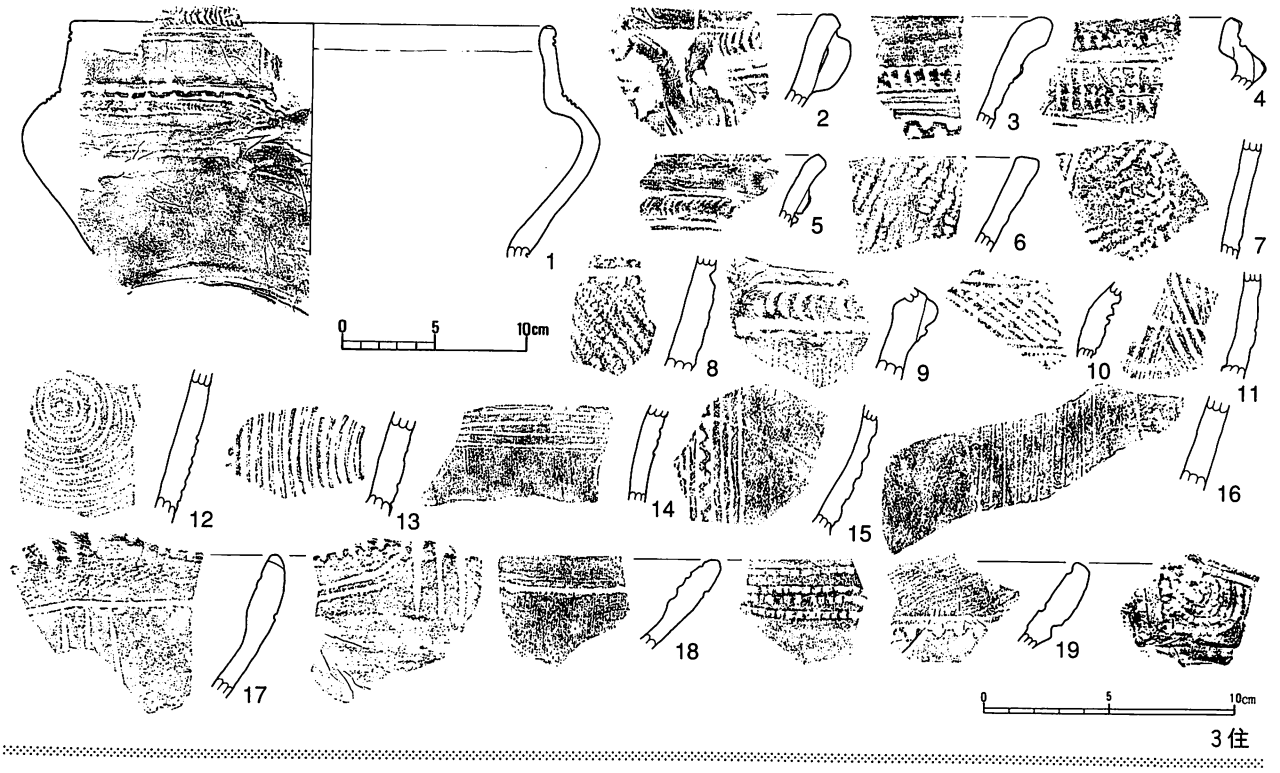
第30図　第14号住居跡埋甕炉

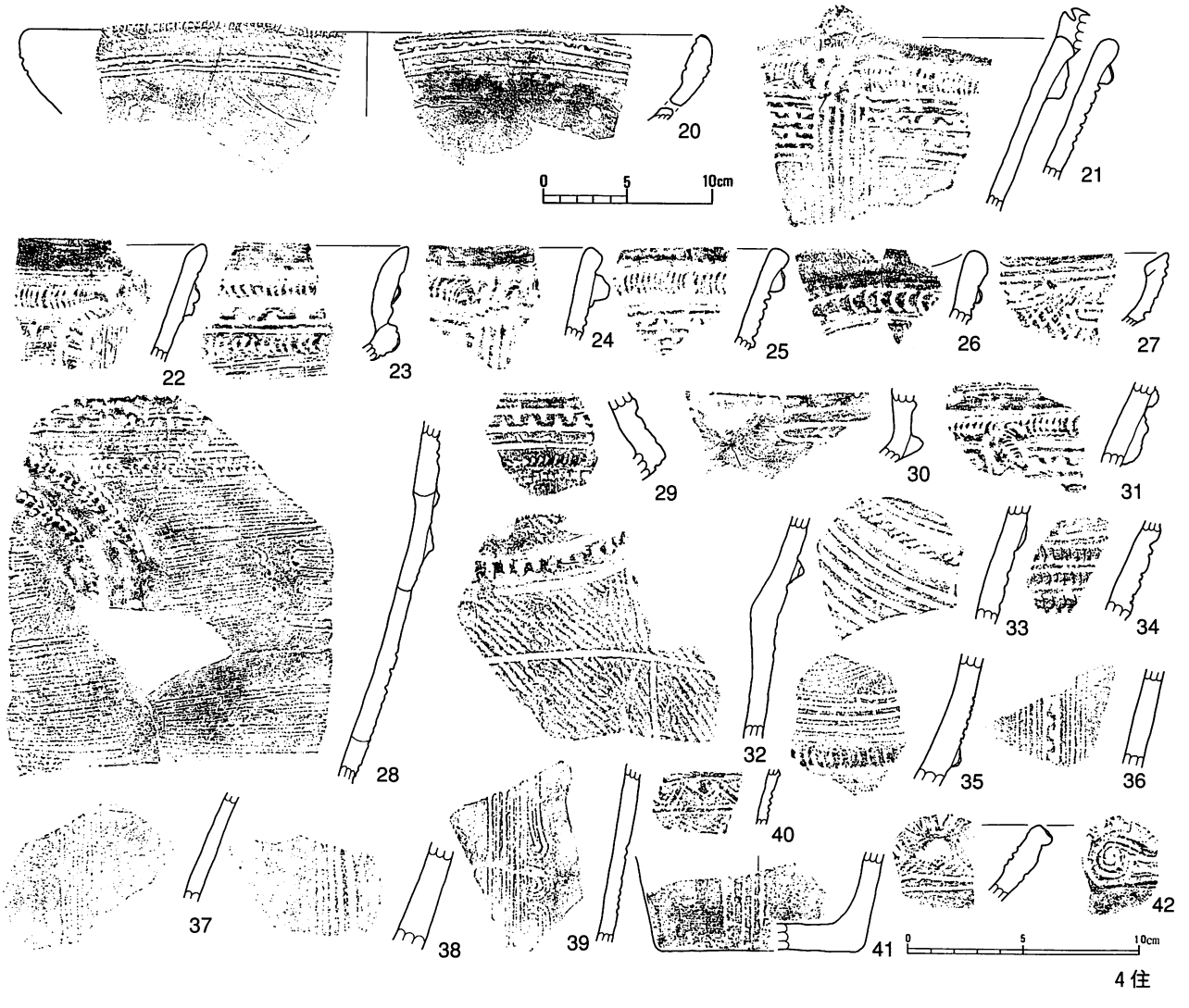
（柱穴）主柱穴と考えられるものは４本認められるが、土坑との切り合いで確認できなかったものを含めると総数は５本と想定される。各ピットの規模は以下のとおりである。ピット３は径45×30、深さ52cm、ピット11は径90×60、深さ32cm、ピット12は径65×38、深さ96cm、ピット13は不明、ピット14は径26×15、深さ20cmを測る。

（炉）プランのほぼ中央付近に焼土が不整形に130×100cmの範囲で広がり、その南端から深鉢形土器の胴上半部が埋設された炉体土器（第32図２）が存在する。

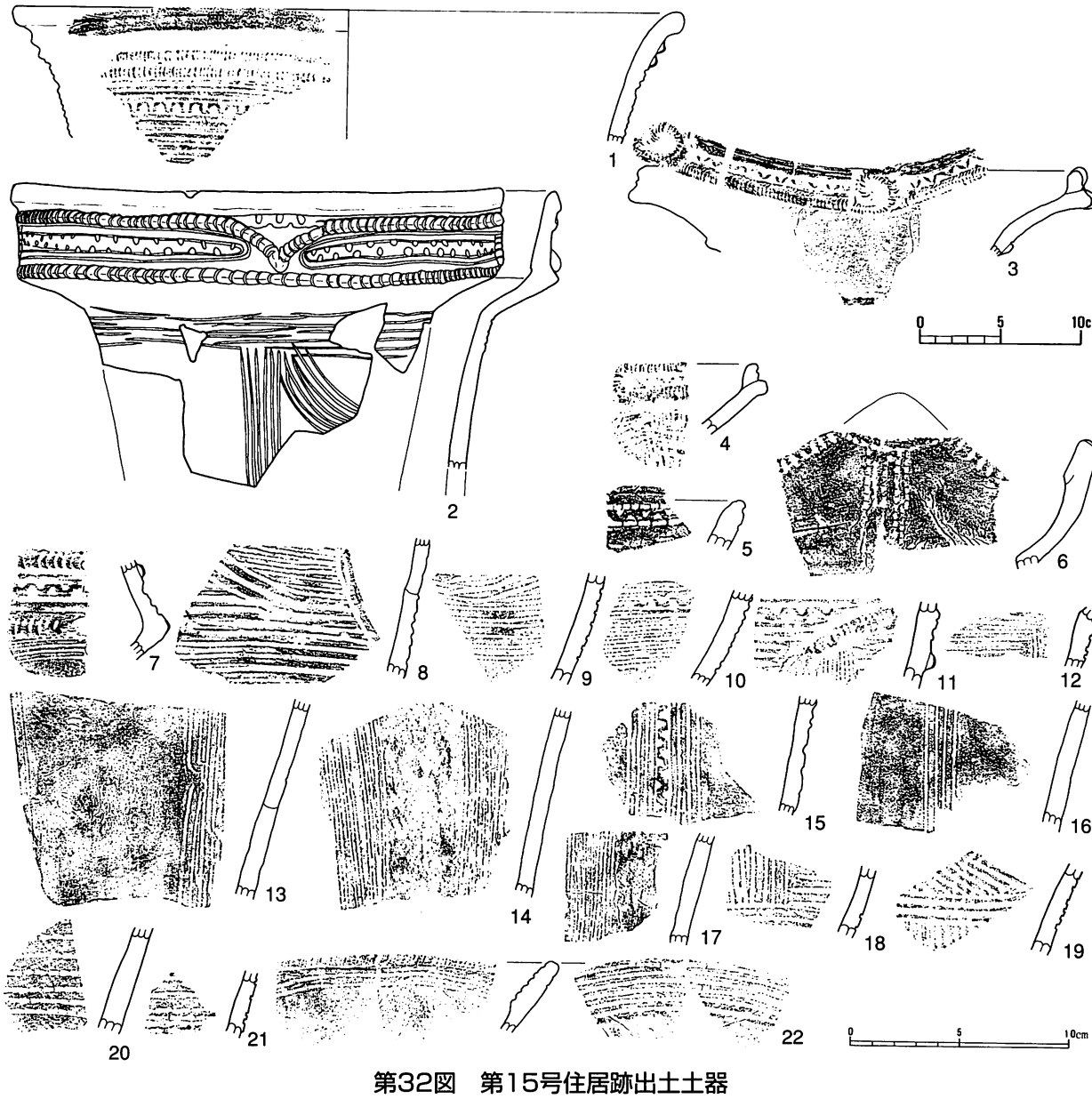
（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）第32図１～21は深鉢形土器で、22は浅鉢形土器である。１は平口縁のラッパ状に開くもので、口唇以下には横位に巡らした隆帯上に爪形文を配したものが二条、横位並行沈線、交互刺突文が施されている。推定径41.5cmを測る。２は胴部上端から大きく外反し、口縁部は緩やかに反る。口縁部に横位の擬隆帯と、その擬隆帯と擬隆帯とを結ぶ隆帯によって楕円状の区画文を描出し、内部には沈線による楕円区画内に交互刺突文が施されている。胴部には集合沈線によって横位、縦位、弧状に施文される。口径30.5cmを測る。３は口辺部が大きく外反し、口縁部では内側に緩やかな傾斜を持つ。口縁部では擬隆帯上に連続爪形文が施され、口唇部とこの擬隆帯部分の間には交互刺突文が、また口縁部は渦巻きの貼付文によって四単位に区画されている。推定径





第31図　第13・14号住居跡出土土器



第32図　第15号住居跡出土土器

27.3cmを測る。石器では、磨石（第106図24、第107図25）が２点出土している。

第16号住居跡（第33・34図）

（位置）調査区南東端のＫ・Ｌ－14・15グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。

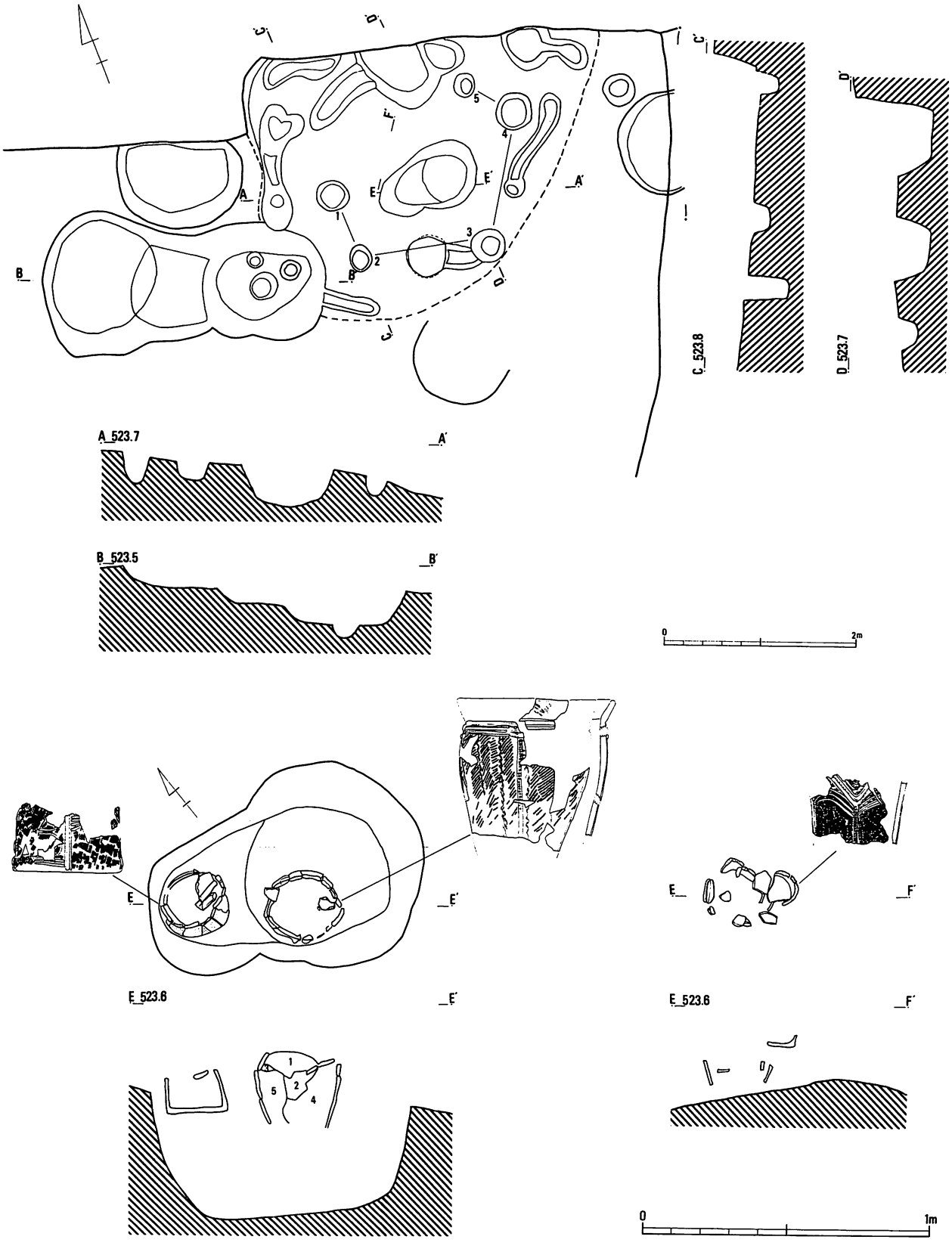
（重複・改築）東側半分が調査区外に位置している。

（形態・規模）形態は、風成堆積土中に構築されているためはっきりしないが、南北方向に長い楕円形を呈しているようである。規模は現存値で長径が3.26ｍを測り、短径は推定値で3.20ｍを測る。入口は、柱穴の配列状況から北側と考えられる。

（壁・周溝）壁は認めることができなかった。周溝は全周するものではなく、断続的に存在するものであり、幅は15～30、深さは５～10cm程度である。

（柱穴）主柱穴と考えられるものは６本認められ、各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１は径33×32、深さ18cm、ピット２は径28×23、深さ32cm、ピット３は径43×41、深さ35cm、ピット４は径35×34、深さは19cm、ピット６が径38×37、深さ21cm、ピット７は径23×21、深さ42cmを測る。

（炉）プランの南寄り部分から炉の可能性がある埋甕が確認することができた。これは深鉢形土器の底部（第34図２）と胴上半部（第34図１）がそれぞれ離れた状態で、径が110×70cm、深さ45cmを測るピット（Ｅ－Ｅ'）



16住　埋甕炉
1－淡暗褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－暗褐色土層（焼土多量含む）
3－淡暗褐色土層
4－黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
5－茶黒褐色土層（焼土微量、ローム粒子少量含む）

第33図　第16号住居跡

の掘り方の上層から出土し、周辺から焼土及び炭化物が分布する状況が窺え、前者の深鉢形土器の内部より多量の焼土が認められたことからも、炉体土器と考えることができる、本住居跡の炉の形態は埋甕炉である。当初これを単独遺構としたため、第205土坑として取り上げたが、これは出土レベルが床面よりやや高い部分に位置していたためであるが、単独の埋甕遺構の可能性もある。

(埋甕) ピット5は径23×18、深さ18cmを測るが、底部が穿孔された第34図3といった深鉢形土器の胴下半部が出土している。確認面より高い位置から出土している点については、床面が安定していなかったため、貼床部分を削除してしまった結果である。

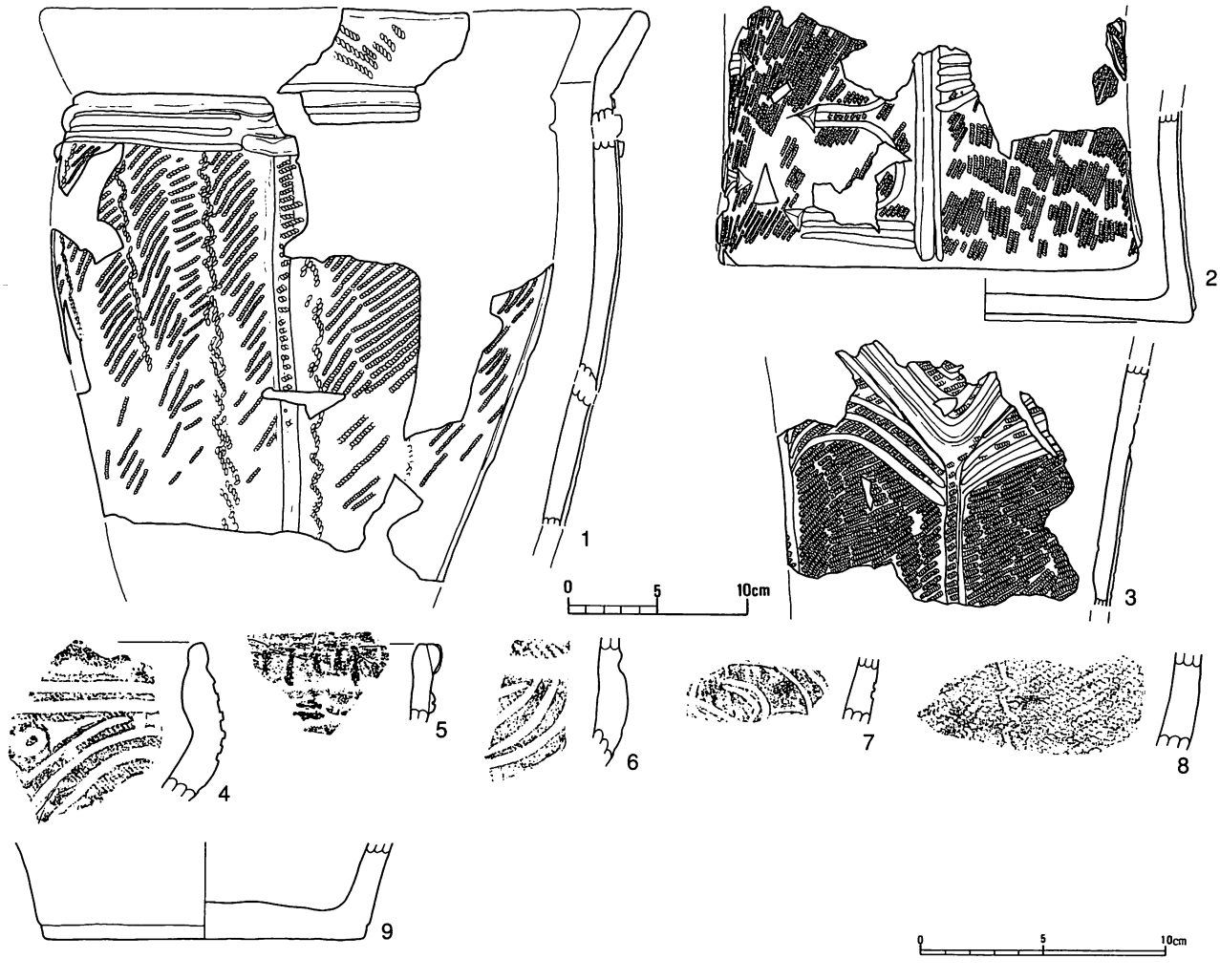
(時期) 縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。

(出土遺物) 第34図は全て深鉢形土器である。主なものでは、5が無文地に浮線文をあしらった前期末葉のものである。1は口縁部文様帯が簡略化されたもので、胴部は縄文が、隆帯上にも縄文が施され、縦位に四分割された区画内には結節縄文が認められる。推定径は30cmを測る。2は底径23cmを測る底部で、垂下する隆帯に隣接して沈線による弧状文が連続して描かれ、その端部は三角の印刻文が認められる。3は胴上部で、Y字状に垂下した隆帯による区画文に隣接して逆U字形の数条の弧状線が施されている。石器では、石鏃1点（第92図37)、掻器2点（第95図24・25)、大型削器1点（第101図24）が出土している。

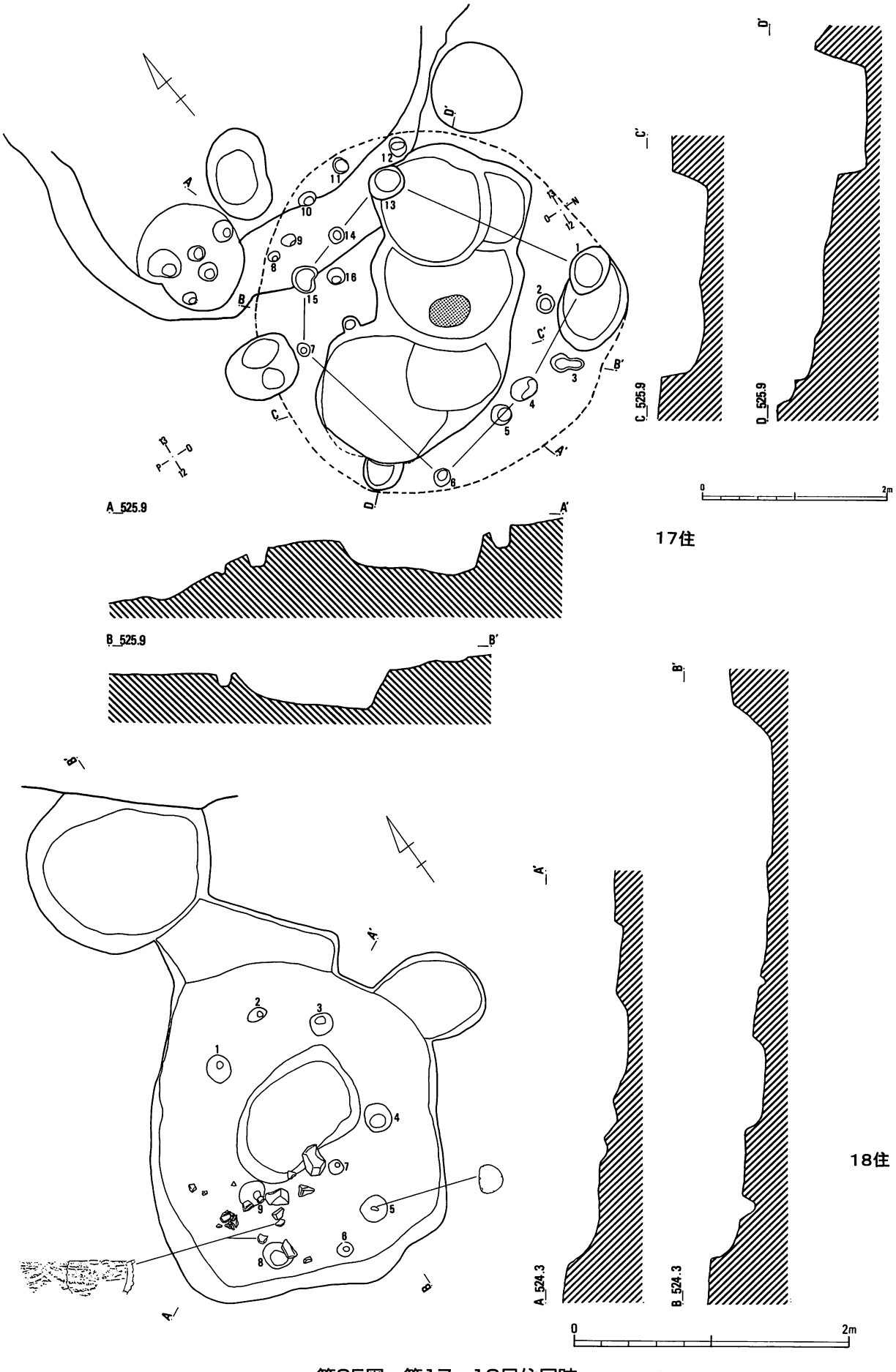
第17号住居跡（第35・39図）

(位置) 調査区南東端のN・O－12・13グリッドに位置している。居住域Aグループに所属する。

(重複・改築) 第4・14・15号住居跡と切り合うが、新旧関係は不明である。



第34図　第16号住居跡出土土器



第35図　第17・18号住居跡

(形態・規模) 形態は切り合いなどではっきりしないが、柱穴の配列状況からほぼ円形を呈しているようである。規模は径が約4.90ｍを測る。入口は柱穴の配列状況から、北東側と推定される。
(壁・周溝) 壁、周溝共に認められなかった。
(柱穴) 柱穴と考えられるものは16本認められ、これらは壁沿いに巡っている。柱と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１が径52×40、深さ10㎝、ピット２は径22×10、深さ22㎝、ピット３は径36×11、深さ10㎝、ピット４は径32×22、深さは26㎝、ピット５は径24×22、深さ27㎝、ピット６が径20×18、深さ20㎝、ピット７は径15×13、深さ７㎝、ピット８は径12×11、深さ８㎝、ピット９は径16×12、深さは33㎝、ピット10は径22×13、深さ52㎝、ピット11が径17×16、深さ41㎝、ピット12は径21×19、深さ32㎝、ピット13は径39×33、深さは82㎝、ピット14は径18×18、深さ18㎝、ピット15が径31×24、深さ23㎝、ピット16は径18×18、深さ14㎝を測る。
(炉) プランのほぼ中央付近、第249号土坑の上層から楕円形の地床炉が確認することができ、焼土が径48×32㎝の範囲で分布していた。
(時期) 縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。
(出土遺物) 遺構確認段階で、覆土がほとんど残っていなかったことから出土した遺物はとても少なかった。図示できるものは第39図に示したものだけで、１は波状口縁で口唇部が肥厚するもので、隆帯上を押し引いた爪形文が、２は胴部で無文地に押し引いた角押し文と平行沈線が施されている。石器では、掻器１点、石錐２点(第98図２・３)、石匙１点が出土した。

第18号住居跡（第35・39図）
(位置) 調査区南東端のⅠ・Ｊ－12グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。当初、土坑として扱ったものである。
(重複・改築) なし。北側および東側は、土坑と切り合っている。
(形態・規模) 形態は不整円形を呈しているようである。規模は径が2.39×2.08ｍを測る。入口は柱穴の配列状況から、東ないし西側と推定される。
(壁・周溝) 壁・周溝共に認めらなかった。
(柱穴) 柱穴と考えられるものは９本認められ、これらは壁沿いに巡っている。柱と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１が径20×18、深さ11㎝、ピット２は径15×８、深さ18㎝、ピット３は径17×15、深さ13㎝、ピット４は径20×18、深さは39㎝、ピット５は径18×17、深さ18㎝、ピット６が径12×10、深さ７㎝、ピット７は径12×10、深さ６㎝、ピット８は径22×18、深さ14、ピット９は径21×18、深さは31㎝を測る。
(炉) プランのほぼ中央付近に径が102×64㎝、深さが14㎝を測る窪みが認められ、覆土から少量の炭化物や焼土が存在した。このことから、これを地床炉と認識して良いものと思われる。
(時期) 縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。
(出土遺物) 第39図３は小形の鉢形土器で、径は推定で10.5㎝を測り、口縁部が隆帯による弧線により構成され、この区画文内には玉抱き三叉文が施されている。４は深鉢形土器の底部で、縄文地に沈線が二条みられ、内面に炭化物が付着している。石器ではピット５内から碁石状の円形石製品（第117図33）が１点出土している。

第19号住居跡（第36・37・39図）
(位置) 調査区北端のツ－38・39グリッドに位置している。居住域Ｅグループに所属する。
(重複・改築) なし。
(形態・規模) 形態は楕円形を呈しているようである。規模は径が2.90×2.37ｍを測る。入口は柱穴の配列状況から、東ないし西側と推定される。本住居跡は炉を中心とした部分からは、多量の炭化物や焼土が集中していたことから焼失したものと考えられ、遺物の出土状況などから、家としての機能を失った後に燃やされたもの

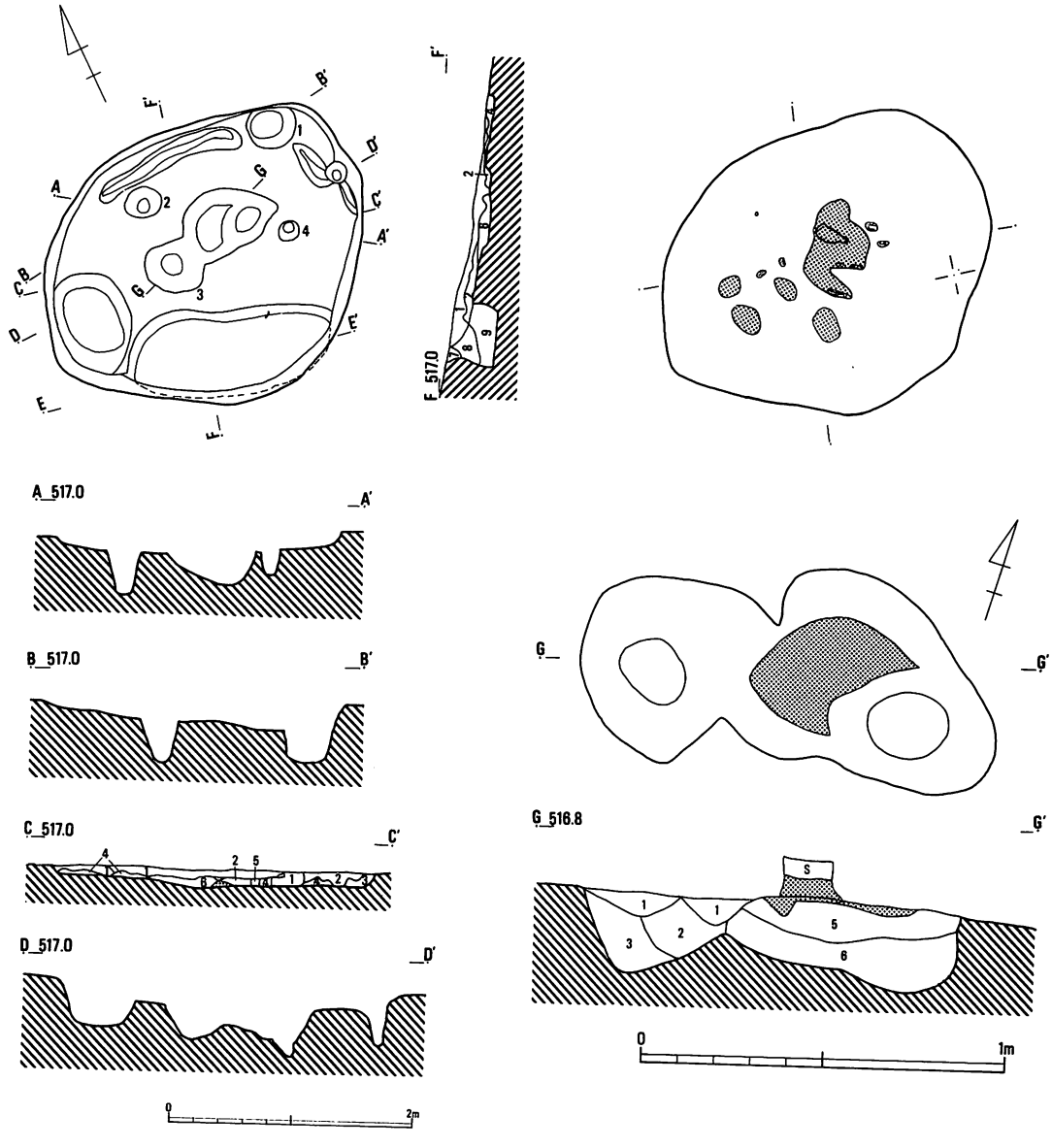
と考えられる。

(壁・周溝) 壁は緩やかな立ち上がりで、深さは15～20cmを測る。周溝は北側部分で断続的に認められ、幅は13～16cm、深さは４～15cmを測る。

(柱穴) 柱穴と考えられるものは図面上に示すことができなかったが、住居跡内土坑に隣接して１本、その他に４本認められる。柱と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１が径40×34、深さ45cm、ピット２は径30×25、深さ33cm、ピット３は径50×45、深さ40cm、ピット４は径16×15、深さは20cmを測る。

(炉) プラン中央北寄り付近に、焼土が径45×32cm、掘り方が径70×55、深さ30cmを測る地床炉が認められた。焼土上に15cm大の板状の礫が存在しており、添え石の可能性がある。

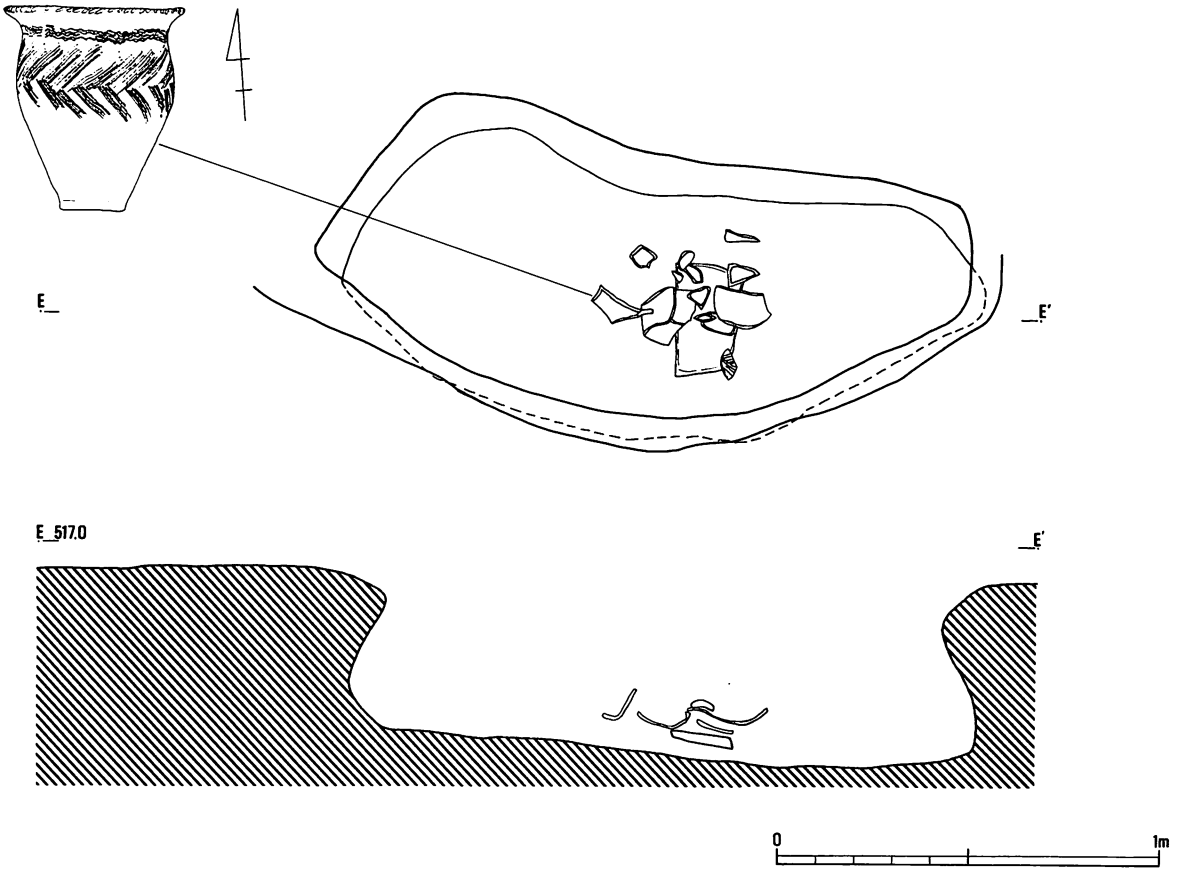
(土坑) 住居跡の西壁に面した部分に不整長楕円形を呈した墓坑状のもの（第37図）が認められた。規模は長径172×短径77cm、深さ約50cmを測り、住居壁側でオーバーハングする。坑内からは約20cmの板状礫上に、ほぼ正



19住
1－黒褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
2－黒茶褐色土層（焼土多量、炭化物・3～5cm大ローム ブロック少量含む）
3－暗黄褐色土ロームブロック層
4－暗黄茶褐色土層（焼土微量含む）
5－淡黒褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
6－暗茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
7－暗黄褐色土ブロック層
8－暗褐色土ブロック層（焼土・炭化物少量含む）
9－淡褐色土層（焼土・炭化物微量含む）

19住　炉
1－黒茶褐色土層
2－暗黄茶褐色土ロームブロック層
3－暗褐色土層（1～3cm大ロームブロック少量含む）
4－赤褐色土層（焼土・焼土塊多量含む）
5－淡暗褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
6－淡暗黄褐色土層（焼土・炭化物微量含む）

第36図　第19号住居跡（1）



第37図　第19号住居跡（2）

位に置かれたものと想定される甕形土器（第39図５）が一個体出土した。

(時期) 弥生時代中期後半北原式期。

(出土遺物) 遺物は図示したもののほか、小破片が覆土中から出土している。第39図５はほぼ完形個体の甕形土器で、口径19cm、器高21cm、底径27cmを測る。口唇部に刻み目を持ち、頸部に櫛描による波状文が、胴部に『く』の字状に連続した文様が施されている。土器の表面では、口辺部付近には吹き零れた炭化物が付着し、その胴下部および底部では火を受けた部分が部分的に剥離しており、口縁部には穿孔された部分が２箇所認められ、これは補修孔と考えられる。

第20号住居跡（第38・39図）

(位置) 調査区中央の東側、Ｘ・Ｙ－21・22グリッドに位置している。居住域Ｂグループに所属する。

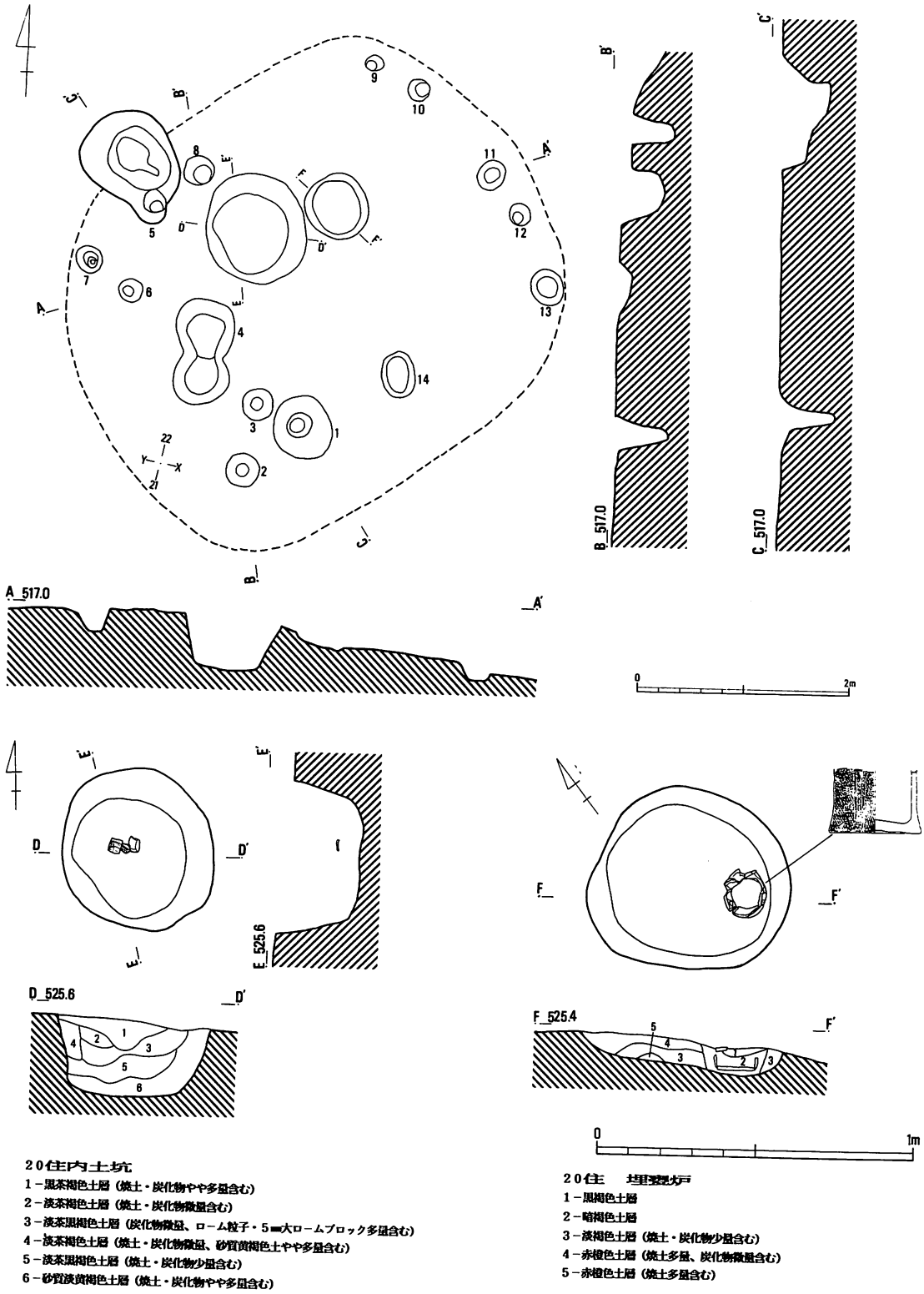
(重複・改築) なし。

(形態・規模) 形態は楕円形を呈しているようである。規模は掘り込みが認められないため、柱列から推定すると径が4.70×4.00ｍを測る。入口は柱穴の配列状況と炉の位置から、北東部と推定することができる。

(壁・周溝) 壁・周溝共に認めらなかった。

(柱穴) 柱穴と考えられるものは14本認められ、これらは主に壁沿いに巡っている。柱と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１が径60×55、深さ50cm、ピット２は径33×32、深さ52cm、ピット３は径30×30、深さ13cm、ピット４は径55×55、深さは15cm、ピット５は径22×21、深さ25cm、ピット６が径24×23、深さ11cm、ピット７は径26×25、深さ15cm、ピット８は30×28、深さ30、ピット９は径16×15、深さ25cm、ピット10は径20×20、深さ14cm、ピット11は径30×25、深さ16cm、ピット12は径22×20、深さ22cm、ピット13は径35×30、深さは21cm、ピット14径42×30、深さ12cmを測る。

(炉) プランのほぼ中央北西寄り付近に、径が75cm程度の範囲で焼土が分布する地床炉であり、掘り方はそれよ



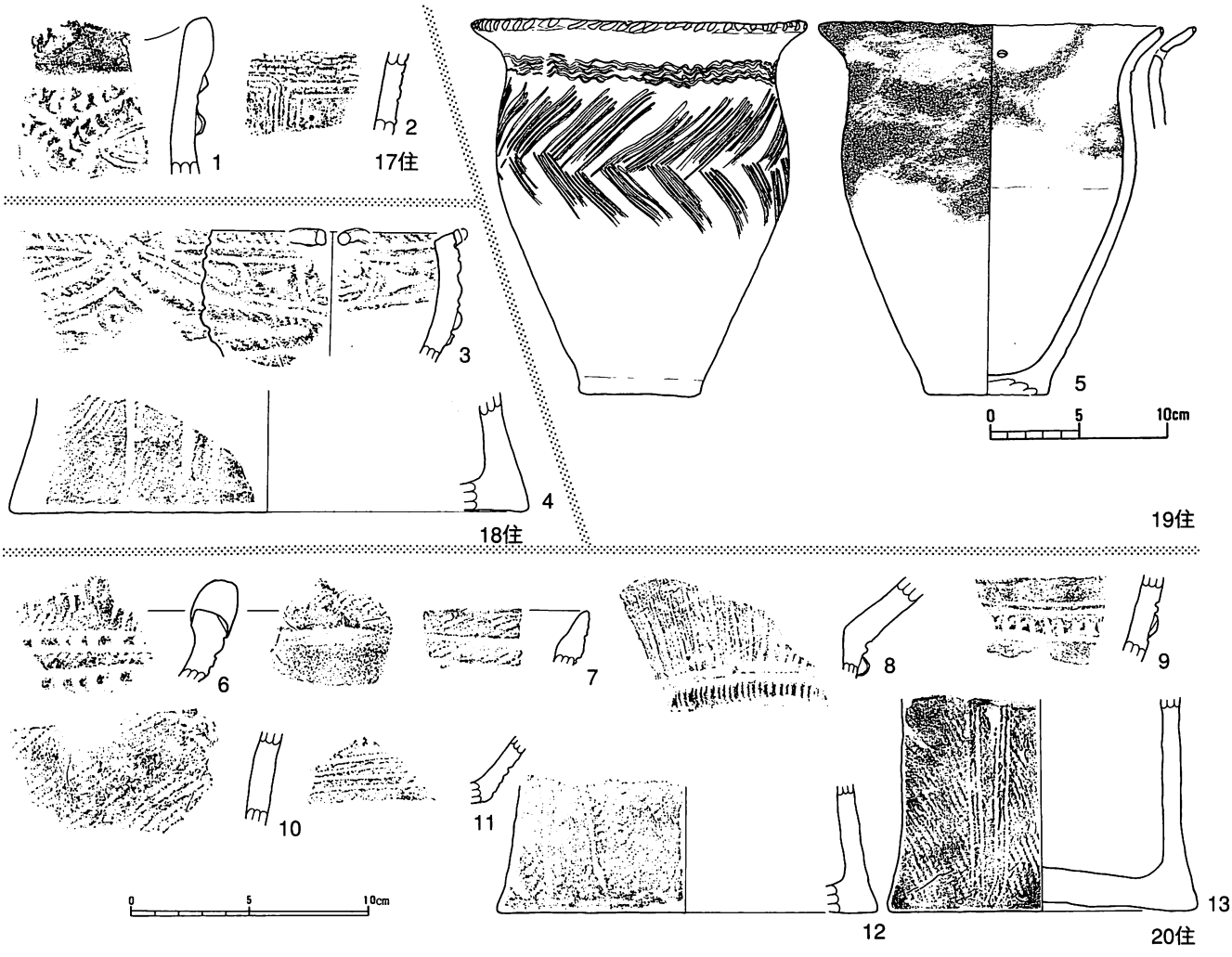
第38図　第20号住居跡

りやや小さい楕円形を呈し、径が64×57㎝、深さが13㎝を測る。炉の南東部には深鉢形土器の底部（第39図13）が認められ、これは埋甕として利用されていたのかもしれない。

（土坑）住居プランの北東部から貯蔵穴と考えられる土坑が認められ、規模は径が120×96、深さ55㎝を測る。遺物は、土器片２点と礫が１点出土している。

（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）耕作による削平のため、覆土がほとんど残っておらず遺物はとても少なかった。その主なものは、炉から出土した（第39図６～13）で、炉体土器として利用されていた　は縄文地に縦位の平行沈線文が施され



第39図　第17・18・19・20号住居跡出土土器

ている。

第21号住居跡（第40～44図）

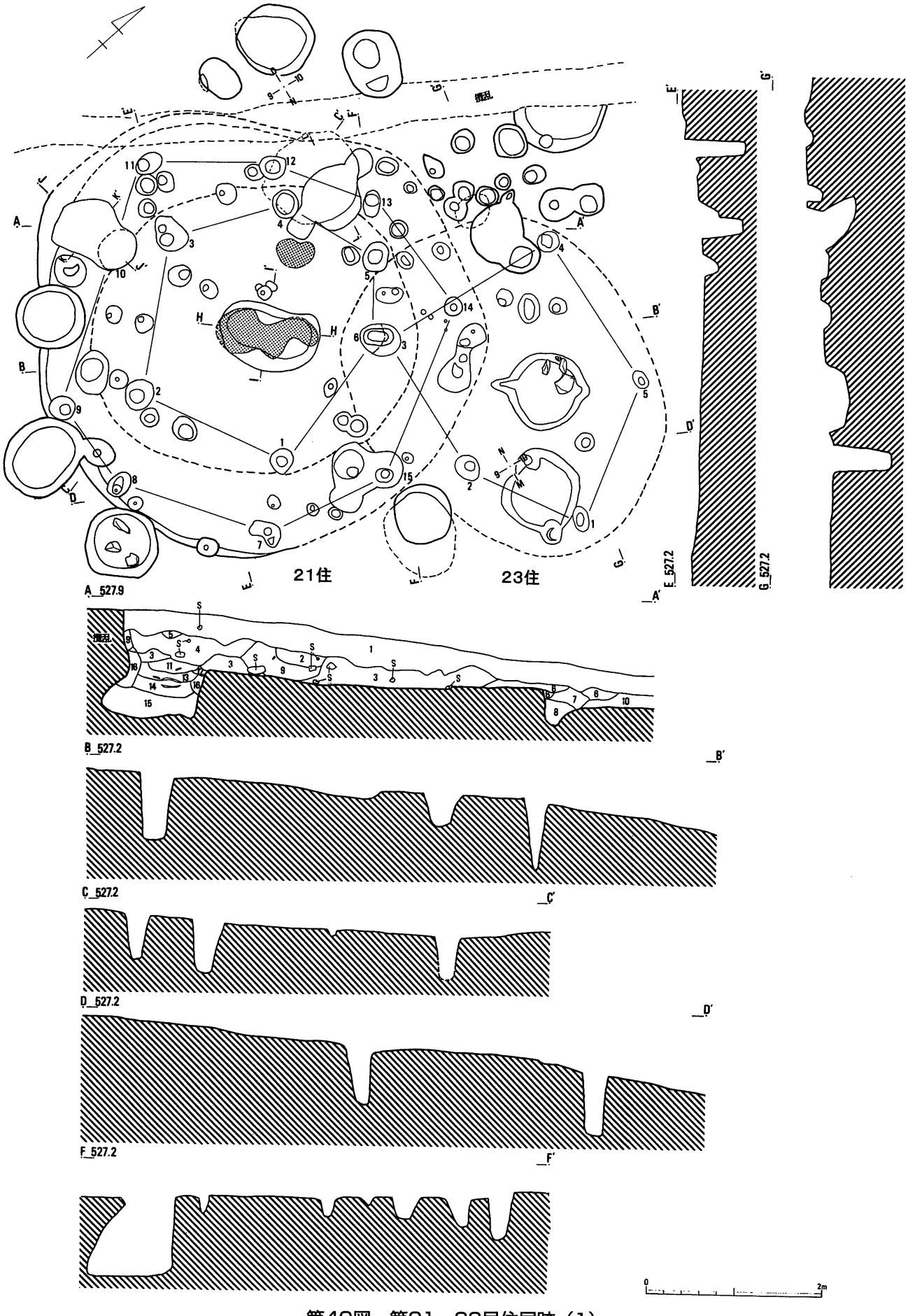
(位置) 調査区の南東端、N・O－9・10グリッドに位置している。居住域Aグループに所属する。

(重複・改築) 第23号住居跡に切られている。改築は1回行われている。

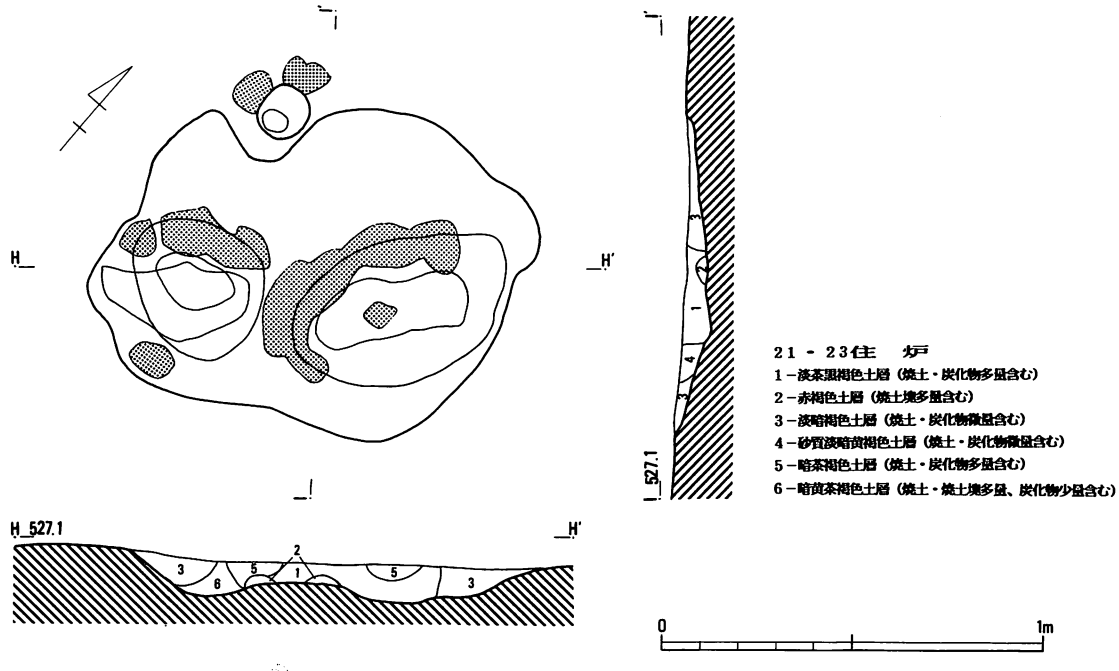
(形態・規模) 掘りこみはほとんど残っていなかったが、柱の配列から形態はほぼ円形を呈しているようである。規模は掘り込みが認められないため、柱穴列から推定すると改築前で径が3.60×3.20m、改築後で5.10×4.90mを測る。入口は柱穴の配列状況と炉の位置から、北東部と推定することができる。

(壁・周溝) 壁は西側が水道管敷設の際に攪乱を受けているなど条件が悪く、斜面の上側に位置している南側の壁しか残っていなかったが、最深部で30cm残っており、立ち上がりはやや急である。周溝は認められなかった。

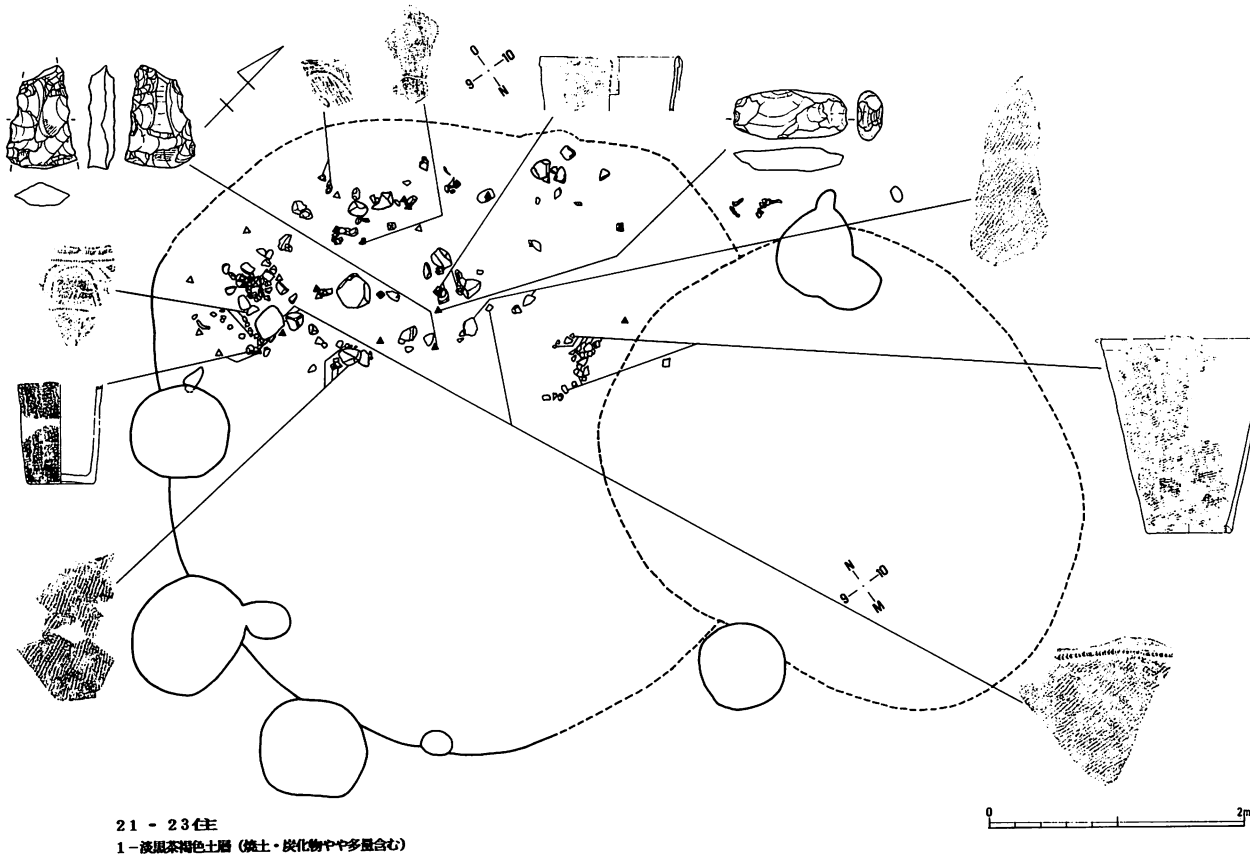
(柱穴) 主柱穴と考えられるものは15本認められ、この内訳は改築前で6本、改築後で9本であり、これらは壁沿いに巡っている。主柱穴と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。改築前ではピット1が径25×24、深さ31cm、ピット2は径35×30、深さ60cm、ピット3は径40×35、深さ48cm、ピット4は径32×30cm、深さは不明、ピット5は径35×28、深さ26cm、ピット6が径45×35、深さ37cm、を測る。改築後ではピット7が径35×20、深さ48cm、ピット8は35×27、深さ50cm、ピット9は径27×25、む深さ50cm、ピット10は径50×43、深さ60cm、ピット11は径30×22、深さ61cm、ピット12は径20×20、深さ25cm、ピット13は径30×20、深さは36cm、ピット14は径20×20、深さ28cm、ピット15は径40×40、深さ24cmを測る。主柱穴以外にも幾つかのピット



第40図　第21・23号住居跡（1）

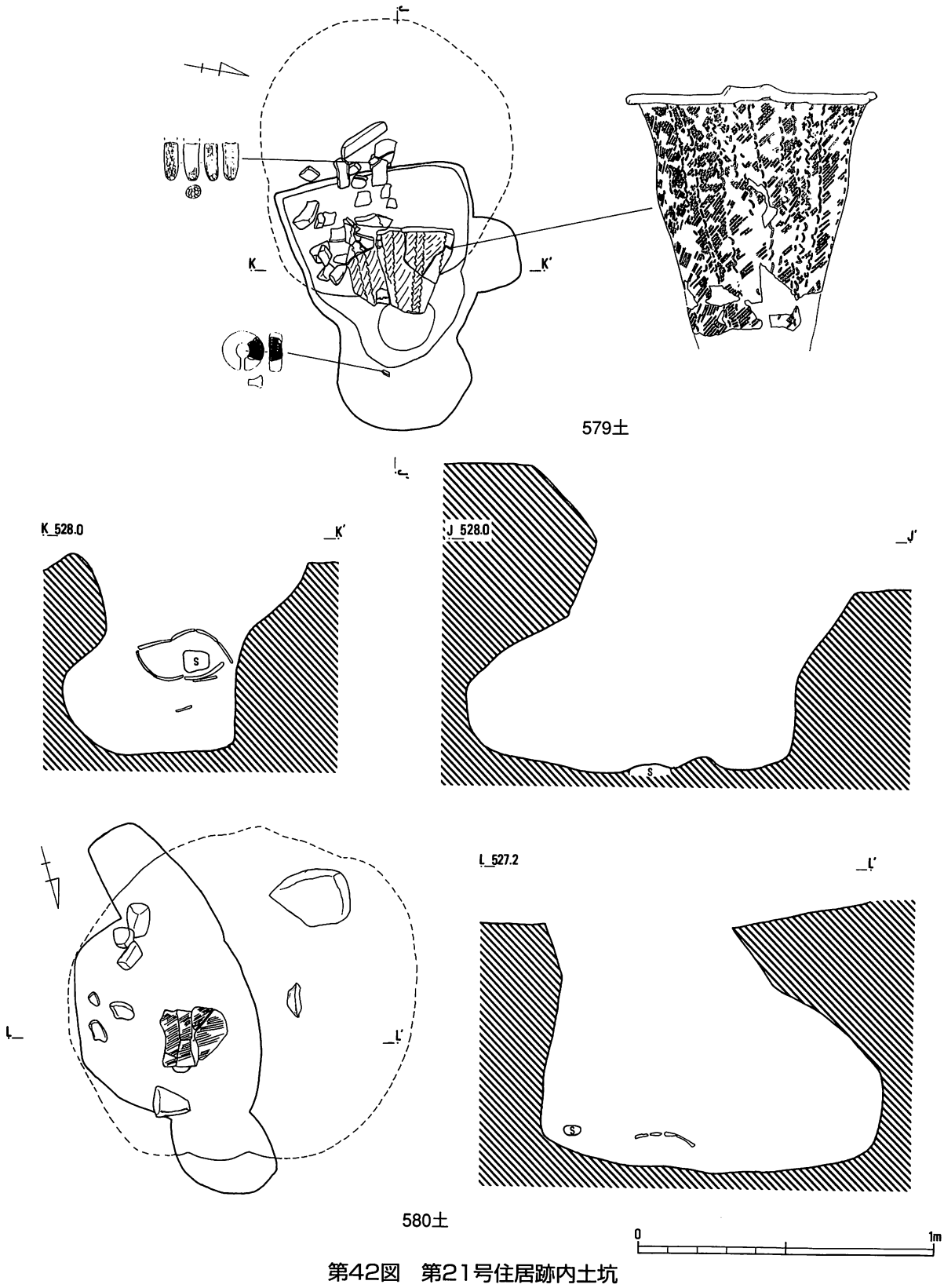


21 - 23住　炉
1－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
2－赤褐色土層（焼土塊多量含む）
3－淡暗褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
4－砂質淡暗黄褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
5－暗茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
6－暗黄茶褐色土層（焼土・焼土塊多量、炭化物少量含む）



21 - 23住
1－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
2－淡茶黒褐色土層（焼土微量含む）
3－砂質淡暗黄茶褐色土層（焼土やや多量、炭化物少量含む）
4－黒茶褐色土層（焼土・2㎝大ロームブロック少量、炭化物やや多量含む）
5－暗黄褐色土ロームブロック層
6－砂質淡暗茶褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子多量含む）
7－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物・5㎜～1㎝大ロームブロック少量含む）
8－砂質淡暗茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量、5㎜大ロームブロック微量含む）
9－淡暗茶褐色土層（焼土微量、ローム粒子少量含む）
10－暗黄茶褐色土層（炭化物微量、ローム粒子・5㎜大ロームブロック多量含む）
11－淡暗茶褐色土層（焼土・炭化物多量、ローム粒子やや多量含む）
12－黄褐色土層（ローム粒子多量含む）
13－暗褐色土層（焼土・炭化物・炭化材やや多量含む）
14－淡暗黄褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
15－淡暗褐色土層（焼土・炭化物やや多量、1㎝大の炭化材少量含む）
16－暗黄褐色土層（ローム粒子多量含む）

第41図　第21・23号住居跡（2）



第42図　第21号住居跡内土坑

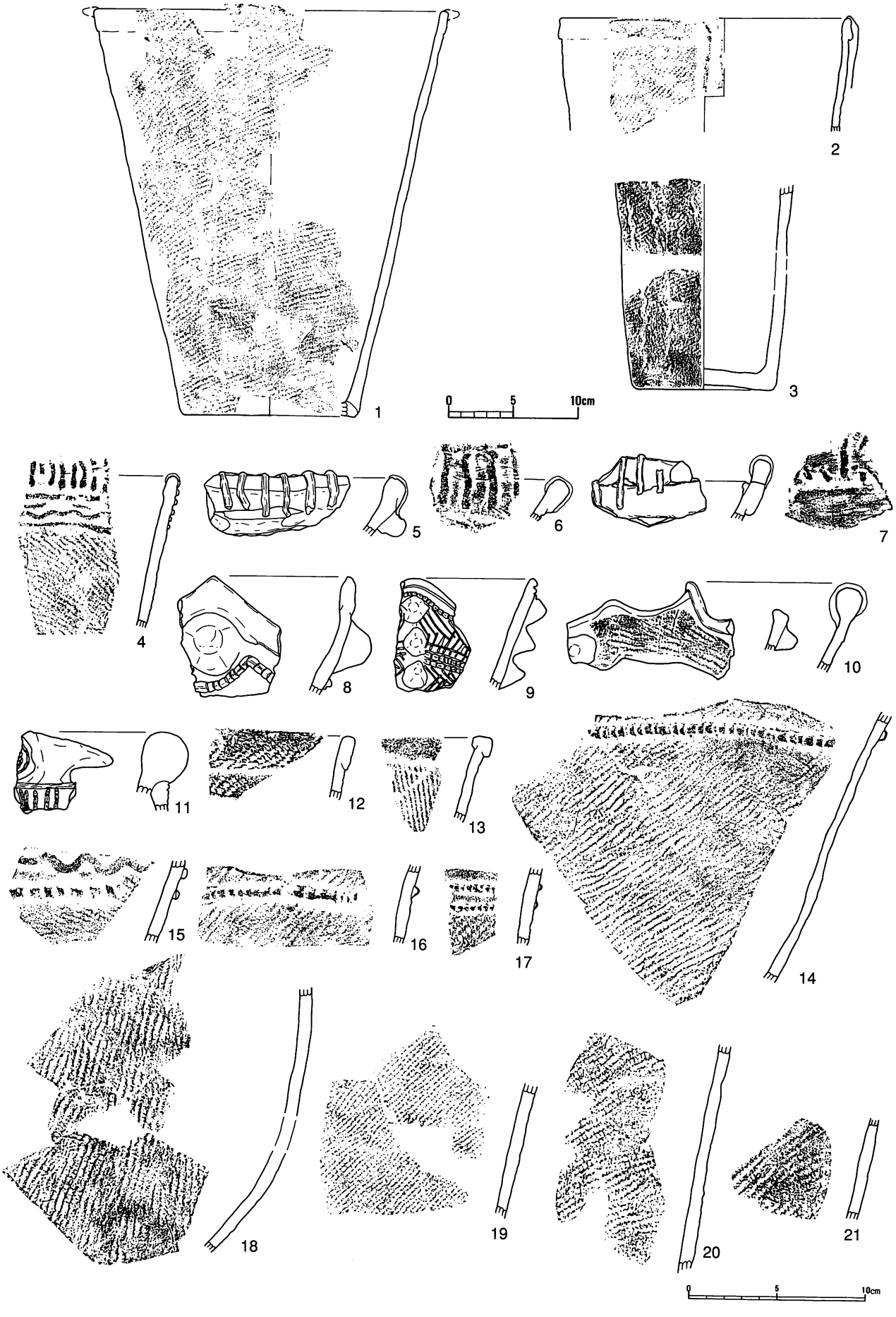
が認められるが、これらは補助柱穴としての性格が窺われ、径は10～20cmで深さが10～20cmを測ることができ、主柱穴よりやや小型である。

(炉) プランのほぼ中央付近で、不整形に93×34cmの範囲で焼土が分布する地床炉が存在し、掘り方はそれよりやや大きな楕円形を呈しており、径が115×78cm、深さが16cmを測るが、これは改築の前後で利用されたものであろう。またこの炉の北西部にも焼土が40×30cmの範囲で認められ、これについても地床炉と考えることができる。

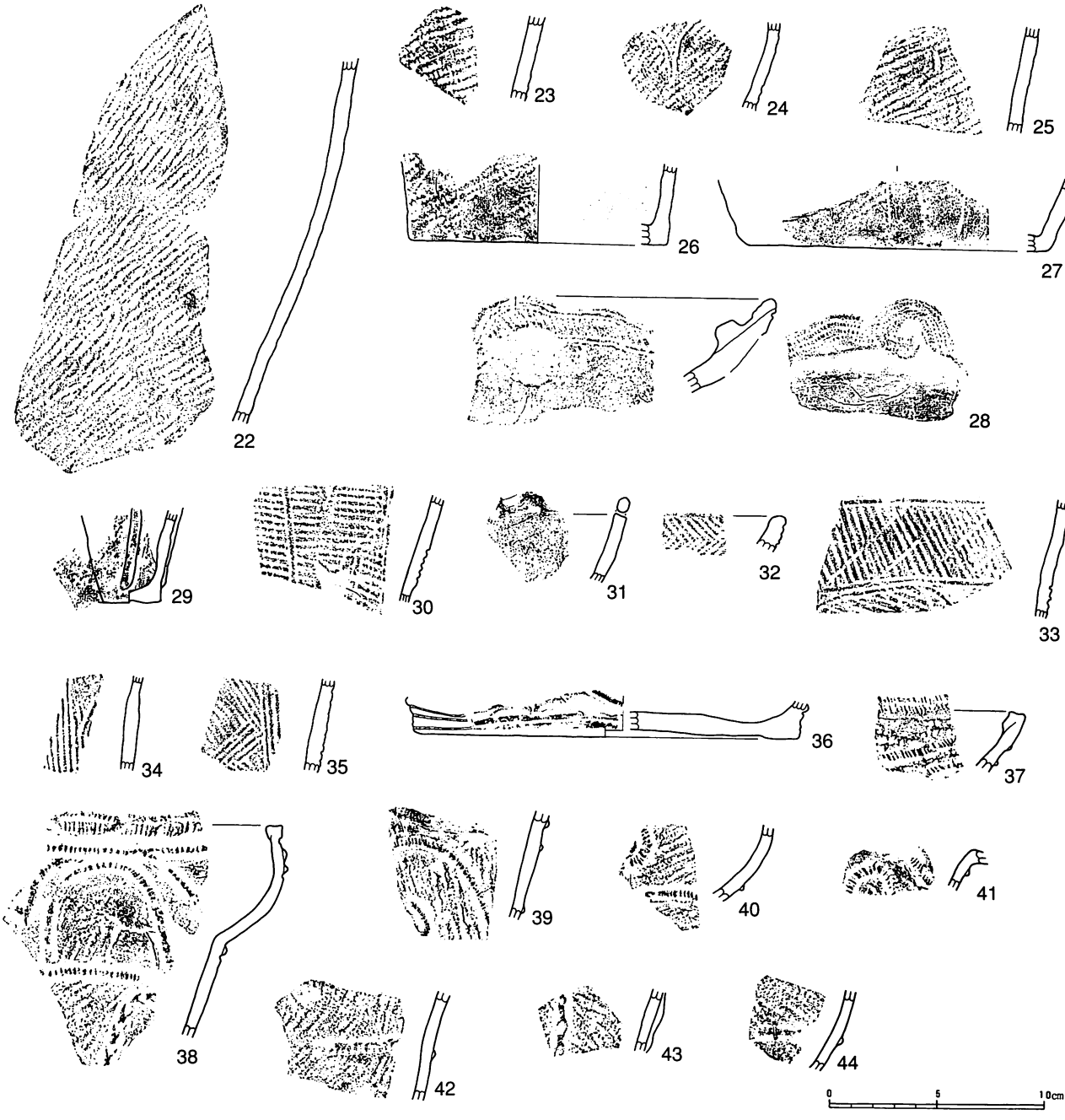
(土坑) 住居跡の西部に位置する第579号土坑と、北西部に位置する第580号土坑については、出土遺物から本跡ととても近い時期関係が窺えるが、切り合い関係から判断すると本跡より若干新しい段階に造られている事が分かっている。いくつかの土坑との切り合い関係が理解できるが、本跡に直接伴うものは一つもない。
(時期) 縄文時代前期末葉十三菩提式期 (大歳山式期)。
(出土遺物) 遺物の分布 (第41図) に偏りがあるのは、南側から東側にかけて覆土上部に攪乱が見られたことから遺構に伴った遺物が発見しにくい条件であったため、このような結果となってしまったことを触れておく。本住居跡からも第11号住居跡と同様に所謂関西系とされるものと、在地系の土器群との共伴関係が窺えた。覆土からは、多量の黒曜石の破片が認められ、この特徴は第11号住居跡と共通している。

土器では縄文を主体とした、粗製とされるタイプのものが多く認められた。第43図1は外側に開く円筒タイプのもので、推定径27㎝、推定器高31㎝、推定底径13㎝を測る深鉢形土器で、口唇部に輪積痕がある。2は口径が推定22㎝で、口縁部が外側に折り返してあり肥厚する。口縁部には隆帯が垂下する。3は胴下半部で底径10.5㎝を測り、縄文地上に縦位の結節縄文が施されている。4～7は無節の浮線文 (所謂ソーメン状貼付文) を持つもの。8～10は口縁部で、大型の円形貼付文を持つもの。11は口縁部の把手状の飾りと考えられるが、左側半分が欠失しているため、全体の形は不明である。器面には結節浮線文が施されている。12～21、第44図22～27は縄文が施されたものである。14～17は横位に太目の結節浮線文が充填されるもので、節は半裁竹管 (14・16・17) やへら状工具による刻み (15) がある。28は浅鉢形土器の口縁部で、口唇部が肥厚する。外面には横位に細い並行沈線文が二条走り、この沈線間には斜位の沈線が施され、内面には『の』字状突起が口唇部の肥厚した部分についており、細かくて細い連続爪形文が施されている。30は小形の深鉢形土器で、粗雑な造りである。色調が淡灰褐色を呈しており、底部に抉りが見られることから、関西系土器群を模倣したものと考えられる。31は口唇部に蛇と考えられる装飾が付いたものである。30～36は斜位、横位、縦位、格子目に集合沈線が施されるもので、35は縄文地が、36の底部は三角印刻文がある。38～44は関西系大歳山式で、Σ状工具の連続刺突による特殊突帯文があり、38の波頂部にはゾウリムシ状の貼付文がある。口辺部の器面には縄文地に半裁竹管による結節浮線文が、胴部 (38・43) には、浮線上に刻みがつけられた結節浮線文が施され、37・38は口唇部の肥厚した内面には縄文が充填される。色調はやや灰黒褐色がかっていて、器厚は在地系のものに比べて薄く、内面には指頭痕が残っている。石器では、石鏃8点 (第92図38～41ほか)、掻器3点 (第95図26、第96図33ほか)、石錐1点 (第98図4)、尖頭器1点 (第98図14)、大型削器1点 (第101図26)、石錘1点 (第104図3)、磨石7点 (第104図2、第107図26～30ほか)、石皿1点 (第112図8) とやや多目の遺物が出土している。
(特殊遺物) 火を受けて表面が劣化した第118図5の赤彩土製玦状耳飾1点、側面に交互刺突文、表面には刺突と集合沈線が施された土版 (第118図17) の破片が1点、胴部に凹が見られる小型板状土偶 (第113図2) が1点出土している。

第22号住居跡 (第15・16図)
(位置) 調査区の南東側、P－16、O－16・17グリッドに位置している。居住域Aグループに所属する。
(重複・改築) 第7・9住居跡を切り、第8号住居跡に切られている。
(形態・規模) 掘り込みはほとんど残っていなかったが、柱の配列から形態は楕円形を呈しているようである。規模は、掘り込みを認めることができなかったため、柱穴列から推定すると径が5.20×3.50mを測る。入口は柱穴の配列状況と埋甕の位置から、東部と推定することができる。プラン内には、住居跡建設時の掘り方と考えられる落ち込みが約5㎝の深さで認めることができる。
(壁・周溝) 壁は構との切り合いで全く残っていない。周溝は北西部で部分的に認めることができ、幅は14～20㎝、深さは8～10㎝の規模である。
(柱穴) 主柱穴と考えられるものは確認できたものが5本であり、主柱穴と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1は径30×21、深さ20㎝、ピット2は径55×40、深さ36㎝、ピット3は径40×30、深さ50㎝、ピット4は径35×20、深さは50㎝、ピット5は径42×30、深さは不明である。



第43図　第21号住居跡出土土器（1）



第44図　第21号住居跡出土土器（2）

（炉）遺構の上に構築されていたこともあり、現状では確認することができなかった。

（埋甕）住居跡の北東部に位置するピット５に隣接する部分に、底部が穿孔され正位に埋設された深鉢形土器（第19図１）が認められた。掘り方の規模は、径が70×62cm、深さが48cmを測る。第７号住居跡の炉体土器のレベルと本跡の埋甕のレベル差は約10cmあり、このことが、時期差を示す何よりの証拠である。

（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）第19図１はキャリパー形を呈する深鉢形土器の胴上半部で、本住居跡に付随する確実な遺物は本資料のみである。口縁部には半円弧文が見られ、この文様間には円形の添付文が施され、胴部にはＹ字状の隆帯によって縦位に四分割されている。石器では掻器（第94図８）が1点出土している。

第23号住居跡（第40・41・46図）

（位置）調査区の南東端、Ｍ・Ｎ－９・10グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。

（重複・改築）第21号住居跡を切られている。

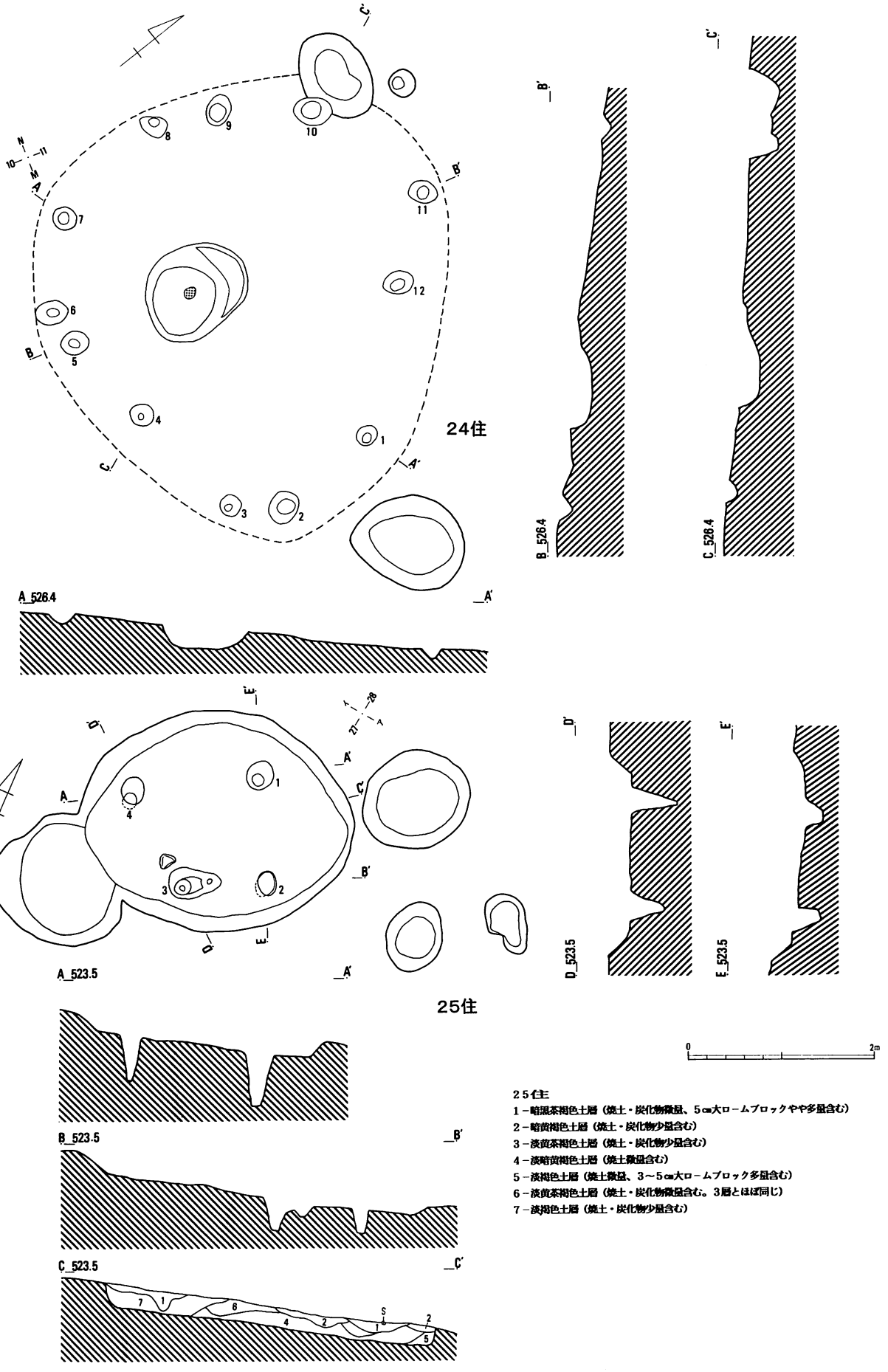
（形態・規模）掘り込みは全く残っていなかったが、柱の配列から形態は東西に長い楕円形を呈しているようである。規模は掘り込みが認められないため、柱穴列から推定すると径が3.80×3.20ｍを測る。入口は、柱穴の配列状況からは西側と考えられるが、ピット３・４の間に焼土の分布する地点が存在することから炉の可能性が示唆され、このことから対角線側の東部、ピット１・５の間と推定される。
（壁・周溝）壁は表土が浅かったことなどもあり、全く残っていなかった。また周溝も認められなかった。
（柱穴）主柱穴と考えられるものは５本認められた。主柱穴と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１が径28×25、深さ39㎝、ピット２は径30×23、深さ55㎝、ピット３は径44×35、深さ37㎝、ピット４は径24×23、深さは25㎝、ピット５は径20×15、深さ17㎝を測る。
（炉）プランの西側、ピット３・４の間付近で、焼土が散在する地点があり恐らくこれが地床炉と考えられる。
（ピット群）住居跡の西部に15本の小ピットが、ほぼ円形に集中する。当初住居跡の可能性も視野に入れて考えていたが、分布の状況に規則性が窺えないことからピット群とした。分布範囲は4.30×2.50ｍで、主なピットの規模は径が20～30㎝、深さが10～20㎝を測る。出土遺物から本跡ととても近い時期関係が窺えるが、本跡に直接伴うものかどうかは疑問が残る。
（時期）縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。
（出土遺物）掘り込みがほとんど確認できなかったため、覆土の残りが悪く遺物はほとんど認められなかった。第46図１～22が本住居跡から出土した土器で、沈線文を主体とした構成になっている。1～20が深鉢形土器で、21・22は浅鉢形土器である。石器では、第107図33に示した磨石が1点出土しているのみてある。

第24号住居跡（第45・46図）

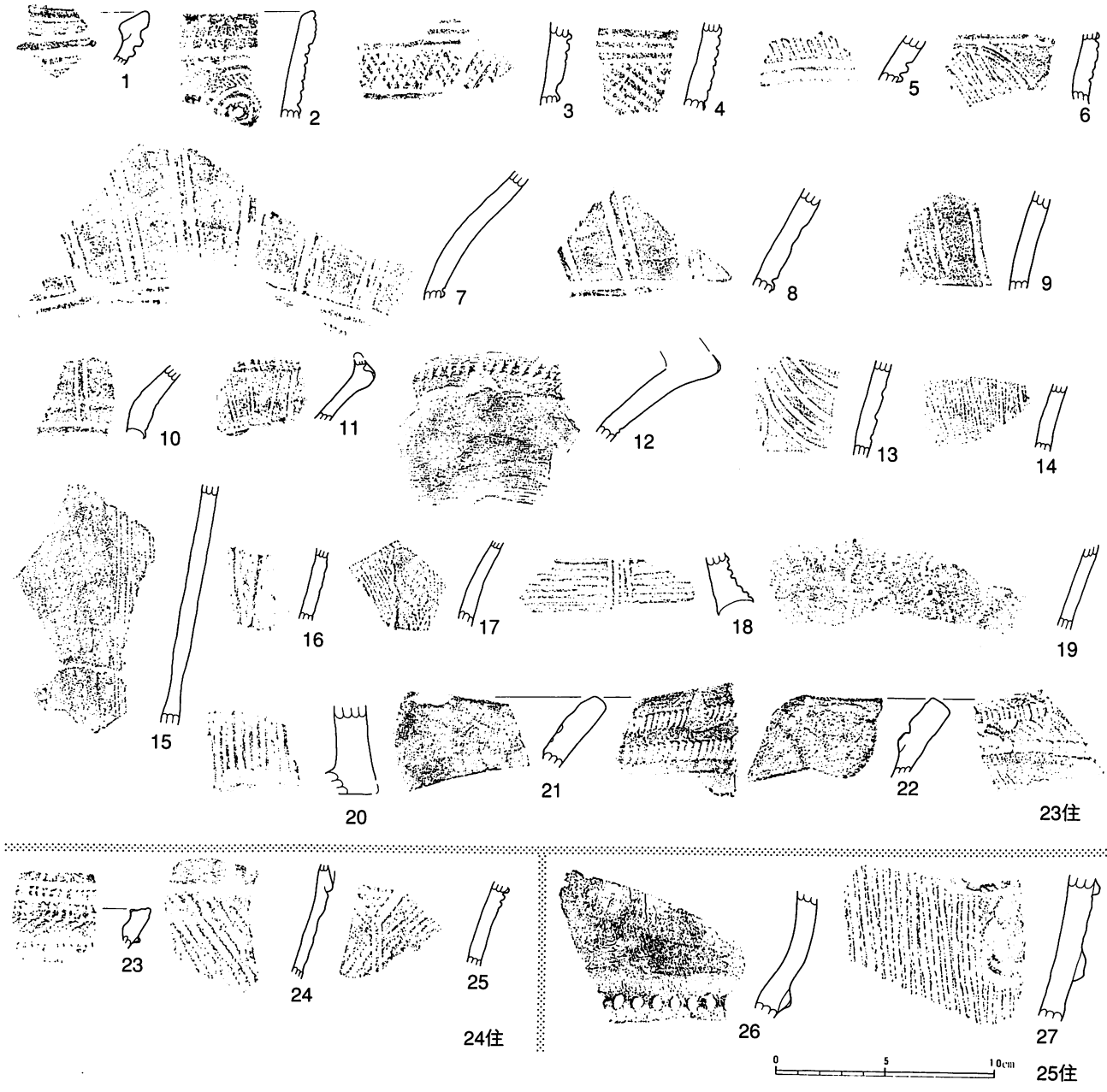
（位置）調査区の南東端、Ｍ－10・11グリッドに位置している。居住域Ａグループに所属する。
（重複・改築）なし。
（形態・規模）掘り込みは全く残っていないが、柱の配列から形態は玉子形をした不整楕円形を呈しているようである。規模は掘り込みが認められないため、柱穴列から推定すると径が4.70×4.30ｍを測る。入口は柱穴の配列状況と炉の位置から、東部と推定することができる。
（壁・周溝）壁は表土が浅かったこともあり、全く残っていなかった。周溝も同様に、認めることはできなかった。
（柱穴）主柱穴と考えられるものは12本認められ、これらは壁沿いに巡っている。主柱穴と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１は径23×20、深さ15㎝、ピット２は径35×30、深さ９㎝、ピット３は径24×23、深さ16㎝、ピット４は径25×23㎝、深さは22㎝、ピット５は径30×20、深さ14㎝、ピット６が径35×25、深さ11㎝、ピット７が径26×25、深さ11㎝、ピット８は29×20、深さ20㎝、ピット９は径34×25、深さ19㎝、ピット10は径40×30、深さ35㎝、ピット11は径30×24、深さ12㎝、ピット12は径35×25、深さ11㎝を測る。
（炉）プランの南西寄りの付近で、ほぼ円形に15×12㎝の範囲で焼土が分布する地床炉が存在し、掘り方はそれより更に大きな円形を呈しており、北側に向かって約30㎝のテラスを持ち、本体部分では径が90㎝、深さが25㎝を測り、覆土からは関西系の土器破片が出土した。
（時期）縄文時代前期末葉十三菩提式期。
（出土遺物）図示したものは、炉から出土したものである。第46図23～25が本住居跡から出土した土器で、23は口唇部上にΣ状工具による刻みを持つ、関西系の大歳山式である。24・25は地に縄文が施され、26は肥厚した口唇部を持つ口縁部、27は並行沈線によってＹ字状文が施された胴上半部である。

第25号住居跡（第45・46図）

（位置）調査区の中央付近、ア・イ－27グリッドに位置している。居住域Ｄグループに所属する。他の住居跡に比べて小規模であるため、一般的な住居跡としての機能があったのか疑問が残る。



第45図　第24・25号住居跡



第46図　第23・24・25号住居跡出土土器

（重複・改築）なし。

（形態・規模）掘り込みはよく残っており、南西部を第503号土坑に切られているが支障は無く、形態は楕円形を呈しているようである。

規模は径が3.00×2.35mを測る。占地の状況と柱穴の配列状況から北西部と推定することができる。

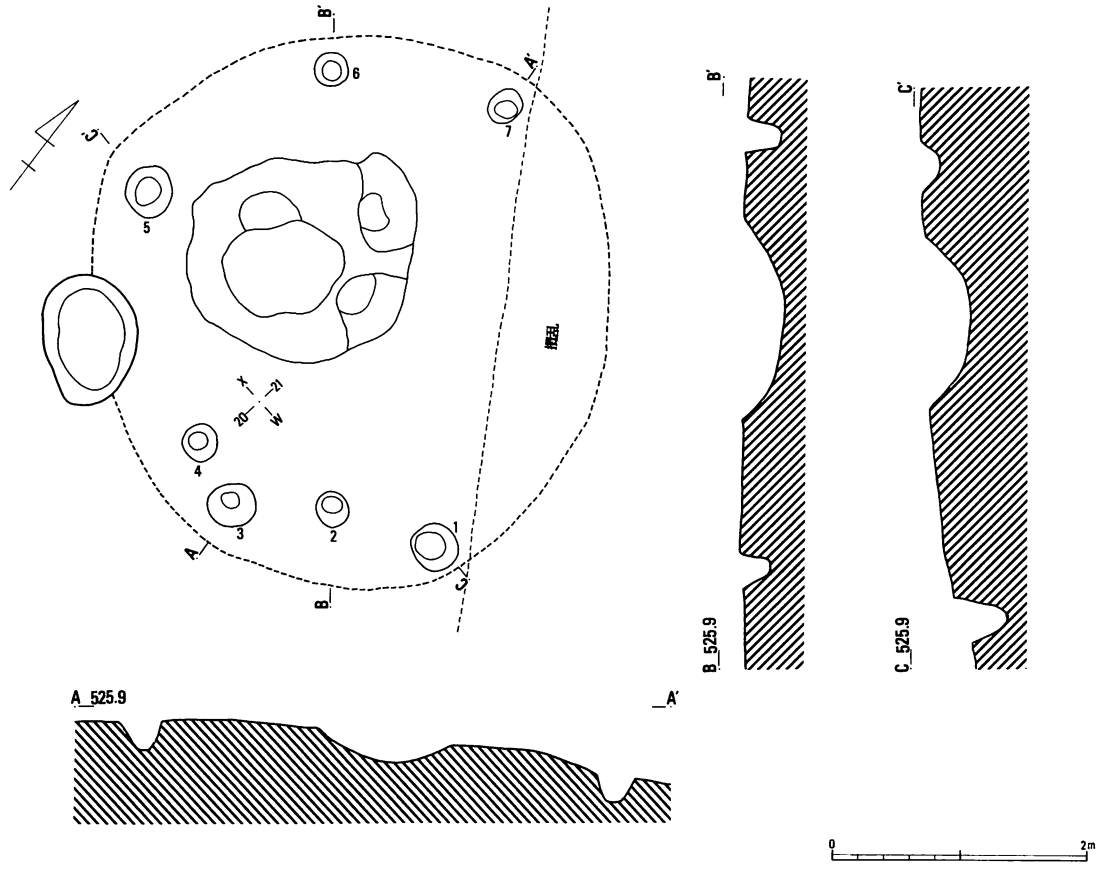
（壁・周溝）壁は良く残っており、立ち上がりはやや緩やかで、最深部で33cmを測る。周溝は認められなかった。

（柱穴）主柱穴と考えられるものは4本認められ、各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1は径33×26、深さ55cm、ピット2は径25×20、深さ30cm、ピット3は径57×34、深さ37cm、ピット4は径30×25、深さは50cmを測る。

（炉）確認することができなかった。

（時期）縄文時代中期後葉曽利Ⅰ式期。

（出土遺物）遺物は、土器片が少量出土したに過ぎない。第46図26は無文の口縁部で、大きく内湾する口唇部が欠失している。内面には炭化物が付着している。27は縦位の集合沈線上にU字状の隆帯が付いている。



第47図　第26号住居跡

第26号住居跡（第47図）

（位置）調査区の南東端、W・X－20・21グリッドに位置している。居住域Bグループに所属する。

（重複・改築）なし。第４・５・26号土坑と切り合う。

（形態・規模）床面が削平されている事から掘り込みが全く残っておらず、また北東部の約1/3程度が畑の造成の際に削平されており、残存状況はあまり良くない。柱の配列から形態はほぼ円形を呈しているようである。規模は掘り込みが認められないため、柱穴列から推定すると径が4.40×4.30ｍを測る。入口は柱穴の配列状況と地形から、東部ないし北東部と推定することができる。

（壁・周溝）壁は表土が浅かったこともあり、全く残っていなかった。また、周溝も同様に認めることはできなかった。

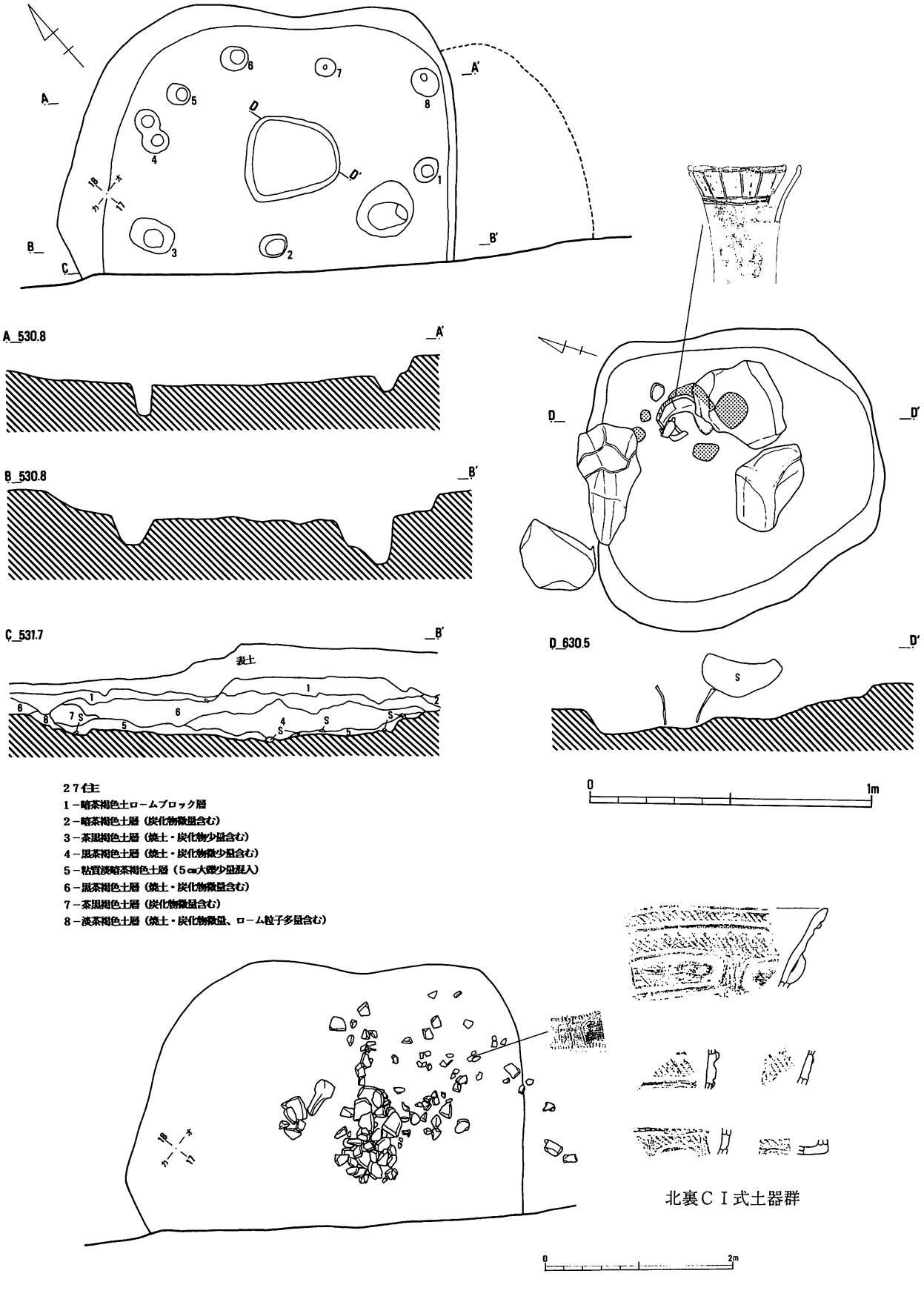
（柱穴）主柱穴と考えられるものは、攪乱を受けた地点以外から確認できたものだけで７本認められた。主柱穴と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１は径37×35、深さ39cm、ピット２は径27×25、深さ21cm、ピット３は径38×32、深さ24cm、ピット４は径30×25cm、深さは10cm、ピット５は径40×38、深さ16cm、ピット６が径28×26、深さ27cm、ピット７が径28×23、深さ22cmを測る。

（炉）床面が削平されている事から明確なものが確認できなかったが、プランの中央南東寄りの付近で床面が赤化している部分が径約１ｍの範囲で認められたが、これが炉として良いものか不明である。

（土坑）プランのほぼ中央付近に第４・５・26号土坑が存在し、これらの遺構からは黒曜石のチップを中心とした多数の遺物が認められたが、本住居跡に関連する遺構の可能性が示唆される。また北西部に隣接する第504号土坑についても、その関連性が指摘できる。

（時期）縄文時代中期前葉狢沢式期。

（出土遺物）図示できるような遺物は無かった。



27住
1－暗茶褐色土ロームブロック層
2－暗茶褐色土層（炭化物微量含む）
3－茶黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
4－黒茶褐色土層（焼土・炭化物微少量含む）
5－粘質淡暗茶褐色土層（5㎝大礫少量混入）
6－黒茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
7－茶黒褐色土層（炭化物微量含む）
8－淡茶褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子多量含む）

北裏ＣⅠ式土器群

第48図　第27号住居跡

第27号住居跡（第48・49図）

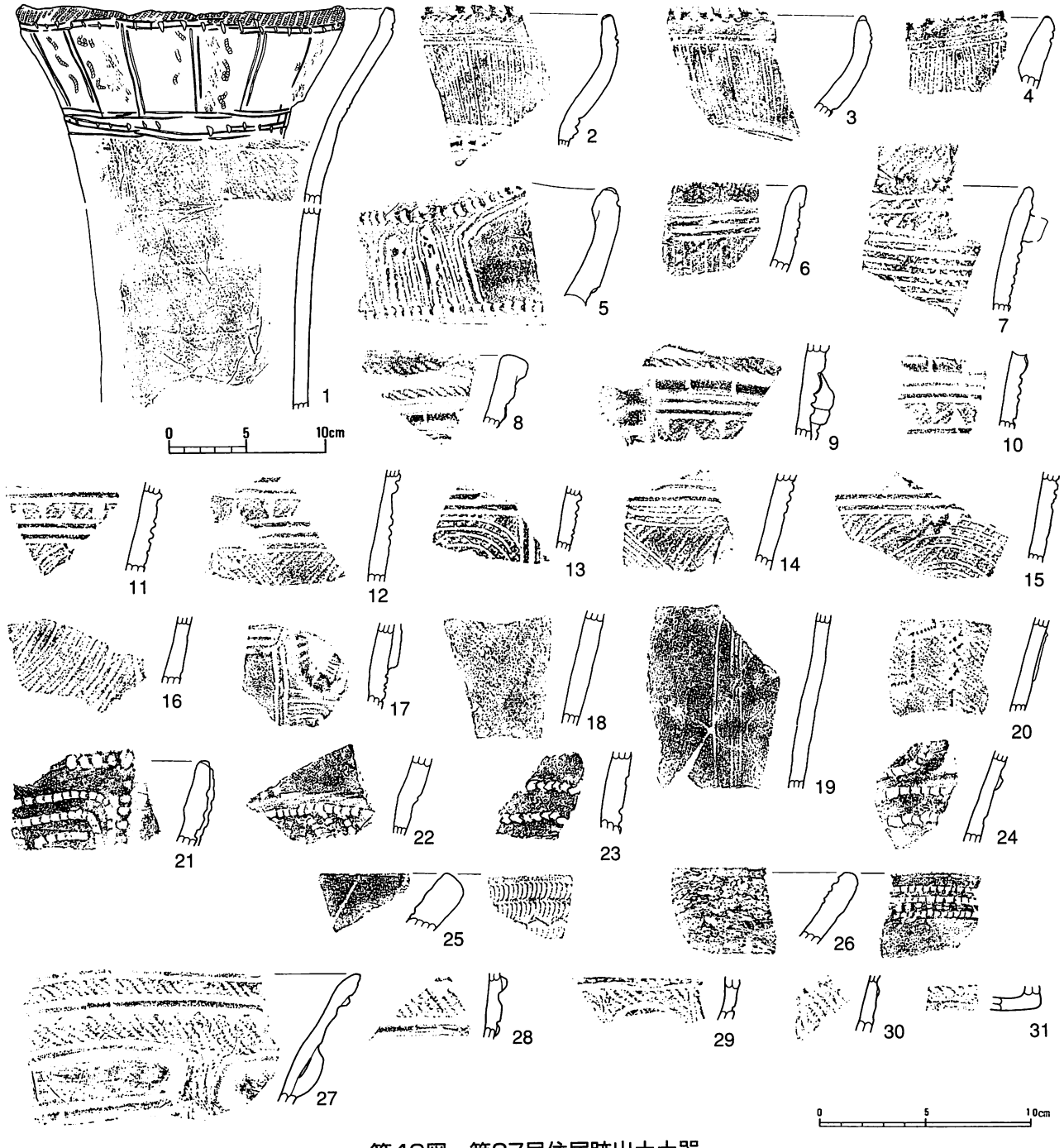
（位置）調査区の中央南側、オ－17・18グリッドに位置している。居住域Ｃグループに所属する。

（重複・改築）なし。

（形態・規模）南西部約1/2が調査区外に位置しており、住居跡東側に自然礫を集積した遺構状のものと切り合い、掘り込みは良く残っていて、形態は東西方向に長い楕円形を呈しているようである。規模は最大径が4.30ｍで、短径は現存値で2.75ｍを測る。入口は柱穴の配列状況と炉の位置から、北西部と推定することができる。

（壁・周溝）壁は緩やかな立ち上がりで、深さが平均で約20㎝を測ることができる。周溝は認められなかった。

（柱穴）主柱穴と考えられるものは12本認められ、これらは壁沿いに巡っている。主柱穴と認識した各ピットの規模は以下のとおりである。ピット１は径30×24、深さ27㎝、ピット２は径30×25、深さ15㎝、ピット３は径45×35、深さ30㎝、ピット４は径26×25㎝、深さは21㎝、ピット５は径25×20、深さ33㎝、ピット６が径30×25、深さ36㎝、ピット７が径23×19、深さ15㎝、ピット８は32×26、深さ20㎝を測る。



第49図　第27号住居跡出土土器

(炉) プランの中央付近で、小型の深鉢形土器（第49図１）が設置された石囲埋甕炉が認められ、その掘り方は不整楕円形を呈しており、径が100㎝、深さが10㎝程度で、埋甕周辺に焼土が分布する。石囲いは全周するものではなく、東西方向にそれぞれ30～50㎝大の礫を２個ずつ配置している。
(時期) 縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期。
(出土遺物) 在地形の土器群と共に、東海系の北裏ＣⅠ式土器が伴出している。第49図１は推定径24㎝の深鉢形土器である。器面には縄文が施され、口唇部と口辺部の横位並行沈線上に刻みを持ち、口辺部には縦位の並行沈線が巡る。２～５、17、19、21の沈線文系、６～16、18は縄文系で11～13は交互刺突文を持つ。20は縄文地に結節浮線文がクランク状に配された十三菩提式、21～24は押し引きによる角押し文が施された狢沢式で、これらは主に自然礫を集積した遺構状の覆土内から出土したものであり、遺構の年代を示すものかもしれない。石器では、石鏃４点（第92図42、第93図43～45)、掻器２点、石錐１点（第98図８)、磨石１点である。

第２項　竪穴状遺構（第50図）

(位置) 調査区の中央やや南側、Ｗ・Ｘ－17・18グリッド。
(形態・規模) 形態は不整円形を呈し、規模は長径4.37m、短径3.24mを測る。プランの北東側に大小様々な礫が混在しているが、覆土中には焼土や炭化物の存在が見られないことから野外調理施設的な性格は考えにくい。
(壁・周溝) 壁は緩やかに立ち上り、深さ10～20㎝を測る。周溝は存在しない。
(柱穴) 確認された柱穴は３本である。ピット１は径45×43、深さ25.5㎝、ピット２は径47×43、深さ38.7㎝、ピット３は25×24、深さ29.4㎝を測る。
(その他の施設) 東側に、同時期の用途不明な土坑状遺構が３箇所認められる。
(時期) 縄文時代中期前半の狢沢式期
(出土遺物) 狢沢式期の土器が出土しているが、破片資料が主体で図示出来るものはない。

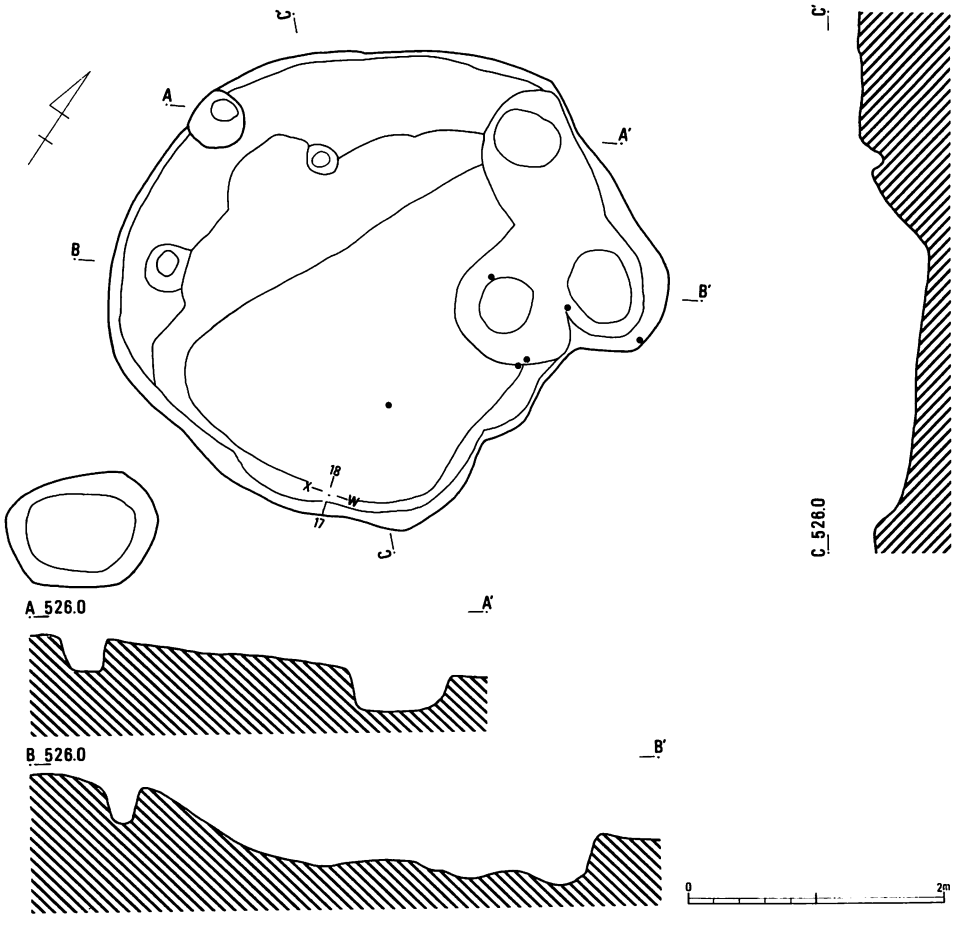
第３項　土坑

３次にわたる調査の結果、土坑として認識できるものが607基発見された。土坑として命名したものの中には、所謂性格不明の穴のほか、墓や貯蔵用の穴と考えられるものがある。この他、本来分類上分割して認識すべきなのであろうが、調査の便宜上、一部単独埋甕と考えられるものや、陥し穴、集石、風倒木の跡といったものもここに一括したことを記しておく。

ここでは紙面の都合上、各土坑ごとの詳細な情報については記述できないため、個別の時期および規模、出土遺物などに関する内容については、第５表に示したので参考にしていただきたい。時期別に見たときの内訳では、607基中約70パーセントにあたる416基は縄文時代と考えられるが詳細な時期は不明で、残りの191基については縄文時代前期末葉十三菩提式期14基、中期初頭五領ヶ台式期140基、中期前葉狢沢式期14基、中期前葉新道式期１期、中期中葉藤内～井戸尻式期６基、中期後葉曽利式期9基、後期前葉堀之内式期６基、弥生時代中期１基となっており、時期が判明しているものの約80パーセントが縄文時代前期末葉から中期初頭段階に位置付けられ、居住域との関連性が強いことを明確に示している。

(遺構および特記事項)（第51～67図）（第５表）

性格が考察できるものなど特筆すべきものについては、以下のとおりである。第57号土坑では、袋状を呈した坑内の中層付近から、多量の焼土と小礫が認められ、在地系の土器群と共に関西系の土器群である大歳山式の粗製タイプ（第70図25）の深鉢形土器などが混在していた。また中期初頭に見られるカッパ形土偶の祖形を思わせるもので、頭部に貼付文を持った「猫の手」のような形をした板状の土偶（第113図１）も、これら土器類とほぼ同一レベルから出土している。第68号土坑は、60㎝大の板状の礫が重なって出土し、特に伴出遺物は認められなかったが、形態的な特徴から墓の可能性がある。第69号土坑では、中層付近から土器の底部（第69図56）などと共に、土偶の脚部（第116図46・47）が二点出土した。第70号土坑では、南側に隣接する一段階古い土坑に伴って、三つに割れた台石状の石皿（第112図５）が壁沿いから出土している。第71号土坑は袋状を呈し、



第50図　竪穴状遺構

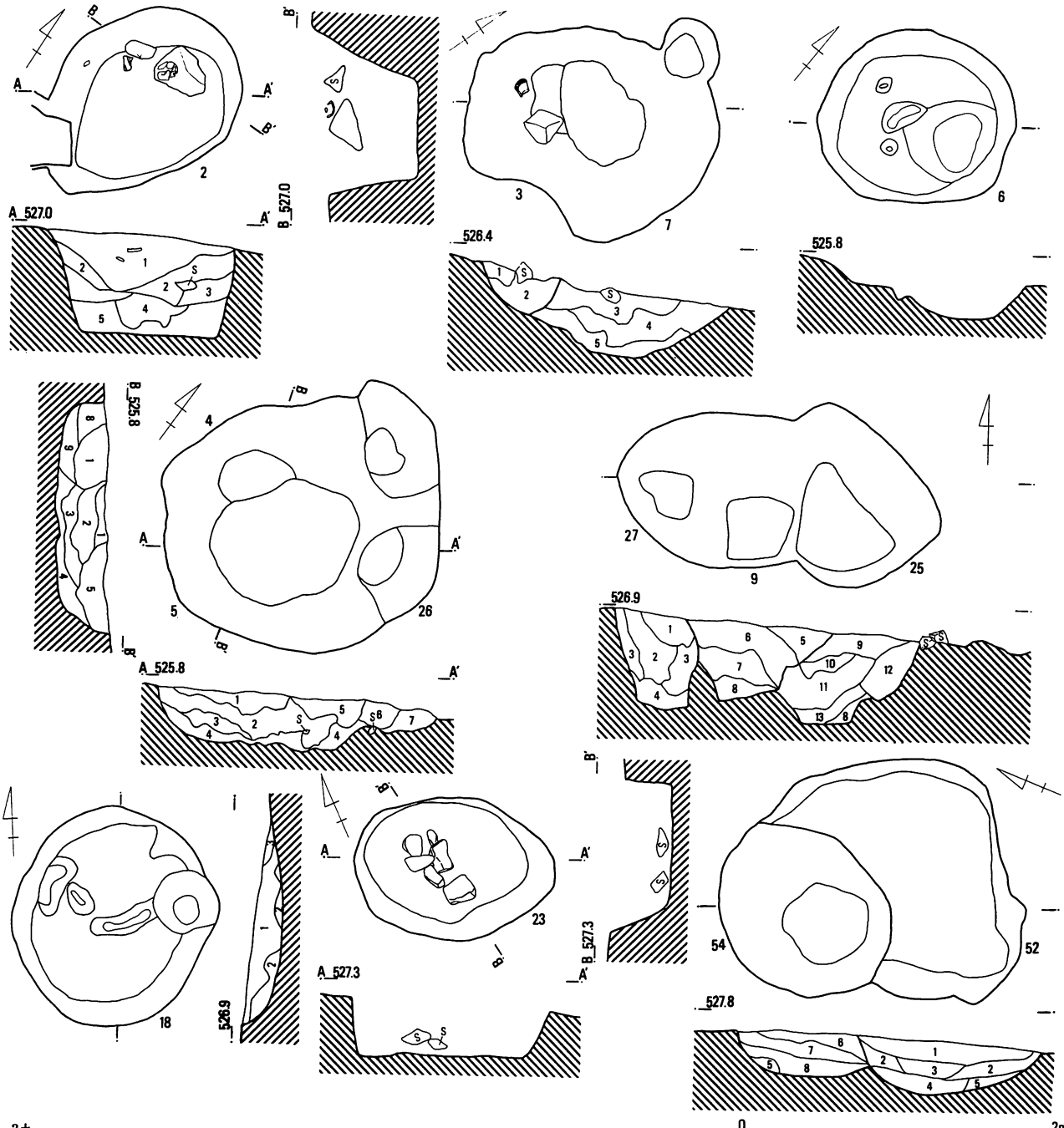
坑底部付近から約50cm大の板状礫が認められ、その上部から口縁部と胴上半部の約三分の一を打ち欠いた深鉢形土器（第77図413）が横位で出土した。本土坑は、特殊な遺物の出土状況から墓の可能性が考えられる。第80号土坑は、上層部が撹乱を受けていたが下層部分には全く影響が無かった。本遺構は一部袋状を呈しており、覆土中から多数の礫共に深鉢形土器の底部穿孔された胴下半部（第77図412）が正位で出土し、土器の下からは炭化したオニグルミが認められた。この土器内の土壌のリン酸分析を行った結果（附編１）、その含有量の富化が指摘でき、本遺構の性格が埋葬に伴った墓の可能性が考えられる。第98号土坑では、多数の礫と共に土製円盤が１点出土している。第99号土坑は、覆土全体に炭化物が多く認められ、この中にオニグルミが認められた。また坑底部から小型深鉢形土器（第87図99）が横位で出土し、この上方には20～40cm大の礫が配されており、墓としての性格が強いものと考えられる。第116号土坑からは、炭化材が出土している。第122・123号土坑からは、覆土内から多数の石器が出土しており、副葬品的な意味合いとして考えるなら墓としての性格が強いかもしれない。第146号土坑からは、こぶし大の礫が集中し、上部の礫を除去したところ坑底部に「目」の字状の配石が認められた。第161号土坑には、坑底部のほぼ中央付近に径が約15cmで、深さが約50cmを測る小ピットが認められ、このような形態的特徴から陥し穴と考えられる。第162・184・185・367・491・567号土坑では、焼けた礫が集中し、覆土中には多量の炭化物が認められ、また第196号土坑では上層部から多量の礫が認められ、その下部から多量の炭化物並びに焼土が存在したことから、野外調理施設と考えられる。第218号土坑は沢に近い斜面部から発見され、底部が穿孔された深鉢形土器（第77図416）の胴下半部が正位で埋設されており、前述のような占地の特徴からも墓として捉えられるものである。第227号土坑は、中層付近から礫並びに炭化物が混在していた。第282号土坑では、長楕円形プランの坑底部に径が10cm大のピットが２基認められ、これも陥し穴と考えられるものである。第300号土坑では、確認面から土器並びに礫が多数認められ、このようなことから墓の可

能性がある。第303号土坑には、長楕円形プランの坑底部に径が10cm大のピットが3基認められ、これも陥し穴と考えられるものである。第323号土坑では、上層付近から多量の炭化物と焼土が認められた。第367号土坑は、多量の礫が確認面に認められ、この礫群の周辺およびその直下から多量の炭化物と焼土が認められた。第484号土坑では、多量の焼土・炭化物と共に大小さまざまな礫と共に、石鏃などの石器が3点出土したが、これは一般的な集石と異なり覆土の下層部分にまで炭化物や礫類が混在するのが特徴である。第442号土坑では、多量の焼土が見られ、本土坑を切って隣接する第481・482号土坑からは20～30cm大の礫が集中していることから、祭祀的な色彩が強いものと考えられる。第490号土坑からは磨製石斧（第103図2）と土偶（第113図12）の腕部分が出土したことから、これらを副葬品として捉えるならば墓の可能性がある。第491号土坑は、坑底部付近に礫が集中し、覆土中に多量の炭化物がされていた。本土坑は、確認面から礫が検出される他の集石土坑とは異なった在り方を示している。第501号土坑は片側に張り出した袋状を呈し、中層付近に置かれた40cm大の大型礫の下部に、鉢形土器（第77図421）が正位で出土し、このような状況から墓と考えられる。第510号土坑では、口縁部から胴上部にかけての約3分の1が、意図的に破壊された深鉢形土器（第77図411）が横位で出土した。このように、完形個体を意図的に破壊して埋設する行為は他の遺跡にも見られるものであるが、器種としては浅鉢形土器が多く、深鉢形土器の利用は珍しいようである。第568号土坑からは、集石が認められ、炭化物を包含する層に礫が混在していた。第579号土坑は第21号住居跡内から認められたが、本土坑の方が切り合い関係から若干新しいようである。本土坑からは、中層付近から底部が破壊された深鉢形土器が横位で出土したが、この他用途不明の土製品や打製石斧などの石器類が伴出しており、墓として機能していた可能性が強い。第580号土坑では袋状を呈しており、坑底付近から胴部破片が覆い被せるように出土しているほか、石鏃などの石器類と関西系大歳山式の土器破片も伴出している。

前述のような主要土坑の概要から、その性格別に分類すると以下のようになる。墓と考えられるものには、第68・71・80・99・122・123・196・227・300・371・490・510・579・580号土坑が挙げることができ、これとは別に祭祀的な要素が強く認められるものには、第57・69・249・323・484・号土坑などがある。貯蔵用に用いられたと考えられる袋状もしくはフラスコ状を呈したものには、第30・79・121・137・140・151・153・159・167・203・209・219・370・502・509土坑などがある。調理などに用いられたと考えられる炭化物を多量に伴った集石は、第162・184・185・367・491・567土坑が、またこれとは別に、炭化物をほとんど伴なわない用途不明の集石土坑では、第146・315・429・435号土坑などがある。その構造および形態から風倒木跡と考えられるものには、第173・174・175・189・192・402・404号土坑が、坑底部に小ピットが認められるなど構造上から陥し穴と考えられるものには、第161・282・303号土坑がある。墓としての性格が強い単独埋甕としては、第218号土坑がある。野外炉的なものとして、第362・506号土坑を挙げることができる。

（出土土器）（第68～77図）

図示した土器の所属は、以下のとおりである。1は第1号土坑、2～9は第2号土坑、10は第3号土坑、11・31は第4号土坑、12～19は第5号土坑、20・21は第6号土坑、22は第18号土坑、23～25は第21号土坑、26は第23号土坑、27・28は第30号土坑、29・30は第37号土坑、35は第48号土坑、32・36～39は第49号土坑、411は第50号土坑、40・41は第51号土坑、46は第53号土坑、88～126は第57号土坑、33・42・43・411は第58号土坑、44・45は第62号土坑、47は第66号土坑、48・49は第68号土坑、34・50～56は第69号土坑、57～60は第70号土坑、61・414は第71号土坑、62は第73号土坑、63は第75号土坑、64・65は第78号土坑、66～76は第79号土坑、77～83、413は第80号土坑、127は第81号土坑、128は第84号土坑、129は第98号土坑、130は第99号土坑、87・131～135は第100号土坑、84・85・136～138・140は第105号土坑、141は第106号土坑、142～153は第111号土坑、154は第113号土坑、155・156は第121号土坑、157～172は第122号土坑、173は第123号土坑、174～176は第129号土坑、415は第140号土坑、177～180は第144号土坑、181～187は第145号土坑、188・189は第146号土坑、190～193は第147号土坑、194～196は第148号土坑、197は第149号土坑、198は第152号土坑、199は第165号土坑、200～205は第170号土坑、206・207は第173号土坑、208～210は第174号土坑、211・212は183号土坑、213は第185号土坑、214～216は第192号土坑、217～219は第196号土坑、220・221は第209号土坑、222～



2土
1－黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－暗黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
3－淡暗黄褐色土層
4－淡黄茶褐色土層（焼土やや多量含む）
5－淡黄褐色土層（焼土・炭化物微量含む）

4・5・26土
1－明茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
2－茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量、白色鉱物少量含む）
3－黒茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
4－砂質淡茶黒褐色土層（白色鉱物少量含む）
5－粘質明茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
6－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物・白色鉱物微量含む）
7－砂質淡茶黒褐色土層（炭化物・1㎝大の炭化材微量含む）
8－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物・白色鉱物微量含む）
9－砂質淡褐色土層（炭化物微量含む）

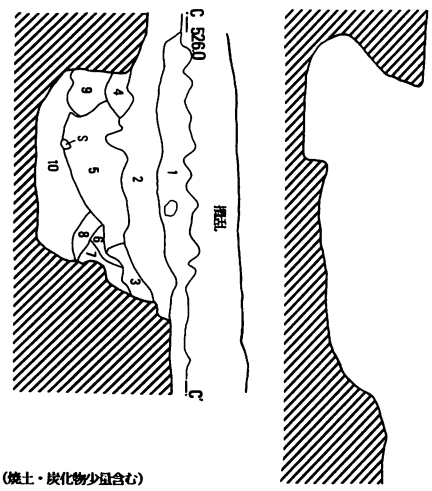
18土
1－黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－黒褐色土層（2㎝大粘質淡黄褐色土混入）
3－黄茶褐色土層

3・7土
1－黒茶褐色土層（焼土微量含む）
2－粘質茶黒褐色土層（焼土微量含む）
3－砂質淡黄褐色土層（炭化物微量含む）
4－淡茶褐色土層（炭化物微量含む）
5－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）

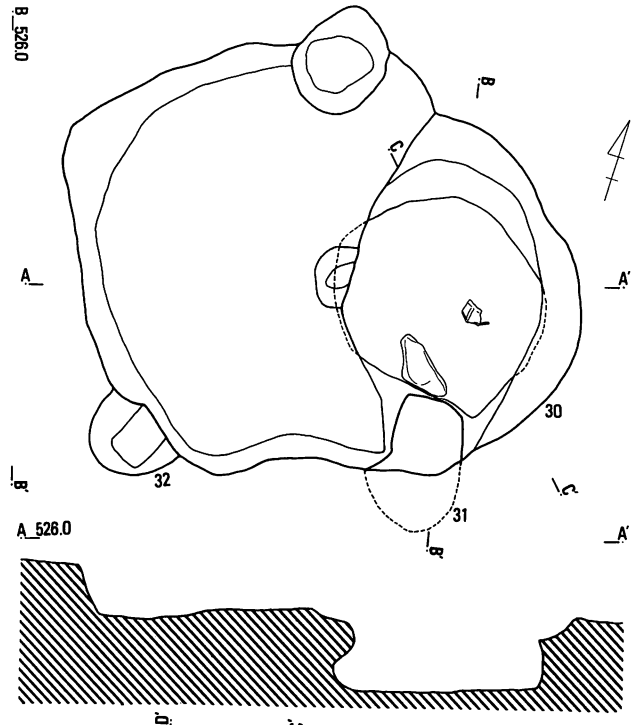
52・54土
1－暗褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－暗褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
3－黒褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子少量含む）
4－黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
5－淡黄色土層（暗褐色ブロック土少量含む）
6－暗黄褐色土層
7－暗褐色土層（炭化物・ローム粒子少量含む）
8－黒褐色土層（焼土・5㎜大のロームブロック少量含む）

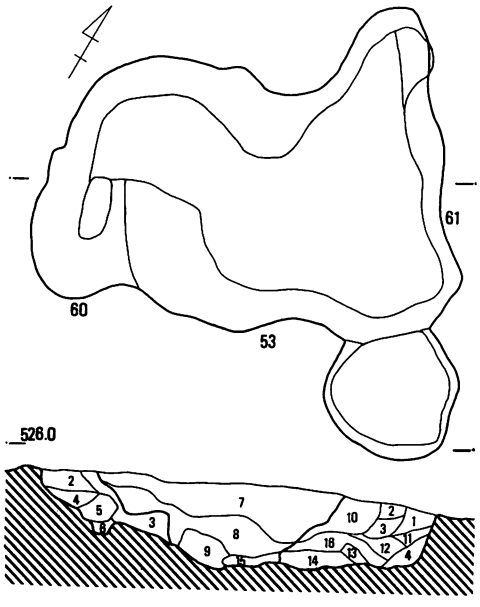
9・25・27土
1－黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量、砂質土含む）
2－黒茶褐色土層（炭化物・炭化物少量含む）
3－砂質茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
4－砂質黄茶褐色土層
5－暗茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
6－黒茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
7－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物・砂微量含む）
8－4層と同じ
9－暗茶褐色土層（焼土微量含む）
10－淡黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
11－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物・砂微量含む）
12－淡黄茶褐色土層（炭化物微量・10㎝大礫多量含む）
13－淡茶褐色土層（焼土・炭化物・砂微量含む）

第51図　土坑（1）

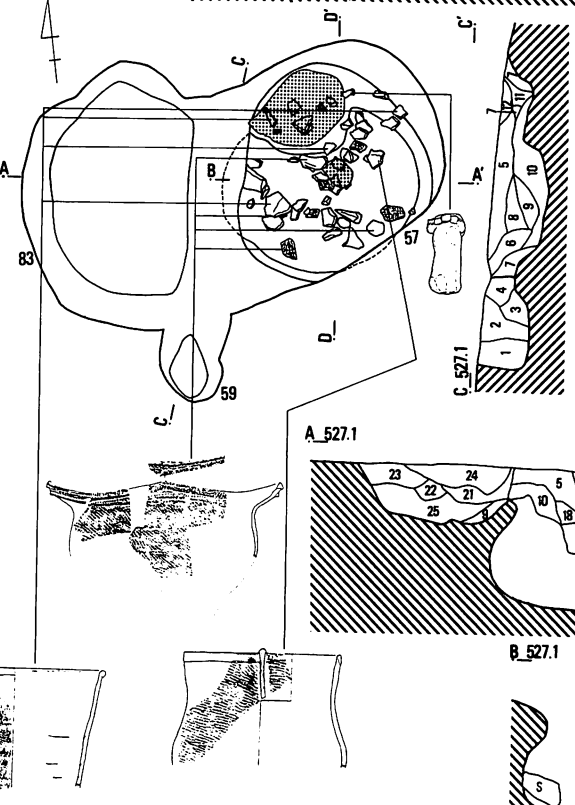


30土
1－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－暗茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量、小礫、5～10cm大のローム ブロック少量含む）
3－黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
4－明茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
5－淡黒褐色土層（炭化物・炭化材をやや多量、1cm大の炭化材を含む）
6－淡黄茶褐色土層（炭化物微量に含む）
7－暗黄褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
8－淡黄茶褐色土層（6層より明るい）
9－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
10－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量、5～10cm大のローム ブロック少量含む）



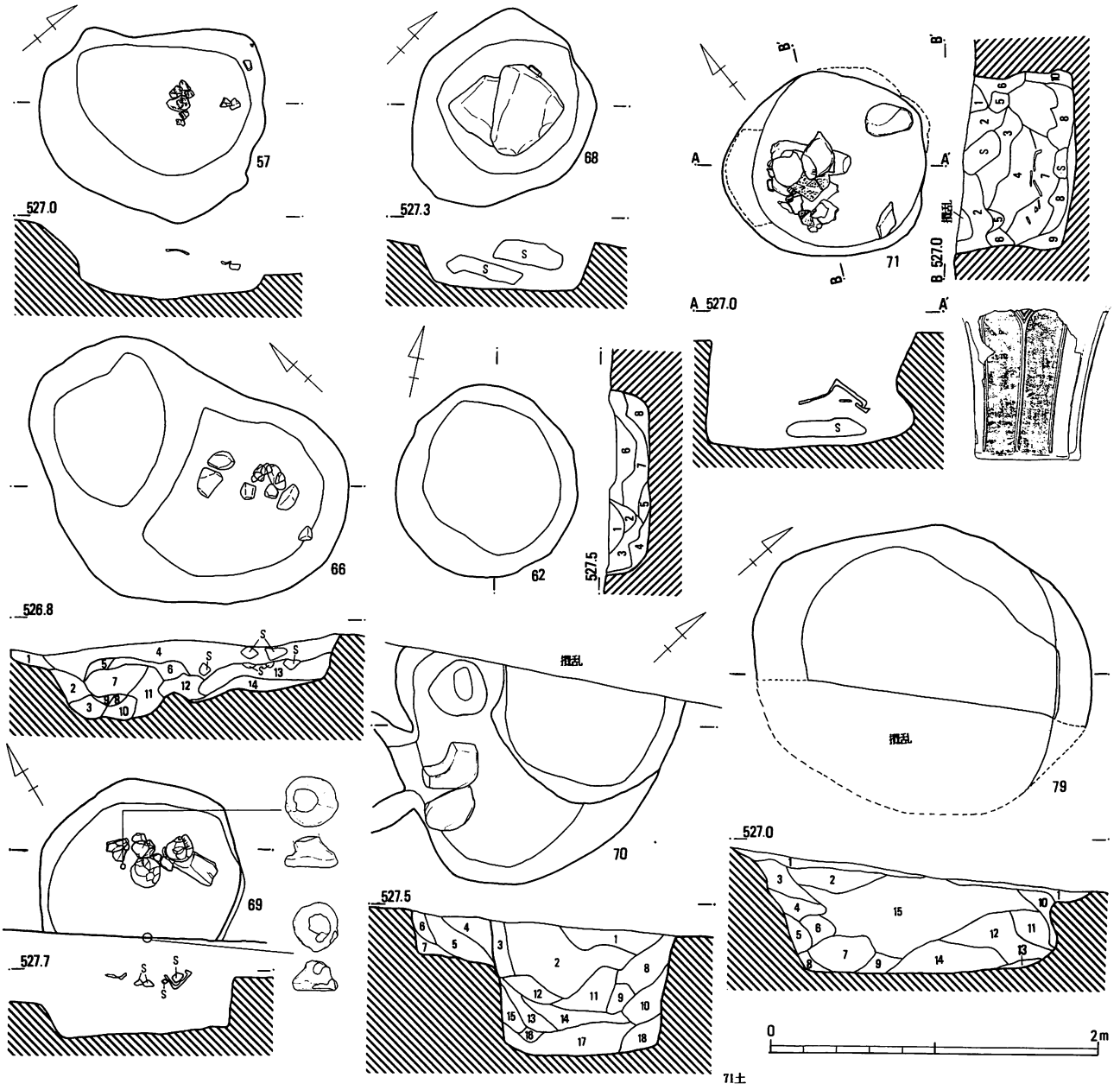


53・60・61土
1－茶褐色土層（攪乱）
2－暗褐色土層（5cm大ローム ブロック少量含む）
3－暗褐色土層
4－暗褐色土ブロック層（5cm大ローム ブロック多く含む）
5－茶褐色土層（5cm大ローム ブロック多く含む）
6－黄褐色土層
7－暗褐色土層（焼土微量含む）
8－暗褐色土層（2cm大ローム ブロック少量に含む）
9－黄褐色土層（黒褐色粒子多量含む）
10－黒褐色土層（焼土少量含む）
11－黒褐色土層（ローム粒子多量含む）
12－黒褐色土層
13－暗褐色土層
14－黄茶褐色土層（土器の細片を少量含む）
15－黄茶褐色土層（黒褐色粒子少量含む）
16－暗褐色土層（2cm大ローム ブロック少量に含む）



57・59・83土
1－黒褐色土層（焼土・炭化物少量、2cm大ローム ブロックやや多量含む）
2－黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
3－淡黄褐色土層（焼土少量含む）
4－暗黄褐色土層
5－暗褐色土層（炭化物・ローム粒子微量含む）
6－5層と同じ（5mm大ローム ブロックやや多量含む）
7－淡黄褐色土層
8－黒褐色土層（5mm大ローム ブロック少量含む）
9－黒褐色土層
10－暗黄褐色土層（黒褐色上ブロックを少量含む）
11－淡黄褐色土層（炭化物微量含む）
12－暗茶褐色土層（ローム粒子少量含む）
13－暗茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
14－暗茶色土層
15－黒褐色土層（ローム粒子微量含む）
16－暗茶褐色土層（ローム粒子多量含む）
17－暗茶褐色土層（焼土微量含む）
18－暗褐色土層（3cm大ローム ブロック多量含む）
19－暗茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
20－茶褐色土層（焼土ブロック少量含む）
21－暗褐色土層（焼土微量、3cm大ローム ブロック多量含む）
22－暗褐色土層（焼土・3cm大ローム ブロック微量含む）
23－黒褐色土層（焼土・ローム粒子微量含む）
24－暗茶褐色土層（焼土・炭化物・5cm大ローム ブロック微量含む）
25－黒褐色土層（ローム粒子微量含む）
26－暗茶褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子少量含む）
27－黒褐色土層（焼土・炭化物多量含む）

第52図　土坑（2）



62土
1－暗褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
2－淡黄褐色土層（暗褐色土粒子を多量含む）
3－暗褐色土層（焼土微量含む）
4－暗褐色土層（炭化物微量含む）
5－暗褐色土層（5㎜大ロームブロック少量含む）
6－暗茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
7－黒褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子少量含む）
8－暗黄褐色土層（焼土微量含む）

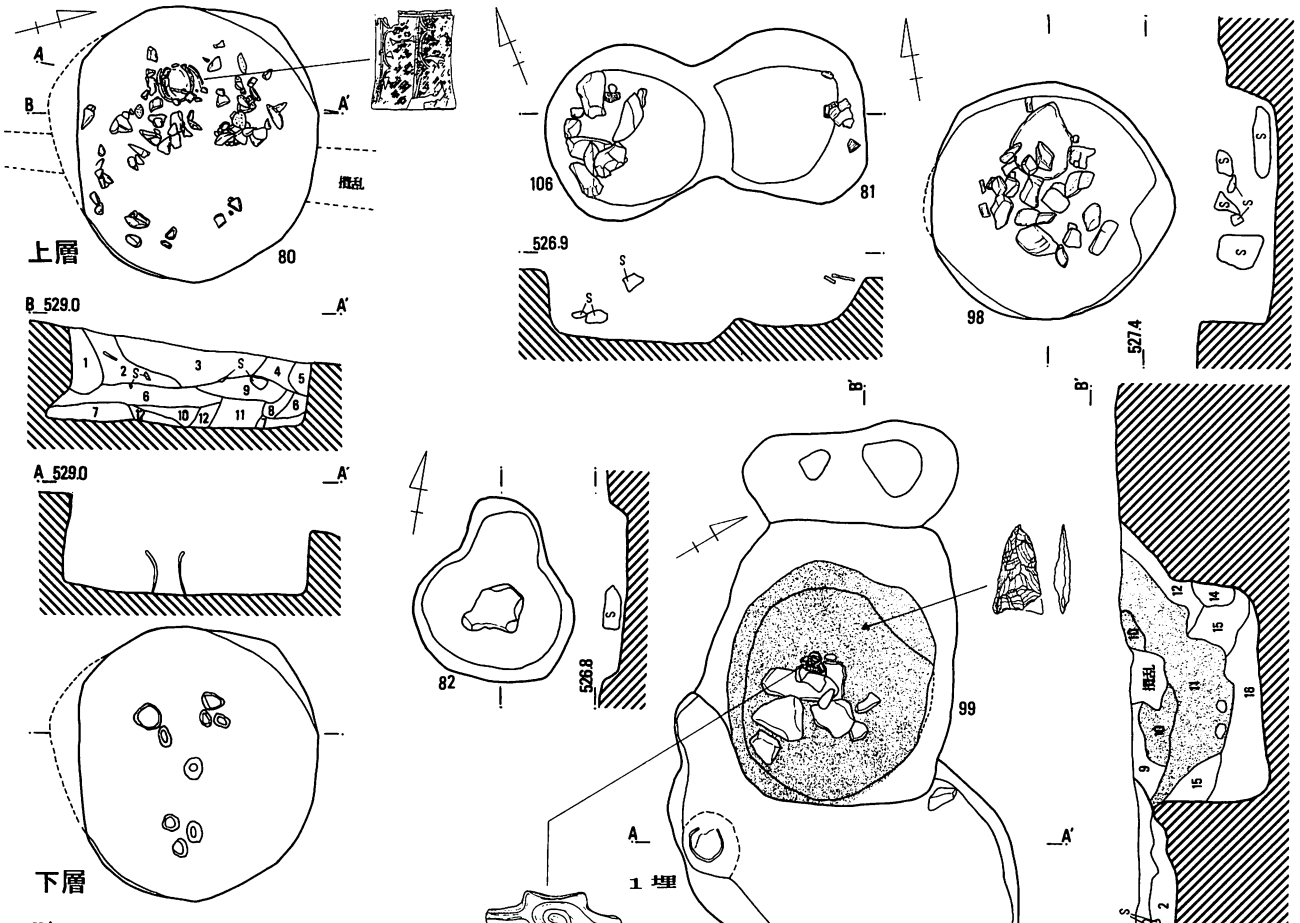
66土
1－暗褐色土層（5㎜大のロームブロック少量含む）
2－淡黄褐色土層（暗褐色土粒子多量含む）
3－暗褐色土層（3㎝大のロームブロック少量含む）
4－暗褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
5－黄茶褐色土層（焼土微量含む）
6－暗褐色土層（焼土・ローム粒子微量含む）
7－黄褐色土層（黒褐色土粒子やや多量含む）
8－淡黄褐色土層
9－暗褐色土層（炭化物微量含む）
10－黒褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子多量含む）
11－淡黄褐色土層（焼土微量、5㎜大の黒褐色土ブロック混入）
12－黄褐色土層
13－黄褐色土層（焼土微量、5㎝大の黒褐色土ブロック多量含む）
14－13層と同じ（焼土含まない）

70土
1－暗褐色土層（炭化物・5㎝大ロームブロック少量含む）
2－暗褐色土層（焼土・炭化物やや多量、5㎜大のロームブロック微量含む）
3－暗褐色土層（焼土・炭化物やや多量、5㎜大のロームブロック少量含む）
4－暗褐色土層（3層より混入物が少ない）
5－茶褐色土層（焼土微量、5㎜大のロームブロック微量含む）
6－淡黄褐色土層
7－黄茶褐色土層
8－暗茶褐色土層（炭化物微量、淡黄褐色土含む）
9－黒褐色土層（焼土ブロック・炭化物微量含む）
10－8層と同じ（淡黄褐色土やや多く含む）
11－黒褐色土層（炭化物微量含む）
12－淡黄褐色土層（焼土・炭化物微量含む、茶褐色土混入）
13－暗茶褐色土層（焼土・炭化物微量微量含む）
14－黒褐色土層（焼土ブロック微量含む）
15－暗褐色土層（焼土ブロック、5㎜大ロームブロック多量含む）
16－暗黄褐色土層
17－黒褐色土層（淡黄褐色土混入）
18－暗茶褐色土層（5㎜大ロームブロック微量含む）

71土
1－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－淡褐色土層（焼土・炭化物・5㎜～1㎝大ロームブロックやや多量含む）
3－淡茶黒褐色土層
4－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
5－淡黄褐色土ロームブロック層（焼土・炭化物少量含む）
6－淡黄茶褐色土ロームブロック層（焼土・炭化物やや多量含む）
7－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む、土器を多量混入）
8－粘質淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
9－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
10－茶黒褐色土ロームブロック層（焼土・炭化物少量含む）

79土
1－黒色土層（表土）
2－暗茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
3－暗茶褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子多量含む）
4－黄褐色土層（暗褐色土混入）
5－黄褐色土層（焼土、5㎝大黒褐色土ブロック少量含む）
6－暗褐色土層（ローム粒子やや多く含む）
7－黒色土層（焼土・炭化物をやや多量含む）
8－粘質黒色土層（焼土・炭化物をやや多量、ローム粒子多量含む）
9－暗茶褐色土層（焼土・ローム粒子微量含む）
10－暗茶褐色土層（焼土微量含む）
11－暗茶褐色土層（焼土微量、ローム粒子少量含む）
12－黒褐色土層（焼土・炭化物、1㎝大のロームブロックやや多量含む）
13－粘質黄褐色土層（黒褐色土混入）
14－暗茶褐色土層（5㎜大のロームブロックやや多量含む）

第53図　土坑（3）

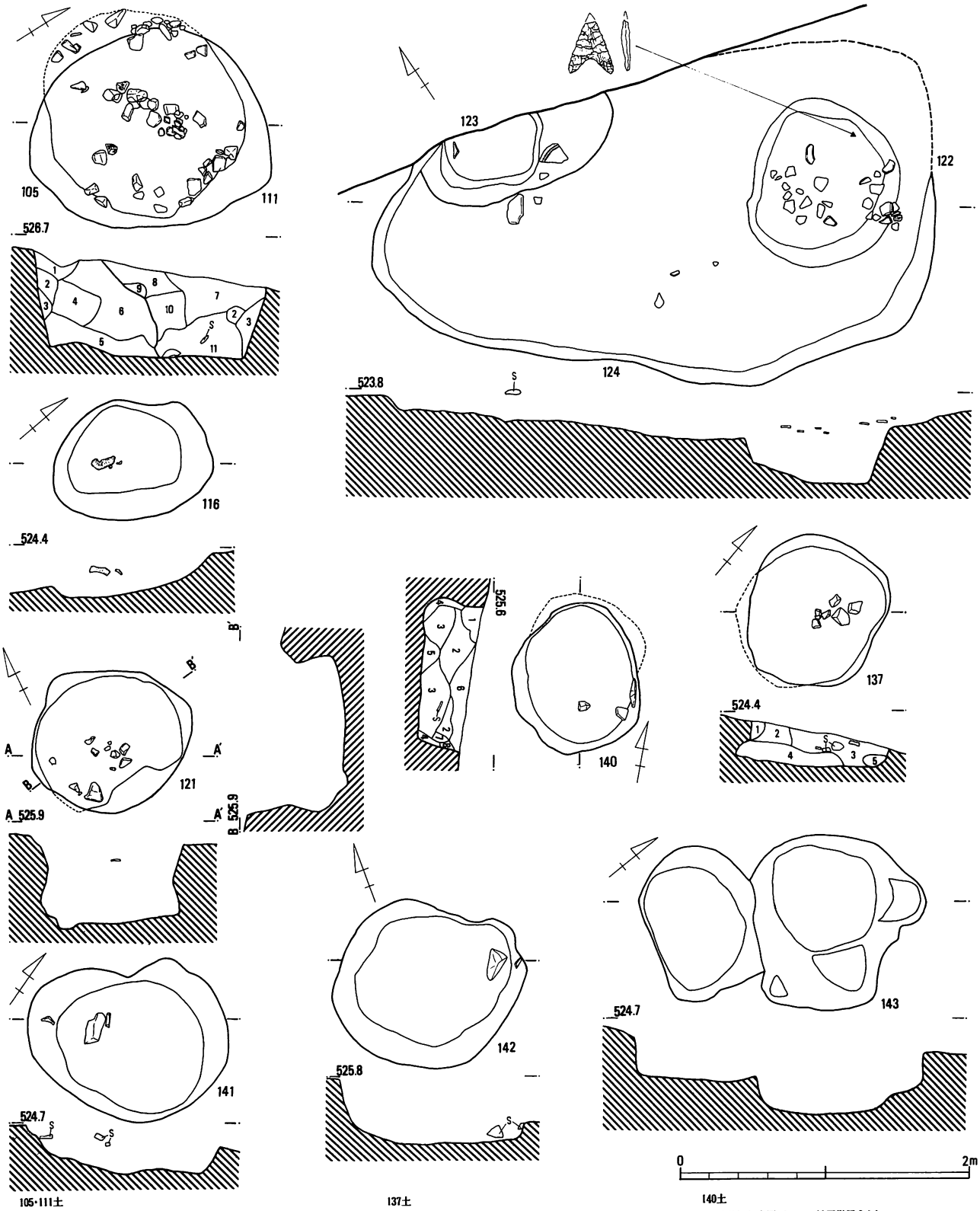


80土
1－暗褐色土層（炭化物少量含む、黄褐色土混入）
2－黄褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
3－暗茶褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子多量含む）
4－暗黄褐色土層（炭化物微量含む）
5－黄褐色土層
6－黒褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子やや多量含む）
7－黒褐色土層（ローム粒子微量含む）
8－暗茶褐色土層（炭化物・5㎜大ロームブロック多量含む）
9－暗褐色土層（炭化物・ローム粒子微量、礫多量含む）
10－黒褐色土層（焼土微量、炭化物・ローム粒子多量含む）
11－暗黄茶褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子やや多量含む）
12－茶褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子微量含む）

99・100・120土、4埋
1－黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－暗黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
3－茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
4－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
5－淡茶黒褐色土層
6－淡黒茶褐色土層（焼土少量含む）
7－淡黄褐色土層（焼土少量含む）
8－淡黄茶褐色土層（焼土微量含む）
9－淡褐色土層（焼土少量含む）
10－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物やや多量）
11－茶黒褐色土層（焼土・炭化物やや多量、ローム粒子少量、ドングリ・クルミ片を含む）
12－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子多量含む）
13－黄褐色土層（焼土・炭化物少量、ローム粒子・5㎜大ロームブロックやや多量含む）
14－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量、5㎜～3㎝大ロームブロック少量含む）
15－淡茶黒褐色土層（10層より暗く、焼土・炭化物微量少量含む）
16－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子少量含む）
17－黒褐色土層（焼土・炭化物微量、5㎜大ロームブロック微量含む）
18－褐色土層
19－暗黄茶褐色土層（2㎝大ロームブロック少量、砂質土微量含む）
20－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子・砂質土やや多量含む）
21－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
22－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物・白色鉱物微量含む）
23－茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子・1～3㎝大ロームブロック少量含む）
24－黄茶褐色土層（炭化物微量、ローム粒子・5㎝大ロームブロック多量含む）
25－淡褐色土層（焼土微量含む）

0 2m

第54図　土坑（4）

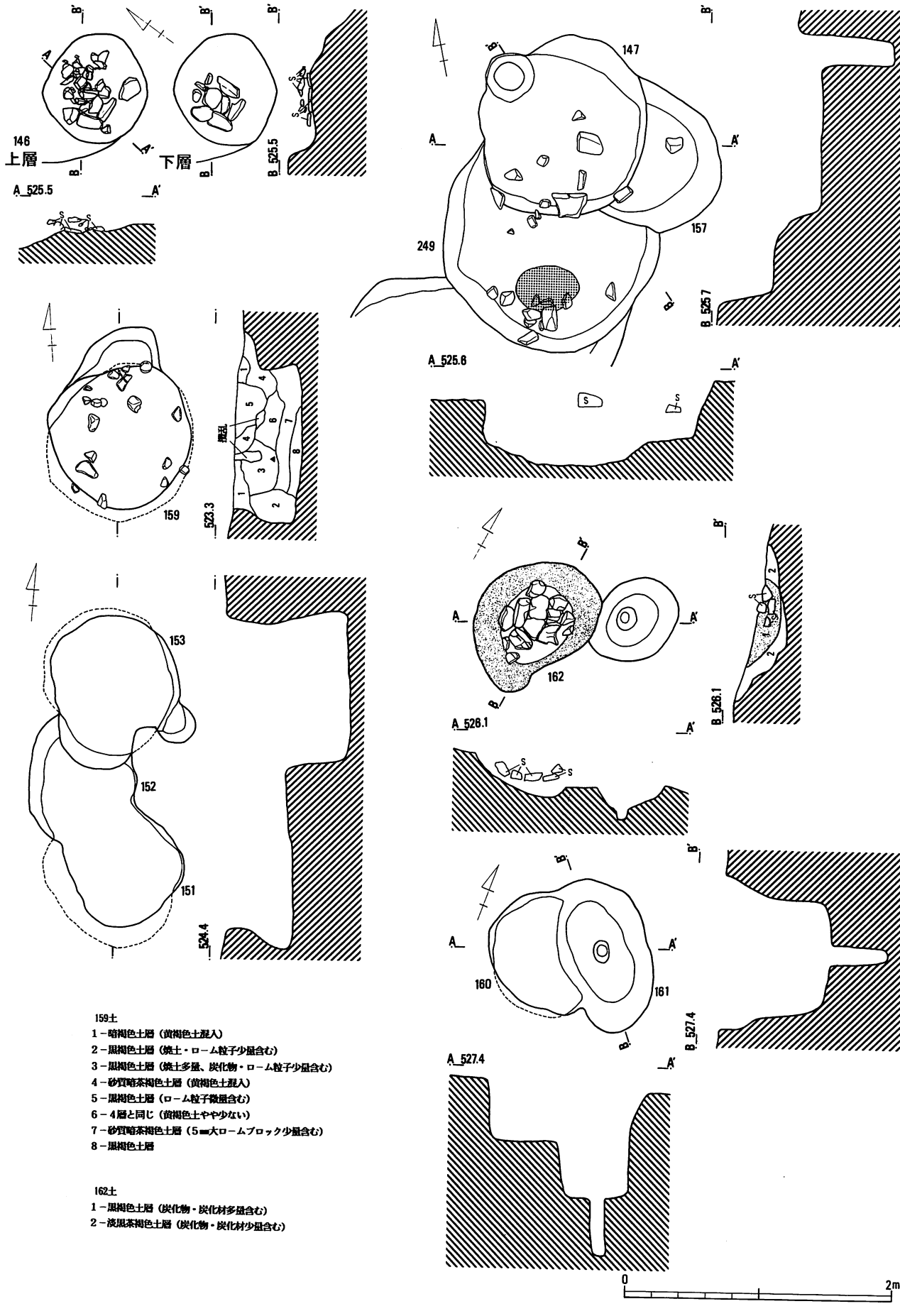


105・111土
1－茶褐色土層
2－茶褐色土層（焼土・炭化物微量、5㎜大ロームブロックやや多量含む）
3－茶褐色土層（黄褐色土混入）
4－暗褐色土層（5㎜大のロームブロック微量含む）
5－黄茶褐色土層
6－黒褐色土層（炭化物・5㎜大のロームブロック微量含む）
7－黒褐色土層（黄褐色土混入）
8－茶褐色土層（ローム粒子をやや多量含む）
9－黄褐色土ブロック層
10－黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む、黄褐色土混入）
11－黒褐色土層

137土
1－黄茶褐色土層
2－暗褐色土層（焼土微量含む）
3－暗褐色土層（5㎜大ロームブロック微量含む）
4－黒褐色土層（焼土少量・5㎜大ロームブロック多量含む）
5－暗褐色土層（黄褐色土混入）

140土
1－暗黄褐色土層（ローム粒子微量含む）
2－暗茶褐色土層（焼土・ローム粒子微量含む）
3－黒色土層（焼土・炭化物微量、10㎝大の礫を含む）
4－暗茶褐色土層（黄褐色土多量含む）
5－暗茶褐色土層（5㎜大ロームブロックを多量含む）
6－1層と同じ（ローム粒子やや多量含む）
7－黒褐色土層
8－淡黒褐色土層

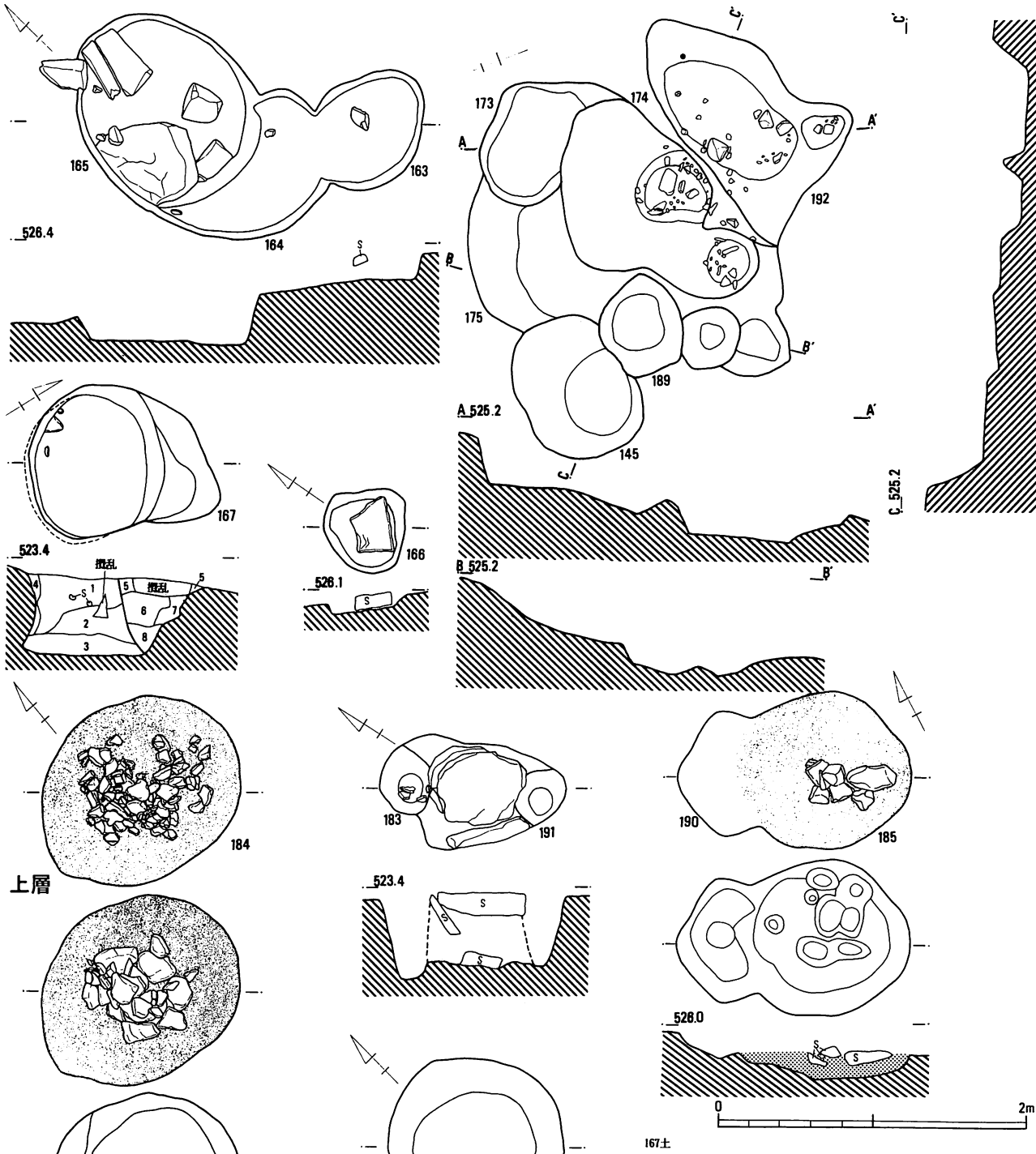
第55図　土坑（5）



159土
1－暗褐色土層（黄褐色土混入）
2－黒褐色土層（焼土・ローム粒子少量含む）
3－黒褐色土層（焼土多量、炭化物・ローム粒子少量含む）
4－砂質暗茶褐色土層（黄褐色土混入）
5－黒褐色土層（ローム粒子微量含む）
6－4層と同じ（黄褐色土やや少ない）
7－砂質暗茶褐色土層（5㎜大ロームブロック少量含む）
8－黒褐色土層

162土
1－黒褐色土層（炭化物・炭化材多量含む）
2－淡黒茶褐色土層（炭化物・炭化材少量含む）

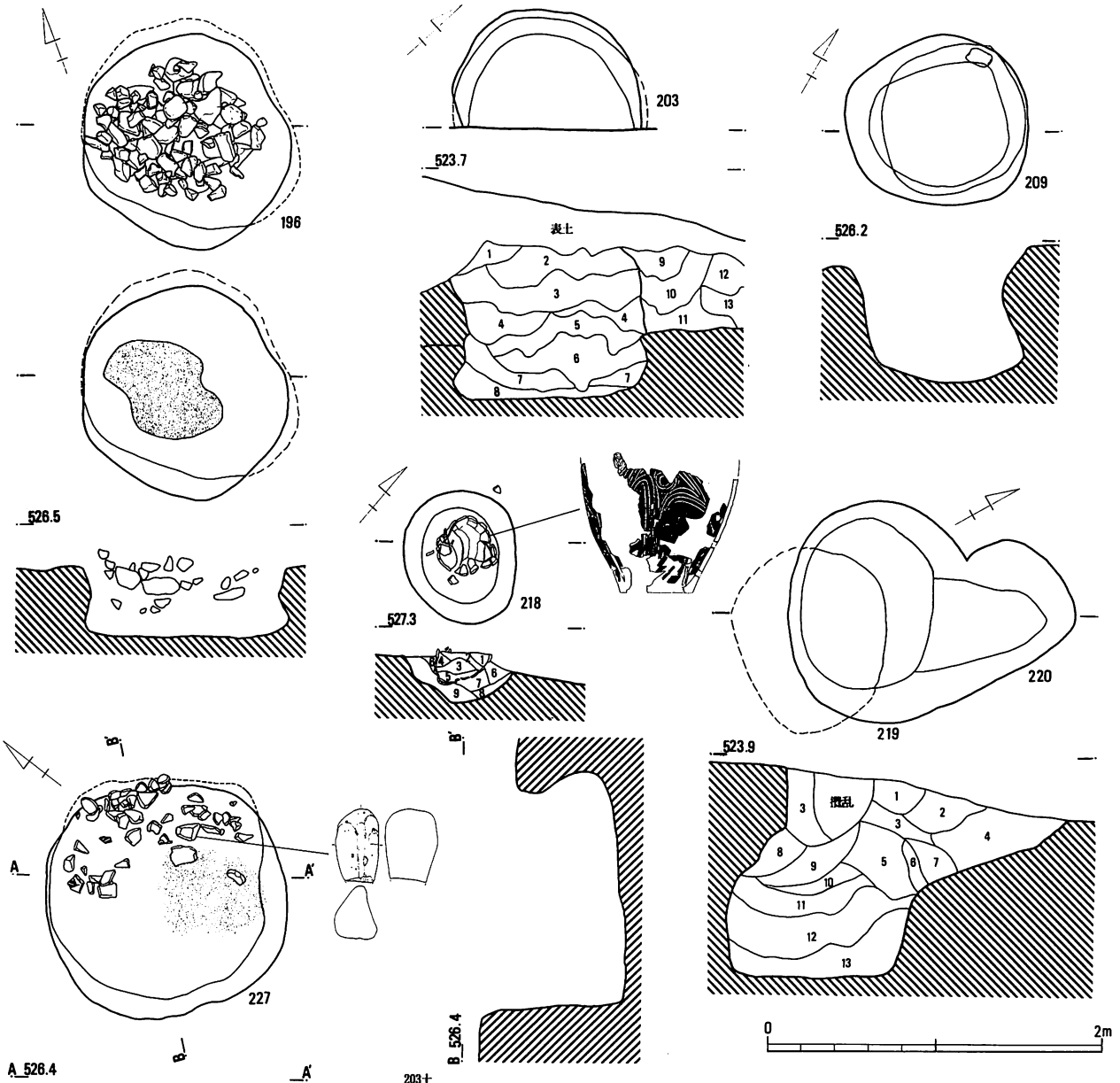
第56図　土坑（6）



167土
1－暗茶褐色土層（焼土、1㎝大ローム ブロック少量含む）
2－砂質暗褐色土層（焼土微量含む）
3－暗黒褐色土層（焼土、炭化物微量含む）
4－暗茶褐色土層（黄褐色土多量含む）
5－暗褐色土層（2～3㎝大ローム ブロック少量含む）
6－暗褐色土層（焼土、1㎝大ローム ブロック微量含む）
7－4層と同じ（暗褐色土多量含む）
8－6層と同じ（炭化材少量含む）

234土
1－淡暗茶褐色土層
2－茶黒褐色土層（ローム粒子微量含む）
3－明茶黒褐色土層（焼土微量含む）
4－暗黄褐色土層
5－黒褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子微量含む）
6－淡黒茶褐色土層（焼土・焼土ブロック微量、ローム粒子多量含む）
7－淡黄茶褐色土層（炭化物・ローム粒子微量、黒褐色土多量含む）
8－淡茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）

第57図　土坑（7）



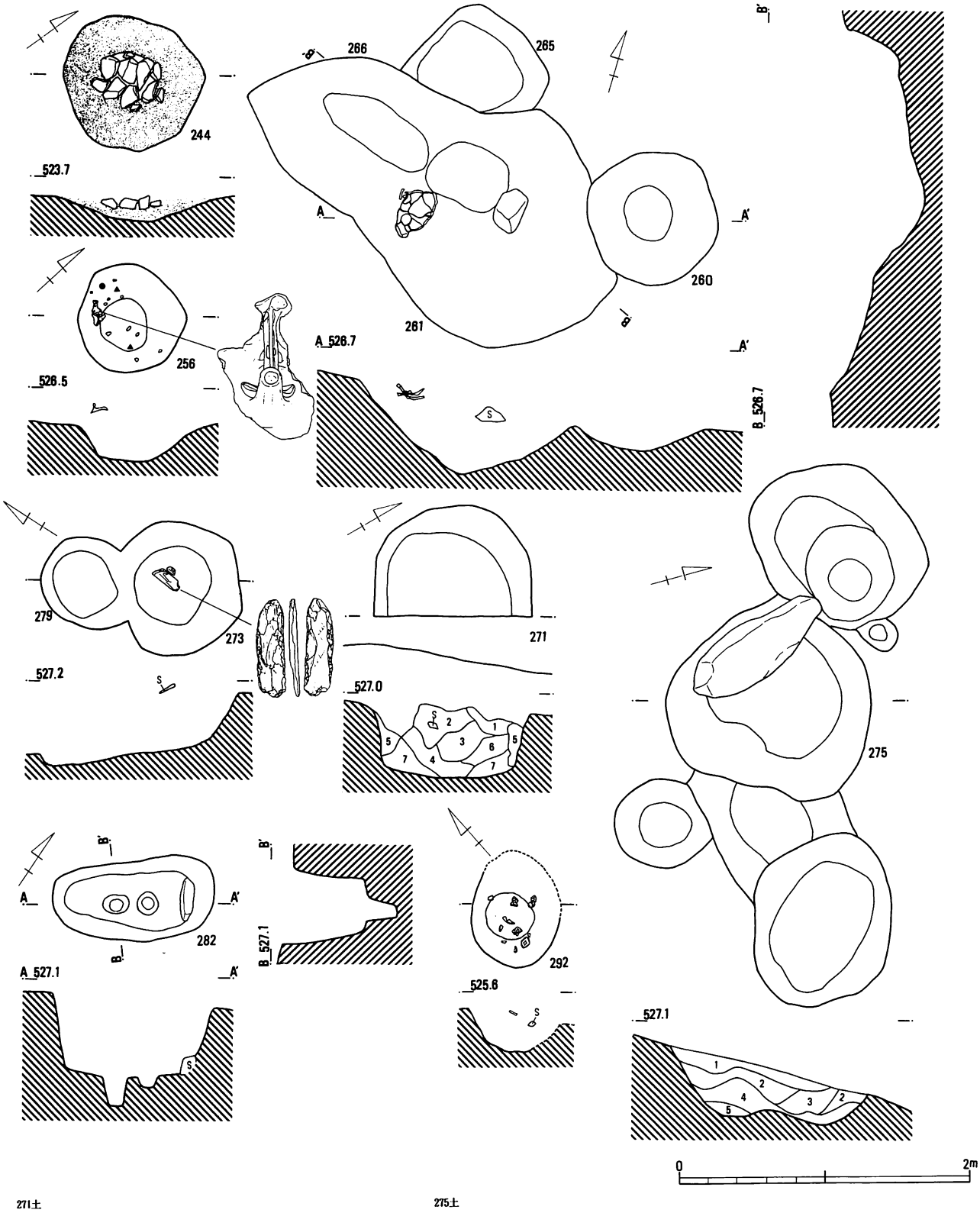
219・220土
1－暗褐色土層（3㎝大ローム ブロック少量含む）
2－黒褐色土層（炭化物・ローム粒子微量含む）
3－暗茶褐色土層
4－暗黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
5－黒褐色土層
6－暗黄褐色土層（2㎝大ローム ブロック少量含む）
7－黒茶褐色土層（ローム粒子、5㎜大のローム ブロック微量含む）
8－淡茶黒褐色土層（1㎝大ローム ブロック少量含む）
9－淡褐色土層（炭化物やや多量、ローム粒子少量含む）
10－淡黄茶褐色土層
11－暗黄茶褐色土層
12－淡暗褐色土層
13－暗黄褐色土層（ローム粒子少量含む）

203土
1－暗茶褐色土層（炭化物微量、ローム粒子多量含む）
2－暗黄褐色土層
3－淡黄褐色土層（黒褐色土微量含む）
4－淡暗黄褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
5－淡黒茶褐色土層（炭化物・2㎝大ローム ブロック少量含む）
6－淡黒褐色土層（炭化物微量、2～5㎝大ローム ブロック少量含む）
7－淡褐色土層（炭化物・ローム粒子・1～2㎝大ローム ブロック少量含む）
8－粘質淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
9－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
10－茶黒褐色土ローム ブロック層（焼土・炭化物少量含む）
11－暗黄茶褐色土層（炭化物微量含む）
12－黒茶褐色土層（5㎜大ローム ブロックやや多量含む）
13－淡暗褐色土層（焼土微量、炭化物・ローム粒子少量含む）

218土
1－淡褐色土層（2～5㎝大ローム ブロック多量含む）
2－淡褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
3－淡褐色土層（ローム粒子少量含む）
4－暗黄褐色土ローム ブロック層
5－暗黄褐色土層
6－淡暗黄褐色土層
7－暗黄褐色土層
8－淡褐色土層
9－淡暗褐色土層（2～5㎝大ローム ブロック多量含む）

227土
1－暗黄褐色土層（焼土微量、2～4㎝大ローム ブロック少量含む）
2－明黄茶褐色土層（焼土・炭化物・炭化材やや多量、ローム粒子、1～5㎝大ローム ブロック少量含む）
3－明黄茶褐色土層
4－暗黄褐色土層
5－暗黄褐色土層（5㎝大ローム ブロック多量含む）
6－淡褐色土層（焼土・炭化物・2～3㎝大ローム ブロック微量含む）
7－淡暗褐色土層（炭化物やや多量含む）
8－暗褐色土層（炭化物・炭化材多量含む）
9－暗褐色土層（ローム粒子、2～3㎝大ローム ブロック少量含む）
10－暗黄褐色土ローム ブロック層

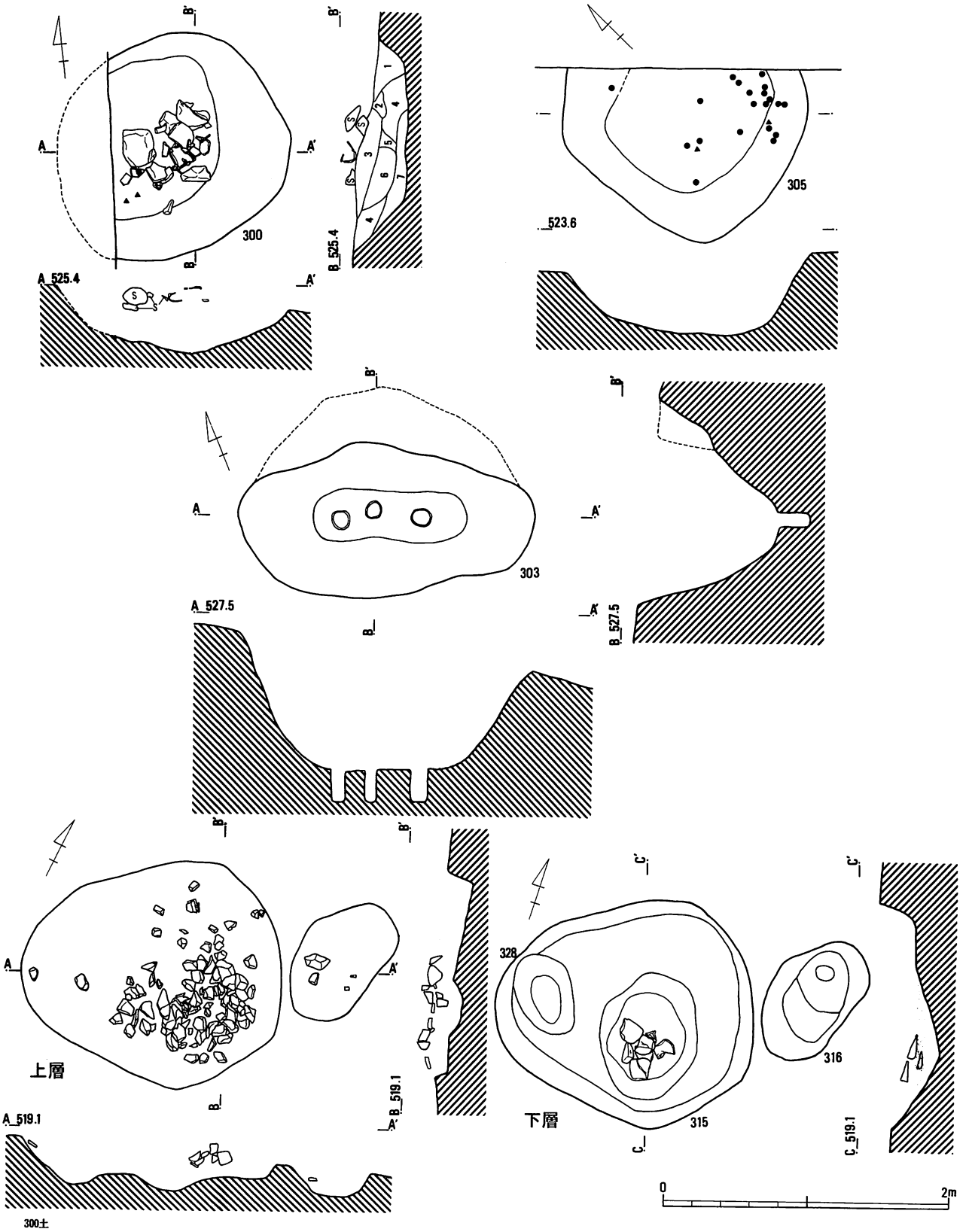
第58図　土坑（8）



271土
1－淡茶褐色土層（炭化物少量含む）
2－淡黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
3－淡黒褐色土層（炭化物・ローム粒子・2～3㎝大ローム ブロック少量含む）
4－淡暗黄褐色土層（炭化物微量、ローム粒子・1㎝大ローム ブロック少量含む）
5－淡暗黄褐色土層（5㎜～5㎝大ローム ブロック多量含む）
6－淡暗黄褐色土層（炭化物微量、5㎜～2㎝大ロ－ムブロックやや多量含む）
7－淡褐色土層（5㎜大ローム ブロック多量含む）

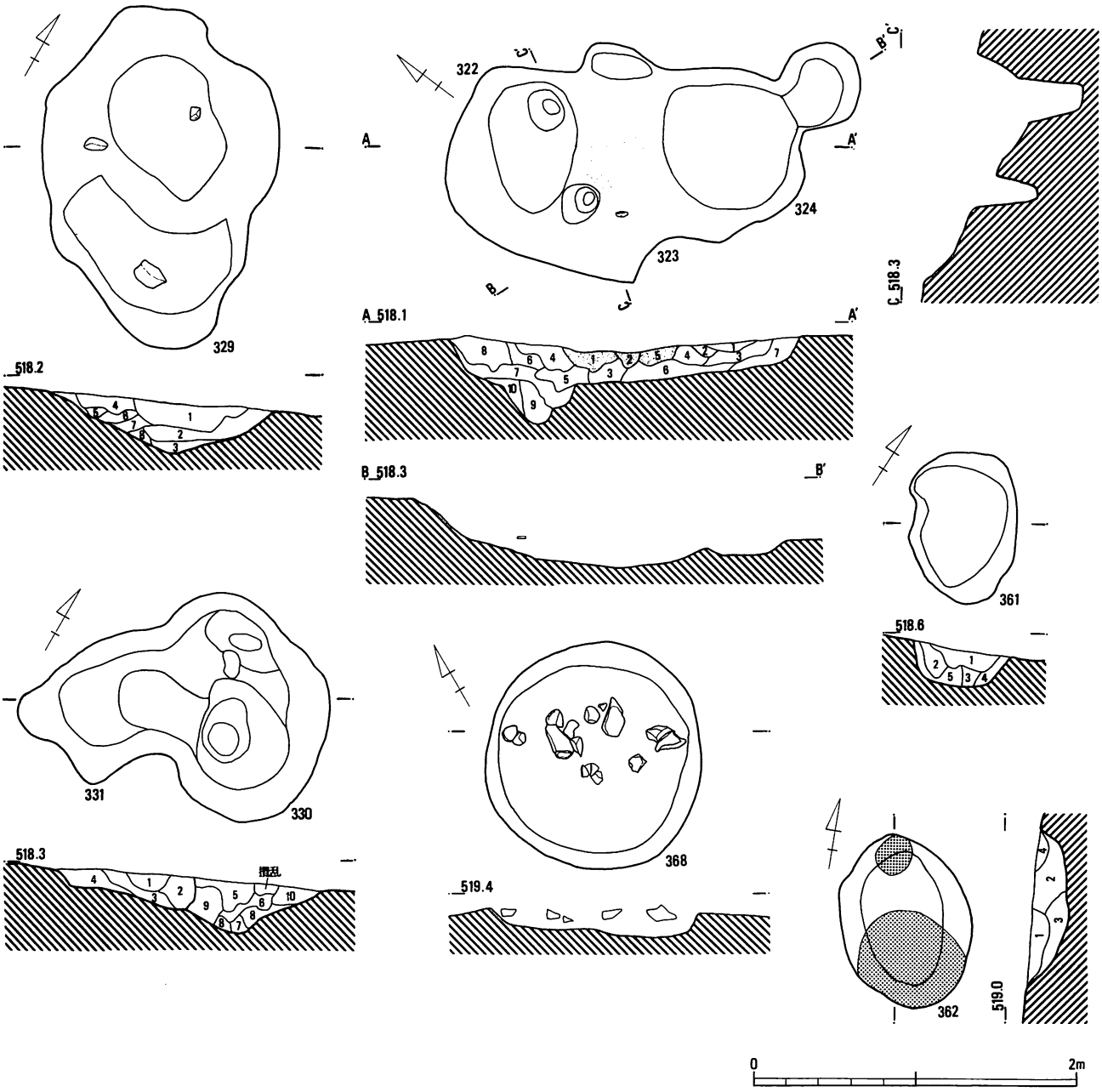
275土
1－茶黒褐色土層（炭化物微量含む）
2－暗茶褐色土層（炭化物微量含む）
3－淡黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
4－淡茶褐色土層（焼土少量含む）
5－淡褐色土層（焼土微量含む）

第59図　土坑（9）



300土
1－黒褐色土層（焼土少量含む）
2－粘質黒褐色土層（焼土微量含む）
3－黒褐色土層（焼土・ローム粒子少量含む）
4－茶黒褐色土層
5－暗黒褐色土層
6－黒褐色土層（焼土・ローム粒子少量含む）
7－黒褐色土層（焼土微量、黄褐色土含む）

第60図　土坑（10）



322・323・324土
1－黒褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
2－黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量、5㎜大ロームブロック多量含む）
3－茶黒褐色土層（焼土微量、ローム粒子多量含む）
4－淡茶褐色土層（炭化物微量含む）
5－淡茶黒褐色土層（炭化物やや多量、3㎝大ロームブロック少量含む）
6－淡茶褐色土層（焼土微量含む）
7－淡明茶黒褐色土ブロック層（焼土微量含む）
8－淡黄茶褐色土層
9－淡黒茶褐色土層（3㎝大ロームブロック少量含む）
10－淡黄茶褐色ロームブロック層

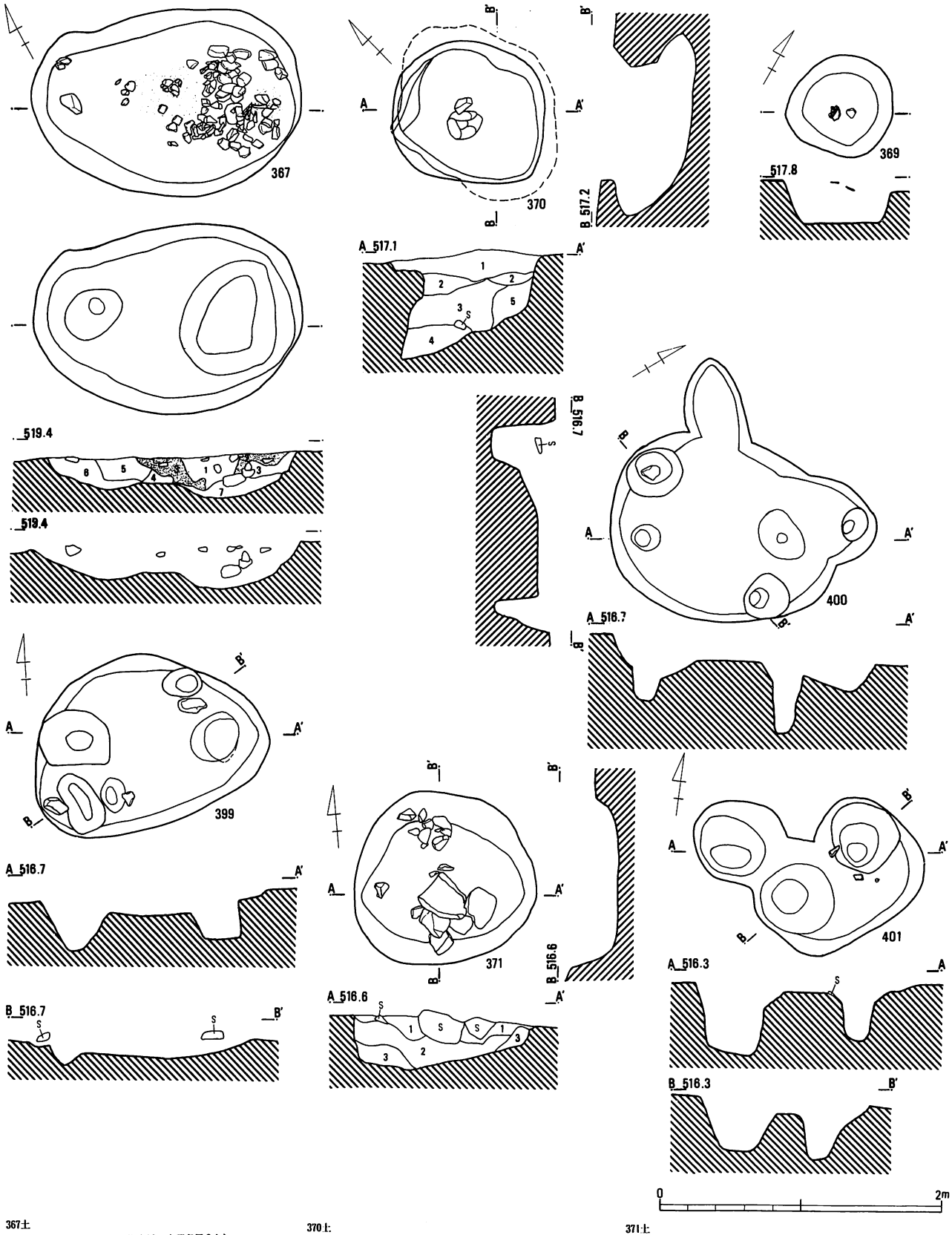
329土
1－黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量、5㎜大ロームブロック少量含む）
3－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子多量含む）
4－茶黒褐色土層（焼土やや多量含む）
5－淡褐色土層（焼土微量、2～3㎝大ロームブロック少量含む）
6－黒褐色土層（焼土・焼土ブロック・炭化物少量含む）
7－淡黄茶褐色土層（焼土・焼土ブロック微量、炭化物・炭化材少量含む）
8－淡褐色土層（焼土少量含む）

330・331土
1－黒茶褐色土層（焼土微量含む）
2－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
3－淡茶黒褐色土層（炭化物微量含む）
4－淡暗茶褐色土層
5－暗黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
6－茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
7－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物・5㎜～1㎝大ロームブロック少量含む）
8－暗黄褐色土ロームブロック層
9－淡黄褐色土層
10－5層と同じ（やや明るい）

361土
1－黒褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
2－暗茶褐色土層（炭化物微量、ローム粒子多量含む）
3－淡暗黄褐色土層
4－暗黄褐色土層（焼土微量含む）
5－淡黄褐色土層（炭化物微量含む）

362土
1－淡暗茶褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
2－淡黄褐色土ロームブロック層
3－淡暗黄褐色土層（炭化物少量含む）
4－暗黄褐色土層（焼土多量含む）

第61図　土坑（11）

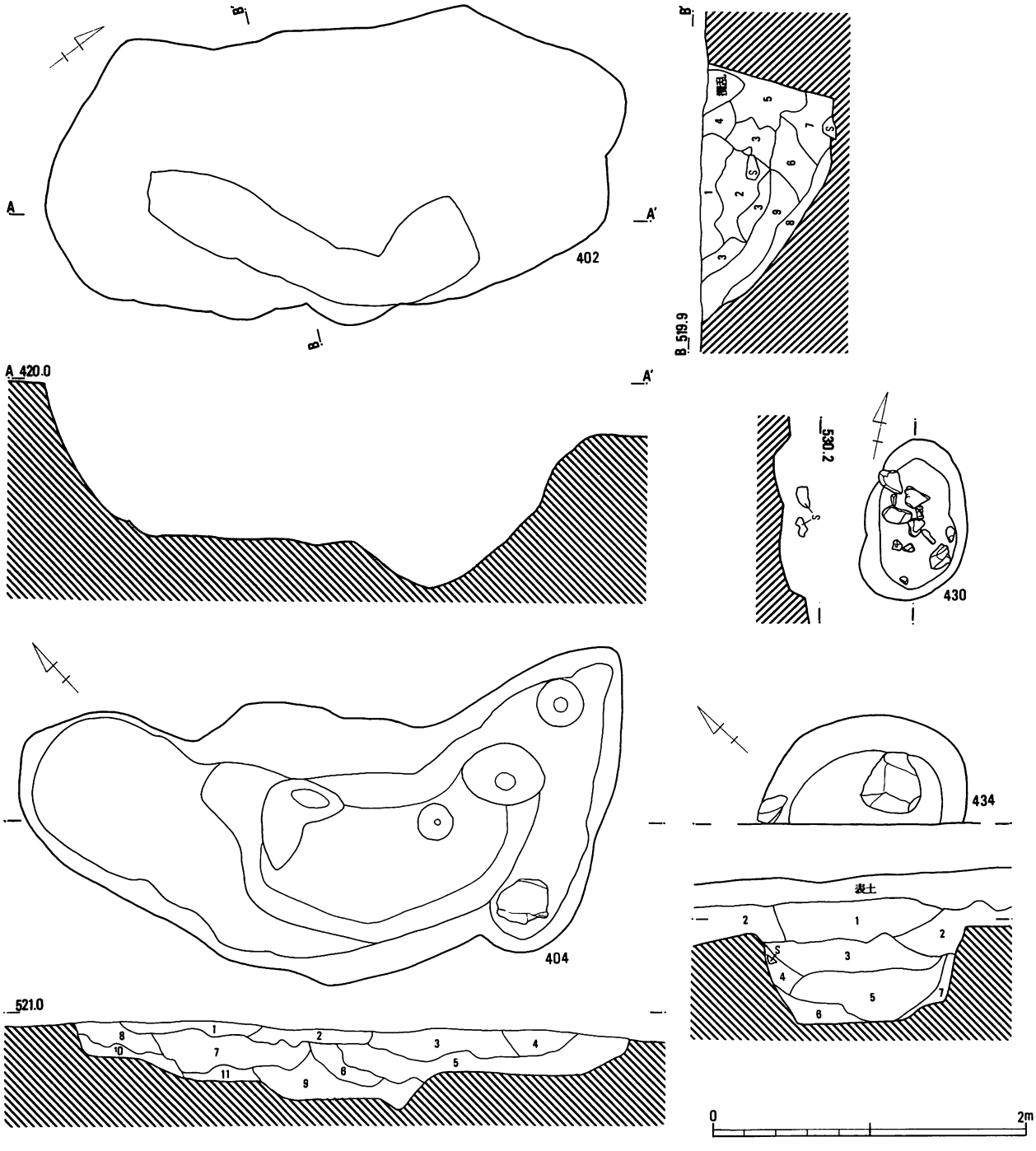


367土
1－黒褐色土層（焼土・炭化物少量、小礫多量含む）
2－茶黒褐色土層（焼土多量、炭化材少量含む）
3－黒茶褐色土層（焼土・炭化物多量、ローム粒子少量含む）
4－淡黄茶褐色土層
5－茶褐色土層（ローム粒子やや多量含む）
6－暗茶褐色土層（微量ローム粒子やや多量含む）
7－茶黒褐色土層（ローム粒子少量含む）

370土
1　茶黒褐色土層
2－黒茶褐色土層（3～6cm大ロームブロック多量含む）
3－淡褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
4－淡暗褐色土層（炭化物微量、5cm大ロームブロック少量含む）
5－淡暗黄褐色土層

371土
1－淡黄褐色土層（焼土・炭化物微量、1cm大ロームブロック多量含む）
2－淡暗褐色土層（焼土・炭化物少量、白色鉱物微量含む）
3－淡褐色土層（焼土・炭化物微量含む）

第62図　土坑（12）

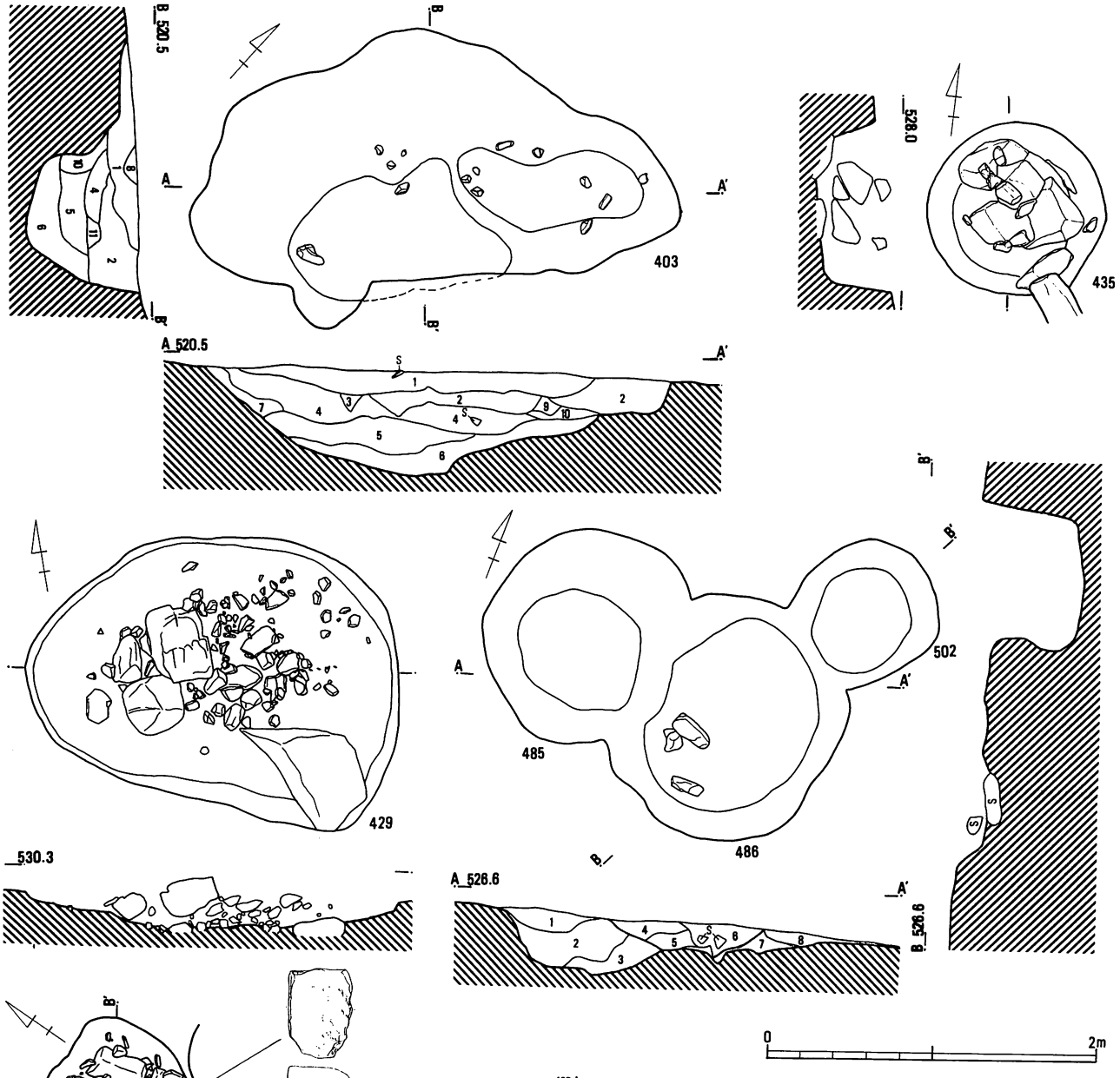


402土
1－暗黄茶褐色土層（焼土少量含む）
2－淡暗黄茶褐色土層
3－茶黒褐色土ブロック層
4－茶黒褐色土層
5－淡茶褐色土層
6－淡黒褐色土層
7－淡茶褐色土層
8－砂質暗黄褐色土層
9－黒茶褐色土ブロック層

404土
1－茶黒褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
2－茶黒褐色土層（焼土・炭化物・3～5cm大ローム ブロック少量含む）
3－暗茶褐色土層（焼土やや多量、炭化物少量含む）
4－茶褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
5－淡茶褐色土層（炭化物微量、2～3cm大ローム ブロック少量含む）
6－淡黄褐色土層（1～3cm大ローム ブロックやや多量含む）
7－淡茶褐色土層（焼土・炭化物微量、5mm～2cm大ローム ブロック少量含む）
8－淡明茶褐色土層（炭化物微量含む）
9－淡褐色土層（焼土・炭化物微量、5mm～2cm大ローム ブロックやや多量含む）
10－淡黄茶褐色土層（焼土微量含む）
11－淡暗褐色土層

434土
1－暗褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－暗黄褐色土層
3－暗黄茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
4－黒茶褐色土層（炭化物少量、2～3cm大ローム ブロック多量含む）
5－黒茶褐色土層（焼土・炭化物多量含む）
6－淡黄褐色土層（炭化物微量含む）
7－暗黄褐色土層

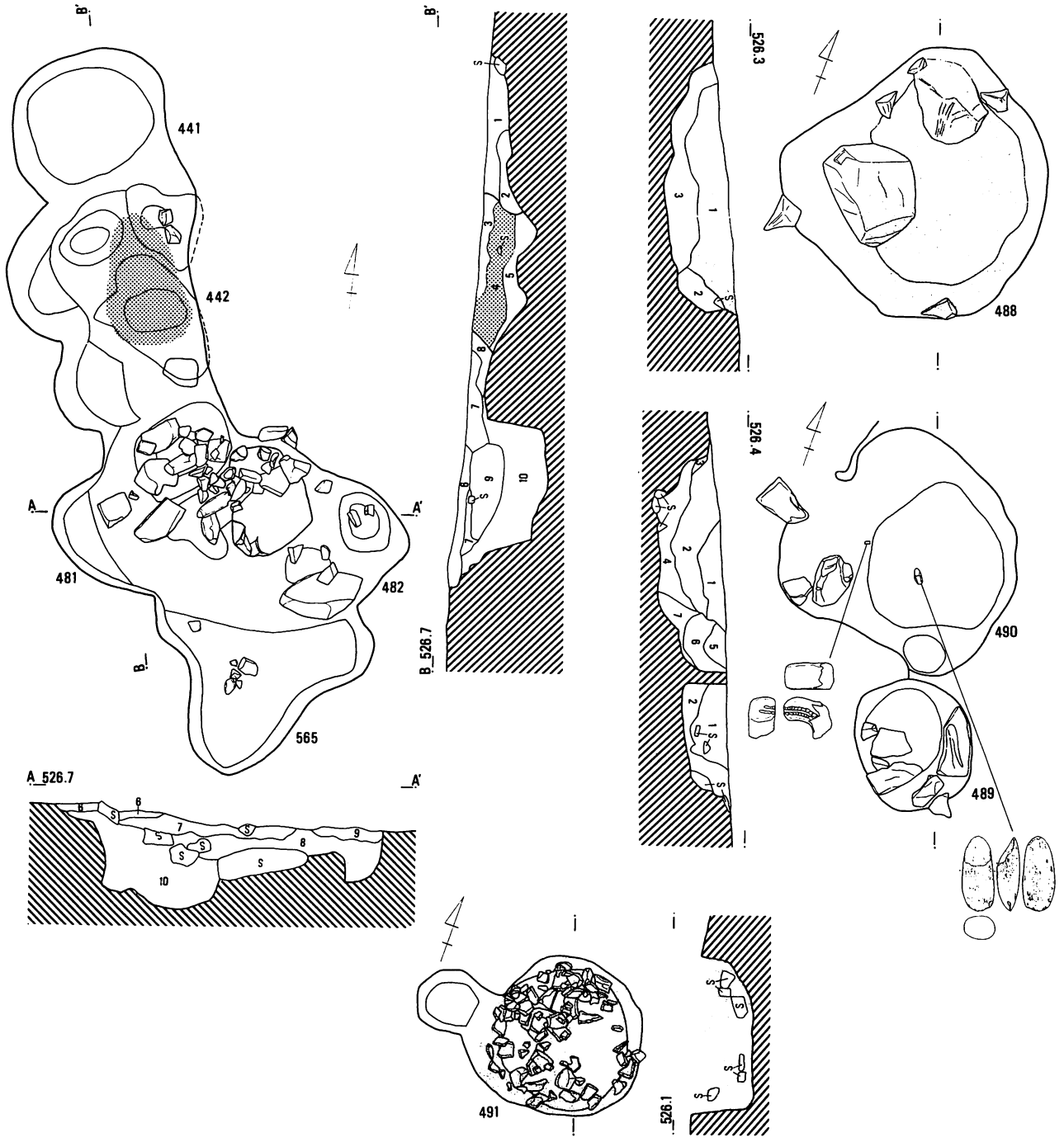
第63図　土坑（13）



403土
1－淡茶褐色土層
2－砂質淡黄褐色土層
3－茶褐色土層
4－暗褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
5－淡褐色土層
6－淡黄茶褐色土層（2～5㎝大ローム ブロック少量含む）
7－砂質淡黄褐色土層
8－茶褐色土層
9－1層と同じ
10－砂質淡黄褐色土ローム ブロック層
11－暗茶褐色土層

485・486土
1－淡明褐色土層（焼土・炭化物少量、ローム粒子多量含む）
2－暗褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
3－明褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子・砂質ローム ブロック多量含む）
4－褐色土層
5－明褐色土層（砂質ローム ブロック少量含む）
6－暗褐色土層（焼土微量、炭化物やや多量含む）
7－砂質淡黄褐色土ローム ブロック層
8－淡明褐色土層

第64図　土坑（14）



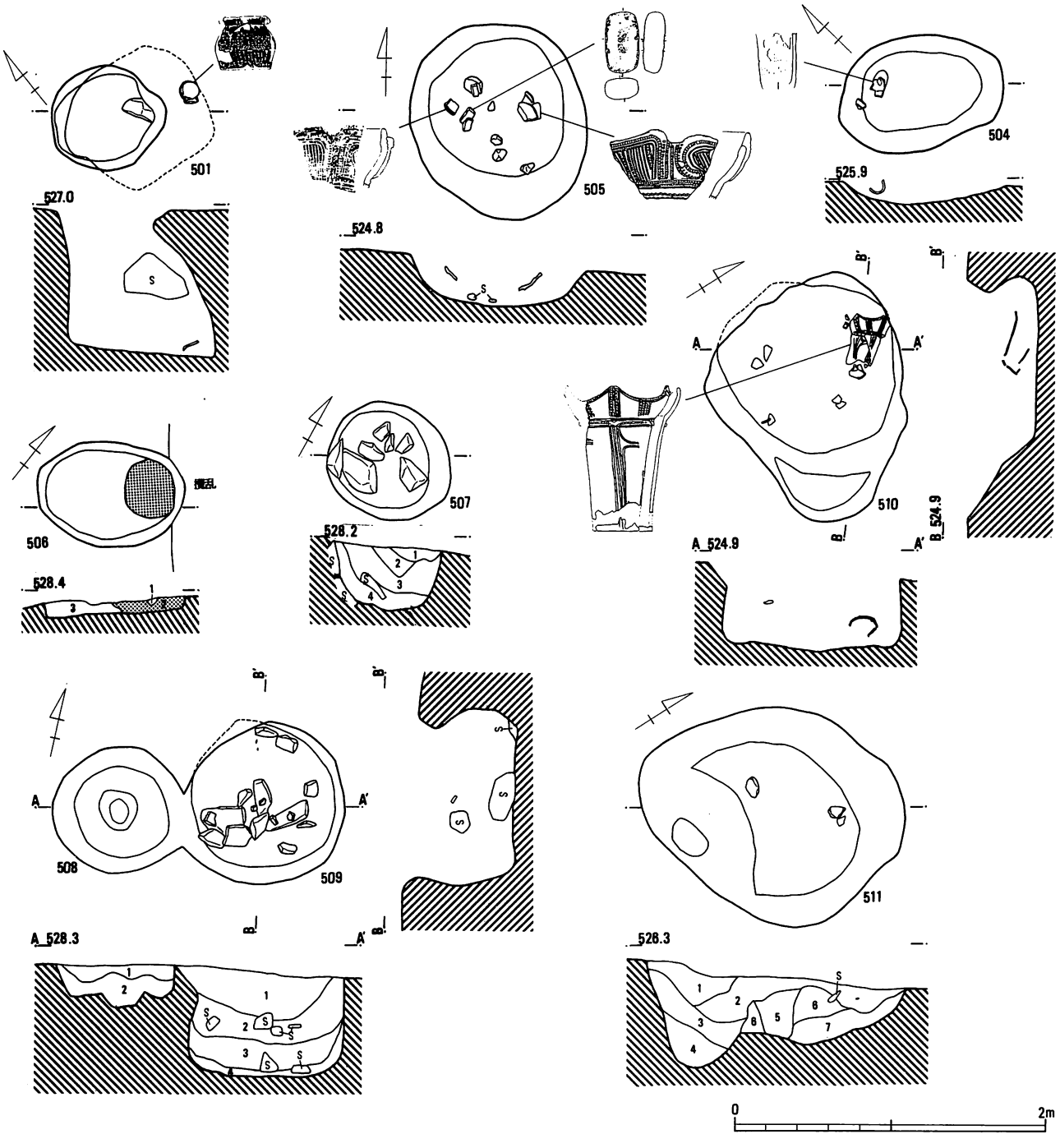
441・442・481土
1－黒茶褐色土層
2－淡茶褐色土層（ローム粒子・2～3㎝大ロームブロック多量含む）
3－茶黒褐色土層（焼土微量含む）
4－淡黒茶褐色土層（焼土多量、ローム粒子・2～3㎝大ロームブロック多量含む）
5－淡黄茶褐色土層（2～4㎝大ロームブロック少量含む）
6－3層と同じ
7－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量、2～3㎝大ロームブロック少量含む）
8－暗黄褐色土層（ローム粒子多量含む）
9－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子多量含む）
10－淡黄褐色土層

488土
1－淡暗褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
2－淡黒茶褐色土層（炭化物・5㎝大ロームブロック少量含む）
3－淡褐色土層（焼土・炭化物・炭化材少量、ローム粒子やや多量含む）

489土
1－淡暗褐色土層（炭化物少量、5㎝大礫混入）
2　明淡褐色土層

490土
1－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
2－淡黒茶褐色土層（炭化物少量含む）
3－淡黄褐色土層
4－淡黄褐色土層
5－淡明褐色土層（炭化物微量含む）
6－淡暗褐色土層（炭化物微量含む）
7－淡黄茶褐色土層

第65図　土坑（15）



506土
1－淡褐色土層
2－淡赤橙褐色土層（焼土・炭化物多量む）
3－淡黄褐色土層（焼土少量、炭化物多量含む）

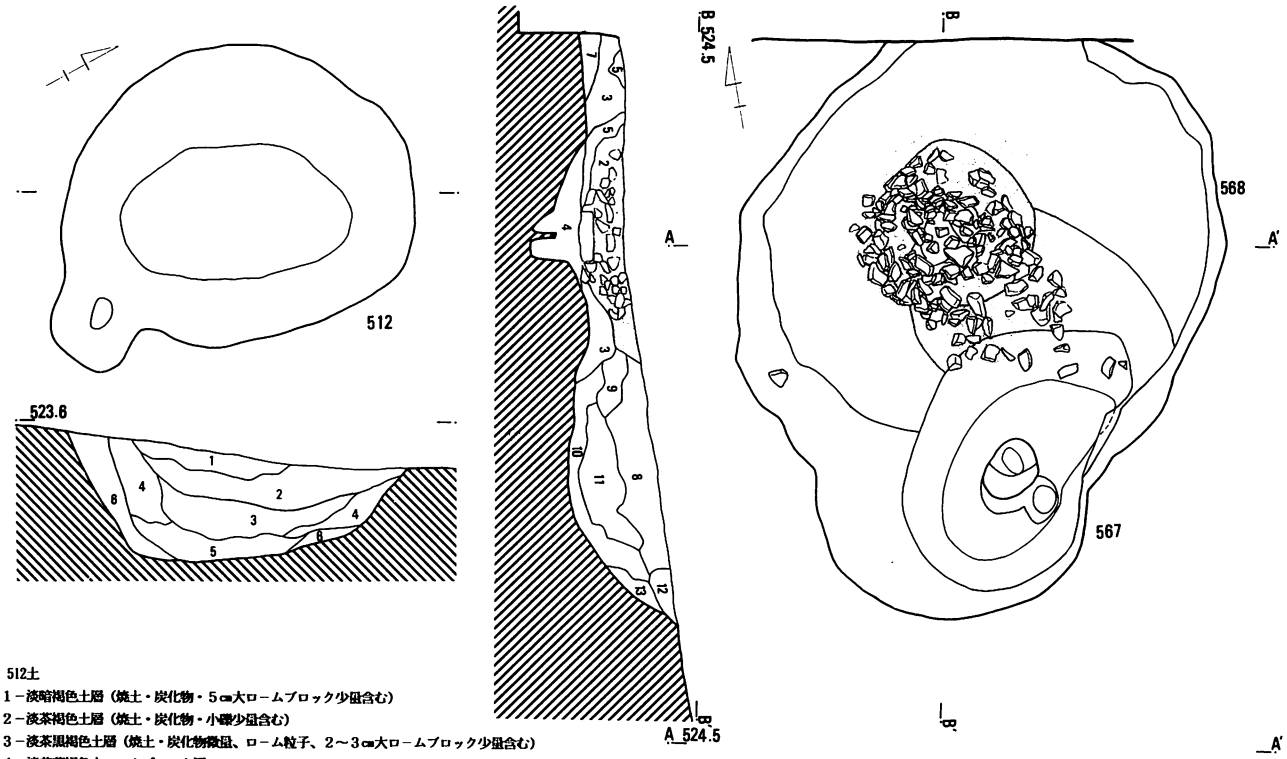
507土
1－淡暗褐色土層（焼土微量含む）
2－淡暗黄褐色土ロームブロック層（焼土多量含む）
3－砂質淡暗褐色土層（10cm大ロームブロック少量含む）
4－暗褐色土層

508土
1－暗褐色土層（炭化物少量含む）
2－明褐色土層（3cm大ロームブロック少量含む）

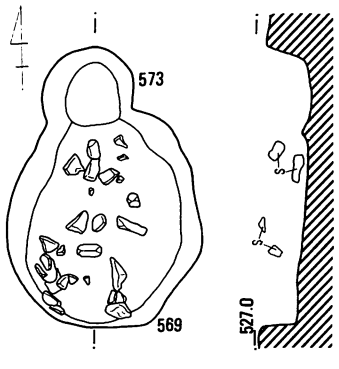
509土
1－淡褐色土層（焼土・炭化物・2～5cm大ロームブロック少量含む）
2－淡暗褐色土層（焼土微量、炭化物微量含む）
3－淡暗褐色土層（焼土微量、5mm～1cm大ロームブロックローム少量含む）
4－淡褐色土層

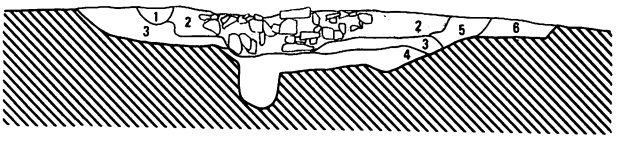
511土
1－暗茶褐色土層（炭化物微量含む）
2－茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量含む）
3－黒茶褐色土層（炭化物微量含む）
4－淡暗茶褐色土層（1～5cm大ロームブロック少量含む）
5－淡褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
6－淡暗褐色土層（焼土・炭化物やや多量含む）
7－暗褐色土層（焼土・炭化物微量含む）

第66図　土坑（16）

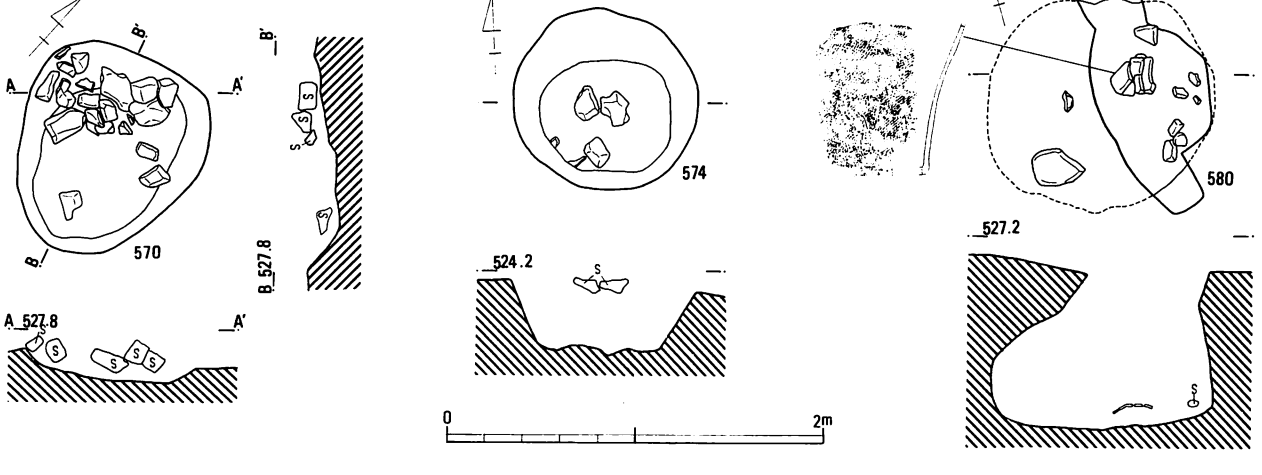


512土
1－淡暗褐色土層（焼土・炭化物・5㎝大ローム ブロック少量含む）
2－淡茶褐色土層（焼土・炭化物・小礫少量含む）
3－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量、ローム粒子、2～3㎝大ローム ブロック少量含む）
4－淡黄茶褐色土ローム ブロック層
5－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物・ローム粒子やや多量含む）
6－淡暗黄褐色土層





567・568土
1－淡黄茶褐色土層
2－淡茶黒褐色土（焼土・炭化物やや多量含む）
3－淡褐色土層（焼土・炭化物・5㎜大ローム ブロック少量含む）
4－淡黒茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
5－2層と同じ（やや明るい）
6－淡黄茶褐色土層（焼土・炭化物少量含む）
7－淡茶褐色土層（5㎜大ローム ブロック微量含む）
8－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物微量、5㎝大ローム ブロック・3㎝大礫少量含む）
9－淡黒褐色土層
10－淡茶黒褐色土層（焼土・炭化物少量、ローム粒子やや多量含む）
11－淡黒褐色土層（焼土・炭化物やや多量、2～3㎝大礫少量含む）
12－淡茶褐色土層
13－淡黒褐色土層



第67図　土坑（17）

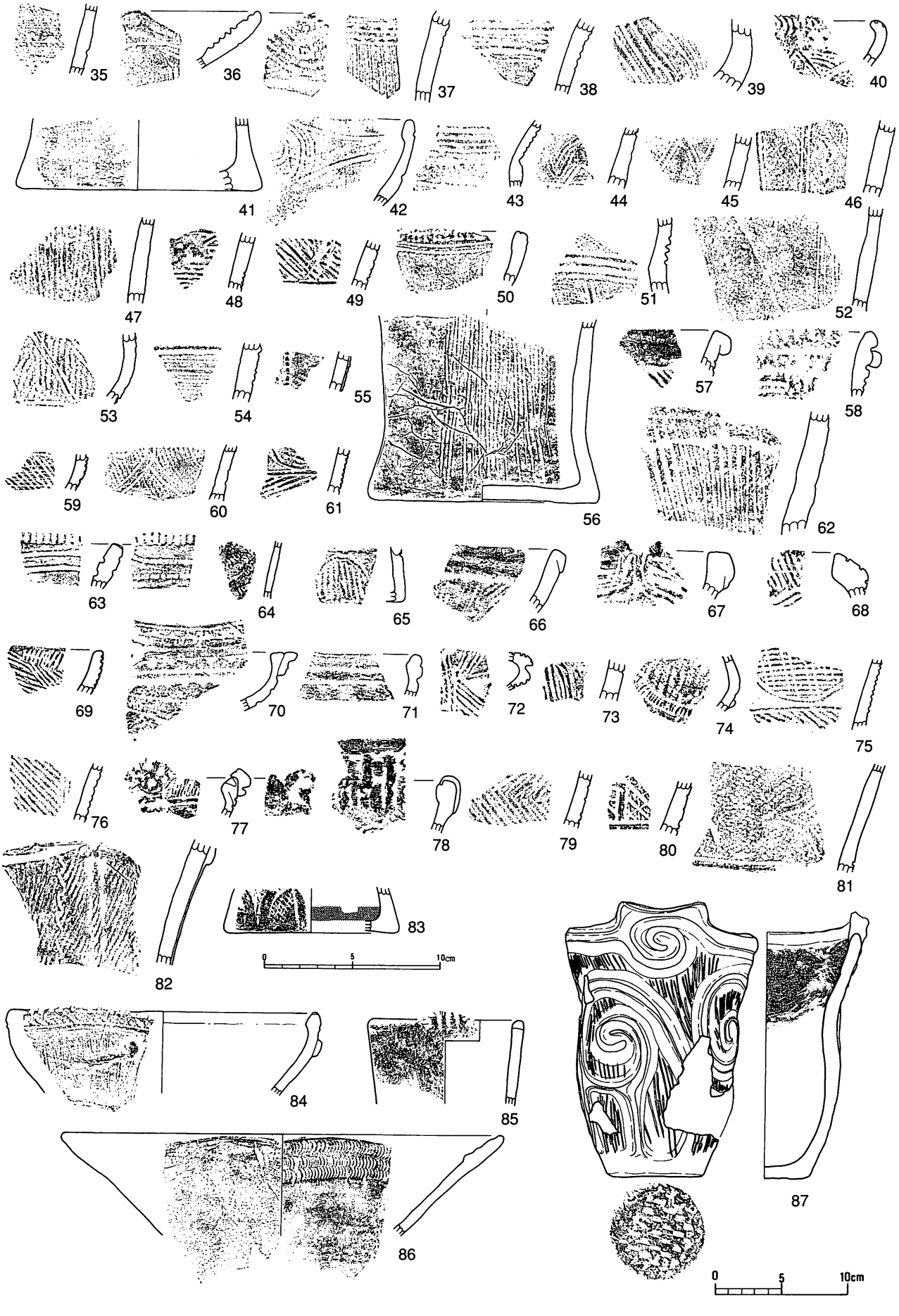
232は第216号土坑、233・234は第221号土坑、235～238は第227号土坑、239は第232号土坑、240は第246・248号土坑、241は第256号土坑、416は第261号土坑、242は第262号土坑、417は第281号土坑、243～245・419は第292号土坑、246～248・252・409は第303号土坑、249・250は第305号土坑、251・253・254は第358号土坑、255・256は第369号土坑、257・258は第404号土坑、259～267は第434号土坑、268は第436号土坑、269・272は第441号土坑、273～275は第442号土坑、276～278は第480号土坑、279～282は第481号土坑、283・284は第482号土坑、285～295は第484号土坑、296～298は第485号土坑、299～304は第486号土坑、第305～313は第487号土坑、314は第488号土坑、315は第490号土坑、316～321は第491号土坑、322～324・421は第501号土坑、325～327は第502号土坑、420は第504号土坑、399・400は第505号土坑、328・329は第509号土坑、330～337は第510号土坑、338は第511号土坑、339は第512号土坑、340～342は第515号土坑、343は第516号土坑、344～347は第549号土坑、348は第550号土坑、349・350は第558号土坑、351は第562号土坑、352は第563号土坑、353・354は第566号土坑、355は第567号土坑、356・357は第572号土坑、358～379・401・410・418は第579号土坑、380～396・402は第580号土坑、398は第592号土坑から出土したものである。

出土土器の主なものでは、1～9は隆帯による楕円区画文内に角押し文が施されている狢沢式で、本遺跡ではあまり多くない時期のものである。33は四単位の波状口縁を持つ深鉢形土器で、口唇部は刻まれ、波頂部下には沈線による円形文および弧状文が、また括れる頚部には横位の沈線上に刺突文が施されている。34は口縁部が外側にやや外反する円筒形をする深鉢形土器と考えられ、口唇部には刻みが、波頂部下には「ゾウリムシ」状の貼付文が認められる。33・34は中期初頭の土器である。40は内湾する口縁部で、口唇部分に連続した爪形文が、口辺部には横位の半隆起線を引き、V字状に区画する北陸系の前期末葉土器群の系譜が辿れるものである。72は把手部分で、縦位や斜位の並行沈線と三角印刻文が施されている。74は関西系の土器群で、色調は灰黒褐色を呈しており、在地のものと異なって薄手であり、縄文地に貼付文上に爪形文が施された結節浮線文が認められる。75は並行沈線によって雲形に区画された中を集合沈線によって充填し、空白部が抉られている。78は肥厚した無文地の口唇部上に、無節の浮線文が施されている。72・74・75・78は前期末葉の土器である。83は底部で、半隆起線で区画した中を沈線による格子目文で充填している。内面には赤色顔料が塗布されていた痕跡が残っている。86は浅鉢形土器で、口縁部内面に三条の連続爪形文が施されている。83・86は中期初頭の土器である。87は口縁部の波頂部下と胴部に渦巻き文が擬隆帯で表現され、この文様間には縦位の沈線が施され、底部には網代痕がある。内面の口辺部には、スス状の炭化物が付着している。本資料は曽利Ⅳ式で、本遺跡から該期のものは少なく、周辺の関連遺構との関係が取り沙汰されるものである。前期末葉に位置付けられる第57号土坑から出土した88～126は、在地系と外来系の土器群が伴出していて興味深い。88は口唇部が外側に折り返されて肥厚する波状口縁で、横走する集合沈線上に縦位の細い沈線が約1㎝間隔で施される。また同一個体の99・103に見られるように、口縁部下には並行沈線で区画された雲形文が描出されるものと考えられ、部分的に抉りが入る。89は外側に外反し緩やかに内湾する波状口縁で、口唇部が内側に折り返されて肥厚する。縄文地に横位の並行沈線によって区画された文様帯内には斜位の集合沈線が施されている。91・92・94は横位や斜位といった集合沈線が充填されている。93・95・96は無文地の口縁部で、口唇部に粘土が貼られて肥厚する。97は口縁部に「ラッパ」状のモチーフの貼付文が施されている。98は縄文地に篦状工具で刻みが付けられた結節浮線文が、100～102は集合沈線によって充填され、その空白部分には抉られて三角形のモチーフが、また102については空白部分が磨り消されている。104～116、121～126は縄文地で、115・116・121は並行沈線が施されている。124は口唇部に粘土が貼られ肥厚し、内面には輪積み痕が残っており、器形は平縁で、口縁部が開く円筒形をしている。125は胴部が膨らみ、ややくびれた頚部から外側に急激に開く波状口縁を呈しており、推定口径は47㎝を測る。これは従来的に見られる関西系大歳山式で、外側に向く口唇部上は特殊凸帯文が、口縁部にはΣ状工具による連続刺突された結節浮線文が横走し、頸部以下には縄文が施されている。器形としては典型的なものであり、異系統の土器群としての大歳山式として申し分無いものだが、やや全体的に作りが粗雑であるので、粗製タイプのものとして認識できるものと考えている。126は口縁部に対して胴部が膨らむ器形を呈しており、口唇部は貼り付けられた粘土によってやや肥厚し、口縁部には縦位の棒状貼付文がある。126は胴

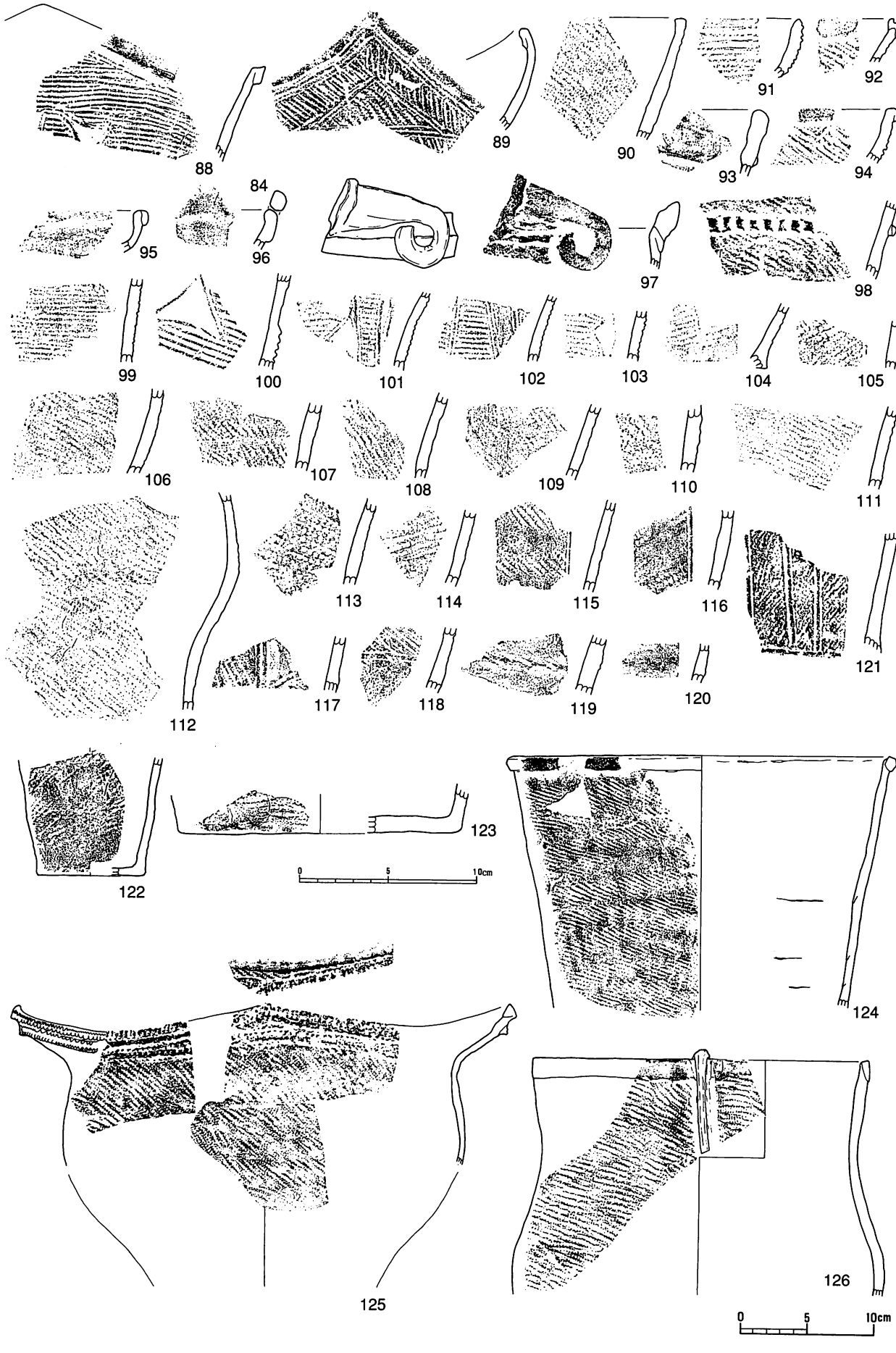
部が膨らむ甕形の深鉢形土器で、頸部には連続した爪形文が施された隆帯、並行沈線、交互刺突文、斜行沈線が抽出されている。136は斜位の集合沈線があり、並行沈線で区画された内部には鋸歯状の刺突文と三角印刻文が施される五領ヶ台Ⅰ式。138は波頂部で、細かな結節浮線文が施される。139は口唇部が外側に屈折し、その側面部には爪形文が、またその下部にも押し引きによる連続爪形文が施されており、140は肥厚する口唇部上面には刻みが、無文帯を以下には並行沈線が横位に、そして縦位に連続するもので、これらは前期末葉の土器である。160は浅鉢で、口唇部に連続した爪形文が施された擬隆帯が認められる。165・166は縄文地に結節縄文が、また166は縦位の隆帯がある。183は口唇部が肥厚し、口縁部に幅広の爪形文が施された隆帯が二条横走する東海系土器群の北裏ＣⅠ式で、黄白色の色調を呈している。188～190、192、193は集合沈線が施され、191は口唇部にソーメン状貼付文が施された前期末葉の土器群である。195は胴部に隆帯による三角形の区画文が見られ、この区画の内外には太目の沈線が併走する。197は胴部が膨らむ樽形を呈した深鉢形土器と考えられ、波状の口縁を持つ。器面には地に縄文が施され、横位の沈線と交互刺突文が施される。204・205は斜位の集合沈線が施され、空白部分は並行沈線による三角の区画文があり、その内部は抉られている。221は口唇部が内側に折り返されて肥厚し、この内側部分には縄文が、上部には刻みが、頸部下には刻みを伴った並行沈線文が施され、口縁部の器面には穿孔途上の補修孔が認められる。234は胴上部破片で、連続したＹ字文が施されている。241は内側に屈曲する体上部に隆線で模様を描く注口土器の注口部分で、後期前葉の堀之内１式である。248は横走する交互刺突文と沈線による三角区画内には細かい刺突文が併走している。255・256は後期前葉の堀之内２式で、255は朝顔形に開く深鉢形土器の口縁部であり、有刻の細い隆線が巡り、８の字状の突起が施され、内面にも五条の横走する沈線と共に、有刻の細い擬隆線が巡る。胴部には（255・256）、沈線間に縄文が施された帯縄文となる。259～261は集合沈線によって格子目状、並行、斜位の沈線が施された口縁部で、口唇部が外側に屈折する。262～266はその頸部から胴部で、これらは中期初頭五領ヶ台Ⅰ式である。322～324は前期末葉の土器群であり、322は口唇部が外面では折り返し、内面には粘土を貼って肥厚させ、口縁部には縦位の集合沈線が、323は縄文地に縦位の細い半截竹管による並行沈線文が、324は並行沈線によって区画された雲形文内に集合沈線が充填され、空白部は磨り削られている。330は浅鉢形土器で、口唇部が肥厚し、上部に刻みを持ち、口縁部以下には縄文地に横位の並行沈線と刺突文が施されている。338は角押し文が斜位に、550は楕円に、354は横位のクサビ文と鋸歯状の角押し文が施された狢沢式である。357～398、410は前期末葉の土器群であるが、施文および器形はバラエティーに富んでいる。356は縄文地に棒状工具で刻みが入った横位の結節沈線と並行沈線で区画した楕円の中に斜位の集合沈線が、357は頸部のくの字屈折する部分に縦位と横位に無節のソーメン状貼付文を有し、358は無文の口唇部分が外側に折り返されて肥厚し、以下は縄文地、359は無文でやや肥厚気味の口唇部以下に、横位の並行沈線と斜位の集合沈線が、361は口唇部に縦位で無節のソーメン状貼付文が、363・369・370・373は胴部で、連続したＹ字文が、365は無文地に横位と鋸歯状の結節浮線文が、366は縄文地に横位と縦位の結節浮線文が、367は縄文地に押圧の結節浮線文が、378は集合沈線と三角印刻文が、380は関西系の大歳山式で、口唇部内面に縄文、上部にはΣ状工具による連続刺突、表面には結節浮線文が、580は外反する口唇部が肥厚し、頸部の括れた部分に横位の並行沈線、以下には斜位の集合沈線が、382は突起を持つ口唇部が肥厚し、以下は並行沈線と斜位の集合沈線を充填、384～391・398は並行沈線で区画文を作り、内部を斜位の太い沈線と、これにほぼ直交するように細い沈線が施され、空白部には三角印刻文が、392は縄文地に横位の押圧隆線が、410は鍋屋町式の影響があったものと考えられるもので、口唇部に縦位、また口縁部には横位と鋸歯状に無節のソーメン状貼付文が、胴部には縄文地上に半裁竹管による鋸歯状の文様が縦位に薄く施されている。399・400は５・２・1.5・１mmといった太さの棒状工具によって押し引きされた角押し文が充填され、口縁部文様帯部分には縦位に細い棒状工具で交互に刺突された狢沢式である。

次に第77図に示した個体資料について述べることにする。第501号土坑出土の411は、四単位の波状口縁で口唇部には上部に刻みが、また側面には並行沈線が施され、波頂部以下には縦位の集合沈線が充填された上に、押し引きによって盛り上がった結節擬隆線が、頸部には橋状の貼付文、胴部には縦位の集合沈線と途中で横に突き出る並行沈線が垂下する。また波頂部間には棒状工具による刺突文と押し引き文が見られ、頸部には横位

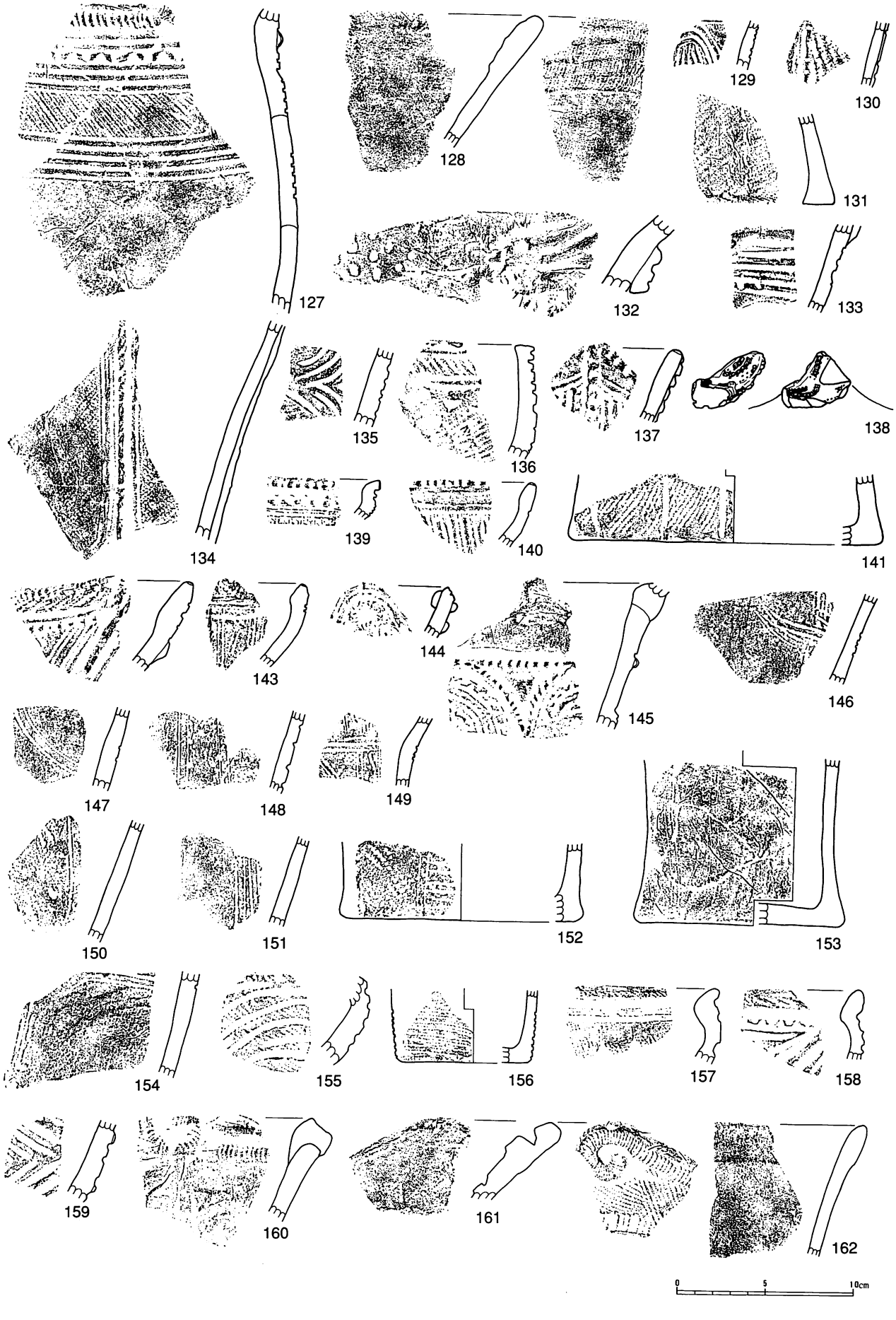
第68図　土坑出土土器（1）



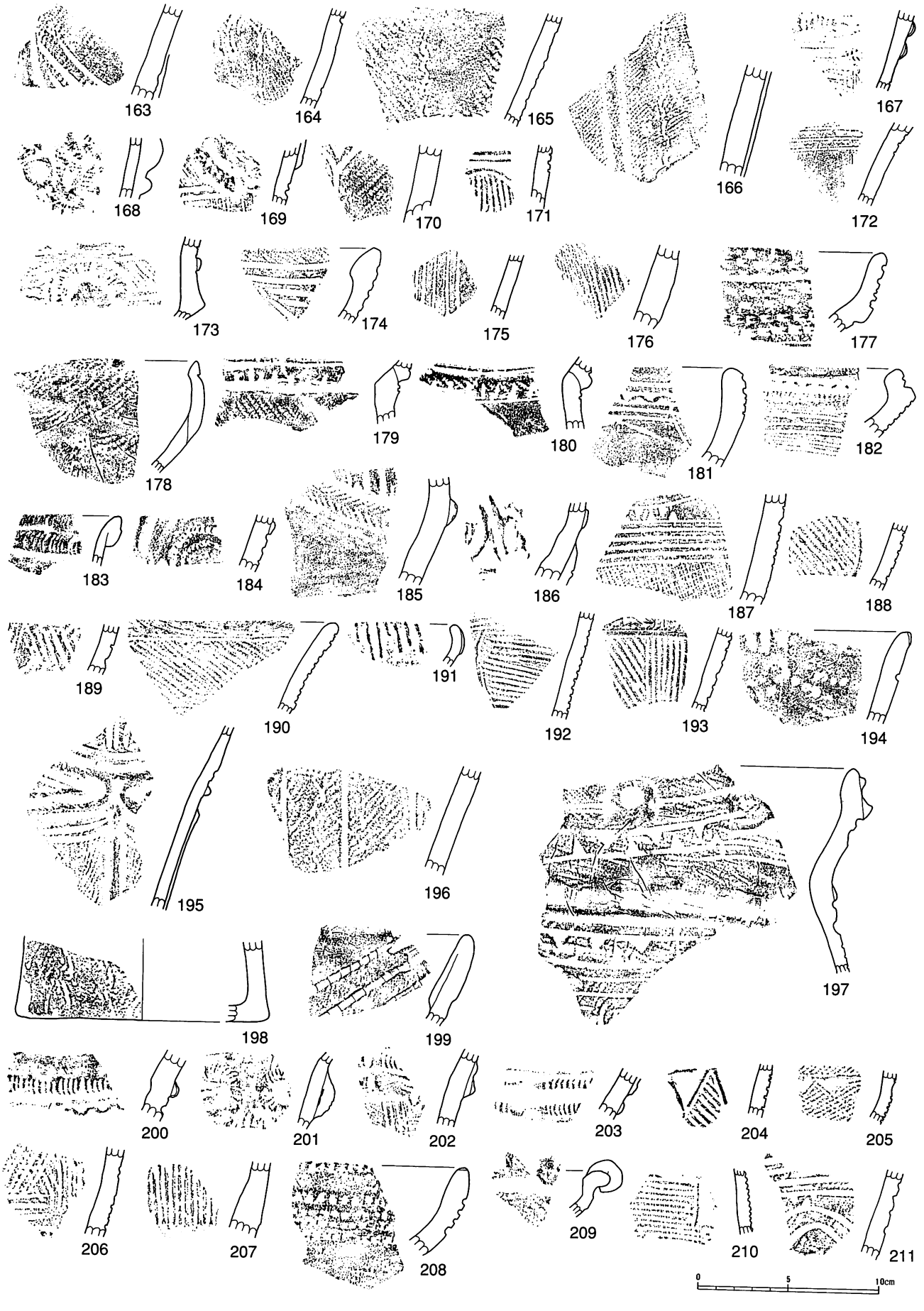
第69図　土坑出土土器（2）



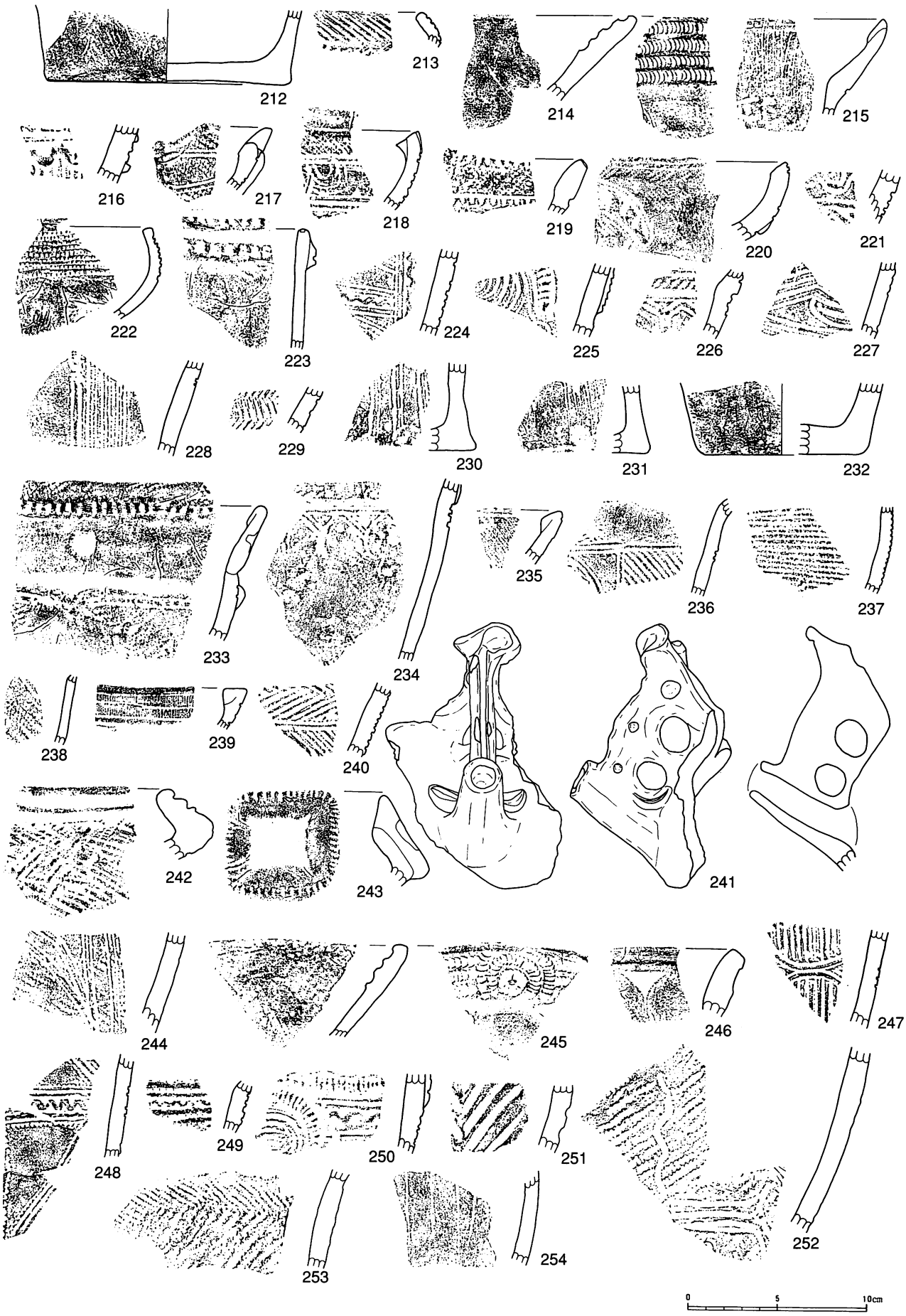
第70図　土坑出土土器（3）



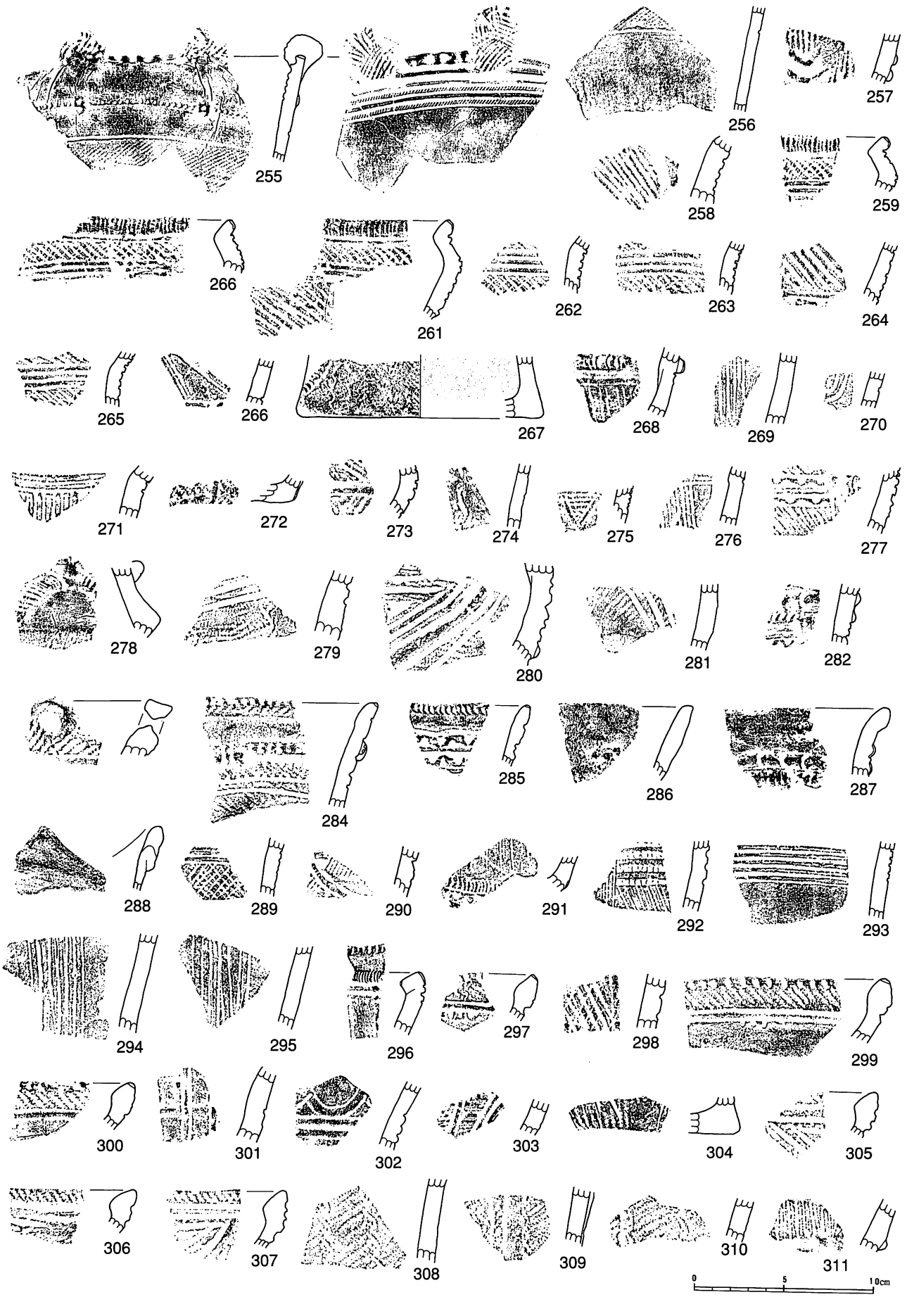
第71図　土坑出土土器（4）



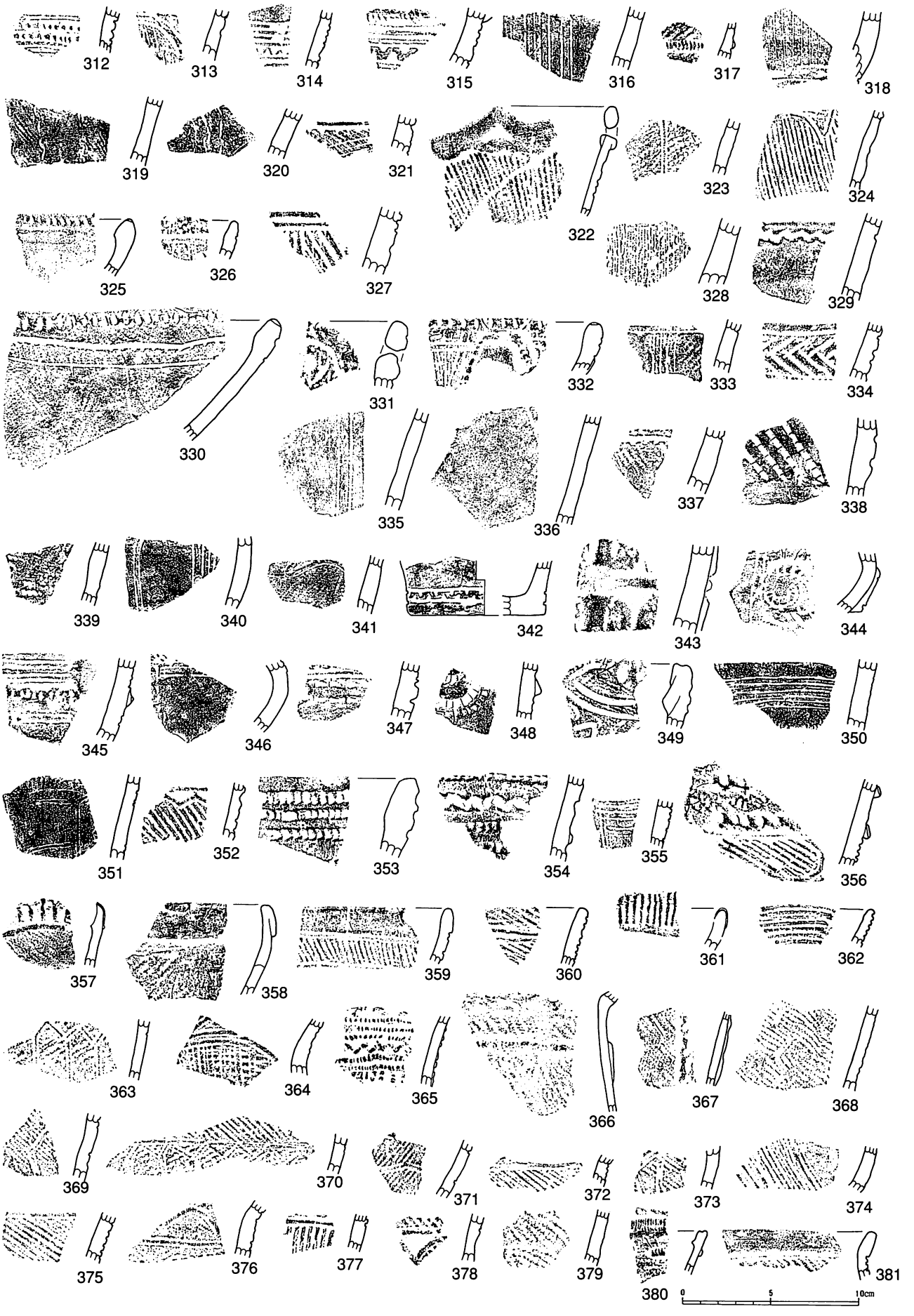
第72図　土坑出土土器（5）



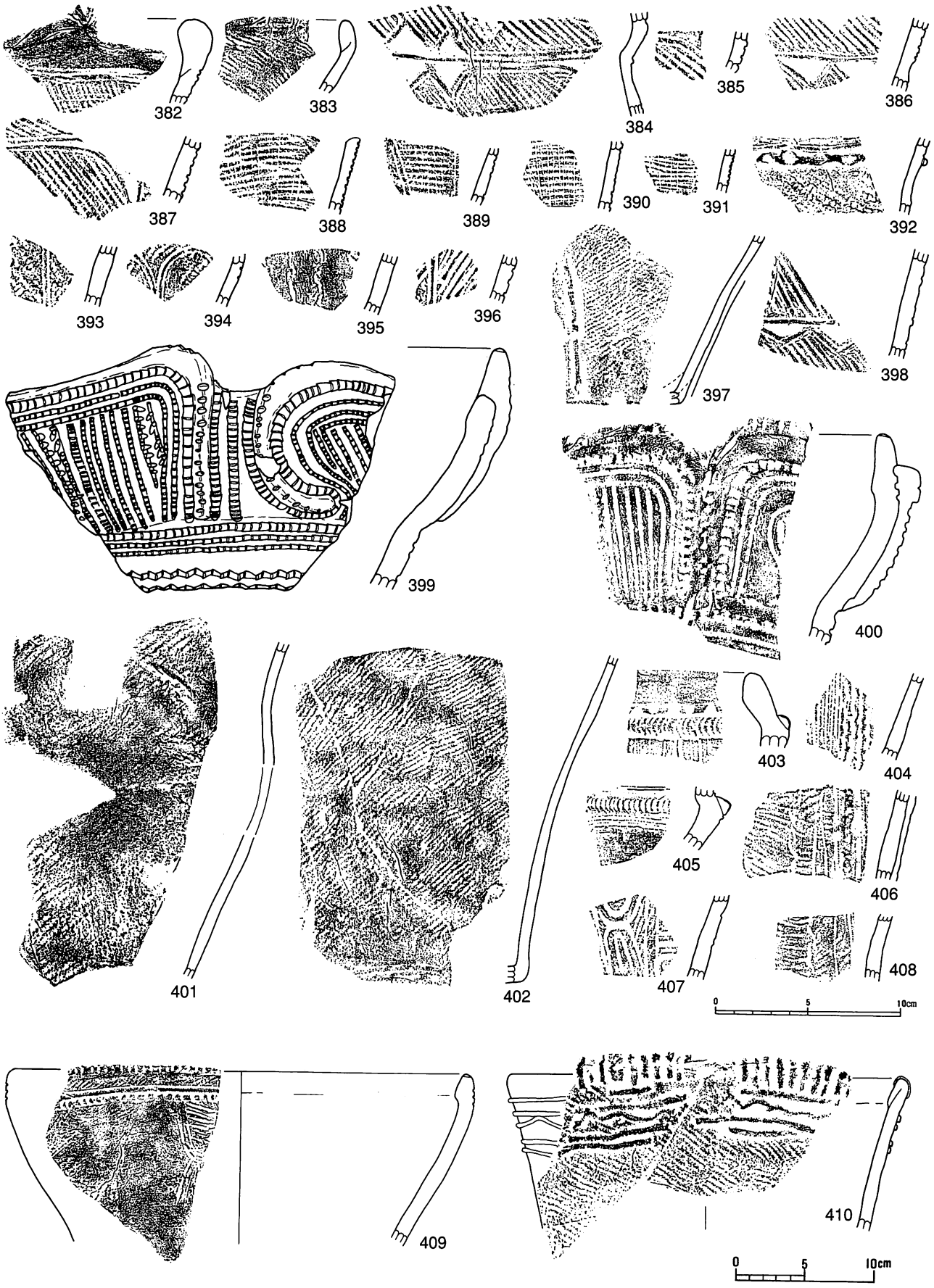
第73図　土坑出土土器（6）



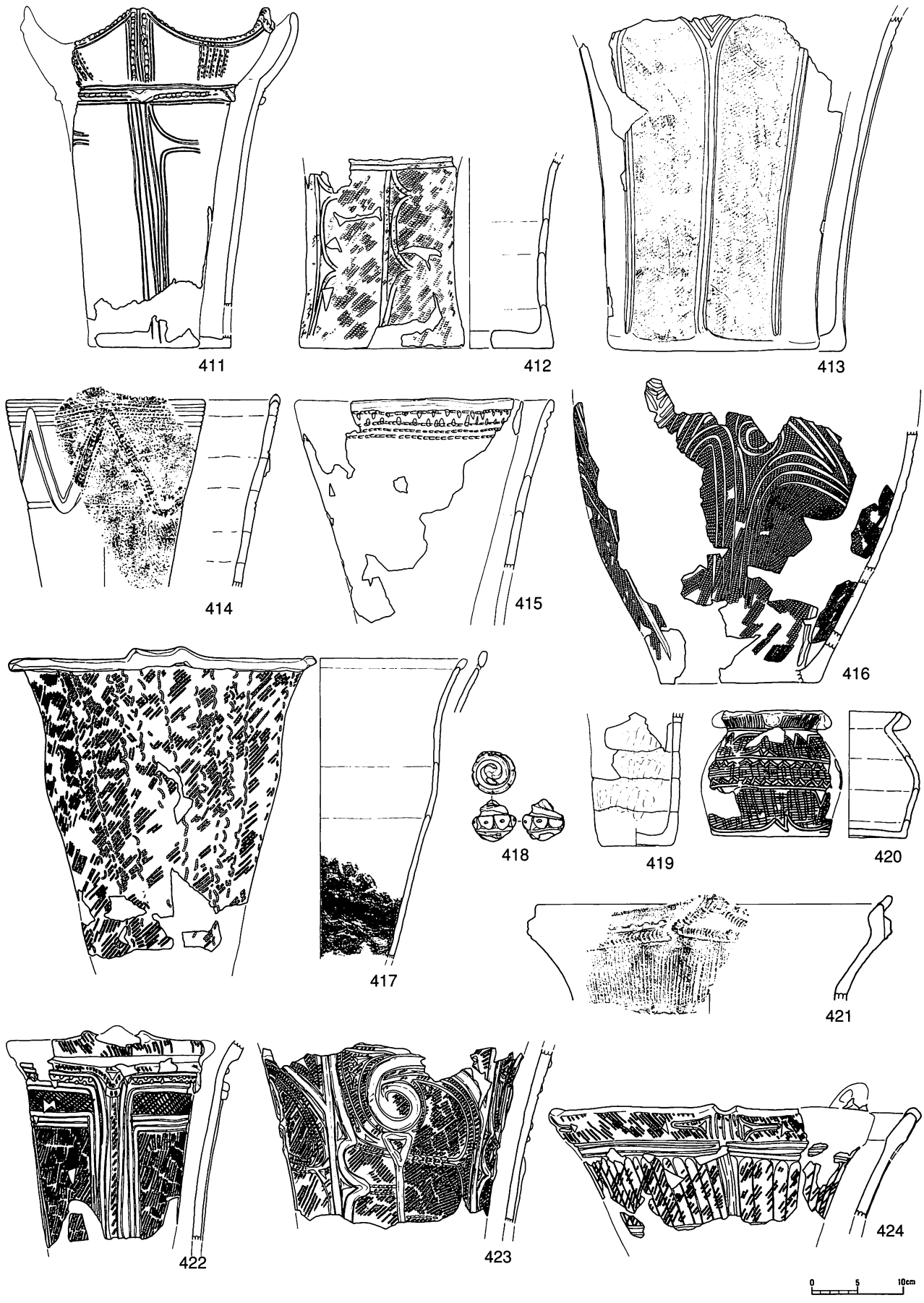
第74図　土坑出土土器（7）



第75図　土坑出土土器（8）



第76図　土坑出土土器（9）



第77図　土坑及び埋甕遺構出土土器

の並行沈線と押し引きによる結節擬隆線が見られる。前述のとおり、口縁部の約三分の一が破壊されている。412は第58号土坑出土のもので、縄文地に縦位の結節縄文が施される。413は第80号土坑出土のもので、前述のとおり口縁部部分は破壊され欠失しており、底部も穿孔されている。この胴部には、縦位と途中横に突出する並行沈線が縄文地上に施されている。414は第71号土坑出土のもので、前述のとおり口縁部は意図的に破壊されて存在しない。胴部には、縄文地上にY字状の隆帯が垂下する。第140号土坑出土の415は、口唇部に刻みを持ち、口縁部には並行沈線文内に刻みを付けた擬隆帯と、その下部には連続した爪形文を施した波状隆帯が見られる。第261号土坑出土の416は、筒型の器形に、口縁部に四条の棒状押し引き文が、また交互刺突文も見られる。417は第281号土坑出土で、胴部が膨らむ器形を呈し、縄文地上に沈線による円文と弧状線によって構成されている。前述のとおり本資料は埋甕として利用されていたこともあり、胴上半部は欠失し、底部は穿孔されている。418は第579号土坑出土のもので、前述のとおり底部が破壊され欠失している。口唇部は肥厚し、波頂部の片側は孔が認められ、縄文地の器面には縦位の結節縄文が施される。内面の胴下半部には、スス状の炭化物が付着している。419は第297号土坑出土の把手部分で、上部は渦を巻き、側面部には三角に抉って立体的な連続した文様を構成している。420は第504号土坑出土の小型の粗製土器で、表面には輪積み痕が認められ、指撫での痕がある。421は第501号土坑出土のもので、魚篭状の器形は特異な物であり、恐らくこういったものを模倣したものと考えられる。口縁部には四単位の突起が付き、縦位の集合沈線が見られ、胴部には並行沈線によって雲形文や鋸歯状の文様が区画され、その内部には格子目状に集合沈線が充填され、空白部分は抉られている。

第4項　単独埋甕遺構

深鉢形土器などが住居跡などに付随せず、また炉といった機能としても使用されずに単独で出土した埋甕について、ここでは土坑とは区別して単独埋甕遺構として扱うものである。ただし、後述のように土器を埋設したと考えられる第120号土坑の南側から発見された土器の底部や、胴下半部が正位で出土した第218号土坑についても本来的には、ここの分類に属するものであるが、調査段階で土坑という認識のもとで調査したため本項では、扱わないことにした。

第1号単独埋甕遺構（第78図）

（位置）調査区の南東端、南東向き斜面部のI・J—11・12グリッドに位置している。

（形態・規模）全体の掘り込みは不整形で、長径4.1m、短径2.7mを測り、中央付近に土坑状の落ち込みが見られる。土器の埋設部分にも長径1.5m、短径1.1mを測る不整形の掘り方が存在し、底部が破壊された深鉢形土器が正位で設置されていた。

（時期）縄文時代中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）第77図423が埋甕で、径が23cmを測り、口唇部が肥厚する。口縁部下には横位の隆帯が走り、交互刺突文、沈線で区画された格子目文、横走する平行沈線文と続いている。また波頂部下にはこの隆帯下にY字状に垂下する隆帯が存在する。422が周辺から出土した深鉢形土器の口縁部で、口唇部下には交互刺突文、爪形文が施された擬隆帯、縦位の集合沈線と続いている。

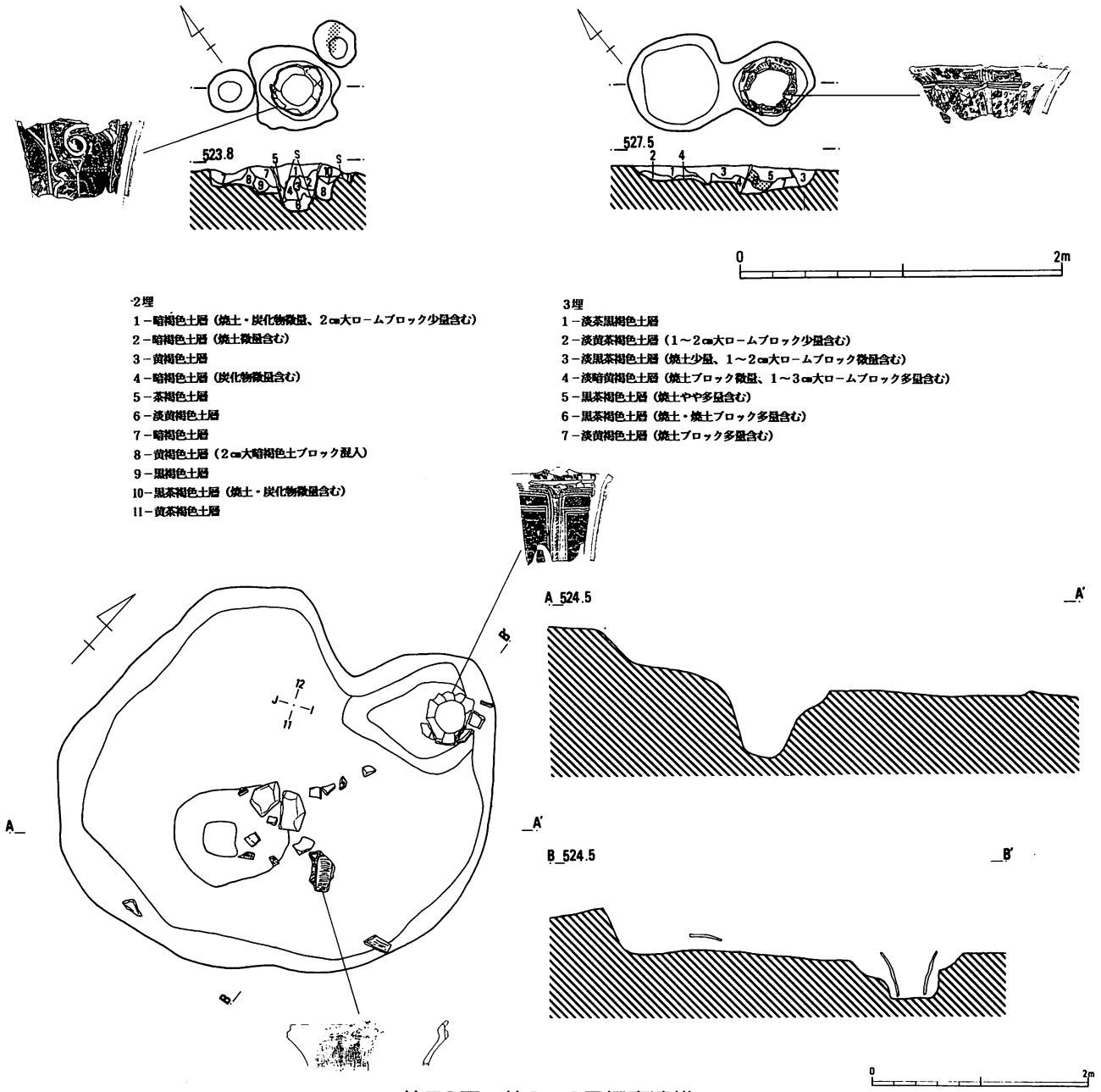
第2号単独埋甕遺構（第78図）

（位置）調査区の南東端、南東向き斜面部のJ—13グリッドに位置している。

（形態・規模）全体の掘り込みは不整形で、長径70cm、短径50cmを測る。埋甕は、底部が破壊された深鉢形土器の胴部が正位で設置されており、周辺には部分的に焼土が散布していた。

（時期）縄文時代中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）第77図424が埋甕で、縄文地上に沈線文と隆帯によって渦巻き文などが描出され、これらの文様間には三角印刻文が施されている。



第78図　第1～3号埋甕遺構

第3号単独埋甕遺構（第78図）

（位置）調査区の南東、北東向き斜面のP―10グリッドに位置している。

（形態・規模）全体の掘り込みは不整円形で、長径60㎝、短径50㎝を測る。埋甕としては、深鉢形土器の口縁部が逆位で設置されており、甕内の覆土には焼土ブロックが含まれていた。

（時期）縄文時代中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式期。

（出土遺物）第77図425が埋甕で、器面に施された縄文地上の口縁部には三角印刻文と沈線文が、肥厚した口縁部下には横位の平行沈線文が、その下部には連続して丸みを持ったY字文が施されている。

第5項　遺物集中区

包含層出土の遺物は、R－17・18グリットに集中する以外は散在しており、特別な分布上の傾向は見られない。R－17・18グリットは土器捨て場的な性格を有していることから、以下に詳述する。

R－17・18グリット遺物集中区（第79図）

（位置）遺物の分布はＲ－18グリットを中心に、調査区外に伸びている。
（立地）第２号沢に隣接している。したがって、縄文時代には凹地への落ち込み際であったことが推察される。
（遺構の性格）礫が散漫に分布する中に、遺物として少量の土器片や中形から大形の石器が出土し、接合関係は認められないものの大形の石核や剥片が検出された。これは石器製作を直接裏付けるものではないが、遺跡内における剥片剥離作業の場所や遺跡間における剥片・石器の持ち出しを考えるにあたって興味深い資料である。

破片資料である土器や機能が失われた磨製石斧・石皿などこの場所が廃棄の場であることを裏付けるような資料しか他に出土していないが、後述する第１号沢の様な祭祀的な要素を持った場所ではなく、居住区を隔てる凹地沿いに設けられた廃棄の場として位置づけられる。

（石器）（第79・80図）

１は安山岩製の小形の磨石である。原礫の形状を留め、磨面が側面に不規則に設けられている。２・３は緑色凝灰岩製の磨製石斧であり、３は熱により赤褐色に変色している。共に敲打面を部分的に残存させ、研磨は縦位と斜位方向に行われている。２は刃部と基部を、３は刃部を失っており、それぞれに複数の剥離痕を伴っている。これは磨製石斧としての機能が失われた後に、なんらかのリダクションが行なわれたことを示している。３は表面の中央に２対の凹部を有すことから、凹石に転用されたことが分かる。４は黒色緻密安山岩製の石核である。打面・作業面共に固定され、稜部を取り込むように剥片剥離作業が行なわれたことが作業面形状から観取される。同一石材を用いた石器・剥片は存在していないことから、素材剥片を得た後持ち出したのか、剥片剥離作業は別の場所で行なわれ、石核だけが持ちこまれた可能性を指摘できる。５は安山岩製の石皿である。石皿の一部であるため全体の形状は不明であるが、割れている面（第80図５右斜め上）に向かって傾斜し、磨りも発達している。

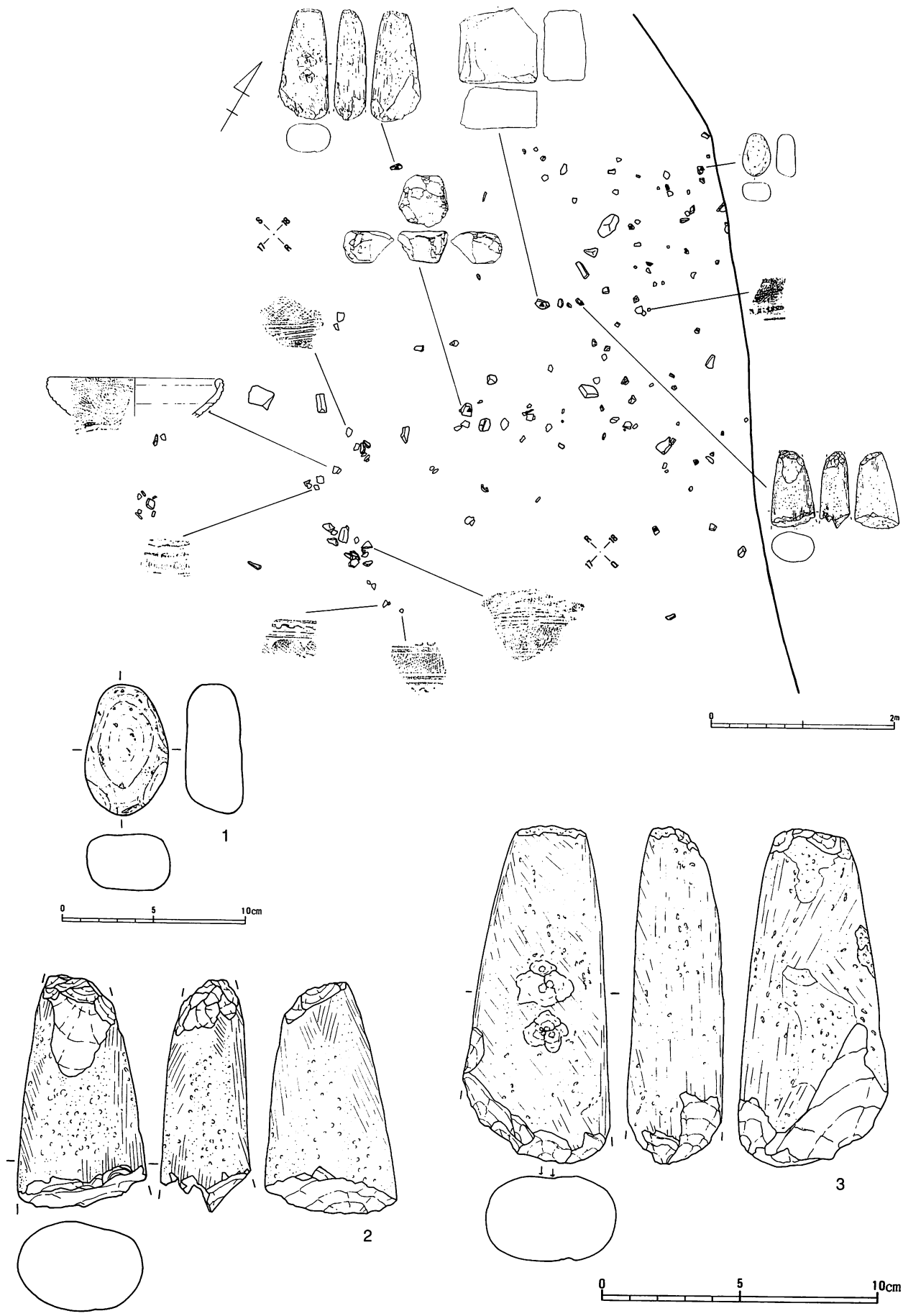
（土器）（第81・82図）

第81図の５・11・12・16・.17・20～36・第82図の37が五領ヶ台Ⅱ古期の沈線文系土器、第81図の１～４・６～10・13・14が五領ヶ台Ⅰ新期の縄文系土器、第81図の15・18・19、第82図の38～39・41が五領ヶ台Ⅱ古期の縄文系土器、第82図の42が五領ヶ台Ⅱ新期の縄文系土器である。第82図の43～48が五領ヶ台期の浅鉢形土器、第82図の49～59は狢沢期の深鉢形土器、第82図の40は狢沢期の浅鉢形土器である。

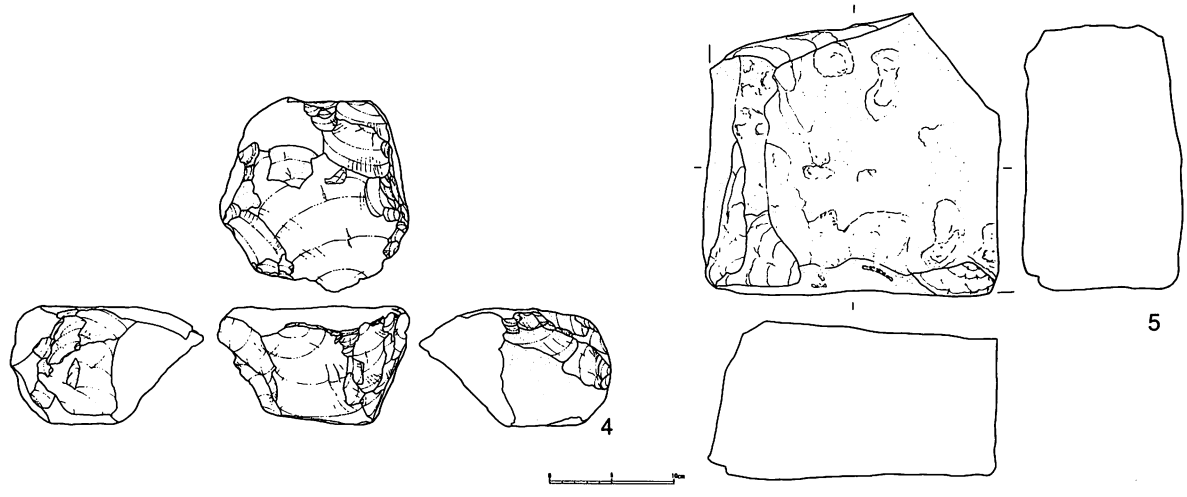
５は隆帯に連続爪形文を施し、胴部に向かって縦位の平行沈線を数条垂下させている。11・12・16・17・37は口縁部が開き、円筒形の器形を成すものである。いずれも隆帯上に連続爪形文を有し、11は隆帯を円形にめぐらせ、その中に円文を描いている。37は器体中央の頚部に貼付文、胴部に円文及び縦位に垂下する多条の平行沈線を設けることによって区画し、縦位に擬隆帯・平行沈線・交互刺突文を施文している。20～36は横位または縦位に平行沈線で区画し、その中を斜格子文・交互刺突文で充填するものである。22のように弧状の平行沈線を有するものもある。

１は縄文施文後に、横位の平行沈線と半截竹管による押引きを行っている。口縁部に逆Ｕ字状の貼付文を貼付しているが、この上にも縄文が施されている。２～10は縄文施文後に平行沈線・交互刺突文を施している。６・７・８のように口縁部に弧線を伴うものもある。６は口縁部文様帯において、弧線の下に円形の穴が存在しているが、貫通はしていない。13・14は波状口縁を成し、13は頚部に隆帯を、14は波頂部にＹ字状隆帯を有する。15・18・19は縄文施文後に横位の平行沈線・交互刺突文が施されている。38は平行沈線・交互刺突文下の口縁部に弧線を展開させている。39は浅鉢形土器であり、口唇部に縄文を有す。42は口縁部が「く」字状に内折しており、口唇部下に横位の平行沈線と交互刺突文を伴い、口縁部には重円文と弧線を有するものである。42の口縁部は重円文と弧線によって、玉抱き三叉文状のモチーフが展開されている。　43～45・47～48は平縁の、46は波状口縁の浅鉢である。外面は無文であり、内面口唇部下に数状の連続爪形文を伴っている。

49～52・54～56は五領ヶ台期の特徴を残存させていることから、狢沢の古段階と位置づけられる。この段階は角押文を多用しているものの、明確な区画文が認められない。53・57～59は楕円に区画された内部に、波状の角押文が施されていることからも新段階であることが分かる。40は肥厚した口縁部に一条の沈線を伴う。



第79図　R－17・18グリッド遺物集中区及び出土石器（1）



第80図　R－17・18グリッド遺物集中区出土石器（2）

第6項　沢跡

第1号沢（第83図）

（位置）D－7、E－5・6・7、F－7グリッドに位置している。

（平面形態）調査区を南北方向に分断しており、流路の幅は最大で25m、最小で20.6mと南に向かって狭くなるものの、ほぼ同じ幅で推移する。

（断面形態）東側は緩やかに立ち上がるのに比して、西側は若干勾配がきつくなる。

（遺構の性格）沢の北西と南東には微高地が存在しているが、第1号沢はこの2つの微高地に挟まれた凹地に存在している。つまり、地形に対応した自然流路であるが、その埋土中に多数の縄文時代中期初頭を中心とした遺物を含んでおり、第1号沢の北西方向にはピット群が検出されている。このため、土器捨て場的な性格も含んでいた可能性を指摘できるが、遺物の出土状況は散漫であり、遺物の意図的な埋納もピット群近辺を除いて認められないことから、遺物の集中的・継続的な投棄は行われず、土器捨て場としての機能も極めて一時的なものであったことが分かる。

ピット群（第84図）

（位置）E－7・8、F－7・8、G－7・8グリッドに存在している。

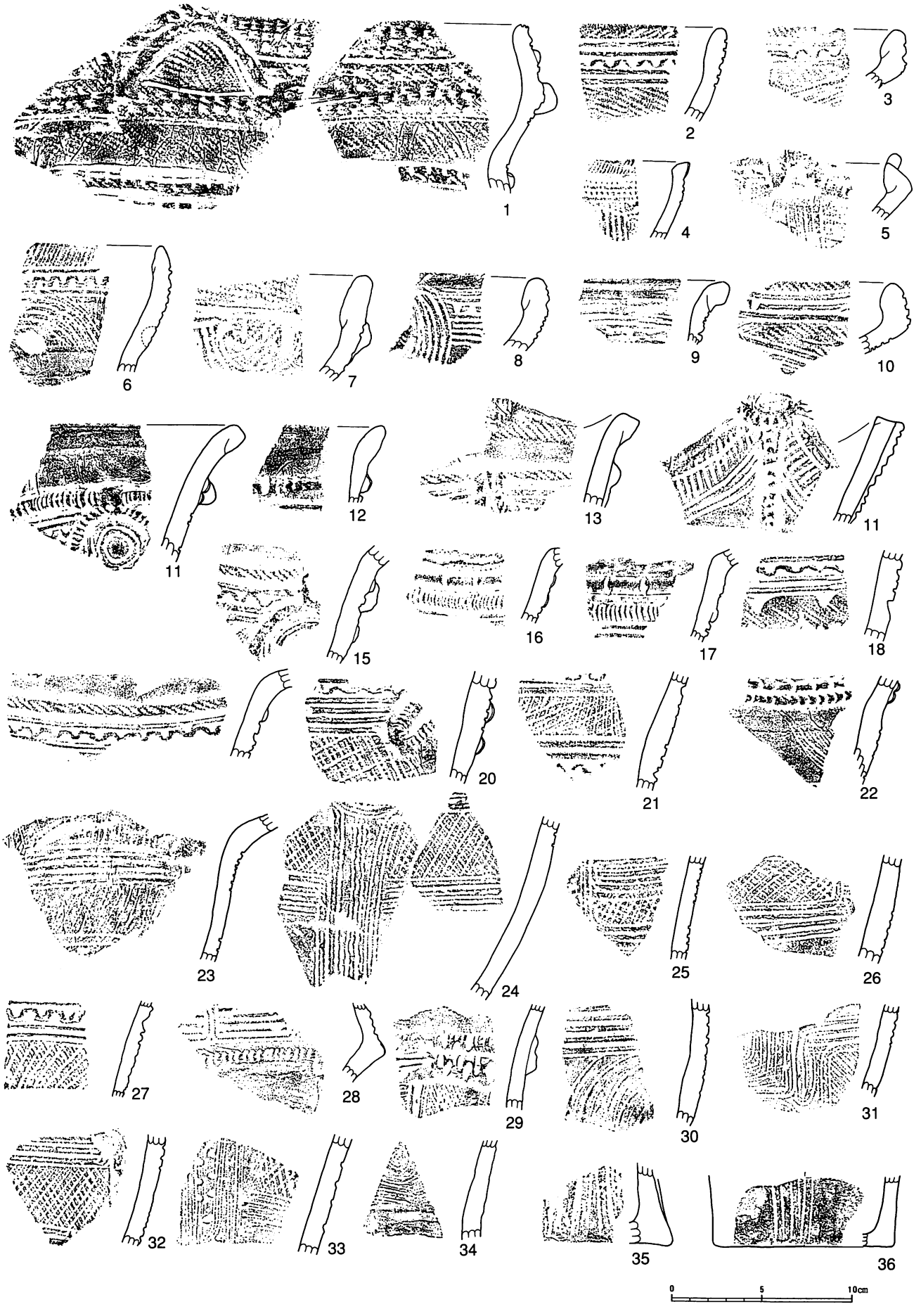
（平面形態）平面形態が円形から不整円形で長径1m以下のものが74基、平面形態が長方形で長径1～2mのものが4基、長径が3.25mであり溝状を呈するものが1基検出されている。

（出土遺物）ピット内ないしはその周辺において出土したものとして、石鏃1点（第92図32）、土偶8点（第113図8・13、114図24、115図34、116図30・49・53・54）、玦状耳飾1点（第118図10）、土偶装飾付き土器1点（第115図27）、土器2個体（第90図186・192）がある。

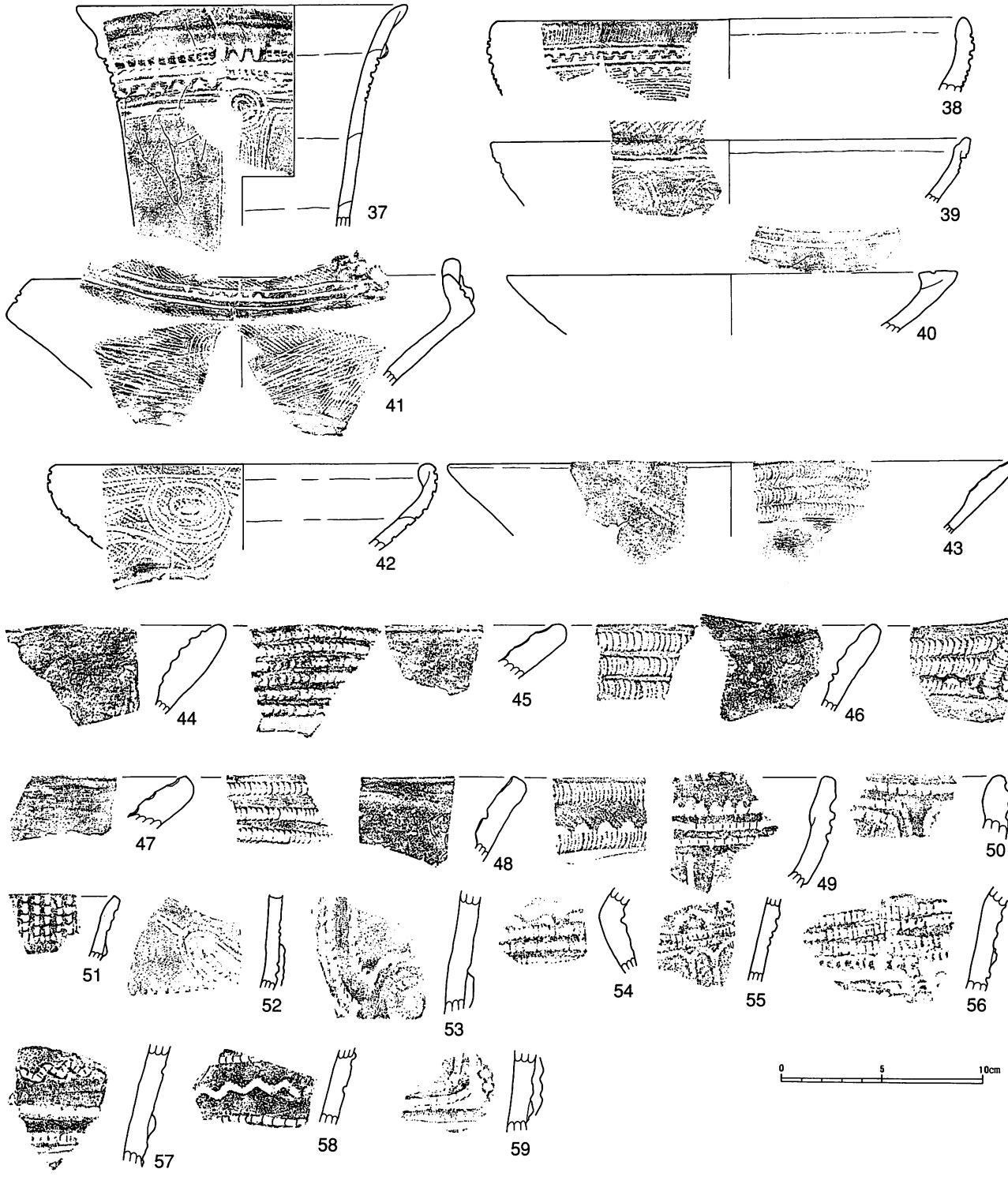
（遺構の性格）微高地の緩斜面上に集中して分布しており、第1号沢と密接な関わりをもつ遺構であることが、その立地と遺物の出土状況から指摘できる。遺構の性格は不明であるが、礫を伴う完形に近い個体が近距離で接合した例（第90図186）や土偶がピット群の周囲において出土していること、ピット群の南西側に焼土が検出されていることなどから、祭祀的行為が行なわれた可能性を有する。第1号沢と同様に住居跡の位置する居住区とは異なる性格を持つ空間である。

第2号沢

（位置）R－17・18、S－16・17・18、T－16・17・18、U－15・16・17、V－15・16・17、W－15・16・17、X－14・15・16、Y－15・16グリッドに位置している。



第81図　R－17・18グリッド遺物集中区出土土器（1）

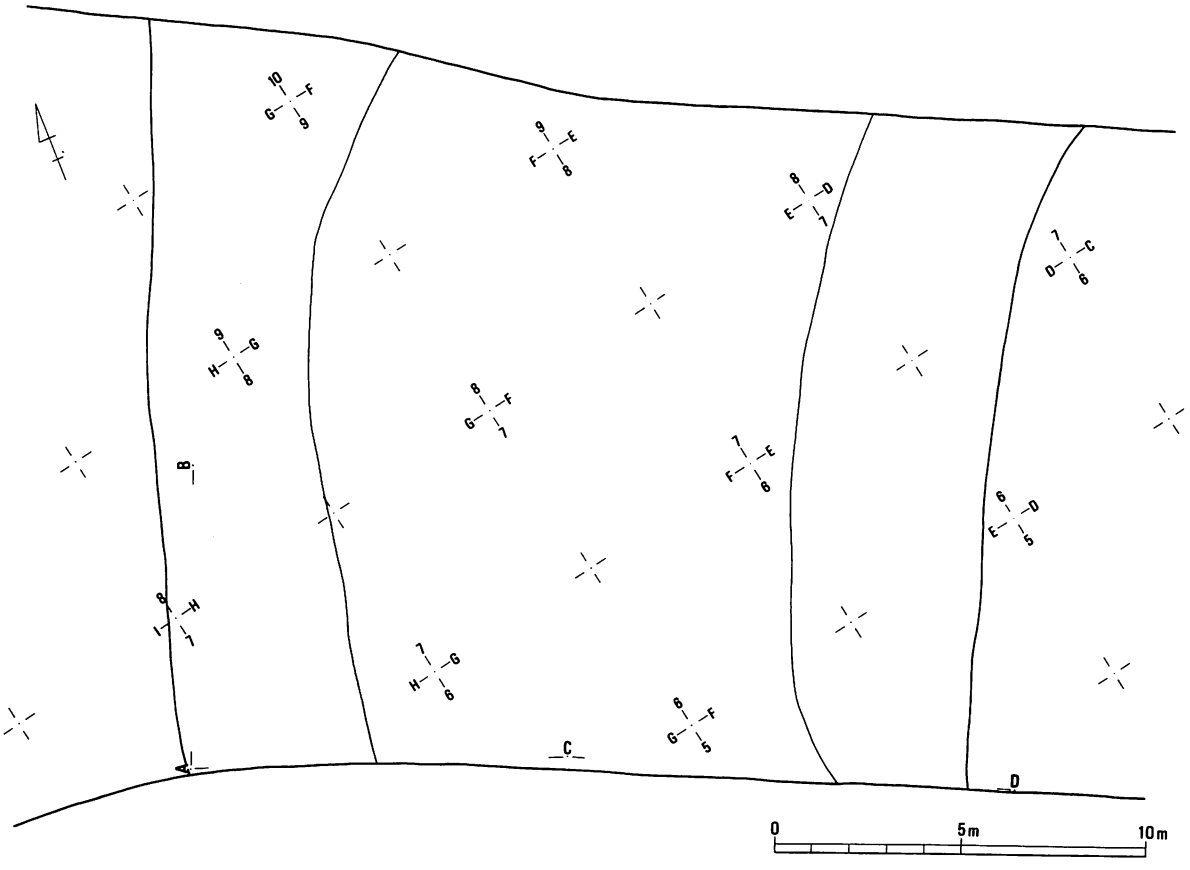


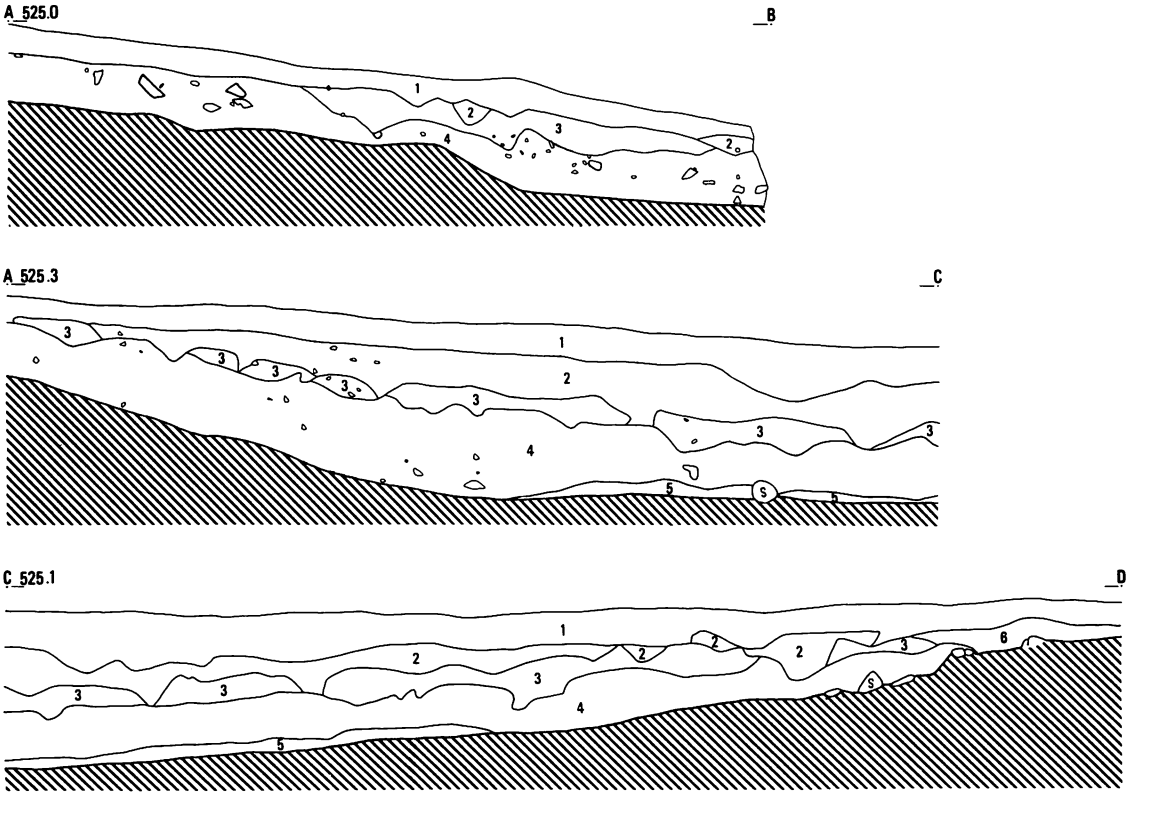
第82図　R－17・18グリッド遺物集中区出土土器（2）

（平面形態）東から西に伸びており、調査区を斜めに横切っている。流路の幅は最大で14.2m、最小で10.5mであり、ほぼ同じ幅で推移しY－14・15グリッドで流れが途切れる。

（断面形態）北側が緩やかに立ち上がるのに対し、南側は階段状を呈すのを除いてはほぼ水平である。

（遺構の性格）第1号沢とは異なり埋土中の遺物は顕著ではなく、沢の覆土上に遺構が構築されていることから、縄文時代においては沢は埋まっており、凹地として存在していたことが分かる。第2号沢は住居跡に隣接しており、周囲に集石土坑・陥し穴が検出されていることから、居住域に連続した生活空間として用いられている。





第1号沢　南壁土層断面
1－茶褐色土層（表土）
2－淡黒色土層（スコリア少量含む）
3－黄褐色土層（黄褐色ロームブロック含む）
4－明褐色土層（小礫、2～10㎜大スコリア、パミスを含み、遺物は主にこの層から出土）
5－黒色土層（2層よりやや明るく、10㎜大のスコリアを含む）
6－茶褐色土層（部分的に存在する）

第83図　第1号沢

第84図　ピット群

第3号沢

（位置）カ－24～33、キ－25～34、ク－26～34グリッドにかけて位置している。

（平面形態）調査区を南北に横切っている。流路の幅は最大で14.5m、最小で10.3mであり、調査区中央ですぼまり、南側に向かって広がっていく形状を示す。

（断面形態）東側はほぼ水平であるのに対し、西側は緩やかに立ち上がる。

（遺構の性格）埋土上に遺構が構築されていることから、第2号沢と同様に縄文時代には凹地であり、遺物をほとんど包含しないことや、遺構の存在が散漫であることから、利用されることが稀な空間であったことが分かる。

第4号沢

（位置）タ－31～37、チ－32～37、ツ－33～36グリッドにかけて位置している。

（平面形態）調査区を南北に横切っている。流路の幅は最大で28m、最小で9.5mであり、タ－38・39、チ－38・39グリットにおいて流路が始まる。タ－32～37、チ－32～37グリッドにおいて流路の底面が深くなり、南側に向かって流れは広がっていく。

（断面形態）土層図の観察により、沢が埋没するまでに堆積と浸食を繰り返したことや、沢の形状が位置によって大きく異なることなどが分かる。

（遺構の性格）第2・3号沢と同じく縄文時代には凹地であるが、埋土中に遺物を含むことや、周囲に遺構が存在することから何らかの活動を行った場所である可能性がある。

（第1号沢出土土器）

第1群　草期～前期の土器を対象とする。

第1類－第1種　撚糸文を伴う土器を対象とする。

－第2種　単節の粗雑な縄文が施された土器を対象とする。

第2群　前期後半～前期末の土器を対象とする。

第1類　平行沈線による斜条線・爪形文を伴う諸磯b式の土器を対象とする。

第2類　黄褐色ないしは黒褐色で器壁が薄く、長石等の白色粒子を胎土に含む前期末の土器を対象とする。

－第1種　結節浮線文を伴う前期末の土器を対象とする。（1期）

－第2種　縄文を伴う前期末の土器を対象とする。（2期）

－第3種　集合沈線文を伴う前期末の土器を対象とする。（3期）

－第4種　縄文地に横位もしくは縦位の平行沈線を伴う前期末の土器を対象とする。（4期）

第3群　赤褐色で雲母に富む中期初頭五領ヶ台式土器を対象とする。

第1類　半截竹管を用いた平行沈線を多用する沈線文系土器を対象とする。

－第1種　三角印刻文や横位の平行沈線によって区画した後に、斜格子・矢羽状・縦位の集合沈線を充填するなど前期末の特徴が残存している、五領ヶ台Ⅰ古期に比定される土器を対象とする。

－第2種　口縁部が内湾した後に外側に屈折し、口唇部に刻みがつく五領ヶ台Ⅰ新期に比定される土器を対象とする

－第3種　「の」字状貼付文を伴い、口縁部文様帯が狭くなるものやキャリパー形に広がるもの、口縁部・頸部が省略され筒形を呈するもの等、器形においてバラエティーに富む、五領ヶ台Ⅱ古・中期に比定される土器を対象とする。

－第4種　施文に角押文を用いる土器を対象にする。

第2類　縄文を施文している縄文系土器を対象とする。

－第1種　三角印刻文を伴うものや橋状把手を有する五領ヶ台Ⅰ式古段階の土器を対象とする。

－第2種　簡略化された橋状把手を有する五領ヶ台Ⅰ式新期の土器を対象とする。

－第3種　口縁部に文様が集まり、胴部に半円弧文が広がる五領ヶ台Ⅱ式古・中段階の土器を対象とす

る。

－第４種　口縁部に重円文や弧線による玉抱き三叉状のモチーフが描かれる五領ヶ台Ⅱ式新段階の土器を対象とする。また、浅鉢では角押文が施文されているものを対象とする。

第４群　中期中葉～後半の土器を対象とする。

第１類　勝坂式土器を対象とする。

第２類　曽利式土器を対象とする。

第５群　沈線による区画と磨り消し縄文を伴う、縄文時代後期の称名寺式期に比定される土器を対象とする。

第６群　異系統の土器を対象とする。

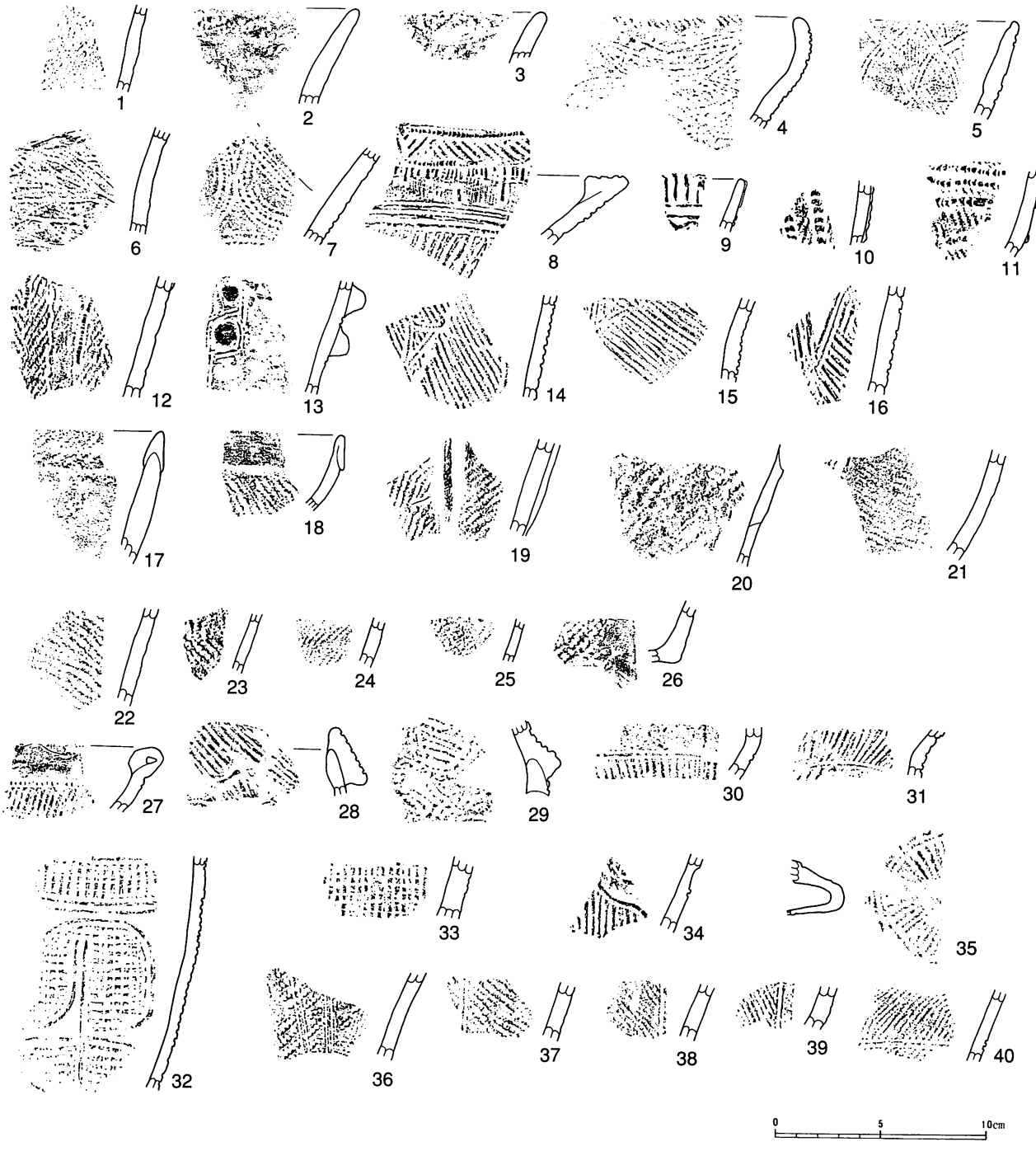
第１類　東海系、北裏Ｃ式・大歳山式土器を対象とする。

第２類　北陸系の土器を対象とする。

第１群　１は細かい撚糸を用いて縦位に施文している。２・３は器面に粗い単節の縄文を施している。繊維は含まないが、前期前半に比定される土器である可能性を指摘できる。４～７は諸磯ｂ式の土器である。斜条線（４）・平行沈線文（５・６）・爪形文（７）を伴う。

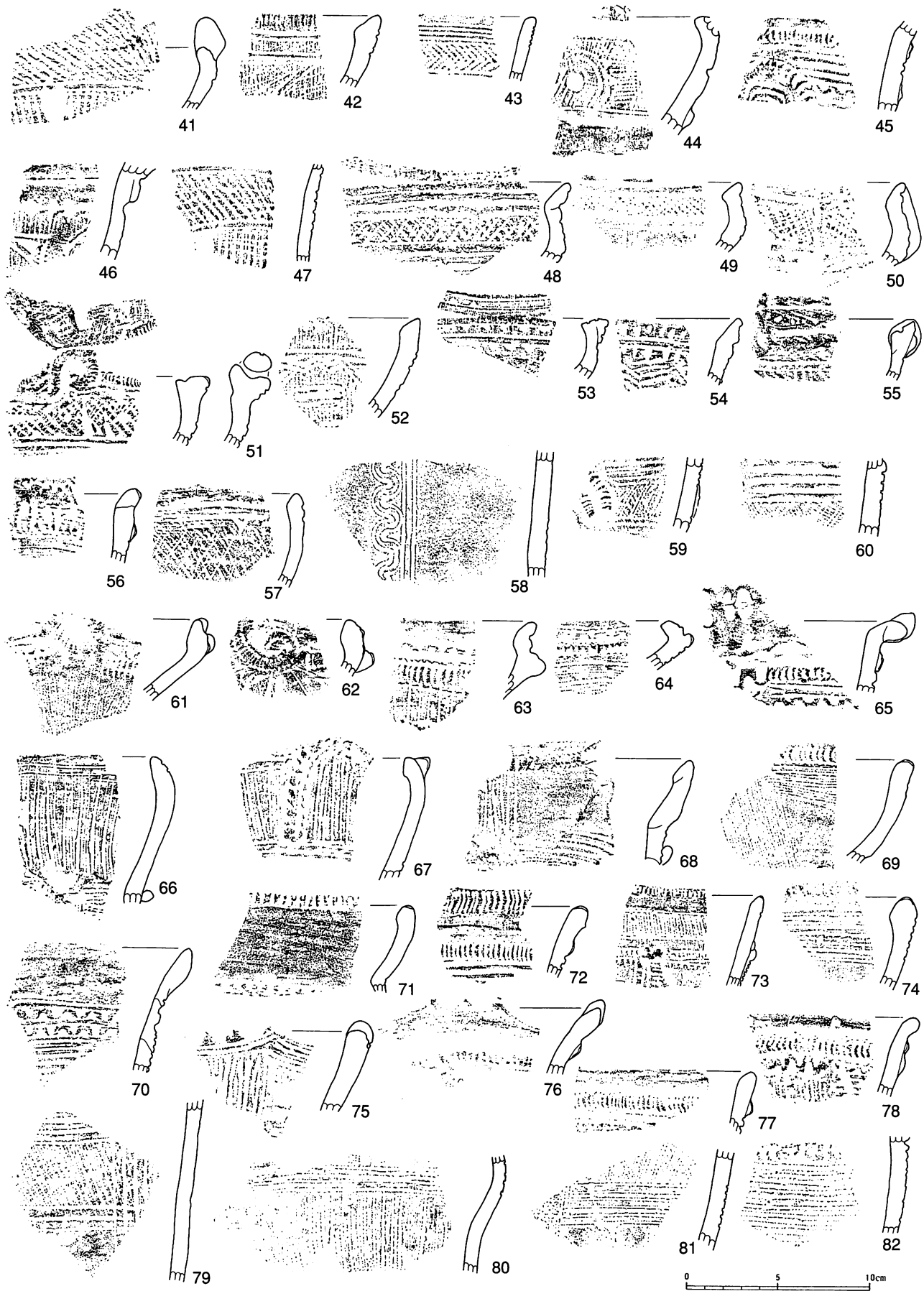
第２群　８から14は前期末１期の土器である。結節浮線文を伴うもの（８・10・11・12)、口唇部にソーメン状粘土紐が貼付されているもの（８・９)、印刻文を伴うもの（16)、ボタン状貼付文を伴うもの（13)、斜位の沈線が施文されているもの（14～16）等がある。17～26は縄文が施された前期末２期の土器である。折り返し口縁のもの（18)、棒状貼付文を伴うもの（19）などがある。27～37・184は集合沈線が施されている前期末３期の土器である。楕円状区画の内部へ縦位・格子に平行沈線で充填しているもの（31～36)、横位の連続爪形文により区画し、内部に斜位・格子の平行沈線で充填するもの（27・30)、口縁に逆Ｕ字状突起を有するもの（28)、ボタン状貼付文（37）等がある。184は文様帯の構成などの点で若干異なることから、朝日下層式が在地化した土器であると理解できる。頸部が二条の隆帯によって区画され、縄文が施された体部に縦位・横位・鋸歯状の平行沈線を有する。38～42は前期末４期の土器である。細かい縄文地に38～41は縦位に、42は横位に平行沈線をめぐらせている。

第３群　43～49・95は五領ヶ台式土器における沈線文系Ⅰ古期の土器である。横位の平行沈線によって区画した内部に斜位・格子に平行沈線で充填するもの（43～45・48・49)、矢羽状文を充填するもの（46)、刺突文を伴うもの（47・48)、三角印刻文を伴うもの（95）等がある。53～62は沈線文系Ⅰ新期の土器である。口縁部が「く」字状に屈折するもの（50・51・53)、横位の平行沈線によって区画した内部に斜位に（50・51・52・53・59・61・62)、縦位に（54・55）平行沈線を充填するもの、区画内に刺突文を有するもの（53・55)、擬隆帯上に刻み（56)、連続爪形文を有するもの（50)、等がある。63～86・186～188・190は沈線文系Ⅱ古期の土器である。口縁部が「く」字状に屈折するもの（63・65・66)、キャリパー状にひらくもの（68・69・70・71・73)、口縁部文様帯が省略され、直立する（74・75・78）ないしはラッパ状にひらくもの（72・77)、「の」字状貼付文を有するもの（63・64)、３単位の波頂部を有する波状口縁を呈すもの（77）がある。胴部文様帯としては、縦位に数条の平行沈線を垂下させ、さらに横位の沈線を施すことによって区画帯を設け、内部に斜位の平行沈線で充填するもの（79・81）がある。縦位の平行沈線のかわりに隆帯を施すもの（84)、頸部に円形の隆帯と円文を伴うもの（83）等がある。186は、波頂部が高いものと低いものが対向して波状口縁を形成する。口唇部下には、平行沈線・交互刺突文・突起が貼付され、頸部には隆帯と突起が存在し、胴部と口縁部には多条の平行沈線が横位・縦位に垂下される。187・188の器形は口縁部が緩くラッパ状にひらき、胴部は円筒状であると推察される。187は突起を単位に、縦位に平行沈線・交互刺突文が施される。188は頸部に隆帯・擬隆帯を有する。190には縦と途中で横に突き出る平行沈線が存在している。87～94・96～100は五領ヶ台式期から狢沢期へ向かう移行期の土器である。胎土や器形から五領ヶ台式期の土器として認識できるが、狢沢期の技術的特徴である角押文を伴っている。87～91はいずれも波状口縁を呈し、口唇部に刻みを有している。口縁部文様帯において、波頂部から頚部に向かって２条の平行沈線（88）や浅い角押文（89)、半截竹管の内側を利用した押引き文で１条のもの（87)、楕円状に数条めぐらされるもの（90・91）がある。この他に底部や胴部に明瞭な角押文を伴う

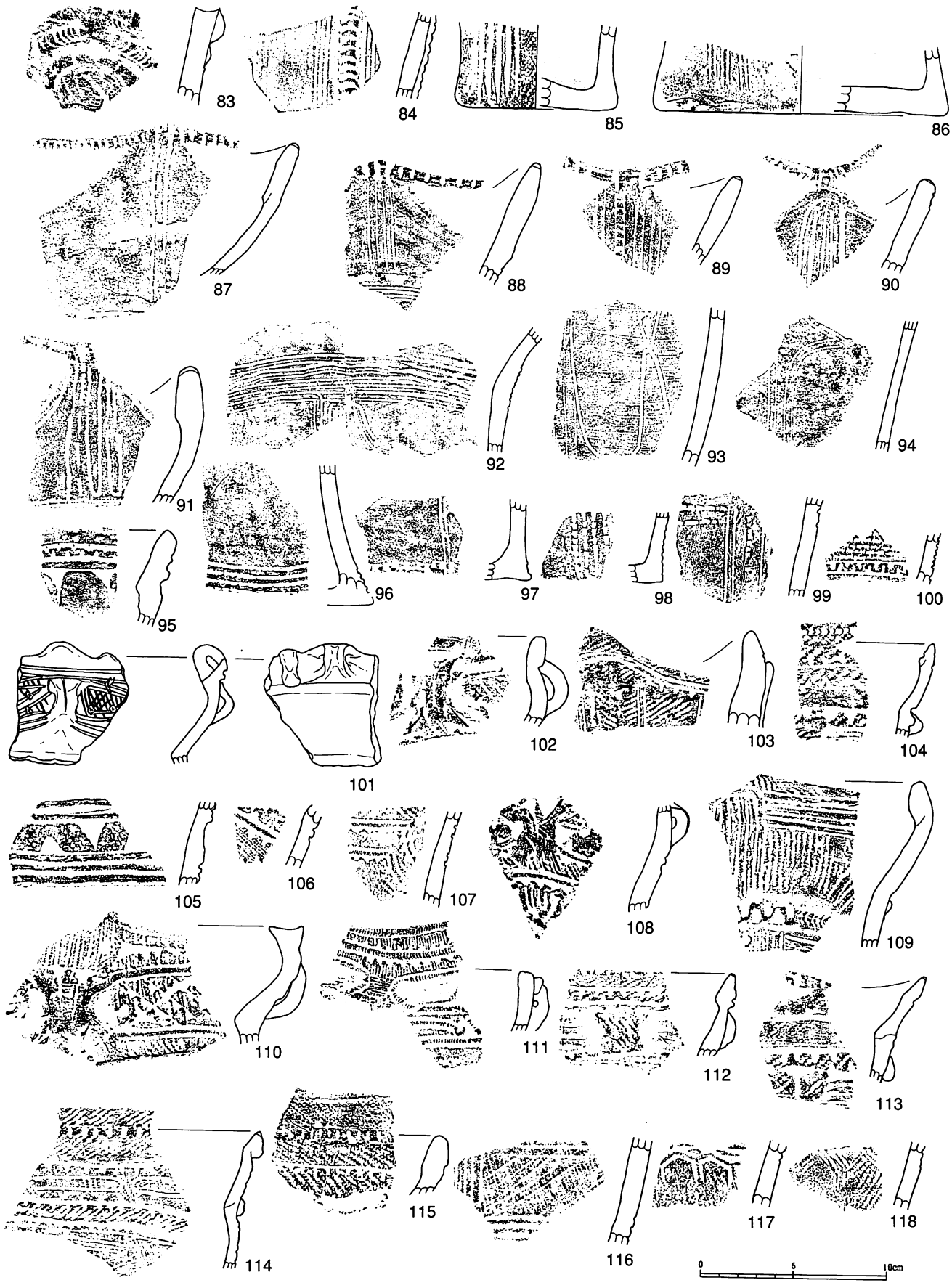


第85図　第１号沢出土土器（１）

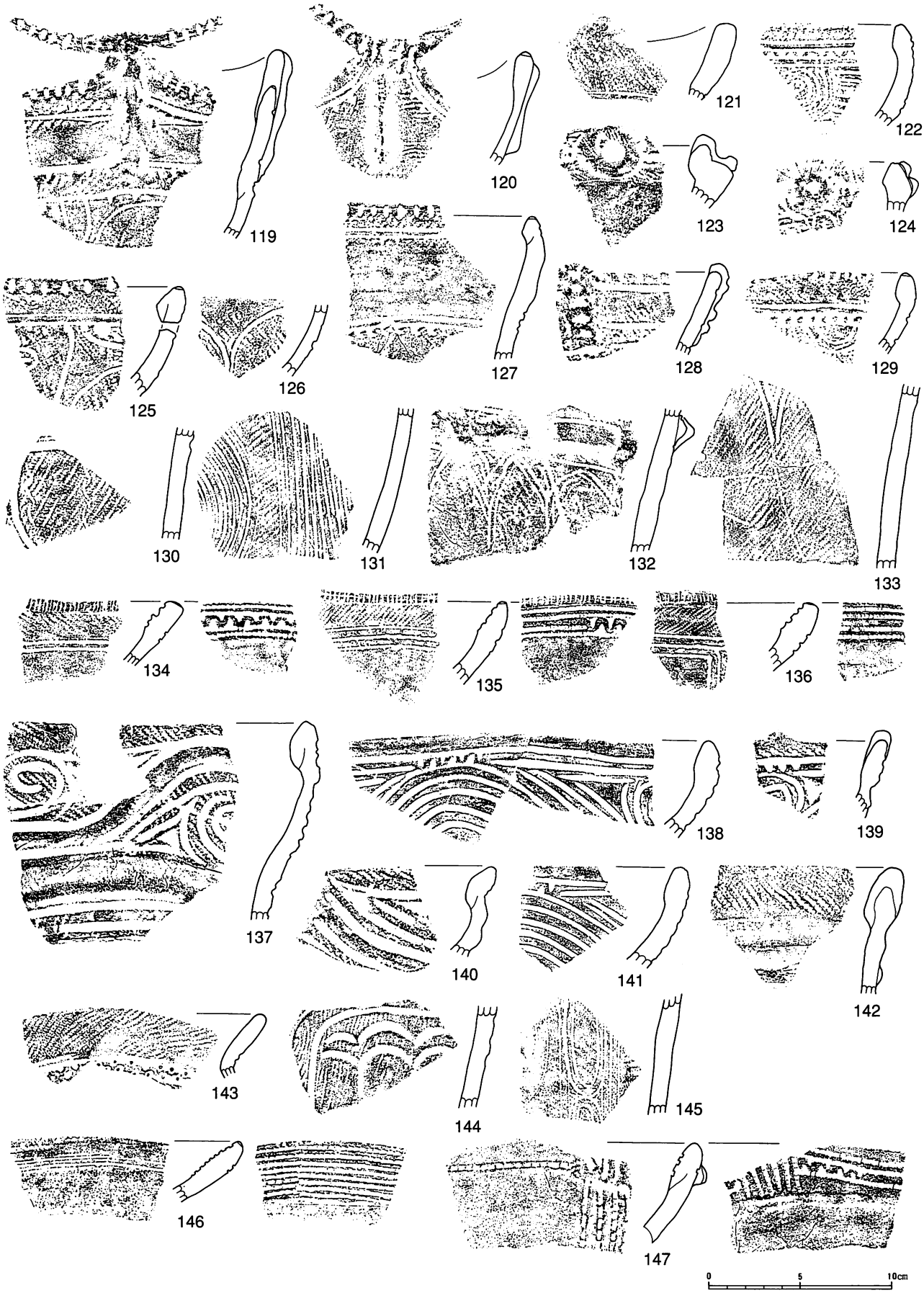
ものがある。101～108・117・118・185は五領ヶ台式土器における縄文系Ⅰ古期の土器である。三角の刻みを伴うもの（104・106・107・108）、三角印刻文を伴うもの（105）、橋状把手を有するもの（101・102・108）や口唇部に貼付文が施されているもの（101）、頚部下に施文されたＹ字状文を有するもの（117・118）がある。110～111・113～118はⅠ新期の土器である。橋状把手は退化し、器壁と把手の間は狭くなる（110）か穿孔による表現（111）に変化する。横位の沈線に伴い、三角形の刻みがつけられるもの（111・113・114・115）等がある。185は波状口縁の波頂部に穿孔を有している。109・112・119～136・191はⅡ古・中期に比定される土器である。この時期になると橋状把手は簡略化され（112）たり、突起に変化（109）する。刻みを持つ波状口縁の波頂部から棒状隆帯が貼付されるもの（119・120）、口縁部に正円状の貼付文が貼り付けられるもの（123・124）、胴部文様帯において、Ｙ字状モチーフを有すもの（132・133）、結節縄文が施されたもの（130）等がある。134～136は浅鉢であるが、いずれも口唇部に連続爪形文を有し、外面には横位もしくは縦位の平行



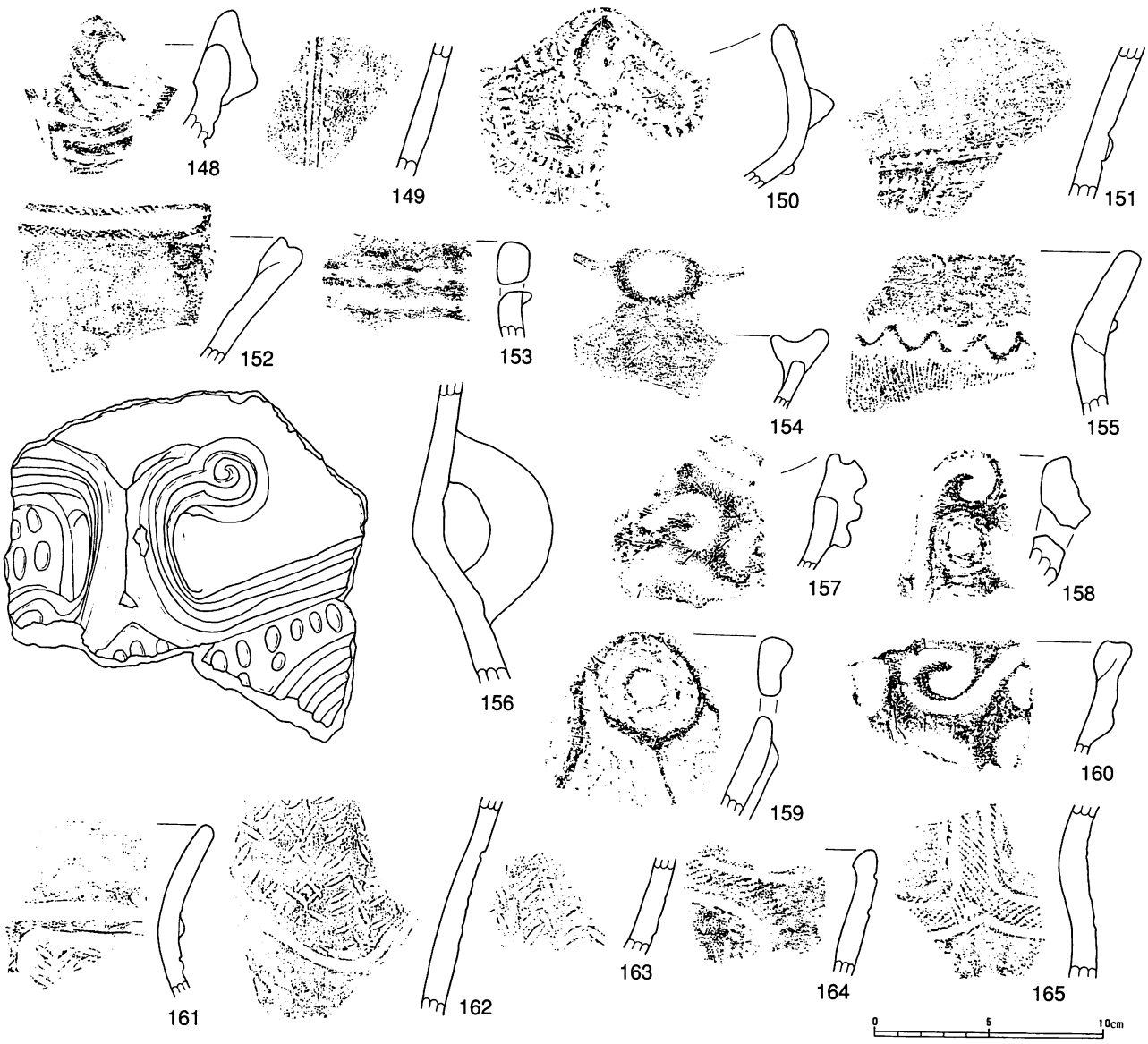
第86図　第１号沢出土土器（2）



第87図　第１号沢出土土器（3）



第88図　第１号沢出土土器（4）



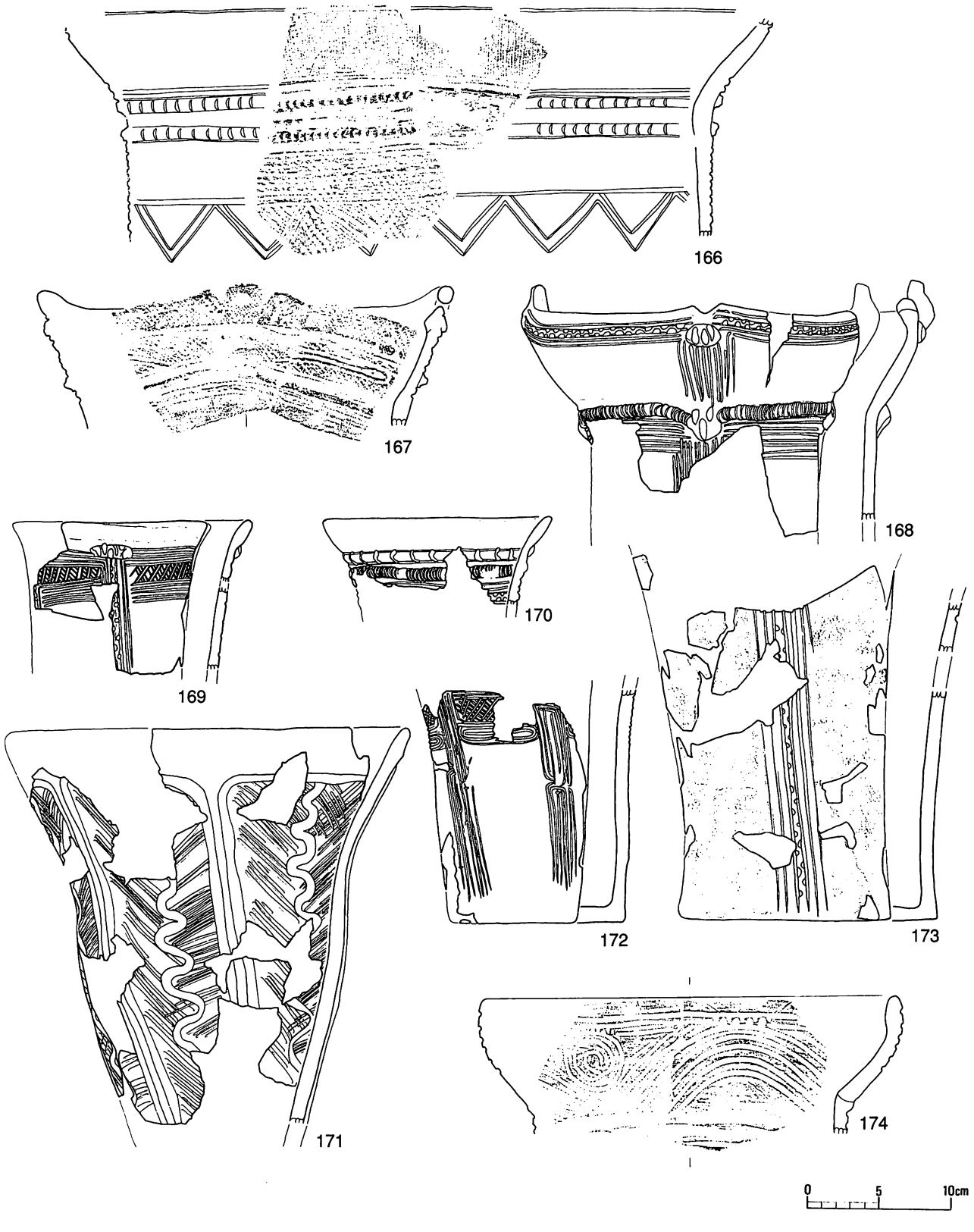
第89図　第１号沢出土土器（5）

沈線と縄文を、内面には半截竹管による押引文と交互刺突文が施される。191は縄文地の上に、縦位の平行沈線と交互刺突文が展開する。137～147・192はⅡ新期に比定される土器である。137～141・192は口縁部文様帯内が数状の弧線により構成され、波状部に玉抱き三叉文が構成される。他に口縁部文様帯が縄文のみによるもの（142・143）、退化したＹ字状文を伴うもの（144）等がある。146・147は浅鉢である。角押文を有し、狢沢期に近接する時期であることを特徴づける。

第４群　148・149は狢沢期の土器である。149は縦位の平行沈線に刺突文を伴い、148は角押文を有している。150・151は新道期の土器である。いずれも隆帯に並走する三角押文を有す。153は有孔鍔付土器であり、154は皿状の把手を伴う。共に井戸尻期に比定される。155～163・189は曽利期の土器である。155は頚部に横位の波状隆帯が存在し、胴部は条線で充填される。156はＸ状把手を有し、胴部には列点文が施される。158・159は波状口縁の波頂部に対応して、穿孔があけられている。161～163は沈線または隆帯による区画の内部に「ハ」の字文を有するものである。189は沈線により区画された内部に蛇行懸垂文が垂下され、地文に綾杉状の条線が充填される。

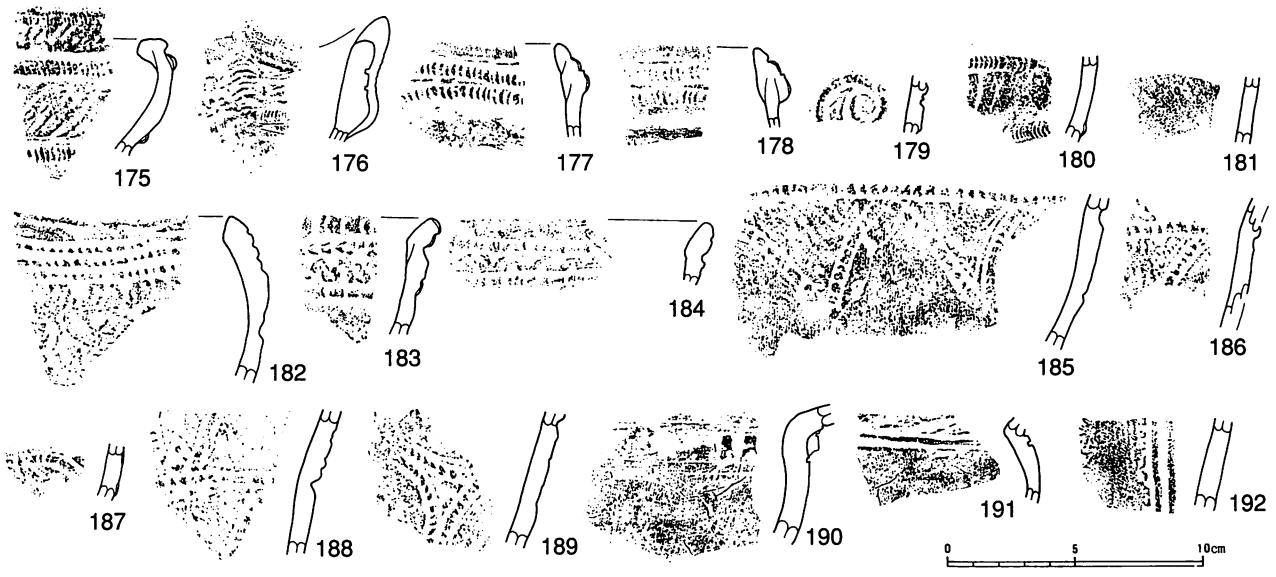
第５群　164・165は称名寺Ⅰ式に比定される土器である。いずれも３叉に分かれた区画内に縄文が施される。

第６群　166～180は東海系の土器である。166は口縁部のくびれが弱く、口唇部の凹部がΣ状工具の連続刺突に



第90図　第１号沢出土土器（6）

よる特殊凸帯文ほど明確に認められないことから、大歳山式を模倣したものであることが分かる。167～172は北裏ＣⅠ式に比定され、173～180は、色調が東海系の土器と共通するものの、胎土・施文法の点で大きく異なることから、東海系土器の模倣であることが理解できる。167は波状口縁を呈し、幅広の爪形文により口縁部文様帯を形成する。他に、口縁部文様帯において横位の隆線をめぐらせるもの（168・169）がある。模倣タイプ



第91図　第１号沢出土土器（7）

の施文法には、胴部文様帯に波状（176・177）や三叉状（180）、入組状（178）の爪形文を有するもの、円形・三叉状の印刻文が施されているもの（173）、円形の刺突文が存在するもの（180）、口唇部と口縁部に爪形文を配すことによって区画を描出し、その中に三角形の刺突を施すもの（174・175）等がある。

181～183は北陸系の土器である。181は横位の、183は縦位の平行沈線に接して三角印刻文を配している。182は頸部に貼付文を貼り、その上に刻みを加えている。また、口縁部及び胴部文様帯に極めて細い平行沈線と刺突文を有している。

第７項　石器（第92～112図）

桂野遺跡においては、遺構・包含層・調査前の表土から小形の石器として、石鏃・掻器・石錐・石匙・尖頭器・三脚石器・楔形石器・両面調整石器・石核・2次加工剥片・微細剥離を有する剥片が、中形の石器として、打製石斧・大形削器・大形石匙・礫器・石核・磨製石斧・磨石類などが、大形の石器として石皿・台石が検出された。この中で一定の数量があるか、形態・技術的に型式分化が可能なものに型式を設けるものとする。型式設定するのは、石鏃・掻器・石錐・打製石斧・大形削器・石核・磨製石斧・磨石類・石皿・台石である。以下にこれらの石器の認定基準と型式分類の設定及びその基準について述べる。

〈石鏃〉（第92・93図）

認定基準　石器の形成過程が、大まかな整形段階と最終的な形態を作出するための調整段階に分かれるもので、押圧剥離を用い、両面を調整するものである。主にその剥離単位は右側縁形成・左側縁形成・基部形成という3単位に分かれる。石鏃の未成品として捉えられるものもこの項目に含めたが、その認定基準は押圧剥離を用いた器体の整形段階で作業を終えているもので、剥離単位が3単位に分かれるものであるとして認識した。

型式設定　時間軸の指標となるような特殊な形態を持たない石鏃を分析する際には、一つの石鏃型式の中に他の属性を有すものが混在してしまうという現象がつきまとう。これは石鏃という石器が、複数の形態属性が複合されて成立していることから理解できる。なぜ、このような現象が出てくるのかという問題の背後には、製作者の好みや文化的規制などといった精神的・文化的構造が存在する。このため、一つの型式は、大きさ（最大長・最大幅・最大厚）、刃先角（尖頭部の形成する角度）、脚部角（脚部の形成する角度）、形態などの属性が複合したものとした。これらの属性（大きさ・刃先角・脚部角・形態）には、普遍的な優先順位は存在しない。

Ａ類　　最大長が2㎝以下の石鏃をＡ類とする。Ａ類を細分することはできるが、後述するＢ類のリダクショ

ンタイプを含んでいるなど型式的に混乱する恐れがあるため、一括して捉えることにする。

B類　最大長が2㎝以上で器体の幅が狭い石鏃をB類とする。

B-1　刃先角が30～40度、脚部角が60～70度で、側縁が主に直線状か外湾状を呈す凹基無茎鏃とする。

B-2　刃先角が30～40度、脚部角が90～140度で、側縁が緩く外湾するか直線状を呈する凹基無茎鏃とする。

B-3-1　刃先角が40～50度、脚部角が60～70度で、側縁が緩く外湾し、脚部が最大長の1/2を占める凹基無茎鏃とする。

B-3-2　刃先角が40～50度、脚部角が80～90度で、側縁が内湾し、脚部が丸みを帯びる凹基無茎鏃とする。

B-3-3　刃先角が60～70度、脚部角が70～90度で、側縁が屈曲し、基部が逆U字状を呈す凹基無茎鏃とする。

B-3-4　刃先角が70度、脚部角が150度で、基部は平基に近い凹基状を呈する凹基無茎鏃とする。

C類　最大長が2㎝以上で器体の幅が広い石鏃をC類とする。

C-1　刃先角が50度、脚部角が100～130度で、平面形態が2等辺三角形かそれに近い形の凹基無茎鏃とする。

C-2　刃先角が50～60度、脚部角が130～140度で、側縁の尖頭部よりの部位が屈曲する凹基無茎鏃とする。

C-3　刃先角が50～70度、脚部角が100度で、側縁が内湾する凹基無茎鏃とする。

分類の結果　A類：28点、B-1類：12点、B-2類：19点、B-3-1類：4点、B-3-2類：4点、B-3-3類：6点、B-3-4類：2点、C-1類：4点、C-2類：3点、C-3類：5点、折損品：18点、未成品：40点

石器観察　石鏃の数量を型式別に見てみると、特徴的な形態を有すもの（B-3-1～4）や大形（C-1～3）の点数は希少であり、他の型式は一定に組成されることが分かる。未成品を観察した結果、通常の剥離によって得られた剥片を素材として用いており、石鏃製作における素材剥片獲得のための両極打法は、直接には認められなかった。22は、リダクションないしは整形途上での形態変更を示している。すなわち、大形の二等辺三角形状を呈するC－1類に分類される石鏃の左側縁を基部として、より小形の石鏃を作出しようとする意図が窺える。

〈掻器〉（第94～97図）

認定基準　剥片の一辺もしくは複数の辺に通常剥離・押圧剥離による厚形細部調整を伴う石器とした。

型式設定　桂野遺跡からは、特定の形を規範とする規格的な掻器や、数種類の掻器が検出された。それらは1）形態、2）調整深度、3）刃角から8種類（小分類を含めると14型式）に分けられる。

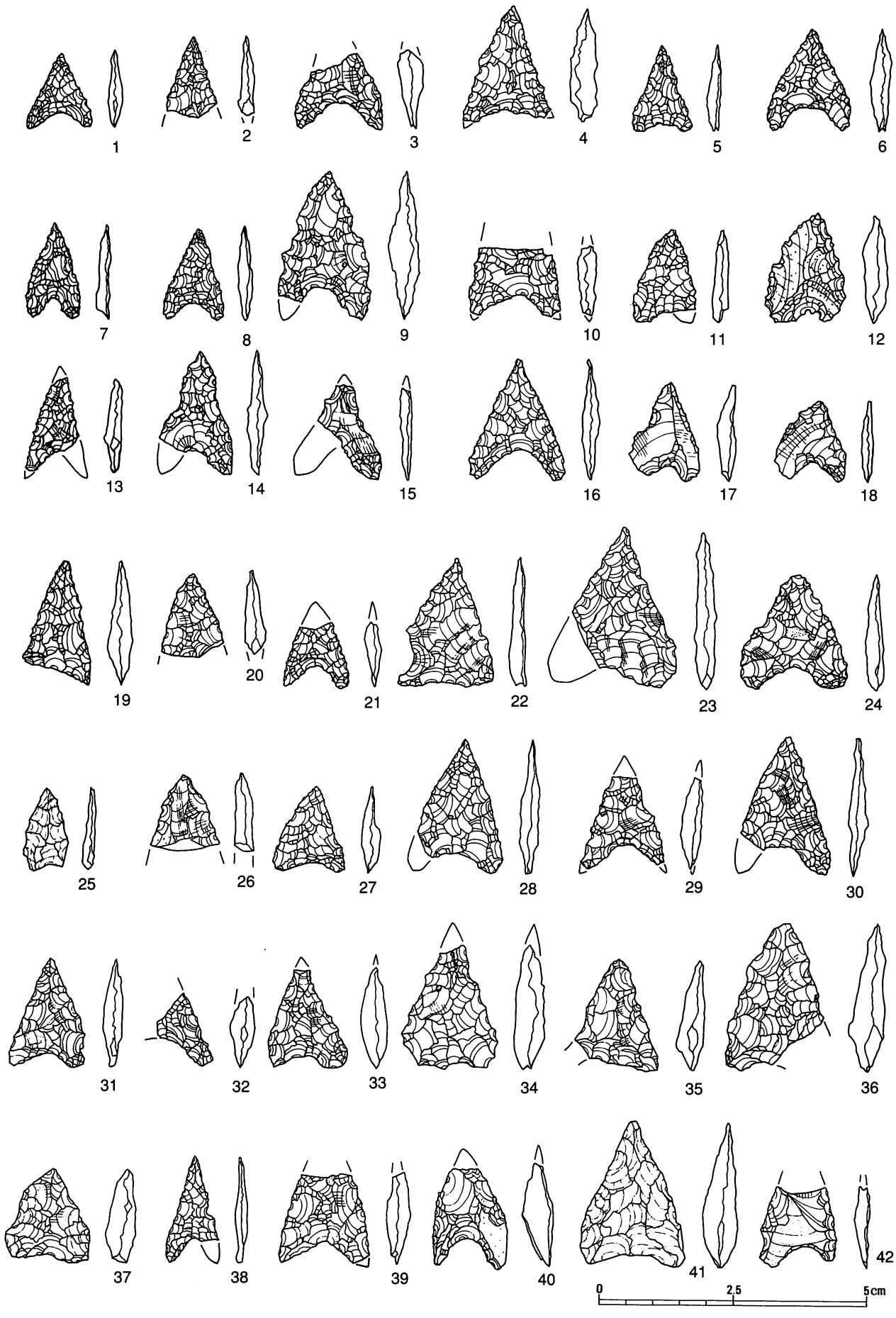
1）形態　A類　刃部の平面形態が尖刃状を呈するもの　A'類　器体より幅狭の円刃が設けられるもの
　B類　素材の一辺に（a）直線的な、（b）内湾した、（c）外湾した刃部を設けるもの
　C類　刃部が（a）鋸歯状もしくは連続的な調整により（b）刃部が抉入状を呈するもの

2）調整深度　Ⅰ類　連続的な調整により器体の中央まで剥離痕が伸びているものか、2辺からの調整が交差して刃部が作出されているもの
　Ⅱ類　器体の縁辺の部分で調整が止まっているもの

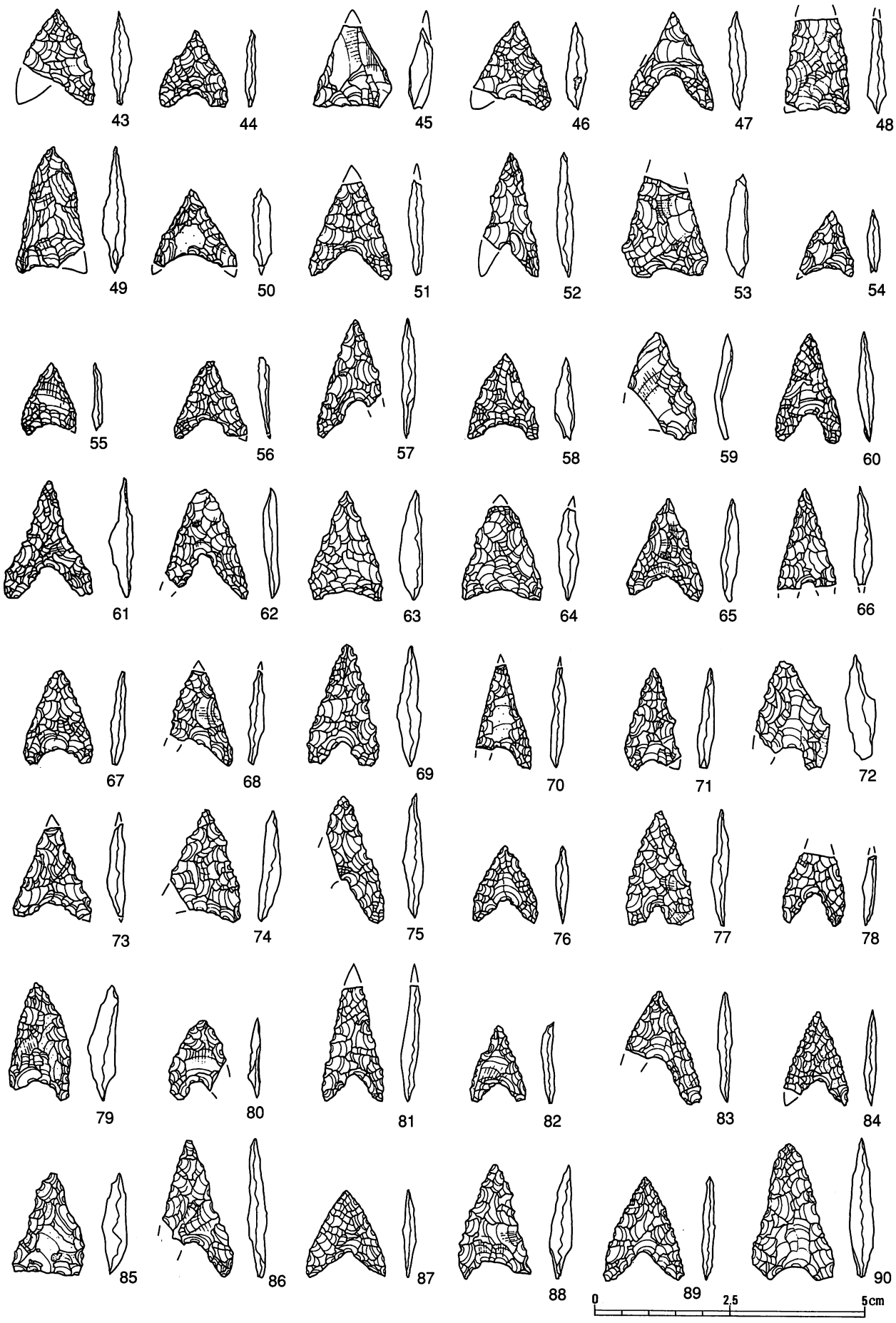
3）刃部が設けられている素材の角度
　①　極厚形　　②　厚形　　③　薄形

分類の結果　A-Ⅰ-1：19点、A-Ⅰ-2：28点、A-Ⅰ-3：13点、A-Ⅱ-1：11点、A-Ⅱ-2：12点、A-Ⅱ-3：7点、A'：12点、B(a)-1：12点、B(a)-2：7点、B(b)-1：3点、B(b)-3：6点、B(c)-1：14点、C(a)-1：3点、C(b)-1：3点　折損品：1点

石器観察　桂野遺跡の掻器は多様な形態が存在するが、特殊なものとして尖刃状の掻器が挙げられる。これはA類として捉えられ、A-a-1類（7・22・37等）が最も規範的なものとして認識できる。その特徴は、①左右の側縁から調整により尖刃状を呈し、②2辺からの調整がそれぞれ剥離単位を成し、切り合うことなどに示される。この他にも細分型式が見出せたが、その形態・技術的分析は別稿において述べることにする。12・25・28・43は尖刃部から器体の中央に向かって、樋状の剥離が施されるが、これも尖刃掻器を特徴づける技術


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
2.5
5cm

第92図　石鏃（1）


43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
0
2.5
5cm

第93図　石鏃（2）

的特徴である。25・35の刃部は緩やかに内湾しているが、25の刃部中央には、階段状の小剥離が集中し、35は鋸歯状を呈する。

〈石錐〉（第98図）

認定基準　２辺からの調整により、厚みのある尖頭部が作出されるものとして認識した。

型式設定　（Ａ）石錐はつまみ部と作用部が作り分けられているものと、（Ｂ）素材の側縁と調整による作用部が一体化するか、調整により器体が棒状を呈しているものに分けられる。

分類の結果　Ａ類：７点、Ｂ類：９点

石器観察　上記の様に分類された中でも、調整が素材剥片の周縁にしか及ばないものと両側縁からの調整が切りあうものに分けられる。７は、裏面から表面に急角度の調整を加えることによって、素材剥片の端部側に尖頭部を作出している。素材の用い方や調整が掻器と類似している。2・7の尖頭部には、使用痕が存在する。

〈石匙〉（第98図）

認定基準　２対の抉り部によって、つまみが作出される石器である。

石器観察　大形で横長のものと小形で多様な形態を持つものに分けられる。11は裏面に主要剥離面を、右側縁に打面を有す。背面の先行剥離面の打撃方向と主要剥離面の剥離方向は同一である。刃縁には階段状を呈する小剥離が存在している。12の表・裏面には大きく素材面が残置しているが、素材面と刃部・形態作出のために施された剥離痕のパティナは著しく異なる。刃部は部分的にリダクションされ、刃縁が後退している。

〈尖頭器〉（第98図）

認定基準　通常剥離・押圧剥離による両面調整を行うことによって、尖頭部を作出している石器とする。

石器観察　１の裏面中央には素材面が残置し、裏面右側縁には階段状剥離が発達する。尖頭部よりの折れ面は表面に、基部よりの折れ面は裏面にリングが収束する。尖頭部よりの折れ面を切る調整が存在しており、リダクションの介在を示唆する。２の裏面には主要剥離面があり、折れ面のリングは表面に収束する。調整から整形段階で折れた可能性を指摘できる。３は珪質頁岩を石材としており、裏面中央には主要剥離面がある。表面右側縁には階段状剥離が発達する。４はソフトハンマーを用いた通常剥離によって作業を進めており、折れ面のリングは裏面に収束する。

〈両面調整石器〉（第99図）

認定基準　押圧剥離によって表・裏面が調整されたもので、定形的な形態を有さないものを対象とする。

石器観察　石器製作の途上において、なんらかの要因により、最終的な器体イメージを変更して製作された石器や、未成品であり、器種が不明なものを対象とする。２・３は両面調整により、鋭角な縁辺を作出している。

〈楔形石器・両極石核〉（第99図・第101図）

認定基準　両極剥離が表・裏面に存在する大形のもので、作用部が鈍角を呈するのが両極石核、剥離痕の形状から、石器製作の素材とは成り得ない剥片が剥離されているものや使用痕を有すものは、楔形石器と認識した。

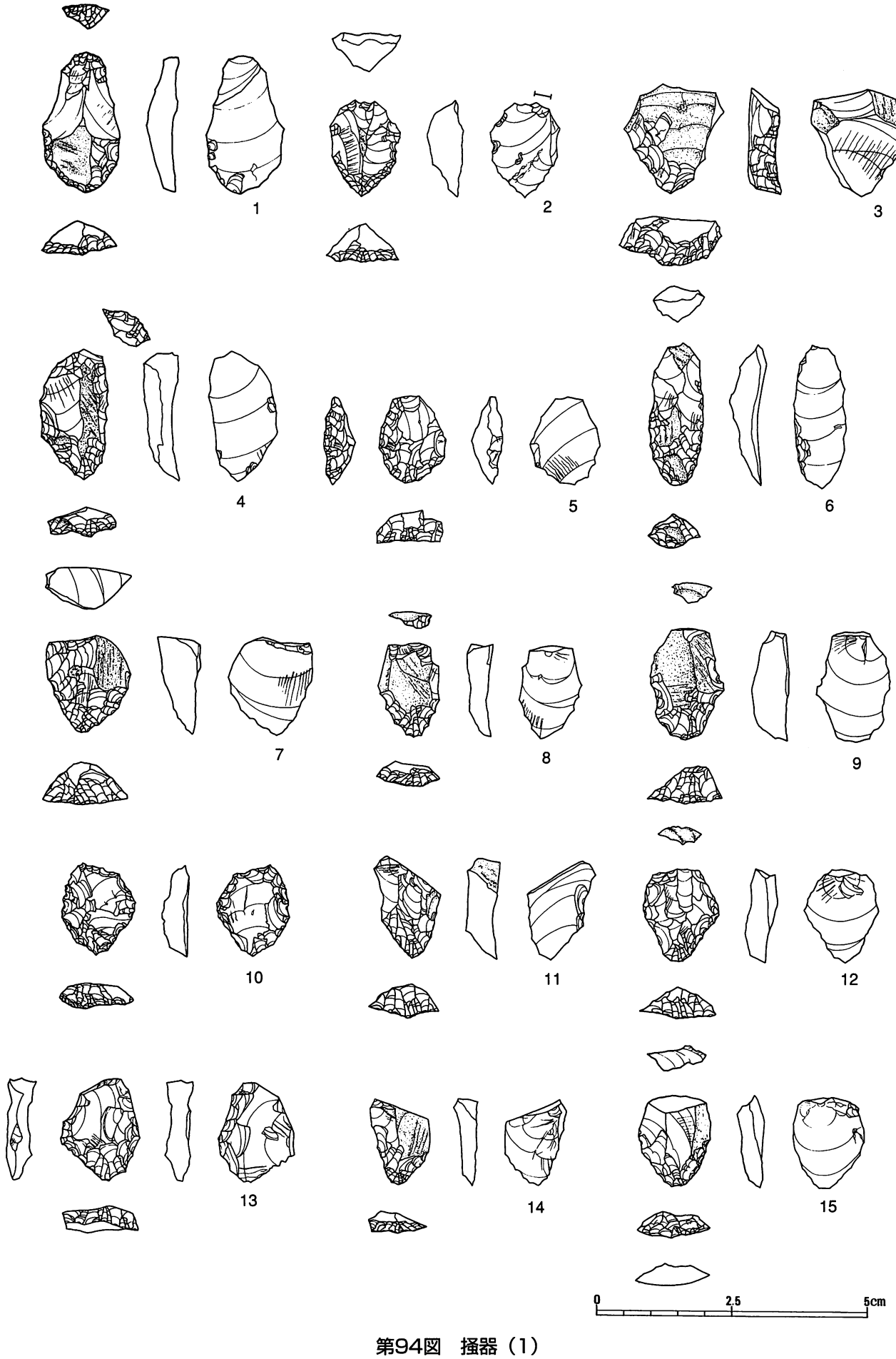
石器観察　掻器の素材剥片に両極剥片が用いられている（第94図２）が、素材剥片獲得のための剥片剥離技術として両極打法が積極的な意味を持っていたかということは不明である。点数的には両極石核は少なく、４～６の様な楔形石器や大きさがそれ以下の楔形石器・両極剥片・両極打法に伴う裂片が多数である。４は小形の角礫を、６は剥片を素材としており、刃部の形状は４～６の全てが鋭角を呈する。５は約90°の刃部転移を行って、剥離を進行させている。第101図32は石材・形態共に大きく異なるが、主要剥離面に対向するポジティブバルブを有する両極剥片である。下端の側縁に使用痕が認められ、この使用痕を切る調整も認められる。

〈２次加工剥片〉（第99図）

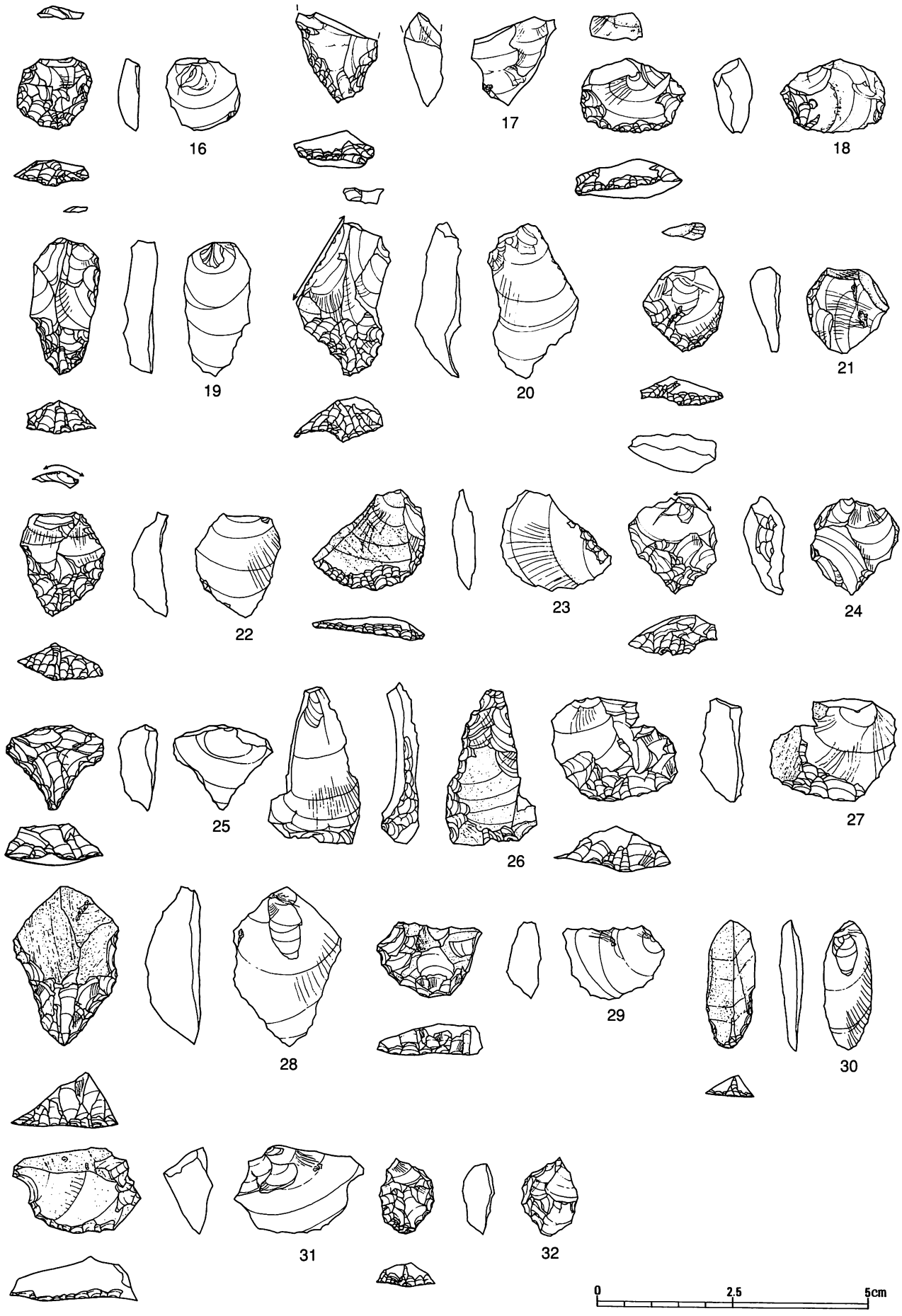
認定基準　通常剥離・押圧剥離によって主要剥離面を切る調整が認められる石器とする。

石器観察　調整の性格から、刃部作出を目的とするものと整形途上で放棄されたものに二分される。刃部作出を目的とするものの中には、鋸歯状の調整を加えるもの（７）や直線状の刃部を呈すもの（９）がある。８は押圧剥離によって、腹面に平坦な調整を加えていることから、調整の性格が整形を目的としていることが分かる。

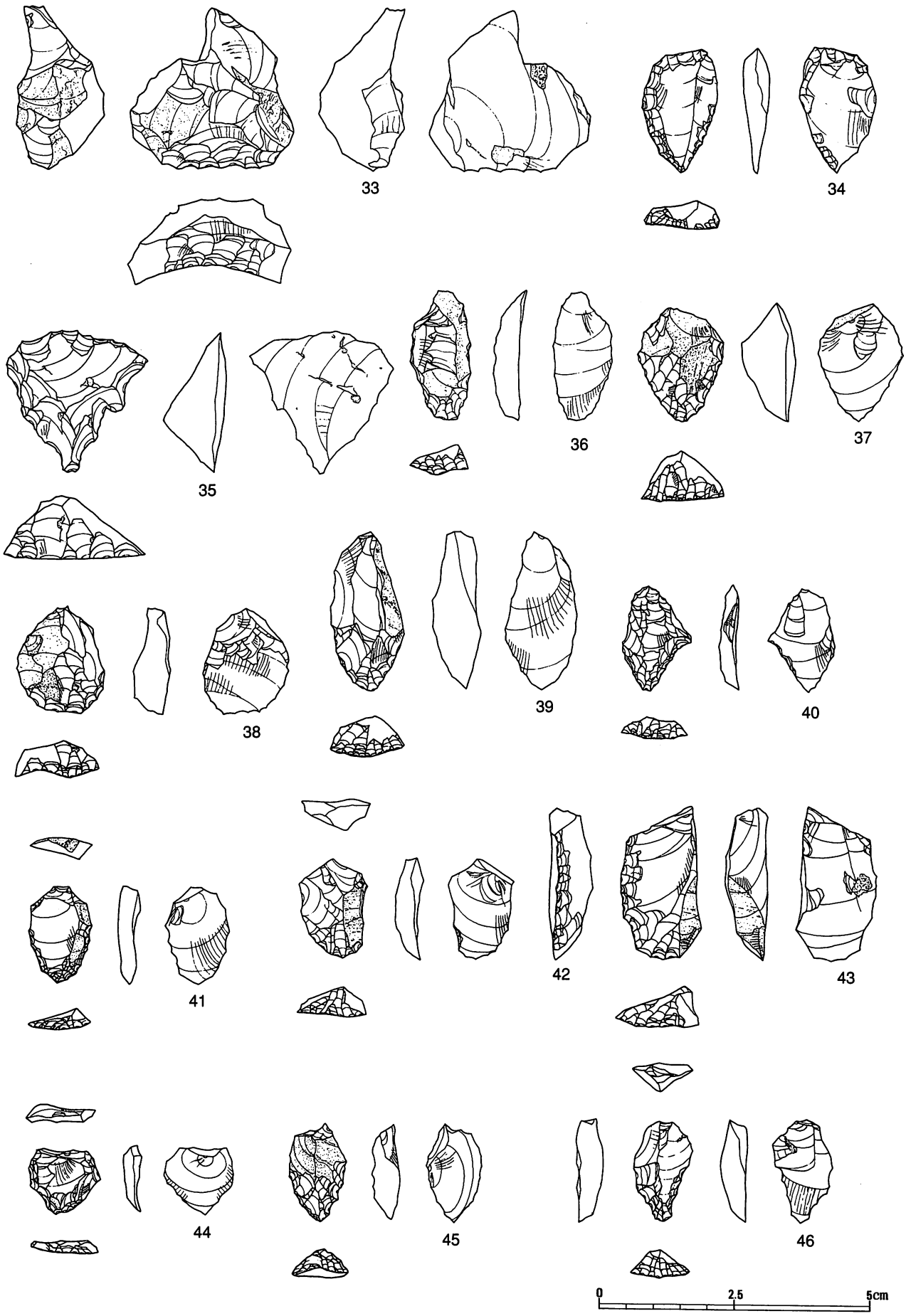
〈微細剥離を有する剥片〉（第99図）



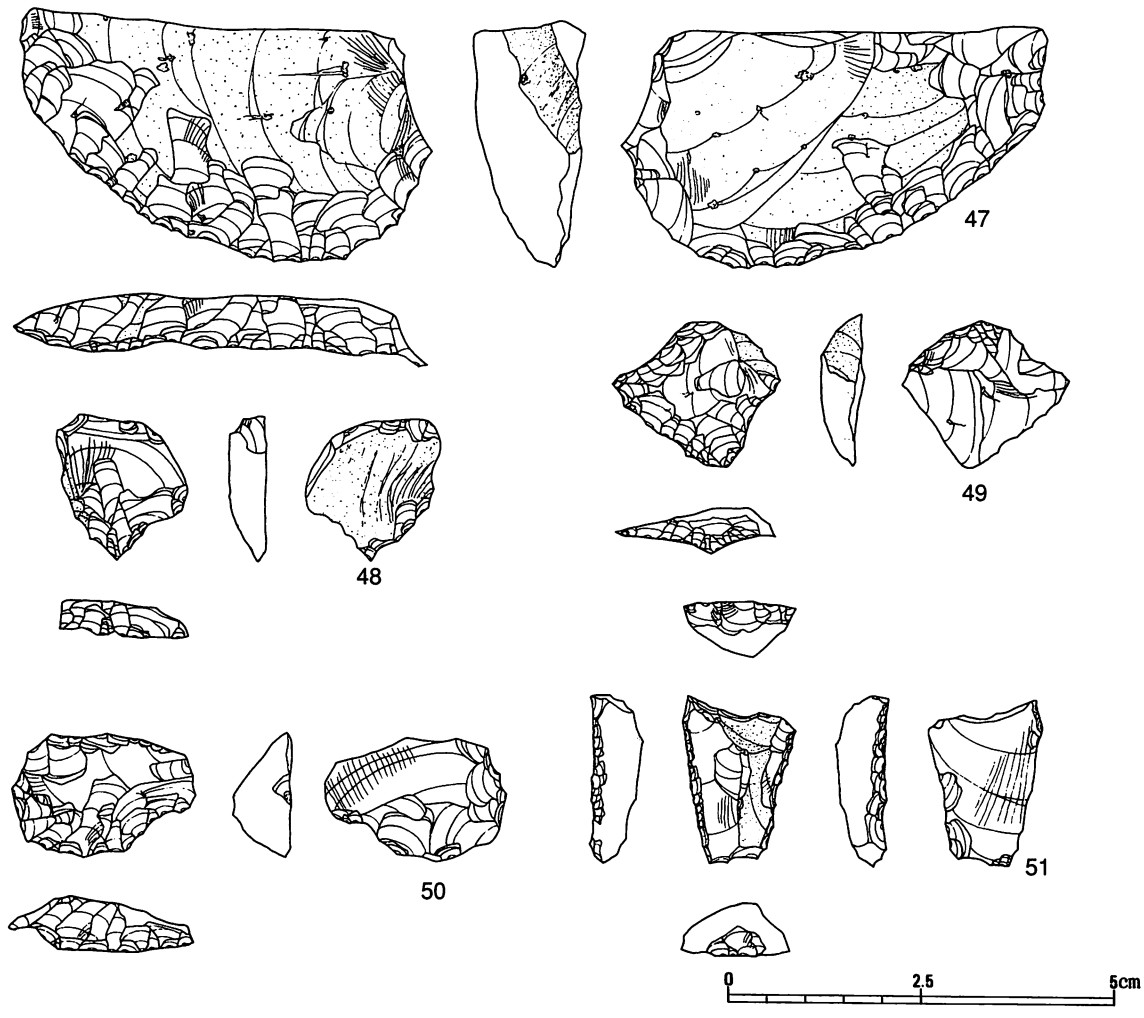
第94図　掻器（1）



第95図　掻器（2）



第96図　掻器（3）



第97図　掻器（4）

認定基準　肉眼観察により、微細剥離が縁辺に認められる石器とする。

石器観察　主に素材剥片の鋭角を成す縁辺を用いて作業を行っている。微細剥離が認められる縁辺に対向する辺において、刃潰しと考えられる調整が認められるものや、剥離が剥片の短辺に存在しているものもある。10・11は、背・腹両面に微細剥離を有し、微細剥離の端部形状は、10・11共にフェザー状を呈する。

〈黒曜石製石核〉（第99図）

認定基準　ネガティブな面によって構成される黒曜石製のものを対象とする。

石器観察　打面を１か所に固定して、垂直に近い打角で同一方向に打撃を加えるものや、打面転移を繰り返しながら剥片剥離作業を行うものが多く認められる。その残核形状から、剥片剥離作業が石鏃・掻器・石錐などの黒曜石製小形石器の素材剥片を得るためのものであることが推察される。剥離面が複数枚残置している石核の他に１・２枚の剥片を剥離して作業を終えている、石核の初期段階と考えられるものも認められている。

〈三脚石器〉（第99図）

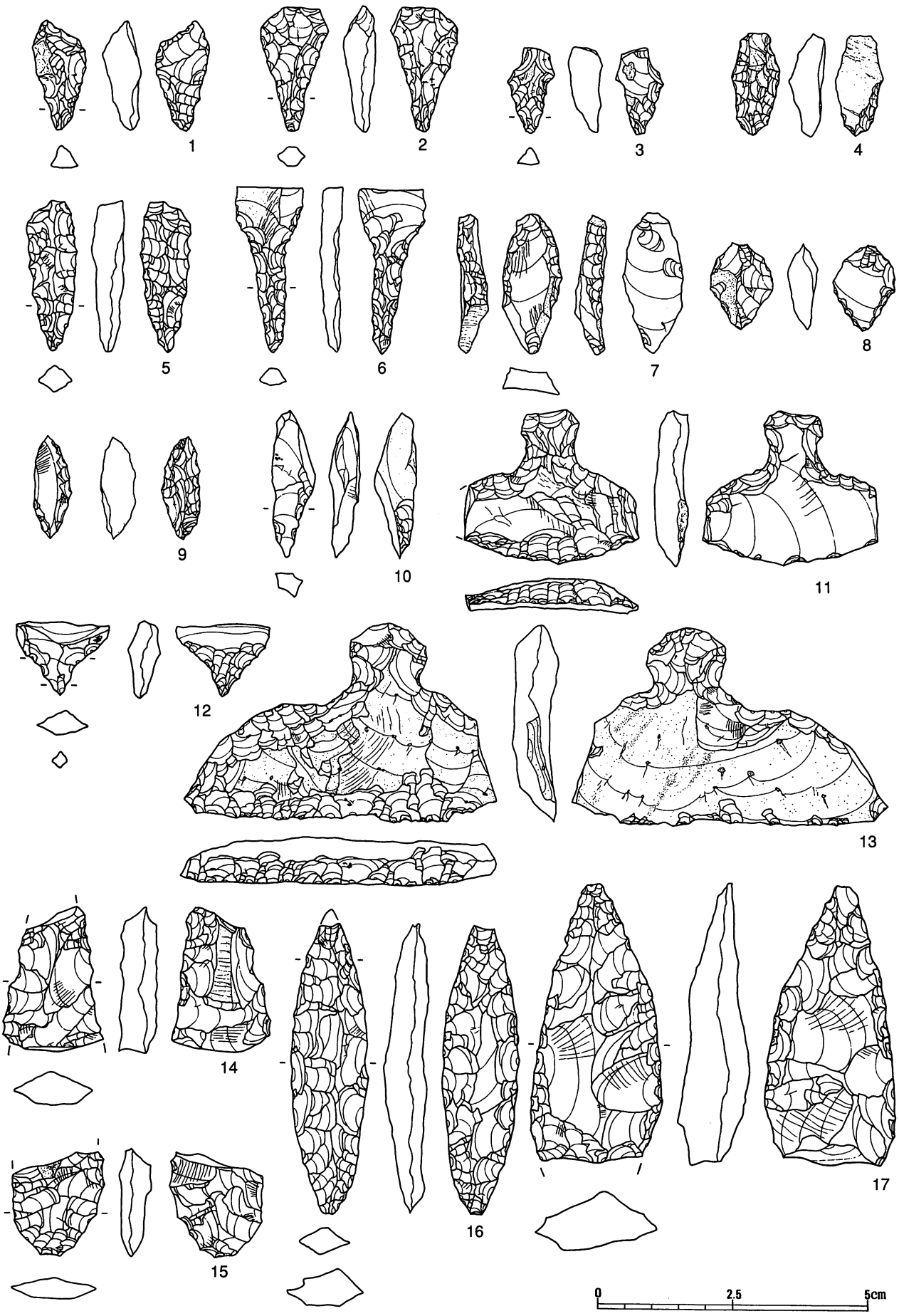
認定基準　押圧剥離によって、3つの脚部が作出されているものとする。

石器観察　石材が頁岩であることからも、第98図16の尖頭器と共に東北地方からの搬入品である可能性が指摘できる。左脚部の調整が密で、左右脚部の断面厚が薄いのに比し、左右脚部に90°で交わる脚部は厚い。

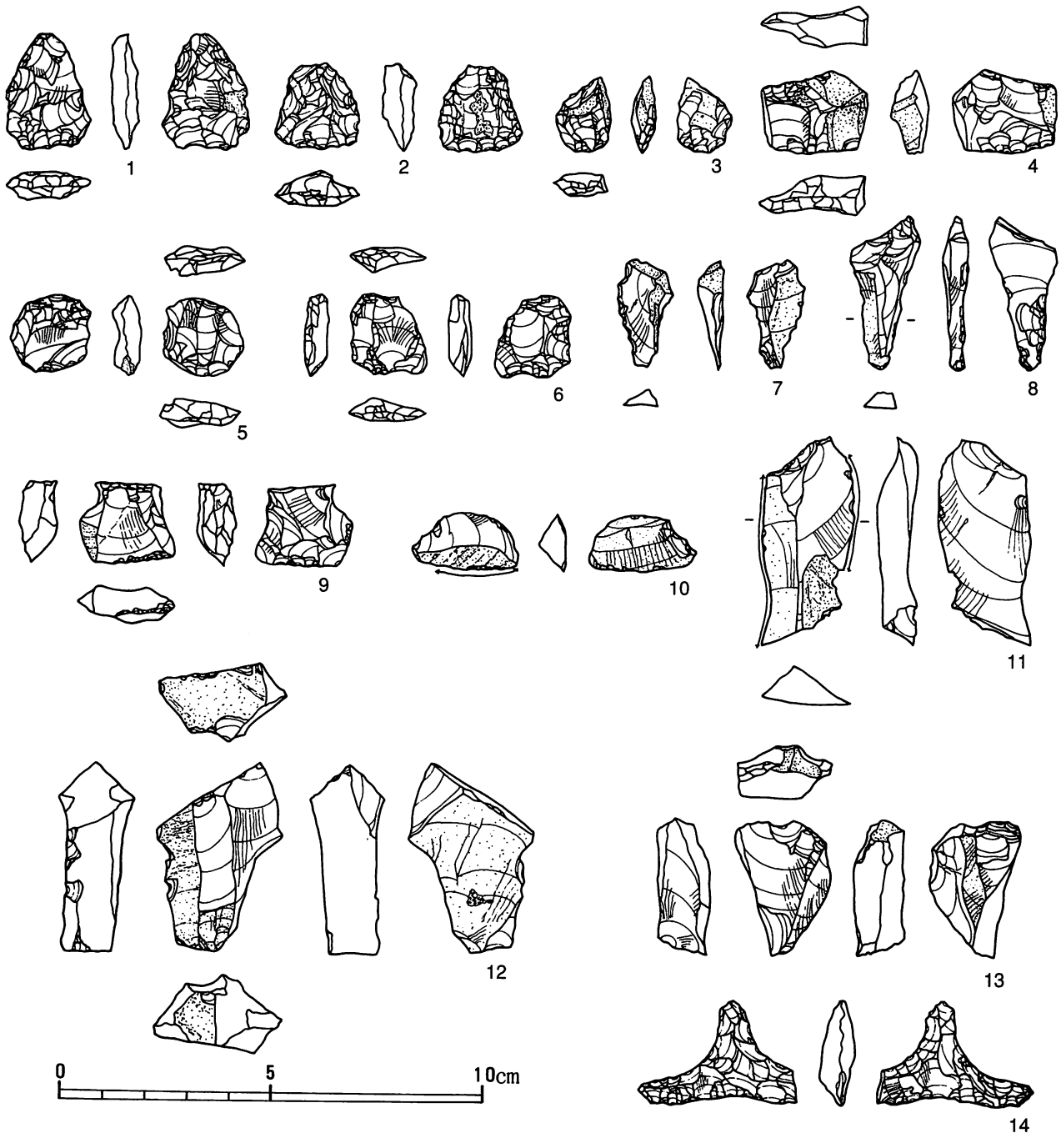
〈打製石斧〉（第100・101図）

認定基準　対向する辺により側縁が形成され、短辺に刃部が設けられるものとして認識した。

型式設定　（A-1）基部から刃部に向かって広がるもの、（A-2）Aと同一形態で小形のものや（B-1）平



第98図　石錐·石匙・尖頭器



第99図　その他の小形石器

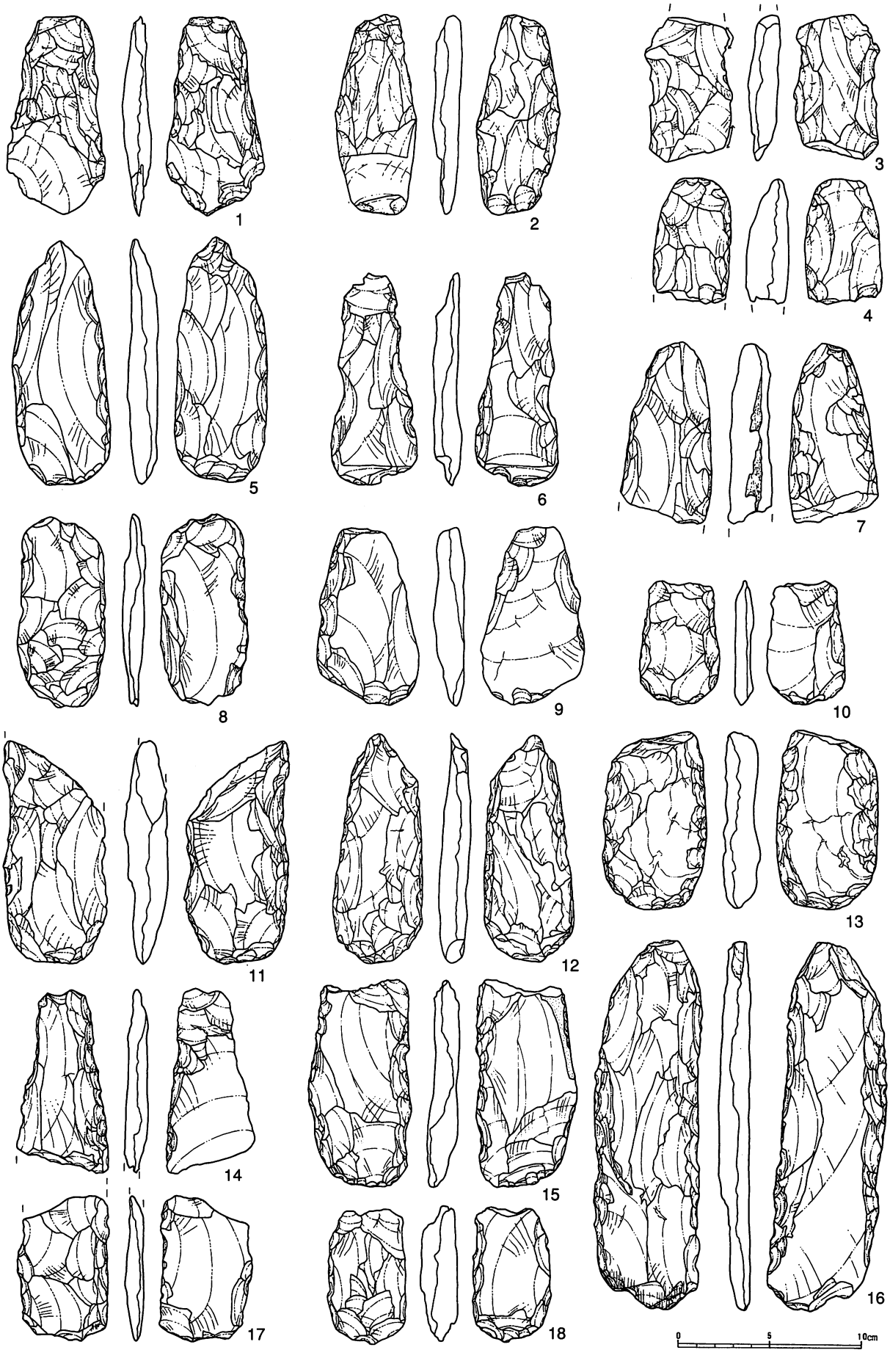
面形態が長方形を呈し、側縁が直線状か緩やかに外湾するもの、（B-2）B-1と形態は同一で小形のもの、（C）側縁の一端に抉りを有するものなどに分けられる。

分類の結果　A-1：12点、A-2：4点、B-1：23点、B-2：9点、C：3点、折損品：2点

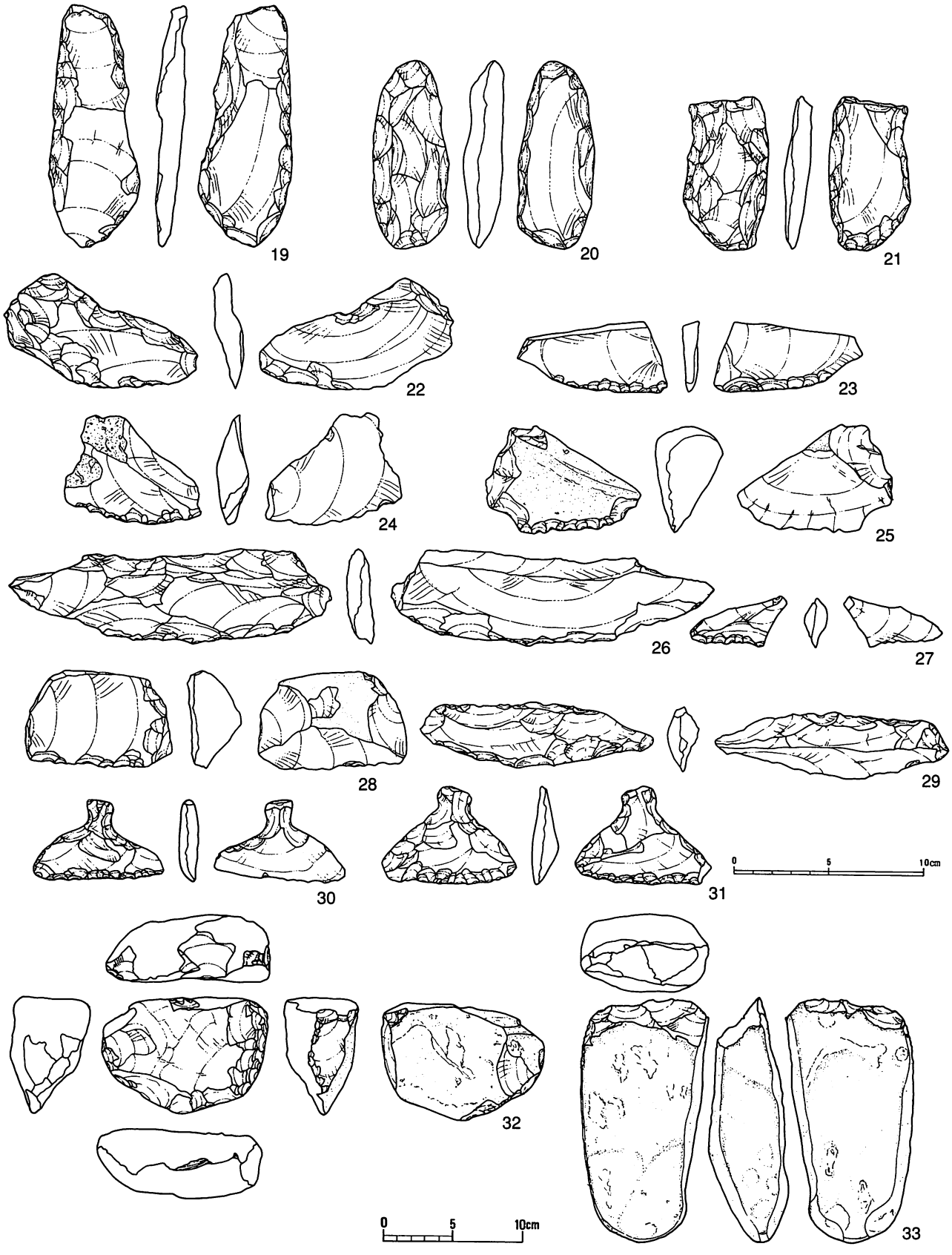
石器観察　多様な素材剥片を利用したことが素材面から観取されるが、素材剥片の形状を利用し、その周縁を調整するものが多く認められる。6は基部と刃部が分化する形状を呈する。7は小形の礫を素材としており、両側縁には礫面が残置している。11は調整により鋭角な刃部が設けられ、裏面右側縁において浅い抉り部を有する。16は刃部に線状痕を、刃部よりの側縁に磨耗痕を有し、裏面の両側縁には階段状剥離が発達する。

〈大形削器〉（第101図・第102図）

認定基準　素材剥片の1辺に連続的な調整により鋭角な刃部を作出するもので、打製石斧など中形の石器と同一の石材を用いており、最大長か最大幅のいずれかが5㎝を超えるものとして認識した。



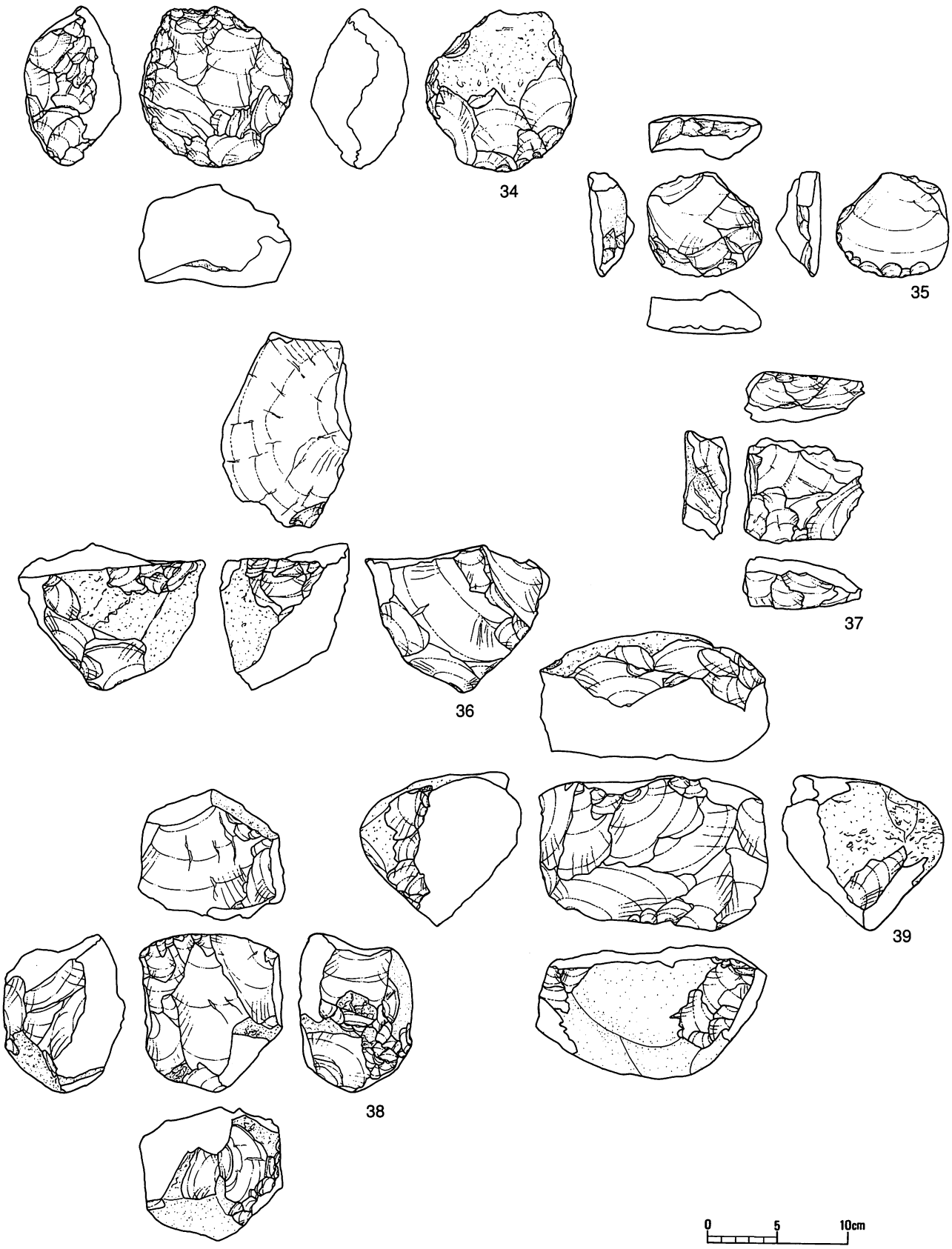
第100図　打製石斧（1）



第101図　打製石斧（2）・大形削器（1）・大形石匙・楔形石器・礫器（1）

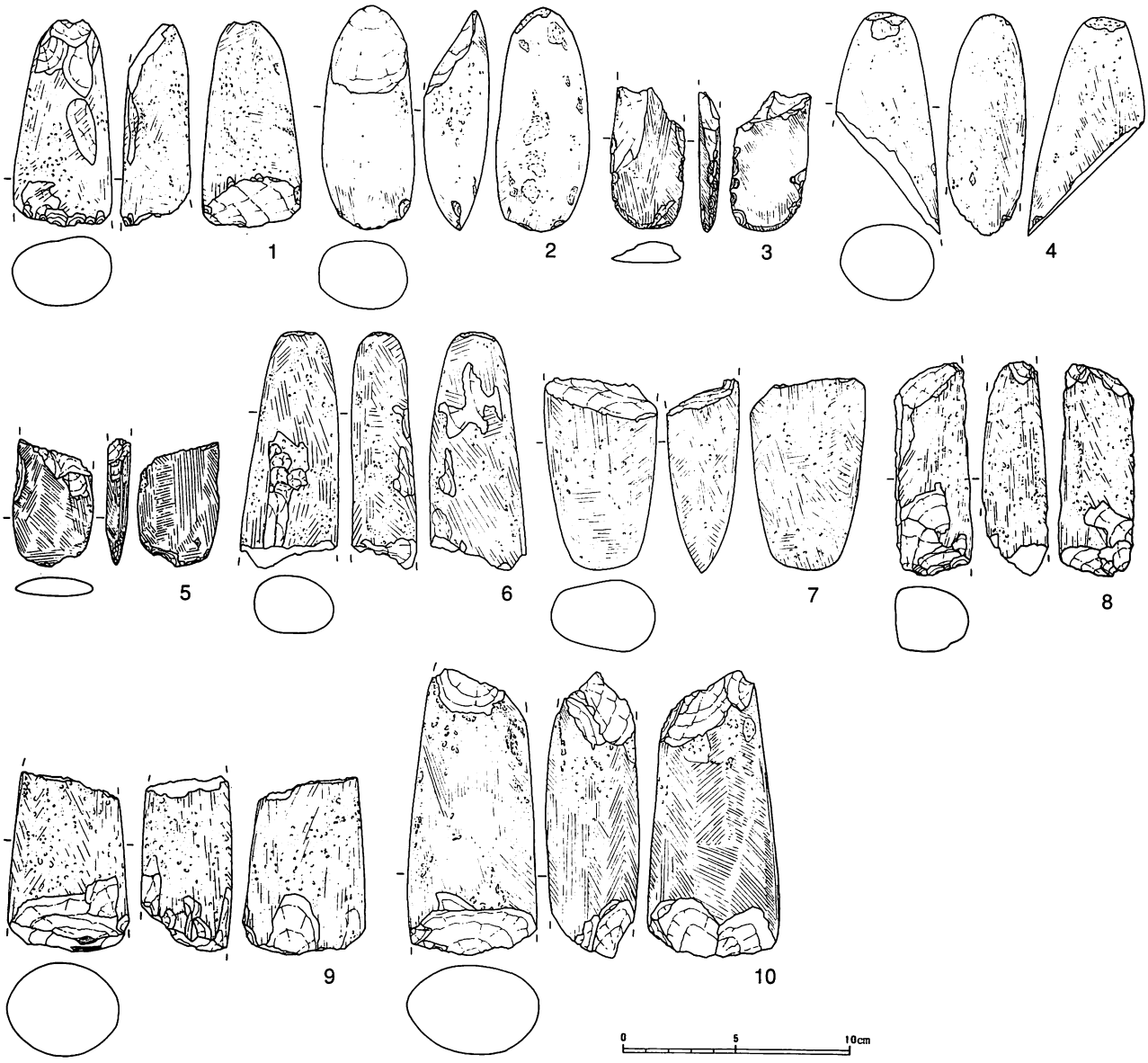
型式設定　（A）緑色凝灰岩など大形の石核と同じ石材を用いるもので、素材剥片の１辺に連続した調整を加えるもの、（B）ホルンフェルスなど打製石斧と同じ石材を用いるものでいわゆる「横刃形石器」とも捉えうるものに分けられる。

分類の結果　A：７点、B：４点

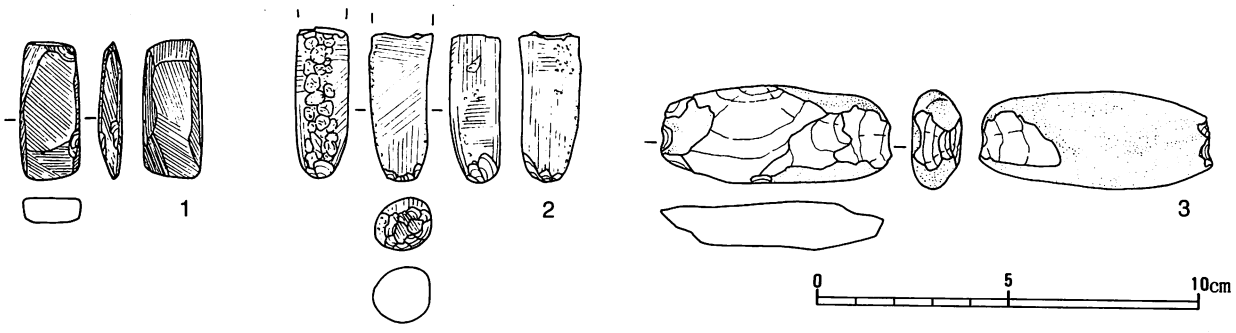


第102図　礫器（2）・大形削器（2）・石核

石器観察　素材剥片の端部側に刃部が設けられるのが6点、側縁に設けられるのが5点である。いずれも素材剥片において、鋭角な辺に調整を加え刃部としている。刃部に対向する辺に対して、調整を加えることによって刃潰しをおこなっているもの（29）もある。刃部は調整を加えたことによって、鋸歯状を呈している。



第103図　磨製石斧



第104図　小形磨製石斧・敲石・石錘

〈大形石匙〉（第101図）

認定基準　2対の抉り部によってつまみが作出される石器で、ホルンフェルスを石材とするものを対象とする。

石器観察　図101の30・31共に端部側に刃部が設けられているが、30は表面に、31は両面に調整されている。

〈礫器〉（第101・102図）

認定基準　ネガティブな面で構成されるもので、剥離により刃部が作出されるものとする。

石器観察　第101図33は、礫の一端に両面調整を加えることによって刃部を作出している。第102図34は、両面

調整によって刃部が作出されているが、表・裏面の先行剥離面形状から、石核を転用した可能性を指摘できる。

〈石核〉（第80図・第102図）

認定基準　ネガティブな面で構成されるもので、石材が黒曜石以外のものとする。

石器観察　打製石斧や大形削器などの素材剥片を供給するものとして捉えることができる。第102図36の作業面に存在する剥離痕は、いずれも階段状剥離が発達している。37は側縁に作業面を設け、錯向状に作業が進行している。39の下端部からの剥離は節理面に沿っており、バルブは発達していない。これ以外にも分割によって打面を作出し、礫の稜部を取り込む様に作業を進行させるものがある。

〈磨製石斧〉（第79図、第103図）

認定基準　敲打によって器体の作出が行なわれた後に、研磨技術により、器体の形成と刃部の作出が行われるものとして認識した。

型式設定　厚くて大形のもの（A）と薄くて小形（B）のものに分けられる。

分類の結果　A：8点、B：2点

石器観察　型式AとBは、その形態・最大幅などの点から、対象物・装着法の点で大きく異なった可能性を指摘できる。出土したもの全てが折損・破損しているが、偶発的と考えられる折れ面を切る剥離が存在することから、何らかのリダクションが企図されたと考えられる。剥離の他にも、第103図7の刃部が器体よりも小さいことや、9の下端の剥離面が一部研磨されていること等は、多様なリダクションの在り方を示唆している。

〈小形磨製石斧〉（第104図）

認定基準　研磨技術により、器体の形成と刃部の作出が行われる小形のものとして認識した。

石器観察　主に斜位から縦位の研磨により器体が形成されており、基部・刃部共に鋭角を呈する。

〈石錘〉（第104図）

認定基準　形態の軸上において、対向する縁辺に2対の抉りを加えるものとする。

石器観察　楕円形を呈する礫の短辺に剥離を加え、2対の抉り部を作出している。表面には、素材を薄くするためと考えられる剥離も加えられているため、表面は平坦な、裏面は起伏のある形状を呈している。

〈磨石類〉（第79図、第104図、第105～110図）

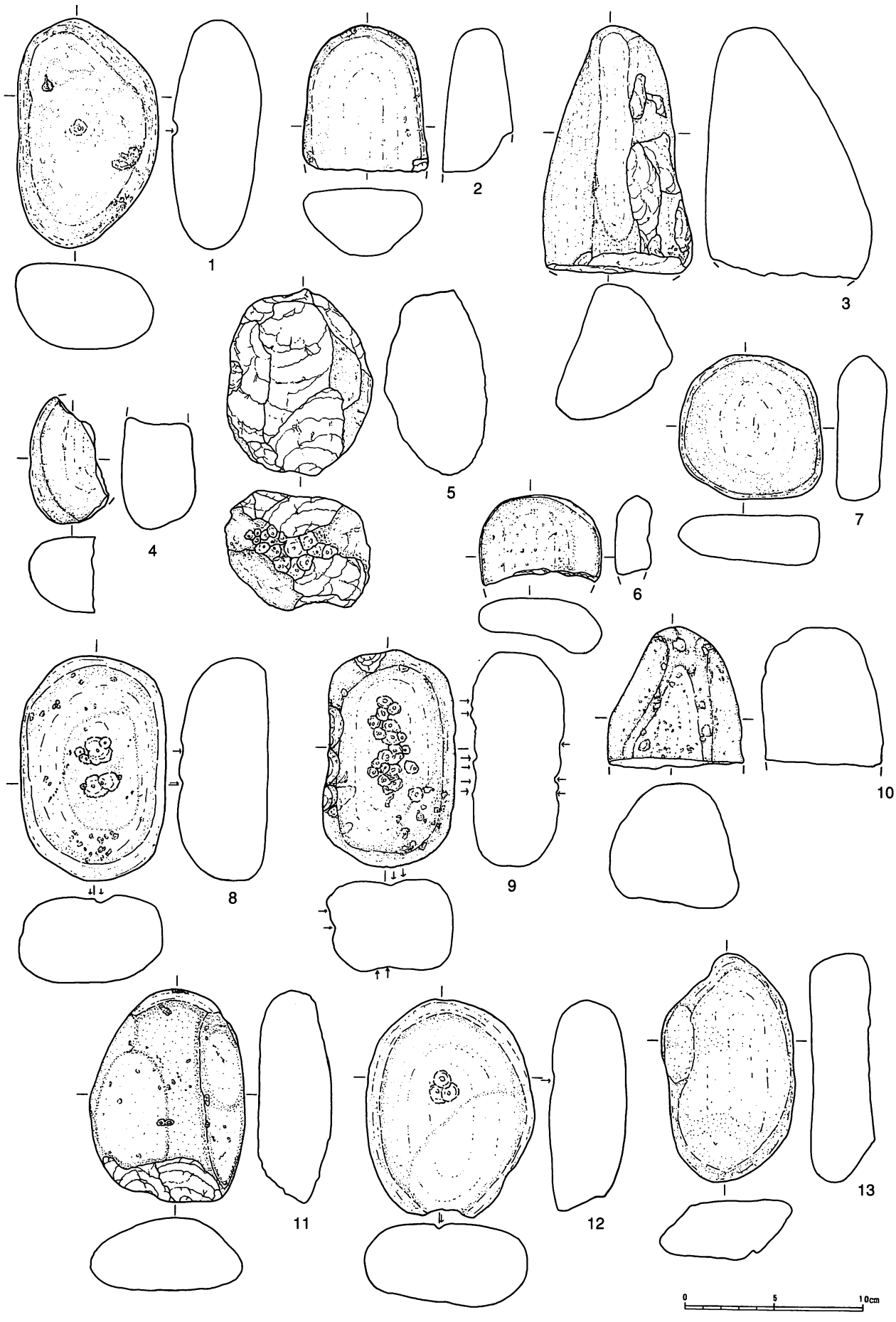
認定基準　主に研磨技術による磨面を持つが、他に敲打技術による凹部が形成されたもの、側縁に対象物を敲いた事による敲打痕を有するものなどが含まれる。

型式設定　（A-1）断面形状が楕円形・長方形を呈し、研磨技術により1～2面の磨面が設けられたもの、（A-2）A-1に該当するもので小形を呈すもの、（A-3）A-1に該当するもので大形を呈すもの、（A-4）3面以上の磨面が設けられている多面形のもの、（B）断面形状が三角形状・楕円形を呈し、研磨技術により2つの面が接する稜部に磨面が設けられるもの、（C）縁部に敲打痕を有するものである。他にはこれらの技術の複合石器として、（D-1）A類で凹部が形成されているもの、（D-2）B類で凹部が存在するもの、（D-3）A類で敲打痕を有すもの、（D-4）B類で敲打痕があるもの、（D-5）A類で凹部と敲打痕が複合されているものなどに分けられる。

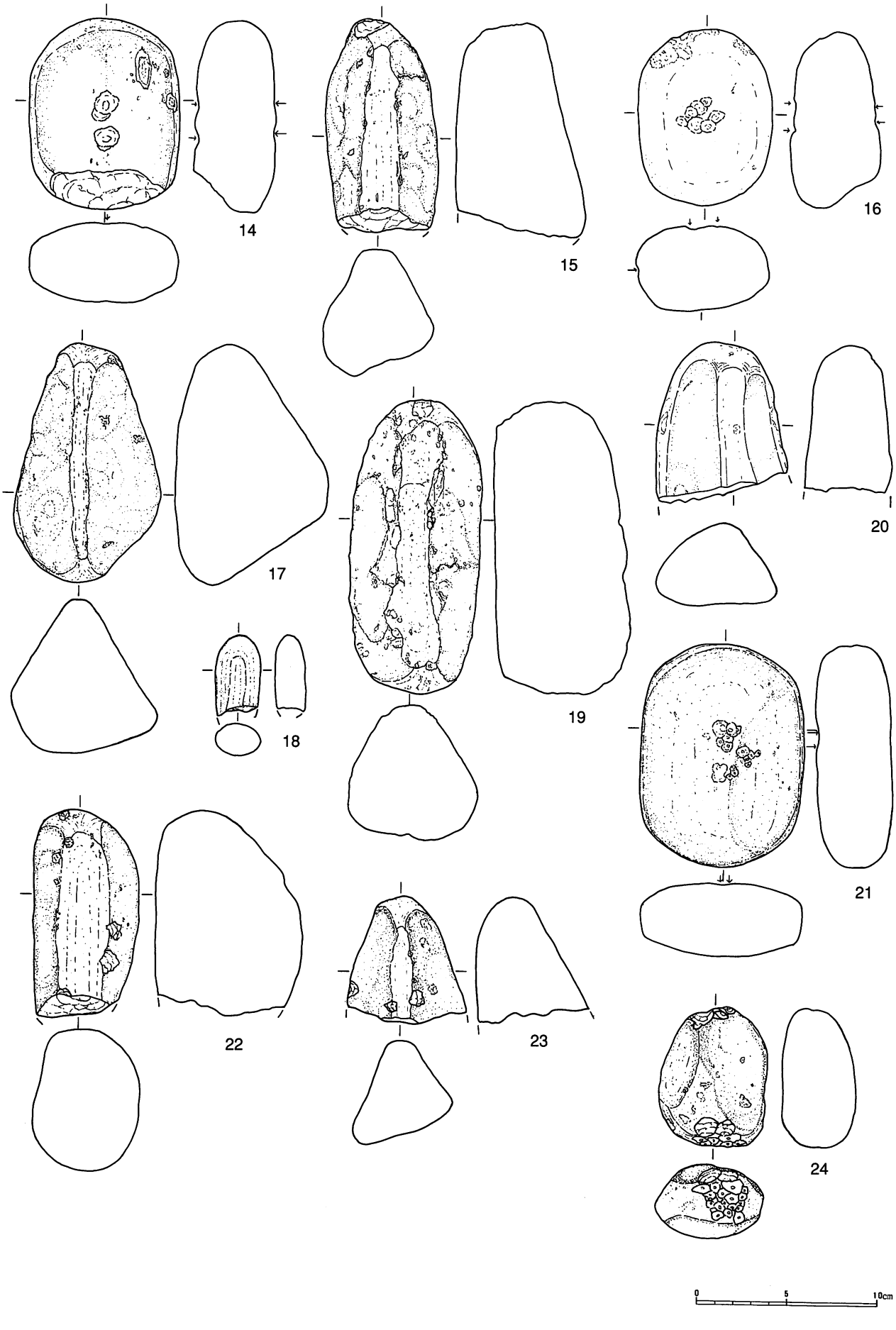
分類の結果　A-1：22点、A-2：11点、A-3：7点、A-4：13点、B：12点、C：1点、D-1：18点、D-2：2点、D-3：3点、D-4：1点、D-5：2点

石器観察　①稜磨石を組成すること、②形態的に多様な礫を素材とすること、③長方形の磨面に2つの凹部を有する企画的な磨凹石の祖形と見られるものが存在すること、等が磨石類の特徴として挙げられる。その特徴からも前期の石器の要素が残存する中で、中期の石器形態の萌芽が窺われる。磨面は必ずしも水平ではなく、幾つかの研磨面が複合されている。第104図2は、左側縁に敲打痕が存在し、下端は敲打痕が加えられた後に磨られている。敲石として用いていた際に折損したことが、折れ面のリングが左側縁に収束していることから分かる。第105図6は敲石であり、表・裏面には剥離に伴う器体の割れが存在している。第107図32は縁辺の一部に赤色の付着物が存在している。第110図59・60は、台石・石皿としての機能も有していたと考えられる。

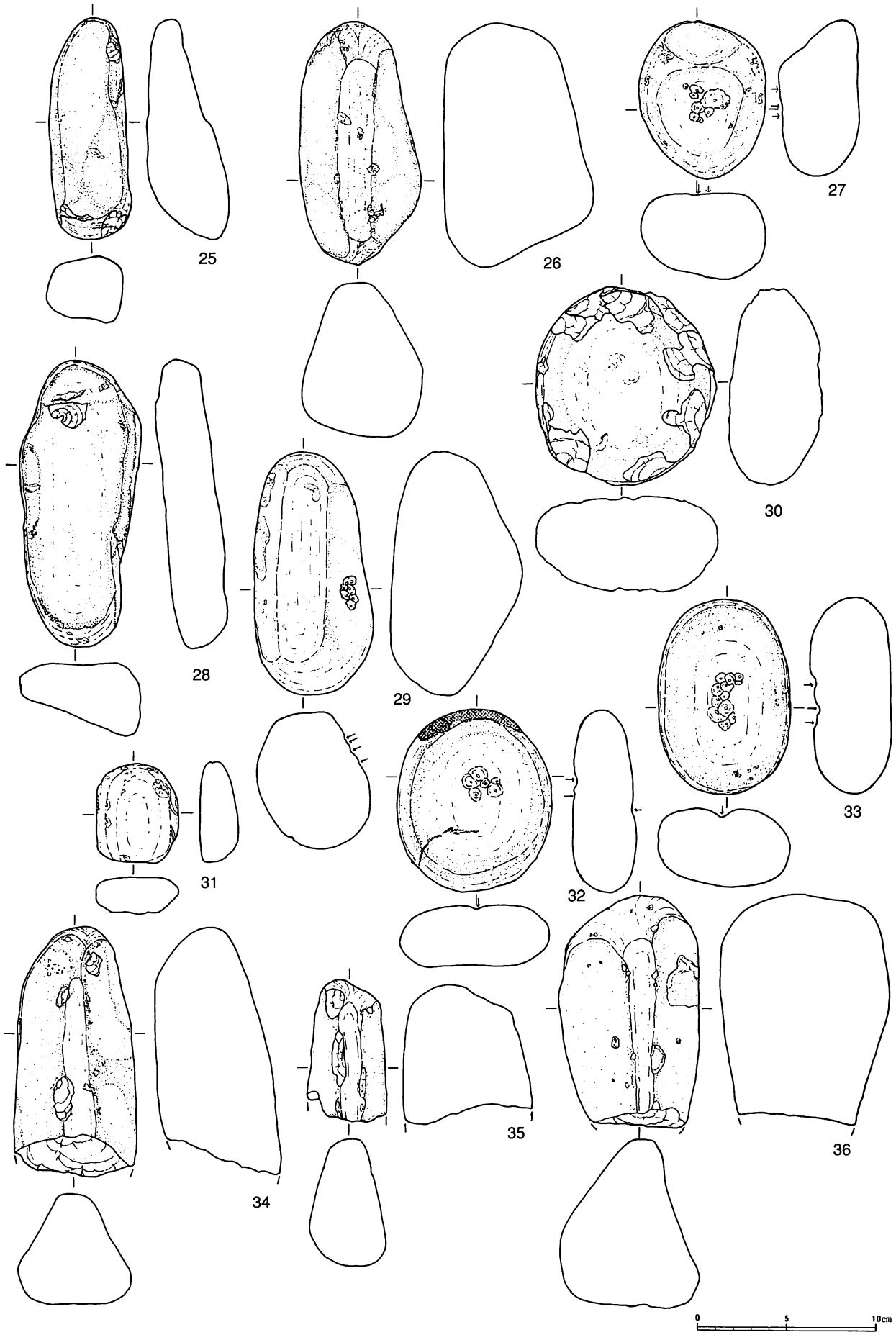
〈石皿・台石〉（第80図、第111・112図）



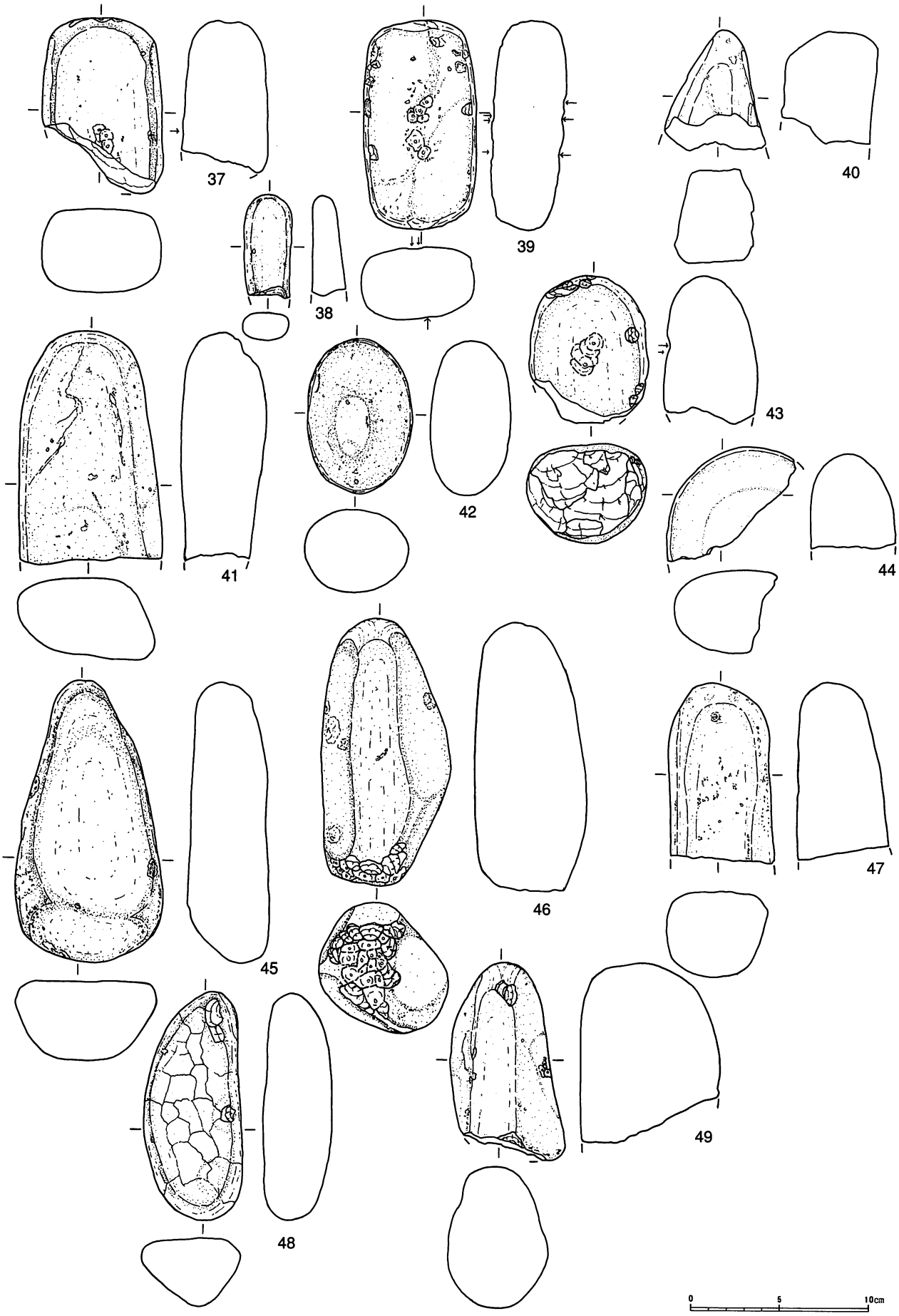
第105図　磨石類（1）



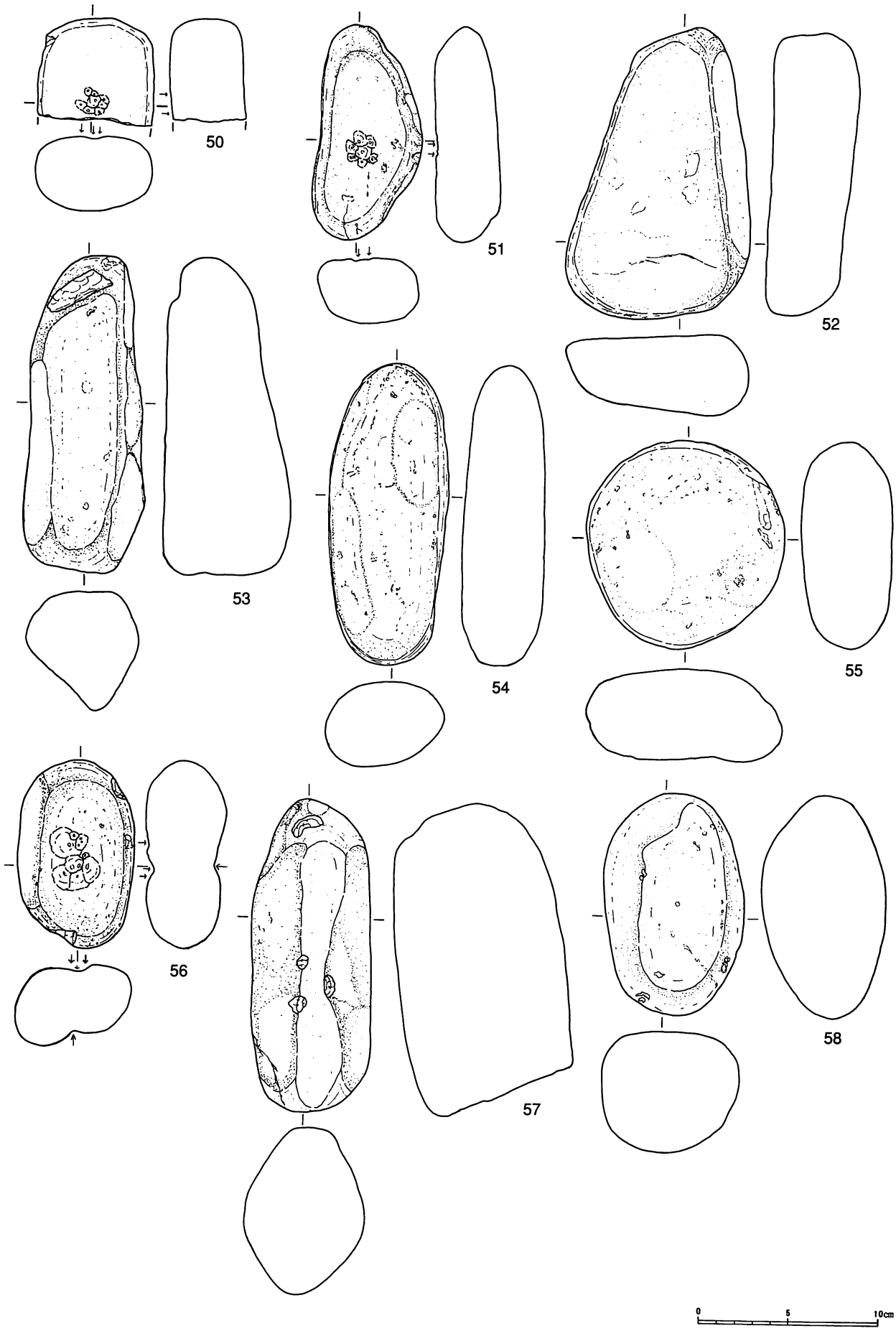
第106図　磨石類（2）



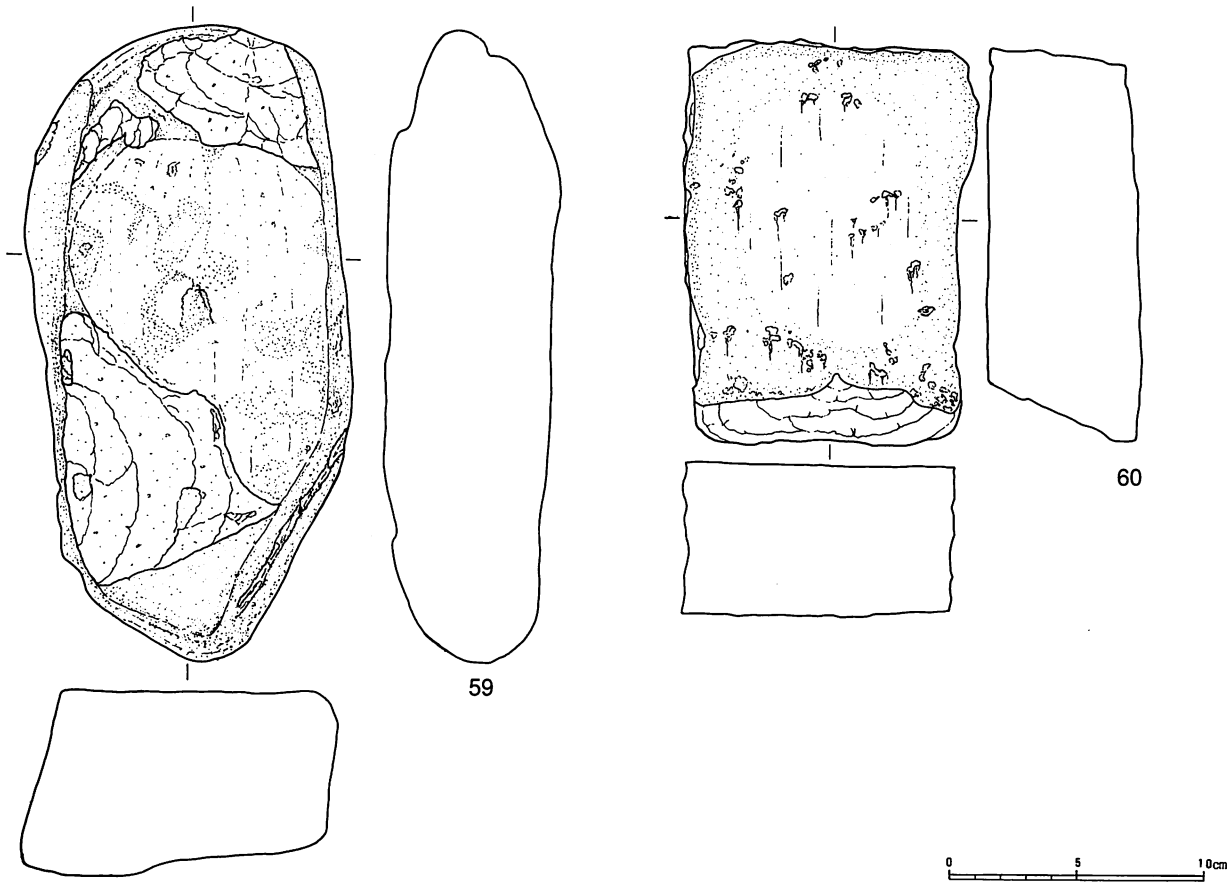
第107図　磨石類（3）



第108図　磨石類（4）



第109図　磨石類（5）



第110図　磨石類（6）

認定基準　研磨技術により凹面が形成されたものとして認識する。

型式設定　長方形で大形のものをA類、正方形・楕円形で小形のものをB類として捉えることにする。

分類の結果　A：8点、B：3点

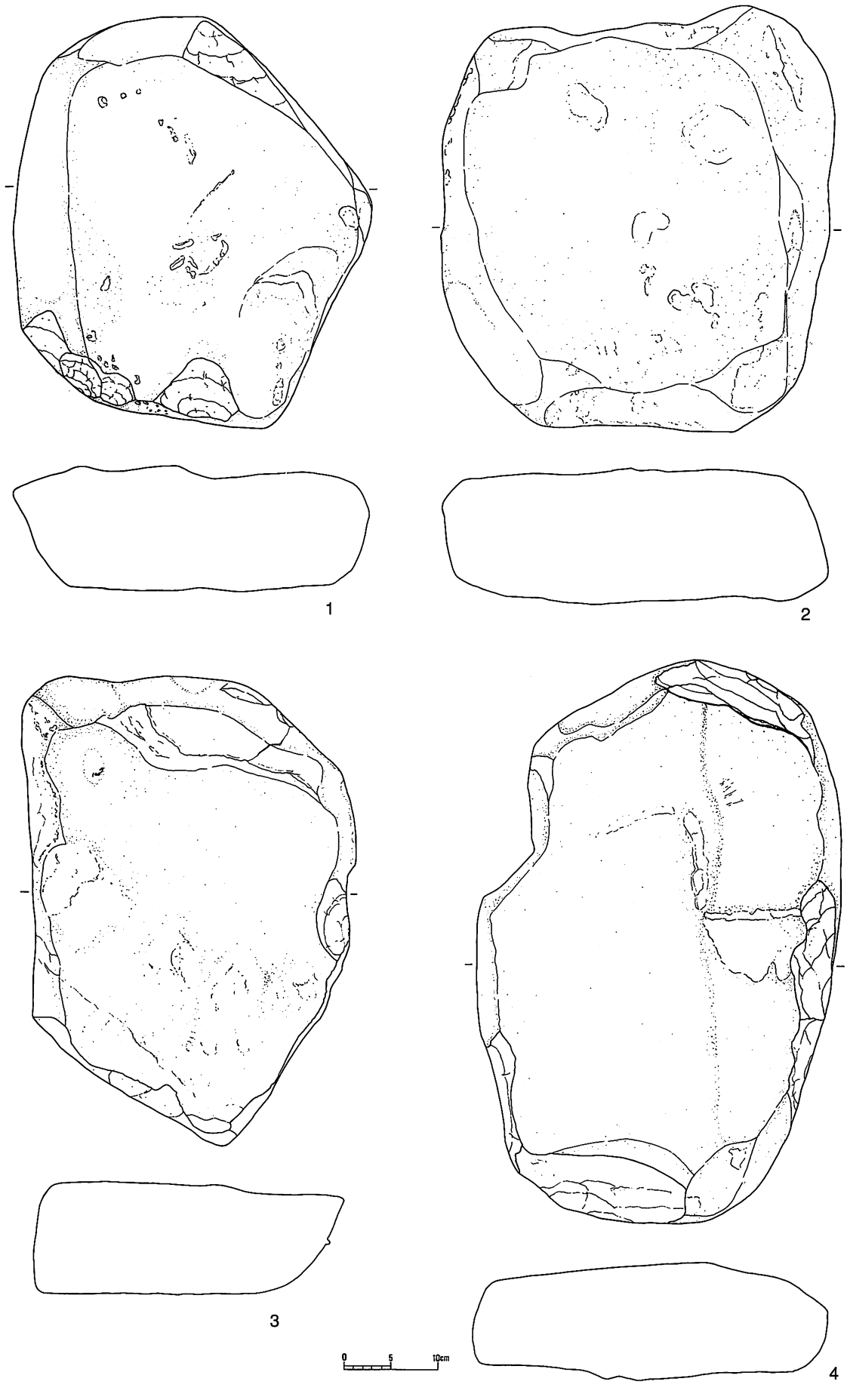
石器観察　第111・112図1～6は8・9とは異なり、いずれも磨面において顕著に研磨が進行した部位は有さず、若干の疎密はあるもののほぼ均等に研磨されている。1～5は縁辺を剥離しており、剥離後に縁辺を粗く研磨することによって整形している。6の右縁辺は研磨を有さず、剥離が加えられた状態が残置しており、鋸歯状を呈する。2・7の磨面上には、敲打痕が存在している。8・9は磨面中央が凹み状を呈しており、中期中葉に確立する縁部と機能部が分化した石皿につながるものだと考えられる。第111図4は、第106図19の磨石が上に乗った状態で検出された。7は正方形状であり、六面全てが研磨されている。

第8項　土製品・石製品

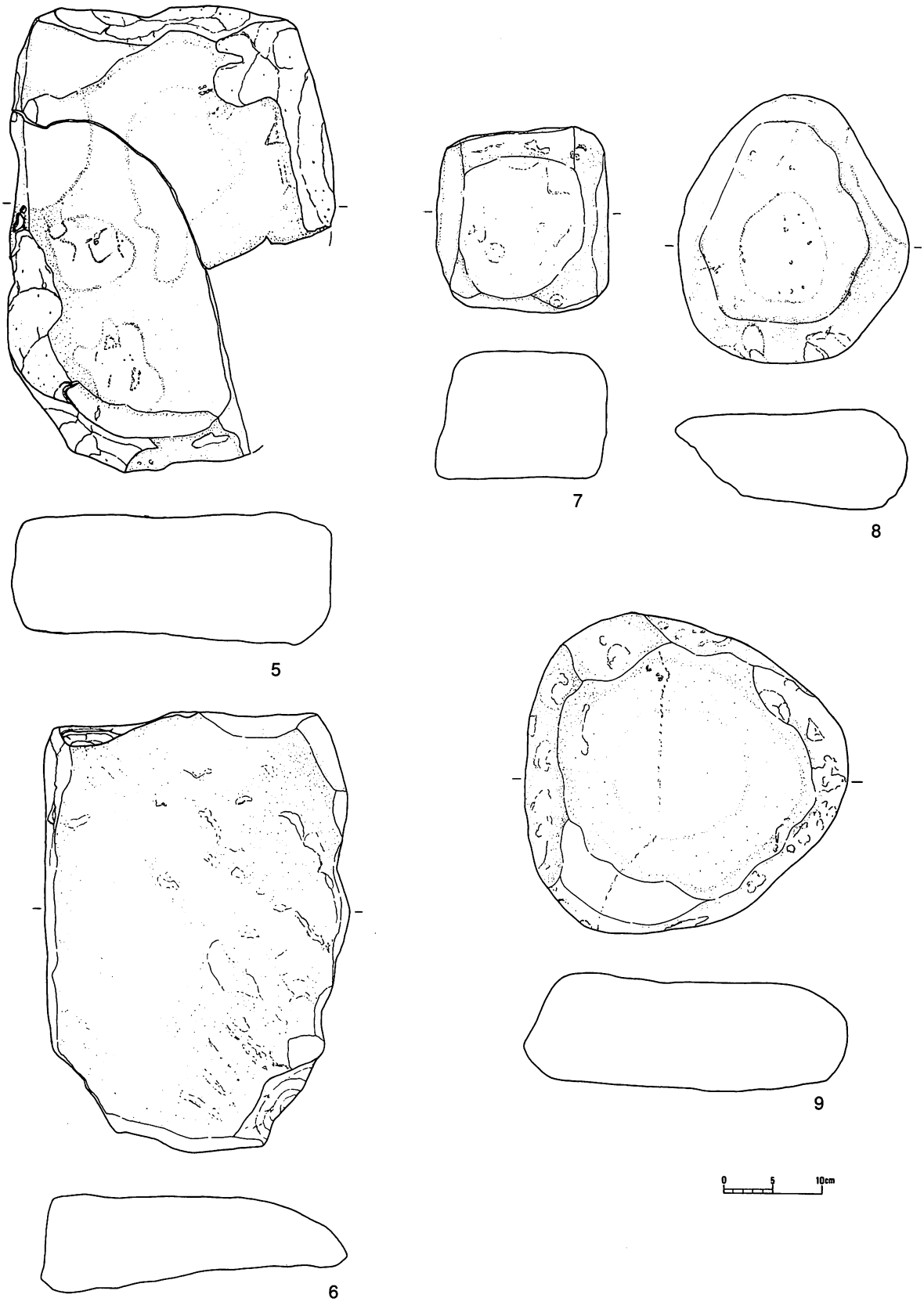
本項では、土偶や耳飾といった精神文化などに関わったものと考えられる遺物で、土製や石製のものを対象として述べるものである。

1．土偶

本遺跡からは総数で58点の土偶が出土しているが、そのうち図示できたのは55点である。これを時期別にみると前期のものが2点（1・2）、それ以外のものが中期というように中期土偶が圧倒的に多い。1は前期末葉の土器とともに第57号土坑から出土した板状土偶である。この土坑から出土した土器には関西系大歳山式土器や中部高地系の土器もみられ興味深い。土偶は縁辺部のうちの一方に粘土粒の塊が付けられているが、この粘土粒は中央に小さな粒を3つ置き、その両側にやや大きめの粒を付け、さらに顔を形作るように板状の両側側辺部に粘土紐を付け足しているが、このうちの一方は欠損している。粘土粒塊の上面は平らになでられている。



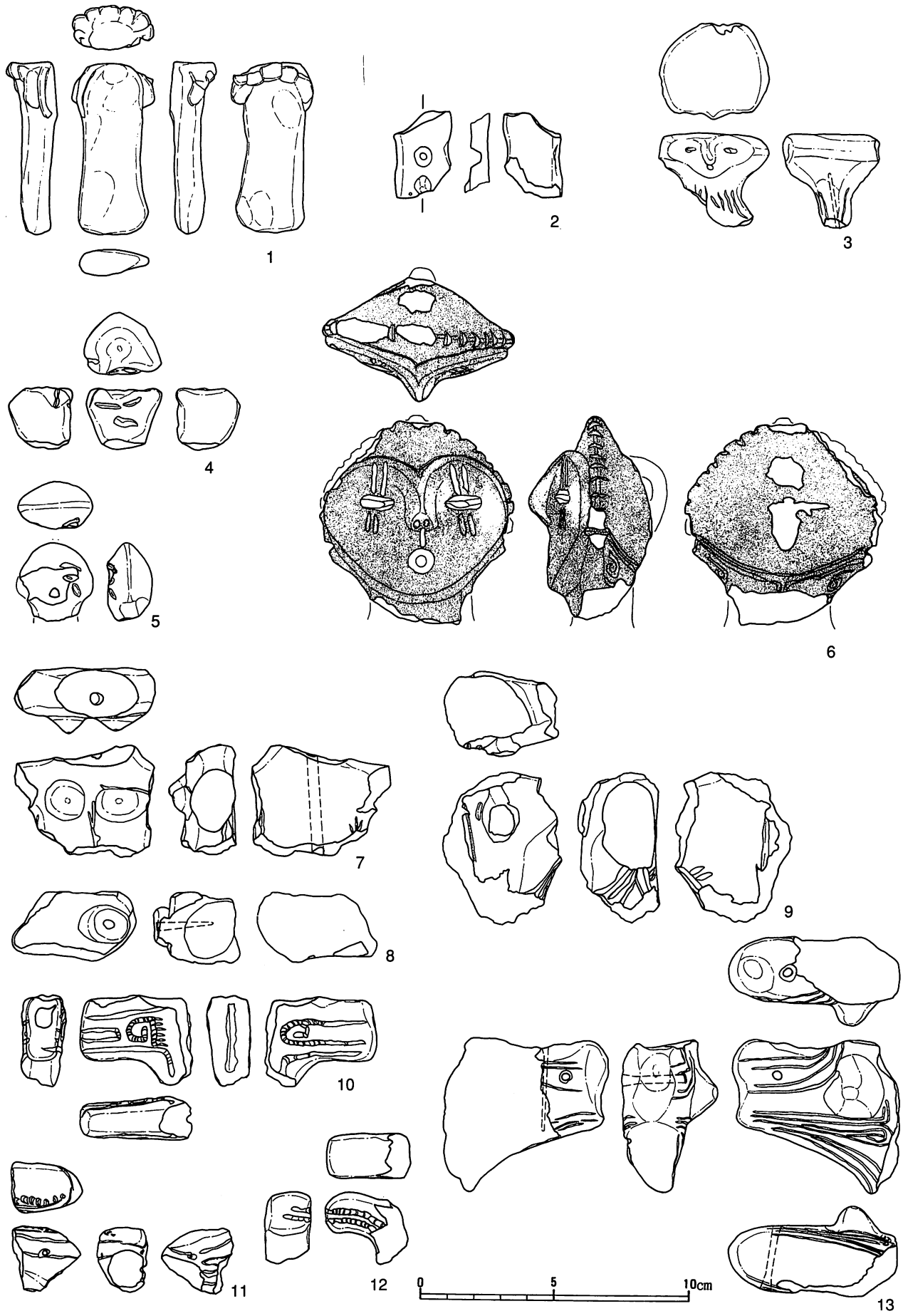
第111図　石皿・台石（1）



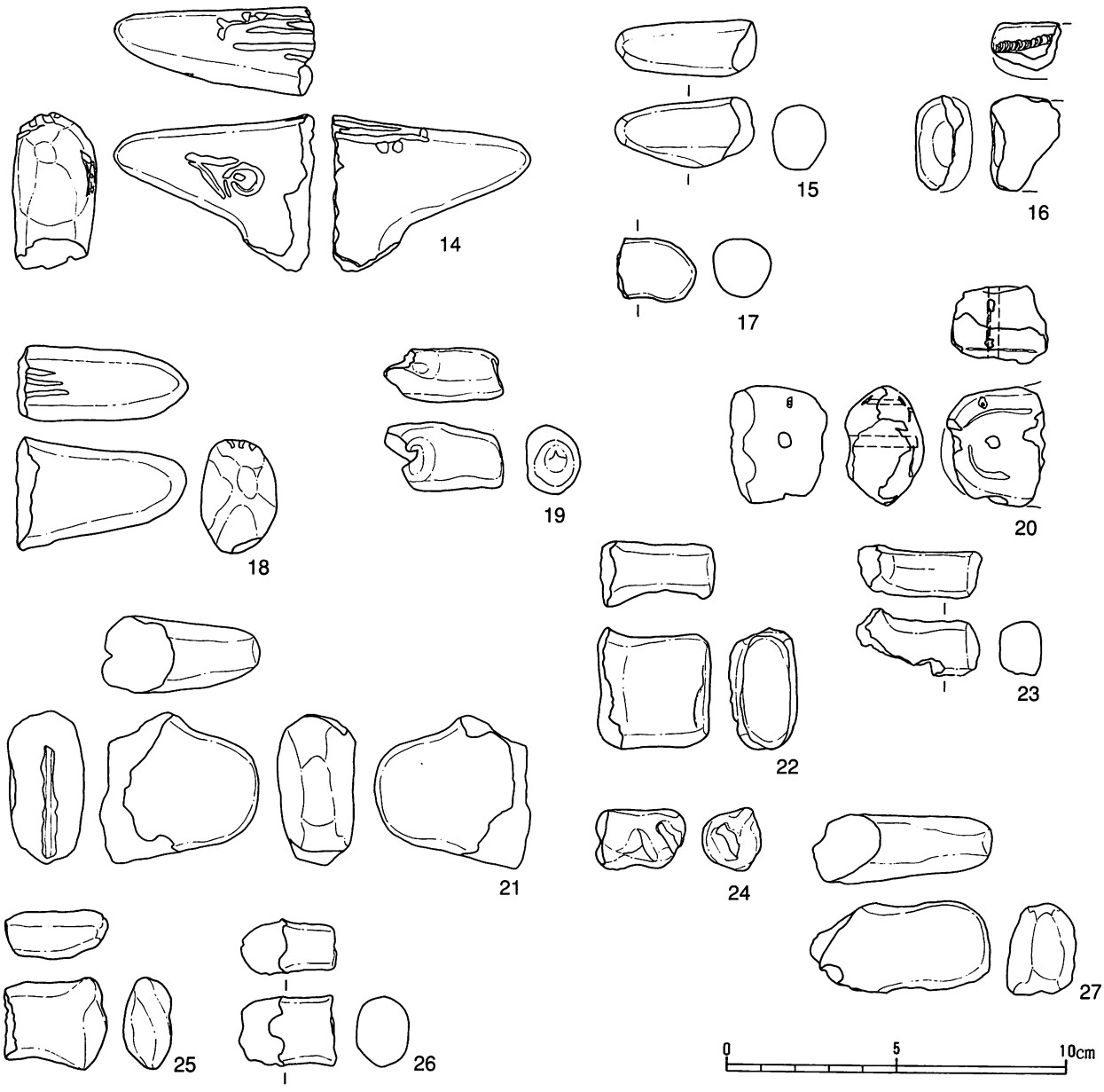
第112図　石皿・台石（2）

板状を呈する本体には所々に指頭圧痕がみられる。人形（ひとがた）としての明確な表現はみられないが、細部にわたって左右対称にパーツを組み合わせ製作している点で、土製品とは明らかに区別できよう。粘土粒側が頭部、以下胴部を表していると考えられる。粘土粒の塊は頭髪を表わし、粘土紐によって囲われたやや高さを持つ平坦な面が顔面にあたるのであろう。以上のような形態をみると、この土偶は板状という前期土偶の形態を受け継ぎながらも頭部に立体的な装飾を持っていることから、これは中期初頭に至って出現する立像土偶の萌芽のひとつとみなす事ができないだろうか。そのなかでも頭部上面が意図的に平坦な面を作り出し、後頭部に突出する形態をもつことから河童形土偶を指向する土偶と位置付けることができる。2も板状土偶であるが両端を欠損しているため全長は不明である。胴部中央に直径0.7㎝ほどの窪んだ凹円をもち、そのすぐ下には粘土粒を貼りつけた突起をもつ。この突起の左下には小さな刺突がみられるが、これが意図的なものかどうかははっきりとしない。胴部は凹円のある位置でくびれさせている。これは前期末葉の在地系土器とともに第21号住居跡から出土している。このように胴部中央に凹円もしくは凸円をもつという特徴は、形態的には東北地方において前期を通してみられる糠塚型の土偶に類似するが、このようなタイプの土偶は境川村一の沢遺跡でも２点みられる。３は河童形土偶の頭部である。頸部より下は欠損する。頭部は平らに作りその平面形は半月状を呈する。顔面部は区画され頭部に接する中央部分から鼻を立体的に作りだし、ヘラ状工具によって目・口の表現がつけられている。頸部には沈線によって縦方向の筋を全周に入れている。４は頭部であるが、中心部をやや窪ませながらも頭部を平らに作り出していることからこれも河童形土偶と考えられる。顔面部には鼻の表現は見られず、目・口をヘラ状工具により描き出している。全体的には稚拙なつくりではあるが、顔の輪郭は意識され側面部分とは区画されていることから、中道町上の平遺跡などにみられるような河童形土偶の初現形態ではなく、成立期の一形態としてとらえることができるであろう。これと同じタイプは釈迦堂三口神平地区出土の土偶にみられる。5も頭部であるが、顔面が欠損しているものの目・口の表現と目の上下に刺青のような表現が見られる。このような頭部形態を有するものは釈迦堂遺跡三口神平地区のものなどがある。6の頭部は全面に黒色塗彩されている。顔面部はハート形に作り出され、目・鼻・口の立体的な表現と刺青の表現が見られる。側面から頭頂部にかけては刻みが施され後頭部の頸部に近いところには蕨手文が見られる。7～9は胸部破片である。7の胴部中心には粘土塊を接合する際の芯棒の痕跡が見られる。10～27は腕部の破片である。10には前後の両面に蕨手状の押し引き文が見られることから時期的には五領ヶ台式の土偶と考えられる。12は第490号土坑から出土した腕部で磨製石斧とともに見つかっている。これも押し引き文が見られることから時期としては五領ヶ台式期にあたるものと考えられる。13は胸部～腕にかけての部位で沈線文と竹管文が見られる。28～44は胴部の破片である。28は半球形の胴部にどっしりとした脚部のつくもので腹部には正中線が表現されている。五領ヶ台式期に位置付けられる。29～31もこのような形態と考えられる。29は五領ヶ台Ⅱ式期の第９号住居跡から、31は同じく五領ヶ台Ⅱ式期の第４号住居跡からそれぞれ出土している。32・33・36・39などは出尻形を呈するものと思われる。41には胴部の中心部に粘土塊を接合する際の芯棒の痕跡が見られる。45～55には脚部を一括した。45は胴部と脚部を一体化させたものでやや裾広がりの形態となる。46・47は円錐形を呈する脚部で、ともに第69号土坑から出土している。この土坑からは五領ヶ台Ⅱ式土器の底部が正位の状態で出土しており意図的な土偶の使用現場を表わす例として興味深い。

以上、本遺跡出土の土偶を概観してきた訳だが、最後にこれらについて若干の位置付けを行ってみたいと思う。今回の調査では前期土偶が２点発見されているが、一般的に前期土偶は板状を呈し、中期土偶は立体的な姿を表わしており、全国的にみてもその割合は、11,000点ほどの土偶資料数のうちのおよそ1.2％が前期土偶であるというように、前期においては極めてその出土例が少なく、しかもその分布は東北地方と関東地方の２地域に絞られている。山梨県もこの前期土偶の２核地域のひとつを構成する地域であり、これまでにも22点の出土が知られている。時期別にみると黒浜式期～諸磯ｂ式期にかけてのものがほとんどであったがここで挙げた２点の土偶はいずれも前期末葉の十三菩提式期に位置付けられるものである。山梨県内においては前期末葉に位置付けられる土偶は現在のところ、本遺跡の２点と中道町上の平遺跡第６次調査のものと合わせて3点が知られるのみである。この時期は中期に至って現われる立像土偶の出現前夜にあたり、立像土偶の成立過程を考え



第113図　土偶（1）



第114図　土偶（2）

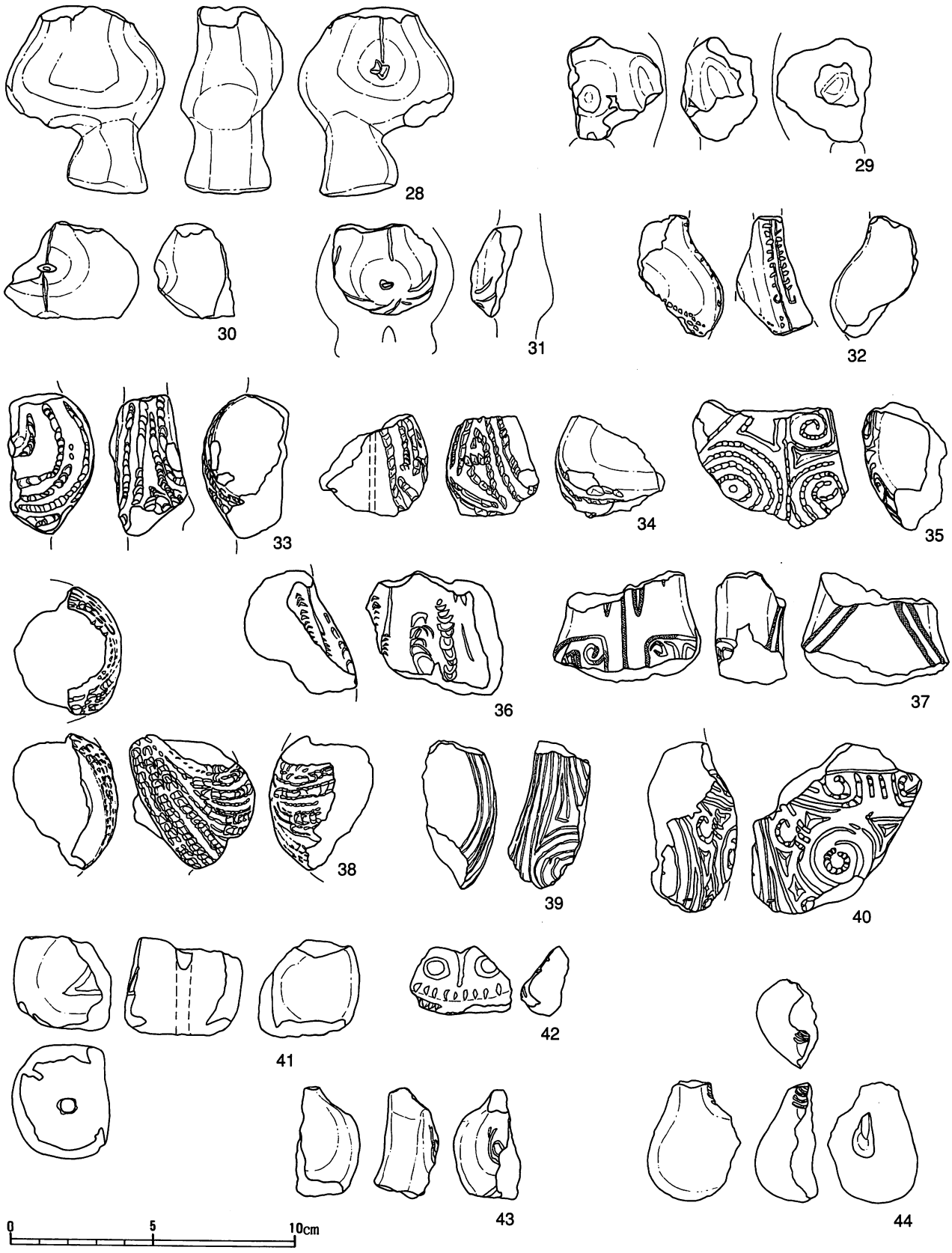
る上でも貴重な資料を提供できたと言える。また、今回の調査では中期初頭の五領ヶ台式期にあたる土偶が多く発見されている。いずれも破片資料が主体で全体像を窺えるものはみられないが、立像土偶の成立期の土偶形態・土偶の使用方法を考える上では一光をあてる事ができたのではないだろうか。従来、前期末葉から中期初頭という時期は集落を構成する住居跡数も少なく、精神文化的な面を表わす遺物も顕著ではない事から停滞的なイメージが先行しがちであったが、本遺跡から出土した土偶の量や内容は該期の豊かな精神文化の存在を物語っていると言えよう。

〈参考文献〉

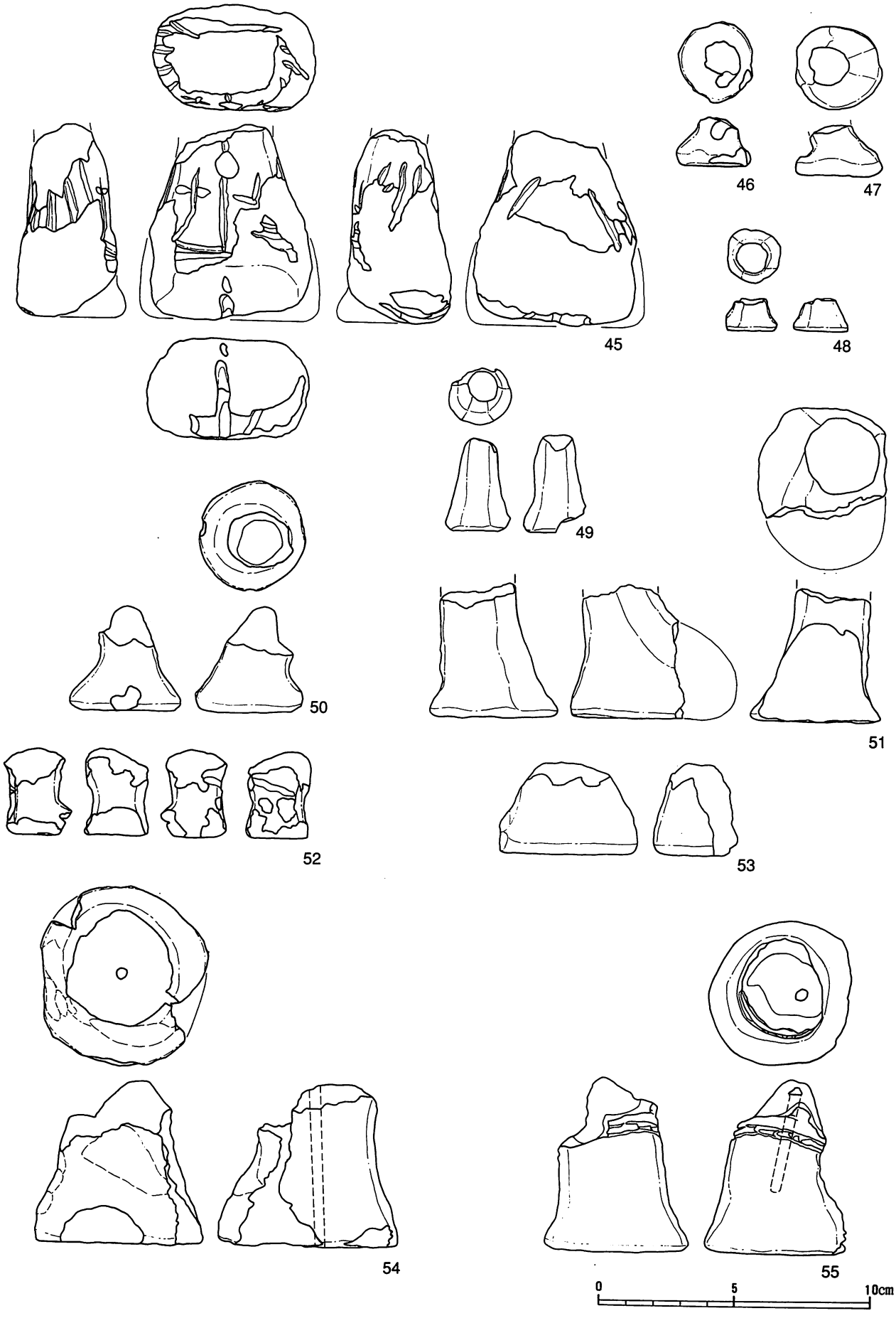
近藤悟・阿部博志　1994「大木式土器分布圏の土偶について」『土偶シンポジウム２　秋田大会　東北・北海道の土偶』土偶とその情報研究会

土偶とその情報研究会　1996『土偶シンポジウム４　長野大会　中部高地をとりまく中期の土偶』

今福利恵　1998「中部高地の縄文中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶研究の地平２』土偶とその情報研



第115図　土偶（3）



第116図　土偶（4）

究会
櫛原功一　1998「山梨県の中期土偶－有脚立像土偶の出現をめぐって－」『土偶研究の地平２』土偶とその情報研究会
原田昌幸　1998「発生・出現期の土偶から中期の土偶へ」『土偶研究の地平２』土偶とその情報研究会
市川恵子　1999ａ「縄文時代前期板状土偶から中期河童形土偶へ－御坂町桂野遺跡出土土偶に関する一考察－」『研究紀要15』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
市川恵子　1999ｂ「縄文時代前期土偶の再検討」『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会

２．土製円盤ほか（第117図１～29）（第３表）

本調査で出土した土製円盤は29点を数える。その内訳を形態別に見ると、円形が27点（93.1％）、楕円形が１点（3.4％）、四角形が１点（3.4％）で、円形のものが最も多く、完形品が多い。また、円盤周縁が研磨されているものが12点（41.4％）、研磨されていないものが17点（58.6％）であり、点数に大きな差は見られない。出土地点から見た場合、遺構に伴った出土のものが３点（10.3％）、包含層出土のものが26点（89.7％）である。

他の遺跡を例に挙げると、釈迦堂遺跡Ｓ－Ⅲ区の場合、出土総数が492点に対し、包含層出土が399点（81.1％）、土坑出土のものが23点（4.7％）、住居跡出土のものが70点（14.2％）で遺構に伴って出土するものは少ない。また、金生遺跡では出土総数が111点の内、住居跡出土のものが８点（7.2％）、配石から共なって出土したものは６点（5.4％）で、そのほとんどが包含層出土である。このことから、遺構に伴って出土するものは少ない状況が理解でき、土製円盤が遺構と関わる生活で使用されたものではなく、遺構の外において使用されたものと考えられる。

ここでは、土製円盤の最大径と重量について分類を行い、以下のような結果となった。

●最大径による分類

Ａ類・・・4.6㎝以上のもの　１点（ 3.4％）　Ｂ類・・・3.6～4.5㎝のもの　13点（44.8％）
Ｃ類・・・2.6～3.5㎝のもの　12点（41.4％）　Ｄ類・・・1.6～2.5㎝のもの　２点（ 6.9％）
Ｅ類・・・0.1～1.5㎝のもの　２点（6.9％）

●重量による分類

Ａ類・・・41ｇ以上のもの　２点（ 6.9％）　Ｂ類・・・31～40ｇのもの　３点（17.2％）
Ｃ類・・・21～30ｇのもの　８点（27.6％）　Ｄ類・・・11～20ｇのもの　12点（41.4％）
Ｅ類・・・10ｇ以下のもの　４点（13.8％）

この結果、最大径ではＢ類とＣ類が、重量ではＤ類に相当するものが多く、両者とも全体の４割を占める。径と重量には、径が大きければ重量があるといった相関関係が認められることが肉眼でも明らかであり、大きさと重量の分布の集中はその用途に関係があると見られるため、他の類例も含めて今後の研究課題としたい。

３．その他の遺物（第117図30～33）（第７表）

30は土器片錘である。長さ41.1mm、幅36.8mm、厚さ9.8mm、重さ18.0gを測る。上部と下部に押し引き文が見られる。31は用途不明の土製品である。長さ約27.1mm、幅約9.4mm、厚さ9.4mm、穴の直径が約11.0mm、重さ4.0gを測る。形態から紡錘車の可能性も考えられる。32・33は円形石製品で、形態が近世に見られる碁石によく似ている。これまで、碁石状の石製品は、近世の遺物といった認識が主体であったが、本資料は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期の住居跡から出土しており、先入観による遺物の時期判定は危険であることが判明した。

４．玦状耳飾（第118図１～12）（第７表）

１・２・５・６は、縄文時代前期末葉の十三菩提式期、３・４は中期初頭の五領ヶ台式期に位置付けられるものである。７～12は包含層出土のものである。形態による時期差は認められず、出土した全てが欠損している。１～３、５～７、９・10には赤彩が施されている。これらは、断面が内側に向かって細くなるもの（５・

7)、やや細くなるもの（6・9～11)、変化がないもの（1～4・8・12）の3つに大別される。

5．土製垂飾（第118図13～15）（第7表）

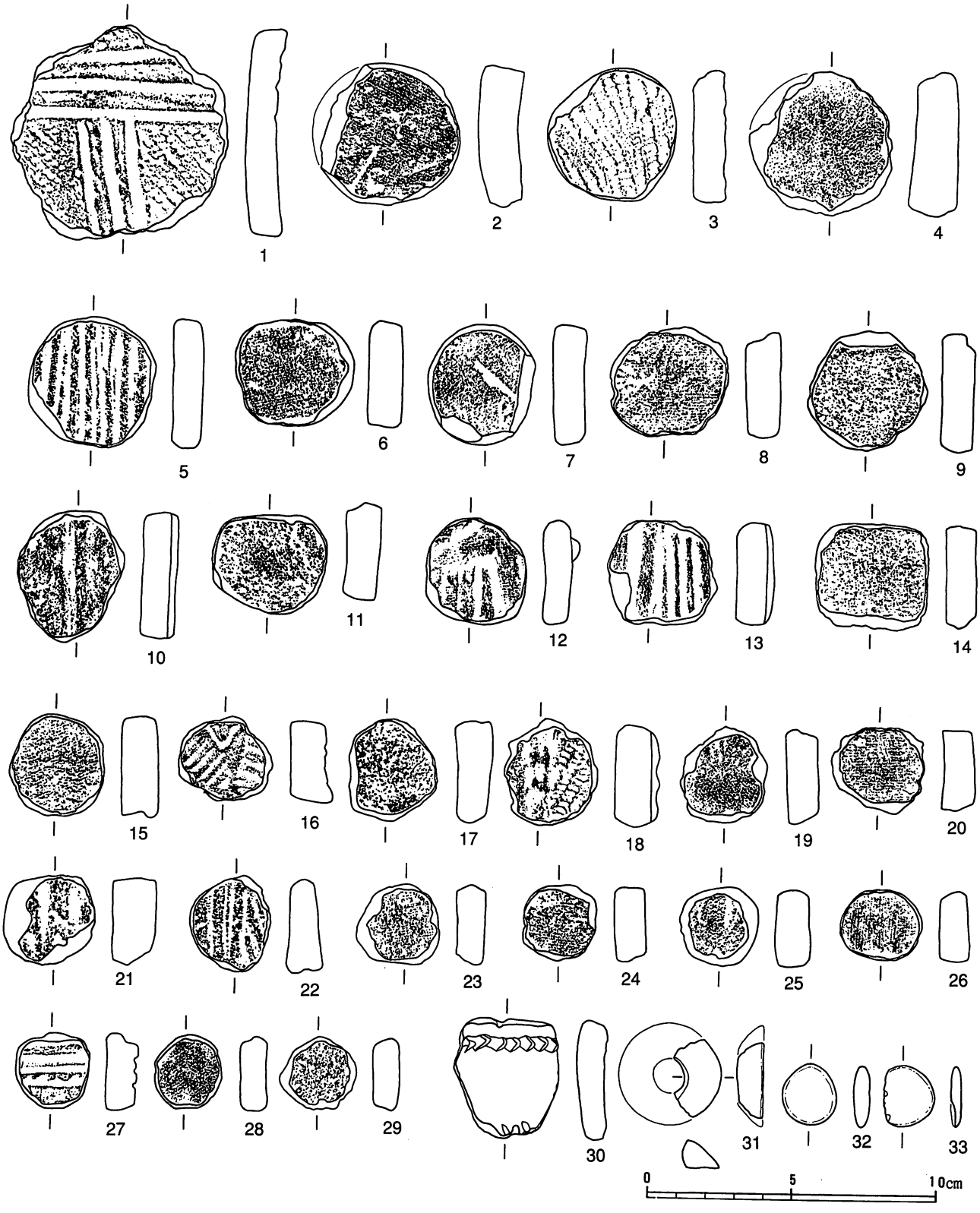
全て、上部の穿孔が途中の半製品である。13・14は片側穿孔で、13は下部が欠損している。14・15は中期初頭の五領ヶ台式期の住居跡から出土しているものである。14は、形態が隅丸二等辺三角形を呈している。15は両側穿孔で、形態が楕円形を呈している。

6．その他の土製品（第118図16～28）（第7表）

16は用途不明の異形土製品で、土器片を加工している。17は十三菩提式期の住居跡から出土した土板である。表面には円形・弧状・平行の沈線文、側面には交互刺突文が施されている。18～20は用途不明の小形土器で、18には指頭痕が見られる。21は小形土器の脚部で、脚部は縦位の沈線によって4分割され、その文様帯内には円形の沈線文、爪形文及び刺突文が施される。22～24は用途不明の土製品である。22は縄文時代前期末葉の十三菩提式期に位置付けられる土坑から出土しており、23・24は包含層出土である。25・26は粘土塊である。26は表面が焼け焦げている。27・28は土偶装飾付き土器で、カッパ形土偶の頭部のモチーフが描出されている。時期は、中期初頭の五領ヶ台式期に位置付けられる。

第3表　桂野遺跡土製円盤観察表（第117図）　　（　）は現存値

図版番号	出土位置	時期	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	備考
1	Y－15 G		71.1	72.5	11.0	127.0	
2	F－6 G		(4.8)	(4.7)	1.4	46.0	周縁研磨　一部欠損
3	表採		(44.9)	(45.0)	11.1	28.8	〃　一部欠損
4	D－6 G		(4.9)	(4.9)	1.7	40.43	一部欠損
5	表採		44.1	43.0	10.3	25.0	周縁研磨
6	F－4 G		35.1	39.8	12.2	34.0	〃
7	U－18 G		42.0	37.4	11.5	23.0	周縁研磨
8	精査		39.2	40.0	12.0	23.0	
9	F－4 G		40.4	39.3	11.2	20.0	
10	表採		45.1	36.8	12.0	21.0	周縁研磨
11	ハ－25 G		39.0	35.6	12.2	21.0	〃
12	表採		36.9	35.1	13.8	18.0	〃
13	表採		37.2	36.8	12.6	20.0	
14	303土	曽利	38.2	35.5	10.8	35.0	周縁研磨
15	W－13 G		35.0	32.2	12.8	21.0	
16	表採		29.5	32.3	14.0	14.0	
17	R－18 G		(35.0)	(30.0)	13.0	25.0	一部欠損
18	表採		37.0	32.2	15.3	17.0	
19	表採		32.8	28.9	11.0	15.0	
20	表採		32.1	28.1	11.0	13.0	
21	表採		30.5	32.1	15.3	16.0	
22	精査		33.1	28.1	12.8	13.0	
23	98土	五領ヶ台	29.0	28.5	10.6	13.0	
24	Y－19 G		26.0	24.9	11.7	11.0	
25	Y－15 G		26.9	26.9	12.5	11.0	周縁研磨
26	99土	曽利	28.5	24.8	10.7	10.0	〃
27	表採		25.0	26.8	10.6	9.0	
28	Y－15 G		25.1	23.2	9.0	8.0	周縁研磨
29	14住	五領ヶ台	23.5	24.5	9.1	8.0	


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
5
10cm

第117図　土製円盤

1
2
3
4
16
5
6
トーン部分は赤彩
17
7
8
9
18
19
20
10
11
12
21
13
14
22
23
24
25
27
15
26
28
0
5
10cm

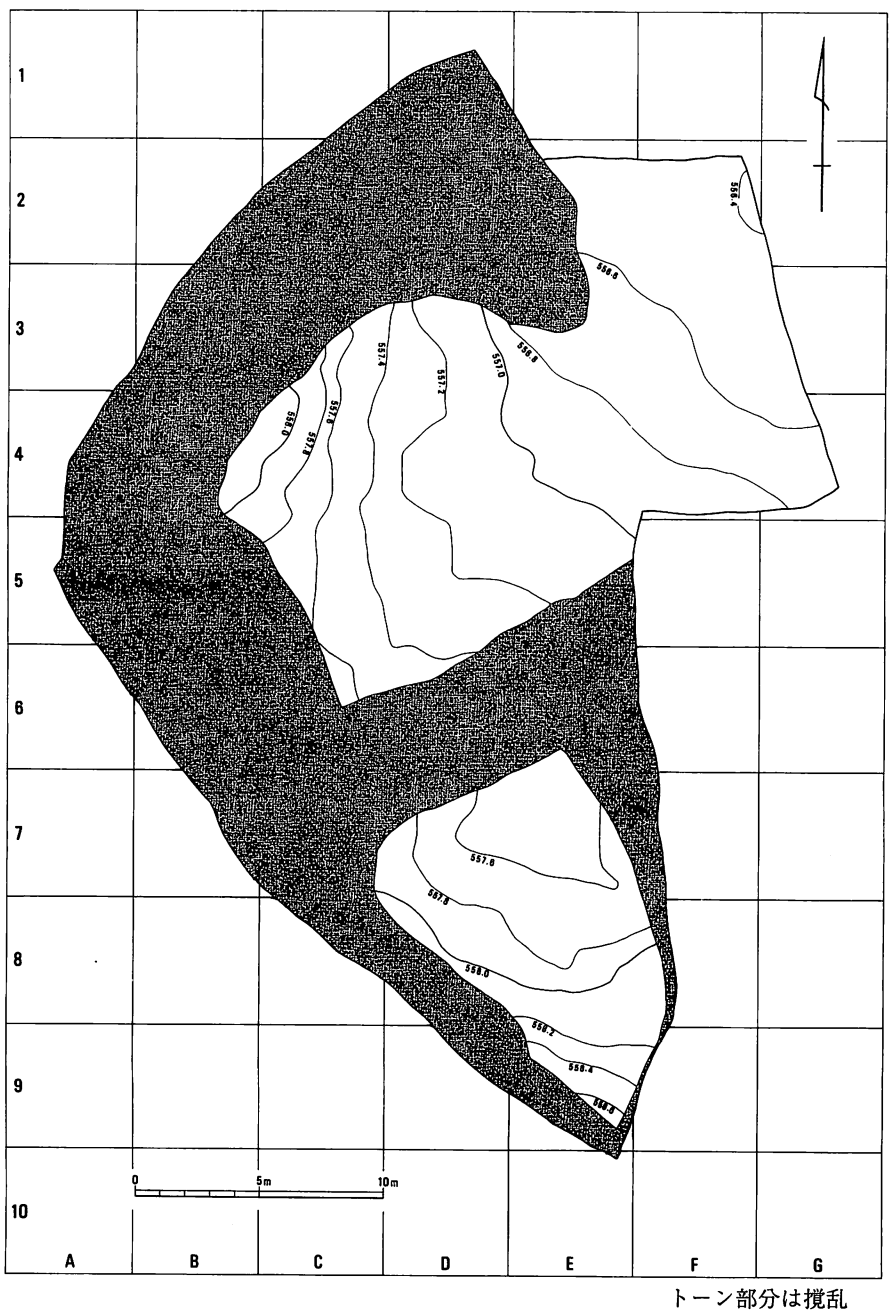
第118図　土製品　他

第Ⅳ章　西馬鞭遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

本遺跡の位置する上黒駒地区には特異な風貌で著名な黒駒の土偶を出土した中丸遺跡をはじめ、中期初頭の土坑群が確認された桂野遺跡などの縄文期に属する遺跡が多く立地する。この上黒駒地内において、国道137号（上黒駒バイパス）建設事業が計画されたため試掘調査が行われ、縄文時代の土器及び石器、古墳から平安時代の土師器や陶器類を含む包含層が確認されたのは、第Ⅰ章において述べた通りである。

これを受けて行われた発掘調査の結果、平安時代の土坑が１基確認されたものの他に遺構はなく、遺物の内容も試掘調査と同様であることが明かにされた。このため、定住を伴う生活の場とは考え難く、何らかの一時的な生活の場、もしくは祭祀的な場として利用されていた遺跡と考えることができる。



トーン部分は撹乱

第119図　西馬鞭遺跡全体図

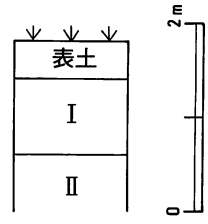
第２節　基本層序

地表はかつて緩やかな傾斜地であったが、果樹園整備のために削平し、水平の地形にしたという。現状において、前面にわたって基盤までの掘り下げはできなかったが、遺物の出土状況から層序は表土、第Ⅰ層（黒褐色土層）、第Ⅱ層（黒茶褐色土層）に分けることができ、第Ⅰ層、第Ⅱ層において遺物の出土が認められた。

第Ⅰ層・第Ⅱ層の特徴は、以下の通りである。

第Ⅰ層（粘性がある黒褐色土層）：土師器を主体に、須恵器や縄文時代の遺物が調査区全体に確認されている。

第Ⅱ層（水分を含んだ黒茶褐色土層）：調査区全体に縄文時代の遺物が分布しているが、特に南側において密集した状態で出土している。



第120図　西馬鞭遺跡基本土層

第３節　遺構と遺物

第１項　土坑

西馬鞭遺跡から発見された遺構は、土坑１基のみである。平安時代の遺物に伴ない、焼土と焼け石が認められた。焼け石は坑底面から浮いた状態にあり、土坑が火を用いた何らかの機能を果たした後に放置された可能性が強く、その後も石の焼け方等から再度使用されたと考えられる。また、第120図の基本土層が示すように、本遺跡においては粘土層の存在が認められないが、土坑内上層の覆土のみ粘土であることから、土坑が使用されなくなった後に人為的に埋められた様子が窺える。本遺構の存在は、周辺に平安時代の集落跡の存在が示唆される。

第１号土坑（第121・122図）

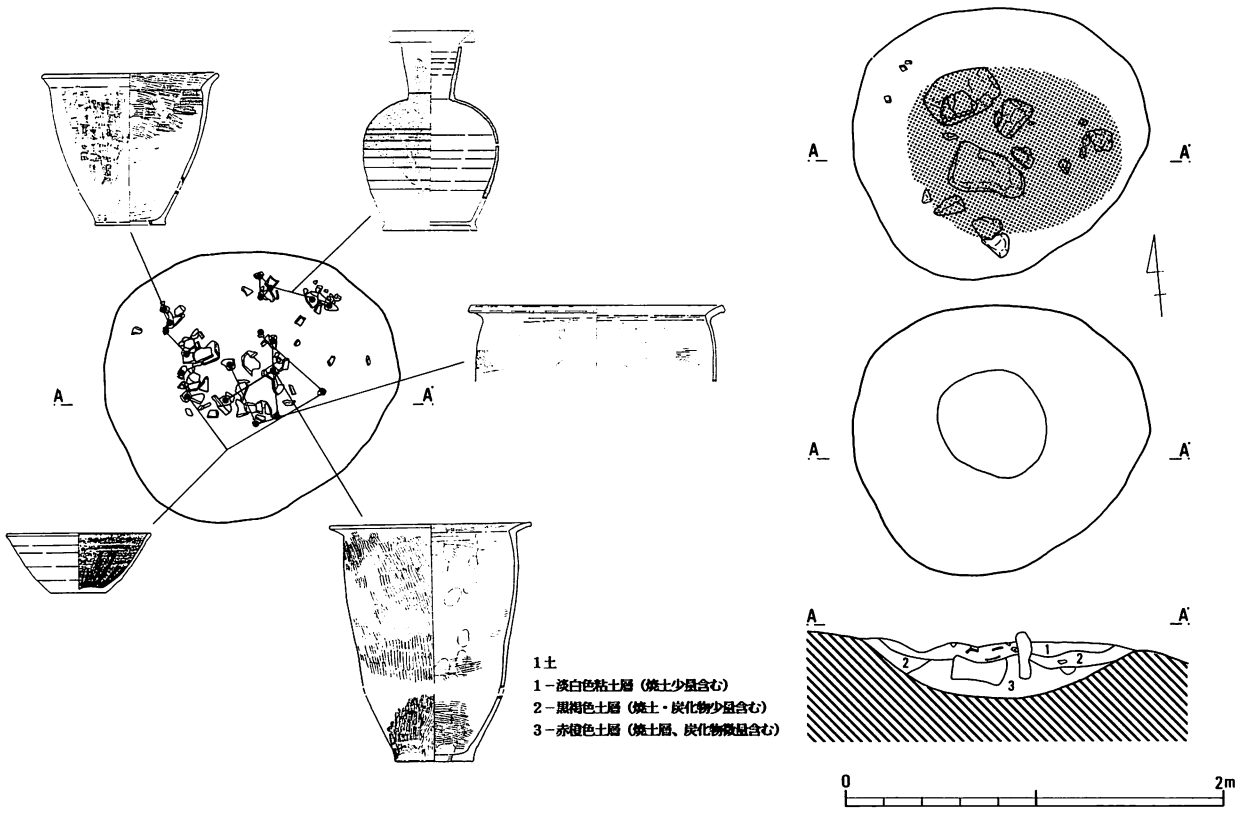
（位置）調査区の中央、Ｄ－４グリッドに位置している。

（形態・規模）形態は不整円形を呈し、長径156cm、短径146cm、深さ31cmを測る。

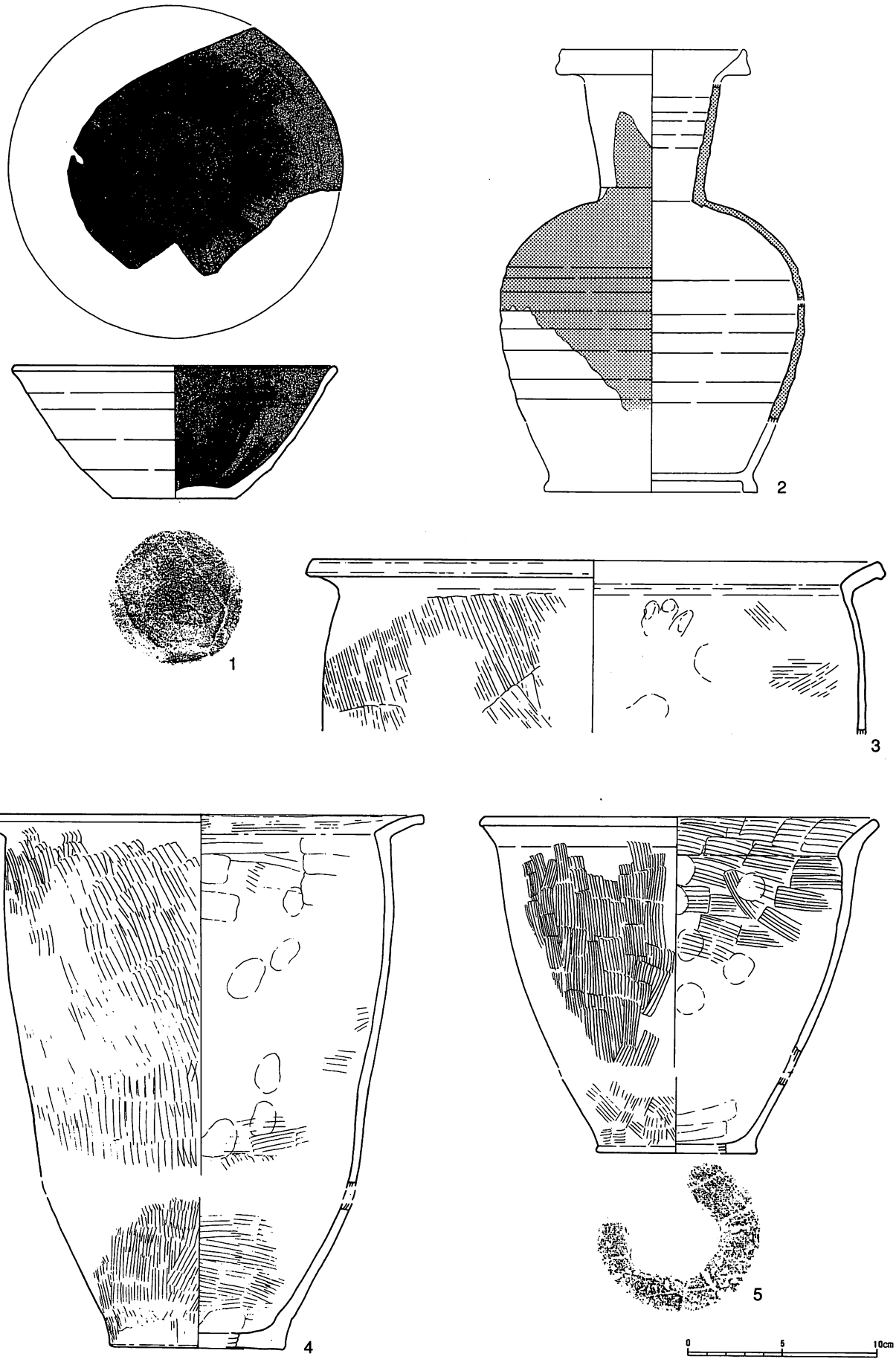
（時期）８世紀後半～９世紀前半に比定される平安時代

（出土遺物）第121図に示したように、遺物は第１層の淡白色粘土層から約５個体分がまとまりをもった状態で出土しており、粘土と共に廃棄された可能性が強い。

１は甲斐型黒色土器である。口径16.8cm、器高7.0cm、底径6.6cmを測る。色調は外面に橙色、内面には黒色処理が施されている。見込み部には放射状の暗文が施され、上部には横方向の磨き痕が見られる。時期は甲斐型編年によるⅥ期に位置付けられる。２は灰釉長頸壺である。口縁部と体部下端が一部欠損のため、口径約9.6cm、器高約17.7cmと推定される。口頸部から体部にかけて釉薬が施されている。時期は９世紀に位置付けられる。３～５は甲斐型甕である。３は口径30.2cmを測る。色調は赤褐色を呈する。内面頸部以下に指頭痕、外面頸部以下に縦方向のハケ調整が見られる。胴部から口縁部にかけて「く」の字に強く外反する。４は口径31.4cm、底径12.4cmを測る。胴部下端が一部欠損のため、器高は約28.3cmと推定される。色調は暗褐色を呈する。外面には頸



第121図　第１号土坑



第122図　第１号土坑出土遺物

部から底部にかけて縦方向の、内面にはやや不鮮明ではあるが口縁部から底部にかけて横方向のハケ調整と指頭痕が見られる。3と同様、胴部から口縁部にかけ「く」の字に強く外反し、頸部から胴部下端にかけては直線的で、胴部下端から底部にかけてやや湾曲する。5は口径21.0cm、底径8.6cmを測る。胴部下端が一部欠損のため、器高は約17.8cmと推定される。色調は暗褐色を呈し、4と同様、外面には頸部から底部にかけて縦方向の、内面は磨耗により不鮮明ではあるが、口縁部から胴部にかけて横方向のハケ調整が見られる。胴部から口縁部にかけてやや「く」の字に外反し、頸部から底部にかけてやや湾曲する。底部外面には木葉痕が見られる。3～5の時期は甲斐編年によるV期に位置付けられる。以上のように、出土遺物には年代幅があり、遺構の実年代は推定しにくい状況にある。

第2項　包含層出土遺物

包含層からは縄文時代草創期から中世にかけての遺物が、40㍑のプラバコで3箱分出土した。

〈縄文時代〉

該期における遺物の出土量は他時代のものに比較して多く、40㍑のプラバコで1.5箱となった。石器については欠損品が多く、剥片等は少ない。第123図の遺物分布状況に示したように石器の出土は、大きく分けてE・F・G－2～4、D・E・F－7～9グリッドの2地区にその集中が見られる。土器については、中期後半期のもの混在して散布しており、本遺跡の性格は生活域というより、ゴミ捨て場的な性格が強い。また、立地面から考えると本遺跡北西側の台地上には該期の遺跡が存在し、地形も窪地がかった沢状を呈していることから周辺の遺跡からの流れ込みも含まれるかもしれない。

土器（第126・127図）

1はソーメン状貼付文が見られ、前期末葉十三菩提式に位置付けられるものである。2～12は中期後半曽利Ⅳ式に位置付けられるものであり、3は両耳甕の口縁部で、太い沈線による蕨手状の文様が見られる。6・7は櫛状工具による条線が施文されている。9～12は太い沈線による区画内を縄文で充たしている。13～30は曽利V式に位置付けられるものであり、13・14は櫛歯状工具による雨垂列点文が施文されている。15～23は「ハ」の字文が施文されている。24～26・28は深鉢の口縁部で、27は両耳甕の肩部である。26～28・30は把手を持ち、26～28には縄文による施文が見られる。31は把手部分で、加曽利EⅣ式に位置付けられる。29は小型鉢の口縁部で、つまみ部に縦位の穿孔が施されている。32～42は後期初頭称名寺1式に位置付けられるものである。32～38は沈線区画内に縄文を充たした磨消縄文が主体である。43～47は後期前半堀之内1式、48は堀之内2式に位置付けられるものである。43～45は太い沈線が施文されており、同一個体のものであろう49・50は深鉢の底部で、網代痕が見られる。

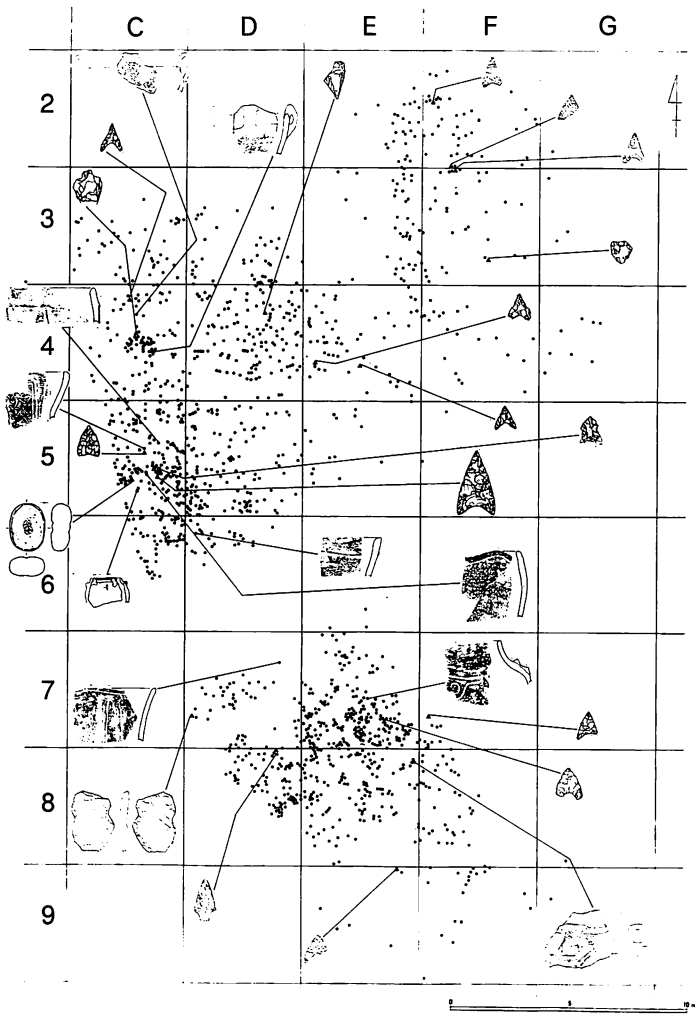
石器（第128～129図28）

特筆すべきものとしては縄文時代草創期のものが1点認められ、本資料の存在をもって町内で未だ明らかにされていなかった該期の遺跡が、周辺に存在する可能性が出てきた。また、掻器については、桂野遺跡の五領ヶ台式期に伴う掻器に、形態的に類似したものが出土している。

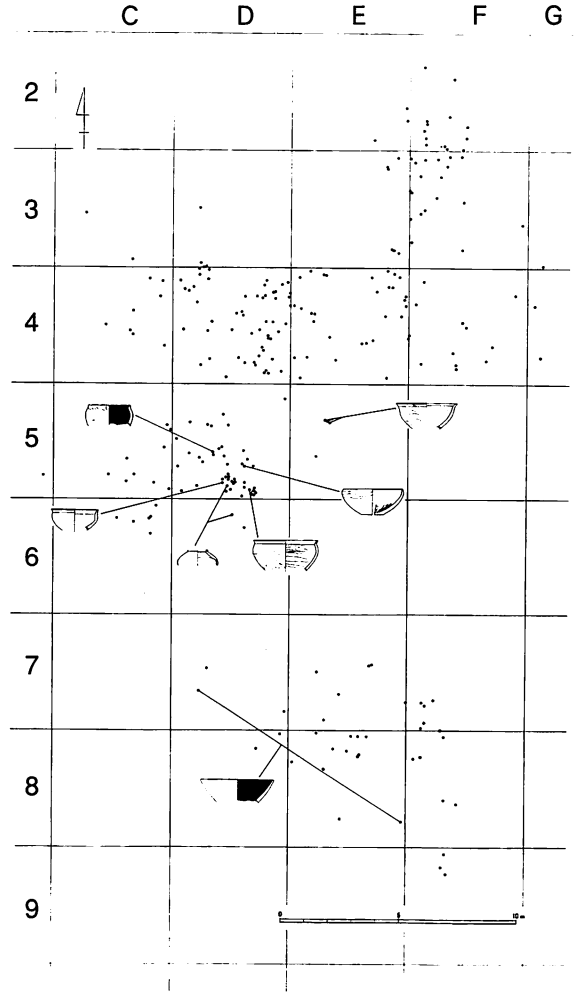
本調査で出土した石器の総数は、42点である。その内訳は、有舌尖頭器1点、石鏃20点、石匙1点、石錐2点、掻器2点、微細剥離のある剥片1点、打製石斧3点、横刃型石器4点、磨石5点、台石1点である。

第128図1は有舌尖頭器、2～16は石鏃、17は石匙、18は石錐、19は掻器、第129図20～23は打製石斧、24・25は横刃型石器、26・27は磨石、28は台石である。1の有舌尖頭器は、石材が珪質頁岩で基部と先端部が欠損している。2は発見された石鏃の中で最も大型のものであり、石材は黒曜石で完形品である。5は基部中央に着柄によるものと考えられる擦痕を有する。出土した石鏃の多くは無茎鏃であるが、15のみ有茎鏃である。完形で石材は黒曜石である。20は分銅形に近い形態をもつが、典型的な形態には相当しない。

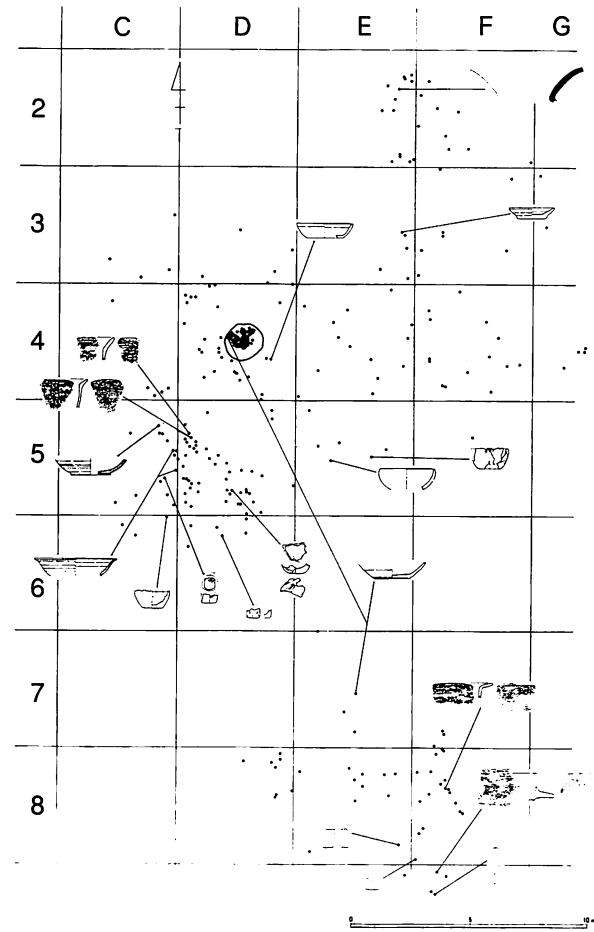
〈古墳時代〉



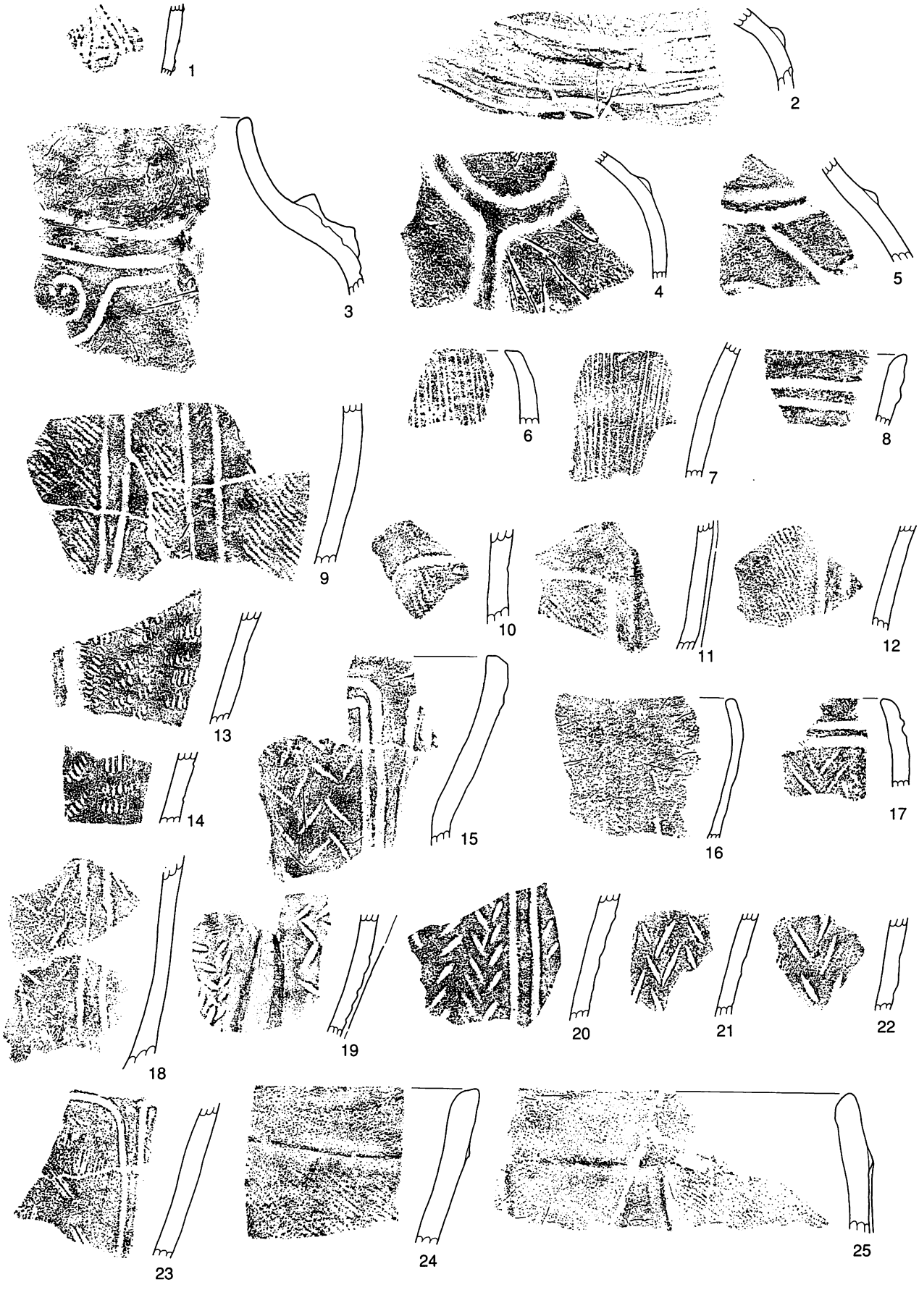
第123図　遺物分布状況（縄文）



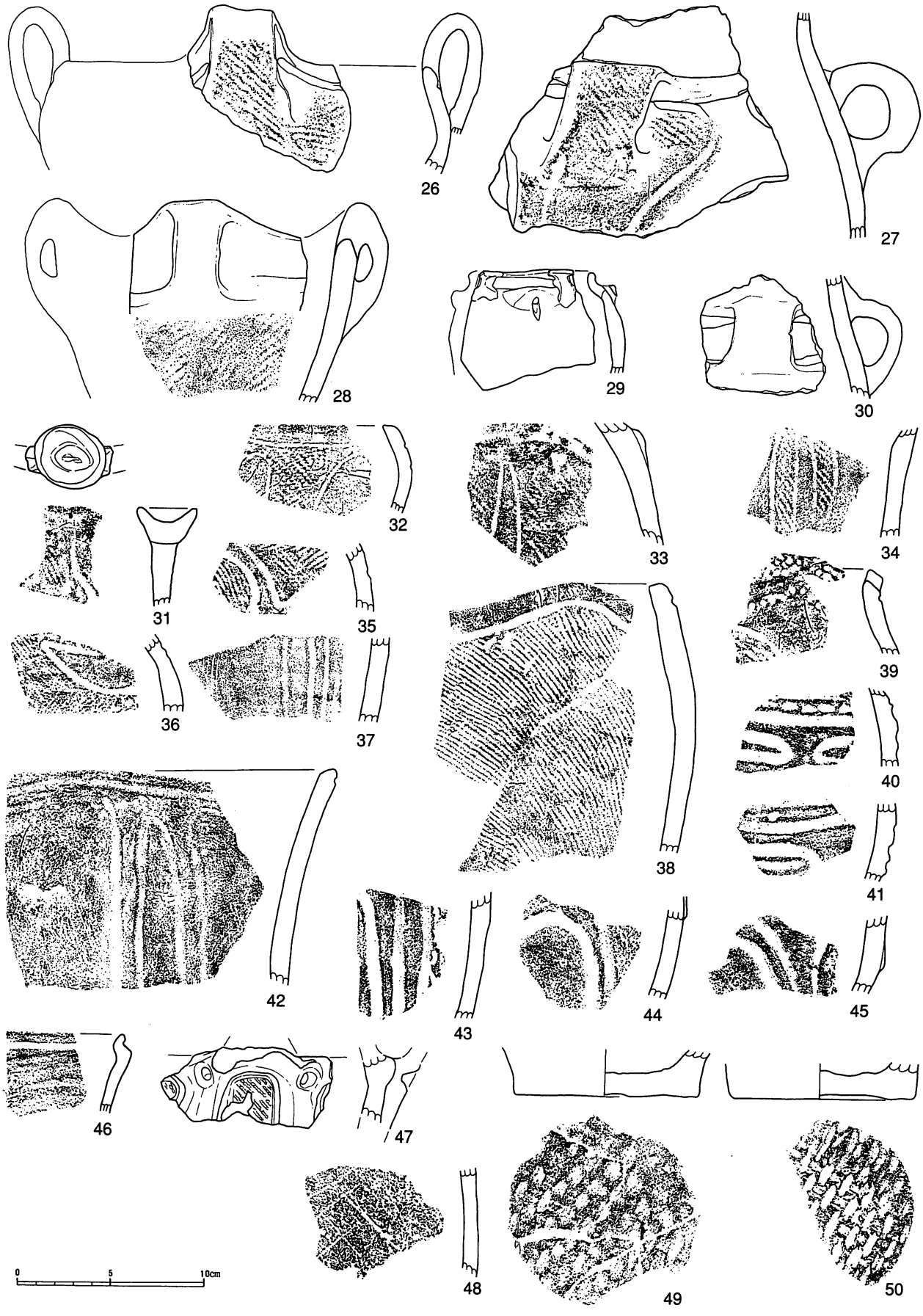
第124図　遺物分布状況（古墳）



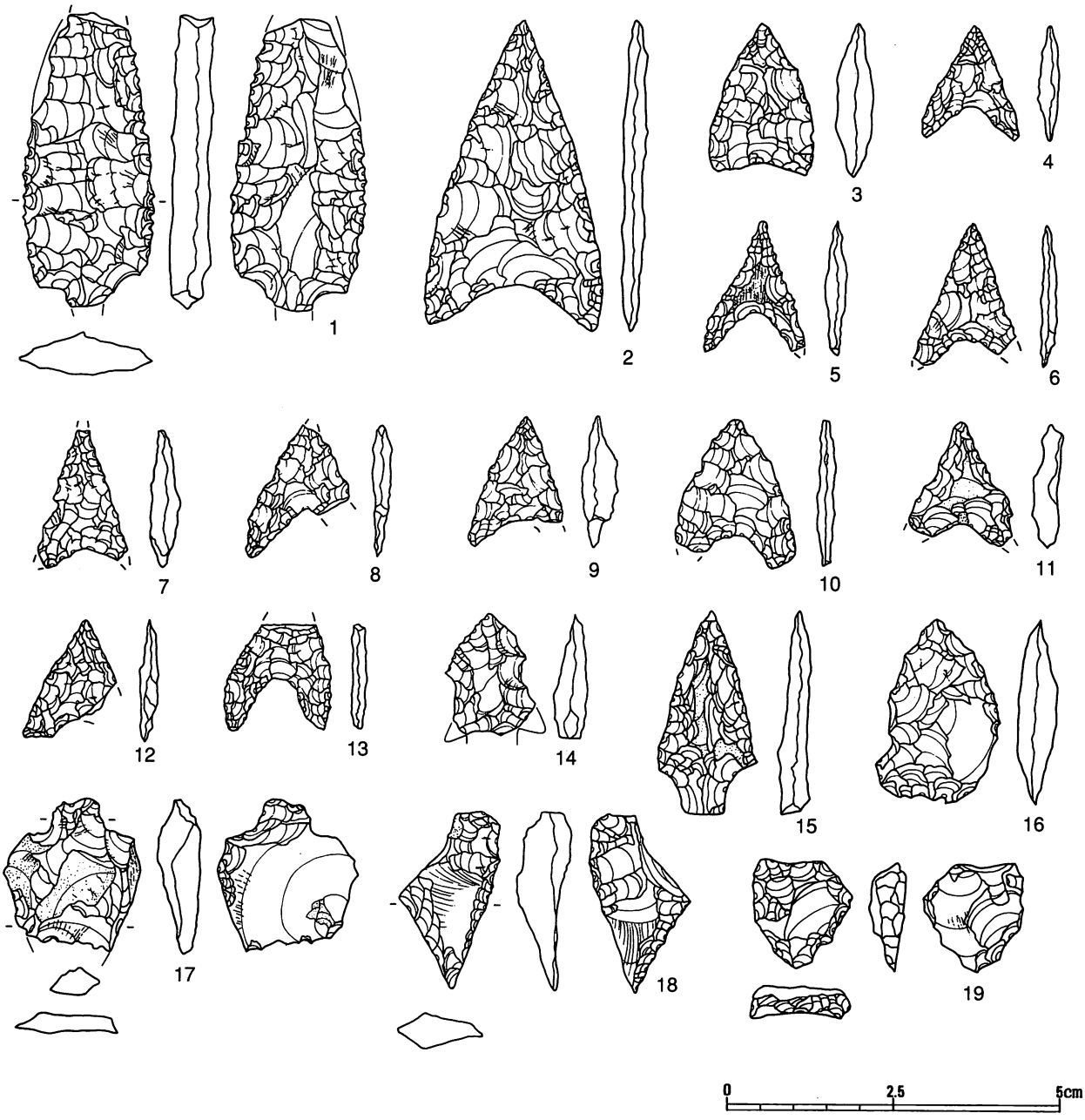
第125図　遺物分布状況（平安）



第126図　包含層出土遺物（縄文）



第127図　包含層出土遺物（縄文）



第128図　包含層出土遺物（石器）

出土量は少なく、第124図の遺物分布状況が示すように、該期においては調査区中央に遺物の集中が見られる。

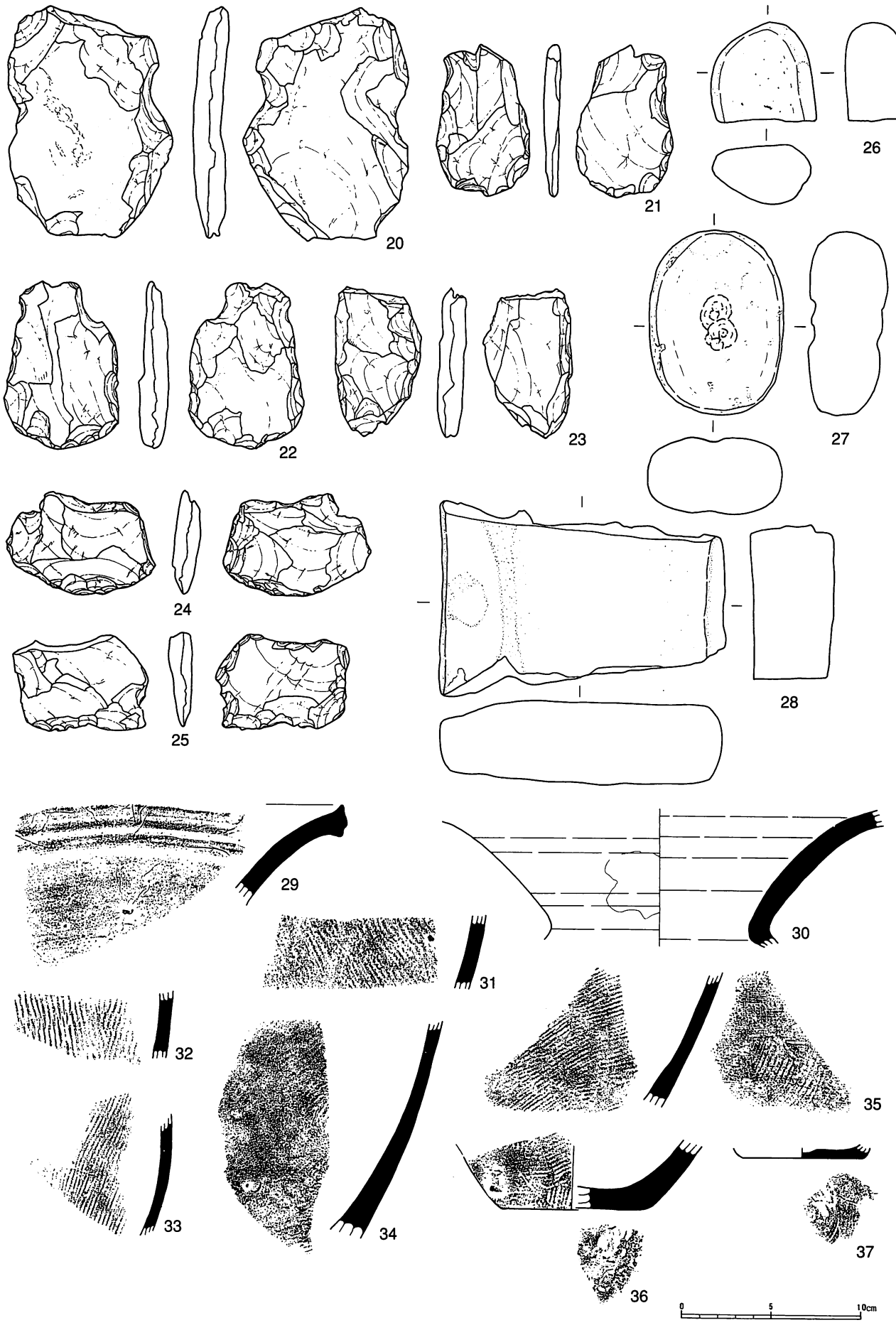
土器（第130図１～５）

１～４は坏である。１は口径12.4cm、器高5.6cm、底径4.6cmを測る。外面上部には横方向にヘラ削り、内面底部には暗文が見られる。２は口径13.8cmを測る。外面頸部以下にヘラ磨き、内面頸部にはヘラ削り、体部には指ナデの痕が見られる。頸部から口縁部にかけて「く」の字に外反し、体部は半球形を呈する。３は口径13.0cmを測る。内面頸部以下にハケ調整が見られる。４は口径9.0cmを測る。内外面ともに口縁部に指頭痕が見られ、内面体部には、縦横のナデ調整後に黒色処理が施されている。５は坩である。内面頸部に指頭痕が見られる。

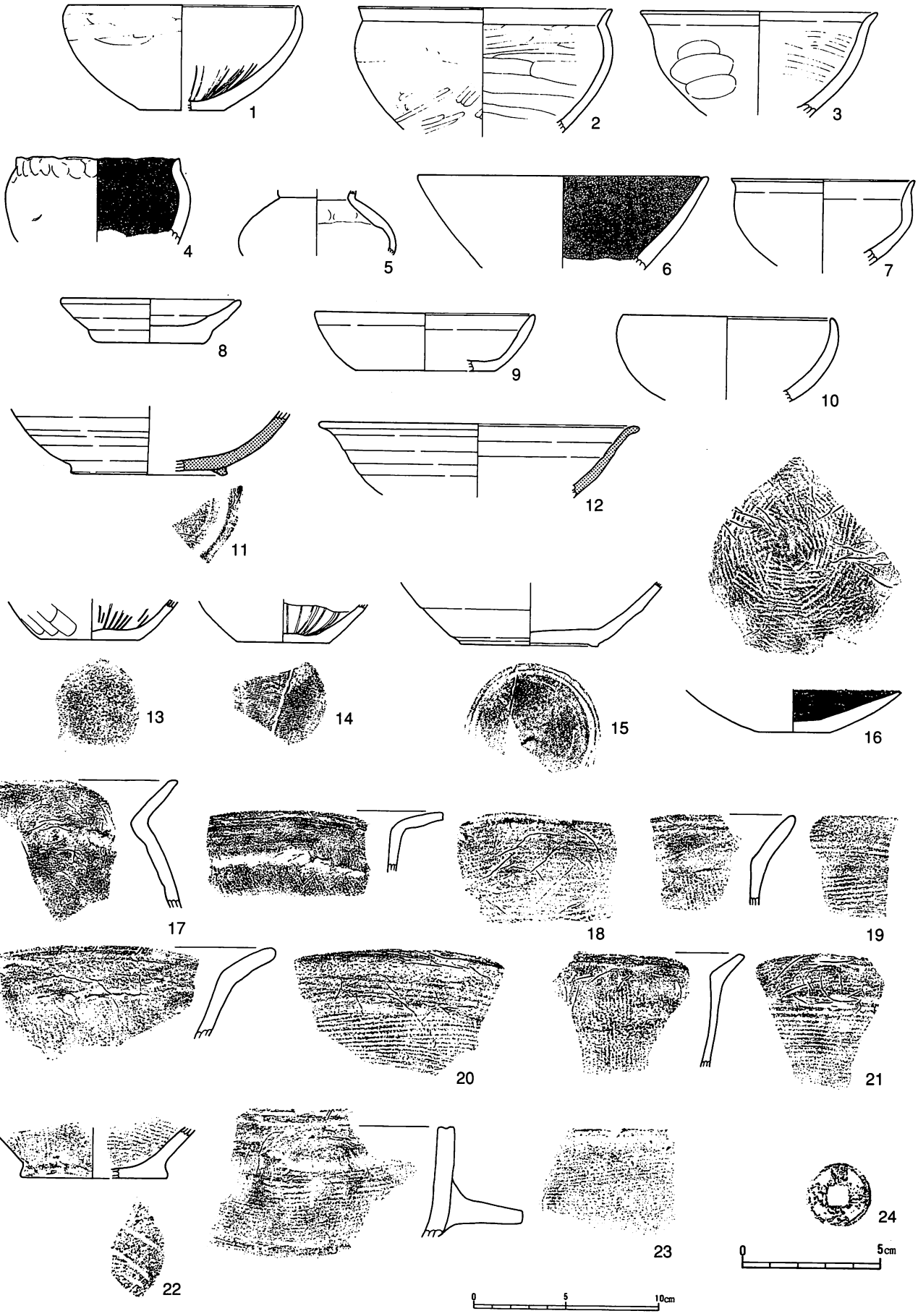
〈平安時代〉

第125図の遺物分布状況が示すように、第１号土坑が発見されたＤ－４グリッドから南側に向かって遺物の集中が見られる。

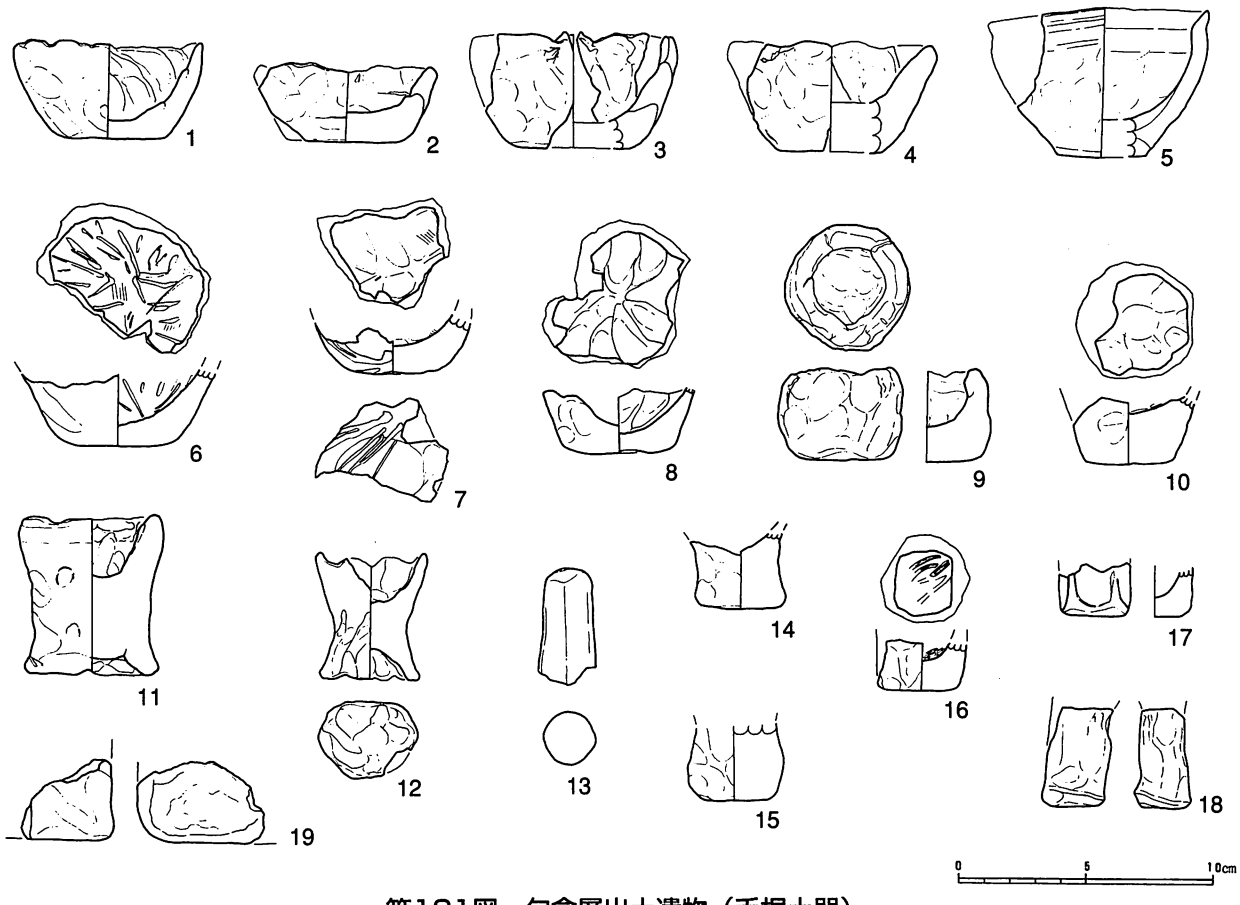
須恵器（第129図29～37）



第129図　包含層出土遺物（石器20～28・須恵器29～37）



第130図　包含層出土遺物（古墳・平安）



第131図　包含層出土遺物（手捏土器）

29は大甕の口縁部である。口縁端部が強く外反する。30は広口壺の口頸部である。基部から口縁部に向かい強く外反する。31～35は甕の胴部であろう。いずれも外面には平行線叩き目が見られる。6については、内面にも叩き目が見られる。36は甕の底部であろう。外面には叩き目が見られる。37は坏の底部であろう。底部外面には回転糸切り痕が見られる。

土器（第130図6～23）

6～10は坏である。6は口径15.7cmを測る。内面には黒色処理が施されている。7は口径10.0cmを測る。底部に向かって内湾する。8は口径9.7cm、器高2.4cm、底径5.9cmを測る。9は口径12.0cm、器高3.1cm、底径約7.6cmを測る。10は口径11.4cmを測る。体部が半球形を呈する。11・12は灰釉陶器である。11は底径約8.6cm、12は口径17.5cmを測る。13・14は坏の底部であろう。ともに内面に暗文が見られる。15は高台付坏である。底径7.5cmを測る。底部外面には、回転糸切り痕が見られる。16は甕の底部である。内面には櫛状工具による調整が行われ、黒色処理が施されている。17～21は甕の口縁部である。17は頸部から口縁部にかけて「く」の字に外反する。19～21は内面に縦方向、外面には横方向のハケ調整が見られる。22・23は甕の底部である。ともに外面に縦方向、内面には横方向のハケ調整が見られる。底部外面には木葉痕が見られる。24は羽釜の口縁部である。内外面ともに横方向のハケ調整が見られる。その他、G－3グリッドから銭が1点出土しており、これは熙寧元寶（第130図25）で初鋳1068年である。

手捏土器（第131図）

摩滅しているものが多く、器形がやや明確なものについて図化した。一般に手捏土器は、祭祀的要素をもつものと考えられており、本遺跡が祭祀的な目的で使用されていた可能性が窺える。県内で手捏土器がまとまって出土しているのは、一宮町大原遺跡、石和町松本塚ノ越遺跡などの例しかなく、本資料は今後の研究の一助となるものであろう。

1～10は坏を模したものであろう。1は口径7.4cm、器高3.7cm、底径3.8cmを測る。色調は赤褐色を呈する。

2は口径約7.0cm、器高2.8cm、底径約4.4cmを測る。色調は内面が橙色、外面は黒く焼け焦げている。3は口径約8.0cm、器高4.4cm、底径4.5cmを測る。色調は橙色を呈する。4は口径約7.2cm、器高8.2cm、底径4.2cmを測る。色調は橙色を呈する。5は口径約8.2cm、器高5.9cm、底径3.5cmを測る。色調はにぶい赤褐色を呈する。1～4に比べ、深めの形態を呈する。6は底径3.8cmを測る。色調はにぶい赤褐色を呈する。内面には掻き痕が見られる。7は底径3.6cmを測る。丸底の形態で色調は橙色を呈する。8は底径4.4cmを測る。内面は指頭により放射状に撫でた痕が見られる。色調は内面が黒色、外面は橙色を呈する。9は口径4.3cm、器高3.6cm、底径3.6cmを測る。色調はにぶい赤褐色を呈する。10は底径3.5cmを測る。色調は赤褐色を呈する。11・12は臼を模したものであろう。11は口径6.5cm、器高6.0cm、底径4.8cmを測る。色調は明赤褐色を呈する。12は口径4.4cm、器高4.4cm、底径4.0cmを測る。色調は赤褐色を呈する。13は杵を模したもので、11・12はセットで使用された可能性が強い。色調は明赤褐色を呈する。14～17は壺を模したものであろう。14は3.2cmを測る。色調はにぶい橙色を呈する。15は底径2.7cmを測る。色調は明赤褐色を呈する。16は底径3.2cmを測る。色調は明赤褐色を呈する。17は底径2.3cmを測る。色調は橙色を呈する。18・19はいずれも器形は不明である。

第4表　西馬鞭遺跡石器観察表　　（　　）は現存値

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	形態	備考
第128図1	2トレ	有舌尖頭器	(4.40)	2.00	0.55	6.22	珪質頁岩		先端部・基部
〃 2	C－5G	石鏃	4.58	2.71	0.39	3.65	黒曜石	無茎凹基	
〃 3	〃	〃	2.19	1.60	0.51	1.49	〃	無茎平基	
〃 4	〃	〃	1.61	1.49	0.30	0.40	〃	無茎凹基	
〃 5	〃	〃	(2.01)	(1.51)	0.30	0.44	〃	〃	基部欠損
〃 6	F－2G	〃	(2.15)	(1.52)	0.21	0.46	〃	〃	〃
〃 7	〃	〃	(2.09)	1.39	0.49	0.96	水晶		先端部・基部欠損
〃 8	E－9G	〃	(2.08)	(1.61)	0.29	0.48	黒曜石	〃	〃
〃 9	E－7G	〃	(2.01)	(1.51)	0.51	0.83	〃	〃	基部欠損
〃 10	〃	〃	(2.20)	(1.79)	0.32	0.93	〃	〃	〃
〃 11	E－4G	〃	1.82	1.55	0.35	0.78	〃	〃	
〃 12	F－2G	〃	(1.79)	(1.39)	0.28	0.40	〃	〃	基部欠損
〃 13	2トレ	〃	(1.55)	1.62	0.21	0.45	〃		先端部欠損
〃 14	E－4G	〃	1.83	1.29	0.45	0.94	〃	無茎平基	
〃 15	D－7G	〃	3.05	1.42	0.51	1.60	〃	有茎凸基	
〃 16	2トレ	〃	2.71	1.91	0.57	2.70	チャート	無茎平基	
〃 17	C－4G	石匙	2.35	2.09	0.42	2.11	黒曜石	横型	
〃 18	D－4G	石錐	3.35	1.39	0.40	1.20	〃		
〃 19	F－3G	掻器	1.62	1.50	0.55	1.26	〃		
第129図20	D－7G	打製石斧	12.68	9.19	1.56	230.00	頁岩		
〃 21	〃	〃	8.29	5.22	9.81	45.93	〃	短冊型	
〃 22	D－5G	〃	(9.05)	5.82	1.40	98.19	〃	〃	
〃 23		〃	(8.21)	4.83	1.50	82.10	〃	〃	
〃 24	C－4G	横刃型石器	5.59	(8.29)	1.08	62.33	〃	横型	
〃 25	E－8G	〃	5.12	7.19	1.19	47.71	〃	〃	
〃 26	C－5G	磨石	(5.39)	5.81	3.21	116.00	凝灰岩		半分欠損
〃 27	C－5G	〃	7.5	10.11	4.01	475.00	安山岩		表裏に凹み2
〃 28	3トレ	台石	8.4	17.01	4.58	1021.00	細粒砂岩		

第Ⅴ章　おわりに

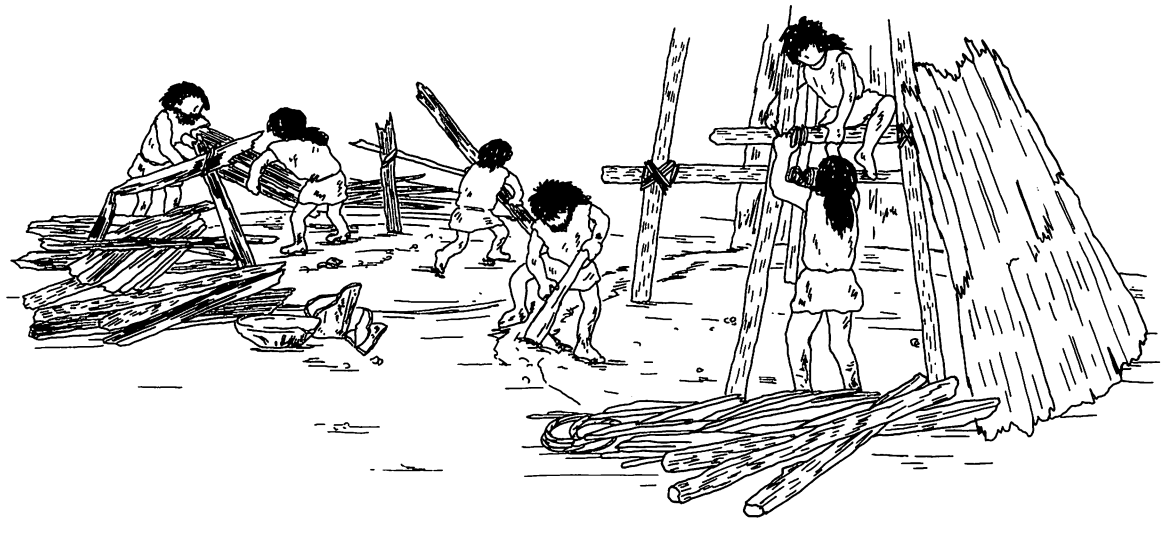
桂野遺跡は三年にわたる調査の結果、台地の緩斜面に形成された縄文時代前期末葉から中期初頭段階を中心とした集落が発見されました。全国的に該期に属する遺跡はあまり多くなく、当時の生活環境の様子や土器の伴出関係から見た編年的な位置付けについて知る上で、大変興味深い資料が数多く発見されました。住居跡では、拡張してより大きな家に造り直したものがあり、この場合の炉は以前のものを完全に除去することなく、部分的に残して重複させたものが多く認められました。また定住場所の周辺に獲物が居なくなり、一度移動するために廃棄された住居跡に、また一定期間後に再びほぼ同じ所に家を建てた事がわかるものがありました。

このような生活の跡から桂野遺跡における当時の生活は、定住はするものの中期中葉以降にみられるような長期定住型の初期農耕文化は形成されず、付近に獲物や採集できるものが少なくなると別の場所に移動し、また一定期間経過すると元の場所に戻ってくるといった短期定住型の生活を行っていたものと考えられます。同じ場所に作るといった現象としては、家内施設の埋甕にも見ることができ、第６号住居跡の東側に存在するものは、三回作り返されていることがわかります。他の遺跡でもこういった状況は稀に見られますが、類例は少なく面白い現象です。遺物では、在地系と外来系土器の伴出事例が多く認められましたが、外来系としたものには関西系の大歳山式や東海系の北裏ＣＩ式といったもののほか、関東や北陸方面の影響を受けたものもあり、当時の幅広い交流関係の一端を示すものです。石器では、楕円形の磨石の稜部を主な磨り面とするものや、特徴的な形態を示す掻器が該期に付属する特徴的な石器群として指摘することができ、興味深い資料と言えます。

西馬鞭遺跡は、台地上に形成された遺跡と異なり、谷部の低地部に営まれた所で、縄文・古墳・平安時代の包含層と平安時代の祭祀的な色彩の強い遺構が発見されました。特に平安時代では、一般的な生活の跡は発見されず、穴を掘って火を焚き、そこで祭祀的な行為に用いたと考えられる土器類と共に白色粘土で埋め戻した土坑と、その周辺から臼などを模した小型の手づくね土器が多量に出土しました。手づくね土器は県内ではあまりまとまった出土は無く、その特殊性がとても興味深いもので、祭祀の方法や周辺遺跡との関連性などが今後の研究課題です。

両遺跡とも、道路幅といった部分的な調査であるため、その全体像については不明な点も数多く認められます。また周辺で実施されている調査からも、調査区周辺にはまだ貴重な我々先祖の足跡が多数残されていることは明らかで、県内でも有数の拠点的な縄文集落遺跡であることは間違いのないことであり、今後の開発行為に際しては綿密な調査が必要であることを触れ、この場を借りて注意を促したいと思います。

末筆ではありますが、寒暖差の激しい季節を通して直接発掘調査にご協力いただいた方々に、心からお礼を申し上げると共に、関係諸機関の方々には多大なるご配慮とご協力を賜ったことを厚くお礼申し上げる次第であります。



第5表　桂野遺跡土坑一覧表（第51～67図）

長径・短径・深さ内の（　）は現存値、備考内（　）は一覧表の遺物番号

土坑番号	位置	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	形態	時期	備考
1	Y－18G	52	34	42	楕円形	新	
2	Y－19G	138	105	65	楕円形	狢	
3	Y－20G	(100)	(52)	48	不整形	狢	
4	X－21G	(132)	(50)	37	不整形	狢	
5	X－21G	174	(110)	42	楕円形	五Ⅱ	
6	Y－21G	124	110	62	円形	五Ⅱ	
7	Y－20G	132	(126)	56	不整形	－	
8	Y－20G	42	34	39	円形	－	
9	Y－19・20G	94	－	57	不整形	－	
10	ア－19G	28	28	46	隅丸方形	－	
11	ウ－18G	44	38	32	不整形	－	
12	ア－19G	52	50	28	円形	－	
13	ア－20G	32	26	30	楕円形	－	
14	イ－19G	44	38	27	楕円形	－	
15	イ－20G	102	90	19	不整形	五	
16	イ・ウ－21G	52	48	27	不整形	－	
17	イ・ウ－21G	60	40	25	不整形	－	
18	ア－21G	135	130	31	円形	五Ⅱ	
19	ア－22G	42	32	26	楕円形	－	
20	ア－21G	42	30	31	楕円形	－	
21	Y－18・19G	(56)	46	47	隅丸方形	狢	
22	ア・イ－20G	94	86	16	不整形	－	
23	イ－21G	124	88	43	楕円形	十	
24	イ－20G	(72)	(54)	13	不整形	－	
25	Y－19・20G	112	94	66	不整形	－	
26	X－21G	67	48	28	不整形	－	
27	Y－19・20G Z－19・20G	82	(52)	64	不整形	－	
28	ア－22G	42	32	21	楕円形	－	
29	ア－22G	46	44	20	円形	五Ⅰ	
30	Z－23G	155	122	61	不整形	五Ⅱ	
31	Z－23G	52	38	67	不整形	－	
32	Z－23G	46	(36)	21	半円形	－	
33	Z－23G	108	70	19	楕円形	－	
34	Y－19G	38	22	30	楕円形	－	
35	Y－19G	64	46	17	楕円形	－	
36	Y－19G	36	32	11	円形	－	
37	R－11G	72	(30)	34	不整形	五Ⅱ	
38	J－13G	135	120	25	楕円形	－	
39	J－12G	(115)	72	16	不整形	五	
40	K－11G	116	100	33	楕円形	五	
41	L－12G	47	42	31	円形	－	尖刃掻器1点（No.57）
42	L－12G	116	65	21	不整形	－	
43	K－13G	197	134	52	不整形	五	
44	I・J－12G	239	208	43	隅丸長方形	五	
45	J－12G	82	63	14	不整形	－	
46	K－13G	65	55	21	楕円形	－	
47	K－13G	89	68	24	楕円形	－	
48	K－13G	38	37	17	円形	五Ⅱ	
49	K－13G	113	89	34	楕円形	五Ⅱ	石鏃1点（No.62）
50	S－11G	76	60	12	楕円形	五	
51	R・S－11G	122	120	26	円形	十	
52	S－11G	116	96	43	楕円形	五	
53	S－11G	134	(130)	50	不整形	五	磨石類1点（No.48）
54	S－11G	173	109	32	不整形	－	
55	S・T－11G	122	68	18	楕円形	－	
56	T－12G	114	80	26	楕円形	－	
57	R－13G	125	113	70	不整形	十	板状土偶（No.1）、関西系土器を包含する、焼土・礫多数
58	Q・R－11G	135	102	44	不整形	五Ⅱ	石鏃1点（No.63）・掻器1点（No.59）
59	R－12G	(40)	32	29	不整形	－	
60	S－12G	78	50	40	不整形	五	
61	R・S－12G	170	(65)	36	不整形	五	
62	R－11G	113	112	33	円形	五Ⅰ	
63	R－12G	104	86	49	不整形	五Ⅰ	
64	イ－19G	76	58	14	楕円形	－	
65	Q－11G	－	－	－	楕円形	五	
66	Q－12G	163	138	44	不整形	五Ⅰ	尖刃掻器1点（No.60）
67	R－13G	128	92	36	瓢箪形	－	
68	Q－11G	123	115	44	不整形	五Ⅰ	墓か？60cm大の礫が重なって出土
69	Q・R－10G	130	(110)	46	円形	五Ⅱ	土偶2点（No.46・47）土器の底部
70	Q－10G	172	(146)	91	不整形	五	石皿・台石1点（No.7）　南側テラス上から石皿（台石）の欠損品
71	Q－10G	122	112	73	不整形	十	石鏃1点（No.64）　土器の胴下半部が50cm大の礫の上から出土
72	R－12G	48	35	14	不整形	五	
73	Q－11G	64	51	40	楕円形	五Ⅱ	
74	P－9・10G	58	49	39	楕円形	五	
75	Q－12G	117	114	28	隅丸方形	五Ⅱ	大型掘器1点（No.6）
76	P－10G	60	46	62	不整形	－	
77	P－9・10G	70	68	36	円形	－	
78	P－12G	46	34	37	楕円形	十・五	尖刃掻器1点（No.61）
79	P－11・12G	185	(172)	70	楕円形	十・五	
80	O－10・11G	142	123	55	楕円形	十	石鏃1点（No.65）　底部穿孔の深鉢の胴下半部が正位で出土、墓か？
81	P－11G	－	－	－	隅丸方形	五Ⅱ	
82	P－11G	95	86	15	瓢箪形	－	
83	R－12・13G S－12・13G	138	(98)	33	不整形	－	
84	O－11G	50	48	15	円形	五Ⅱ	
85	P－10G	44	42	8	円形	－	大形石匙1点（No.1）
86	P－10G	100	(70)	16	不整形	－	
87	P－10G	82	64	14	楕円形	－	
88	Q－10G	34	30	15	円形	－	
89	P－10G	40	30	14	楕円形	－	
90	P－11G	54	34	18	不整形	－	
91	P－11G	32	22	9	楕円形	－	
92	P－10G	36	32	－	円形	－	
93	P－10G	146	118	15	不整形	－	
94	P－11G	56	52	20	円形	－	
95	P－11G	50	48	10	円形	－	
96	Q－10G	98	84	－	不整形	五	
97	O－11G	70	52	39	楕円形	－	

土坑番号	位置	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	形態	時期	備考
98	O－10G	127	124	46	円形	五Ⅰ	尖刃掻器1点（No.62）・土製円盤1点（No.23）
99	O－11G	135	112	62	不整形	曽Ⅱ	土製円盤1点（No.26）　小型深鉢形土器が1個体出土、炭化物多量、墓か？
100	O－11G	147	130	93	隅丸長方形	－	石鏃1点（No.66）・打製石斧1点（No.16）
101	R－13G	115	106	31	瓢箪形	五	
102	O－11G	64	52	33	楕円形	－	
103	Q－13G	176	(100)	33	楕円形	五	
104	N－11G	82	70	16	楕円形	－	
105	N－11G	130	－	83	－	五Ⅰ	尖刃掻器1点（No.63）・石鏃1点（No.8）・磨石類1点（No.49）
106	P－11G	92	91	38	円形	五Ⅱ	楔形石器1点（その他No.2）・磨石類1点（No.50）
107	N－12・13G	128	97	28	楕円形	五	
108	N－13G	89	85	26	不整形	－	
109	N－14G	76	56	19	楕円形	五	
110	M－13G	65	62	17	円形	五	
111	N－11G	132	－	69	－	五Ⅱ	石鏃1点（No.67）・尖刃掻器1点（No.64）・、掻器1点（No.65）
112	M－14G	74	68	17	円形	－	
113	N－14G	130	120	48	楕円形	五	
114	M－14G	212	(150)	33	不整形	五	尖刃掻器1点（No.66）
115	M－14G	130	86	27	不整形	－	
116	M－14G	110	84	34	不整形	五	炭化材出土
117	M－14G	(92)	(70)	27	円形	－	
118	M－14G	94	80	29	円形	－	
119	M－14G	98	92	44	不整形	－	
120	O－11G	176	(110)	20	不整形	－	土偶1点（No.26）
121	P－13G	115	98	69	楕円形	五Ⅱ	
122	L－14G	115	107	42	楕円形	十・五Ⅰ	石鏃2点（No.68・69）・掻器2点（No.67・68）・石鏃1点（No.9）・磨石類1点（No.51）
123	L－14G	67	(45)	44	隅丸方形	五	石鏃1点（No.70）・磨石類2点（No.52・53）
124	L・M－14G	386	224	－	楕円形	五	
125	M－14G	138	124	60	楕円形	－	
126	O－11G	(55)	54	25	不整形	－	
127	N－15G	54	52	40	円形	－	
128	O－11G	(56)	44	27	不整形	五	
129	N－15G	44	40	20	楕円形	五Ⅱ	打製石斧1点（No.17）・磨石類1点（No.54）
130	N－14G	96	70	53	楕円形	－	
131	M・N－14G	200	66	37	不整楕円形	－	
132	Q－12G	46	(28)	21	円形	－	
133	S－12G	90	(46)	27	円形	－	
134	S－12・13G	82	72	22	楕円形	－	
135	P－16G	70	68	25	円形	五	
136	S－16G	120	96	29	隅丸長方形	五	
137	Q・R－16G	102	90	36	楕円形	五	
138	O－14G	180	(77)	65	不整形	五	
139	O・P－15G	120	98	31	不整形	－	
140	P－14G	110	86	52	楕円形	五	石核1点（No.2）
141	P－15G	139	114	36	楕円形	五	
142	Q－14G	132	120	57	不整円形	五	
143	O－14G	106	75	35	楕円形	五	
144	O－14G	143	(125)	39	隅丸方形	五	
145	S・T－16G	184	147	95	楕円形	五Ⅱ	石鏃3点（No.71～73）・東海系北裏CⅠ式土器出土
146	O－13G	(118)	(79)	31	楕円形	五Ⅰ	集石、下層（日の字状の配石）
147	O－13G	132	124	－	楕円形	十	
148	O－16G	89	82	24	円形	五Ⅰ	尖刃掻器1点（No.69）・掻器2点（No.70・71）
149	N－14G	(134)	(90)	14	楕円形	五Ⅰ	磨石類1点（No.55）
150	N－14G	120	119	49	円形	－	
151	N－14G	87	85	54	隅丸方形	五	
152	N－14G	80	(78)	63	－	五Ⅰ	尖刃掻器1点（No.72）
153	N－14G	113	94	101	楕円形	－	
154	N－13G	35	34	69	円形	－	
155	N－13G	57	42	59	楕円形	－	
156	M－13G	45	41	338	楕円形	－	
157	O－13G	98	(61)	44	楕円形	－	
158	O－14G	77	75	32	隅丸方形	－	
159	Q－17G	133	104	53	不整形	五	石鏃1点（No.74）
160	U－13G	114	65	84	楕円形	－	
161	U－13G	92	(52)	47	楕円形	－	坑底に小ピット1、隠し穴
162	T－15G	99 70	82 60	38 40	不整形	－	集石・炭化物多量
163	T－14G	85	70	23	楕円形	－	
164	T・V－14G	97	(58)	24	楕円形	五・狢	
165	T・U－14・15G	128	108	34	楕円形	五Ⅱ	
166	T－14G	52	52	16	隅丸方形	－	
167	Q－17G	97	88	60	楕円形	五	
168	U・V－12・13G	82	60	25	楕円形	五	
169	V－13G	130	76 32	53	不整形	五	
170	S－16・17G	117	(96)	26	楕円形	五Ⅱ	尖刃掻器1点（No.73）
171	S－16G	58	47	36	楕円形	－	
172	S－17G	47	47	41	円形	－	
173	T－16G	160	110	63	楕円形	五Ⅰ	風倒木跡
174	T－16G	310	195	56 北側　31	不整形	五	尖刃掻器1点（No.74）・打製石斧1点（No.18）風倒木跡
175	T－16G	(157)	(135)	70	不整形	五	
176	Q・R－17G	84	80	40	円形	五	
177	N－13G	－	－	－	－	－	
173	N－13G	60	57	24	円形	－	
179	N－13G	117	108	27	楕円形	－	
180	N－13G	100	(70)	23	楕円形	－	
181	N－13G	47	45	30	円形	－	
182	T－15G	64	50	40	楕円形	五	
183	Q－17G	45	34	42	不整形	五Ⅰ	
184	N－12G	138	113	46	楕円形	－	集石・炭化物多量
185	N・O－12G	110	98	30	楕円形	十	集石・炭化物多量
186	T・U－13G	30	28	17	円形	－	
187	U－13G	104	108	32	円形	－	
188	U－13G	94	90	11	円形	－	
189	T－16G	112	108	74	隅丸長方形	五	尖刃掻器1点（No.75）　風倒木跡
190	O－12G	80	(48)	31	楕円形	五	
191	Q－16G	36	30	45	楕円形	－	
192	T－16G	287	154	61	不整形	五・曽	土偶1点（No.27）風倒木跡
193	M－12・13G	150	95	25	楕円形	－	打製石斧1点（No.19）
194	O－12G	85	(55)	105	楕円形	五	
195	N－12G	128	124	43	円形	五	
196	O－11・12G	125	117	50	楕円形	五Ⅰ	集石・炭化物多量
197	P－13G	96	92	34	円形	五	
198	P－12G	87	65	48	楕円形	五	

土坑番号	位置	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	形態	時期	備　考
199	P－13G	70	50	33	楕円形	－	
200	M－14G	78	72	25	隅丸方形	－	
201	M－14G	147	(90)	30	楕円形	－	
202	L－14・15G	128	(90)	24	楕円形	－	
203	K・L－14G	105	(61)	36	円形	－	
204	L－14・15G	110	(63)	37	不整形	－	
205	L－14G	98	72	38	瓢箪形	－	
206	Q－14G	104	100	28	円形	－	
207	Q・R－14G	108	87	31 (16)	楕円形	－	
208	P－13G	65	56	42	楕円形	五	
209	P－13G	109	100	79	楕円形	五Ⅱ	
210	P－13G	74	74	42	円形	五	
211	P－13G	(80)	70	38	楕円形	－	
212	P－13G	90	80	39	楕円形	五	
213	P・Q－13G	133	123	43	楕円形	五	尖刃掻器1点（№76）
214	P－13G	56	50	31	隅丸方形	－	
215	O－13G	77	63	北側 5	楕円形	－	
				57			
216	O－12G	135	114	58	楕円形	五Ⅰ	石錘1点（№75）・打製石斧1点（№20）
217	O－11G	63	60	19	円形	－	
218	W－14G	77	66	22	楕円形	五	深鉢が正位で出土、埋甕
219	O－15・16G	130	(100)	127	楕円形	五	
220	O－16G	(85)	78	46	不整形	－	
221	O－12G	134	122	76	楕円形	五Ⅰ	
222	O－12G	(112)	(95)	50	－	－	
223	O－12G	152	(102)	49	楕円形	五	磨石類2点（№56・57）・土偶1点（№7）
224	O－12G	100	82	29	楕円形	－	
225	P－13G	95	78	25	楕円形	五	
226	O・P－13G	140	106	24	楕円形	五	尖刃掻器1点（№77）
227	O・N－11・12G	142	137	90	円形	五Ⅰ	敲磨石1点（№58）、集石・炭化物多量
228	P・Q－13G	50	43	32	円形	－	
229	Q－13G	76	72	19	円形	－	
230	Q－13・14G	125	86	37	楕円形	五	
231	Q－13・14G	64	(60)	26	楕円形	－	
232	Q－13G	136	120	55	楕円形	勝	
233	Q－13G	100	88	31	楕円形	－	
234	N－12G	126	114	34	瓢箪形	－	
235	N－12G	126	112	29	隅丸方形	－	
236	M・N－15G	66	54	23	楕円形	－	
237	M・N－15G	78	62	15	楕円形	－	
238	N－15G	64	54	20	楕円形	－	
239	N－16G	74	56	23	楕円形	五	
240	O－16G	114	92	31	楕円形	－	
241	O－16G	74	70	25	円形	－	
242	O－16G	54	52	14	円形	－	
243	O－15G	118	(88)	50	楕円形	五	
244	T・U－21G	94	87	18	楕円形	－	集石・炭化物多量
245	Z－16G	(48)	37	不明	楕円形	－	
246	Z－16G	180	128	29	不整形	十	
247	Y－17G	67	65	56	円形	－	
248	Z－15・16G	(160)	138	37	楕円形	－	
249	O－12・13G	158	(97)	41	楕円形	－	焼土多量
250	P－17G	48	44	19	円形	－	
251	P－17G	40	40	20	円形	－	
252	Q－15G	134	126	26	楕円形	－	
253	Q－15G	136	120	24	楕円形	－	
254	R－15G	88	78	33	楕円形	－	
255	Q－17G	68	48	20	楕円形	－	
256	Y－16G	75	74	36	円形	堀Ⅰ	注口土器出土
257	W－19G	188	(106)	50	楕円形	－	
258	S－16G	(134)	116	13	楕円形	－	
259	S－16G	(90)	(90)	35	楕円形	－	
260	X・Y－17G	90	84	19	楕円形	－	
261	Y－17G	163	(150)	88	楕円形	五	大形石器1点（№7）
262	Z－15・16G	(150)	(71)	48	楕円形	曽Ⅱ	
263	Z－16G	152	(70)	25	楕円形	五	
264	Z－16G	33	27	18	楕円形	－	
265	Y－17G	86	(65)	26	楕円形	－	
266	Y－17G	(125)	102	52	楕円形	－	
267	X－17G	118	85	40	楕円形	－	
268	M－14G	88	82	29	不整方形	－	
269	M－14G	112	79	26	楕円形	－	
270	M－14G	91	79	15	楕円形	－	
271	O－10G	108	(75)	47	楕円形	五	
272	M－13G	110	102	12	円形	－	
273	X－14G	92	77	31	楕円形	－	打製石斧1点（№21）
274	W－14G	120	102	17	楕円形	五	
275	W－14G	138	135	66	楕円形	五	
276	W－14G	120	104	36	楕円形	－	
277	P－15G	50	50	－	円形	－	
278	W－14G	61	60	30	円形	－	
279	X－14G	66	61	12	楕円形	－	
280	X－14G	93	63	28	楕円形	－	
281	W・X－14G	87	51	44	楕円形	五	
282	W－14G	110	53	59	楕円形	－	坑底に小ピット2、隠し穴？
283	W－14G	50	48	52	円形	－	
284	W－14G	55	40	60	楕円形	－	
285	X－14・15G	64	55	42	楕円形	－	
286	W－14G	90	(53)	23	楕円形	－	
287	X－14G	30	30	18	円形	－	
288	W－18G	95	(65)	47	楕円形	曽・勝	
289	T－20G	48	38	28	楕円形	－	
290	T－19G	52	38	26	楕円形	五	
291	T－19G	54	38	26	楕円形	曽	
292	W－17G	62	(48)	34	楕円形	五Ⅱ	打製石斧1点（№22）・把手1点
293	S－19G	64	50	58	楕円形	－	
294	T－19G	58	52	35	楕円形	－	
295	T－18G	48	38	24	楕円形	－	
296	U－18G	46	32	14	楕円形	－	
297	U－19G	38	38	52	円形	五	
298	U・V－19G	60	40	32	楕円形	－	
299	V－18G	48	38	33	楕円形	－	
300	V－16G	155	(123)	42	楕円形	－	礫多数

土坑番号	位置	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	形態	時期	備　考
301	V－16G	75	60	44	楕円形	－	
302	V－17G	122	122	10	円形	－	
303	Z－15・16G	207	108	100	楕円形	曽Ⅱ	磨製石斧（№2）・磨石類1点（№59）・土製円盤1点（№14） 坑底に小ピット3、隠し穴
304	U－16G	42	37	19	楕円形	－	
305	Q・R－18G	167	(115)	60	隅丸方形	五	
306	P－13G	115	98	80	不整形	五	
307	欠番						
308	欠番						
309	欠番						
310	ヌ－39G	(90)	80	21	円形	－	
311	ヌ－39G	120	90	25	楕円形	－	
312	ヌ－39G	100	(7)	37	円形	－	
313	ヌ－39G	112	70	35	不整楕円形	中期中葉	
314	ニ－39G	90	70	27	楕円形	－	
315	ニ－38・39G	156	120	45	不整円形	－	集石・礫多数
316	ニ－39G	100	55	44	楕円形	中期中葉	
317	ヌ－38G	95	80	22	円形	－	
318	ヒ・フ－42・4	51	(48)	15	円形	中期中葉	
319	ヒ・フ－42・4	(117)	79	19	円形	－	
320	ヒ－42・43G	77	74	17	円形	－	
321	ヒ－42・43G	94	43	38	瓢箪形	－	
322	ヒ－42・43G	257	(102)	100	楕円形	－	
323	ヒ－42G	－	(49)	23	円形	－	炭化物多量
324	ヒ－42G	107	95	39	円形	－	
325	ハ・ヒ－42G	60	50	8	不整楕円形	－	
326	ヒ－42G	68	63	44	円形	－	
327	ヒ－42G	60	57	17	円形	五Ⅱ	
328	ニ－38・39G	60	40	16	楕円形	－	
329	ノ－42G	(146)	(106)	38	隅丸長方形	中期中葉	
330	ノ－41・42G	142	(101)	55	不整楕円形	－	
331	ノ・ハ－41G	(115)	75	34	不整形	堀Ⅰ	
332	ヒ－42G	60	(50)	23	楕円形	－	
333	ヒ－43G	86	64	44	楕円形	－	
334	ヒ－43G	116	82	36	楕円形	－	
335	ヒ－42G	39	36	20	円形	－	
336	ヒ－42G	66	61	44	円形	－	
337	ハ－42G	57	55	28	円形	－	
338	ハ－42G	45	(37)	28	円形	－	
339	ハ－42G	(37)	35	41	円形	－	
340	ハ－42G	99	73	60	不整形	－	
341	ハ－42G	105	63	41	不整形	－	
342	ハ－41G	(250)	(160)	25	楕円形	－	
343	ハ－40G	－	58	22	半楕円形	曽Ⅱ	
344	ハ－40G	－	－	－	－	－	
345	ネ－42G	11	5	5	不整形	－	
346	ノ・ハ－40G	(90)	82	46	円形	－	
347	ハ－41G	55	50	21	円形	－	
348	ハ－40G	75	60	19	円形	－	
349	ハ－40G	(50)	40	24	楕円形	－	
350	ハ－40G	95	80	30	円形	－	
351	ノ・ハ－40G	(60)	55	27	円形	－	
352	ノ－40G	165	130	32	円形	弥生	
353	ノ－40G	75	45	16	楕円形	－	
354	ノ－39G	78	68	23	円形	中期中葉	
355	N－9G	75	70	9	円形	－	
356	ネ－40G	74	72	20	円形	－	
357	ネ－40G	68	62	19	円形	五Ⅱ	
358	ネ－40G	(70)	70	22	円形	堀Ⅱ	
359	ネ－40G	63	(50)	13	円形	－	
360	ネ－40G	62	57	28	円形	－	
361	ネ－40G	92	68	29	楕円形	－	
362	ネ－39G	206	79	225	－	－	焼土多量
363	ネ－39G	102	75	14	－	－	
364	ネ－39G	36	35	13	円形	－	
365	ネ－39G	54	47	15	円形	－	
366	ネ－38・39G	不明	85	22	不整形	－	
367	ヌ－38G	188	130	38	楕円形	－	集石・炭化物多量
368	ニ－38G	140	133	27	円形	－	
369	チ－37G	75	73	31	円形	堀Ⅱ	
370	チ－38G	114	110	88	楕円形	五Ⅱ	
371	タ－39・40G	132	120	38	円形	－	礫多数
372	ネ－38G	78	65	26	円形	－	
373	ネ－38G	117	4.6＊2	24	円形	－	
374	ネ－38G	110	56	26	瓢箪形	‥	
375	ヌ－38G	35	28	17	円形	－	
376	ヌ－38G	54	44	23	楕円形	－	
377	ヌ－38G	58	44	29	円形	－	
378	ヌ－38G	94	(75)	－	円形	－	
379	ヌ－39G	53	45	24	円形	－	
380	ヌ－39G	56	50	21	円形	－	
381	ヌ－39G	65	53	21	円形	－	
382	ヌ－39G	70	59	16	円形	－	
383	ニ－37・38G	190	80	23	長楕円形	－	
384	ニ－38G	60	(60)	17	円形	－	
385	ナ－38G	(117)	(70)	27	不整形	－	
386	ナ・ニ－38G	100	(70)	21	円形	－	
387	ナ－38G	(70)	43	27	楕円形	－	
388	ナ－38G	55	45	39	円形	－	
389	ナ－38G	26	25	19	円形	－	
390	ナ－38G	67	47	53	楕円形	－	
391	ナ－38G	30	30	16	円形	－	
392	ト－35G	116	75	52	楕円形	－	
393	チ－36G	54	40	22	楕円形	－	
394	チ－36G	68	47	51	不整楕円形	－	
395	ツ－36G	86	59	20	楕円形	－	
396	チ－38G	94	80	50	円形	五Ⅱ	
397	チ－38G	112	93	68	不整円形	五Ⅱ	
398	チ－38G	73	70	21	円形	曽	
399	ツ－39G	162	122	19	楕円形	－	磨石類1点（№60）
400	ツ－39G	185	124	25	不整楕円形	曽Ⅱ	
401	チ－39G	159	82	12	不整楕円形	勝	
402	ソ－34G	350	180	48	不整楕円形	－	風倒木跡
403	タ－33G	286	144	65	不整楕円形	五Ⅱ	

土坑番号	位置	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	形態	時期	備考
404	カ・キ－31 G	378	170	55	不整楕円形	曽Ⅱ	風倒木跡
405	チ－38 G	50	45	15	円形	－	
406	ツ・チ－38 G	70	55	29	不整円形	－	
407	チ－38 G	75	70	25	円形	－	
408	ツ－39 G	65	57	27	円形	－	
409	ツ－39 G	62	62	25	円形	－	
410	ツ－39 G	80	62	21	楕円形	－	
411	ツ－39 G	122	32	25	瓢箪形	－	
412	ツ－39 G	93	71	43	楕円形	－	
413	ツ－39 G	(65)	45	23	円形	－	
414	ツ－38 G	(94)	66	42	楕円形	－	
415	ツ－38 G	104	60	34	不整楕円形	－	
416	チ－38 G	95	70	14	円形	－	
417	ツ－39 G	45	40	16	円形	－	
418	ツ－39 G	110	65	22	楕円形	－	
419	チ－40 G	77	57	33	円形	－	
420	チ－39・40 G	116	35	42	不整及楕円形		
421	チ－39 G	74	57	39	円形	－	
422	チ－39 G	40	37	43	円形	－	
423	チ－39 G	45	34	16	円形	－	
424	タ－37 G	171	84	46	楕円形	－	
425	チ－38 G	68	60	23	楕円形	中期中葉	
426	ソ－38 G	90	79	29	楕円形	－	
427	ソ－38 G	39	38	25	円形	－	
428	タ－38 G	62	40	22	楕円形	－	
429	キ－19 G	225	157	17	不整楕円形	五	礫多数（焼けていない）
430	キ－19 G	102	65	16	楕円形	－	
431	キ・ク－20 G	80	(70)	24	楕円形	－	
432	キ－19・20 G	140	65	34	長楕円形	－	
433	キ－19・20 G	77	37	27	不整形	－	
434	カ－18 G	130	110	62	楕円形	五Ⅰ	
435	M－9 G	105	102	41	円形	中期中葉	石皿1点（№76）・尖刃掻器（№78）、20～40cm大礫多数
436	M・L－9 G	93	70	12	楕円形	五Ⅱ	
437	L－8・9 G	107	81	11	円形	五Ⅱ	
438	L－8 G	197	136	11	不整形	五Ⅰ	
439	L－9・10 G	114	99	12	円形	－	石皿1点（№77）
440	L－10 G	93	92	14	円形	－	
441	L－9・10 G	107	(90)	17	円形	五Ⅱ	
442	L－9 G	137	(82)	－	不整形	前期末	尖頭器1点（№2）、焼土多量
443	L－9 G	60	(53)	13	円形	－	
444	チ－37 G	(90)	(90)	(35)	円形	－	
445	チ－30 G	156	94	30	楕円形	－	
446	タ－29 G	150	88	35	楕円形	－	
447	タ－29 G	68	43	25	円形	－	
448	ス－36 G	141	117	31	不整円形	－	
449	ス－36 G	145	102	30	長楕円形	－	
450	タ・チ－34 G	250	100	97	不整隅丸方形	－	
451	ケ－33 G	136	70	38	楕円形	－	
452	ク－32・33 G	126	95	39	円形	－	
453	サ－33 G	92	75	54	楕円形	－	
454	コ・サ－33 G	130	39	29	不整楕円形	－	
455	コ－33 G	(65)	80	37	楕円形	－	
456	コ－33 G	(113)	106	55	円形	－	
457	コ－33 G	(115)	113	32	円形	－	
458	コ－33 G	(70)	52	39	楕円形	－	
459	コ－33 G	(80)	75	42	円形	－	
460	コ－33 G	103	97	43	円形	－	
461	カ・キ－28 G	149	144	29	円形	－	
462	カ－28・29 G	110	73	32	楕円形	－	
463	カ－28 G	(80)	70	25	円形	－	
464	ク－31 G	152	57	49	隅丸長方形	－	
465	ク－31 G	(45)	(35)	29	円形	－	
466	ク－31 G	(55)	48	9	四角形	－	
467	ク－31 G	80	(72)	18	楕円形	－	
468	ク－31 G	(55)	(35)	34	楕円形	－	
469	ク－31 G	61	(54)	30	円形	－	
470	ク－31 G	64	58	36	円形	－	
471	キ－31 G	32	21	34	円形	－	
472	ク－31 G	32	25	20	円形	－	
473	キ－31 G	43	32	40	円形	－	
474	キ－31 G	33	28	31	円形	－	
475	キ－31 G	40	40	31	円形	－	
476	キ－31 G	46	30	23	楕円形	－	
477	キ－31 G	33	30	45	円形	－	
478	キ－31 G	43	30	38	楕円形	－	
479	キ－31 G	40	35	12	円形	－	
480	ア－27 G	75	60	35	楕円形	五Ⅱ	
481	K・L－9 G	170	145	70	不整円形	五Ⅱ	石皿1点（№78）
482	K－9 G	(101)	(55)	34	不整形	五Ⅱ	礫多数
483	L－9 G	(60)	58	10	円形	中期中葉	
484	L－10 G	108	103	46	円形	五Ⅱ～貉	磨石類1点（№61・62）・石棒1点（№3）・石皿1点（№8・9）、20～50cm大礫多数
485	L・M－10 G	126	118	35	円形	五Ⅱ	
486	L－10 G	149	147	18	円形	五Ⅱ	
487	L－10 G	135	98	43	楕円形	五Ⅱ	
488	K－9 G	170	152	54	不整円形	五Ⅱ	炭化物多量
489	K－9 G	88	76	40	円形	五Ⅱ	
490	K・L－9・10	155	153	51	不整円形	五Ⅱ	掻器2点（№81・82）・磨製石斧（№3）、土偶1点（№12）
491	L－11 G	119	106	50	円形	五Ⅱ	磨石類1点（№63）、炭化物多量
492	ソ－30 G	234	200	40	円形	五Ⅱ	
493	セ－29 G	138	104	19	不整円形	－	
494	エ－30 G	65	50	40	円形	－	
495	カ－32 G	53	35	21	不整楕円形	－	
496	カ－32 G	38	35	32	円形	－	
497	エ－31・32 G	78	77	30	円形	－	
498	イ－27 G	120	105	41	楕円形	－	
499	イ－29 G	123	95	32	楕円形	－	
500	イ－29 G	103	65	78	隅丸長方形	－	
501	M・N－9 G	72	66	90	円形	十	40cm大の礫の下から鉢形土器出土
502	L－10 G	93	90	40	円形	五Ⅱ	石皿1点（№79）
503	イ－27 G	(150)	140	30	楕円形	－	
504	X－20 G	106	70	14	楕円形	貉	
505	Z－24 G	125	110	38	楕円形	貉	磨石類1点（№64）
506	エ－20 G	88	66	9	楕円形	－	焼土多量
507	ウ－20 G	82	73	42	円形	－	礫多数
508	エ－21 G	83	79	14	円形	五Ⅱ	
509	エ－21 G	103	101	70	円形	貉・曽Ⅱ	礫多数
510	X－20 G	158	123	48	不整円形	五Ⅱ	尖刃掻器1点（№83）、底部穿孔・約2/3の残る深鉢が横位で出土
511	X－20 G	170	132	35	不整円形	貉	
512	U・V－22・2	185	155	73	不整円形	中期中葉	
513	ク－26 G	97	55	26	楕円形	－	
514	ク－25 G	70	57	24	円形	－	
515	W－21・22 G	132	100	12	長楕円形	五Ⅱ	
516	ウ－25 G	126	90	24	不整楕円形	貉	
517	ア・イ－26 G	95	75	65	円形	－	
518	ア・イ－26 G	－	－	－	円形	－	
519	エ－20 G	120	55	5	不整楕円形	－	
520	ウ・エ－21・2	114	107	35	円形	－	
521	ウ・エ－22 G	167	120	28	楕円形	－	
522	K・L－9 G	97	85	6	不整多角円形	－	
523	K－8 G	82	78	15	円形	－	
524	K－8 G	105	94	13	円形	－	
525	L－10 G	40	38	10	円形	－	
526	イ・ウ－21・2	130	80	14	隅丸長方形	－	
527	イ－22 G	95	80	12	隅丸方形	中期中葉	
528	ウ－22 G	92	82	18	不整円形	－	
529	ウ－22 G	94	80	9	隅丸方形	－	
530	ウ－23 G	90	73	25	楕円形	－	
531	J－7 G	(110)	92	5	楕円形	－	
532	J－7 G	(110)	95	4	円形	－	
533	J－7・8 G	110	80	9	楕円形	五Ⅱ	
534	J－7 G	156	130	18	円形	中期中葉	
535	J－7 G	103	98	6	円形	－	
536	イ－24 G	(145)	96	13	長楕円形	－	
537	イ－24 G	(116)	108	24	不整円形	－	
538	イ－24 G	(126)	100	14	楕円形	－	
539	イ－24 G	69	56	12	不整楕円形	－	
540	ア－24 G	130	75	12	長楕円形	－	
541	ア－23 G	105	93	38	円形	－	
542	ア－22・23 G	95	80	12	楕円形	－	
543	Z－26 G	106	103	31	円形	－	
544	U－23 G	50	42	9	円形	－	
545	X・Y－25 G	258	192	75	不整形（菱形）	－	
546	X－24 G	58	45	7	不整円形	－	
547	X－23 G	79	73	21	円形	－	
548	V－22 G	70	47	16	円形	－	
549	U・V－22・2	140	122	43	円形	五Ⅱ	
550	V－22・23 G	(144)	125	27	不整円形	貉	
			85	55	14	楕円形	
551	W－23 G	60	58	12	円形	－	
552	X－20 G	103	89	43	円形	－	
553	チ－39 G	110	(110)	20	円形	－	
554	ア－27 G	67	44	26	不整円形	－	
555	オ－23 G	95	90	27	（多角）円形	－	
556	Y－22 G	92	87	28	円形	－	
557	Y－22 G	112	78	48	不整楕円形	五Ⅱ	
558	ア－27・28 G	62	60	24	円形	五Ⅱ	
559	V－20・21 G	213	77	66	（双円）瓢箪	－	
560	L－10 G	45	38	21	円形	－	
561	L－11 G	(45)	35	13	楕円形	－	
562	M・N－9・10	87	82	20	不整円形	五Ⅰ	
563	N－10 G	90	85	23	多角円形	十	
564	サ－34 G	144	100	47	不整楕円形	－	
565	K・L－9 G	134	120	19	不整形	－	
566	W－23 G	60	60	19	円形	貉	
567	カ・キ－26 G	(315)	250	85	楕円形	五Ⅱ	集石・礫多数、炭化物多量
568	カ・キ－26 G	505	440	85	円形	中期中葉	
569	N・O－10 G	(112)	102	24	円形	十	礫多数
570	O－9 G	110	93	15	円形	－	礫多数
571	O－9・10 G	87	85	34	円形	十	
572	N・O－10 G	(80)	70	27	円形	十	
573	N・O－10 G	48	45	25	円形	－	
574	L－13 G	97	94	41	円形	五Ⅱ	
575	カ－27 G	140	108	58	長楕円形	－	
576	カ・キ－26 G	87	77	15	円形	－	
577	N－9 G	85	85	－	円形	－	
578	N－9 G	92	80	23	楕円形	十	
579	N－9 G	87	43	60	不整楕円形	十	石皿1点（№80）・掻器1点（№84）・打製石斧2点（№23・24）
							土製玦状耳飾1点（№6）・土製品2点（№22）ほか
580	N－9・10 G	80	60	80	不整楕円形	十	石皿1点（№81）・尖刃掻器1点（№86）・礫器1点（№1）、袋状、関西系
581	L－13 G	(85)	65	9	楕円形	－	
582	L・M－13 G	158	(100)	58	長楕円形	－	
583	L－13 G	56	43	37	円形	－	
584	L－12・13 G	106	73	14	楕円形	－	
585	M－12 G	67	60	18	楕円形	－	
586	M－12 G	125	110	47	円形	－	
587	M－12 G	115	105	13	円形	－	
588	M－12 G	70	65	24	円形	－	
589	M－11 G	95	70	24	楕円形	十	
590	N－11 G	(80)	65	10	楕円形	－	
591	N－11 G	115	(90)	23	長楕円形	－	
592	O－9 G	48	41	35	楕円形	十	
593	N－10 G	105	(100)	16	円形	五Ⅱ	
594	L－11 G	123	95	23	楕円形	－	
595	ク－26 G	35	32	24	円形	－	
596	カ－18 G	50	37	20	楕円形	－	
597	カ－18 G	57	55	32	円形	－	
598	オ・カ－18 G	110	87	39	楕円形	－	
599	カ－18 G	110	85	25	楕円形	－	
600	Y－24 G	150	113	49	楕円形	－	
601	Y－24 G	100	60	36	楕円形	－	
602	ク－34 G	120	93	26	不整円形	－	
603	ケ－34 G	118	76	26	楕円形	－	
604	ケ－34 G	74	50	23	楕円形	－	
605	ク－34 G	100	80	45	不整円形	－	
606	ク・ケ－34 G	66	59	31	円形	－	
607	M－9 G	33	31	13	円形	－	

第６表　桂野遺跡石器計測表

①石鏃（第92･93図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石　材
1		3住	未成品	15.10	16.10	4.15	0.85	黒曜石
2	92・1	3住	A	14.30	12.15	2.65	0.24	黒曜石
3	92・2	4・5・6住	B－1	(14.85)	(9.35)	3.10	0.24	黒曜石
4	92・3	6住	B－2	(14.40)	16.80	4.55	0.70	黒曜石
5	92・4	4・5・6住	B－2	20.80	15.95	4.90	1.00	黒曜石
6	92・5	6住	A	16.80	11.05	2.65	0.25	黒曜石
7	92・6	4・5・6住	B－2	18.45	15.25	2.50	0.62	黒曜石
8	92・7	6住	A	17.50	10.35	2.05	0.29	黒曜石
9	92・8	4・5・6住	A	16.55	11.25	3.50	0.28	黒曜石
10	92・9	8住	B－3－3	27.15	17.65	5.80	1.55	黒曜石
11	92・10	8住	B－2	(13.20)	17.25	3.90	0.68	黒曜石
12	92・11	8住	A	17.30	(11.95)	3.00	0.44	黒曜石
13	92・12	8住	未成品	15.15	20.65	4.85	1.10	黒曜石
14	92・13	8住	B－1	17.40	(10.14)	3.40	0.32	黒曜石
15	92・14	8住	B－3－3	22.40	(13.95)	3.45	0.44	黒曜石
16		8住	未成品	20.50	10.25	6.25	1.10	黒曜石
17		8住	未成品	18.50	17.85	8.35	2.02	黒曜石
18	92・15	8住	B－3－2	(16.30)	(12.20)	2.30	0.29	黒曜石
19	92・16	8住	B－2	22.80	18.00	3.00	0.57	黒曜石
20	92・17	8住	未成品	18.20	13.15	3.50	0.54	黒曜石
21	92・18	8住	未成品	15.25	13.35	1.95	0.30	黒曜石
22		7住	折損品	20.00	(9.40)	3.50	0.51	黒曜石
23		8住	未成品	19.40	11.80	3.25	0.56	黒曜石
24	92・19	8住	B－2	(22.00)	(13.65)	4.30	0.81	黒曜石
25		10住	未成品	14.55	9.85	2.55	0.26	黒曜石
26	92・20	10住	折損品	(15.55)	(11.20)	4.00	0.53	黒曜石
27		10住	折損品	13.55	9.75	2.40	0.20	黒曜石
28	92・21	10住	A	(12.40)	12.20	2.90	0.28	黒曜石
29		11住	折損品	12.50	10.30	3.30	0.35	黒曜石
30	92・22	11住	C－1	24.20	17.35	3.35	0.87	黒曜石
31		11住	未成品	24.75	16.35	6.60	2.26	黒曜石
32	92・23	11住	C－2	(28.90)	(20.30)	4.05	1.37	黒曜石
33	92・24	11住	C－1	21.10	20.20	3.45	0.96	黒曜石
34	92・25	11住	A	(14.70)	(8.35)	2.70	0.30	頁岩
35	92・26	11住	折損品	14.05	12.80	3.60	0.48	黒曜石
36		11住	折損品	(10.35)	(4.85)	2.70	0.14	頁岩
37	92・27	11住	A	16.35	13.50	3.95	0.49	黒曜石
38	92・28	11住	C－2	24.80	(16.55)	3.40	0.87	黒曜石
39	92・29	11住	B－2	(17.40)	15.60	4.05	0.63	黒曜石
40	92・30	11住	C－1	26.15	(17.01)	4.00	0.82	黒曜石
41		11住	折損品	(7.95)	(6.45)	3.15	0.24	黒曜石
42	92・31	12住	B－2	20.20	14.65	3.75	0.65	黒曜石
43		12住	未成品	13.40	9.70	3.80	0.30	黒曜石
44	92・32	14住	折損品	(13.65)	(10.50)	4.60	0.33	黒曜石
45	92・33	14住	C－2	(19.40)	(15.10)	4.95	1.00	黒曜石
46	92・34	14住	C－2	23.25	19.10	5.85	1.93	黒曜石
47	92・35	14住	C－3	21.20	(16.40)	5.20	1.17	黒曜石
48	92・36	14住	C－3	(27.90)	(27.55)	6.10	1.97	黒曜石
49	92・37	16住	未成品	17.20	16.05	5.15	1.26	黒曜石
50	92・38	21住	B－1	19.60	(9.80)	2.10	0.21	黒曜石
51	92・39	21住	B－2	(17.30)	17.00	4.75	1.10	黒曜石
52		21住	未成品	22.30	19.70	4.10	1.51	黒曜石
53		21住	折損品	9.05	9.40	3.15	0.20	黒曜石
54		21住	折損品	(11.20)	(6.35)	1.80	0.10	黒曜石
55		21住	折損品	(10.80)	(9.35)	2.20	0.16	黒曜石
56	92・40	21住	未成品	20.25	14.05	6.70	0.99	黒曜石
57	92・41	21住	C－2	26.50	19.80	6.45	2.91	頁岩
58	92・42	27住	未成品	15.15	14.10	3.70	0.41	黒曜石
59	93・43	27住	B－2	16.75	(13.35)	3.50	0.47	黒曜石
60	93・44	27住	A	14.05	12.75	2.15	0.27	黒曜石
61	93・45	27住	未成品	15.30	14.20	4.25	0.75	黒曜石
62		49土	未成品	13.30	14.25	3.15	0.49	黒曜石
63	93・46	58土	A	(15.90)	(14.45)	3.50	0.51	黒曜石
64	93・47	71土	B－3－1	17.90	15.55	2.90	0.40	黒曜石
65	93・48	80土	B－3－4	(17.50)	(11.50)	3.35	0.66	黒曜石
66	93・49	100土	B－3－4	22.65	(13.10)	3.90	0.74	黒曜石
67	93・50	111土	A	14.45	15.15	3.35	0.55	黒曜石
68		122土	未成品	21.35	13.45	4.80	0.98	黒曜石
69	93・51	122土	B－2	(17.95)	15.20	2.80	0.49	黒曜石
70		123土	未成品	(17.05)	(10.20)	3.15	0.39	黒曜石
71	93・52	145土	B－1	22.70	(10.60)	2.85	0.39	黒曜石
72	93・53	145土	未成品	18.80	15.60	4.05	0.97	黒曜石
73		145土	折損品	16.25	14.90	2.90	0.54	黒曜石
74	93・54	159土	A	12.00	10.00	2.40	0.19	黒曜石
75	93・55	216土	A	12.65	9.75	1.95	0.17	黒曜石
76		435土	折損品	(16.90)	(11.80)	3.30	0.45	黒曜石
77	93・56	439土	A	14.60	13.40	0.25	0.23	黒曜石
78	93・57	481土	B－1	21.10	(11.90)	2.65	0.36	黒曜石
79	93・58	502土	A	15.85	13.40	3.85	0.48	黒曜石
80		579土	未成品	23.85	19.75	6.25	2.15	黒曜石
81	93・59	580土	未成品	20.00	12.20	1.95	0.35	黒曜石
82	93・60	E－6 G	B－1	20.00	12.30	3.00	0.41	黒曜石
83	93・61	E－6 G	B－3－2	21.70	16.50	4.00	0.54	黒曜石
84	93・62	E－6 G	B－3－1	20.25	(14.55)	3.60	0.44	黒曜石
85	93・63	E－7 G	B－2	19.30	13.40	4.30	0.87	赤色チャート
86	93・64	F－4 G	B－2	(17.25)	15.00	3.70	0.76	黒曜石
87	93・65	F－4 G	B－2	19.00	14.30	3.30	0.46	黒曜石
88	93・66	G－4 G	B－1	(18.00)	(10.75)	3.00	0.35	黒曜石
89		G－4 G	未成品	21.50	15.50	4.80	1.27	黒曜石
90		G－5 G	B－3－3	(18.20)	(14.35)	3.45	0.44	黒曜石
91	93・67	G－5 G	A	17.00	13.00	2.60	0.37	黒曜石
92	93・68	G－6 G	A	(16.55)	(12.30)	2.80	0.34	黒曜石
93	93・69	G	B－2－2	22.00	13.40	4.30	0.71	黒曜石
94		J－12G	折損品	(15.10)	(14.60)	3.60	0.50	黒曜石
95	93・70	K－13 G	B－2－1	18.60	(10.25)	1.70	0.25	黒曜石
96	93・71	K－17 G	A－2	(18.60)	(10.40)	2.95	0.39	黒曜石
97		M－11 G	C－1	(20.05)	(16.30)	3.10	0.82	黒曜石
98	93・72	M－15 G	B－1－3	20.35	(13.20)	5.40	0.87	黒曜石
99	93・73	O－13 G	A－3	(16.80)	14.00	2.95	0.45	黒曜石
100	93・74	O－14 G	B－3－1	20.95	(13.60)	3.60	0.68	黒曜石
101	93・75	P－15 G	B－1－2	23.55	(10.20)	3.90	0.50	黒曜石
102	93・76	Q－13 G	A	14.00	12.10	2.35	0.23	黒曜石
103	93・77	Q－18 G	B－1	21.00	12.60	2.80	0.52	黒曜石
104	93・78	R－12 G	B－1	(17.80)	11.30	2.20	0.22	黒曜石
105		R－12 G	未成品	21.20	17.40	4.80	1.69	黒曜石
106		R－16 G	折損品	(12.70)	(10.80)	2.95	0.32	黒曜石
107		R－17 G	A	(12.05)	10.80	2.80	0.30	黒曜石
108		R－17 G	未成品	16.80	8.90	4.30	0.53	黒曜石
109		R－17 G	未成品	14.50	9.05	3.50	0.38	黒曜石
110	93・79	R－18 G	未成品	21.80	11.40	4.55	0.81	黒曜石
111		R－18 G	未成品	17.20	13.75	3.35	0.54	黒曜石
112	93・80	R－18 G	A	14.50	10.50	2.00	0.25	黒曜石
113		R－18 G	未成品	16.15	14.05	3.10	0.58	黒曜石
114		R－18 G	未成品	16.20	15.50	3.80	0.91	黒曜石
115		R－18 G	C－3	23.55	15.70	6.10	1.54	黒曜石
116	93・81	S－18 G	B－1	(21.45)	11.70	3.10	0.47	黒曜石
117	93・82	S－18 G	A	19.10	10.75	2.15	0.20	黒曜石
118		S－18 G	未成品	16.30	10.50	3.40	0.58	黒曜石
119	93・85	U－18 G	未成品	19.15	14.10	4.10	0.79	黒曜石
120		V－23 G	未成品	19.00	14.05	2.90	0.43	黒曜石
121		W－17 G	A	14.10	(12.10)	2.65	0.29	黒曜石
122		X－16 G	折損品	(15.55)	(12.00)	3.00	0.39	黒曜石
123	93・86	エ－17 G	B－1	25.50	(13.20)	3.75	0.59	黒曜石
124	93・87	ソ－26 G	B－2	16.00	14.75	2.15	0.30	黒曜石
125		表採	B－3－3	(15.00)	11.55	3.10	0.39	黒曜石
126	93・83	表採	B－3－1	20.70	(14.10)	2.60	0.37	黒曜石
127		表採	B－3－2	(18.80)	(10.00)	3.80	0.45	黒曜石
128		表採	未成品	19.30	17.25	5.50	1.15	黒曜石
129		表採	未成品	14.50	15.20	5.55	1.18	黒曜石
130		表採	未成品	(12.45)	(12.65)	2.75	0.41	黒曜石
131		表採	未成品	19.40	13.50	5.90	1.42	黒曜石
132		表採	未成品	18.55	16.65	3.00	0.87	黒曜石
133		表採	B－3－3	20.95	(11.25)	3.15	0.58	黒曜石
134		表採	A	(12.50)	10.30	2.40	0.22	黒曜石
135	93・84	表採	A	17.45	(11.95)	2.25	0.26	黒曜石
136	93・88	表採	B－2	21.20	13.50	4.10	0.70	黒曜石
137		表採	B－2	17.65	(14.70)	3.85	0.52	黒曜石

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石　材
138		表採	未成品	20.55	15.25	4.40	1.05	黒曜石
139		表採	A	16.40	12.05	2.60	0.30	黒曜石
140		表採	未成品	18.55	16.10	5.25	1.28	黒曜石
141		表採	折損品	(12.40)	(13.85)	3.10	0.38	黒曜石
142		表採	折損品	(8.60)	(9.75)	2.20	0.13	黒曜石
143	93－89	表採	B－2	19.15	14.70	2.40	0.41	黒曜石
144		表採	A	13.45	9.80	2.20	0.20	黒曜石
145	93－90	表採	C－3	(26.15)	(15.65)	4.50	1.23	黒曜石

②掻器（第94～97図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
1	94・1	3住	A－b－2	25.45	13.75	6.00	1.36	黒曜石
2		3住	B－a－1	16.20	21.10	10.10	3.37	黒曜石
3		3住	A'	13.00	17.00	3.50	0.62	黒曜石
4	94・2	4・5・6住	A－b－2	17.50	13.00	5.30	0.92	黒曜石
5	94・3	4・5・6住	A－b－2	18.85	18.10	6.45	2.28	黒曜石
6	94・4	4・5・6住	A－a－2	18.85	12.15	6.10	1.32	黒曜石
7	94・5	4・5・6住	B－c－1	12.40	15.50	5.60	1.06	黒曜石
8		4・5・6住	A－b－1	23.10	14.05	7.10	1.86	黒曜石
9	94・6	4・5・6住	A－a－3	26.05	10.40	5.60	1.00	黒曜石
10	94・7	4・5・6住	A－a－2	17.00	15.90	7.80	1.68	黒曜石
11		4・5・6住	A－a－2	20.65	9.25	4.55	0.62	黒曜石
12	94・8	22住	A－a－3	16.40	11.20	4.05	0.67	黒曜石
13		7・8・9住	A－a－2	27.00	10.10	5.20	1.14	黒曜石
14	94・9	8住	A－a－1	20.55	13.85	7.40	1.83	黒曜石
15	94・10	8住	A－a－2	16.55	13.65	4.45	0.89	黒曜石
16	94・11	7住	A－a－2	18.90	12.65	5.55	1.05	黒曜石
17	94・12	7住	A'	17.50	14.75	5.40	1.25	黒曜石
18	94・13	8住	A－a－2	18.35	14.00	4.55	1.16	黒曜石
19	94・14	8住	A－a－3	15.45	12.25	4.75	0.50	黒曜石
20	94・15	8住	A－a－3	16.80	13.35	4.50	0.97	黒曜石
21	95・17	8住	A－a－2	16.80	15.20	7.25	1.17	黒曜石
22	95・16	8住	A－a－3	13.50	13.05	4.00	0.68	黒曜石
23		7・8・9住	A－a－1	29.60	22.40	13.40	5.33	黒曜石
24		7・8・9住	A－b－3	17.00	11.20	3.70	0.54	黒曜石
25		7・8・9住	A－b－2	13.00	15.65	3.65	0.67	黒曜石
26		7・8・9住	A－a－1	16.65	21.45	9.00	1.80	黒曜石
27		7・8・9住	A－a－3	21.15	14.50	4.65	1.09	黒曜石
28		7・8・9住	A－b－1	17.60	12.30	5.40	1.27	黒曜石
29		7・8・9住	A－b－3	15.10	15.95	4.15	0.49	黒曜石
30		7・8・9住	A'	11.85	12.50	3.80	0.54	黒曜石
31		7・8・9住	A－a－2	18.25	15.55	6.50	1.34	黒曜石
32		7・8・9住	B－a－1	14.20	13.00	4.40	0.99	黒曜石
33		7・8・9住	C－b	16.45	18.00	11.00	2.70	黒曜石
34	95・18	8住	B－a－2	13.60	19.20	6.20	1.54	黒曜石
35	95・19	10住	A－a－1	25.25	12.85	6.20	1.55	黒曜石
36	95・20	10住	A－a－2	28.50	17.35	8.05	2.73	黒曜石
37	95・21	10住	A－b－3	15.60	15.45	5.00	0.94	黒曜石
38		10住	B－c－1	23.00	16.45	10.10	2.95	黒曜石
39		10住	A－a－2	17.20	13.60	5.50	1.35	黒曜石
40		10住	B－a－3	19.00	1.00	5.20	0.85	黒曜石
41		10住	A－b－3	19.55	11.55	4.50	0.78	黒曜石
42		10住	A－a－1	16.30	16.70	5.20	1.61	黒曜石
43		10住	A－a－1	29.00	14.40	5.75	1.65	黒曜石
44		11住	A－b－1	20.65	15.15	6.35	1.83	黒曜石
45		11住	－	10.45	10.10	7.45	0.56	黒曜石
46	95・22	14住	A－a－2	19.55	16.80	6.60	1.49	黒曜石
47	95・23	14住	B－c－1	15.45	21.55	4.10	1.24	黒曜石
48		13・14・15住	A－a－2	26.00	17.15	6.30	2.32	黒曜石
49		13・14・15住	B－c－1	26.10	14.00	7.15	1.33	黒曜石
50	95・24	16住	A－a－1	18.20	17.75	7.15	1.61	黒曜石
51	95・25	16住	C－a	16.20	19.00	7.00	1.64	黒曜石
52		17住	A－a－1	26.00	15.40	7.65	2.32	黒曜石
53		21住	A－b－2	21.25	12.25	6.70	1.01	黒曜石
54	95・26	21住	B－c－1	29.05	17.10	6.65	2.14	黒曜石
55		27住	B－a－1	12.45	15.50	4.40	0.84	黒曜石
56		27住	B－b－1	25.50	16.70	8.30	2.65	黒曜石
57		41土	A－b－1	24.40	25.10	7.25	2.33	黒曜石
58		18住	A－b－1	20.00	13.40	2.50	0.76	黒曜石
59	95・27	58土	B－a－2	20.20	25.65	8.00	2.63	黒曜石
60		66土	A'	13.65	14.30	4.80	0.62	黒曜石
61		78土	A－b－1	16.00	11.45	4.40	0.56	黒曜石
62		98土	A－a－3	21.00	25.80	7.90	2.47	黒曜石
63		105土	A－b－3	25.20	15.40	5.40	1.20	黒曜石
64	95－28	111土	A－a－1	30.00	20.35	10.15	4.90	黒曜石
65		111土	B－a－1	11.00	15.70	5.70	0.64	黒曜石
66		114土	A－b－1	21.20	11.00	6.80	1.67	黒曜石
67	95－29	122土	B－c－1	15.80	20.15	5.75	1.74	黒曜石
68		122土	B－a－3	15.00	14.10	3.10	0.45	黒曜石
69		148土	A－a－2	22.00	17.00	8.80	1.78	黒曜石
70		148土	B－a－1	18.90	18.30	6.00	1.43	黒曜石
71		148土	B－c－1	12.00	16.50	6.80	1.06	黒曜石
72		152土	A－b－2	19.40	18.70	7.50	2.35	黒曜石
73		170土	A'	12.60	13.30	3.50	0.54	黒曜石
74		174土	A－a－2	23.90	20.00	6.85	2.18	黒曜石
75	95－30	189土	A－b－1	24.30	9.25	4.65	0.90	黒曜石
76		213土	A－a－3	17.40	11.00	2.65	0.36	黒曜石
77		226土	A'	16.20	14.20	4.90	0.77	黒曜石
78		435土	A－b－1	15.70	12.00	2.90	0.52	黒曜石
79		487土	A－a－2	16.10	15.10	5.50	1.21	黒曜石
80		487土	A－a－3	21.00	19.00	5.70	1.30	黒曜石
81		490土	B－a－3	17.50	11.10	4.20	0.67	黒曜石
82		490土	B－a－1	21.45	21.40	7.80	3.06	黒曜石
83	95－32	510土	A－a－1	13.70	11.30	6.00	0.76	黒曜石
84	95－31	579土	A－a－1	16.25	23.45	7.20	2.04	黒曜石
85	96－33	21住	B－a－1	29.90	30.90	16.90	10.86	黒曜石
86		580土	A－a－1	23.30	13.20	5.30	1.23	黒曜石
87		竪穴状遺構	A'	17.40	17.40	5.10	1.06	黒曜石
88	96－35	K－13 G	C－a	26.40	25.90	11.95	4.06	黒曜石
89		谷－東	B－c－1	13.60	13.20	3.60	0.45	黒曜石
90	96－34	K－13G	A－b－2	22.20	14.25	5.00	1.45	黒曜石
91		N－12G	A－a－3	22.90	10.40	5.40	0.97	黒曜石
92		N－13G	A'	12.50	13.30	5.40	0.86	黒曜石
93		O－12G	A－a－2	34.00	14.00	10.20	2.90	黒曜石
94		O－13G	B－c－1	13.30	17.90	3.50	0.62	黒曜石
95		O－13G	A－a－2	26.50	13.50	7.70	1.83	黒曜石
96		O－15G	B－a－2	11.20	20.00	2.90	0.60	黒曜石
97	96－36	O－16 G	A－a－1	23.85	11.90	5.40	1.27	黒曜石
98		P－15 G	A－a－2	17.40	11.30	3.80	0.80	黒曜石
99		P－18 G	A－a－1	23.50	19.50	7.40	2.20	黒曜石
100	96－37	Q－16 G	A－a－2	21.45	16.15	9.75	2.63	黒曜石
101	96－38	Q－17 G	A－a－1	19.80	16.05	6.55	2.00	黒曜石
102		Q－17 G	A－a－1	26.30	11.05	5.20	0.93	黒曜石
103		Q－17 G	A－a－2	16.20	18.60	6.70	1.60	黒曜石
104		Q－17 G	A－b－3	15.05	17.50	5.50	1.26	黒曜石
105		Q－17 G	A－b－2	12.90	14.60	5.60	0.77	黒曜石
106		Q－18 G	A－b－1	20.30	14.80	7.00	1.30	黒曜石
107	96－39	R－17 G	A－a－1	29.10	14.30	7.60	2.79	黒曜石
108	96－40	R－17 G	A－b－1	18.85	12.95	3.50	0.59	黒曜石
109	96－41	R－17 G	A－b－1	17.50	11.05	3.85	0.67	黒曜石
110		R－17 G	A－b－2	12.50	11.50	3.00	0.33	黒曜石
111		R－17 G	A－b－1	14.60	15.00	4.50	0.77	黒曜石
112		R－17 G	B－b－1	13.80	23.20	5.90	1.68 R－	黒曜石
113	96－42	R－18 G	A－a－2	18.10	13.40	5.30	1.03	黒曜石
114	96－43	R－18 G	A－a－2	28.55	15.65	7.80	2.88	黒曜石
115	96－44	R－18 G	A'	12.15	13.50	3.70	0.54	黒曜石
116		R－18 G	A－a－1	12.60	19.90	7.20	1.79	黒曜石
117		R－18 G	A－a－3	10.85	11.40	3.60	0.42	黒曜石
118		R－18 G	B－a－3	16.80	16.15	4.20	0.90	黒曜石
119		R－18 G	A'	12.55	13.80	5.00	0.64	黒曜石
120		R－18 G	B－a－1	11.45	17.60	4.20	0.66	黒曜石
121		R－18 G	A－b－2	15.25	17.80	4.50	1.01	黒曜石
122		R－18 G	A－b－2	15.50	13.75	4.30	0.81	黒曜石
123		R－18 G	B－a－1	14.10	19.55	4.95	1.27	黒曜石
124		R－18 G	A－a－2	16.30	19.80	6.55	1.76	黒曜石
125	96－45	R－19 G	A－a－2	18.20	11.01	6.20	1.03	黒曜石
126		S－12 G	B－a－1	15.00	17.65	4.90	0.88	黒曜石
127	96－46	S－18 G	A－a－2	18.80	11.40	5.10	0.80	黒曜石
128		S－18 G	A－a－3	17.20	16.45	5.10	1.14	黒曜石
129		S－18 G	B－a－1	16.30	15.30	5.50	0.94	黒曜石
130		S－18 G	A'	15.40	13.15	5.60	0.94	黒曜石
131	97－47	U－18 G	B－c－1	32.40	57.50	14.20	22.33	黒曜石

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
132		X－21 G	A－a－2	16.80	13.20	5.90	0.98	黒曜石
133	97－48	イ－30 G	A－a－2	18.70	17.05	5.10	1.58	黒曜石
134	97－50	表採	B－c－1	23.80	15.75	7.00	2.46	黒曜石
135	97－49	表採	A－a－2	22.40	19.45	6.15	2.12	黒曜石
136		表採	B－c－1	18.60	13.85	5.85	1.44	黒曜石
137		表採	B－a－3	15.90	18.30	3.00	0.82	黒曜石
138		表採	B－a－1	12.70	13.50	4.95	0.50	黒曜石
139		表採	A'	16.90	11.20	7.20	0.90	黒曜石
140		表採	B－c－1	17.30	17.20	9.50	2.30	黒曜石
141		表採	A－a－1	19.40	17.00	8.60	2.25	黒曜石
142		表採	C－b	14.45	19.00	7.00	1.79	黒曜石
143		表採	A－b－3	23.80	15.20	6.10	1.36	黒曜石
144		表採	B－c－1	14.20	22.50	8.05	1.46	黒曜石
145		表採	B－a－2	13.20	21.80	5.80	1.19	黒曜石
146	97－51	表採	B－a－1	21.60	15.20	7.30	2.02	黒曜石
147		表採	C－b	11.30	15.00	3.70	0.40	黒曜石
148		表採	B－a－3	15.40	19.95	6.70	1.31	黒曜石
149		表採	C－a	13.00	10.00	3.85	0.45	黒曜石
150		表採	A－a－2	22.10	14.95	4.75	1.18	黒曜石
151		表採	A－b－2	25.90	16.55	7.35	2.09	黒曜石

③石錐（第98図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
1	98－1	4・5・6住	B	19.80	9.30	7.50	1.11	黒曜石
2		4・5・6住	A	19.20	13.35	6.50	1.19	黒曜石
3		11住	A	15.00	17.40	3.55	0.89	黒曜石
4	98－2	17住	A	22.70	13.10	5.80	1.52	緑色凝灰岩
5	98－3	17住	B	15.50	8.30	6.10	0.66	黒曜石
6	98－4	21住	B	19.35	9.20	6.00	1.00	黒曜石
7	98－8	27住	A	16.00	11.60	5.20	0.75	黒曜石
8		105土	A	16.20	18.00	7.00	1.09	黒曜石
9	98－5	122土	B	27.00	9.00	6.60	1.55	黒曜石
10	98－6	F－6G	A	30.30	12.50	4.00	1.11	黒曜石
11		Q－16G	B	17.50	8.50	5.50	0.69	黒曜石
12	98－7	R－14G	B	25.20	11.10	6.00	1.60	黒曜石
13	98－9	R－18G	B	18.90	6.90	5.50	0.70	黒曜石
14		表採	B	23.65	9.15	5.35	0.94	黒曜石
15	98－12	表採	A	13.90	17.70	5.00	0.81	黒曜石
16	98－10	表採	B	26.70	8.20	5.60	0.94	黒曜石

④石匙（第98図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
1		4・5・6	－	35.30	12.90	8.20	3.08	黒曜石
2		17住	－	44.50	23.00	3.70	3.07	頁岩
3	98－11	E－3 G	－	43.00	50.00	8.00	16.73	硬質頁岩
4		E－5 G	－	23.00	30.05	4.00	1.78	黒曜石
5	98－13	オ－17 G	－	55.50	89.00	12.00	43.44	黒曜石
6		表採	－	22.60	16.60	4.35	1.47	黒曜石
7		表採	－	25.75	17.65	4.10	1.52	黒曜石

⑤尖頭器（第98図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
1	98－14	21住	－	26.70	19.00	7.00	3.13	黒曜石
2	98－15	442土	－	19.50	18.20	5.50	1.61	黒曜石
3	98－16	G	－	53.50	14.50	8.00	6.33	珪質頁岩
4	98－17	X－16G	－	51.50	24.50	13.00	11.88	黒曜石

⑥打製石斧（第100・101図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
1	100－1	1住	A－1	10.80	5.25	1.65	84	頁岩
2	100－2	2住	B－1	10.85	4.50	1.65	80	頁岩
3	100－3	6住	B－2	7.85	4.85	1.80	60	細粒砂岩
4		8住	B－2	8.85	3.45	1.05	39	ホルンフェルス
5	100－4	8住	B－2	6.80	4.20	2.30	85	ホルンフェルス
6		8住	A－2	8.70	5.30	1.30	66	頁岩
7	100－5	8住	B－1	13.25	5.35	1.75	130	頁岩
8	100－6	8住	A－1	11.45	4.80	1.70	77	ホルンフェルス
9	100－10	8住	B－2	6.70	4.35	1.00	31	ホルンフェルス
10	100－8	8住	B－1	10.35	4.80	1.30	62	ホルンフェルス
11	100－7	9住	A－1	9.85	4.95	2.55	130	ホルンフェルス
12	100－9	9住	A－1	9.60	5.65	1.75	80	ホルンフェルス
13		9住	B－2	6.55	5.45	2.00	65	ホルンフェルス
14		10住	B－1	9.90	5.05	1.20	64	ホルンフェルス
15	100－11	10住	C	12.10	5.75	2.40	160	ホルンフェルス
16	100－12	100土	A－1	12.45	4.95	1.70	125	ホルンフェルス
17		129土	A－1	12.25	6.25	8.50	41	頁岩
18	100－13	174土	B－1	9.65	5.70	2.00	110	細粒砂岩
19	100－14	193土	A－1	10.00	5.00	1.25	55	ホルンフェルス
20	100－15	216土	A－1	11.25	5.75	1.80	127	ホルンフェルス
21	100－16	273土	B－1	20.15	5.80	1.75	231	頁岩
22		292土	－	10.70	5.10	1.55	76	ホルンフェルス
23	100－17	579土	B－1	7.95	4.95	1.00	44	ホルンフェルス
24	101－19	579土	A－1	12.70	4.85	1.55	71	ホルンフェルス
25	100－18	1堰堤	B－2	7.40	4.40	2.10	74	ホルンフェルス
26	101－20	キ－33G	B－1	9.85	3.95	2.10	90	ホルンフェルス
27		N－12G	A－1	9.00	5.70	1.55	94	ホルンフェルス
28		N－16G	C	7.80	9.30	1.45	111	ホルンフェルス
29		O－15G	A－1	9.50	4.80	0.90	49	ホルンフェルス
30		P－14G	B－1	8.30	5.60	1.30	50	ホルンフェルス
31		P－15G	B－1	11.05	4.05	1.10	108	ホルンフェルス
32		Q－10G	B－1	10.20	4.55	0.90	45	ホルンフェルス
33		Q－15G	B－1	9.85	6.10	2.15	104	細粒砂岩
34		Q－16G	B－1	9.90	3.70	1.00	41	ホルンフェルス
35		R－17 G	B－1	9.80	4.90	1.80	92	頁岩
36		R－18G	B－1	9.70	4.75	1.65	82	ホルンフェルス
37		R－18G	B－1	10.00	5.10	1.70	107	ホルンフェルス
38		R－18 G	B－1	14.00	4.20	1.30	79	ホルンフェルス
39	101－21	S－24G	B－1	8.05	4.45	1.40	50	ホルンフェルス
40		V－15 G	B－1	13.55	4.60	1.80	110	ホルンフェルス
41		V－16 G	B－2	7.70	5.30	1.40	80	細粒砂岩
42		V－17 G	C	15.40	5.45	3.20	250	角閃石
43		W－14 G	A－1	8.00	4.60	1.60	60	ホルンフェルス
44		精査	A－2	8.50	4.95	1.20	50	ホルンフェルス
45		表採	B－1	9.85	5.20	1.65	100	ホルンフェルス
46		表採	A－1	8.80	5.10	1.60	90	ホルンフェルス
47		表採	A－2	7.85	4.50	1.25	54	ホルンフェルス
48		表採	A－1	6.95	4.95	1.40	64	緑泥岩
49		表採	B－2	8.70	3.70	1.35	49	ホルンフェルス
50		表採	B－2	9.10	4.40	1.70	75	ホルンフェルス
51		表採	A－2	9.50	4.80	1.20	66	ホルンフェルス
52		表採	－	5.40	4.65	1.10	40	ホルンフェルス
53		表採	B－1	8.90	4.75	2.15	115	ホルンフェルス

⑦大形削器（第101・102図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
1	101－22	10住	B	5.95	10.35	1.70	45	ホルンフェルス
2	101－23	10住	A	3.65	7.90	0.85	24	頁岩
3		10住	A	11.30	8.90	8.70	219	凝灰岩
4	101－24	16住	A	5.80	7.20	1.65	50	凝灰岩
5	101－26	21住	B	5.00	17.20	1.45	105	ホルンフェルス
6	101－25	75土	A	5.65	8.25	3.60	120	凝灰岩
7	101－27	261土	A	2.70	5.05	1.20	7	緑色凝灰岩
8	101－29	Q－18G	B	3.50	12.50	1.65	46	ホルンフェルス
9	101－28	R－17 G	A	5.15	7.80	2.90	112	緑色凝灰岩
10		R－18G	B	7.15	4.95	1.00	51	ホルンフェルス
11	102－35	S－24G	A	7.50	8.20	3.20	208	緑色凝灰岩

⑧大形石匙（第101図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚cm）	重量（g）	石材
1	101－30	85土	－	4.20	7.00	1.00	20	ホルンフェルス
2	101－31	K－13G	－	5.10	7.15	1.40	40	ホルンフェルス
3		表採	－	6.15	3.25	1.10	21	ホルンフェルス
4		表採	－	7.05	4.25	1.45	34	頁岩

⑨礫器（第101・102図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g	石材
1	101－33	580土	－	17.20	9.10	5.50	1150	粗粒凝灰岩
2	101－34	R－18G	－	11.20	10.80	6.75	904	緑色凝灰岩

⑩石核（第102図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
1	102－36	10住	－	10.45	9.15	13.30	1200	緑色凝灰岩

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
2	102－37	140 土	－	7.65	8.45	3.30	220	ホルンフェルス
3		484 土	－	9.85	6.85	7.60	572	デイサイト
4	102－38	I－12G	－	11.30	10.25	8.70	1200	凝灰岩
5	80－4	R－17 G	－	9.35	15.15	15.45	2600	細粒緻密安山岩
6	102－39	W－17G	－	11.05	16.35	11.45	2300	凝灰岩
7		X	－	12.90	5.85	12.65	1200	緑色凝灰岩
8		オ－18G	－	4.40	7.00	8.45	270	デイサイト
9		表採	－	9.50	8.10	13.40	1000	珪岩
10		表採	－	9.35	15.10	9.85	1600	玄武岩

⑪磨製石斧（第103図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g	石材
1	103－1	10 住	A	9.00	4.30	2.90	190	緑色凝灰岩
2	103－3	303 土	B	6.10	3.30	0.90	35	緑色凝灰岩
3	103－2	490 土	A	9.80	4.10	3.00	180	緑色凝灰岩
4	103－4	K－13G	A	6.90	4.20	3.40	185	緑色凝灰岩
5	79－3	R－18G	A	12.10	5.30	3.50	370	緑色凝灰岩
6	79－2	R－18G	A	8.50	4.70	3.30	195	緑色凝灰岩
7	103－5	R－18G	B	5.10	3.60	3.50	33	緑色凝灰岩
8	103－6	S－18G	A	10.20	4.30	2.80	220	緑色凝灰岩
9	103－7	Y－16G	A	8.20	4.90	3.20	200	緑色凝灰岩
10	103－8	表採	A	12.50	5.80	3.80	490	緑色凝灰岩
11	103－9	表採	A	7.40	5.40	4.00	295	緑色凝灰岩
12	103－10	表採	A	9.10	3.30	2.80	155	緑色凝灰岩

⑫磨石類（第105～110図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g	石材
1	105－1	4 住	D－1	12.65	7.80	4.70	683	花崗岩
2	110－59	5 住	A－3	24.80	12.75	7.20	3700	安山岩
3	105－4	5 住	A－1	7.00	4.40	4.10	180	安山岩
4	105－2	6 住	A－1	8.10	3.10	3.80	315	安山岩
5	105－3	6 住	B	13.80	8.50	9.30	1200	安山岩
6	105－5	6 住	C	10.40	8.20	6.70	755	閃緑岩
7	105－6	7 住	A－1	5.10	6.90	3.00	120	砂岩
8	105－7	8 住	A－1	8.30	8.00	2.70	345	閃緑岩
9	105－8	8 住	D－1	12.40	7.30	4.95	820	安山岩
10		8 住	A－4	5.60	3.60	2.80	100	安山岩
11	105－9	8 住	D－1	12.00	7.50	5.20	690	安山岩
12		8 住	A－1	9.80	6.20	6.80	460	花崗岩
13	105－10	8 住	A－4	7.90	7.60	6.80	595	緑色凝灰岩
14		8 住	A－1	10.60	3.50	6.75	380	安山岩
15	105－11	8 住	A－1	11.85	8.80	4.10	640	閃緑岩
16	105－12	8 住	D－1	11.70	9.60	6.70	530	閃緑岩
17		8 住	A－1	11.50	5.00	6.90	780	安山岩
18	105－13	9 住	A－1	12.70	7.60	3.60	460	閃緑岩
19		9 住	A－3	13.00	13.00	7.75	1900	安山岩
20		9 住	D－1	5.50	6.85	4.85	265	安山岩
21		9 住	D－1	11.30	10.50	5.40	770	安山岩
22	110－60	9 住	A－3	15.70	11.60	6.00	2300	砂岩
23	106－14	10 住	D－1	10.40	8.35	4.45	625	緑色凝灰岩
24		10 住	A－1	12.10	9.80	4.00	565	緑色凝灰岩
25	106－15	10 住	B	11.70	6.35	7.30	695	安山岩
26	106－16	10 住	D－1	9.70	7.40	5.00	100	安山岩
27	106－17	11 住	B	13.10	8.15	8.50	860	閃緑岩
28	106－18	11 住	A－2	6.35	2.50	1.70	350	安山岩
29		11 住	A－3	14.50	9.25	6.20	1120	閃緑岩
30	106－19	11 住	B	15.90	7.40	7.70	1400	緑色凝灰岩
31	106－20	11 住	B	8.80	6.60	4.70	410	閃緑岩
32	106－21	11 住	D－1	12.15	9.00	4.00	645	砂岩
33		11 住	D－5	11.80	9.60	6.60	1150	閃緑岩
34	106－22	11 住	B	11.40	5.80	7.80	825	閃緑岩
35		12 住	A－1	11.30	7.40	3.40	305	安山岩
36	106－23	14 住	B	6.90	6.60	5.70	270	安山岩
37	106－24	15 住	D－3	7.60	6.00	4.00	260	安山岩
38	107－25	15 住	A－4	12.25	4.70	4.70	325	花崗岩
39	107－26	21 住	B	13.55	6.85	8.60	1050	安山岩
40	107－27	21 住	D－1	8.70	7.10	4.75	425	安山岩
41	107－28	21 住	A－4	15.90	6.80	4.00	575	流紋岩
42		21 住	A－1	3.70	7.50	4.10	120	緑色凝灰岩
43	107－29	21 住	D－2	13.40	6.75	7.60	875	安山岩
44	107－30	21 住	D－3	11.10	11.50	5.35	725	花崗岩
45	107－33	23 住	D－1	10.85	7.40	4.50	540	安山岩
46		27 住	A－2	2.15	4.15	1.75	30	安山岩
47		1 堰	A－4	5.30	5.90	4.80	220	デイサイト
48		53 土	A－3	11.80	9.90	6.00	920	安山岩
49	107－31	105 土	A－2	5.50	4.60	2.20	90	花崗岩
50		106 土	A－1	4.85	6.85	2.90	135	安山岩
51		122 土	A－2	4.20	3.40	2.50	50	花崗岩
52	107－32	123 土	D－1	10.10	8.80	3.60	465	砂岩
53		123 土	A－4	3.80	6.00	4.20	135	花崗岩
54		129 土	A－2	4.00	3.90	2.70	70	閃緑岩
55	107－35	149 土	B	7.80	4.40	7.25	355	安山岩
56	107－34	223 土	B	13.40	6.90	7.10	860	閃緑岩
57		223 土	A－1	10.60	7.60	5.40	625	砂岩
58	107－36	227 土	B	13.00	7.80	9.50	1400	凝灰岩
59		303 土	D－5	9.90	6.75	4.60	420	安山岩
60		399 土	A－3	19.50	9.10	6.90	1000	閃緑岩
61	108－37	484 土	D－1	9.70	6.75	4.60	420	安山岩
62		484 土	A－1	8.50	7.30	5.70	485	安山岩
63	108－38	491 土	A－2	5.80	2.70	1.90	45	安山岩
64	108－39	505 土	D－1	11.60	6.40	4.10	540	緑色凝灰岩
65		K－13G	A－2	5.00	4.90	2.40	80	安山岩
66	108－40	K－13G	A－4	5.60	4.40	5.30	230	花崗岩
67	108－41	L－12G	A－4	13.00	8.10	4.55	760	緑色凝灰岩
68	108－42	M－12G	A－1	8.45	5.85	4.60	335	安山岩
69		N－10G	A－2	6.30	5.20	3.20	130	頁岩
70	108－43	N－10G	D－1	8.15	6.70	5.50	420	安山岩
71	108－44	N－11G	A－1	6.40	7.20	4.80	245	安山岩
72	108－45	P－12G	A－1	15.60	8.20	4.60	800	安山岩
73	108－46	Q－13G	D－4	14.80	7.30	6.40	990	閃緑岩
74		R－17 G	A－2	10.00	5.60	5.00	495	安山岩
75	108－47	R－17 G	A－4	6.10	6.50	2.30	175	砂岩
76		R－18G	A－2	7.00	4.60	3.15	150	安山岩
77	108－48	T－19G	A－4	12.70	5.50	3.90	370	安山岩
78	108－49	U－20G	D－2	10.95	6.65	7.85	720	緑色凝灰岩
79		V－16G	D－3	9.70	6.60	4.60	340	花崗岩
80	109－50	V－16G	D－1	5.90	6.50	4.10	290	安山岩
81	109－51	V－16G	D－1	11.90	6.10	3.60	400	安山岩
82		W－17 G	A－1	5.90	5.70	3.40	170	安山岩
83		X－18G	A－3	8.90	8.80	5.60	785	安山岩
84	109－53	Y－24G	A－4	7.50	6.85	6.55	1155	流紋岩
85	109－52	オ－17 G	A－1	16.10	10.20	5.10	1170	安山岩
86	109－54	オ－17 G	A－4	16.60	6.65	5.20	820	安山岩
87	109－55	オ－17 G	A－1	11.60	11.00	5.00	940	花崗岩
88	109－58	オ－18G	A－1	7.20	5.20	4.60	300	安山岩
89		オ－18G	A－2	6.60	6.90	5.00	325	閃緑岩
90		オ－18G	A－4	12.80	5.90	5.50	760	安山岩
91	109－56	チ－37G	D－1	10.40	6.50	4.60	450	安山岩
92	109－57	表採	B	17.20	6.70	10.20	1600	安山岩
93	104－2	21 住	D－3	3.90	1.60	1.40	20	頁岩

⑬石皿・台石類（第111・112図）

遺物番号	図版番号	出土地点	型式	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（kg	石材
1	111－1	4 住	A	37.80	41.10	12.90	35.30	安山岩
2	112－7	8 住	B	18.80	17.80	13.10	8.80	安山岩
3	111－4	11 住	A	38.20	58.80	12.40	45.80	安山岩
4	111－2	11 住	A	44.60	41.20	14.10	51.00	安山岩
5	111－3	11 住	A	35.30	49.10	11.90	39.40	安山岩
6	112－8	21 住	B	27.20	23.50	10.30	8.70	安山岩
7	112－5	70 土	A	33.00	47.00	13.30	33.60	安山岩
8	112－6	484 土	A	31.20	44.40	10.10	20.70	デイサイト
9	112－9	484 土	B	32.40	32.80	12.20	19.00	玄武岩
10	80－5	R－17 G	A	22.20	23.50	12.70	11.90	安山岩
11		オ－18G	A	19.65	18.15	11.70	6.20	安山岩

⑭その他（第99・104図）

遺物番号	図版番号	出土地点	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g	石材
1	99－14	E－7G	三脚石器	25.00	36.50	7.00	2.93	頁岩
2	101－32	106 土	楔形石器	11.60	8.50	4.75	569	緑色凝灰岩
3	104－3	21 住	石錘	2.60	5.90	1.30	30	頁岩
4	104－1	表採	磨斧（小形	3.60	1.60	0.60	10	蛇紋岩

第７表　桂野遺跡特殊遺物一覧表

①土偶（第113～116図）

図版番号	出土地点	部位	最大高（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重さ（ｇ）	備考
1	57 土	全身	62.3	30.0	16.8	25.0	板状土偶
2	21 住	胴部	(31.9)	21.8	8.2	5.0	板状土偶
3	Ｇ－６Ｇ	頭部	(33.5)	39.8	35.0	28.0	河童土偶
4	オ－ 18 Ｇ	頭部	(22.1)	28.9	23.1	14.0	
5	表採	頭部	(28.9)	26.9	(16.9)	11.0	
6	表採	頭部	(74.4)	72.2	(46.1)	150.0	
7	223 土	胸部	(40.6)	(50.3)	22.9	94.0	
8	Ｇ－５Ｇ	左胸部	(41.9)	(25.8)	(30.0)	33.0	
9	表採	胸部	(55.8)	(42.8)	(30.7)	110.0	
10	Ｊ－ 11 Ｇ	右腕	(40.4)	(33.8)	15.6	22.0	
11	Ｇ－６Ｇ	左肩	(26.2)	(24.2)	(18.1)	9.0	
12	490 土	右腕	(32.2)	(17.0)	17.0	13.0	
13	Ｇ－５Ｇ	右腕・胸部	(57.0)	(62.2)	(29.6)	70.0	
14	表採	右腕	(57.8)	(46.2)	25.4	54.0	
15	Ｆ－６Ｇ	右腕	(41.2)	16.8	16.2	17.0	
16	Ｏ－ 13 Ｇ	右腕	(20.7)	28.8	(13.3)	7.0	
17	Ｆ－４Ｇ	左腕	(23.1)	17.1	17.9	8.0	
18	表採	左腕	(33.0)	(51.0)	22.0	35.4	
19	Ｇ－５Ｇ	－	(20.0)	(35.5)	16.0	10.0	
20	Ｇ－６Ｇ	右腕	(27.2)	(35.1)	(21.7)	20.0	
21	タ－ 28 Ｇ	左腕	(47.6)	40.3	22.4	48.0	
22	Ｇ－５Ｇ	左腕	(33.1)	(33.9)	(15.3)	27.0	
23	Ｆ－６Ｇ	左腕	(35.8)	20.1	13.2	6.0	
24	Ｈ－５Ｇ	－	(25.3)	(15.5)	(16.9)	9.0	
25	表採	左腕	(31.0)	27.1	14.0	14.0	
26	120 土	右腕	(28.2)	20.3	16.3	12.0	
27	192 土	左腕	(53.1)	25.9	19.7	30.0	
28	Ｐ－Ｇ	胴下半部	(65.9)	55.0	30.3	92.0	出尻土偶・左足欠損
29	14 住	腹部	(37.1)	(35.3)	(27.2)	20.0	
30	Ｇ－５Ｇ	腹部	(35.0)	(48.5)	(22.1)	27.0	
31	６住	腹部	(34.2)	(36.1)	(12.5)	13.0	
32	１住	左腰部	(43.8)	(23.8)	(21.4)	16.0	
33	表採	左腰部	(48.8)	(28.7)	23.9	38.0	
34	Ｆ－６Ｇ	左臀部	(36.2)	(39.5)	30.1	34.0	
35	Ｆ－４Ｇ	左腰部	(43.0)	(29.5)	(5.0)	55.0	
36	14 住	左腰部	(49.6)	(30.0)	(42.6)	94.0	
37	表採	腹部	(38.0)	51.5	23.7	51.0	赤彩されている
38	Ｏ－ 14 Ｇ	左腰部	(40.0)	(35.7)	(48.8)	57.0	
39	Ｆ－６Ｇ	右腰部	(51.1)	(25.0)	(23.0)	25.0	
40	Ｆ－４Ｇ	左腰部	(60.8)	(59.1)	(27.0)	121.0	
41	Ｇ－３Ｇ	左腰部	(32.1)	(35.1)	(38.8)	96.0	
42	Ｅ－５Ｇ	尻部	(21.6)	(35.0)	13.9	9.0	
43	Ｆ－６Ｇ	右腰部	(35.9)	(24.1)	18.9	14.0	
44	Ｙ－ 15 Ｇ	左腰部	(41.9)	(28.5)	(18.7)	21.0	
45	表採	胴下半部	(71.6)	(61.4)	(36.9)	150.8	
46	69 土	右脚部	(17.5)	26.6	30.1	12.0	
47	69 土	左脚部	(19.7)	30.4	30.6	14.0	
48	Ｆ－６Ｇ	右脚部	(12.1)	18.3	19.6	4.0	
49	Ｆ－６Ｇ	左脚部	(35.2)	(19.8)	(23.8)	13.0	
50	Ｇ－５Ｇ	右脚部	(40.1)	38.4	38.8	38.0	
51	表採	右脚部	(49.1)	(41.0)	46.4	78.0	
52	表採	左脚部	(31.2)	(22.6)	(23.7)	19.0	
53	Ｆ－６Ｇ	左脚部	33.6	(50.8)	(28.0)	45.0	
54	Ｇ－５Ｇ	右脚部	(60.6)	58.8	65.0	171.0	
55	Ｅ－７Ｇ	右脚部	(66.0)	51.7	53.1	123.0	

②その他の遺物（第118図）

図版番号	出土地点	器種	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重さ（ｇ）	穴の大きさ
30	表採	土器片錘	41.1	36.8	9.8	18.0	－
31	Ｅ－５Ｇ	－	(27.1)	(14.2)	9.4	4.0	11.0
32	Ｔ－ 17 Ｇ	円形石製品	21.0	18.9	5.3	5.0	－
33	18 住	円形石製品	21.0	21.0	3.4	7.0	－

③玦状耳飾（第118図）

図版番号	出土地点	器種	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重さ（ｇ）	穴の大きさ（㎜）
1	11 住	土製玦状耳飾	(31.1)	(8.1)	14.3	8.0	15.0
2	11 住	土製玦状耳飾	(21.0)	(5.7)	10.9	7.0	9.0
3	14 住	土製玦状耳飾	(31.5)	(11.2)	15.1	9.0	13.0
4	14 住	土製玦状耳飾	(22.1)	(10.2)	12.8	6.0	－
5	21 住	土製玦状耳飾	(39.4)	(16.1)	17.8	9.0	－
6	579 土	土製玦状耳飾	(23.9)	(14.2)	13.2	4.0	－
7	Ｆ－７Ｇ	土製玦状耳飾	(26.0)	(11.0)	16.3	7.0	－
8	セ－ 26 Ｇ	土製玦状耳飾	(37.4)	(14.6)	(18.1)	10.0	－
9	Ｅ－６Ｇ	土製玦状耳飾	(21.5)	(13.2)	15.1	7.0	11.0
10	Ｇ－５Ｇ	土製玦状耳飾	(35.5)	(12.9)	13.0	5.0	11.9
11	Ｓ－ 18 Ｇ	土製玦状耳飾	(18.9)	(12.2)	13.7	5.0	－
12	Ｇ－５Ｇ	土製玦状耳飾	(17.9)	(7.4)	8.8	2.0	8.0

④土製垂飾（第118図）

図版番号	出土地点	器種	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重さ（ｇ）
13	谷一東	土製垂飾半成品	(67.9)	(36.5)	12.2	32.0
14	９住	土製垂飾半成品	50.9	35.7	10.8	21.0
15	２住	土製垂飾半成品	59.9	31.1	11.1	30.0

⑤その他の土製品（第118図）

図版番号	出土地点	器種	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重さ（ｇ）
16	Ｆ－７Ｇ	－	24.0	18.3	8.1	4.0
17	21 住	土板	(36.0)	(29.4)	18.0	23.0
18	トレンチ	－	37.2	34.0	8.0	14.0
19	表採	ミニチュア土器	38.0	丸底	14.8	12.0
20	Ｖ－ 17 Ｇ	ミニチュア土器	－	16.0	(6.1)	8.0
21	Ｆ－６Ｇ	－	(30.7)	39.2	40.0	37.0
22	579 土	－	(36.0)	14.8	6.9	6.0
23	トレンチ	－	(25.8)	10.3	9.9	3.0
24	Ｇ－５Ｇ	土玉	(13.1)	16.4	11.9	3.0
25	表採	粘土塊	41.0	36.3	29.0	34.0
26	表採	粘土塊	52.0	62.9	42.0	106.0
27	Ｆ－６Ｇ	土偶装飾付土器	(32.0)	(57.4)	19.5	24.0
28	トレンチ	土偶装飾付土器	(40.0)	(42.1)	21.8	25.0

附編１　桂野遺跡第80号土坑におけるリン酸分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桂野遺跡ではこれまでの発掘調査により、遺体埋葬施設の可能性がある縄文時代の土坑が検出されている。今回の調査でも縄文時代中期初頭に見られる埋甕を伴う土坑が検出され、この土坑が遺体埋葬施設として利用されていた可能性があるとみられている。

そこで、今回の分析調査では、埋甕の遺体埋葬に関する資料を得るためにリン酸分析を実施する。遺体が検出されない場合、人体、とくに人骨に多量に含まれるリン酸を測定し、リン酸の特徴的な濃集状態から遺体の痕跡を定性的に推定するリン分析がある（竹迫ほか、1980など）。この分析手法は、リン酸が人骨に多量に含まれる成分であること、さらに分解した遺体のリン酸成分が土壌中に含まれるアルミニウムや鉄と混合して難溶性のリン酸化合物を形成するため、リン酸の濃集が確認しやすいためである。

１．試料

試料は、80号土坑で検出された埋甕の内部から採取された土壌１点（試料名：土坑中）とその対照試料として、土坑の外部からも土壌が採取（試料名：土坑外）された１点、合計２点である。

２．リン分析の方法

土壌標準分析・測定法委員会（1986）、土壌養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）を参考に以下の操作工程で行う。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料1.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約５mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）を求める。

表４　桂野遺跡のリン分析結果

試　　料　　名		土　性	土　　色	(P_2O_5mg/g)
80号土坑	土坑中	CL	10YR2/3　黒褐色	3.32
	土坑外	CL	10YR3/4　暗褐色	1.06

注１）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省水産技術会議監修、1967）による。

注２）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

ＣＬ：埴壌土（粘土15～25％、シルト20～45％、砂３～65％）

３．結果および考察

土坑外と土坑中のリン酸含量は異なっており、土坑外で1.06P_2O_5mg/gに対して、土坑内が3.32P_2O_5mg/gと高い（表４）。このようにリン酸含量は土坑中において明らかな差異が認められ、土坑中にリン酸含量の富化が指摘できる。したがって、今回の分析結果と考古学的知見を考慮すれば、埋甕内に遺体が埋葬された可能性がある。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務所編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28－36.

Bowen, H. J. M.（1983）環境無機化学－元素の循環と生化学－．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen, H, J, m.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.
Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，309p.，学会出版センター［Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M.（1976）SOIL CHEMISTRY］，p.235－236.
土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p,．博友社.
土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p.，養賢堂.
川崎　弘・吉田澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務所編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p23－27.
近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31－64.
京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書　第１巻．411p.，産業図書.
室井　綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告，p.103－122.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
杉山真二・前原　豊・大工原豊（1992）植物珪酸体（プラント・オパール）分析による遺跡周辺の古環境推定．日本文化財科学学会第９回研究発表要旨集，p.14－15.
竹迫　紘・加藤哲朗・坂上寛一・黒部隆（1980）神谷原遺跡への土壌学的アプローチ．「神谷原Ⅰ」，p.412－416，八王子市椚田遺跡調査会.

附編２　桂野遺跡出土の炭化種実

新　山　雅　広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

桂野遺跡は、山梨県東八代郡御坂町に所在する。ここでは、本遺跡付近での食生活を推定する目的で炭化種実の検討を行った。試料の時代は、縄文時代前期末葉から中期初頭が主体である。

２．試料と方法

検討した試料は、試料番号（遺構名など）の付されたビンないしプラスチックケースに収納された炭化物を主体とした試料63点である。炭化物は、炭化材が大半であり、その中に含まれている炭化種実を実体顕微鏡下で拾い上げた。

３．結果および考察

出土した炭化種実の一覧を表1に示した。なお、大型植物化石として同定しうるものを全く含んでいなかった試料は、「なし」と記載した。同定されたのは、木本がオニグルミ炭化核、コナラ属炭化子葉、ミズキ炭化核の3分類群であり、草本がエノキグサ種子の1分類群である。その他に、虫えい（虫こぶ）も出土した。木本で出土したオニグルミ、コナラ属、ミズキは全て食用となる分類群であり、当時の食料の一端であったことが予想される。エノキグサは、路傍などの乾いた所に生育する雑草であり、虫えいはブナ科などの葉にできるものであるが、付近に生育していたことが予想されるコナラ属の葉などにみられた虫えいが流入したものと思われる。

４．大型植物化石の形態記載

オニグルミ　*Juglans ailanthifolia Carr.* 炭化核

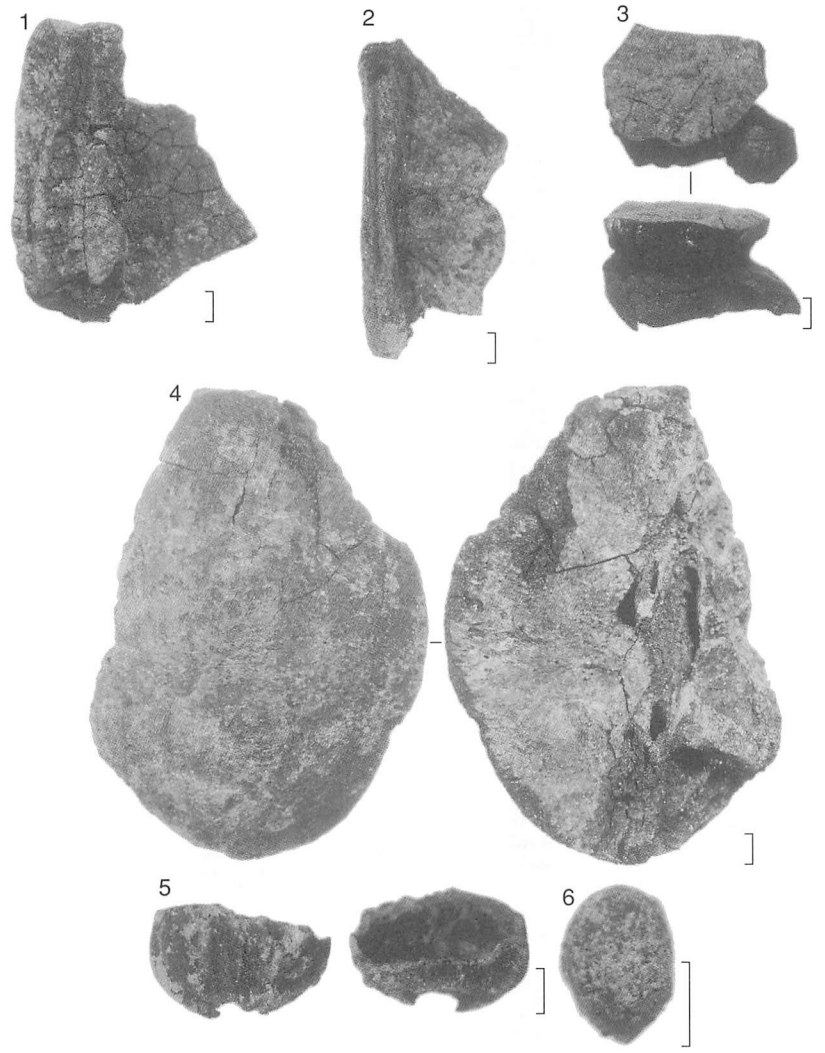
出土した核は、炭化した細かな破片であり、明らかに利用されていたことが予想される。オニグルミの核は、表面には筋が入り、緩やかな起伏があるが、裏面は著しい起伏があることが多い。核壁は緻密で硬く、割れ口にはしばしば光沢がみられる。割れ口の断面は、空隙がみられることが多い。

コナラ属　Quercus 炭化子葉

出土した炭化子葉は、全て破片であり、これ以上の同定には至らない。コナラ属の炭化子葉は、完形であっても同定が難しいことがしばしばある。表面には浅い筋が入り、完形であれば、楕円形であると思われる。

表1　出土炭化種実一覧

試　料　名(遺構名)	試料数	分　類　群　名(部位、個数)
第57土坑	1	オニグルミ(炭化核破片、7)
第80号土坑	1	なし
第80土	1	オニグルミ(炭化核破片、4)
第100号土坑	1	オニグルミ(炭化核破片、1)
第105号土坑	1	なし
第111号土坑	1	なし
第116土坑	2	なし(骨?(礫?))
第122土坑	1	なし
第146号土坑	1	なし
第162土坑	1	虫えい、1
第196号土坑	1	なし
第196号土坑	1	なし
第227土坑	1	なし
第227土坑(1)	1	なし
第227土坑(2)	1	なし
第244土坑	1	なし
第315土坑	2	なし
第329土坑	2	なし
第362土坑	1	オニグルミ(炭化核破片、3)
第367土坑	1	なし
第367土坑	1	なし
第484土坑	2	オニグルミ(炭化核破片、2)、コナラ属(炭化子葉破片、約30…完形約6～7個分)、ミズキ(炭化核破片、1)
第491土坑	1	なし
第510土坑	2	オニグルミ(炭化核破片、約60…完形約2～3個分)
第1号住埋甕	1	なし
第4号住	2	なし
第4住埋甕(1)	1	なし
第4住(2)埋甕炉	1	なし
第5号住	2	なし
第5号住	1	なし
第6号住	1	コナラ属(炭化子葉破片、1)
第6号住埋甕	2	コナラ属(炭化子葉破片、約50…完形約10個分)
第6号住埋甕	2	コナラ属(炭化子葉破片、約10…完形約2個分)
第6号住	1	オニグルミ(炭化核破片、3)
第7号住	2	なし(骨)
第7号住	1	なし
第7号住	1	なし
第7号住(1)	1	なし
第8住埋甕	1	オニグルミ(炭化核破片、5)
第9住	1	なし
第9住埋甕炉	1	なし
第9住地床炉	1	オニグルミ(炭化核破片、3)
第11号住	1	なし
第19号住居	1	なし
第579土坑	1	オニグルミ(炭化核破片、5)
第579土坑	1	オニグルミ(炭化核破片、1)、エノキグサ(種子、1)
第579土坑	1	なし
第579土坑	1	オニグルミ(炭化核破片、1)
第579土坑	1	なし
第579土坑(土器外)	1	オニグルミ(炭化核破片、10)、ミズキ(炭化核破片、1)、エノキグサ(種子破片、1)
第21号住居炉内	1	なし
集石遺構内	1	なし
N－12G	1	なし



図版1　出土した炭化種実（スケールは1㎜）
1．オニグルミ、炭化核破片、第597号土坑　2．オニグルミ、炭化核破片、第484号土坑　3．オニグルミ、炭化核破片、第597号土坑　4．コナラ属、炭化子葉破片、6住埋甕　5．ミズキ、炭化核破片、第597号土坑　6．エノキグサ、種子（完形）、第597号土坑

ミズキ　Cornus controversa Hemsley　炭化核

核は偏円形で基部に大きな臍があり、表面には浅い縦溝がある。

エノキグサ　Acalypha australis Linn.　種子

種子は黒色、側面観は先端がやや尖る倒卵形、上面観は円形。表面には細かな網目模様がある。

附編３　桂野遺跡第19号住居跡出土炭化材の樹種同定

植　田　弥　生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

山梨県御坂町に所在する当遺跡から検出された、弥生時代中期の第19号住居跡出土炭化材６点の樹種同定結果を報告する。当地域一帯では住居跡出土木材の樹種同定から、どのような樹種を利用して生活していたのかを知る資料は少ない。そのため当遺跡での調査は、過去における住居関連の樹種利用を知る資料となる。

２．炭化材樹種同定の方法

炭化材の３断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し同定した。横断面（木口）は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面（板目）と放射断面（柾目）は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この３断面の試料を直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM－T100型）で観察と写真撮影を行った。

３．結　　果

６試料の樹種同定結果を表にまとめ、各試料の住居内の出土位置と樹種を図に示した。

いずれの炭化材も住居跡の中央部から出土したものであった。同定結果は、針葉樹のカヤ３点、落葉広葉樹のクリ２点とケヤキ1点であった。

以下に同定の根拠となった組織観察結果を記載する。

表　桂野遺跡第１９号住居跡（弥生時代中期）出土炭化材の樹種同定結果

遺構	試料	樹種
第19号住居跡	C－1	カヤ
第19号住居跡	C－2	カヤ
第19号住居跡	C－3	カヤ
第19号住居跡	C－4	ケヤキ
第19号住居跡	C－5	クリ
第19号住居跡	C－6	クリ

(1)　カヤ　Torreya nucifera Sieb. et Zucc. イチイ科　図版 1a.－1c.（C－1）

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。仮道管にらせん肥厚があり、２本のらせんが対になる傾向が見られる。分野壁孔は一分野に主に２個あり、輪郭は丸くその孔口は小さい。このような特徴からカヤまたはイヌガヤと考えられた。この２種の主な形質の違いは樹脂細胞が、イヌガヤには有るがカヤには無い。当試料３点ともに樹脂細胞は見られなかったことから、カヤと同定した。

カヤは、本州の宮城県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木である。材は水湿に

強く加工は容易な方である。

(2) クリ Castania crenata Sieb. et Zucc. ブナ科 図版 2a.2c.（C－5）

年輪の始めに中型～大型の管孔が密接して配列し徐々に径を減じ、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、内腔はチロースが発達している。放射組織は、すべて単列同性である。

クリは、北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は広葉樹材の中で耐久性・耐湿性に優れている。

(3) ケヤキ Zelkova serrata （Thunb.）Makino ニレ科 図版 3a.－3c.（C－4）

年輪の始めに大型の管孔が1から2層配列し、晩材部は小型から非常に小型の管孔が多数集合した集団が接線状や斜め状に配列している環孔材。道管の穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、5～8細胞幅で細胞高は高く、上下端や縁に結晶が見られる。

ケヤキは、本州以南の暖帯から温帯の山野や川岸に生育する落葉高木である。材は部分的に狂いやすい所も出る傾向があるが、材質は非常に堅い。

4．まとめ

当遺跡の第19号住居跡から検出されたカヤ・クリ・ケヤキはいずれも建築材として適した材であり、関東一円の住居跡からも出土例が多い樹種である。当住居跡でも建築材としてこの3分類群が利用されていたと推測される。またこの3分類群は、暖帯から温帯の山野に比較的多く生育し大木となる樹種であり、当遺跡の立地もこのような森林帯に対応する。従って遺跡周辺から入手しやすくかつ建築材として適したこれら3樹種が弥生時代中期に、選択使用されていたことが判った。

韮崎市堂の前遺跡の弥生時代後期の住居跡からは、クヌギ節（9点）・モミ属（2点）・コナラ節（1点）が検出されている（山田、1993）。堂の前遺跡と当住居跡の出土樹種は異なるが、暖帯から温帯域の森林に多く生育する針葉樹（モミ属・カヤ）と落葉広葉樹（クヌギ節・コナラ節・クリ・ケヤキ）を合わせて利用している点では共通している。また、東八代群八代町の身洗沢遺跡では弥生時代後期の様々な木製品の樹種同定が行われており、針葉樹では当住居からも検出されたカヤが報告されている（山田、1993）。まだまだ事例が少ないが、当地域一帯の弥生時代中期・後期は針葉樹ではカヤがよく利用されていたのかも知れない。

引用文献

山田昌久、1993、日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史、242pp. 植生史研究 特別第1号。

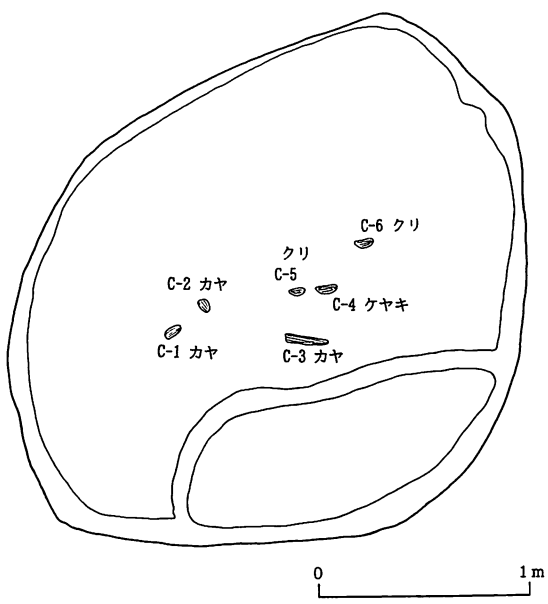
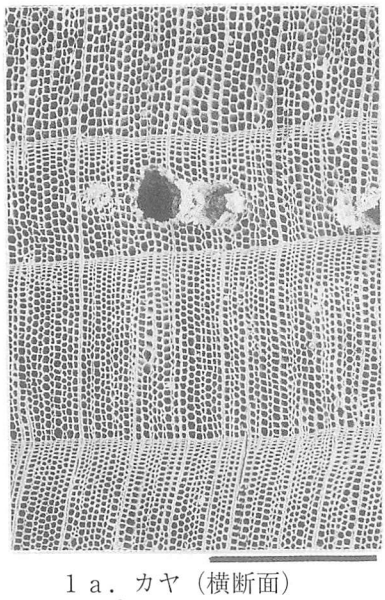
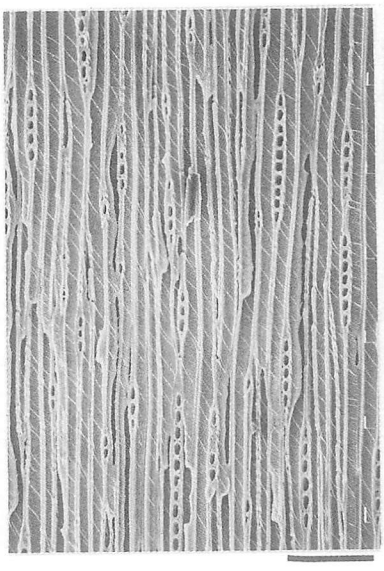


図 桂野遺跡第19号住居跡（弥生時代中期）出土炭化材の産状と樹種

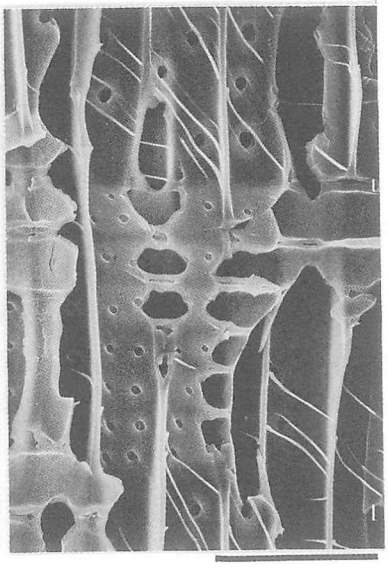
図版１　桂野遺跡第19号住居跡出土炭化材樹種



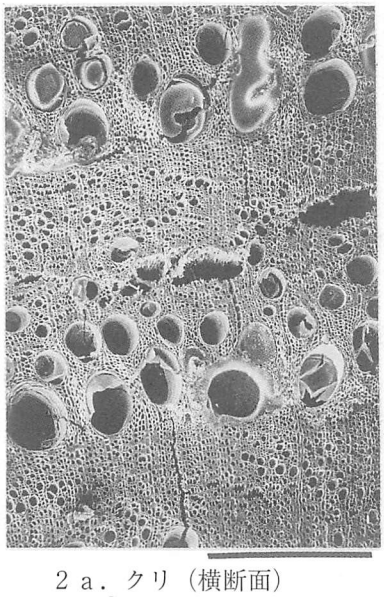
１ａ．カヤ（横断面）
Ｃ－１　bar：0.5㎜



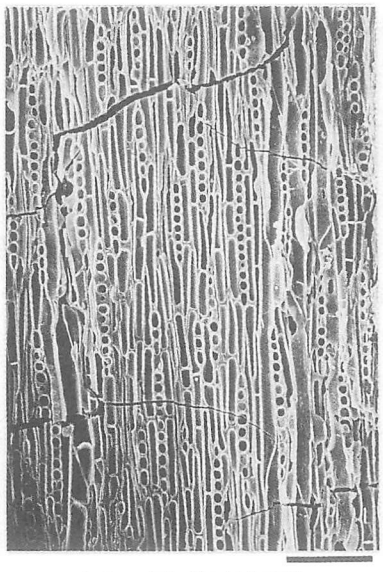
１ｂ．同（接線断面）
bar：0.1㎜



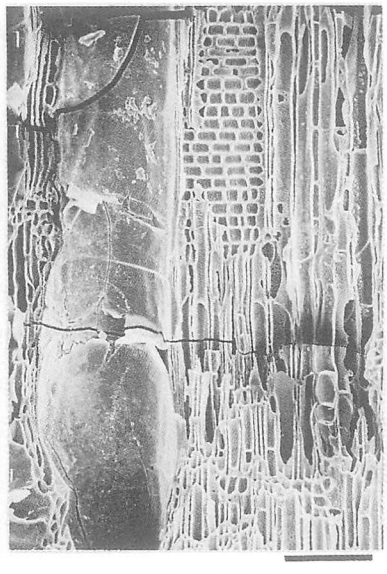
１ｃ．同（放射断面）
bar：0.5㎜



２ａ．クリ（横断面）
Ｃ－５　bar：0.5㎜

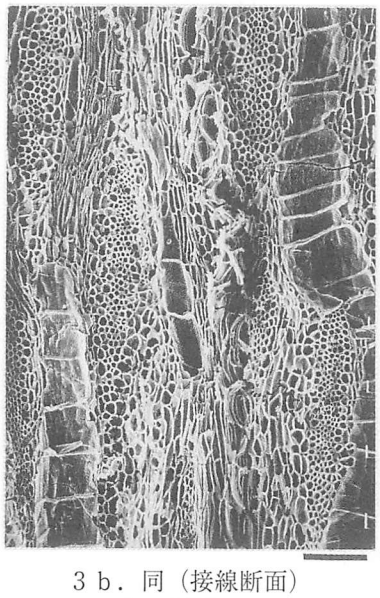


２ｂ．同（接線断面）
bar：0.1㎜

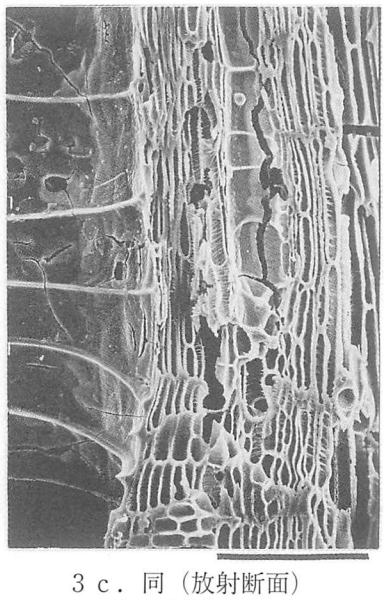


２ｃ．同（放射断面）
bar：0.1㎜

３ａ．ケヤキ（横断面）
Ｃ－４　bar：0.5㎜



３ｂ．同（接線断面）
bar：0.1㎜



３ｃ．同（放射断面）
bar：0.1㎜

附編４　桂野遺跡の縄文土器胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桂野遺跡の第３次調査では、縄文時代前期末葉から中期初頭段階に位置づけられる住居跡や墓坑、貯蔵穴などの遺構が多く検出された。これらは長期的な定住を示す構造的特徴を持っていることが、発掘調査により指摘されている。これらの住居跡や土坑からは、また土器も多数出土しているが、その中には在地の土器と考えられるものに混じって関西系や東海系と考えられる土器、さらにはそれらを模倣したと思われる在地の土器などが認められている。

本報告では、これらの土器について胎土の特徴を把握し、またその地質学的な特徴から推定される地域を考え、それぞれ在地系、関西系、東海系、模倣品とされている所見と比較することにより、土器の製作や搬入について考察する。

１．試料

試料は、桂野遺跡から出土した縄文土器４点である。ここでは便宜上試料番号１～４とする。試料番号１は在地系とされた前期末葉の十三菩提式土器、試料番号２は関西系とされた前期末葉の大歳山式土器、試料番号３は東海系とされた中期初頭の北裏Ｃ１式土器、試料番号４は在地系の可能性がある前期末葉の大歳山式模倣タイプの土器である。各資料の出土地点、時期、形式などは分析結果を呈示した図１に示す。

２．分析方法

試料は、適量をアルミナ製乳鉢で粉砕、水を加え超音波洗浄装置により分散、＃250の分解篩により水洗、粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4㎜－1/8㎜の粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物にプレパラートを製作した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

３．結果

各試料の分析結果を以下に述べる。また、表１、図１に示す。

試料番号１：角閃石（普通角閃石）が非常に多く約７割を占め、他に不透明鉱物を伴う。

試料番号２：試料番号１と同様に普通角閃石が非常に多く含まれるが、他に30％程度のおそらくカミングトン閃石あるいは直閃石と考えられる角閃石族の鉱物が含まれる。

試料番号３：上記２点の試料と同様に普通角閃石が非常に多いが、他に少量のザクロ石と不透明鉱物および微量のジルコンが含まれる。

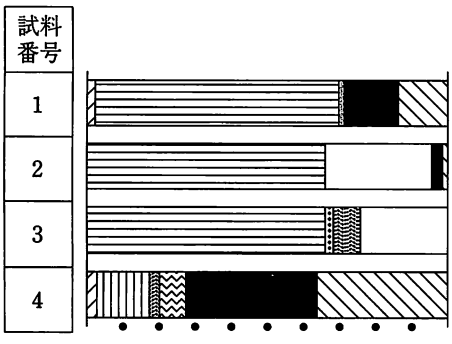
試料番号４：「その他」とした変質粒が多いが、それを除くと不透明鉱物が最も多く、次に角閃石が多い。他に少量の緑レン石と微量の斜方輝石およびザクロ石が含まれる。

４．考察

桂野遺跡周辺の堆積物特に金川の沖積低地の堆積物を考えた場合、その上流域には甲府深成岩体を構成する芦川型石英閃緑岩が広く分布する（日本の地質「中部地方Ｉ」編集委員会、1988）。芦川型石英閃緑岩には普通角閃石や磁鉄鉱が比較的多く含まれることから、金川流域の堆積物中にもこれらの重鉱物が多く含まれると考えられる。実際に河西（1989）による金川の河川砂の分析では、普通角閃石が多産し不透明鉱物を伴う重鉱物

表１　重鉱物分析結果

試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	角閃石族	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	合計
1	5	2	169	3	0	0	0	0	0	39	32	251
2	1	0	165	1	74	0	2	0	0	7	0	252
3	1	0	166	0	0	4	18	0	0	61	0	253
4	3	0	16	0	1	0	3	8	1	40	37	113



出土地点	時期	形式	器形	備考
E－５グリッド	縄文前期末葉	十三菩提式	粗製タイプ深鉢	在地系
H－４グリッド	縄文前期末葉	大歳山式	精製タイプ鉢	関西系
第27号住居跡	縄文中期初頭	北裏ＣＩ式	精製タイプ深鉢	東海系
第57号住居跡	縄文前期末葉	大歳山式模倣	粗製タイプ鉢	在地系？

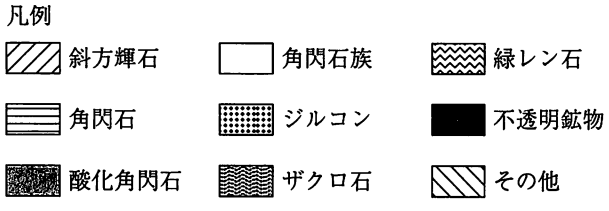


図１　胎土の重鉱物組成

組成が確認されている。今回の試料の中では、試料番号１の組成が、上記の金川の砂の組成に近いといえる。このことは、在地系とされた所見と一致する。

一方、試料番号２は、普通角閃石以外の角閃石族の鉱物が多いことが特徴である。上記のようにこれらはカミングトン閃石、アクチノ閃石あるいは直閃石などであると考えられるが、いずれも広域変成岩やはれんい岩などの塩基性岩に含まれることが多い。桂野遺跡周辺および甲府盆地周辺でもこれらの岩石の分布は認められないことから、試料番号２とした土器は甲府盆地とは地質的背景の異なる地域すなわち甲府盆地外の地域で製作された可能性が高い。この胎土分析の結果と関西系の大歳山式とされた所見は調和するといえるが、現時点では今回の結果のみで、試料番号２の土器が関西地域で製作されたと断定することはできない。上記した広域変成岩や塩基性岩などは全国に分布するからである。ただし、これまでの当社における分析例では、奈良県や大阪府における縄文土器同様の組成を認めている。いずれの例も普通角閃石の由来となる領家帯の花崗岩とはんれい岩の分布する地域であり、土器の重鉱物組成は出土した遺跡周辺の地質を反映している。今回の試料番号２とこれらの例が関係するものであるかは、今後の検討を要する。

試料番号３の特徴は、ジルコンとザクロ石を比較的多く含むことである。ジルコンもザクロ石も花崗岩類に含まれる鉱物であるが、上述した２つの文献の中には甲府盆地を取り巻く花崗岩類の中には特にこれらの鉱物が多産するという記載はない。したがって、試料番号３の土器についても、甲府盆地外で製作された可能性がある。このことは、東海系の北裏ＣＩ式とされている所見と調和する。当社におけるこれまでの分析例では、愛知県東部の三河地域や三重県北部の伊勢地域において在地とされている土器に今回の試料番号３と同様の重鉱物組成が比較的多く認められている。試料番号２と同様にこれらの結果を単なる偶然とするか否かは、今後

の分析事例の蓄積により解決できるかもしれない。

試料番号4の重鉱物組成については、発掘調査所見から胎土分析結果からも在地の可能性が高いとされた試料番号1とは異なる。特徴は角閃石と緑レン石であるが、上述の河西（1989）では、金川よりも南西にある同じ笛吹川の支流である境川の河川砂に角閃石と緑レン石を特徴とする重鉱物組成を認めている。今回の発掘調査所見における「在地」の範囲が甲府盆地南部ということであれば、試料番号4も在地の可能性があるといえる。

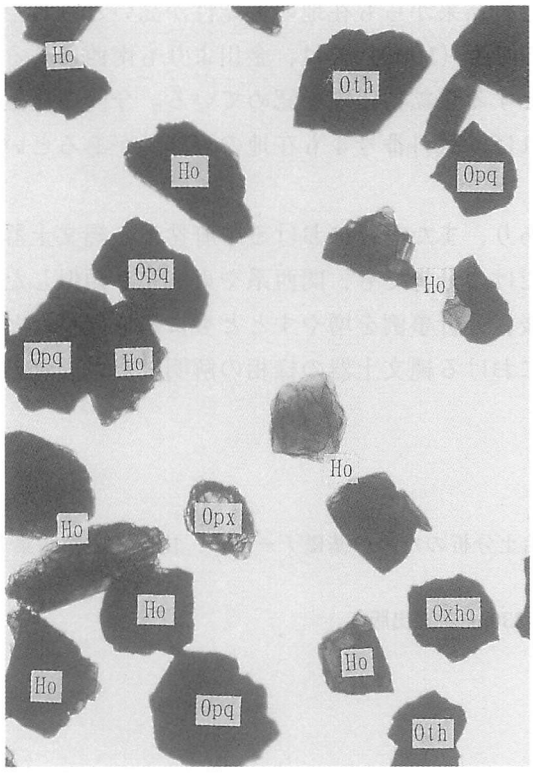
以上に述べた4点の考察は、いずれも4点のみの結果からであり、また当社における甲府盆地の縄文土器の胎土分析例もほとんどない状況でのものである。しかし、4点だけの分析でも、関西系や東海系と類似した胎土が認められたことは、非常に注目されるべき成果である。今後、分析事例を増やすとともに薄片観察などで岩片の種類や組成なども調べることができれば、甲府盆地南部における縄文土器の様相の解明に貴重な資料を提供できることが期待される。

引用文献

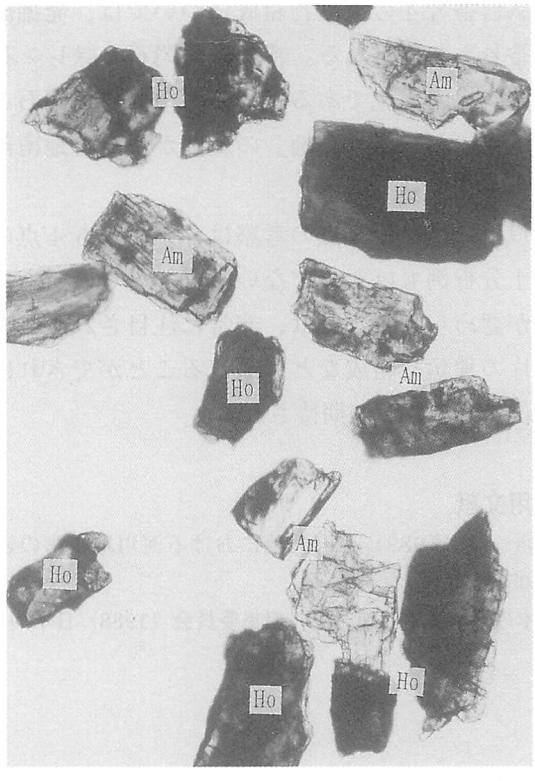
河西　学（1989）甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成－土器胎土分析のための基礎データー．山梨考古学論集Ⅱ，p.505－523.

日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会（1988）日本の地質4　中部地方Ⅰ．330p.，共立出版.

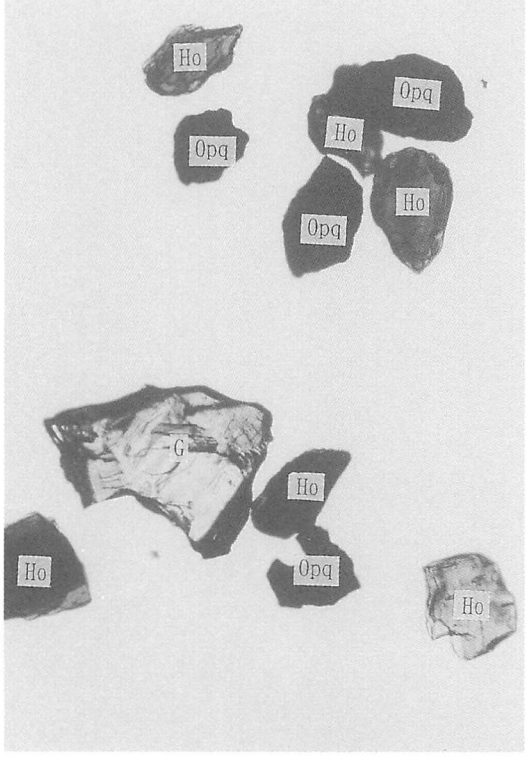
図版１　胎土中の重鉱物



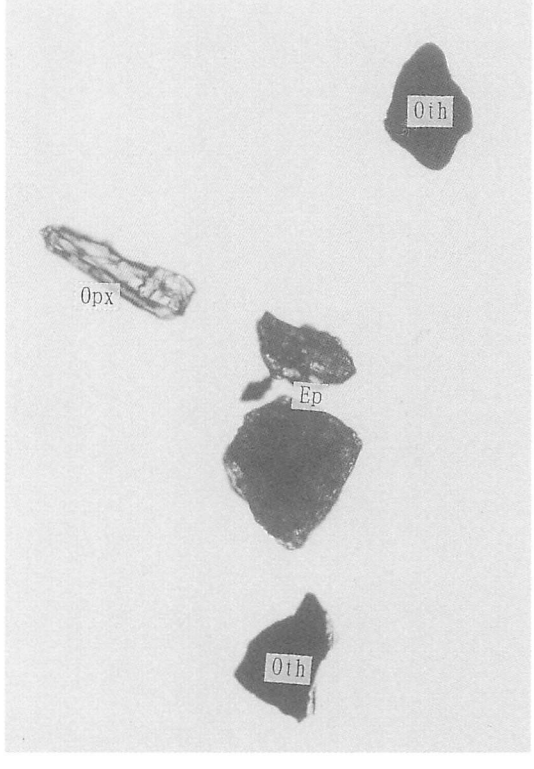
１．試料番号１　Ｅ－５グリッド　在地系
縄文前期末葉　十三菩提式　粗製タイプ深鉢



２．試料番号２　Ｈ－４グリッド　関西系
縄文前期末葉　大歳山式　精製タイプ鉢



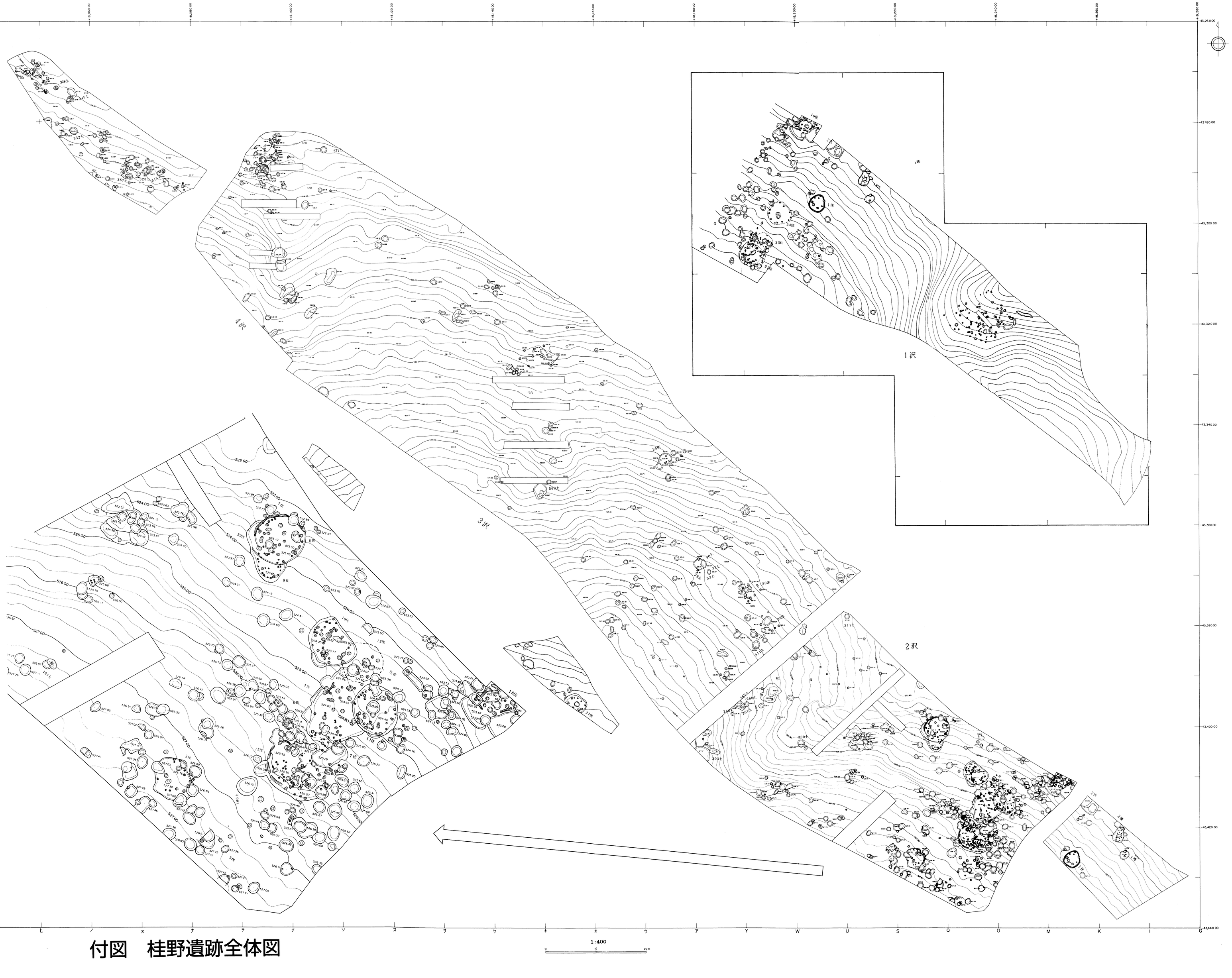
３．試料番号３　第27号住居跡　東海系
縄文中期初頭　北裏ＣＩ式　精製タイプ深鉢



４．試料番号４　第57号住居跡　在地系？
縄文前期末葉　大歳山式模倣　粗製タイプ鉢

Oxp：斜方輝石．Ho：角閃石．Oxho：酸化角閃石．Am：角閃石族．
G：ザクロ石．Ep：緑レン石．Opq：不透明鉱物．Oth：その他．

0.5㎜



付図　桂野遺跡全体図

報告書抄録

ふりがな	かつらのいせき（だいいち～さんじ）・にしまぶちいせき
書名	桂野遺跡（第1～3次）・西馬鞭遺跡
副題	国道137号（上黒駒バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第172集
著者名	野代幸和・網倉邦生
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400－1508　山梨県東八代郡中道町下曽根923　055－266－3016・3881
印刷所	株式会社　少國民社
印刷日	2000年3月27日
発行日	2000年3月31日

桂野遺跡概要

ふりがな	かつらのいせき
所在地	山梨県東八代郡御坂町大字上黒駒字桂野大道上1901外
	25,000分の1地形図　石和
	位置　東経138° 41′ 53″　北緯35° 36′ 40″　標高515～530m
	市町村コード19322
調査原因	国道137号（上黒駒バイパス）建設工事
調査期間	1996年1月24日～1996年2月7日（試掘調査）
	1996年10月7日～1996年12月21日（第1次発掘調査）
	1997年9月1日～1997年12月25日（第2次発掘調査）
	1998年8月6日～1998年12月11日（第3次発掘調査）
調査面積	210m²（試掘調査）　1,500m²（第1次発掘調査）　4,000m²（第2次発掘調査）
	12,000m²（第3次発掘調査）
縄文時代	
種別	集落跡
主な遺構	住居跡26軒（十三菩提式期4軒・五領ヶ台式期20軒・狢沢式期1軒・曽利Ⅲ式期1軒）・土坑607基・竪穴状
	遺構1基・単独埋甕遺構3基・沢跡4条
主な遺物	土器（縄文時代前期後半～後期前半堀之内1式期）
	石器（小形石器：石鏃・石錐・石匙・掻器等、大形石器：打製石斧・磨凹石・稜磨石等）
	特殊遺物（土偶・土製耳飾・土製円盤・ペンダント形土製品等）
特記事項	外来系の土器（大歳山式・北裏ＣⅠ式）との伴出関係が窺える
	特殊な形態を有する石器として、掻器・稜磨石が存在している
弥生時代	
種別	集落跡
主な遺構	住居跡1軒（北原式期）
主な遺物	土器（弥生時代中期後葉）
特記事項	調査区北側に位置している

西馬鞭遺跡概要

ふりがな	にしまぶちいせき
所在地	山梨県東八代郡御坂町上黒駒2903外
	25,000分の1地形図　石和
	位置　東経138° 42′ 22″　北緯35° 36′ 20″　標高550m
	市町村コード19322
調査原因	国道137号（上黒駒バイパス）建設工事
調査期間	1998年7月27日～1998年7月31日（試掘調査）
	1998年10月5日～1998年12月10日（発掘調査）
調査面積	8,000m²（試掘調査）　1,000m²（発掘調査）
縄文時代	
種別	散布地
主な遺構	なし
主な遺物	土器（縄文時代中期初頭～後期前葉）
	石器（小形石器：石鏃・石錐・有舌尖頭器等、大形石器：磨凹石等）
特記事項	
古墳時代	
種別	散布地
主な遺構	なし
主な遺物	土師器（坏の坩など）
平安時代	
種別	祭祀
主な遺構	土坑1基
主な遺物	土師器・須恵器・灰釉陶器・手捏土器
特記事項	遺物の内容から一時的な祭祀の場所であることが推定できる

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第172集

桂野（第1～3次）・西馬鞭遺跡

国道137号（上黒駒バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書

印刷日　2000年3月27日

発行日　2000年3月31日

編　集　山梨県埋蔵文化財センター

発　行　山梨県教育委員会

印　刷　株式会社　少國民社